熊本県文化財調査報告　第95集

高城跡

「九州縦貫自動車道（八代～人吉間）」建設に伴う埋蔵文化財調査

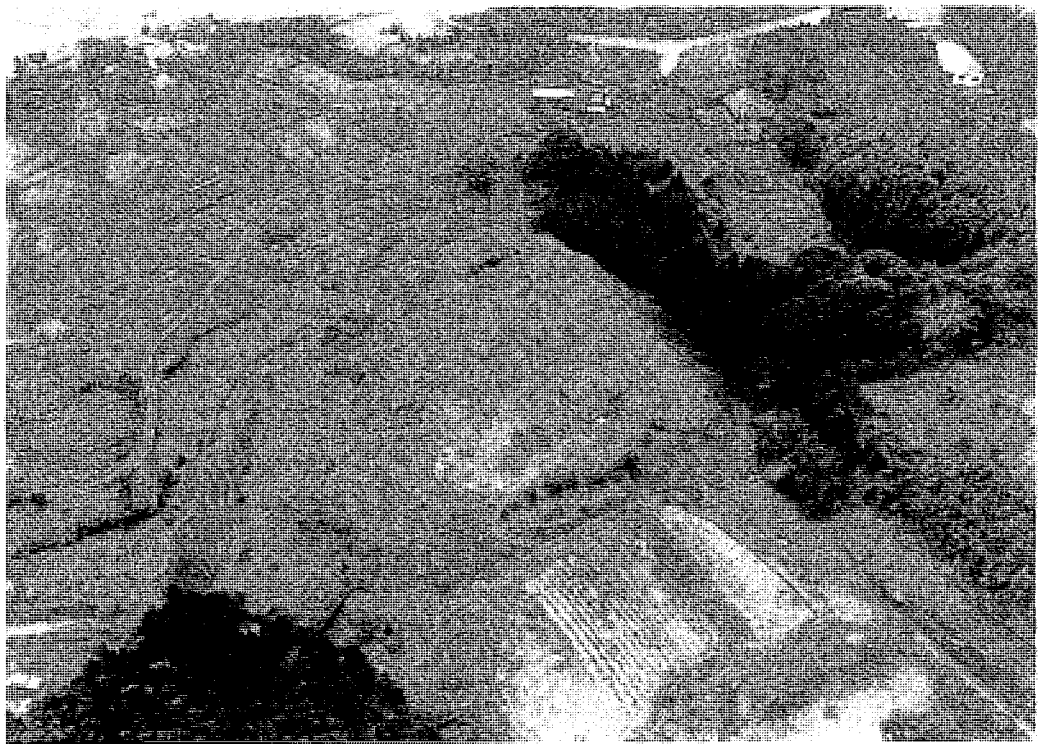
一九八八年

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告書　第95集

高城跡

—熊本県球磨郡山江村大字山田字城・本城所在の中世城跡—



1988年３月31日

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～人吉間）の建設に伴い、建設予定地内の埋蔵文化財調査を進めてまいりました。

ここに報告する熊本県球磨郡山江村大字山田字城・本城所在の中世城跡「高城跡」は、昭和59年度に発掘調査を実施し、昭和62年度に整理・報告書作成を行ったものであります。

調査の結果、15世紀末から16世紀前半頃の城跡の規模、性格、施設などを知る上で貴重な資料を得ることができました。

さらに、同遺跡からは先土器時代から縄文時代にかけての遺物も出土し、この分野での成果も大なるものがありました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に際しましては、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から格別の御配慮を賜わり、山江村教育委員会の御協力、ならびに専門調査員の先生方からの御指導がありました。ここに心から厚く御礼を申し上げます。

昭和63年３月31日

熊本県教育長　田　嶋　喜　一

例　　言

1．本書は、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設工事に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県球磨郡山江村大字山田字城・本城に所在する中世城跡「高城跡」で、日本道路公団福岡建設局からの委託を受けて、熊本県教育庁文化課が行った。

3．当遺跡の発掘調査は昭和59年度に実施し、その整理・報告書作成は昭和62年度に行った。なお、出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。

4．発掘調査は、大田幸博・黒田裕司がその任にあたった。

5．発掘調査過程の写真撮影は大田・黒田が行い、整理後の出土遺物写真撮影は吉田昭一が行った。

6．出土遺物の実測は、主として大田が行ったが、先土器時代の石器・縄文時代の石器・歴史時代の砥石は松舟博満が担当し、一部を六田育子・原　葉子・網田龍生・岩崎充宏が行った。遺構及び遺物の製図は、六田・石工みゆき・溝口真由美が行った。

7．本書の執筆は、主として大田がこれにあたったが、第Ⅴ章第２，３節、第Ⅵ章（１）〔７〕を菖蒲和弘が、先土器・縄文時代を松舟が担当し、これらについては一部を大田が補正・加筆した。さらに、隈　昭志が第１章第２節とⅥ章（２）を担当した。

8．.九州縦貫自動車道の工事概要は、日本道路公団人吉工事事務所前副所長の小原　明氏に原稿をいただいた。

9．高城跡の路線外の遺構実測は、主として菖蒲が昭和62年度に実施した。

10．本書に使用した地形図・字図は、日本道路公団人吉工事事務所と山江村教育委員会・山江村役場経済課、総務課からの提供によるものである。

11．題字は高城跡専門調査委員の田辺哲夫氏による。

12．出土遺物については、白木原和美・大三輪龍彦・甲元真之の高城跡専門調査員の先生方や矢部良明氏（東京国立博物館陶磁室長）から御教示を得た。

13．土製取瓶の付着物の分析は熊本県工業技術センターに依頼した。

14．シラス出土の炭化物の^{14}C年代測定は京都産業大学理学部の山田　治教授に依頼した。

15．石器類の石材鑑定は熊本大学理学部の高橋俊正教授に依頼した。

16．出土遺物の整理は、仮設の熊本県文化課人吉調査事務所で行い、事務所敷地については、熊本県衛生部と人吉保健所の協力を得た。

17．本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、隈の指導のもとに大田が石工・溝口の協力を得て担当した。

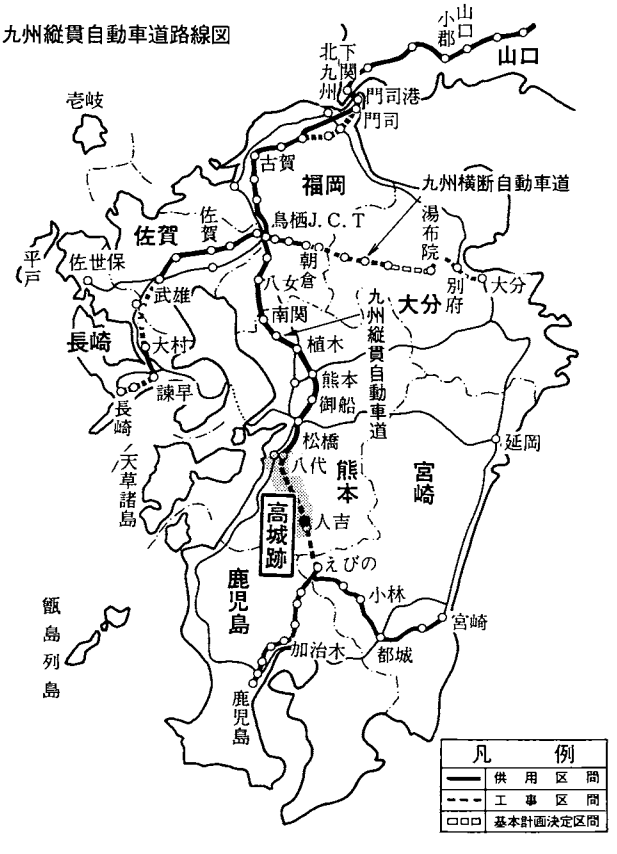
九州縦貫自動車道（八代～人吉間）の工事概要

本路線は、「九州縦貫自動車道」鹿児島・宮崎線の一部をなす八代～人吉間（42.9km）であり、南九州山系の北西端に位置し、急峻な山岳地帯を通過する。八代インターチェンジから南へ約1kmと、人吉インターチェンジの前後約7kmが平野部を通る以外は、トンネルと橋梁が連続することとなる。

すなわち、八代インターから平野部を約1km過ぎると、大平山・八丁山に長大トンネルを迎え、さらに段・横石トンネルと続く。原女木トンネルの両坑部で、一級河川「球磨川」を渡ると、ここからは中小トンネルと橋梁の連続になる。それから主要地方道「坂本・人吉線」沿いに高度を上げ、構造物の間にわずかな土工区間を挟みながら南下し、坂本村の河原谷で肥後トンネルに入る。肥後トンネルは、延長6.34kmで、我が国の高速道路としては第三位の長大トンネルである。これを抜けると主要地方道「坂本・人吉線」と一級河川「万江川」に沿って切土を主とする土工区間になり、山江サービスエリア・人吉インターチェンジへと続く。

このように、本路線は急峻な山岳地帯を通過することから、トンネルは大小合わせて23箇所（48%）、橋梁は54箇所（22%）と非常に構造物の多い路線となっている。

九州縦貫自動車道路線図



昭和53年の路線発表以来、本路線工事は順調に進み、昭和64年度の共用を目指している。本路線の開通により、国道219号線の交通難を解消し、都市を相互に連結すると共に、他の自動車道とも有機的に連結し、南九州の産業・経済・文化の発展のための大動脈として、早期完成が望まれている。

昭和63年1月31日

日本道路公団福岡建設局
人吉工事事務所副所長
小　原　　明

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要……1

第１節　調査の組織……1

第２節　調査に至る経緯……2

第３節　調査の方法と経過……3

（１）調査の方法・手順　　（２）発掘調査の工程

第４節　遺跡の位置と地理的環境……5

（１）位置　　（３）球磨郡山江村

（２）人吉盆地

第Ⅱ章　遺跡の概要……7

第１節　高城跡の歴史的環境……7

（１）先土器時代　　（５）歴史時代

（２）縄文時代　　１．古代

（３）弥生時代　　２．中世

（４）古墳時代

第２節　高城跡の城名と城域について……11

第Ⅲ章　調査の成果……12

第１節　遺構の概要……12

第２節　Ⅱ郭の調査結果……15

第３節　Ⅲ郭の調査結果……27

第４節　Ⅳ郭の調査結果……47

第５節　Ⅳ郭北側斜面の調査結果……58

第６節　堀切Ⅰ－Ａ・Ｂの調査結果……62

第７節　堀切Ⅰ－Ｃの調査結果……65

第８節　堀切Ⅰ－Ｄの調査結果……67

第９節　堀切Ⅰ－Ｅ・Ｆの調査結果……70

第10節　堀切Ⅰ－Ｇの調査結果……72

第11節　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂの調査結果……74

第12節　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃの調査結果……78

第13節　土壙……81

第Ⅳ章　出土遺物……83

（１）建築址および柱穴より出土した遺物……83

（2）Ⅱ郭出土の遺物……88
（3）Ⅲ郭出土の遺物……96
（4）Ⅳ郭出土の遺物……115
（5）堀切Ⅰ－A・B出土の遺物……118
（6）堀切Ⅰ－C出土の遺物……123
（7）堀切Ⅰ－D出土の遺物……139
（8）堀切Ⅰ－F・G出土の遺物……150
（9）堀切Ⅱ－A・B出土の遺物……151
(10) 堀切Ⅲ－A・B・C出土の遺物……159
(11) 表面採集遺物……182
第Ⅴ章　路線外の城域および周辺の調査……186
第1節　路線外の城域について……186
（1）Ⅰ郭　（4）Ⅴ郭
（2）Ⅶ郭　（5）Ⅵ郭
（3）Ⅷ郭
第2節　高城跡周辺の集落と寺社堂宇について……190
（1）合戦峯　（4）長ケ峯　（7）堂園
（2）蓮乗寺跡　（5）秋丸　（8）白山権現
（3）薬師堂跡　（6）増大寺跡　（9）手石方
第3節　集落の伝承と民間信仰について……192
（1）合戦峯の天子祭り　（3）高城跡の衆議山
（2）城の火葬場跡
第Ⅵ章　総括……195
（1）まとめ……195　（2）総括……203

挿図目次

第1図　高城跡周辺地形図……4
第2図　高城跡位置図……5
第3図　人吉盆地地形図……6
第4図　高城跡周辺遺跡分布図……8
第5図　山江村南部の字図と地形図……10
第6図　地籍図と城域……11
第7図　高城跡周辺地形図と
九州縦貫自動車道建設予定地……12

第８図　高城跡調査区全体遺構図……13
第９図　Ⅱ郭遺構実測図……15
第10図　ＳＢⅡ－１実測図……17
第11図　ＳＢⅡ－２実測図……18
第12図　ＳＢⅡ－３実測図……19
第13図　ＳＢⅡ－４実測図……20
第14図　ＳＢⅡ－５実測図……21
第15図　ＳＢⅡ－６実測図……22
第16図　ＳＢⅡ－７実測図……23
第17図　ＳＢⅡ－８実測図……24
第18図　ＳＢⅡ－９実測図……25
第19図　ＳＢⅡ－10実測図……26
第20図　Ⅲ郭遺構実測図……27
第21図　ＳＢⅢ－11実測図……29
第22図　ＳＢⅢ－12実測図……30
第23図　ＳＢⅢ－13実測図……31
第24図　ＳＢⅢ－14実測図……32
第25図　ＳＢⅢ－15実測図……33
第26図　ＳＢⅢ－16実測図……34
第27図　ＳＢⅢ－17実測図……35
第28図　ＳＢⅢ－18実測図……36
第29図　ＳＢⅢ－19実測図……37
第30図　ＳＢⅢ－20実測図……38
第31図　ＳＢⅢ－21実測図……39
第32図　ＳＢⅢ－22実測図……40
第33図　ＳＢⅢ－23実測図……41
第34図　ＳＢⅢ－24実測図……42
第35図　ＳＢⅢ－25実測図……43
第36図　ＳＢⅢ－26実測図……44
第37図　ＳＢⅢ－27実測図……45
第38図　ＳＢⅢ－28実測図……46
第39図　Ⅳ郭遺構実測図……47
第40図　ＳＢⅣ－29実測図……49
第41図　ＳＢⅣ－30実測図……50
第42図　ＳＢⅣ－31実測図……51
第43図　ＳＢⅣ－32実測図……52
第44図　ＳＢⅣ－33実測図……53
第45図　ＳＢⅣ－34実測図……54
第46図　ＳＢⅣ－35実測図……55
第47図　ＳＢⅣ－36実測図……56
第48図　ＳＢⅣ－37実測図……57
第49図　ＳＢⅣ－38実測図……58
第50図　Ⅳ郭北側斜面遺構実測図……59
第51図　Ⅳ郭北側斜面土層断面図①……60
第52図　堀切Ⅰ－Ａ・Ｂ遺構実測図……62
第53図　堀切Ⅰ－Ａ・Ｂ土層断面図②……63
第54図　堀切Ⅰ－Ａ・Ｂ土層断面図③……63
第55図　堀切Ⅰ－Ｃ遺構実測図……65
第56図　堀切Ⅰ－Ｃ土層断面図④……66
第57図　堀切Ⅰ－Ｄ遺構実測図……67
第58図　堀切Ⅰ－Ｄ土層断面図⑤……68
第59図　堀切Ⅰ－Ｅ・Ｆ遺構実測図……70
第60図　堀切Ⅰ－Ｅ・Ｆ土層断面図⑥……71
第61図　堀切Ⅰ－Ｇ遺構実測図……72
第62図　堀切Ⅰ－Ｇ土層断面図⑦……73
第63図　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ遺構実測図……74
第64図　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ土層断面図⑧……75
第65図　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ土層断面図⑨……75
第66図　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ土層断面図⑩……76
第67図　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ土層断面図⑪……78
第68図　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ遺構実測図…79
第69図　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ土層断面図⑫……80
第70図　ＳＫⅡ－０１……81
第71図　ＳＫⅢ－０１……82
第72図　ＳＫⅣ－０１……82
第73図　建築址・柱穴検出遺物の実測図①……83

第74図　建築址・柱穴検出遺物の実測図②……84
第75図　建築址・柱穴検出遺物の出土状況……87
第76図　Ⅱ郭出土遺物の実測図①……89
第77図　Ⅱ郭出土遺物の実測図②……90
第78図　Ⅱ郭出土遺物の実測図③……91
第79図　Ⅱ郭出土遺物の実測図④……95
第80図　Ⅲ郭出土遺物の実測図①……98
第81図　Ⅲ郭出土遺物の実測図②……101
第82図　Ⅲ郭出土遺物の実測図③……102
第83図　Ⅲ郭出土遺物の実測図④……103
第84図　Ⅲ郭出土遺物の実測図⑤……107
第85図　Ⅲ郭出土遺物の実測図⑥……108
第86図　Ⅲ郭出土遺物の実測図⑦……111
第87図　Ⅲ郭出土遺物の実測図⑧……112
第88図　Ⅲ郭出土遺物の実測図⑨……113
第89図　Ⅳ郭出土遺物の実測図①……115
第90図　Ⅳ郭出土遺物の実測図②……116
第91図　堀切Ⅰ－A・B出土遺物の実測図① 118
第92図　堀切Ⅰ－A・B出土遺物の実測図② 119
第93図　堀切Ⅰ－A・B出土遺物の実測図③ 122
第94図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図① 124
第95図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図② 125
第96図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図③ 129
第97図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図④ 132
第98図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図⑤ 133
第99図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図⑥ 136
第100図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図⑦…137
第101図　堀切Ⅰ－D出土遺物の実測図①…140
第102図　堀切Ⅰ－D出土遺物の実測図②…142
第103図　堀切Ⅰ－D出土遺物の実測図③…144
第104図　堀切Ⅰ－D出土遺物の実測図④…145
第105図　堀切Ⅰ－D出土遺物の実測図⑤…148
第106図　堀切Ⅰ－F・G出土遺物の実測図 150
第107図　堀切Ⅱ－A・B出土遺物の実測図①……152
第108図　堀切Ⅱ－A・B出土遺物の実測図②……154
第109図　堀切Ⅱ－A・B出土遺物実測図③……156
第110図　堀切Ⅱ－A・B出土遺物の実測図④……157
第111図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図①……159
第112図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図②……163
第113図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図③……164
第114図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図④……166
第115図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図⑤……168
第116図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図⑥……169
第117図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図⑦……174
第118図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図⑧……176
第119図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図⑨……178
第120図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図⑩……180
第121図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図⑪……181
第122図　表面採集遺物の実測図①……182
第123図　表面採集遺物の実測図②……183
第124図　高城跡周辺地形図……187

第125図　Ⅰ・Ⅶ・Ⅷ郭遺構実測図……188
第126図　Ⅴ・Ⅵ郭遺構実測図……189
第127図　高城跡周辺の集落と寺社堂宇・地名分布図……193
第128図　山田城跡より検出の建築址……196

表　目　次

第１表　Ⅱ郭検出の建築址一覧表……16
第２表　ＳＢⅡ－１計測表……17
第３表　ＳＢⅡ－２計測表……18
第４表　ＳＢⅡ－３計測表……19
第５表　ＳＢⅡ－４計測表……20
第６表　ＳＢⅡ－５計測表……21
第７表　ＳＢⅡ－６計測表……22
第８表　ＳＢⅡ－７計測表……23
第９表　ＳＢⅡ－８計測表……24
第10表　ＳＢⅡ－９計測表……25
第11表　ＳＢⅡ－10計測表……26
第12表　Ⅲ郭検出の建築址一覧表……28
第13表　ＳＢⅢ－11計測表……29
第14表　ＳＢⅢ－12計測表……30
第15表　ＳＢⅢ－13計測表……31
第16表　ＳＢⅢ－14計測表……32
第17表　ＳＢⅢ－15計測表……33
第18表　ＳＢⅢ－16計測表……34
第19表　ＳＢⅢ－17計測表……35
第20表　ＳＢⅢ－18計測表……36
第21表　ＳＢⅢ－19計測表……37
第22表　ＳＢⅢ－20計測表……38
第23表　ＳＢⅢ－21計測表……39
第24表　ＳＢⅢ－22計測表……40
第25表　ＳＢⅢ－23計測表……41
第26表　ＳＢⅢ－24計測表……42
第27表　ＳＢⅢ－25計測表……43
第28表　ＳＢⅢ－26計測表……44
第29表　ＳＢⅢ－27計測表……45
第30表　ＳＢⅢ－28計測表……46
第31表　Ⅳ郭検出の建築址一覧表……48
第32表　ＳＢⅣ－29計測表……49
第33表　ＳＢⅣ－30計測表……50
第34表　ＳＢⅣ－31計測表……51
第35表　ＳＢⅣ－32計測表……52
第36表　ＳＢⅣ－33計測表……53
第37表　ＳＢⅣ－34計測表……54
第38表　ＳＢⅣ－35計測表……55
第39表　ＳＢⅣ－36計測表……56
第40表　ＳＢⅣ－37計測表……57
第41表　ＳＢⅣ－38計測表……58
第42表　Ⅳ郭北側斜面の土坑一覧表……58
第43表　Ⅳ郭北側斜面土層観察表①……61
第44表　堀切Ⅰ－Ａ・Ｂ土層観察表②……63
第45表　堀切Ⅰ－Ａ・Ｂ土層観察表③……63
第46表　堀切Ⅰ－Ｃ土層観察表④……66
第47表　堀切Ⅰ－Ｄ土層観察表⑤……69
第48表　堀切Ⅰ－Ｅ・Ｆ土層観察表⑥……71
第49表　堀切Ⅰ－Ｇ土層観察表⑦……73
第50表　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ土層観察表⑧……75
第51表　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ土層観察表⑨……75
第52表　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ土層観察表⑩……77
第53表　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ土層観察表⑪……78
第54表　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ土層観察表⑫……80

第55表　建築址・柱穴出土遺物の観察表①……85
第56表　建築址・柱穴出土遺物の観察表②……86
第57表　Ⅱ郭出土遺物の観察表①……92
第58表　Ⅱ郭出土遺物の観察表②……93
第59表　Ⅱ郭出土遺物の観察表③……94
第60表　Ⅲ郭出土遺物の観察表①……99
第61表　Ⅲ郭出土遺物の観察表②……100
第62表　Ⅲ郭出土遺物の観察表③……104
第63表　Ⅲ郭出土遺物の観察表④……105
第64表　Ⅲ郭出土遺物の観察表⑤……106
第65表　Ⅲ郭出土遺物の観察表⑥……109
第66表　Ⅲ郭出土遺物の観察表⑦……110
第67表　Ⅲ郭出土遺物の観察表⑧……114
第68表　Ⅳ郭出土遺物の観察表①……114
第69表　Ⅳ郭出土遺物の観察表②……117
第70表　堀切Ⅰ－A・B出土遺物の観察表①……120
第71表　堀切Ⅰ－A・B出土遺物の観察表②……121
第72表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表① 126
第73表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表② 127
第74表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表③ 128
第75表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表④ 130
第76表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表⑤ 131
第77表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表⑥ 134
第78表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表⑦ 135
第79表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表⑧ 138
第80表　堀切Ⅰ－D出土遺物の観察表① 141
第81表　堀切Ⅰ－D出土遺物の観察表② 143
第82表　堀切Ⅰ－D出土遺物の観察表③ 146
第83表　堀切Ⅰ－D出土遺物の観察表④ 147
第84表　堀切Ⅰ－D出土遺物の観察表⑤ 149
第85表　堀切Ⅰ－F・G出土遺物の観察表…149
第86表　堀切Ⅱ－A・B出土遺物の観察表①……153
第87表　堀切Ⅱ－A・B出土遺物の観察表②……155
第88表　堀切Ⅱ－A・B出土遺物の観察表③……158
第89表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表①……160
第90表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表②……161
第91表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表③……165
第92表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表④……167
第93表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑤……170
第94表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑥……171
第95表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑦……172
第96表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑧……175
第97表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑨……177
第98表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑩……179
第99表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑪……181
第100表　表面採集遺物の観察表①……184
第101表　表面採集遺物の観察表②……185
第102表　中世の山田村と高城関係小年表…194

第103表　建築址の平面プラン分類表……195
第104表　土師器分類表……197
第105表　土師器皿・坏法量表……197
第106表　古銭一覧表……199

写真図版目次

図版１　①Ⅱ郭及び堀切Ⅰ－Ｃ（南側より）　②堀切Ⅰ－Ｃ（東側より）
③堀切Ⅰ－Ａ・Ｂ（南側より）
図版２　①堀切Ⅰ－Ａと Ⅲ郭（南西側より）　②Ⅲ郭と堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ（南側より）
③Ⅲ郭における先土器・縄文時代の調査（南側より）
図版３　①Ⅳ郭（北側より）　②堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ遺物出土状況（北側より）
③堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ（北側より）
図版４　①堀切Ⅱ－ＡとⅣ郭北側斜面蛸壺状土坑（西側より）②蛸壺状土坑（西側より）
③堀切Ⅱ－Ａにおける自然水路と堀底の浸食状況（西側より）
図版５　①堀切Ⅰ－Ｄ（南側より）　②堀切Ⅰ－Ｆ（西側より）
③堀切Ⅰ－Ｇ土層断面（西側より）
図版６　①高城跡より西側に延びる馬場道（東側より）②高城跡遠望（西側より）
③Ⅱ～Ⅳ郭における建築址の検出状況
図版７　土師器（皿・坏）
図版８　土師器（坏）
図版９　青磁・白磁・青白磁（碗）
図版10　青磁（碗・盤・皿）
図版11　白磁（碗・皿）　天目　仏花瓶　陶器　青磁香炉　取瓶　土師系坏　土製香炉
図版12　須恵・備前（甕）　硬質瓦器（火舎）　瓦質火舎
図版13　硬質瓦器（火舎）　瓦質火舎　土製茶釜
図版14　土製茶釜　内耳土器　硬質瓦器（擂鉢）　瓦質擂鉢
図版15　硬質瓦器（火舎）　常滑・備前（壺）　鉄製品　鉄砲玉　古銭　石臼
図版16　砥石（歴史時代）　先土器時代石器
図版17　縄文式土器　縄文時代石器（石製垂飾品）
図版18　縄文時代石器（石鏃・石匙・磨石・敲石・石斧・異形石器）

第Ⅰ章　調 査 の 概 要

第１節　調査の組織

調 査 主 体　熊本県教育委員会

調査責任者　岩崎辰喜（昭和57年度文化課長）　米村嘉人（昭和58年度文化課長）
森　一則（昭和59・60年度文化課長）　丸木保賢（昭和61・62年度文化課長）

調 査 総 括　隈　昭志（文化財調査係長・文化課主幹・課長補佐）

発 掘 調 査　大田幸博（文化財保護主事：試掘・本調査）　古森政次（嘱託：試掘）
黒田裕司（嘱託：本調査）　木崎康弘（文化財保護主事：調査協力）

報 告 書　大田幸博（文化財保護主事）　菖蒲和弘・六田育子（嘱託）
松舟博満・永田　満・石工みゆき・溝口真由美（臨時職員）
西住欣一郎（文化財保護主事：報告書協力）　浦田信智（嘱託：報告書協力）

専門調査員　白木原和美（熊本大学教授）賀川光夫（別府大学教授）石井　進（東京大学教授）工藤敬一（熊本大学教授）大三輪龍彦（鶴見女子大学教授）橘　昌信（別府大学教授）甲元眞之（熊本大学助教授）
三島　格（肥後考古学会会長）田辺哲夫（日本考古学協会員）
服部英雄（文化庁天然記念物課調査官）阿蘇品保夫（熊本県立美術館主幹）

協力機関及び協力者　山 江 村 役 場：田村俊明（山江村長）
山江村教育委員会：前村源治（教育長）谷川　強（前教育長）
中竹耕一郎（前社会教育主事）横谷　巡（前学校教育主事）
内山賢治（社会教育主事）
増木武男（前合戦峯地区長）　衆議山地権者　　高場一郎（求麻地方史研究会）

調査事務局　課 長 補 佐：林田茂一（昭和57・58年度）佐々木正則（昭和59・60年度）
林田敏嗣（昭和61・62年度）
主幹経理係長：大塚正信（昭和57・58年度）柴田和馬（昭和59～61年度）
松崎厚生（昭和62年度）
参　　事：松崎厚生（昭和57・58年度）花田隆三（昭和59年度）
森　貴史（昭和60・61年度）
主 任 主 事：谷　喜美子　　主　事：上村祐司（昭和62年度）

日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所
発 掘 調 査 時：坂巻持千男（前所長）永渕善吾（前副所長）村田文敏（前工務課長）
古賀文雄（前庶務課長）豊永盛喜・渡久地政樹（前工務課）

報告書作成時：山田益三（前所長）近藤俊一（所長）小原　明（前副所長）
松本茂久・信国興勝（副所長）
岩永一男（庶務課長）石丸　裕（庶務課）

発掘作業員　中村正好（班長）・岡本　実・田頭一義・井川静香・石工タツト・上村ヤサメ
尾方信子・岡田ヒトム・尾園スソエ・勝原カノエ・勝山タツ・勝山ミサ子・勝山良子
加村キミ子・迫田初子・迫田チフ・迫田洋子・田口サツキ・田中スソコ
西　徳子・深水トシ子・福川シマエ・浜田教子・村山裕子・宮川邦子

整理作業員　笠間いつ子・吉長都美子・緒方千代・村山清子・中島典子・緒方朋子

第2節　調査に至る経緯

昭和53年3月29日付けで、日本道路公団福岡建設局（局長：大城金夫）から熊本県教育委員会（教育長：林田正恒）に対して、九州縦貫自動車道（八代～えびの間）の分布調査依頼があり、熊本県教育委員会では同年8月4～6日・8月10～12日の2回にわたり調査を実施した。その結果、路線予定地内に18遺跡が確認された。

「高城跡」は後半の分布調査によって確認された遺跡の「本城遺跡」と「高城跡」に該当し、調査担当者は熊本県文化課の隈　昭志・杉村彰一・島津義昭・田添夏喜の4名であった。

分布調査時の所見は「山田川を眼下にのぞむ狭い台地の平坦部にある遺跡で、微細な土師器片が一面に拡がる。水田地帯を前にした段丘で、住居跡の可能性がある。（本城遺跡）」、「山田川左岸の本城遺跡の奥にある。段違いの平坦部と堀切状の凹道が走り、中世の城跡と予想される。また、城跡についての伝承も残っている。（高城跡）」となっている。

この結果を昭和52年9月9日付けで日本道路公団福岡建設局へ回答したところ、昭和53年4月11日付けで文化庁長官あての協議書が提出されたので、これに熊本県教育委員会の意見を付けて同年5月19日付けで文化庁長官あてに発送した。

文化庁からは、昭和53年6月12日付けで「熊本県教育委員会と協議の上、事前に発掘調査を実施すること。なお調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等によるその保存に配慮すること。」という通知があり、昭和53年6月20日付けで日本道路公団あて通知した。

昭和57年度から熊本県教育委員会は日本道路公団の調査依頼を受け、各遺跡の試掘調査を行った。本城遺跡・高城跡については、昭和57年11月～昭和58年3月に実施し、これには熊本県文化課主事大田幸博・嘱託吉森政次があたった。

試掘調査の結果、両遺跡は同一遺跡であることが判り、丘陵を堀切によって独立させ、少なくとも8郭から成る中世城跡であることが確認された。

昭和58年2月8日、日本道路公団と協議の上、本格的な発掘調査を昭和59年度から実施することとなり、本調査は文化課文化財保護主事大田幸博と嘱託黒田裕司が担当した。

第3節　調査の方法と経過

九州縦貫自動車道（八代～人吉間）は、高城跡が立地するシラス丘陵地を北から南にかけて横断した。発掘調査の対象となったのは、8郭から構成される高城跡の内、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ郭の部分である。調査にあたり、日本道路公団が設置したNo.378＋40の道路中心杭を基準に、東西－南北方向を軸とする5ｍ×5ｍの区画を設定し、西から東にA～T、北から南に1～22とし、それらの組み合わせによって各区画を示した。

（1）調査の方法と手順

昭和57年11月から昭和58年3月まで試掘調査を行い、昭和59年6月から本調査に入った。まず、調査区の草払い等の環境整備を行った後、Ⅱ郭～Ⅲ郭～Ⅳ郭及び郭間の堀切・空堀の順に調査を進めた。この間、調査の作業能率を上げるために、バックフォーやブルドーザーを導入した。さらには排土運搬の為の作業用道路を付設し、2ｔダンプを常駐させた。

発掘調査は、中世城跡の調査を主体とし、平場における遺構や遺物を検出し、各郭間の堀切や、郭の斜面部を完掘した。同時に調査区の詳細な地形測量も合わせて実施した。

高城跡はシラス丘陵に築かれた丘城であり、遺構のほとんどがシラス面で確認されたために、降雨時の浸食作用に悩まされた。

先土器・縄文時代は、中世城跡の調査終了後にⅡ郭とⅢ郭で行った。Ⅳ郭は調査時点において遺物包含層を消失していた。

なお、発掘終了後、昭和62年4月から路線外を含めた全城域の測量調査を実施した。

（2）発掘調査の工程

昭和59年6月　昭和58年度実施の七地水田遺跡の発掘調査が長びき、予定より2ケ月遅れて6月4日に調査を開始。7日に球磨地方が梅雨入り。Ⅱ郭平場の調査。26日から31日まで雨。野ウサギが出没する。

7月　Ⅱ郭平場の調査。柱穴群を検出。重機を導入してⅡ郭・Ⅲ郭・Ⅳ郭の斜面部を調査。表土と樹根を撤去。

8月　Ⅱ郭・Ⅲ郭平場の調査。かなりの遺物が出土した。建築址も多数検出。
Ⅱ～Ⅳ郭斜面部の調査。

9月　Ⅲ郭平場とⅡ～Ⅳ郭斜面部の調査。

10月　重機による堀切の表土剝ぎ。Ⅱ郭検出の柱穴群の実測。
堀切Ⅰ－A・BとⅠ－Cの調査。

11月　堀切Ⅰ－Dの調査。多量の遺物が出土。Ⅳ郭の立木伐採。
Ⅲ郭検出の柱穴群の実測。重機を導入してⅣ郭を中心とした一帯の表土剝ぎ。

12月　Ⅳ郭と、堀切Ⅲ－A・B・C、堀切Ⅰ－E・Fの調査。Ⅳ郭の西側斜面部から

は蛸壺状の落ち込みを検出。

昭和60年１月　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂの調査。Ⅳ郭検出の柱穴群の実測。

２月　堀切Ⅰ－Ｇの調査。城跡の地形測量に追われる。

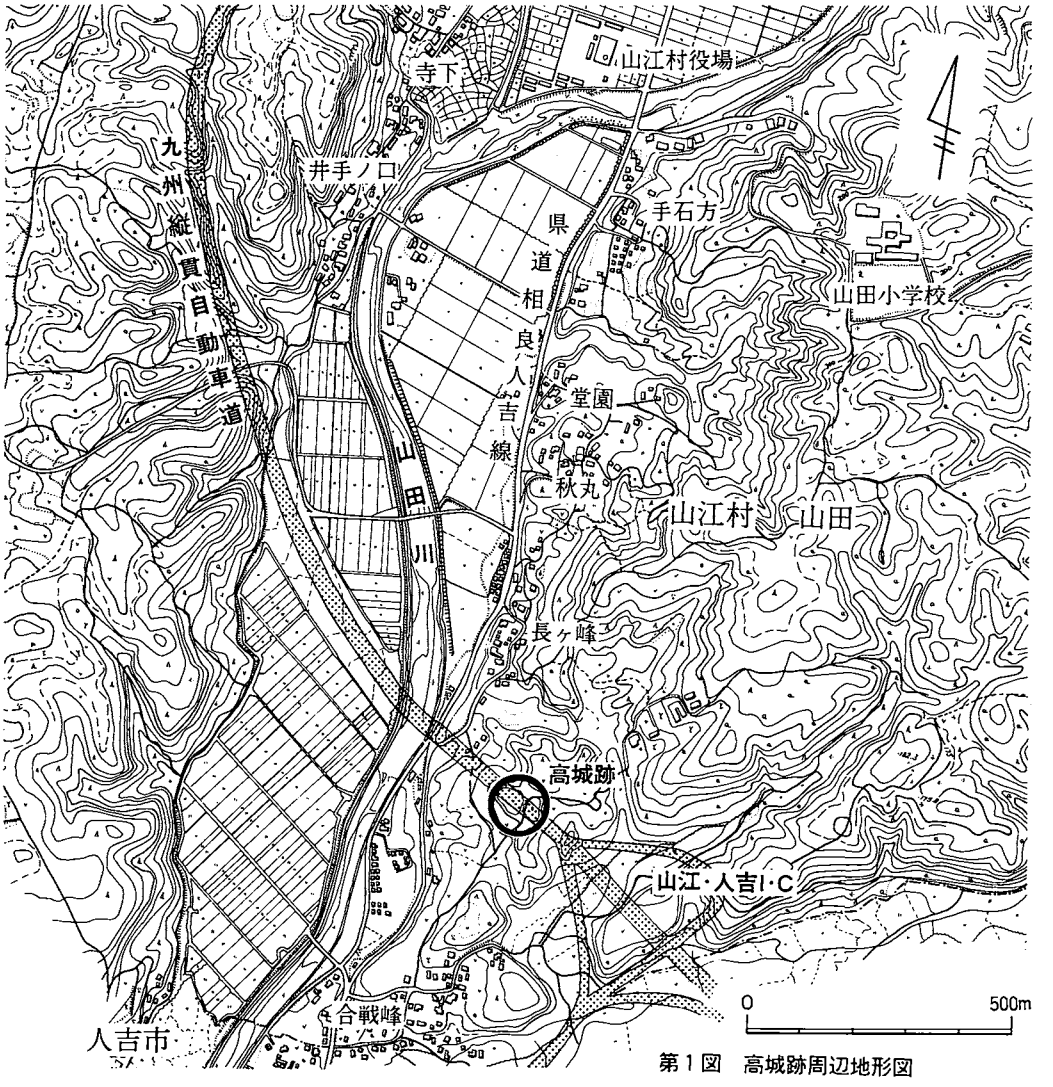
３月　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ郭の精査。

４月　15日まで遺跡全体の清掃と写真撮影。補足実測。26日午後よりⅡ郭において縄文時代の遺物包含層の調査を開始。

５月　１～13日までⅡ郭の縄文遺物包含層を調査。14日よりⅢ郭の縄文遺物包含層を調査。

６月　Ⅲ郭の縄文・先土器時代の遺物包含層の調査。

７月　１～14日までⅢ郭の調査。15日から土層確認のため、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ郭の深掘り。31日に調査終了。



第１図　高城跡周辺地形図

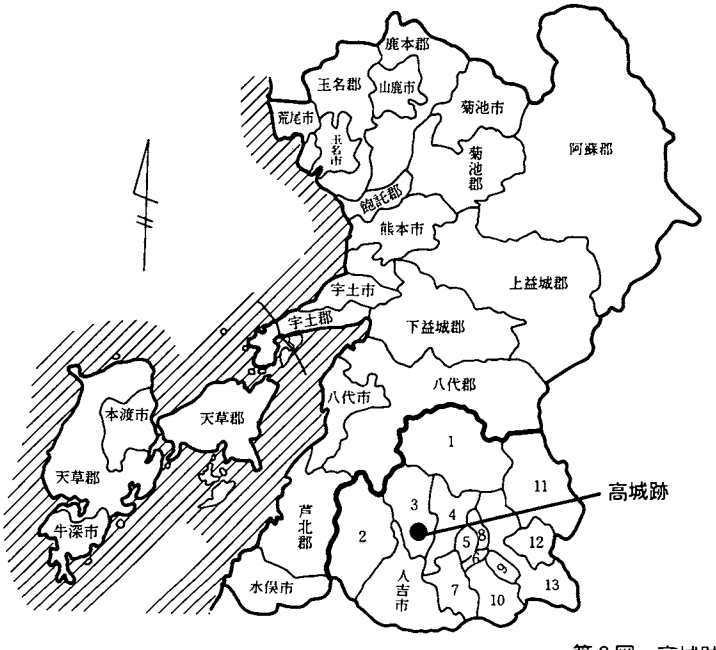
第４節　遺跡の位置と地理的環境

（１）位　　置

高城跡の所在地は、熊本県球磨郡山江村大字山田の字城・本城地内で、人吉盆地の北壁を形成する八代からの大山塊が、盆地側に支脈の末端を延ばす所にある。国土地理院発行の５万分の１地形図『人吉』に位置を求むれば、図幅南15cm、西から４cmの所にある。

村内の山田地区には、山付きの北方向から盆地側の南方向へ鋭角に開口する大きな開析谷が開けており、北の谷頭から流れ出た東浦川と西川内川は中途で合流し、谷底平野を流れる山田川となる。流域は広大な水田地帯となっており、下流域は人吉盆地の平野部と接する。集落はこの開析谷を形成する東西両側の山稜、及び丘陵の支脈地帯の裾部に開けている。高城跡はこの内の東側丘陵の南端にある合戦峯集落より、約300ｍ内側に位置する丘城である。

一方、西側の低山稜地帯には、中世文書に城名を見る山田城跡（大王谷箇所）の他に、今回の一連の調査で、下城子箇所・城山箇所に新たに中世城跡が発見された。この事で、最終的に同じ山田地内に４ケ所の中世城跡が所在する事となり、山田城跡と高城跡との関連性を考える上で、その歴史的な裏付けが問題となろう。



球磨郡	
1	五木村
2	球磨村
3	山江村
4	相良村
5	深田村
6	免田町
7	錦町
8	須恵村
9	岡原村
10	上村
11	水上村
12	湯前町
13	多良木町

第２図　高城跡位置図

（２）人吉盆地

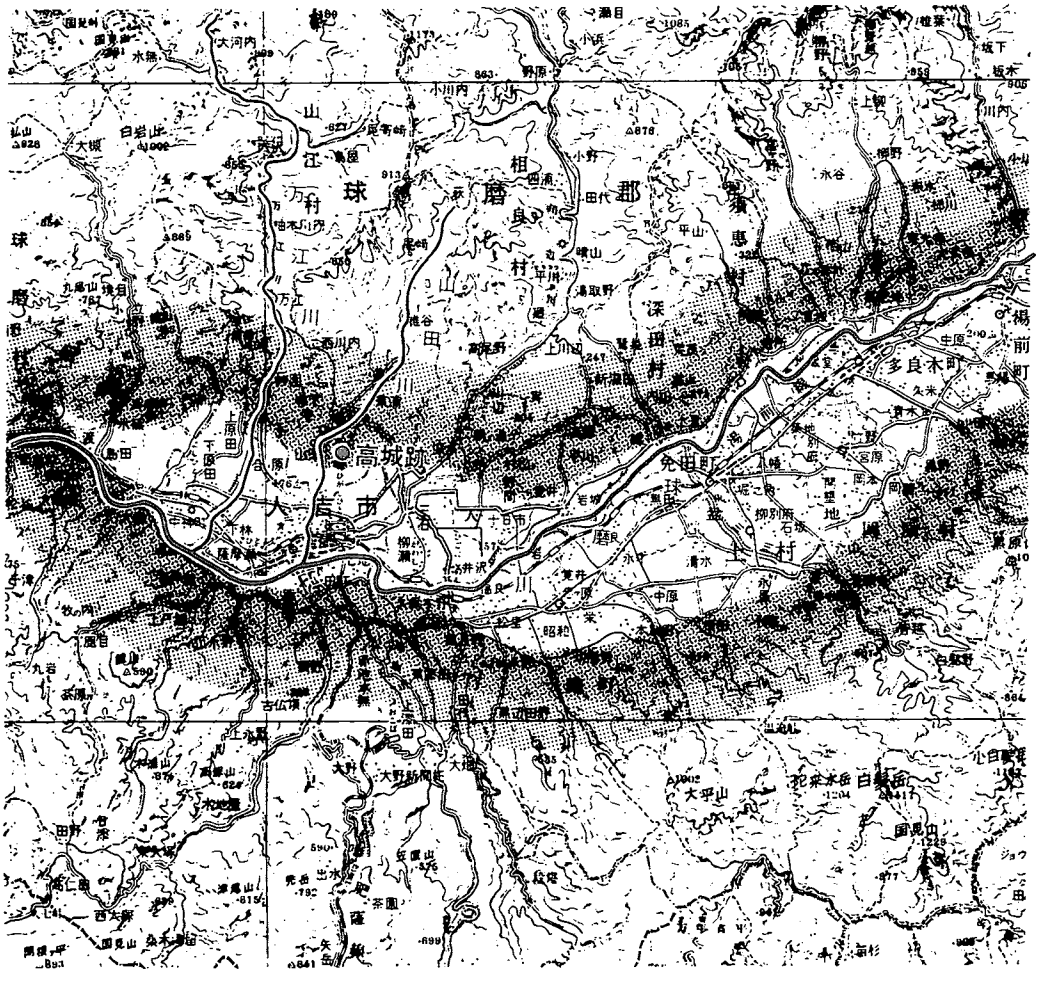
熊本県の南東部に位置し、周囲を祖母山・国見山・市房山などの九州山地に囲まれ、山地内に大きく開口した標高100～200ｍの断層盆地である。盆地の中央部を、日本三急流の一つであ

る球磨川が東方向から西方向へ流れる。球磨川の北岸には、川辺川によって形成された広大な扇状地と、阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵地がある。

地質的には中央構造線の南側に位置し、山江村の西川内付近まで数本の構造線が延びている。

（３）球磨郡山江村

人吉盆地の西寄りにある。村内の東西に大きな２つの開析谷が北から南下しており、東側に山田地区・西側に万江地区が開けている。明治22年４月に、山田村と万江村の２村が合併して山江村となる。行政域の南端は人吉市に接し、面積121.08㎢、人口4500人前後の山村である。



第３図　人吉盆地地形図

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　高城跡の歴史的環境

（１）先土器時代

球磨・人吉地方では27箇所の遺跡が確認されている。それらの遺跡の殆どは山江村や人吉市中心とした地域で、河川に近い標高150ｍ前後の台地・丘陵地からである。その中で、昭和57年から63年にかけて県文化課の九州縦貫自動車道（八代～人吉間）建設に伴う発掘調査が行なわれ、高城跡を初めとして大丸・藤ノ迫遺跡、狸谷遺跡、鼓ケ峯遺跡、天道ケ尾遺跡が調査対象地となった。更に、昭和61年度には人吉市教育委員会の手によって、村山闇谷遺跡の発掘調査が実施された。

これらの遺跡には、すべて入戸火砕流（シラス・ＡＴ）が見られ、遺物はシラスの上層から出土した。その中で狸谷遺跡は、厚さ２ｍ近いシラスの下層からも先土器時代の遺物が数多く出土した。そこで同遺跡では、シラスの下位層石器群を第Ⅰ文化層とし、シラスの上位層石器群を第Ⅱ文化層とした。調査の結果から同遺跡は、九州先土器時代の標準的な遺跡になり得ると思われる。本報告書でも、高城跡から出土した遺物を狸谷遺跡の第Ⅱ文化層に含まれる石器群の一つと見なし同遺跡の分類に従った。

（２）縄文時代

早期の遺跡としては、狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡、村山遺跡、岩清水遺跡、射場ノ本遺跡などがある。

高城跡からは、押型文系の楕円文・山形文、塞ノ神式土器、手向山式土器など早期の遺物が出土した。これらの遺物は石器も含めて、隣接丘陵の大丸・藤ノ迫遺跡に同一のものを見ることができる。

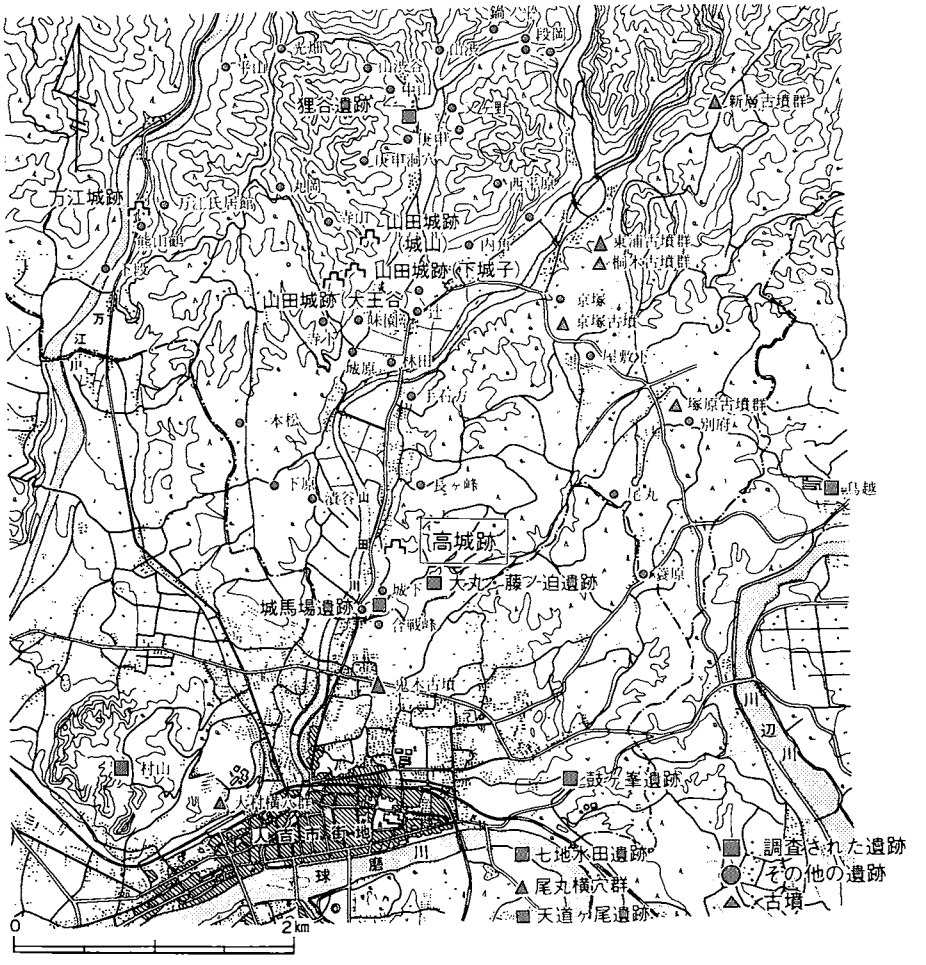
前期以降の遺跡では、鼓ケ峯遺跡と射場ノ本遺跡があげられる。曽畑式土器・船元式土器や並木式土器が出土している。

後期の遺跡は、矢黒神社前遺跡がある。後期後半の遺物や石刀の柄部が採集されている。

晩期の遺跡は丘陵上に村山闇山遺跡、天道ケ尾遺跡があり、球磨川流域の台地・丘陵地には、大量の石斧が出土した七地水田遺跡がある。

（３）弥生時代

球磨・人吉地方の弥生時代は、後期に特徴があり、免田式土器が多く出土している。遺跡は30箇所を数え、人吉盆地の中央部に集中する。高城跡はこの分布域の周辺部にあたり、大丸・藤ノ迫遺跡からは、免田式土器を伴う10基の住居址が検出されている。高城跡からは、弥生時代の遺物が１片だけ出土している。出土遺物は持ち込みによるものと考えられる。



遺跡名	所在地	時代
狸谷	山江村山田字狸谷	先土器～縄文
大丸・藤ノ迫	〃 字藤ノ迫	〃
高城跡	〃 字城・本城	〃 歴史
中山	〃 字中山	〃
山渋谷	〃 字山渋谷	〃
平山	山江村方江字平山	縄文
光畑	〃 字光畑	〃
下段	〃 字下段	〃
庚申・洞穴	山江村山田字庚申	〃 洞穴
山渋	〃 字山渋	〃
鍋ノ平	〃 字鍋ノ平	〃
段岡ＡＢＣ	〃 字段岡ＡＢＣ	〃
又ケ野	〃 字又ケ野	〃
丸岡	〃 字丸岡	〃
寺山	〃 字寺山	〃
内角	〃 字内角	〃
辻	〃 字辻	〃
味園	〃 字味園	〃
寺下	〃 字寺下	〃
城原	〃 字城原	〃
林田	〃 字林田	〃
手石方	〃 字手石方	〃

一本松	山江村山田字一本松	縄文
下原	〃 字下原	〃
貴谷	〃 字貴谷	〃
城馬場	〃 字城馬場	〃
長ケ峰	〃 字長ケ峰	〃
蓑原	〃 字蓑原	〃
尾丸	〃 字尾丸	〃
別府	〃 字別府	〃
屋敷下	〃 字屋敷下	〃
一丸	〃 字一丸	〃
西平原	〃 字西平原	〃
合戦峰	〃 字合戦峰	〃
新層	〃 字新層	縄文～古墳
東浦	〃 字東浦	〃
桐木	〃 字桐木	〃
塚原	〃 字塚原	〃
城下	〃 字城下	〃
京塚	〃 字京塚	〃
山田城跡	〃 字大王谷	縄文～歴史
山田城跡	〃 字下城子	歴史
山田城跡	〃 字城山	〃
方江城跡	〃 字熊山鶴	〃
方江氏居館	〃 字城内	〃

第４図　高城跡周辺遺跡分布図

（４）古墳時代

中心舞台は人吉盆地の中央部にあり、亀塚古墳群、四塚古墳群、才園四塚古墳群、鬼ノ釜古墳群のような有力古墳が分布している。これに対し高城周辺には、桐木古墳群、新層古墳群、東浦古墳群、塚原古墳群のような小規模な墳墓群が分布する。

合戦峯集落から高城跡に至る馬場道沿いにある畑の境石は、かつてこの地にあった古墳の石材を転用していると言われている。

高城跡では、中世城跡の空堀から古墳時代の直刀と削り小刀が出土した。

（５）歴史時代

１．古　代

球磨・人吉地方の中心地域は、依然、盆地中央にあったと考えられる。須恵器・瓦の古窯跡（下り山・椿木窯跡）、古瓦出土遺跡（椿木・久鹿遺跡）、蔵骨器出土遺跡（廻り迫遺跡・他４遺跡）、銅板墓誌出土遺跡（黒田平城遺跡）などの遺跡がある。一方で人吉周辺も『和名類聚抄』に記載されている「人吉郷」の存在のように、次第に中心的な地域になっていったと思われる。

山江村山田の高寺院の毘沙門天立像は、平安時代末期の作風を残している。

２．中　世

中世の山田村は、鎌倉時代の平河氏、南北朝時代の大宰小弐氏、室町時代の相良氏によって所領支配が行われている。従来から大王谷箇所の山田城跡の存在は知られていたが、今回の調査で、他に下城子・城山箇所にも中世城跡の存在が確認された。そこで、これら４城跡の歴史的位置付けが必要となってくる。

鎌倉時代の山田村は、『平河文書』『相良家文書』から、球磨郡永吉庄に含まれ、平河氏が地頭であったことは間違いない。地頭館跡の比定地としては、旧山江村役場跡地の「辻」辺りの微高地が推測される。周辺の水田は「前田」「門田」などとも呼ばれ、地頭直轄地の門田としての可能性が強い。場所的にも、東浦川と西川内川の合流地点で氾濫原であり、水田耕作に最も適した後背湿地帯である。

南北朝時代に入ると、『相良家文書』の中に山田城が頻繁に所見する。この時期山田城は、北朝方の大宰少弐氏からいく度か攻められ、暦応三年（1340）には大宰少弐頼尚の命で相良孫二郎定長が「山田已下所領城郭警固」をしている。

これ以後、中世文書に山田城の所見はない。永和三年（1377）十月廿八日に日向・薩摩・大隅・肥後四ケ国の国人六十一人が参加して成立した一揆契状神水案文には、球磨郡からが最も多く、十人が名前を連ねているが、この中に後で問題となる山田城主永留氏は見えない。

一般に知られている室町時代の山田城主永留氏説は、後世の編纂物によるもので史料的根拠は何もない。ただ、関連文書から永留氏の存在は確認でき、人吉庄永留名の地頭職を得ていた一族であると思われ、家臣団の名字は人吉庄永留名付近の地名が多い。

第５図　山江村南部の字図と地形図

人吉庄永留名は、現在の人吉市鬼木町・鶴田町と山江村合戦峯あたりに推定される。水田開発と勧農の上で鬼木川・山田川の掌握が容易で、耕地の安定化が可能な所である。また、人吉の下相良氏居館や佐無田堀内、山田川流域、大王谷・下城子方面が一望でき、地理的に重要な場所である。

永留氏の人吉庄永留名から永吉庄山田村への進出は、時期としては南北朝末期から室町初期が考えられ、堂園に御位碑所として「増大寺」を建立、大王神社や高寺院毘沙門堂も相次いで再興している。

その後、永留実重は人吉城主相良頼廣の娘を室とし、下相良氏と親戚関係を結んでいる。そして、永留長続の代に人吉城主の相良前続が死去し、跡目相続でもめるや、長続は幼主堯頼を追放し、さらに瑞堅を滅ぼし、自ら人吉城に入城している。次いで、球磨郡を二分する勢力を持っていた多良木の相良頼観・頼仙を打ち滅ぼし郡内を一挙に統一する。しかし、服従しない国人も数多く、その対策として、永留為続の子・頼兼を上村直頼の養子に送り込んでいる。こ

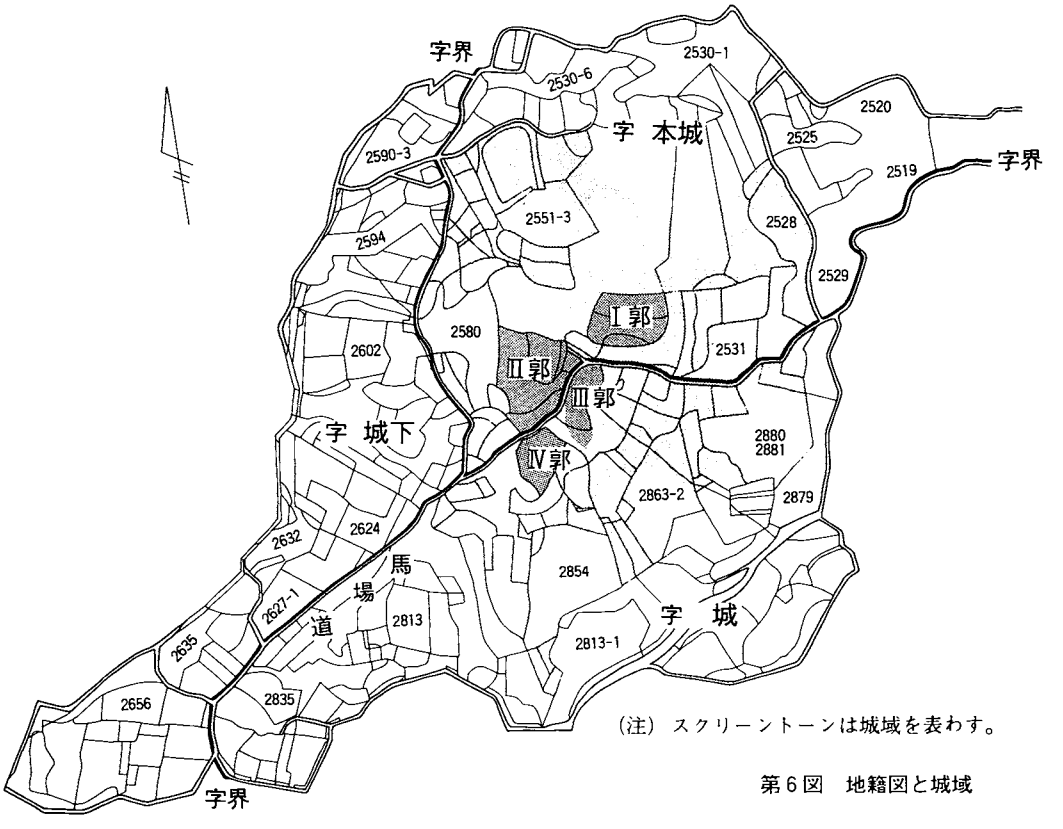
の後、人吉城へ入城した永留氏が「相良」姓を名乗り、八代・芦北郡へと進出し、戦国大名として活躍する事になる。

参考文献：熊本県文化財調査報告　第30集『熊本県の中世城跡』1978年　熊本県教育委員会刊
熊本県文化財調査報告　第80集『大丸・藤ノ迫遺跡』1986年　熊本県教育委員会刊
熊本県文化財調査報告　第90集『狸谷遺跡』1987年　熊本県教育委員会刊
人吉市文化財調査報告書『村山遺跡』1981年　人吉市教育委員会刊
上村重次著『九州相良の寺院資料』1987年　人吉市・金輝堂刊
青井采女佐惟熹著『麻郡神社私考』元禄十二年

第２節　高城跡の城名と城域について

高城跡は、中世文書・近世文献からの所見が皆無で、城跡名や城歴が不明であったが、熊本県教育庁文化課が昭和50年～52年に実施した熊本県中世城跡緊急調査で、字図による地名調査から城跡の所在を確認した。同調査の報告書には「山田の城」として報告されているが、今回の調査に際し、地元で城跡地の一帯を「高城（たかじょう）」と称している所から遺跡名を「高城跡」とした。

城域の把握については、調査区一帯のシラス丘陵をつぶさに踏査し、地形の形状や地名調査等をもとに線引きを行った。その結果、城跡は堀切によって仕切られた合計８つの郭から構成される丘城であることが判った。南北方向に主軸ラインを有し、城域規模は南北約370ｍ、東西幅約240ｍを測り、字「本城（ほんじょう）」「城（じょう）」の地内と推察された。



（注）スクリーントーンは城域を表わす。

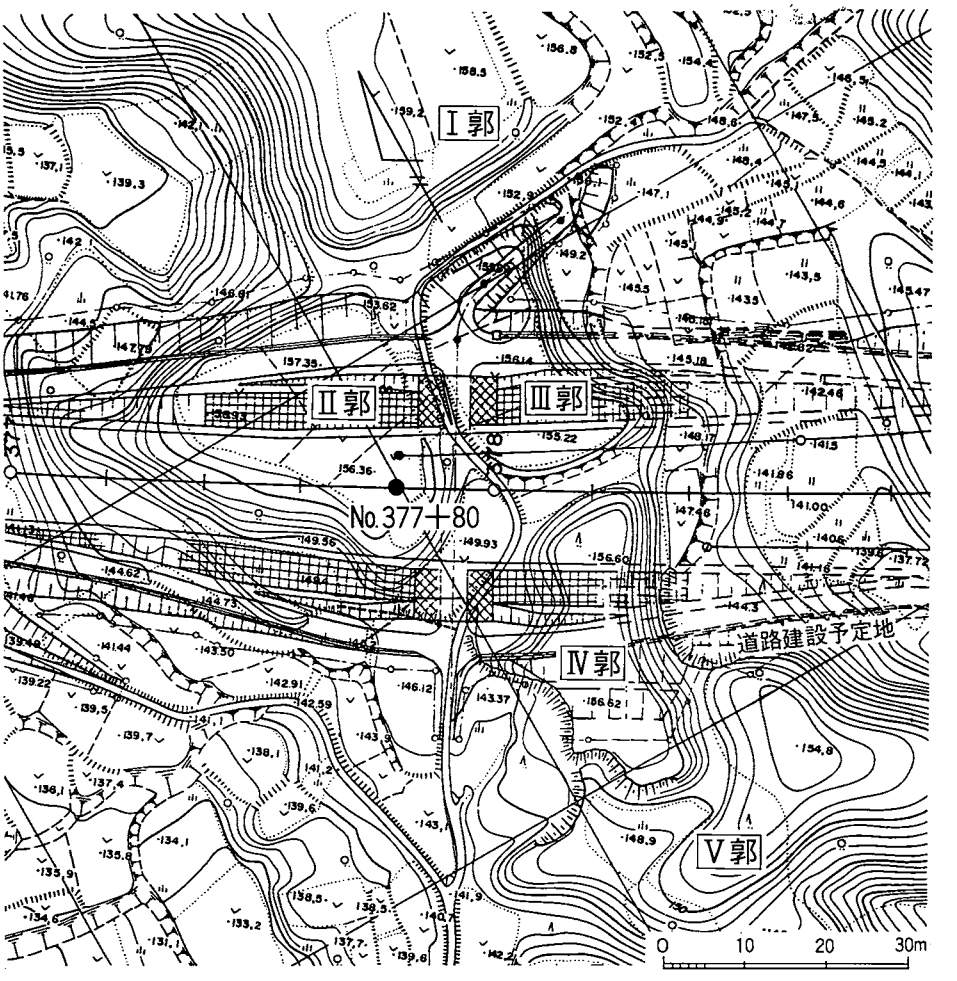
第６図　地籍図と城域

第Ⅲ章　調 査 の 成 果

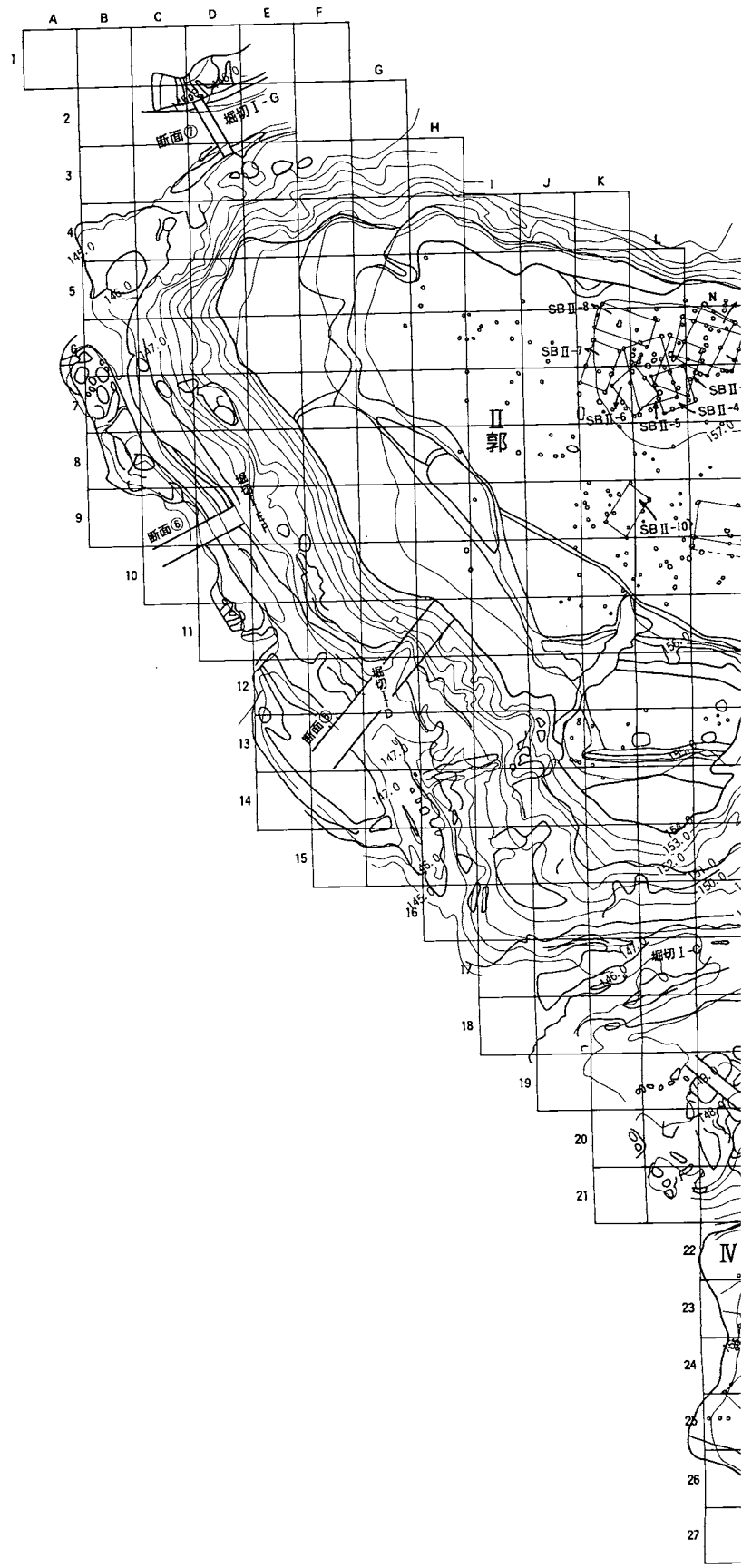
第１節　遺構の概要

調査に際し、便宜的に、城跡の最高所で主郭と考えられる箇所をⅠ郭とし、以下、順に南側へ連郭式にⅡ郭・Ⅲ郭・Ⅳ郭とした。さらに、これらの外郭にあたるものとして、主軸ラインの南側をⅤ郭・Ⅵ郭とし、Ⅰ郭の東側をⅦ郭・Ⅷ郭とした。この内、九州縦貫自動車道の建設予定地内に含まれ、調査対象となった箇所は、Ⅱ～Ⅳ郭である。

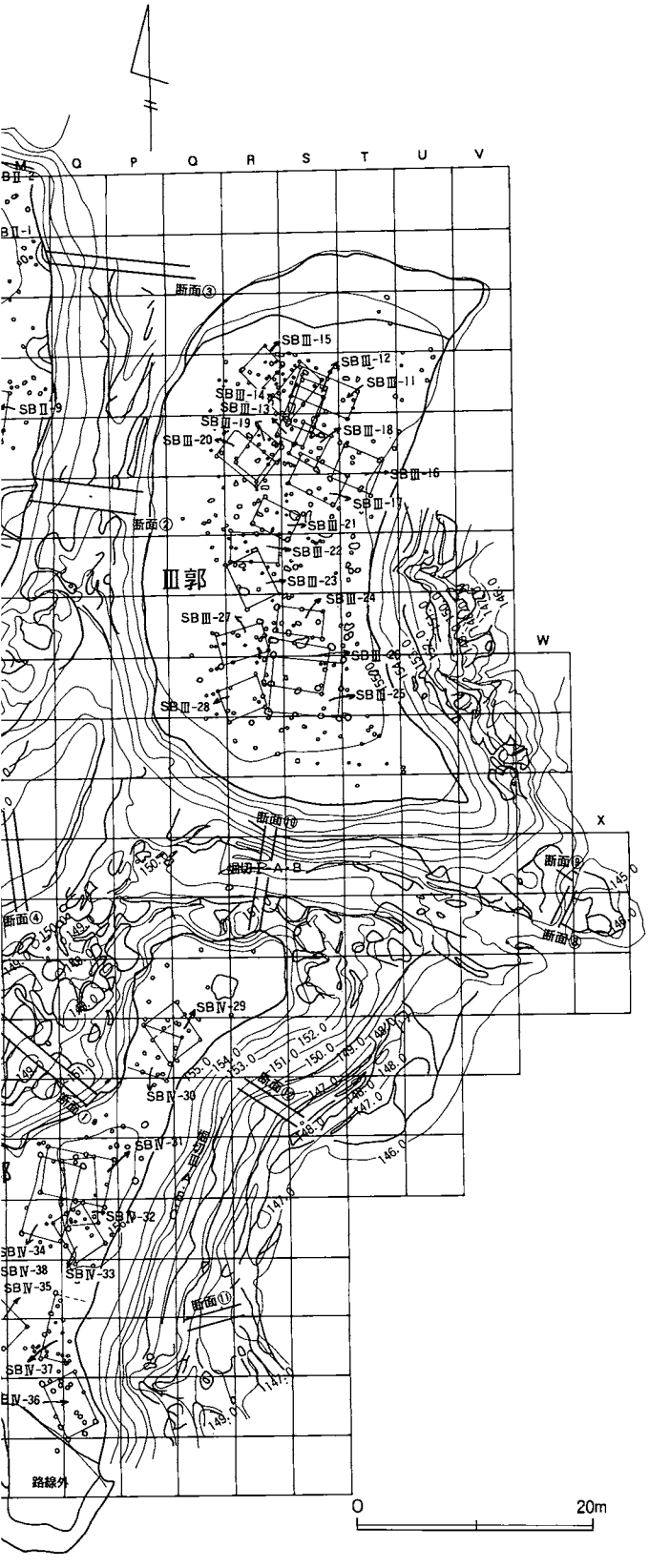
この３郭については、日本道路公団が設置した道路建設のための中心杭（No.377＋80）を基準に、東西－南北方向を軸とする５ｍ×５ｍの区画を設定し、西から東にＡ～Ｘ、北から南に１～27とし、それらの組み合わせによって各区画を示した。



第７図　高城跡周辺地形図と九州縦貫自動車道建設予定地


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
N
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
堀切Ⅰ-G
断面⑦
断面⑥
断面⑤
堀切Ⅰ-D
堀切Ⅰ-C
SBⅡ-8
SBⅡ-7
SBⅡ-6
SBⅡ-5
SBⅡ-4
SBⅡ-10
Ⅱ
郭
Ⅳ
145.0
146.0
147.0
148.0
157.0
156.0
153.0
152.0
151.0
150.0

第８図　高城跡調査区

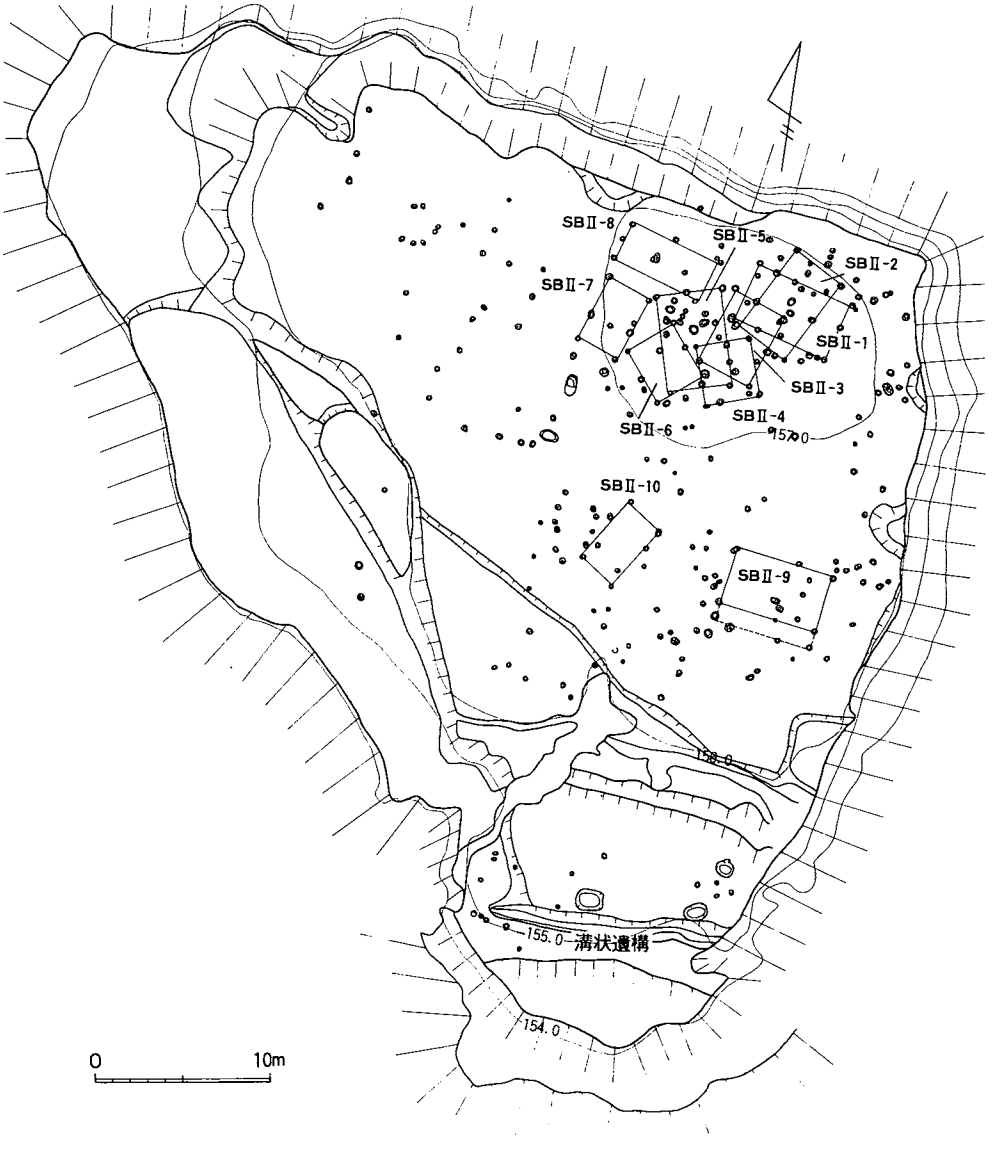

O P Q R S T U V
W
X
Ⅲ郭
SBⅢ-15
SBⅢ-12
SBⅢ-11
SBⅢ-14
SBⅢ-13
SBⅢ-19
SBⅢ-18
SBⅢ-20
SBⅢ-16
SBⅢ-17
SBⅢ-21
SBⅢ-22
SBⅢ-23
SBⅢ-24
SBⅢ-27
SBⅢ-26
SBⅢ-25
SBⅢ-28
SBⅣ-29
SBⅣ-30
SBⅣ-31
SBⅣ-32
SBⅣ-33
SBⅣ-34
SBⅣ-38
SBⅣ-35
SBⅣ-37
SBⅣ-36
断面①
断面②
断面③
断面④
断面⑤
断面⑥
断面⑦
断面⑧
断面⑨
断面⑩
路線外
0
20m

全体遺構図

第２節　Ⅱ郭の調査結果

平場は三角形の形状を呈する。東縁は長さ49ｍで南北方向に主軸を持ち、一方、北縁は長さ47ｍで東西方向に主軸がある。面積約1150㎡で、高城跡では最大の平場面積を有する。

平場は一様に平坦ではなく、北東側に標高157ｍのラインが巡り、これより南側と西側への緩傾斜地となる。東縁の南北両側における比高は2.5ｍで、同じく北側の東西両側の比高は３ｍである。



第９図　Ⅱ郭遺構実測図

表土の厚さは約0.5ｍで、地山はほとんどシラスであった。このシラスの上面から、柱穴や溝状遺構が検出された。

郭の斜面部はいずれも急峻で、築城の際に人工的に削り落とされている事が明らかである。裾部との比高は北側で6.5ｍ、西側で約９ｍであった。

Ⅱ郭検出の建築址

Ⅱ郭の北東側に、南北16ｍ、東西13ｍの範囲で郭の最高所がある。標高157ｍのラインで、この地から８棟の建築址が重なり合って検出された。さらに、この集中地点より東へ６～９ｍ離れた標高156ｍのラインからも、２棟の建築址が検出された。

建築址は、２間×２間（ＳＢⅡ—１・２・４・５・８）と２間×１間（ＳＢⅡ—３・６・７・９・10）とに大別されるが、ＳＢⅡ—１・４は梁行妻の中央柱が不明で、ＳＢⅡ—２は桁行の中央柱が２本に分かれ、ＳＢⅡ—８は桁行の中央柱が不明である。ＳＢⅡ—９には庇が付いている。

規模は、ＳＢⅡ—１・９が最大で桁行5.6ｍ×梁行妻3.4ｍを測り、最小はＳＢⅡ—６の桁行3.4ｍ×梁行妻3.0ｍである。

桁行の方位は、ＳＢⅡ—１・８・９がＮ72°Ｗ～Ｎ79°Ｗで、ＳＢⅡ—２・３・７・10がＮ22°Ｅ～Ｎ33°Ｅで、ＳＢⅡ—４・５がＮ11°Ｗ～Ｎ12°Ｗでまとまりがあり、唯一、ＳＢⅡ—６が例外的にＮ37°Ｗであった。

ＳＢⅡ—２からは備前の擂鉢（11）、ＳＢⅡ—９からは瓦器の擂鉢（９）、ＳＢⅡ—10からは古銭（18）が出土している。

建築址 NO.	規　模	規　格	桁行方位	備　考
ＳＢⅡ—１	5.6m×3.4m	２間×２間	Ｎ76°Ｗ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅡ—２	5.4m×3.6m	２間×２間	Ｎ31°Ｅ	桁行の中央柱が２本
ＳＢⅡ—３	4.4m×3.2m	２間×１間	Ｎ22°Ｅ	
ＳＢⅡ—４	3.4m×3.2m	２間×２間	Ｎ11°Ｗ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅡ—５	5.4m×3.7m	２間×２間	Ｎ12°Ｗ	
ＳＢⅡ—６	3.4m×3.0m	２間×１間	Ｎ37°Ｗ	
ＳＢⅡ—７	3.8m×2.6m	２間×１間	Ｎ25°Ｅ	
ＳＢⅡ—８	5.4m×2.4m	２間×２間	Ｎ72°Ｗ	桁行の中央柱が不明
ＳＢⅡ—９	5.6m×3.4m	２間×１間	Ｎ79°Ｗ	庇が付く
ＳＢⅡ—10	4.0m×2.4m	２間×１間	Ｎ33°Ｅ	

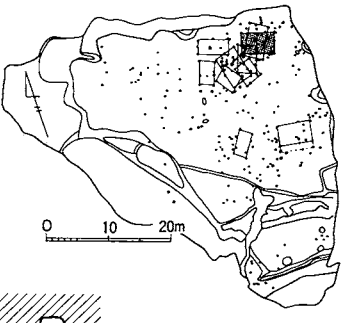
第１表　Ⅱ郭検出の建築址一覧表

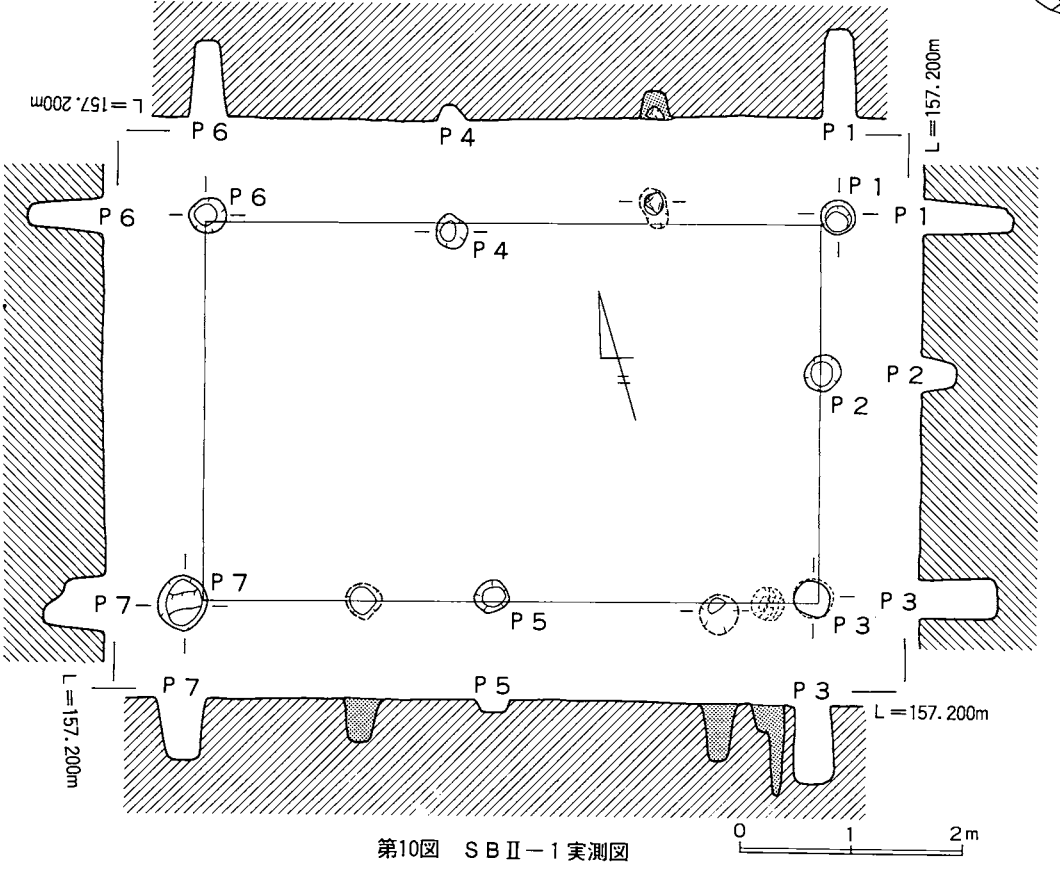
ＳＢⅡ－１

桁行5.6ｍ、梁行妻3.4ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ76°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ１～Ｐ４～Ｐ６で3.4ｍ＋2.2ｍ、Ｐ３～Ｐ５～Ｐ７で3.0ｍ＋2.6ｍ、梁行妻Ｐ１～Ｐ２～Ｐ３で1.4ｍ＋2.0ｍとなる。Ｐ６～Ｐ７は中央柱が不明で、全長3.4ｍをはかる。柱穴の大きさは、Ｐ７が最大（50×45cm）で、Ｐ４が最小（32×28cm）である。深さはＰ１が最深（80cm）で、Ｐ５が最浅（12cm）である。柱列は、桁行Ｐ３～Ｐ５～Ｐ７を除いてすべて千鳥の並びとなる。柱穴の埋土は褐灰色土である。Ｐ４から土師器皿の細片が出土している。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
1～4	3.4	5.6	1～2	1.4	3.4	1	80	32	32
4～6	2.2		2～3	2.0		2	32	34	30
						3	71	35	32
3～5	3.0	5.6	6～7	3.4	3.4	4	15	32	28
5～7	2.6					5	12	32	30
						6	70	34	32
						7	56	50	45

第２表　ＳＢⅡ－１計測表





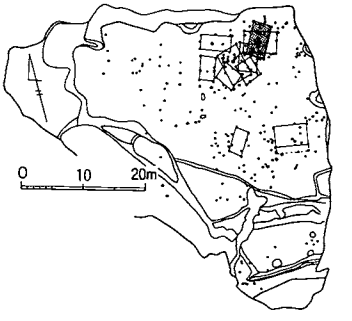
第10図　ＳＢⅡ－１実測図

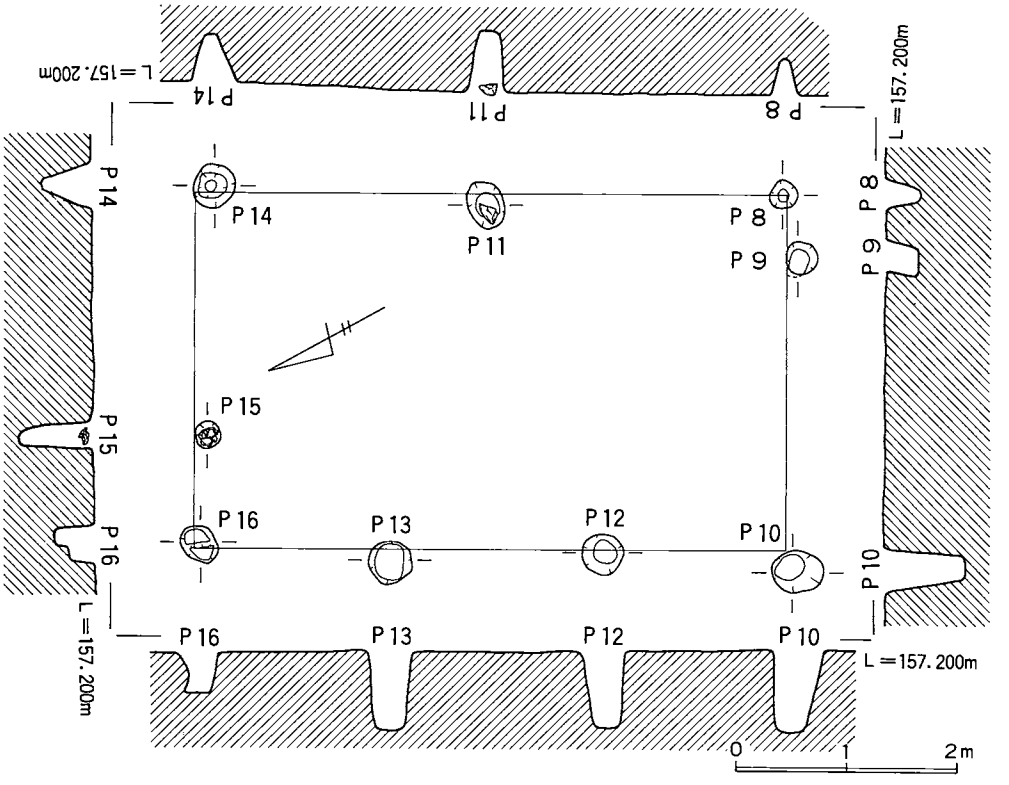
ＳＢⅡ－２

桁行5.4ｍ、梁行妻3.6ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ31°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ８～Ｐ11～Ｐ14で2.7ｍ＋2.7ｍ、Ｐ10～Ｐ16は中央柱が２本に分かれＰ10～Ｐ12～Ｐ13～Ｐ16で1.8ｍ＋1.8ｍ＋1.8ｍとなり、梁行妻Ｐ８～Ｐ９～Ｐ10で0.6ｍ＋2.6ｍ、Ｐ14～Ｐ15～Ｐ16で2.2ｍ＋1.0ｍを測る。柱穴の大きさは、Ｐ10が最大（48×40㎝）で、Ｐ15が最小（25×23㎝）である。深さはＰ10が最深（75㎝）で、Ｐ９が最浅（30㎝）である。柱列はすべて千鳥の並びとなる。柱穴の埋土は褐灰色土である。Ｐ15からは擂鉢（11）が出土している。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
8～11	2.7	5.4	8～9	0.6	3.2	8	32	26	24
11～14	2.7		9～10	2.6		9	30	30	29
						10	75	48	40
10～12	1.8	5.4	14～15	2.2	3.2	11	54	44	33
12～13	1.8		15～16	1.0		12	68	38	37
13～16	1.8					13	70	42	39
						14	43	41	35
						15	65	25	23
						16	36	38	30

第３表　ＳＢⅡ－２計測表





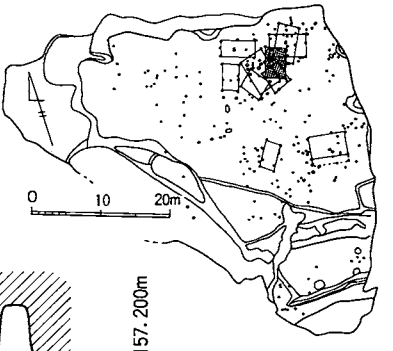
第11図　ＳＢⅡ－２実測図

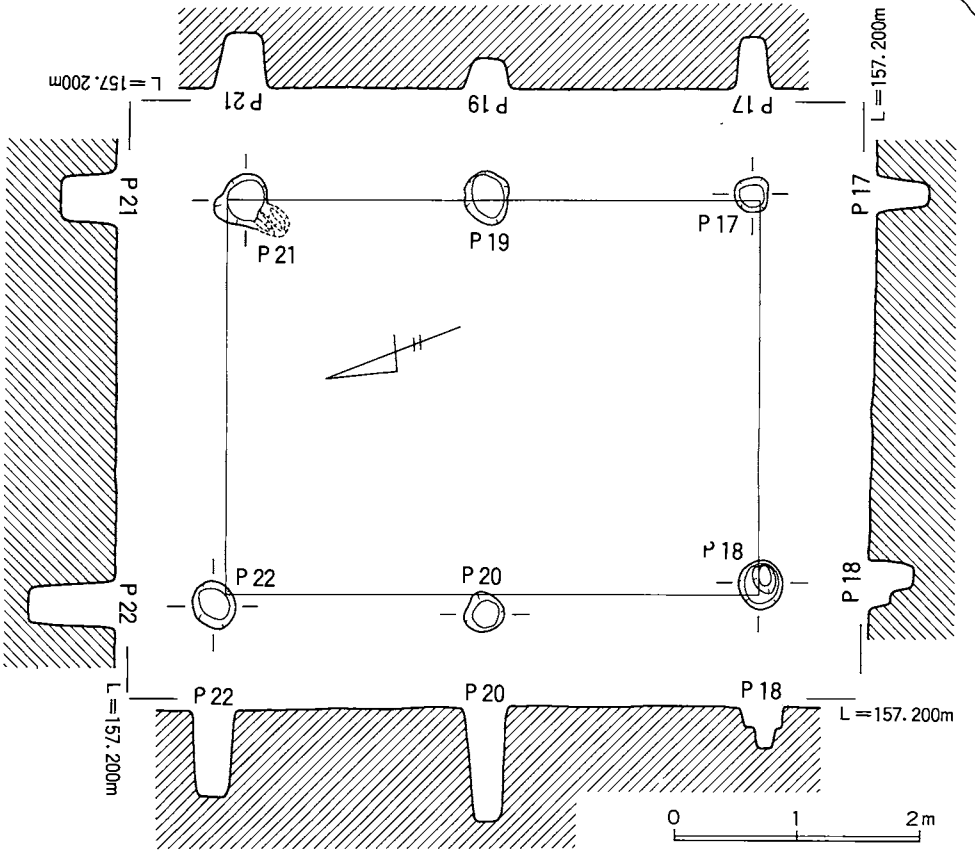
ＳＢⅡ－３

桁行4.4ｍ、梁行妻3.2ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ22°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ17～Ｐ19～Ｐ21で2.2ｍ＋2.2ｍ、Ｐ18～Ｐ20～Ｐ22で2.2ｍ＋2.2ｍ、梁行妻Ｐ17～Ｐ18で3.2ｍ、Ｐ21～Ｐ22で3.2ｍを測る。柱穴の大きさは、Ｐ21が最大（49×35cm）で、Ｐ17が最小（32×27cm）である。深さはＰ20が最深（95cm）で、Ｐ19が最浅（26cm）である。柱列は桁行Ｐ17～Ｐ19～Ｐ21を除いて千鳥の並びになる。Ｐ18は二段掘りになっている。柱穴の埋土は褐灰色土である。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
17～19	2.2	4.4	17～18	3.2	3.2	17	42	32	27
19～21	2.2					18	37	40	36
			21～22	3.2	3.2	19	26	45	36
18～20	2.2	4.4				20	95	34	32
20～22	2.2					21	47	49	35
						22	70	39	35

第４表　ＳＢⅡ－３計測表





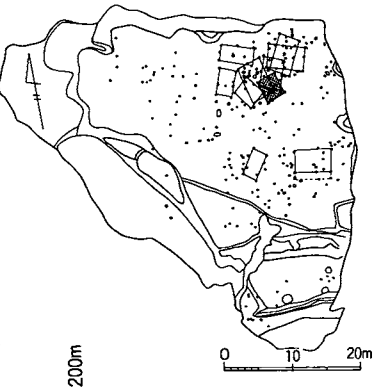
第12図　ＳＢⅡ－３実測図

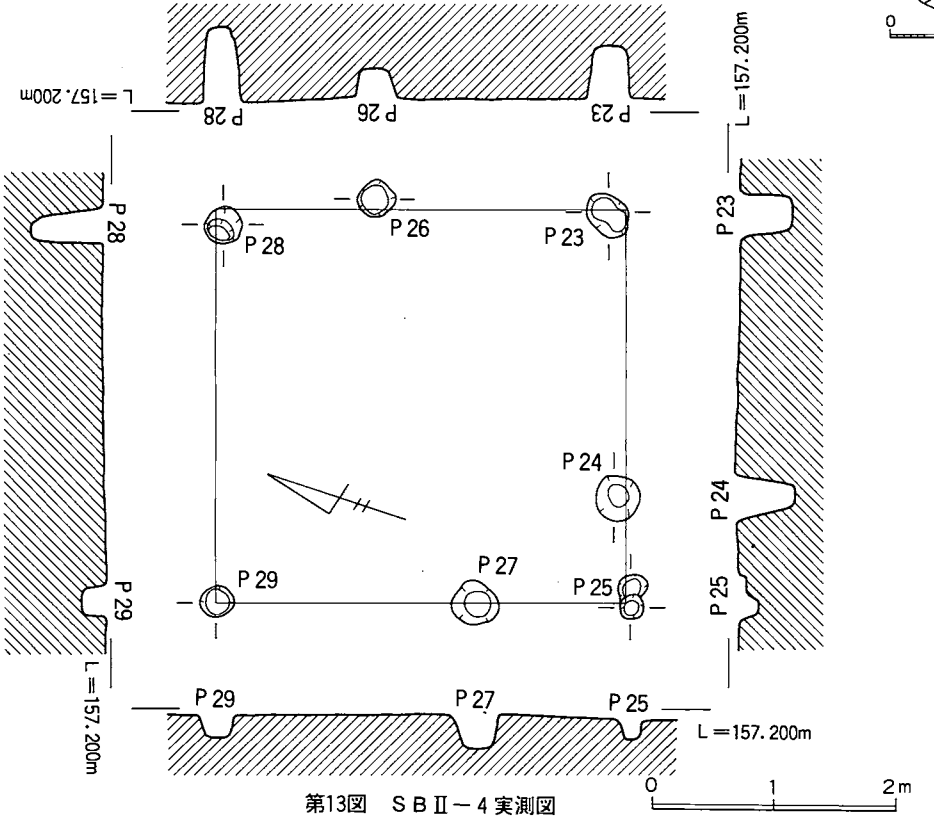
ＳＢⅡ－４

桁行3.4ｍ、梁行妻3.2ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ11°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ23～Ｐ26～Ｐ28で2.1ｍ＋1.3ｍ、Ｐ25～Ｐ27～Ｐ29で1.3ｍ＋2.1ｍ、梁行妻Ｐ23～Ｐ24～Ｐ25で2.3ｍ＋0.9ｍとなる。Ｐ28～Ｐ29は中央柱が不明で、全長3.2ｍを測る。柱穴の大きさは、Ｐ23が最大（42×32cm）で、Ｐ29が最小（28×26cm）である。深さは、Ｐ28が最深（63cm）で、Ｐ25が最浅（17cm）である。柱列は、桁行Ｐ23～Ｐ26～Ｐ28と梁行妻Ｐ23～Ｐ24～Ｐ25が千鳥の並びとなる。柱穴の埋土はＰ27が黒色土で、他は褐灰色土である。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
23～26	2.1	3.4	23～24	2.3	3.2	23	43	42	32
26～28	1.3		24～25	0.9		24	47	40	36
						25	17	37	17
25～27	1.3	3.4	28～29	3.2	3.2	26	23	33	30
27～29	2.1					27	26	40	36
						28	63	32	30
						29	18	28	26

第５表　ＳＢⅡ－４計測表





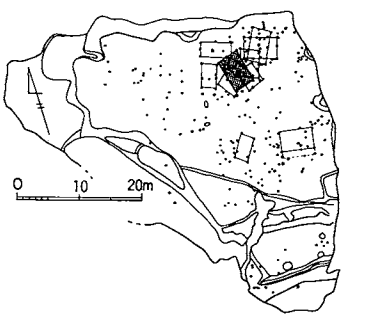
第13図　ＳＢⅡ－４実測図

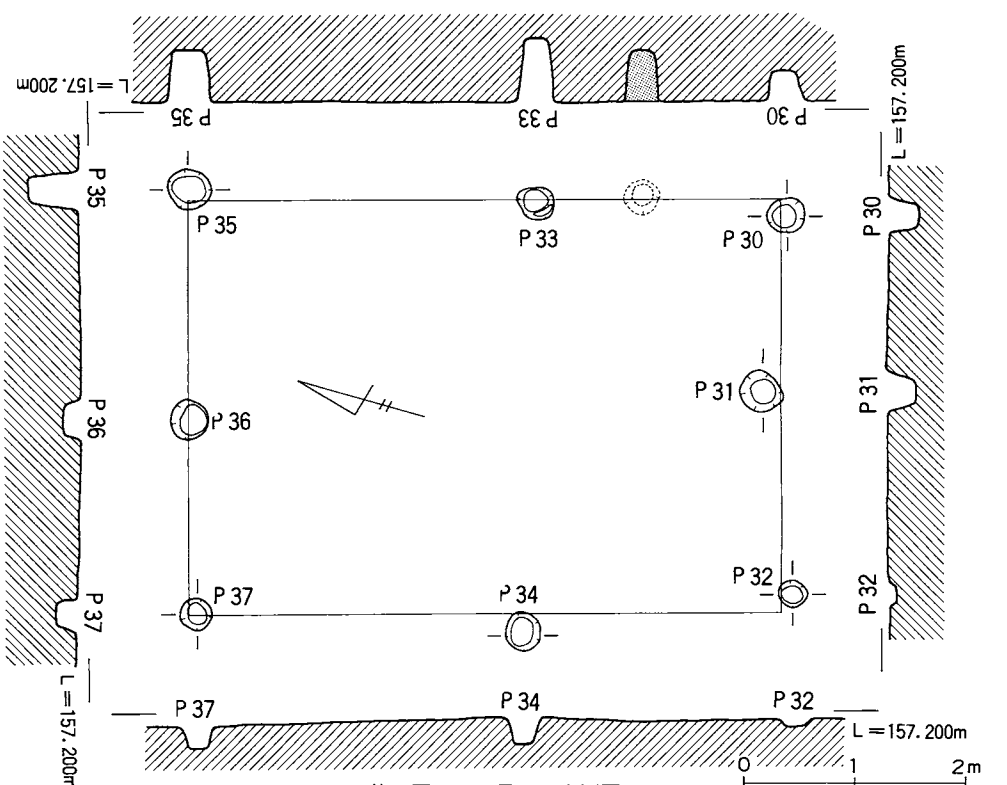
ＳＢⅡ－５

桁行5.4ｍ、梁行妻3.7ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ12°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ30～Ｐ33～Ｐ35で2.2ｍ＋3.2ｍ、Ｐ32～Ｐ34～Ｐ37で2.2ｍ＋3.2ｍ。梁行妻Ｐ30～Ｐ31～Ｐ32で1.7ｍ＋2.0ｍ、Ｐ35～Ｐ36～Ｐ37で1.9ｍ＋1.8ｍを測る。柱穴の大きさは、Ｐ35が最大（40×36cm）で、Ｐ32が最小（26×26cm）である。深さはＰ33が最深（57cm）で、Ｐ32が最浅（８cm）である。柱列は梁行妻Ｐ35～Ｐ36～Ｐ37を除いてすべて千鳥の並びになる。柱穴の埋土はＰ33・Ｐ34が黒色土で他は褐灰色土である。Ｐ33から青磁の細片が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
30～33	2.2	5.4	30～31	1.7	3.7	30	27	35	32
33～35	3.2		31～32	2.0		31	26	40	35
						32	8	26	26
32～34	2.2	5.4	35～36	1.9	3.7	33	57	36	30
34～37	3.2		36～37	1.8		34	22	37	32
						35	47	40	36
						36	18	37	35
						37	19	30	29

第６表　ＳＢⅡ－５計測表





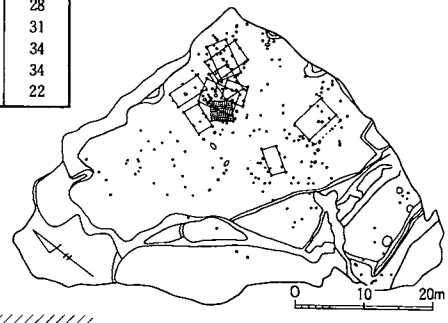
第14図　ＳＢⅡ－５実測図

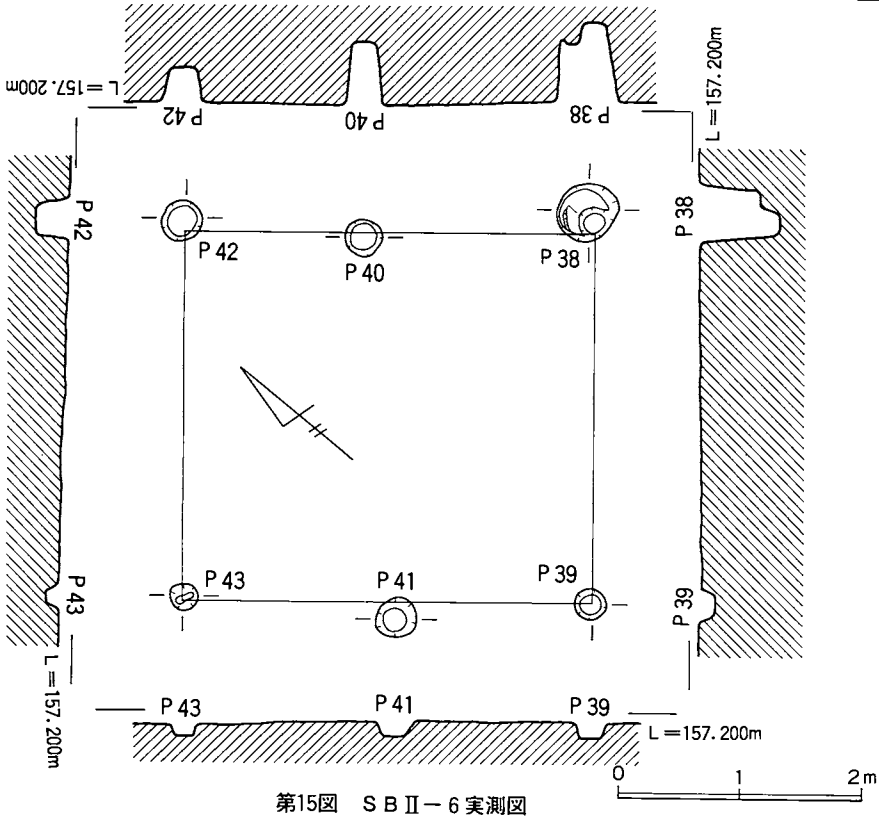
ＳＢⅡ－６

桁行3.4ｍ、梁行妻3.0ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ37°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ38～Ｐ40～Ｐ42で1.9ｍ＋1.5ｍ、Ｐ39～Ｐ41～Ｐ43で1.7ｍ＋1.7ｍ、梁行妻Ｐ38～Ｐ39で3.0ｍ、Ｐ42～Ｐ43で3.0ｍを測る。柱穴の大きさは、Ｐ38が最大（52×47cm）で、Ｐ43が最小（24×22cm）である。深さはＰ38が最深（67cm）で、Ｐ43が最浅（10cm）である。柱列は両桁行が千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
38～40	1.9	3.4	38～39	3.0	3.0	38	67	52	47
40～42	1.5					39	13	28	28
			42～43	3.0	3.0	40	52	32	31
39～41	1.7	3.4				41	14	36	34
41～43	1.7					42	38	35	34
						43	10	24	22

第７表　ＳＢⅡ－６計測表





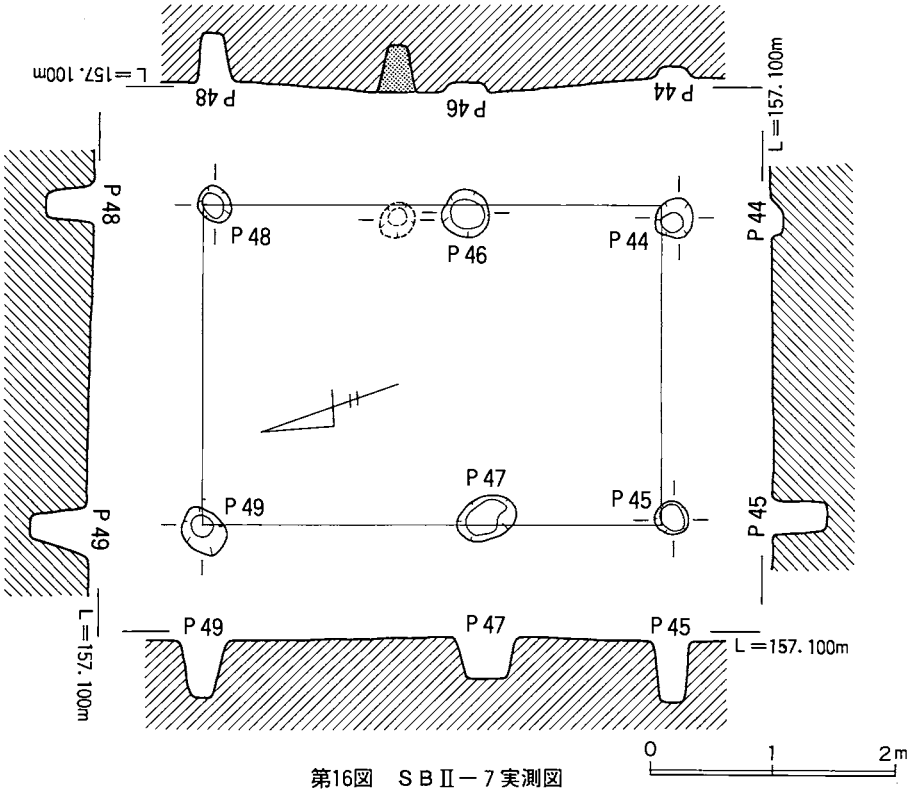
第15図　ＳＢⅡ－６実測図

ＳＢⅡ－７

桁行3.8ｍ、梁行妻2.6ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ25°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ44～Ｐ46～Ｐ48で1.6ｍ＋2.2ｍ、Ｐ45～Ｐ47～Ｐ49で1.5ｍ＋2.3ｍ、梁行妻Ｐ44～Ｐ45で2.6ｍ、Ｐ48～Ｐ49で2.6ｍを測る。柱穴の大きさは、Ｐ47が最大（51×45㎝）で、Ｐ45が最小（28×28㎝）である。深さはＰ49が最深（47㎝）で、Ｐ46が最浅（８㎝）である。桁行Ｐ46とＰ48の間の柱穴は、埋土が灰褐色土で近世のものである。柱列は梁行妻Ｐ48～Ｐ49が千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
44～46	1.6	3.8	44～45	2.6	2.6	44	12	35	31
46～48	2.2					45	45	28	28
			48～49	2.6	2.6	46	8	40	38
45～47	1.5	3.8				47	45	51	45
47～49	2.3					48	41	31	26
						49	47	43	32

第８表　ＳＢⅡ－７計測表



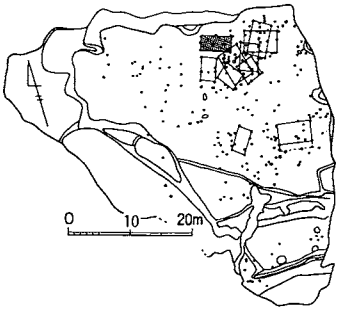
第16図　ＳＢⅡ－７実測図

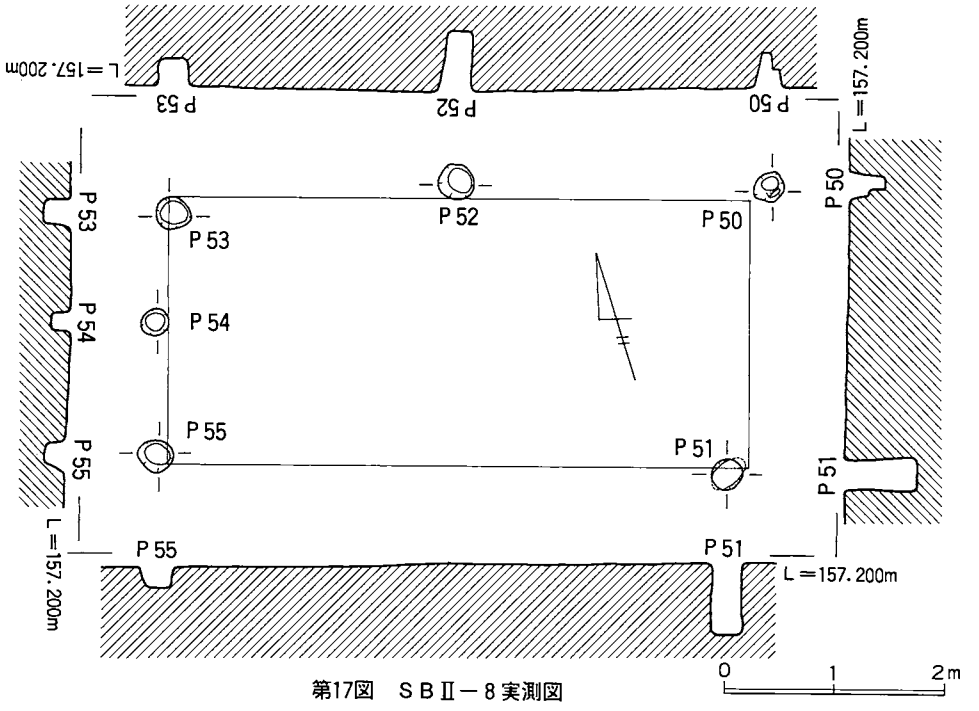
ＳＢⅡ－８

桁行5.4ｍ、梁行妻2.4ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ72°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ50～Ｐ52～Ｐ53で2.7ｍ＋2.7ｍ、Ｐ51～Ｐ55は中央柱が不明で、全長5.4ｍを測る。梁行妻はＰ53～Ｐ54～Ｐ55で1.1ｍ＋1.3ｍ、Ｐ50～Ｐ51は桁行同様に中央柱が不明で、全長2.4ｍを測る。柱穴の大きさはＰ52が最大（35×32㎝）で、Ｐ54が最小（26×23㎝）である。深さはＰ51が最深（64㎝）で、Ｐ55が最浅（18㎝）である。柱列はすべて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
50～52	2.7	5.4	50～51	2.4	2.4	50	33	28	26
52～53	2.7					51	64	29	27
			53～54	1.1	2.4	52	56	35	32
51～55	5.4	5.4	54～55	1.3		53	26	32	29
						54	19	26	23
						55	18	33	30

第９表　ＳＢⅡ－８計測表





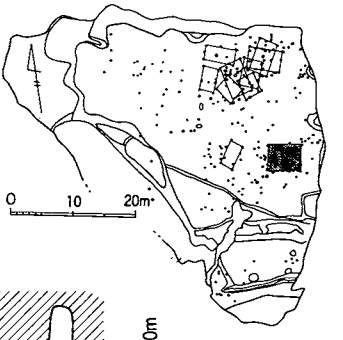
第17図　ＳＢⅡ－８実測図

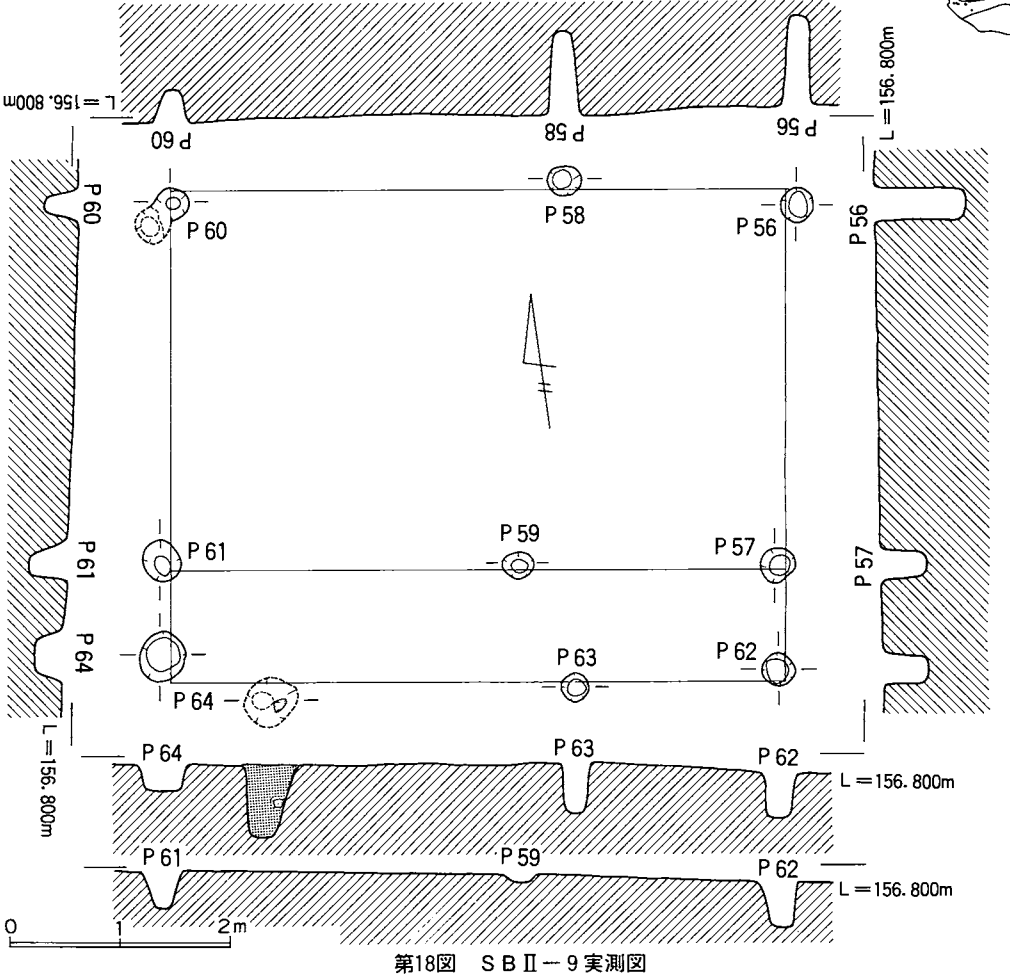
ＳＢⅡ－９

桁行5.6ｍ、梁行妻3.4ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ79°Ｗである。南側に１間×２間の庇がつく。柱間寸法は、桁行Ｐ56～Ｐ58～Ｐ60で2.0ｍ＋3.6ｍ、Ｐ57～Ｐ59～Ｐ61は2.4 ｍ＋3.2ｍ、梁行妻はＰ56～Ｐ57で3.4ｍ、Ｐ60～Ｐ61は3.4ｍを測る。庇は桁行Ｐ62～Ｐ63～Ｐ64で1.9ｍ＋3.7ｍ、梁行妻はＰ57～Ｐ62で1.0ｍ、Ｐ61～Ｐ64で1.0ｍを測る。柱穴の大きさは、Ｐ64が最大（45×40cm）で、Ｐ63が最小（27×25cm）である。深さはＰ56が最深（82cm）で、Ｐ59が最浅（7cm）である。柱列は桁行を除いて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は全体的にやや軟かい褐灰色土である。Ｐ56から瓦器の擂鉢（９）が出土している。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
56～58	2.0	5.6	60～61	3.4	3.4	56	82	32	28
58～60	3.6		(61～64)	1.0	4.4	57	43	34	29
						58	74	32	26
57～59	2.4	5.6	56～57	3.4	3.4	59	7	29	24
59～61	3.2		(57～62)	1.0	4.4	60	29	30	29
						61	34	38	33
(62～63)	1.9	5.6				62	39	31	30
(63～64)	3.7					63	47	27	25
						64	22	45	40

第10表　ＳＢⅡ－９計測表





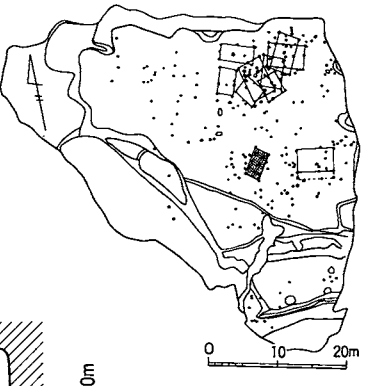
第18図　ＳＢⅡ－９実測図

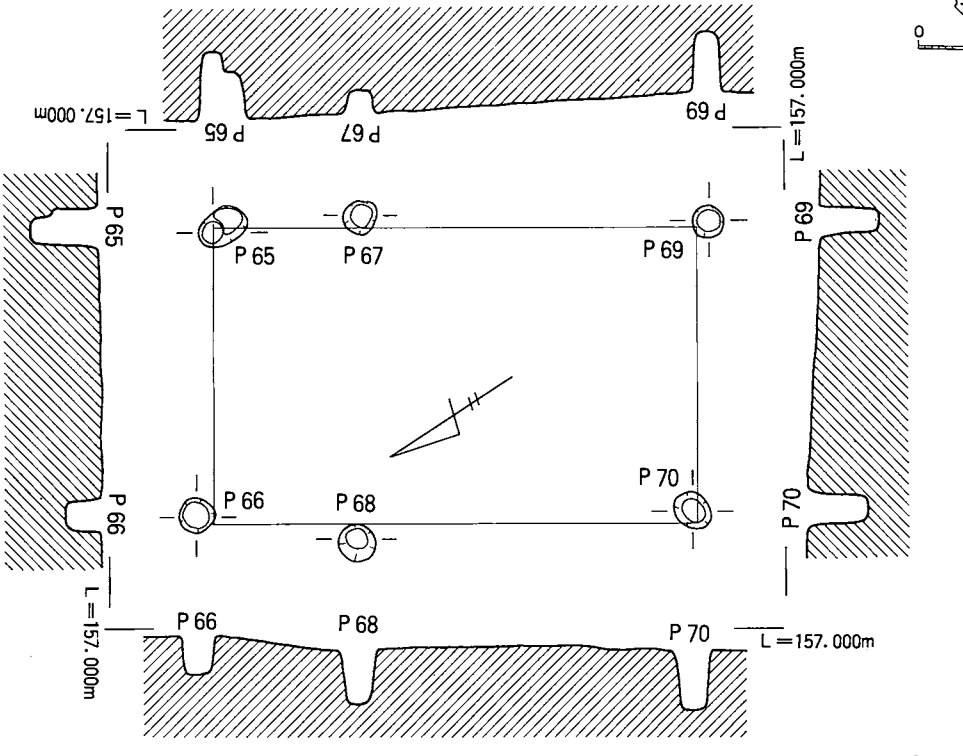
ＳＢⅡ－１０

桁行4.0ｍ、梁行妻2.4ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ33°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ65～Ｐ67～Ｐ69で1.2ｍ＋2.8ｍ、Ｐ66～Ｐ68～Ｐ70で1.2ｍ＋2.8ｍ、梁行妻Ｐ65～Ｐ66で2.4ｍ、Ｐ69～Ｐ70で2.4ｍを測る。Ｐ65は二段掘りになっている。柱列は、桁行Ｐ65～Ｐ67～Ｐ69を除いて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は暗褐色土である。Ｐ66から古銭の元豊通寶（18）が出土している。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
65～67	1.2	4.0	65～66	2.4	2.4	65	55	43	29
67～69	2.8					66	32	32	27
			69～70	2.4	2.4	67	19	30	28
66～68	1.2	4.0				68	44	32	31
68～70	2.8					69	47	26	26
						70	50	34	26

第11表　ＳＢⅡ－10計測表





第19図　ＳＢⅡ－10実測図

第３節　Ⅲ郭の調査結果

平場は三日月の形状を呈する。長軸の長さは47ｍで、南北方向に主軸を持ち、中央部の東西幅は21ｍを測り、東縁の中央部が内側にややくびれる。平場は西縁寄りがやや高く、標高155.5ｍラインが南北方向に細長く巡る。平場の範囲は長さ22ｍ、幅７ｍで、これより北東側と南東側へ緩傾斜地となる。

表土の厚さは0.4ｍで、下層土は褐色土層（縄文時代早期の遺物包含層）であった。柱穴はこの土層を掘り込んでいた。

郭の斜面部は、裾部との比高が10ｍを測る急斜面の東側を除き、三方は堀切に囲まれている。

Ⅲ郭検出の建築址

Ⅲ郭から計18棟の建築址が検出された。内訳は郭の北側寄りから10棟、中央部寄りから３棟、南側寄りから５棟である。

建築址は、２間×２間（ＳＢⅢ—11・12・13・18・20・22・25・26・27・28）と２間×１間（ＳＢⅢ—14・16・17・19・21・23・24）と１間×２間（ＳＢⅢ—15）に大別されるが、ＳＢⅢ—12は桁行に補助柱が付き、ＳＢⅢ—13・15・18・20・22・26・27は梁行妻の中央柱が不明である。さらに、ＳＢⅢ—21・25は桁行の中央柱が不明で、ＳＢⅢ—24は桁行の中央柱が２本

第20図　Ⅲ郭遺構実測図

に分かれている。ＳＢⅢ—28は梁行妻と桁行の中央柱が不明である。

規模は、ＳＢⅢ—25が最大で、桁行6.0ｍ×梁行妻4.5ｍを測り、最小はＳＢⅢ—15の桁行3.0ｍ×梁行妻2.4ｍである。

桁行の方位はＳＢⅢ—11・16・17・21がＮ60°Ｗ～Ｎ67°Ｗで、ＳＢⅢ—12・13がＮ18°Ｅ～Ｎ24°Ｅで、ＳＢⅢ—14・18・19がＮ30°Ｅ～Ｎ39°Ｅで、ＳＢⅢ—22・27・28がＮ70°Ｅ～Ｎ74°Ｅで、ＳＢⅢ—24・25・26がＮ76°Ｗ～Ｎ80°Ｗでまとまりがあった。

ＳＢⅢ—11・12・23・25からは土師器Ⅲ（３・６・１・７）、ＳＢⅢ—23・25からは土師器坏（２・５）、ＳＢⅢ—13・16からは白磁碗（13・16）、ＳＢⅢ—14からは青白磁碗（14）、ＳＢⅢ—15・25からは青磁碗（15・12）、ＳＢⅢ—25からは土錘（17）、ＳＢⅢ—17・21・22からは古銭（19・21・20）が出土した。さらに、ＳＢⅢ—17より東側へわずかに離れた柱穴から取瓶（８）が出土した。

建築址 NO.	規　模	規　格	桁行方位	備　考
ＳＢⅢ—11	5.4m×2.6m	２間×２間	Ｎ67°Ｗ	
ＳＢⅢ—12	4.0m×2.4m	２間×２間	Ｎ18°Ｅ	桁行に補助柱が付く
ＳＢⅢ—13	4.5m×2.6m	２間×２間	Ｎ24°Ｅ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅢ—14	4.5m×2.4m	２間×１間	Ｎ39°Ｅ	
ＳＢⅢ—15	3.0m×2.4m	１間×２間	Ｎ45°Ｅ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅢ—16	3.6m×3.0m	２間×１間	Ｎ63°Ｗ	
ＳＢⅢ—17	4.5m×2.8m	２間×１間	Ｎ61°Ｗ	
ＳＢⅢ—18	3.0m×2.6m	２間×２間	Ｎ30°Ｅ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅢ—19	3.6m×2.4m	２間×１間	Ｎ38°Ｅ	
ＳＢⅢ—20	4.4m×2.7m	２間×２間	Ｎ45°Ｗ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅢ—21	3.6m×2.4m	２間×１間	Ｎ60°Ｗ	桁行の中央柱が不明
ＳＢⅢ—22	4.2m×2.4m	２間×２間	Ｎ74°Ｅ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅢ—23	4.2m×3.0m	２間×１間	Ｎ33°Ｗ	
ＳＢⅢ—24	4.0m×2.2m	２間×１間	Ｎ80°Ｗ	桁行の中央柱が２本
ＳＢⅢ—25	6.0m×4.5m	２間×２間	Ｎ78°Ｗ	桁行の中央柱が不明
ＳＢⅢ—26	5.2m×3.8m	２間×２間	Ｎ76°Ｗ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅢ—27	4.2m×2.4m	２間×２間	Ｎ70°Ｅ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅢ—28	3.6m×2.7m	２間×２間	Ｎ70°Ｅ	梁行妻・桁行中央柱不明

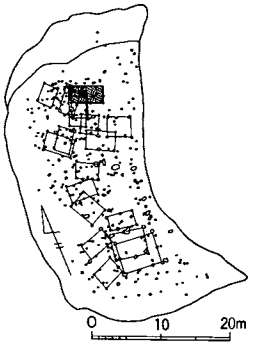
第12表　Ⅲ郭検出の建築址一覧表

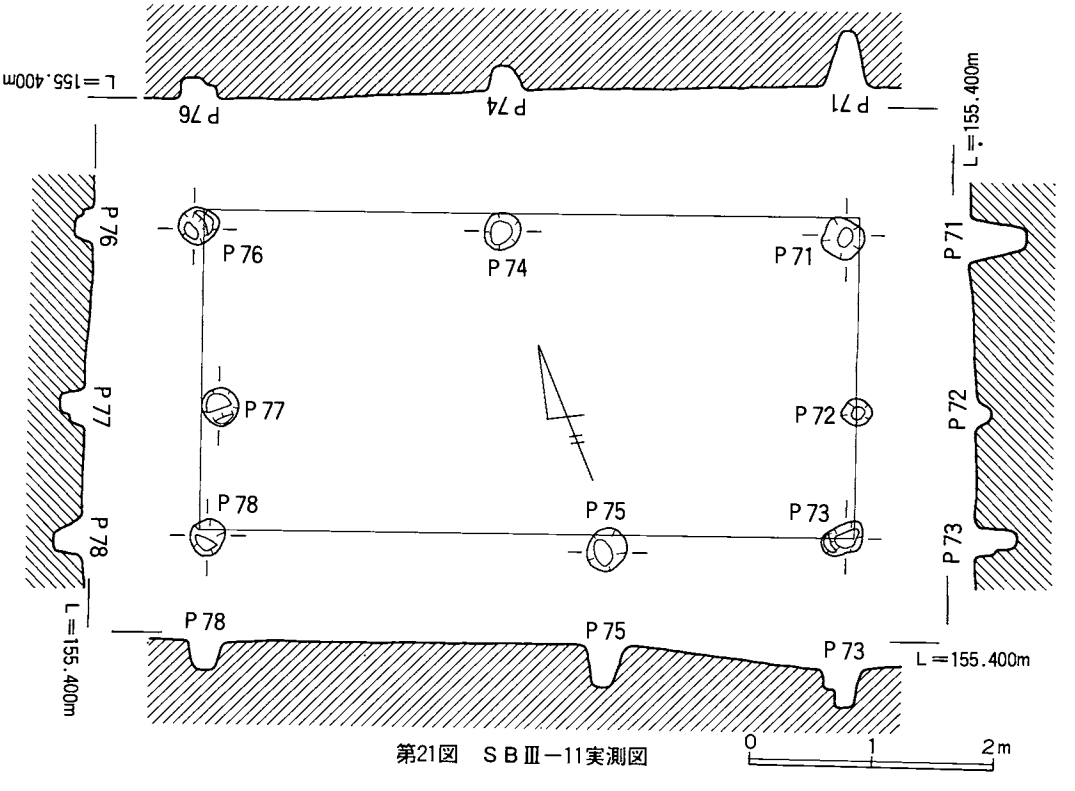
ＳＢⅢ－１１

桁行5.4ｍ、梁行妻2.6ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ67°Ｗである。柱間寸法は、桁行Ｐ71～Ｐ74～Ｐ76で3.0ｍ＋2.4ｍ、Ｐ73～Ｐ75～Ｐ78で2.0ｍ＋3.4ｍ、梁行妻Ｐ71～Ｐ72～Ｐ73で1.6ｍ＋1.0ｍ、Ｐ76～Ｐ77～Ｐ78で1.6ｍ＋1.0ｍを測る。柱穴の大きさはＰ73が最大（37×22cm）で、Ｐ72が最小（25×22cm）である。深さはＰ71が最深（46cm）で、Ｐ72が最浅（10cm）である。柱列はすべて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。Ｐ76から土師器皿（３）が出土している。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
71～74	3.0	5.4	71～72	1.6	2.6	71	46	36	32
74～76	2.4		72～73	1.0		72	10	25	22
						73	30	37	22
73～75	2.0	5.4	76～77	1.6	2.6	74	18	32	30
75～78	3.4		77～78	1.0		75	34	36	32
						76	16	34	30
						77	20	32	30
						78	22	32	28

第13表　ＳＢⅢ－11計測表





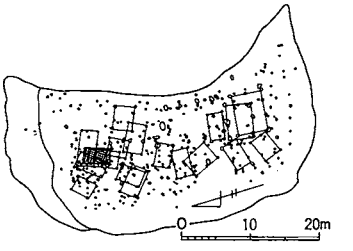
第21図　ＳＢⅢ－11実測図

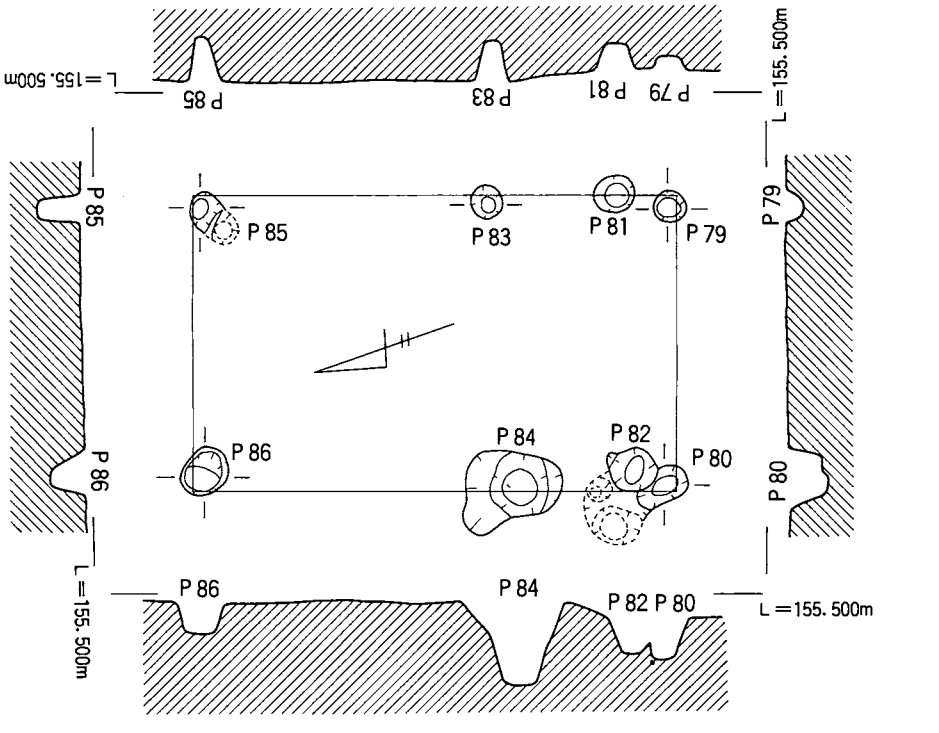
ＳＢⅢ－１２

桁行4.0ｍ、梁行妻2.4ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ18°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ79～Ｐ83～Ｐ85で1.6ｍ＋2.4ｍ、Ｐ80～Ｐ84～Ｐ86で1.6ｍ＋2.4ｍ、梁行妻Ｐ80～Ｐ79で2.4ｍ、Ｐ85～Ｐ86で2.4ｍを測る。両桁行では、Ｐ79から0.5ｍの所とＰ80から0.5ｍの所に補助的な柱穴がある。柱穴の大きさは、Ｐ84が最大（84×52cm）で、Ｐ79が最小（28×26cm）である。深さはＰ84が最深（68cm）で、Ｐ79が最浅（14cm）である。柱列は、梁行妻Ｐ79～Ｐ80を除いて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。Ｐ86から土師器皿（６）と、Ｐ79から小礫が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
79～81	0.5	4.0	79～80	2.4	2.4	79	14	28	26
81～83	1.1					80	32	46	27
83～85	2.4		85～86	2.4	2.4	81	20	35	31
						82	29	43	36
80～82	0.5	4.0				83	32	28	27
82～84	1.1					84	68	84	52
84～86	2.4					85	34	34	24
						86	26	42	34

第14表　ＳＢⅢ－12計測表





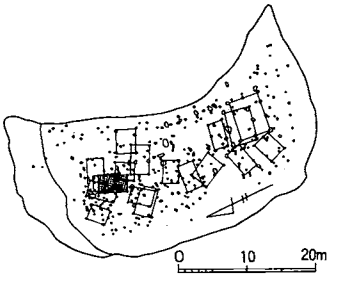
第22図　ＳＢⅢ－12実測図

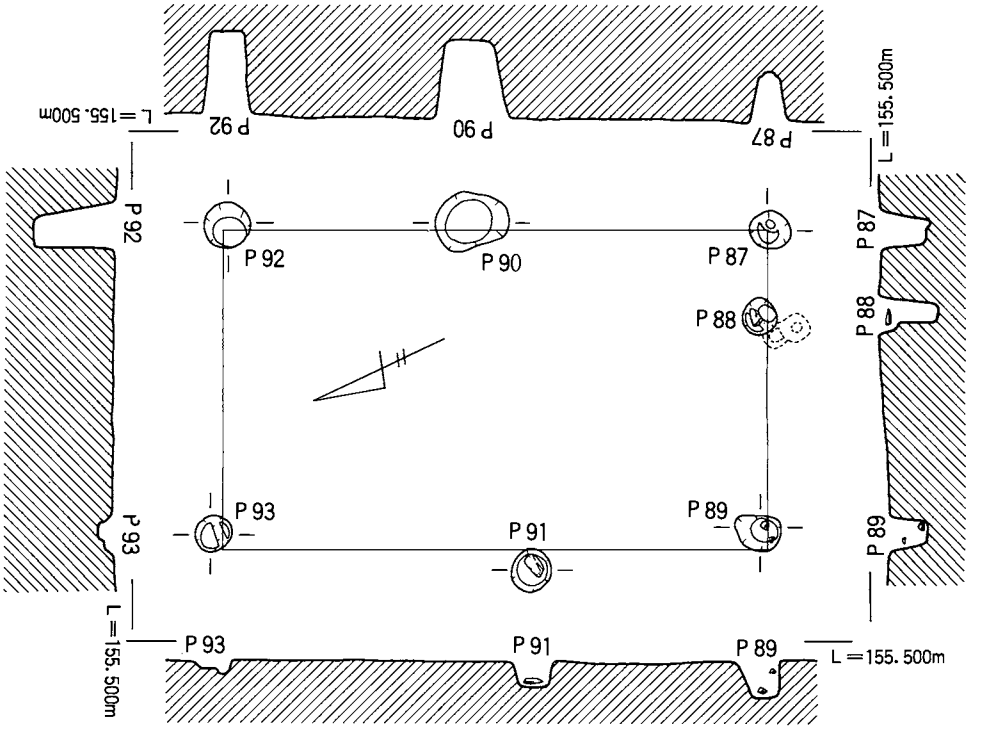
ＳＢⅢ－１３

桁行4.5ｍ、梁行妻2.6ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ24°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ87～Ｐ90～Ｐ92で2.5ｍ＋2.0ｍ、Ｐ89～Ｐ91～Ｐ93で2.0ｍ＋2.5ｍ。梁行妻Ｐ87～Ｐ88～Ｐ89で0.8ｍ＋1.8ｍ、Ｐ92～Ｐ93は中央柱が不明で、全長2.6ｍを測る。柱穴の大きさは、Ｐ90が最大（62×44cm）で、Ｐ88が最小（31×28cm）である。深さはＰ92が最深（66cm）で、Ｐ93が最浅（12cm）である。柱列は桁行Ｐ89～Ｐ91～Ｐ93が千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。Ｐ89から白磁の碗（13）と粘土の塊が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
87～90	2.5	4.5	87～88	0.8	2.6	87	38	34	31
90～92	2.0		88～89	1.8		88	48	31	28
						89	30	39	29
89～91	2.0	4.5	92～93	2.6	2.6	90	62	62	44
91～93	2.5					91	20	34	32
						92	66	38	38
						93	12	32	28

第15表　ＳＢⅢ－13計測表





第23図　ＳＢⅢ－13実測図

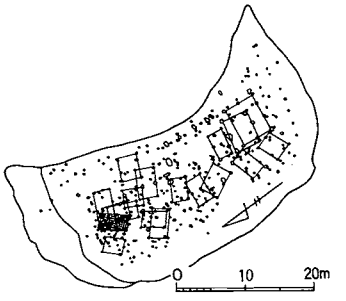
0　1　2m

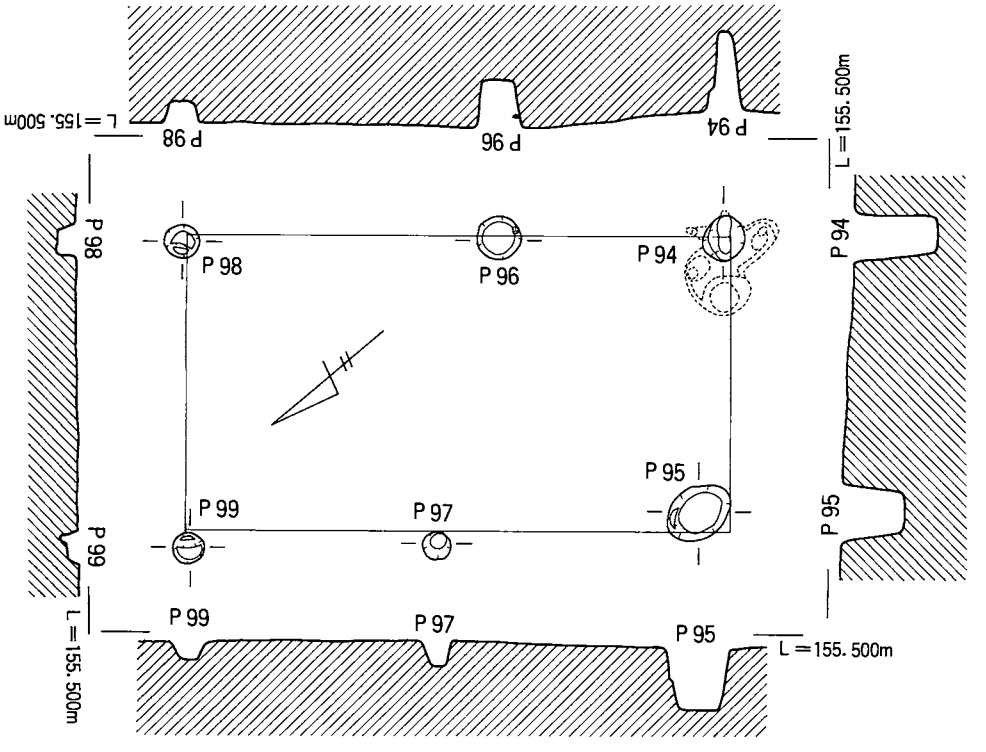
ＳＢⅢ－１４

桁行4.5ｍ、梁行妻2.4ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ39°Ｅである。柱間寸法は、桁行Ｐ94～Ｐ96～Ｐ98で2.0ｍ＋2.5ｍ、Ｐ95～Ｐ97～Ｐ99で2.5ｍ＋2.0ｍ、梁行妻Ｐ94～Ｐ95で2.4ｍ、Ｐ98～Ｐ99で2.4ｍを測る。柱穴の大きさは、Ｐ95が最大（58×42cm）で、Ｐ97が最小（24×23cm）である。深さはＰ94が最深（68cm）で、Ｐ99が最浅（14cm）である。柱列は桁行Ｐ95～Ｐ97～Ｐ99とＰ94～Ｐ95が千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。Ｐ99から土師器皿の細片、Ｐ95から青白磁の碗（14）が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
94～96	2.0	4.5	94～95	2.4	2.4	94	68	37	35
96～98	2.5					95	50	58	42
			98～99	2.4	2.4	96	38	38	36
95～97	2.5	4.5				97	20	24	23
97～99	2.0					98	16	29	27
						99	14	26	26

第16表　ＳＢⅢ－14計測表





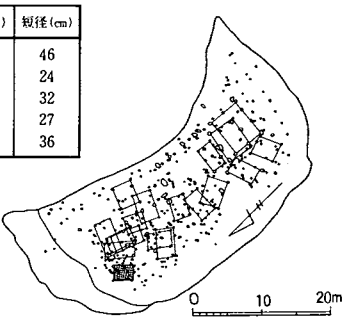
第24図　ＳＢⅢ－14実測図

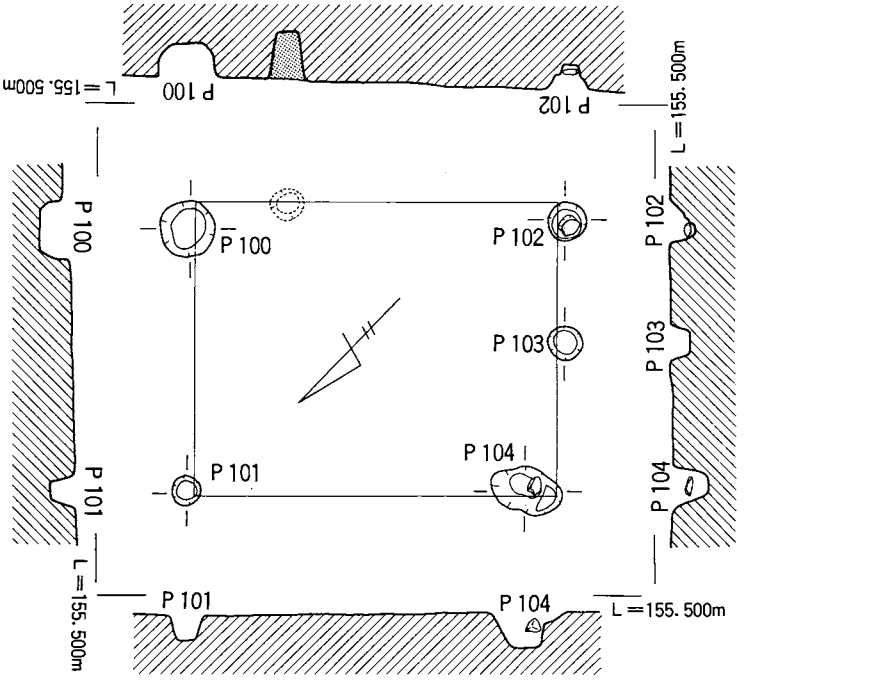
ＳＢⅢ－１５

桁行3.0ｍ、梁行妻2.4ｍの１間×２間の建物で、方位はＮ45°Ｅである。柱間寸法は、桁行P101～P104で3.0ｍ、P100～P102で3.0ｍ。梁行妻P102～P103～P104で1.2ｍ＋1.2ｍとなる。P100～P101は中央柱が不明で、全長2.4ｍを測る。柱穴の大きさは、P104が最大（61×36cm）で、P101が最小（26×24cm）である。深さはP104が最深（30cm）で、P103が最浅（16cm）である。柱列は梁行妻P102～P103～P104が千鳥の並びとなる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P100から青磁碗の底部（15）、P102とP104から根固め石が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
100～102	3.0	3.0	100～101	2.4	2.4	100	26	47	46
						101	20	26	24
101～104	3.0	3.0	102～103	1.2	2.4	102	20	32	32
			103～104	1.2		103	16	29	27
						104	30	61	36

第17表　ＳＢⅢ－15計測表





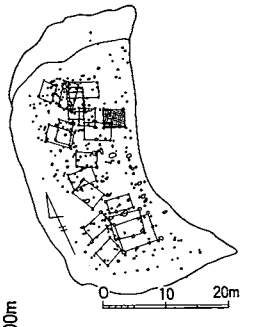
第25図　ＳＢⅢ－15実測図

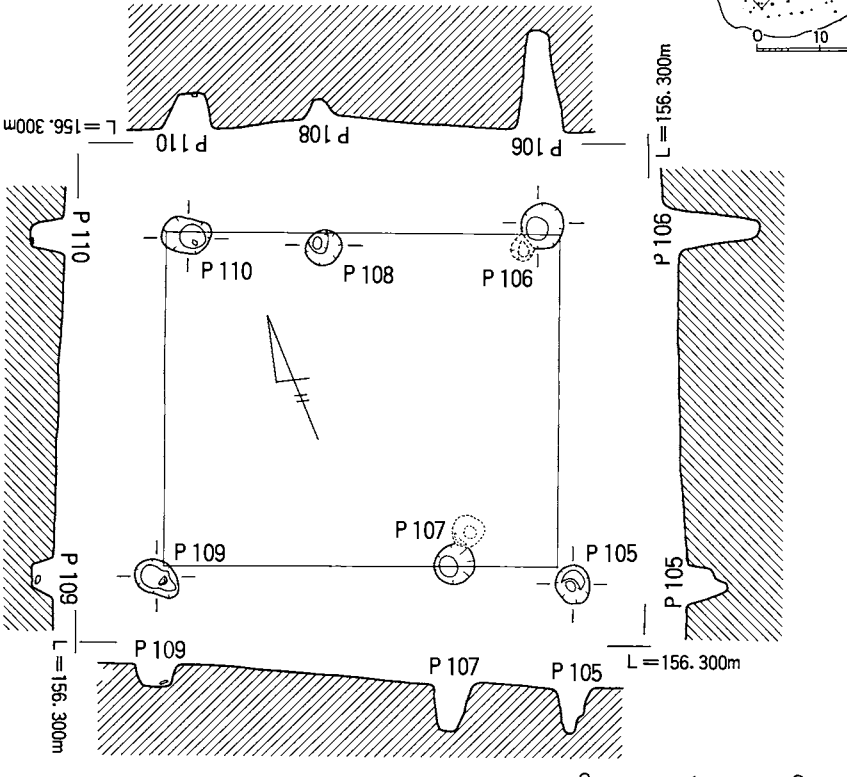
ＳＢⅢ－１６

桁行3.6ｍ、梁行妻3.0ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ63°Ｗである。柱間寸法は、桁行P106～P108～P110で2.2ｍ＋1.4ｍ、P105～P107～P109で1.0ｍ＋2.6ｍ、梁行妻P105～P106で3.0ｍ、P109～P110で3.0ｍを測る。柱穴の大きさは、P110が最大（46×36cm）で、P108が最小（35×32cm）である。深さはP106が最深（88cm）で、P108が最浅（16cm）である。柱列はすべて千鳥の並びになる。埋土は褐灰色土であるが、P108・P106には黄褐色土が混入している。P110から白磁の口縁部（16）、P109から小礫が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
105～107	1.0	3.6	105～106	3.0	3.0	105	36	36	32
107～109	2.6					106	88	41	39
			109～110	3.0	3.0	107	42	38	35
106～108	2.2	3.6				108	16	35	32
108～110	1.4					109	20	44	30
						110	32	46	36

第18表　ＳＢⅢ－16計測表





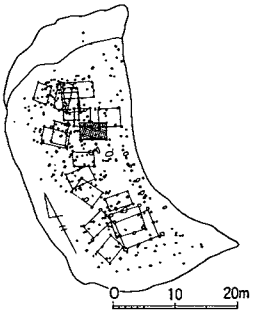
第26図　ＳＢⅢ－16実測図

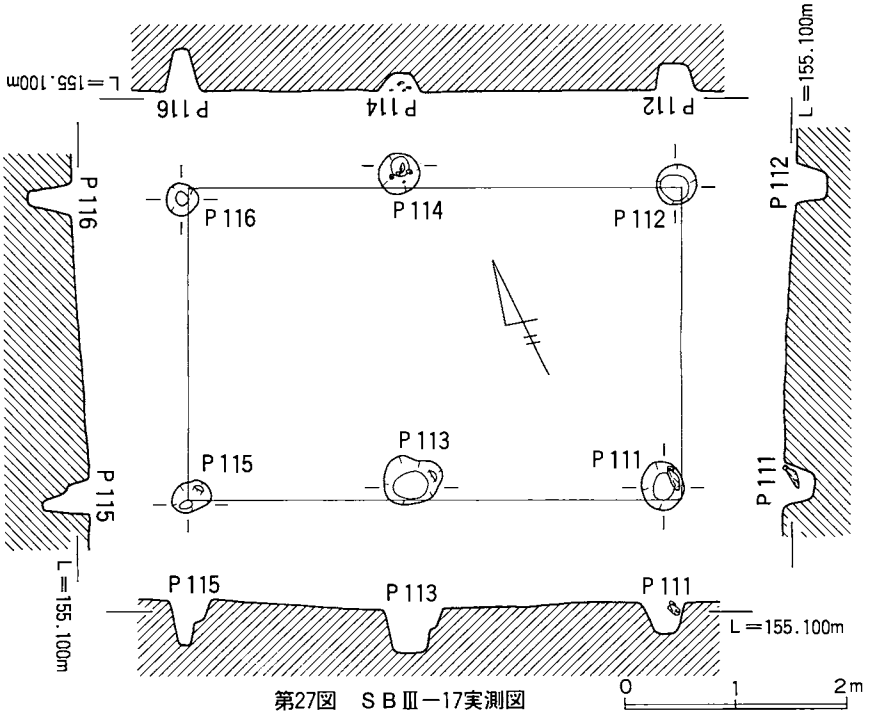
ＳＢⅢ－１７

桁行4.5ｍ、梁行妻2.8ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ61°Ｗである。柱間寸法は、桁行P112～P114～P116で2.5ｍ＋2.0ｍ、P111～P113～P115で2.5ｍ＋2.0ｍ、梁行妻P111～P112で2.8ｍ、P115～P116で2.8ｍを測る。柱穴の大きさは、P113が最大（57×42cm）で、P116が最小（29×29cm）である。深さはP113とP115が最深（40cm）で、P114が最浅（16cm）である。柱列は梁行妻P115～P116を除いて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P114から古銭の嘉定通寶（19）と、P111から根固め石が出土した。

Pit No.	桁行柱間（m）	桁行間（m）	Pit No.	梁間柱間（m）	梁間間（m）	P	深さ（cm）	長径（cm）	短径（cm）
111～113	2.5	4.5	111～112	2.8	2.8	111	28	44	38
113～115	2.0					112	28	38	36
			115～116	2.8	2.8	113	40	57	42
112～114	2.5	4.5				114	16	38	37
114～116	2.0					115	40	37	26
						116	38	29	29

第19表　ＳＢⅢ－17計測表





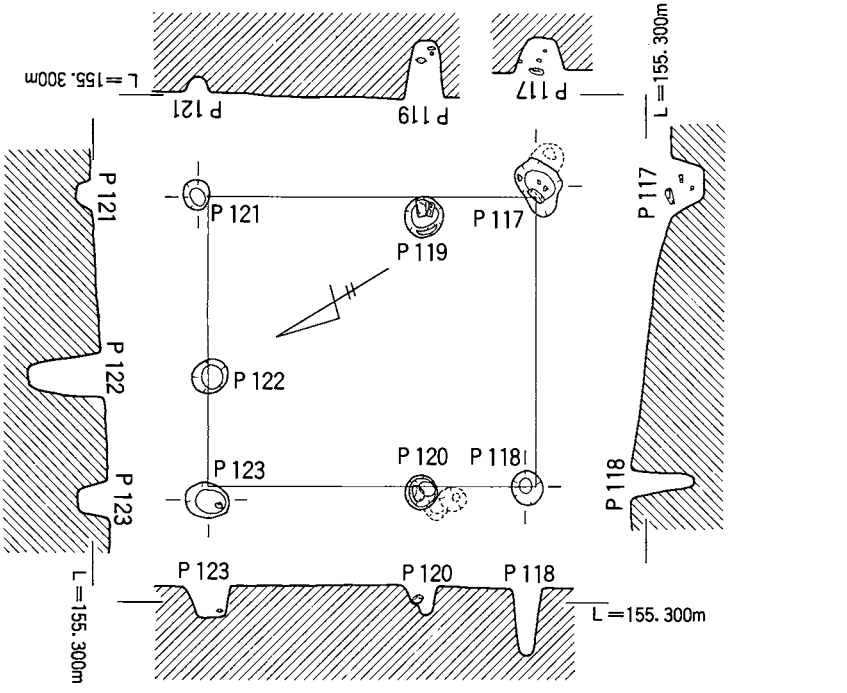
第27図　ＳＢⅢ－17実測図

ＳＢⅢ－１８

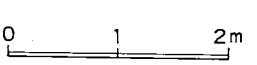
桁行3.0ｍ、梁行妻2.6ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ30°Ｅである。柱間寸法は、桁行P117～P119～P121で1.0ｍ＋2.0ｍ、P118～P120～P123で1.0ｍ＋2.0ｍ。梁行妻P121～P122～P123で1.6ｍ＋1.0ｍ、P117～P118は中央柱が不明で、全長2.6ｍを測る。柱穴の大きさは、P117が最大（55×36cm）で、P121が最小（28×24cm）である。深さはP122が最深（66cm）で、P121が最浅（14cm）である。柱列はすべて千鳥の並びとなる。柱穴の埋土はP123が黒褐色土、P121が黄褐色土で他は褐灰色土である。P117からは須恵器の細片と炭化物が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
117～119	1.0	3.0	117～118	2.6	2.6	117	28	55	36
119～121	2.0					118	60	32	29
			121～122	1.6	2.6	119	50	38	36
118～120	1.0	3.0	122～123	1.0		120	26	31	29
120～123	2.0					121	14	28	24
						122	66	34	30
						123	28	41	32

第20表　ＳＢⅢ－18計測表



第28図　ＳＢⅢ－18実測図

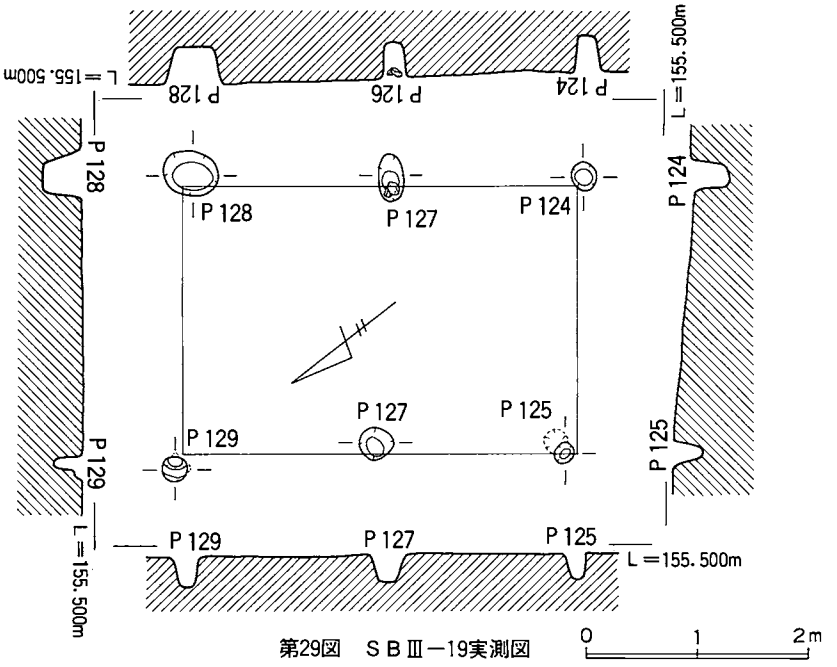


ＳＢⅢ－１９

桁行3.6ｍ、梁行妻2.4ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ38°Ｅである。柱間寸法は、桁行P124～P126～P128で1.6ｍ＋2.0ｍ、P125～P127～P129で2.0ｍ＋1.6ｍ、梁行妻P124～P125で2.4ｍ、P128～P129で2.4ｍを測る。柱穴の大きさは、P128が最大（51×40cm）で、P125が最小（19×17cm）である。深さはP128が最深（34cm）で、P127が最浅（24cm）である。柱列は桁行P124～P126～P128を除いて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P126からは根固め石が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
124～126	1.6	3.6	124～125	2.4	2.4	124	32	27	23
126～128	2.0					125	26	19	17
			128～129	2.4	2.4	126	32	42	23
125～127	2.0	3.6				127	24	31	30
127～129	1.6					128	34	51	40
						129	26	22	22

第21表　ＳＢⅢ－19計測表



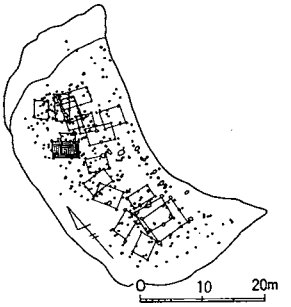
第29図　ＳＢⅢ－19実測図

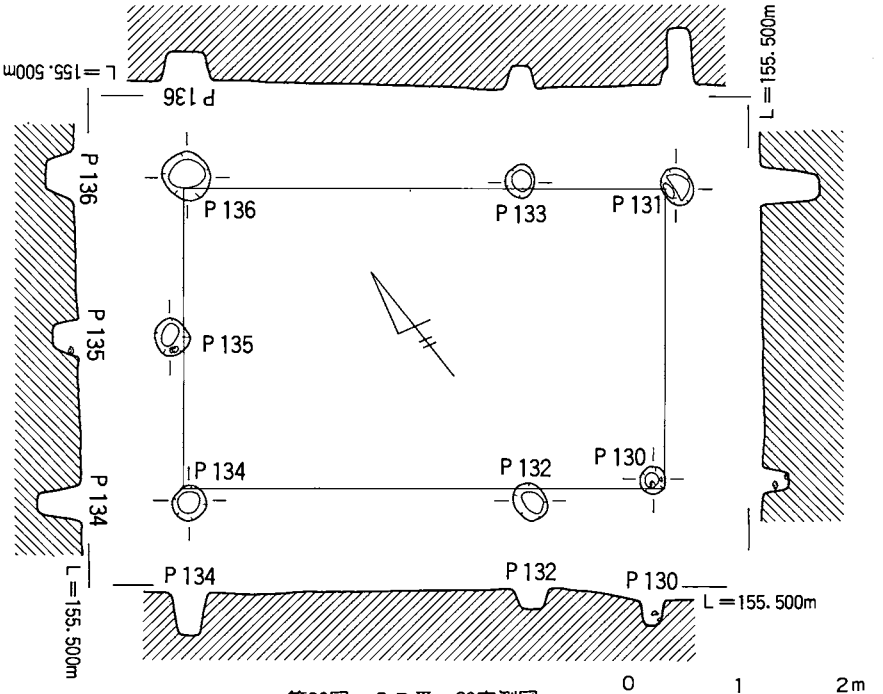
ＳＢⅢ－２０

桁行4.4ｍ、梁行妻2.7ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ45°Ｗである。柱間寸法は、桁行P131～P133～P136で1.4ｍ＋3.0ｍ、P130～P132～P134で1.4ｍ＋3.0ｍ、梁行妻P134～P135～P136で1.3ｍ＋1.4ｍ、P130～P131は中央柱が不明で、全長2.7ｍを測る。柱穴の大きさは、P136が最大（46×45cm）で、P130が最小（25×23cm）である。深さはP131が最深（52cm）で、P132が最浅（18cm）である。柱列は桁行P131～P133～P136を除いて千鳥の並びとなる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P135・P130からは小礫が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
130～132	1.4	4.4	130～131	2.7	2.7	130	22	25	23
132～134	3.0					131	52	36	28
			134～135	1.3	2.7	132	18	36	29
131～133	1.4	4.4	135～136	1.4		133	20	31	28
133～136	3.0					134	38	32	28
						135	24	34	29
						136	26	46	45

第22表　ＳＢⅢ－20計測表





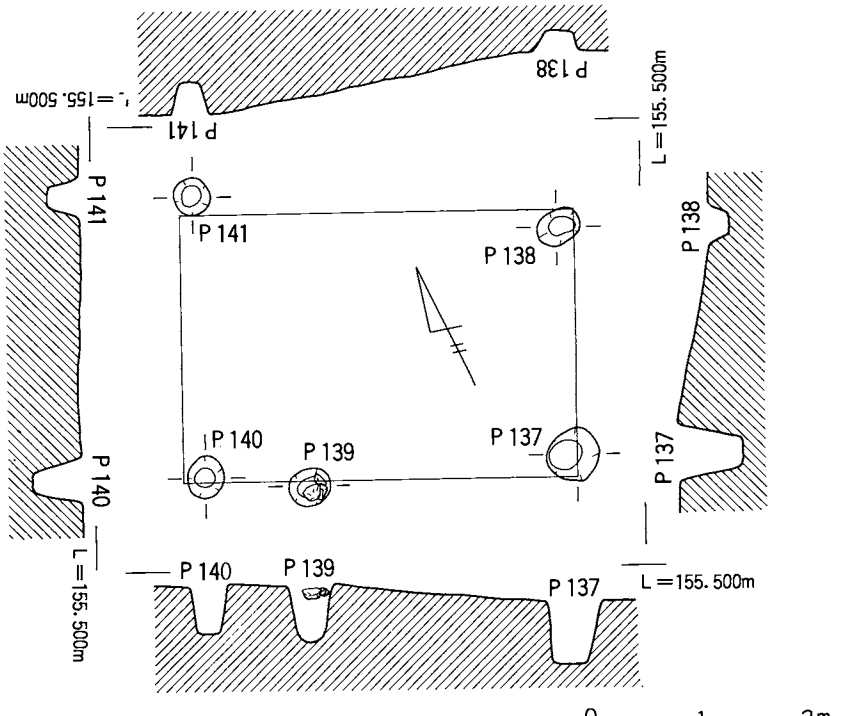
第30図　ＳＢⅢ－20実測図

ＳＢⅢ－２１

桁行3.6ｍ、梁行妻2.4ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ60°Ｗである。柱間寸法は、桁行P137～P139～P140で2.4ｍ＋1.2ｍ、P138～P141は中央柱が不明で、全長3.6ｍを測る。梁行妻はP137～P138で2.4ｍ、P140～P141で2.4ｍを測る。柱穴の大きさはP137が最大（48×45cm）でP141が最小（35×33cm）である。深さはP139が最深（50cm）で、P138が最浅（18cm）である。柱列はすべて千鳥の並びになる。柱穴の埋土はP137が黄褐色土で他は褐灰色土である。P141から古銭の洪武通寶（21）が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
137～139	2.4	3.6	137～138	2.4	2.4	137	58	48	45
139～140	1.2					138	18	42	30
			140～141	2.4	2.4	139	50	38	33
138～141	3.6	3.6				140	44	38	32
						141	28	35	33

第23表　ＳＢⅢ－21計測表



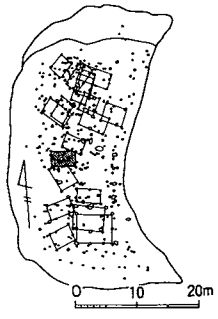
第31図　ＳＢⅢ－21実測図

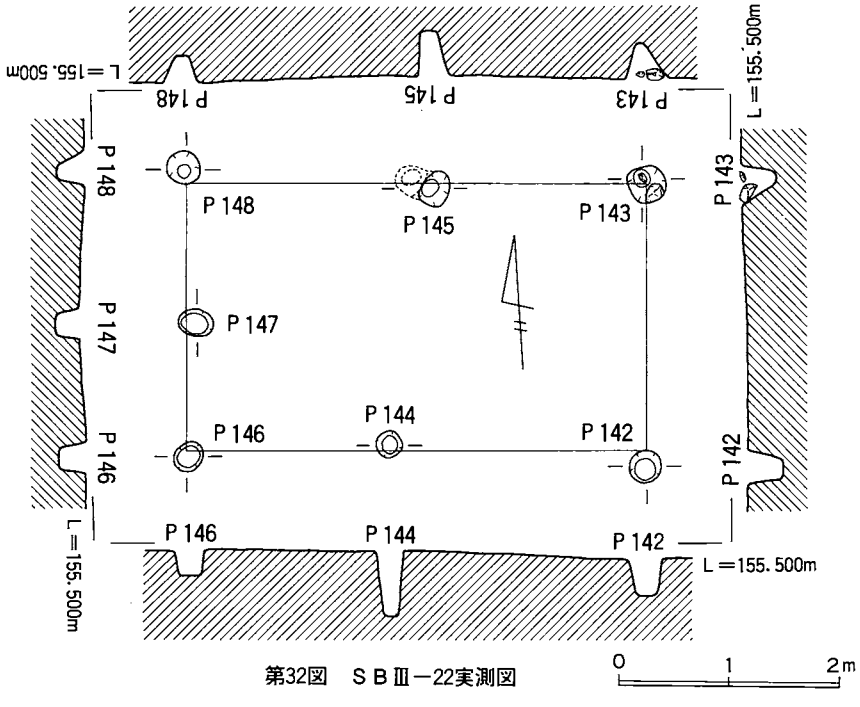
ＳＢⅢ－２２

桁行4.2ｍ、梁行妻2.4ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ74°Ｅである。柱間寸法は、桁行P143～P145～P148で2.0ｍ＋2.2ｍ、P142～P144～P146で2.2ｍ＋2.0ｍ、梁行妻P146～P147～P148で1.2ｍ＋1.2ｍ、P142～P143は中央柱が不明で、全長2.4ｍを測る。柱穴の大きさは、P143が最大（38×33cm）で、P144が最小（25×24cm）である。深さはP144が最深（58cm）で、P146とP147が最浅（22cm）である。柱列は梁行妻P142～P143を除いて千鳥の並びとなる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P148から古銭の聖元宗寶（20）と、P143から根固め石が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
142～144	2.2	) 4.2	142～143	2.4	2.4	142	34	30	29
144～146	2.0					143	30	38	33
			146～147	1.2	) 2.4	144	58	25	24
143～145	2.0	) 4.2	147～148	1.2		145	40	33	26
145～148	2.2					146	22	30	25
						147	22	32	24
						148	24	30	30

第24表　ＳＢⅢ－22計測表





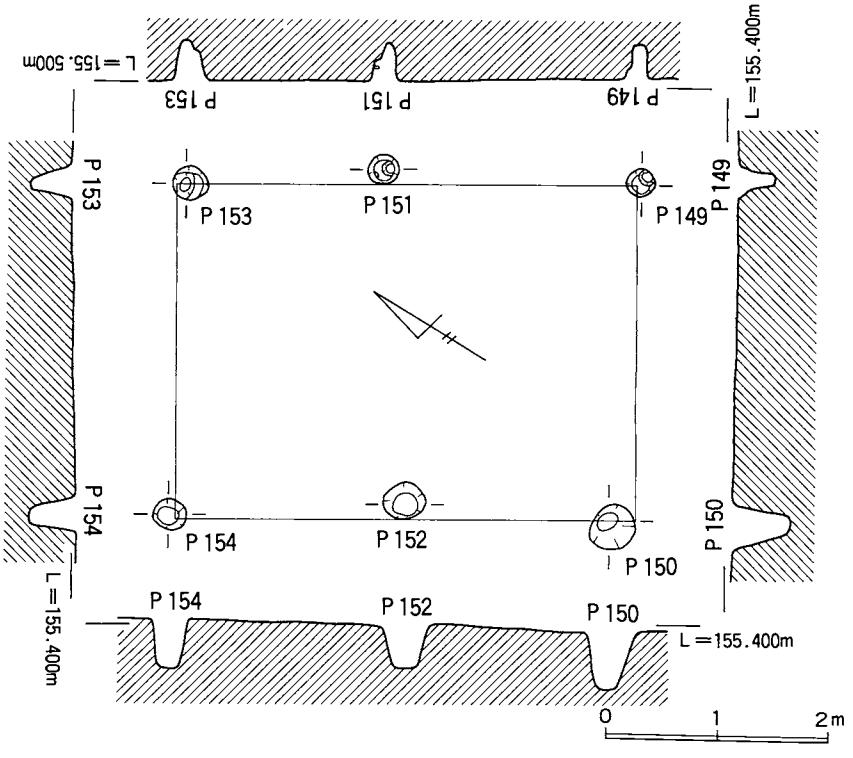
第32図　ＳＢⅢ－22実測図

ＳＢⅢ－２３

桁行4.2ｍ、梁行妻3.0ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ33°Ｗである。柱間寸法は、桁行P149～P150～P151で2.3ｍ＋1.9ｍ、P150～P152～P154で2.0ｍ＋2.2ｍ、梁行妻P149～P150で3.0ｍ、P153～P154で3.0ｍを測る。柱穴の大きさは、P150が最大（43×38㎝）で、P149が最小（27×25㎝）である。深さはP150が最深（52㎝）で、P149が最浅（32㎝）である。柱列はすべて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P152から土師器皿（１）、P153から土師器坏（２）、P151から縄文土器片が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
149～151	2.3	4.2	149～150	3.0	3.0	149	32	27	25
151～153	1.9					150	52	43	38
			153～154	3.0	3.0	151	34	30	26
150～152	2.0	4.2				152	38	40	32
152～154	2.2					153	36	32	31
						154	44	30	28

第25表　ＳＢⅢ－23計測表



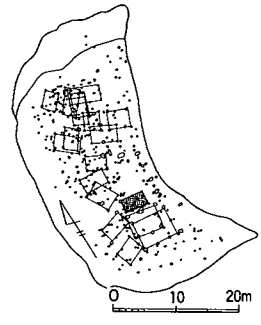
第33図　ＳＢⅢ－23実測図

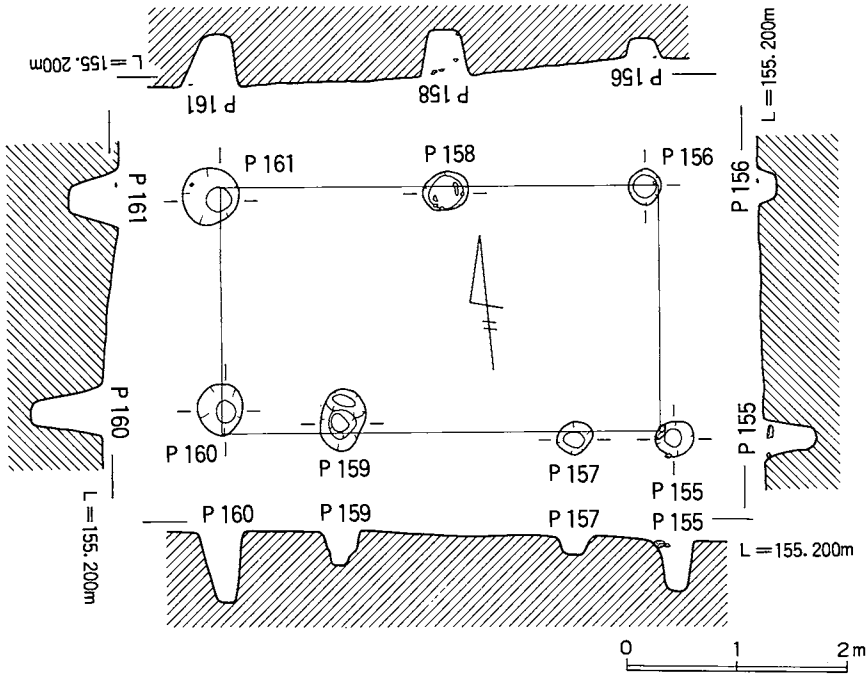
ＳＢⅢ－２４

桁行4.0ｍ、梁行妻2.2ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ80°Ｗである。柱間寸法は、桁行P156～P158～P161で2.0ｍ＋2.0ｍ、P155～P160は中央柱が２本に分かれP155～P157～P159～P160で0.9ｍ＋2.2ｍ＋0.9ｍとなり、梁行妻P155～P156で2.2ｍ、P160～P161で2.2ｍを測る。柱穴の大きさは、P159が最大（55×38㎝）で、P156が最小（32×30㎝）である。深さはP160が最深（64㎝）で、P156とP157が最浅（16㎝）である。柱列は、梁行妻P155～P156と桁行P155～P157～P159～P160が千鳥の並びとなる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P158から炭化物と滑石、P156からは土師器皿の細片、P159からは根固め石、P155からは小礫が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
155～157	0.9	4.0	155～156	2.2	2.2	155	44	36	33
157～159	2.2					156	16	32	30
159～160	0.9		160～161	2.2	2.2	157	16	34	28
						158	42	43	34
156～158	2.0	4.0				159	30	55	38
158～161	2.0					160	64	46	41
						161	44	52	50

第26表　ＳＢⅢ－24計測表





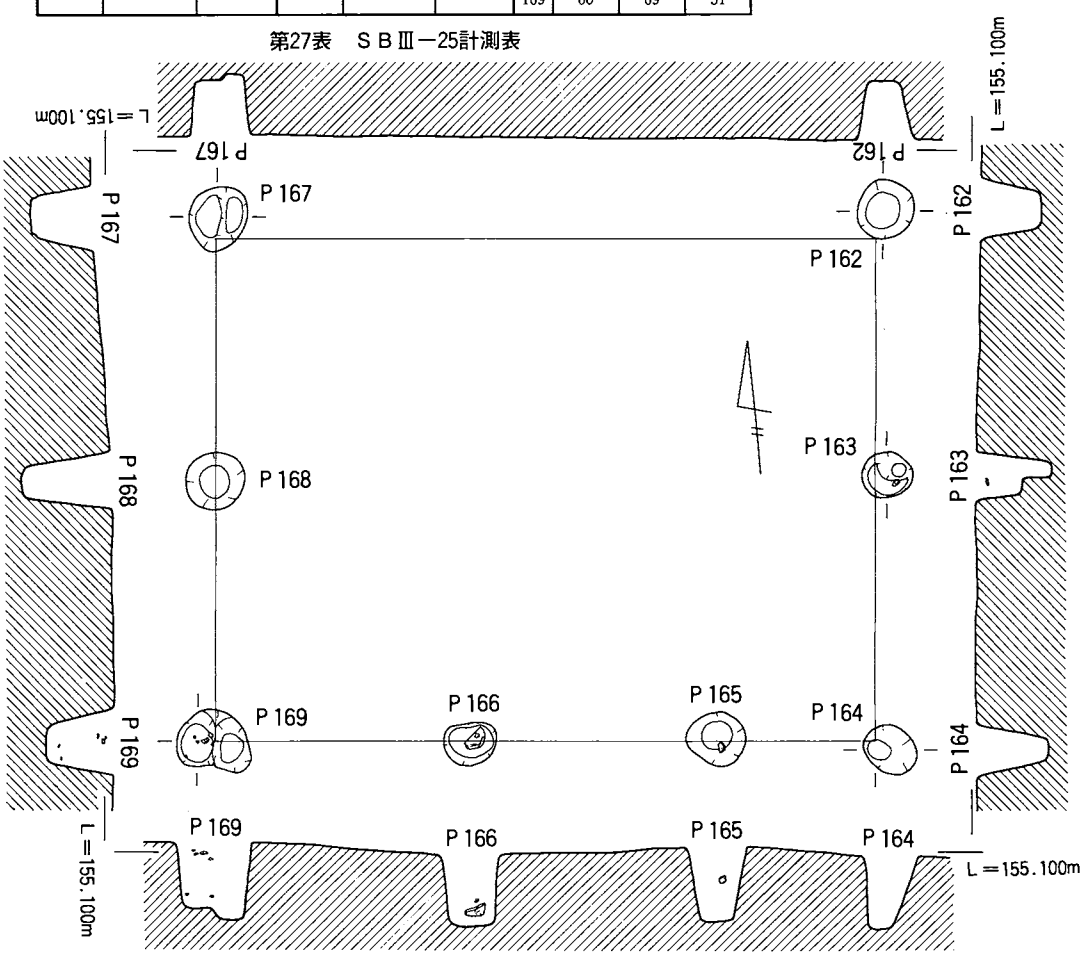
第34図　ＳＢⅢ－24実測図

ＳＢⅢ－２５

桁行6.0ｍ、梁行妻4.5ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ78°Ｗである。柱間寸法は、桁行P162～P167で6.0ｍ、P164～P169は中央柱が２本に分かれP164～P165～P166～P169で1.5ｍ＋2.2ｍ＋2.3ｍとなり、梁行妻P162～P163～P164で2.2ｍ＋2.3ｍ、P167～P168～P169で2.2＋2.3ｍを測る。柱穴の大きさはP169が最大（69×51cm）で、P163が最小（46×41cm）である。深さはP168が最深（78cm）で、P169が最浅（54cm）である。柱穴の埋土は褐灰色土である。P165から青磁碗（12）、P163からは土錘（17）、P166からは土師器坏（５）と焼けた根固め石、P168からは土師器皿（７）が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
162～167	6.0	6.0	162～163	2.2	4.5	162	54	55	50
			163～164	2.3		163	66	46	41
164～165	1.5					164	64	50	42
165～166	2.2	6.0	167～168	2.2	4.5	165	66	54	47
166～169	2.3		168～169	2.3		166	66	48	40
						167	56	61	51
						168	78	56	52
						169	60	69	51

第27表　ＳＢⅢ－25計測表

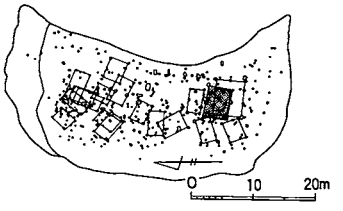


第35図　ＳＢⅢ－25実測図

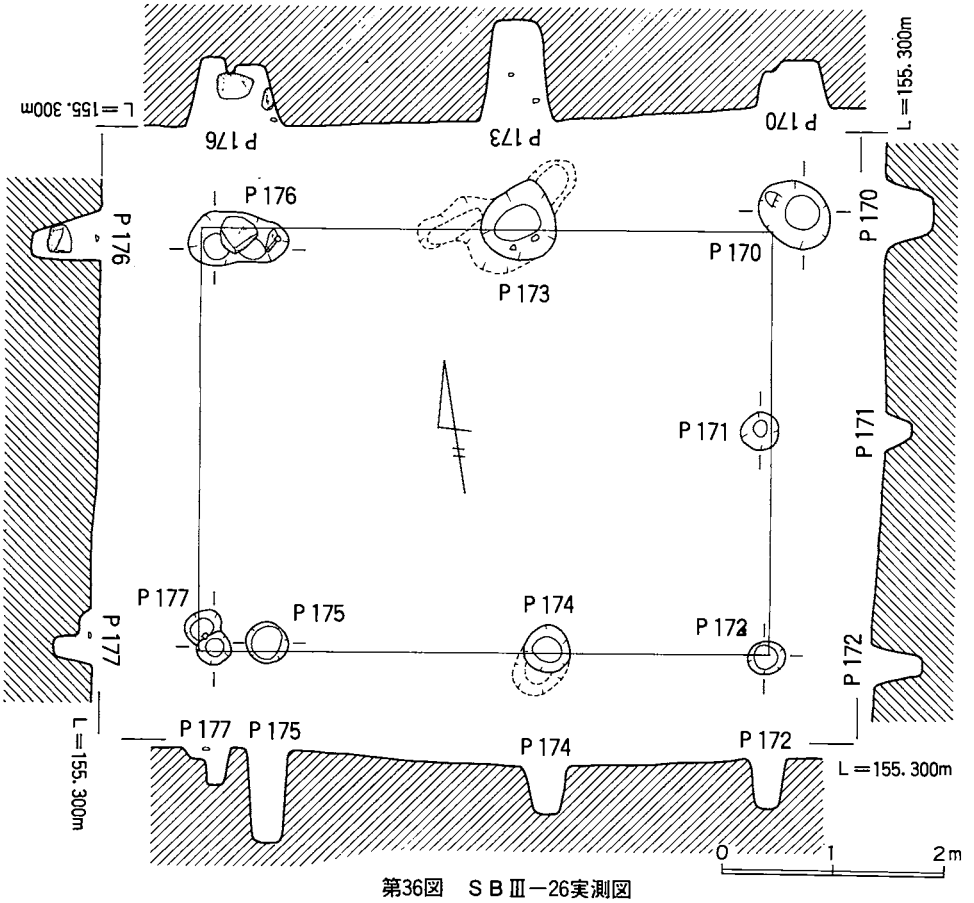
ＳＢⅢ－２６

桁行5.2m、梁行妻3.8mの２間×２間の建物で、方位はＮ76°Ｗである。柱間寸法は、桁行P170～P173～P176で2.0m＋3.2m、P172～P174～P177で2.0m＋3.2mを測るが、P176とP177については桁行の東側0.5mの所に補助的な柱穴が付く。梁行妻P170～P171～P172で1.8m＋2.0m、P176～P177は中央柱が不明で、全長3.8mを測る。柱穴の大きさは、P173が最大（73×65cm）で、P172が最小（35×30cm）である。深さはP173が最深（90cm）で、P171が最浅（22cm）である。柱列はすべて千鳥の並びとなる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P176から根固め石、P173とP177からは土師器皿の細片が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
170～173	2.0	5.2	170～171	1.8	3.8	170	42	70	56
173～176	3.2		171～172	2.0		171	22	35	35
						172	44	35	30
172～174	2.0	5.2	176～177	3.8	3.8	173	90	73	65
174～175	2.7					174	42	44	43
175～177	0.5					175	82	38	37
						176	62	90	45
						177	34	51	27



第28表　ＳＢⅢ－26計測表



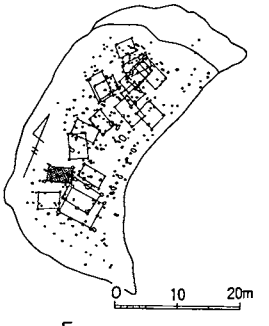
第36図　ＳＢⅢ－26実測図

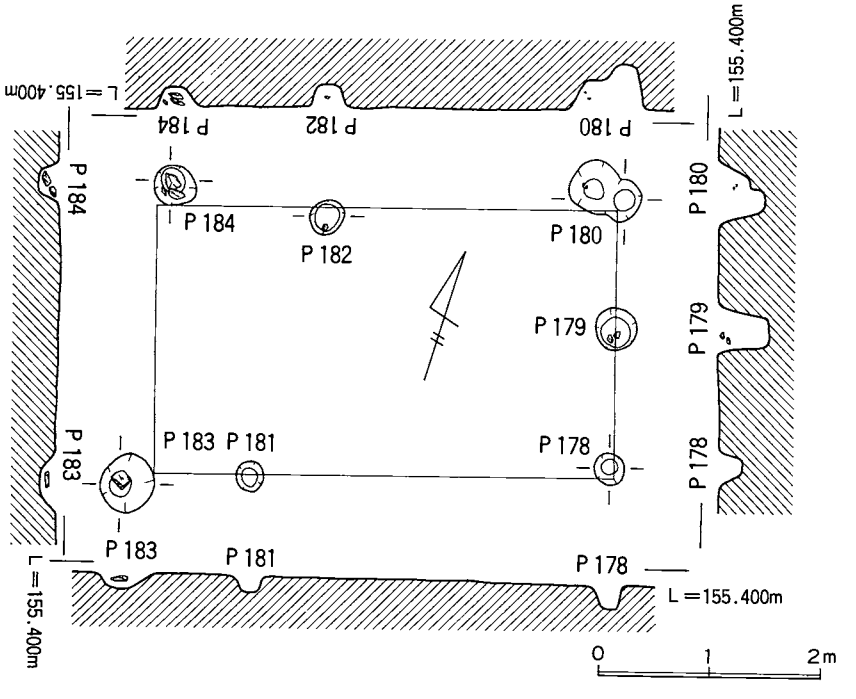
ＳＢⅢ－２７

桁行4.2m、梁行妻2.4mの２間×２間の建物で、方位はＮ70°Ｅである。柱間寸法は、桁行P180～P182～P184で2.6m＋1.6m、P178～P181～P183で3.2m＋1.0m、梁行妻P178～P179～P180で1.2m＋1.2m、P183～P184は中央柱が不明で全長2.4mを測る。柱穴の大きさは、P180が最大（68×35cm）で、P181が最小（28×25cm）である。深さはP179が最深（44cm）で、P181とP183が最浅（14cm）である。柱列は桁行P178～P179～P180を除いて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は暗褐色土である。P184から根固め石と炭化物、P182・P180・P179から土師器Ⅲの細片、P183からは根固め石が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
178～181	3.2	4.2	178～179	1.2	2.4	178	20	30	28
181～183	1.0		179～180	1.2		179	44	40	36
						180	40	68	35
180～182	2.6	4.2	183～184	2.4	2.4	181	14	28	25
182～184	1.6					182	20	32	28
						183	14	55	50
						184	18	40	38

第29表　ＳＢⅢ－27計測表





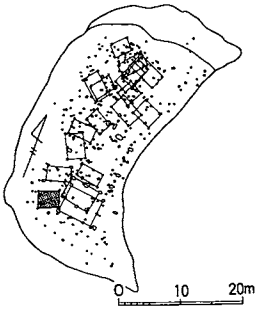
第37図　ＳＢⅢ－27実測図

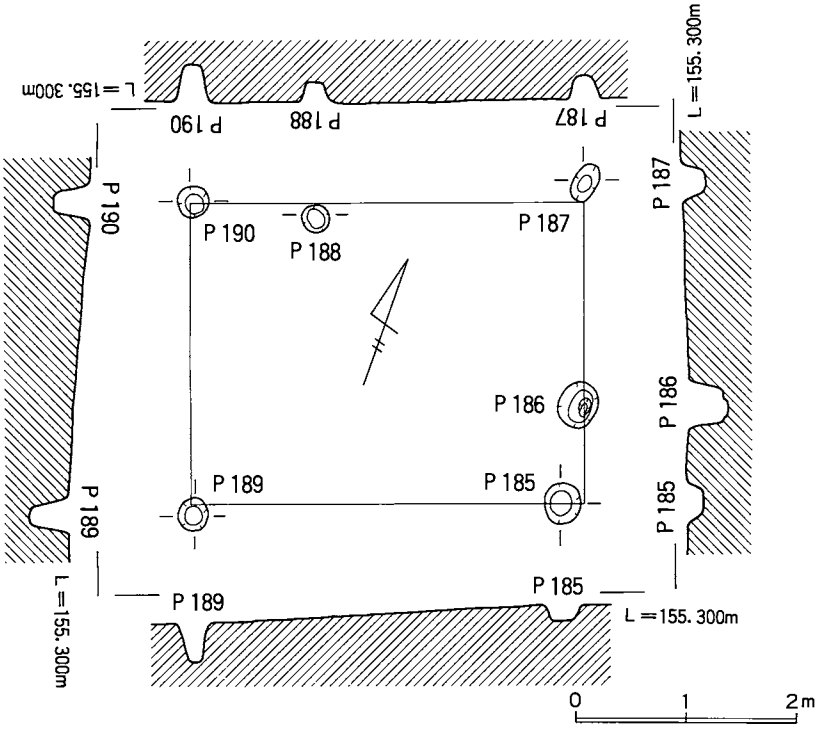
ＳＢⅢ－２８

桁行3.6ｍ、梁行妻2.7ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ70°Ｅである。柱間寸法は、桁行P187～P188～P190で2.4ｍ＋1.2ｍ、P185～P189は中央柱が不明で全長3.6ｍを測る。梁行妻P185～P186～P187で0.9ｍ＋1.8ｍ、P189～P190は桁行同様に中央柱が不明で全長2.7ｍを測る。柱穴の大きさは、P186が最大（41×34cm）で、P188が最小（26×26cm）である。深さはP186・Ｐ189・190が最深（34cm）で、P185が最浅（14cm）である。柱列は梁行妻P189～P190を除いて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
185～189	3.6	3.6	185～186	0.9	2.7	185	14	36	33
			186～187	1.8		186	34	41	34
187～188	2.4	3.6				187	20	36	22
188～190	1.2		189～190	2.7	2.7	188	18	26	26
						189	34	30	28
						190	34	30	29

第30表　ＳＢⅢ－28計測表

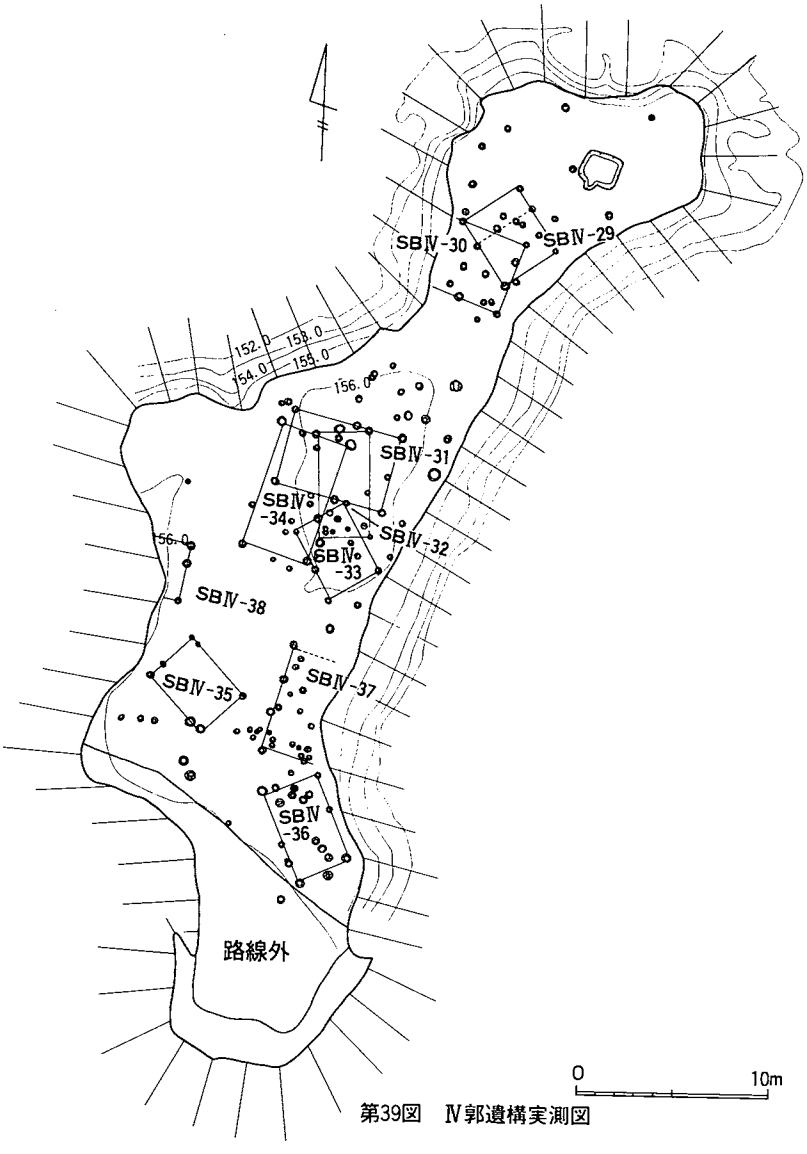




第38図　ＳＢⅢ－28実測図

第4節　Ⅳ郭の調査結果

平場は長靴の形状を呈する。北東から南西方向に主軸の向きがあり、長さ45m、東西幅6～10mを測る。Ⅳ郭中央部の標高156mラインが最高所である。南北両側の比高差は0.5m未満でほぼ平坦である。地山は全面シラスで、浸食作用が進行している。裾部との比高は、東側で14mを測る。



第39図　Ⅳ郭遺構実測図

Ⅳ郭検出の建築址

Ⅳ郭から計10棟の建築址が検出された。内訳は、北側寄りから２棟、中央部寄りから４棟、南側寄りから４棟である。

建築址は２間×２間（ＳＢⅣ—31・32・33・34・36）と、２間×１間（ＳＢⅣ—29）と、１間×２間（ＳＢⅣ—35）に大別されるが、ＳＢⅣ—31・32・33・34は梁行妻の中央柱が不明で、ＳＢⅣ—35・36は梁行妻・桁行に補助柱を持っている。ＳＢⅣ—30・37・38は部分的な検出に留まった。

規模は、ＳＢⅣ—34が最大で桁行6.5ｍ×梁行妻3.6ｍを測り、最小はＳＢⅣ—35で桁行4.0ｍ×梁行妻3.0ｍである。

桁行の方位はＳＢⅣ—34・37がＮ14°Ｅ～Ｎ18°Ｅでまとまりがあった。

ＳＢⅣ—30からは土師器坏（４）が出土した。この他、ＳＢⅣ—32・37からは細片であるが土師器皿の底部が出土し、ＳＢⅣ—33には焼けた石が混入していた。ＳＢⅣ—35からは須恵器の細片が出土した。

建築址 NO.	規　模	規　格	桁行方位	備　考
ＳＢⅣ—29	4.0m×3.4m	２間×１間	Ｎ60°Ｗ	
ＳＢⅣ—30	×3.8m	×３間	Ｎ67°Ｗ	西側半分を欠く
ＳＢⅣ—31	5.8m×4.0m	２間×２間	Ｎ87°Ｅ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅣ—32	5.5m×2.7m	２間×２間	Ｎ３°Ｅ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅣ—33	4.0m×3.0m	２間×２間	Ｎ34°Ｗ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅣ—34	6.5m×3.6m	２間×２間	Ｎ18°Ｅ	梁行妻の中央柱が不明
ＳＢⅣ—35	4.0m×3.0m	１間×２間	Ｎ46°Ｗ	片梁行妻と桁行に補助柱
ＳＢⅣ—36	4.8m×3.0m	２間×２間	Ｎ27°Ｗ	梁行妻と桁行に補助柱
ＳＢⅣ—37	5.4m×	３間×	Ｎ14°Ｅ	東側半分を欠く
ＳＢⅣ—38	×3.0m	×２間	Ｎ82°Ｗ	西側部分を欠く

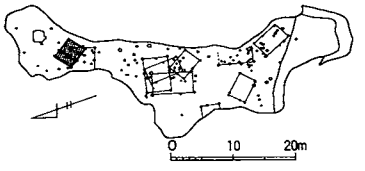
第31表　Ⅳ郭検出の建築址一覧表

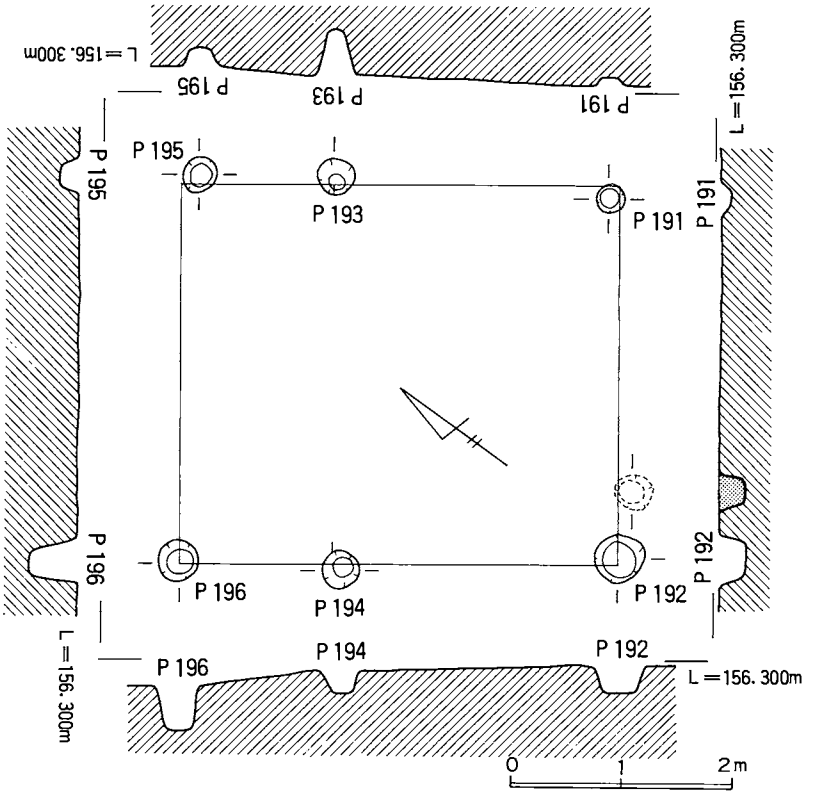
ＳＢⅣ－２９

桁行4.0ｍ、梁行妻3.4ｍの２間×１間の建物で、方位はＮ60°Ｗである。柱間寸法は、桁行P191～P193～P195で2.6ｍ＋1.4ｍ、P192～P194～P196で2.6ｍ＋1.4ｍ、梁行妻P191～P192で3.4ｍ、P195～P196で3.4ｍを測る。柱穴の大きさはP192が最大（45×41cm）で、P191が最小（27×26cm）である。深さはP196が最深（42cm）で、P191が最浅（８cm）である。柱列は桁行P192～P194～P196を除いて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
191～193	2.6	4.0	191～192	3.4	3.4	191	8	27	26
193～195	1.4					192	24	45	41
			195～196	3.4	3.4	193	40	35	33
192～194	2.6	4.0				194	20	35	33
194～196	1.4					195	16	35	31
						196	42	38	38

第32表　ＳＢⅣ－29計測表





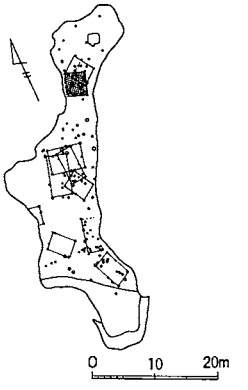
第40図　ＳＢⅣ－29実測図

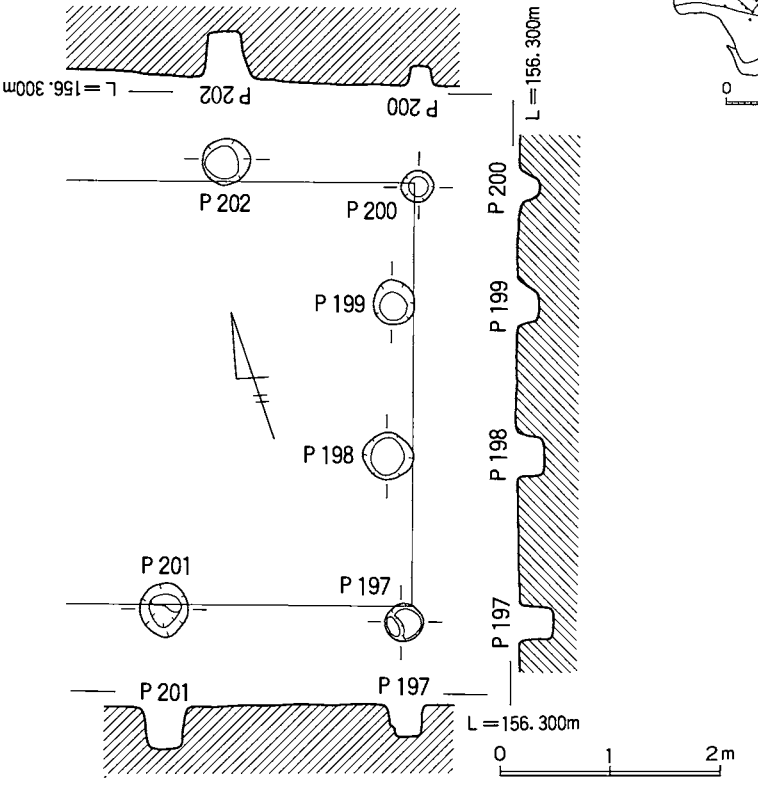
ＳＢⅣ－３０

桁行は西側部分を欠き、梁行妻3.8ｍの３間の建物で、方位はＮ67°Ｗである。柱間寸法は、桁行P197～P201で2.2ｍ、P200～P202で1.8ｍ、梁行妻P197～P198～P199で1.4ｍ＋1.4ｍ＋1.0ｍを測る。残存柱穴で、大きさはP198が最大（48×43cm）で、P200が最小（32×29cm）である。深さはP202が最深（40cm）で、P200が最浅（16cm）である。柱列は千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P201から土師器坏（４）が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
197～201	2.2	2.2	197～198	1.4	3.8	197	26	36	36
			198～199	1.4		198	24	48	43
200～202	1.8	1.8	199～200	1.0		199	18	41	38
						200	16	32	29
						201	36	50	42
						202	40	45	42

第33表　ＳＢⅣ－30計測表





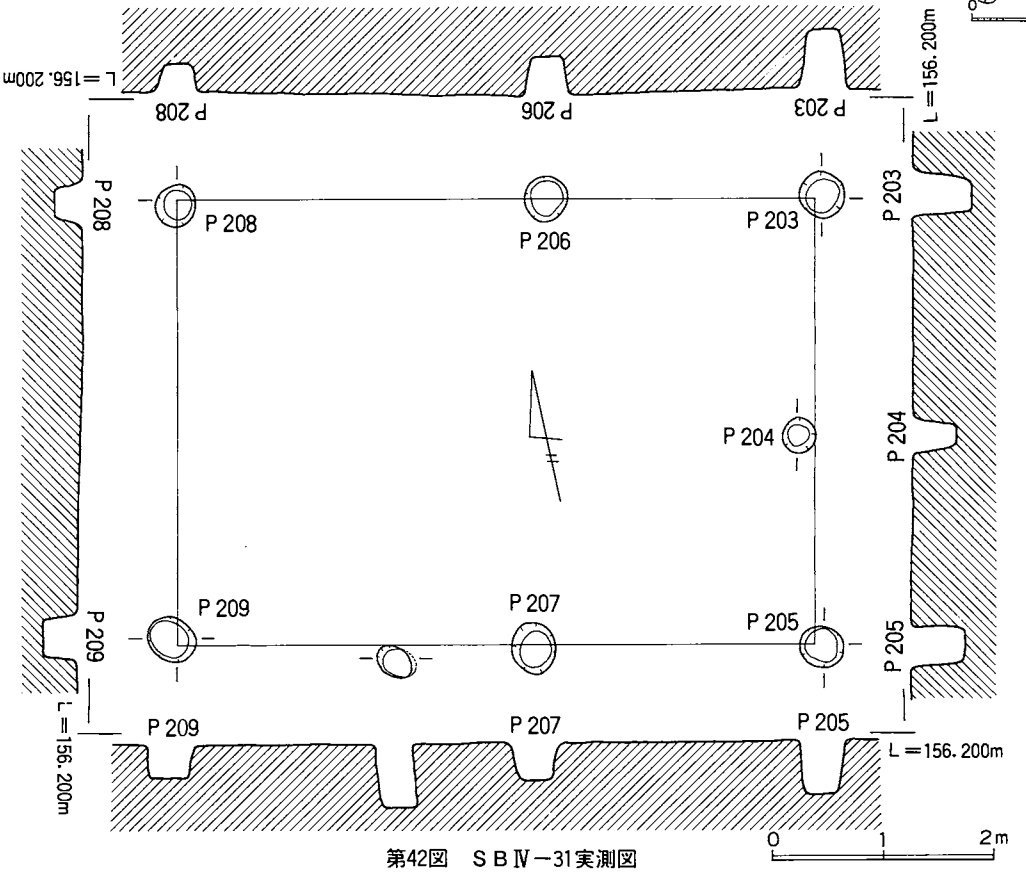
第41図　ＳＢⅣ－30実測図

ＳＢⅣ－３１

桁行5.8ｍ、梁行妻4.0ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ87°Ｅである。柱間寸法は、桁行P203～P206～P208で2.6ｍ＋3.2ｍ、P205～P207～P209で2.6ｍ＋3.2ｍ、梁行妻P203～P204～P205で2.0ｍ＋2.0ｍ、P208～P209は中央柱が不明で全長4.0ｍを測る。柱穴の大きさは、P207が最大（48×42㎝）で、P204が最小（32×29㎝）である。深さはP203が最深（52㎝）で、P208が最浅（24㎝）である。柱列は梁行妻P203～P204～P205が千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
203～206	2.6	5.8	203～204	2.0	4.0	203	52	42	40
206～208	3.2		204～205	2.0		204	38	32	29
						205	48	42	37
205～207	2.6	5.8	208～209	4.0	4.0	206	34	42	40
207～209	3.2					207	32	48	42
						208	24	39	37
						209	28	45	38

第34表　ＳＢⅣ－31計測表



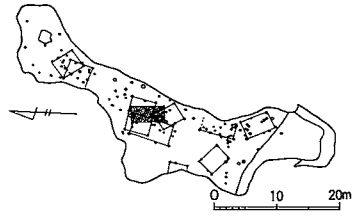
第42図　ＳＢⅣ－31実測図

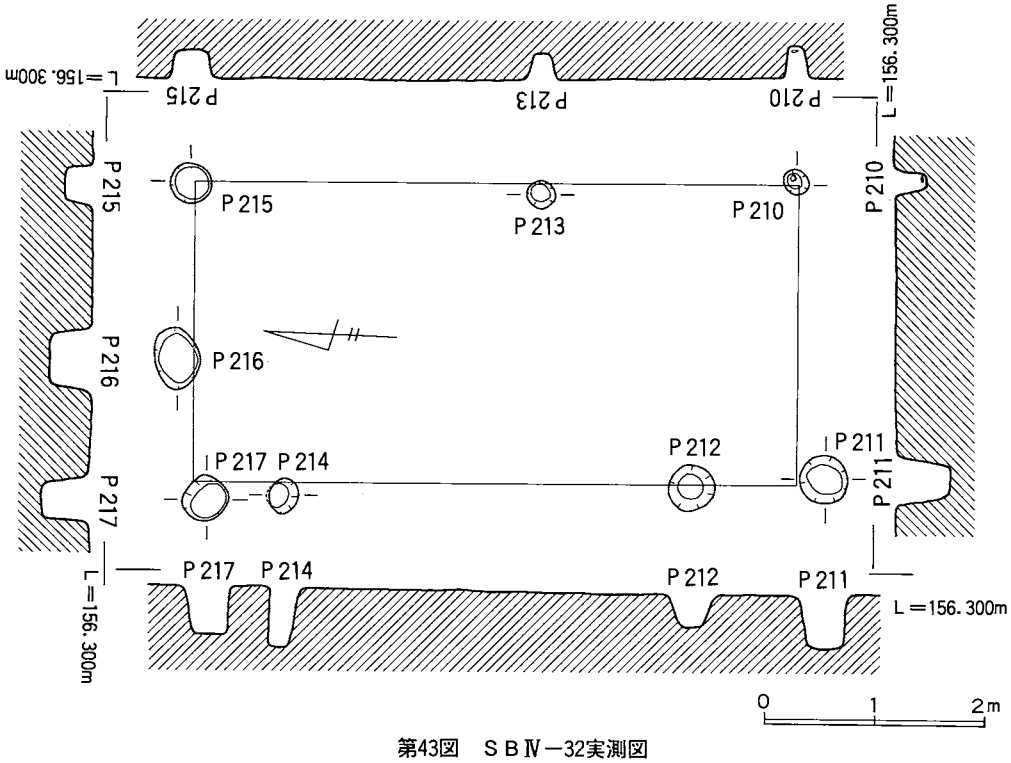
ＳＢⅣ－３２

桁行5.5ｍ、梁行妻2.7ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ３°Ｅである。柱間寸法は、桁行P210～P213～P215で2.3ｍ＋3.2ｍ、P211～P217は中央柱が２本に分かれP211～P212～P214～P217で0.9ｍ＋3.7ｍ＋0.9ｍとなり、梁行妻P215～P216～P217で1.4ｍ＋1.3ｍ、P210～P211は中央柱が不明で全長2.7ｍを測る。柱穴の大きさは、P216が最大（56×41cm）で、P210が最小（25×22cm）である。深さはP214が最深（54cm）で、P215が最浅（24cm）である。柱列はすべて千鳥の並びとなる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P210からは土師器皿の底部が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
210～213	2.3	5.5	210～211	2.7	2.7	210	28	25	22
213～215	3.2					211	46	45	43
			215～216	1.4	2.7	212	30	43	40
211～212	0.9		216～217	1.3		213	22	26	25
212～214	3.7	5.5				214	54	33	28
214～217	0.9					215	24	37	37
						216	36	56	41
						217	44	43	38

第35表　ＳＢⅣ－32計測表





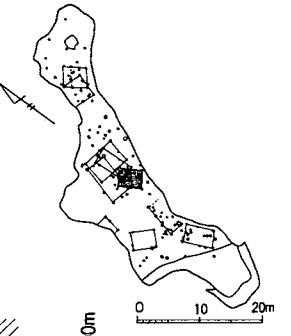
第43図　ＳＢⅣ－32実測図

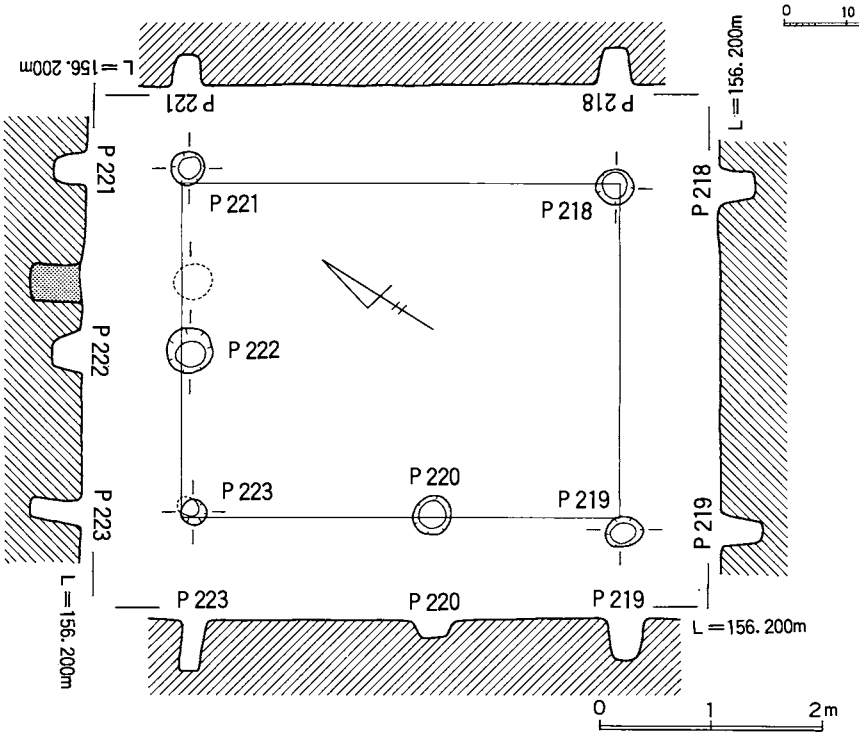
ＳＢⅣ－３３

桁行4.0ｍ、梁行妻3.0ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ34°Ｗである。柱間寸法は、桁行P219～P220～P223で1.8ｍ＋2.2ｍ、P218～P221は中央柱が不明で全長4.0ｍを測る。梁行妻P221～P222～P223で1.5ｍ＋1.5ｍ、P218～P219は桁行同様に中央柱が不明で全長3.0ｍを測る。柱穴の大きさは、P222が最大（43×40cm）で、P221が最小（33×30cm）である。深さはP219が最深（36cm）で、P220が最浅（14cm）である。柱列はすべて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P218からは焼け石が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
218～221	4.0	4.0	218～219	3.0	3.0	218	30	35	32
						219	36	35	28
219～220	1.8	4.0	221～222	1.5	3.0	220	14	38	35
220～223	2.2		222～223	1.5		221	28	33	30
						222	26	43	40
						223	46	24	24

第36表　ＳＢⅣ－33計測表





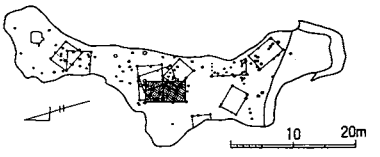
第44図　ＳＢⅣ－33実測図

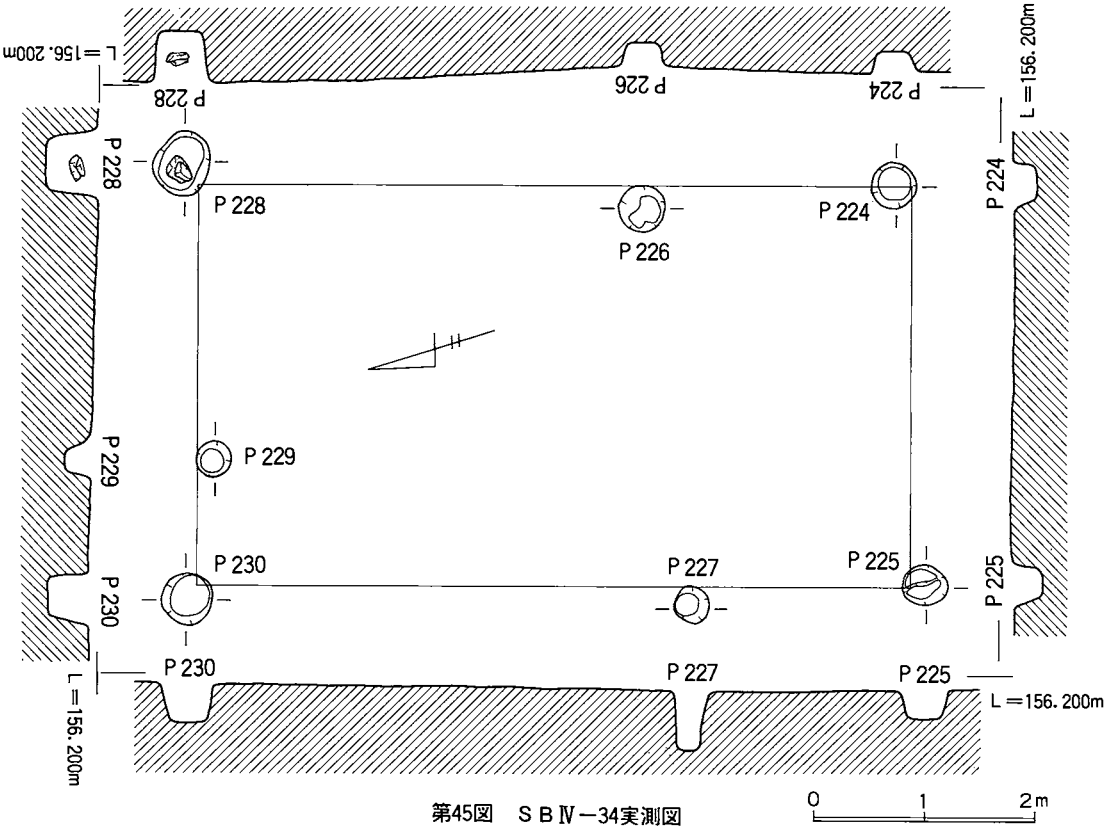
ＳＢⅣ－３４

桁行6.5ｍ、梁行妻3.6ｍの２間×２間の建物で、方位はＮ18°Ｅである。柱間寸法は、桁行P224～P226～P228で2.5ｍ＋4.0ｍ、P225～P227～P230で2.0ｍ＋4.5ｍ、梁行妻P228～P229～P230で2.5ｍ＋1.1ｍ、P224～P225は中央柱が不明で全長3.6ｍを測る。柱穴の大きさは、P228が最大（59×52cm）で、P229が最小（33×33cm）である。深さはP227が最深（52cm）で、P226が最浅（20cm）である。柱列はすべて千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P228からは根固め石が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
224～226	2.5	6.5	224～225	3.6	3.6	224	22	41	38
226～228	4.0					225	26	42	37
			228～229	2.5	3.6	226	20	43	42
225～227	2.0	6.5	229～230	1.1		227	52	36	33
227～230	4.5					228	46	59	52
						229	22	33	33
						230	34	48	46

第37表　ＳＢⅣ－34計測表





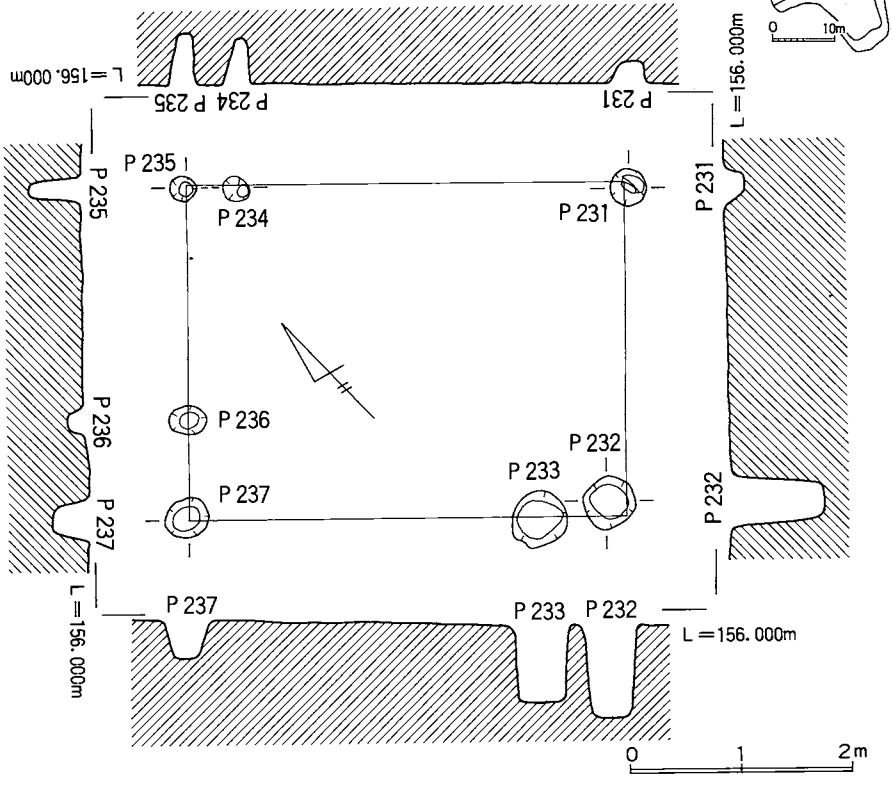
第45図　ＳＢⅣ－34実測図

ＳＢⅣ－３５

桁行4.0ｍ、梁行妻3.0ｍの１間×２間の建物で、方位はＮ46°Ｗである。柱間寸法は、桁行P231～P235で4.0ｍ、P232～P239で4.0ｍ、梁行妻P235～P236～P237で2.1ｍ＋0.9ｍ、P231～P232は中央柱が不明で全長3.0ｍを測る。両桁行では、P235から0.5ｍ、P232から0.8ｍの所に補助的な柱穴（P234・P233）がある。柱穴の大きさは、P233が最大（50×48cm）で、P235が最小（25×23cm）である。深さはP232が最深（84cm）で、P236が最浅（14cm）である。柱列は桁行P232～P233～P237と梁行妻P231～P232が千鳥の並びになる。P233の埋土は黒褐色土で、他は褐灰色土である。P233からは須恵器の細片が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
231～234	3.5	4.0	231～232	3.0	3.0	231	18	34	33
234～235	0.5					232	84	50	45
			235～236	2.1	3.0	233	68	50	48
232～233	0.8	4.0	236～237	0.9		234	38	26	23
233～237	3.2					235	44	25	23
						236	14	34	26
						237	34	42	35

第38表　ＳＢⅣ－35計測表



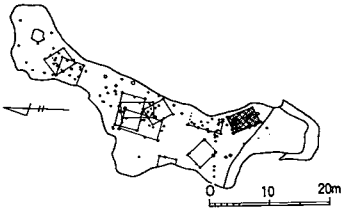
第46図　ＳＢⅣ－35実測図

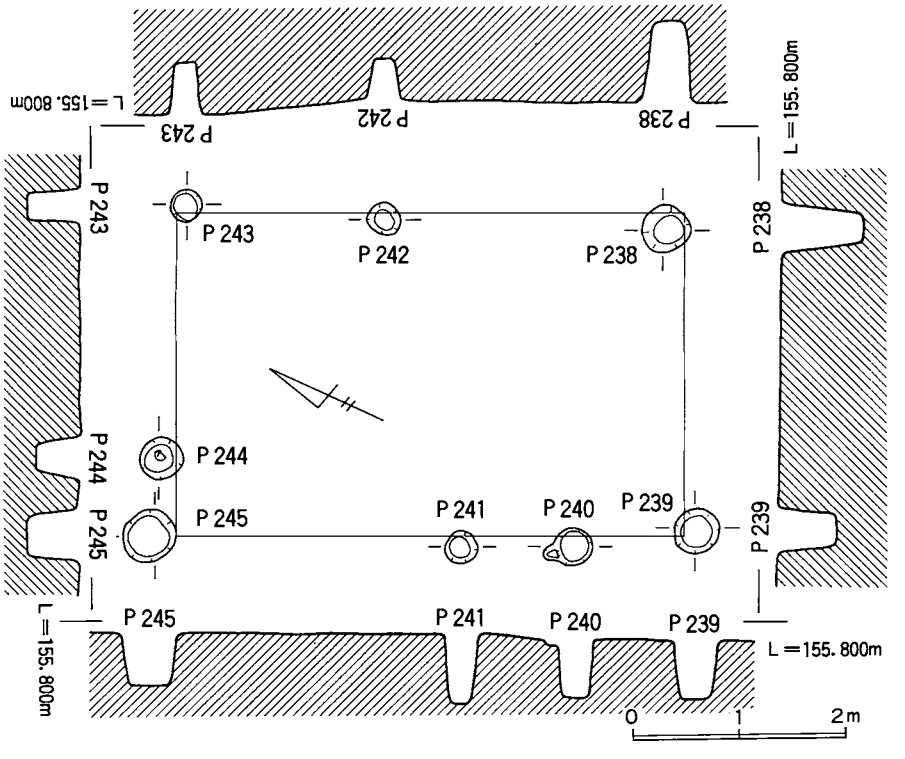
ＳＢⅣ－３６

桁行4.8m、梁行妻3.0mの２間×２間の建物で、方位はＮ27°Ｗである。柱間寸法は、桁行P238～P242～P243で2.8m＋2.0m、P239～P245は中央柱が桁行の南側半分で２本に分かれP239～P240～P241～P245で1.1m＋1.1m＋2.6mとなり、梁行妻P243～P244～P245で2.2m＋0.8m、P238～P239は中央柱が不明で全長3.0mを測る。柱穴の大きさは、P245が最大（52×48cm）で、P242が最小（33×28cm）である。深さはP238が最深（74cm）で、P242が最浅（36cm）である。柱列はすべて千鳥の並びとなる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P244からは焼け石が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
238～242	2.8	4.8	238～239	3.0	3.0	238	74	46	43
242～243	2.0					239	54	44	42
			243～244	2.2	3.0	240	54	48	36
239～240	1.1	4.8	244～245	0.8		241	64	33	30
240～241	1.1					242	36	33	28
241～245	2.6					243	48	32	29
						244	40	42	38
						245	48	52	48

第39表　ＳＢⅣ－36計測表





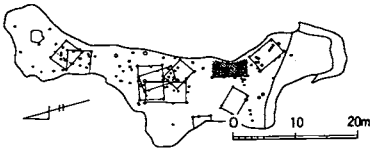
第47図　ＳＢⅣ－36実測図

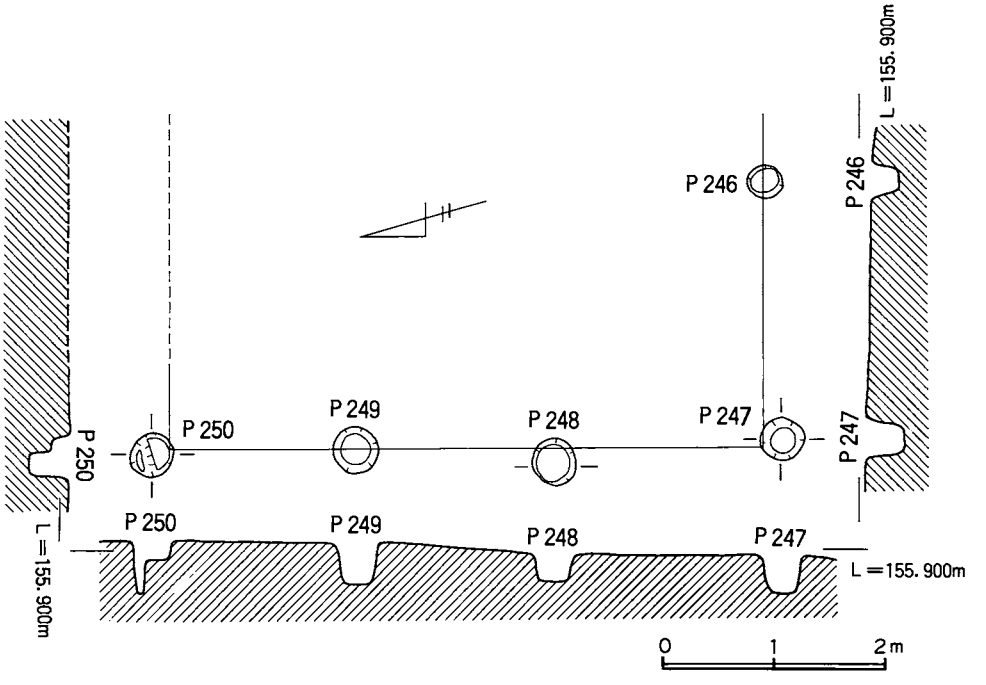
ＳＢⅣ－３７

桁行は5.4ｍで３間、梁行妻は東側部分を欠く。方位はＮ14°Ｅである。柱間寸法は、桁行P247～P248～P249～P250で1.8ｍ＋1.8ｍ＋1.8ｍ、梁行妻P246～P247で2.4ｍを測る。残存柱穴の大きさはP248が最大（43×39cm）で、P246が最小（32×30cm）である。深さは、P249が最深（38cm）で、P246とP248が最浅（24cm）である。柱列は梁行妻P246～P247が千鳥の並びになる。柱穴の埋土は褐灰色土である。P248からは土師器皿の底部が出土した。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
247～248	1.8	5.4	246～247	2.4		246	24	32	30
248～249	1.8					247	34	41	38
249～250	1.8					248	24	43	39
						249	38	42	40
						250	36	43	38

第40表　ＳＢⅣ－37計測表





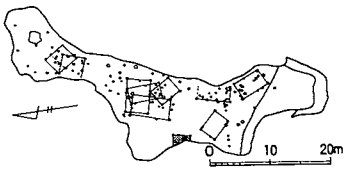
第48図　ＳＢⅣ－37実測図

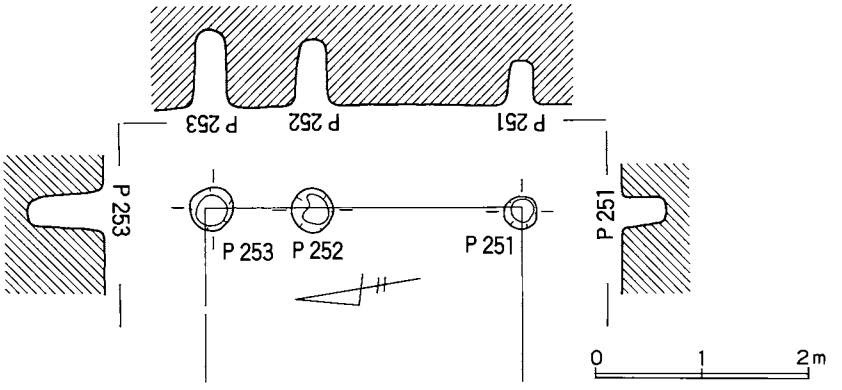
ＳＢⅣ－３８

桁行は西側部分を欠く。梁行妻3.0ｍで２間の建物である。方位はＮ82°Ｗである。柱間寸法は、梁行妻P251～P252～P253で2.0ｍ＋1.0ｍを測る。残存柱穴の大きさは、P252が最大(42×39cm）で、P251が最小（33×28cm）である。深さはP253が最深（68cm）で、P251が最浅（40cm）である。柱穴の埋土は褐灰色土である。

Pit No.	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit No.	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
251～252	2.0	3.0				251	40	33	28
252～253	1.0					252	60	42	39
						253	68	40	40

第41表　ＳＢⅣ－38計測表





第49図　ＳＢⅣ－38実測図

第５節　Ⅳ郭北側斜面の調査結果

発掘調査前は大きな凹地で、シラスの傾斜地からタコ壺状の土坑が検出された。

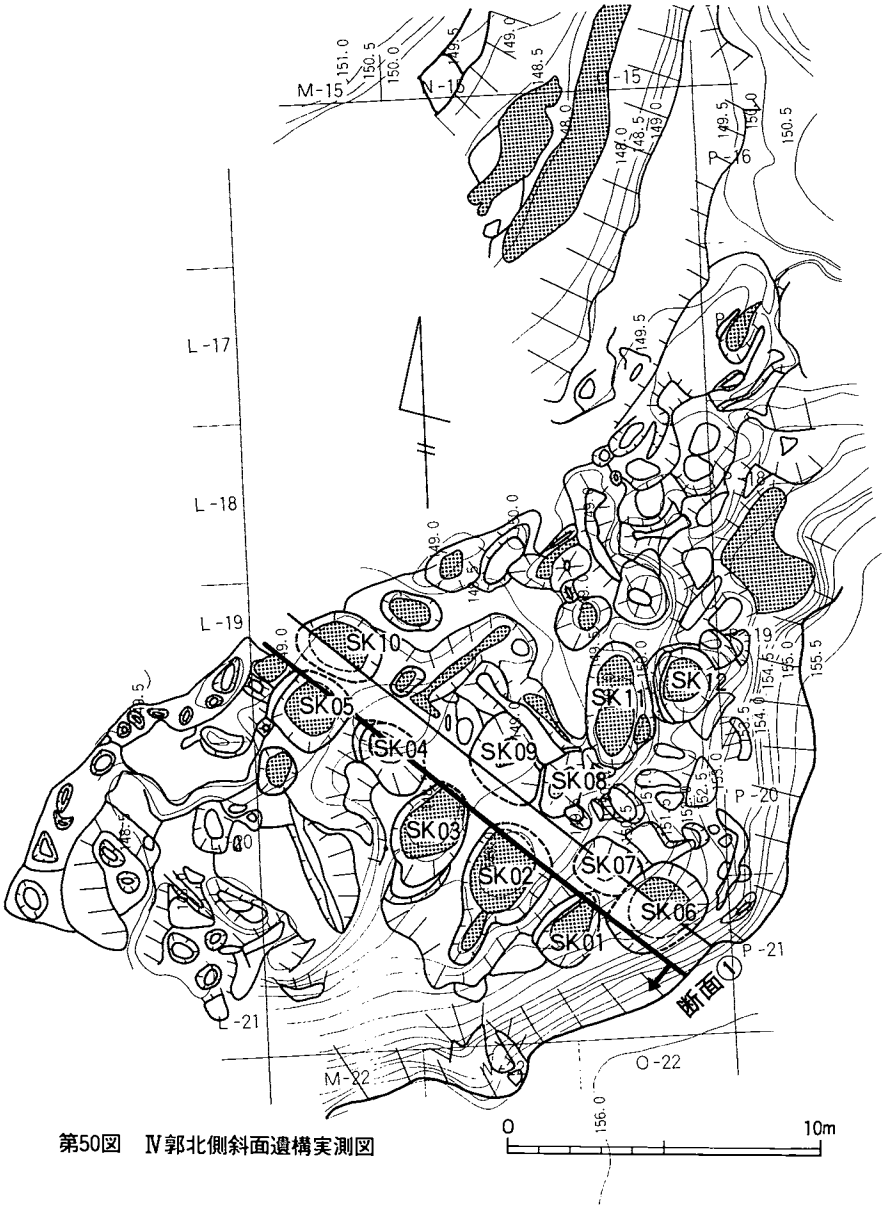
土層断面図①に見るように、土坑の掘り方は、斜面の上位部の壁が急峻で、下位部が緩傾斜という形態であった。平面形は楕円形で、長径2.0～4.0ｍ・短径1.3～2.4ｍ・深さ1.0～2.8ｍのものが12基検出された。但し、いずれも上位部分が崩壊したり、後世に削平されており、完

土坑 NO.	形　状	規　模(m)	深さ	方　位	備　　考
ＳＫ０１	楕円形	2.5×1.9	2.8	N31°E	北端がすぼむ
ＳＫ０２	楕円形	3.0×2.7	2.8	N35°E	南端に浅い掘り込み
ＳＫ０３	楕円形	3.3×2.3	2.0	N33°E	南縁に土塁状の高まり
ＳＫ０４	楕円形	2.9×1.6	1.5	N43°W	西縁に土塁状の高まり
ＳＫ０５	円　形	2.3	1.0	――	西縁に土塁状の高まり
ＳＫ０６	楕円形	3.2×2.4	2.4	N50°E	――
ＳＫ０７	楕円形	2.0×1.7	1.9	N48°W	――
ＳＫ０８	楕円形	2.2×1.3	1.5	N31°E	――
ＳＫ０９	楕円形	2.6×2.3	2.4	N 2°E	――
ＳＫ１０	楕円形	2.9×2.2	1.6	N76°W	――
ＳＫ１１	楕円形	4.0×2.1	1.2	N 3°E	――
ＳＫ１２	円　形	2.0	2.3	――	西縁に土塁状の高まり

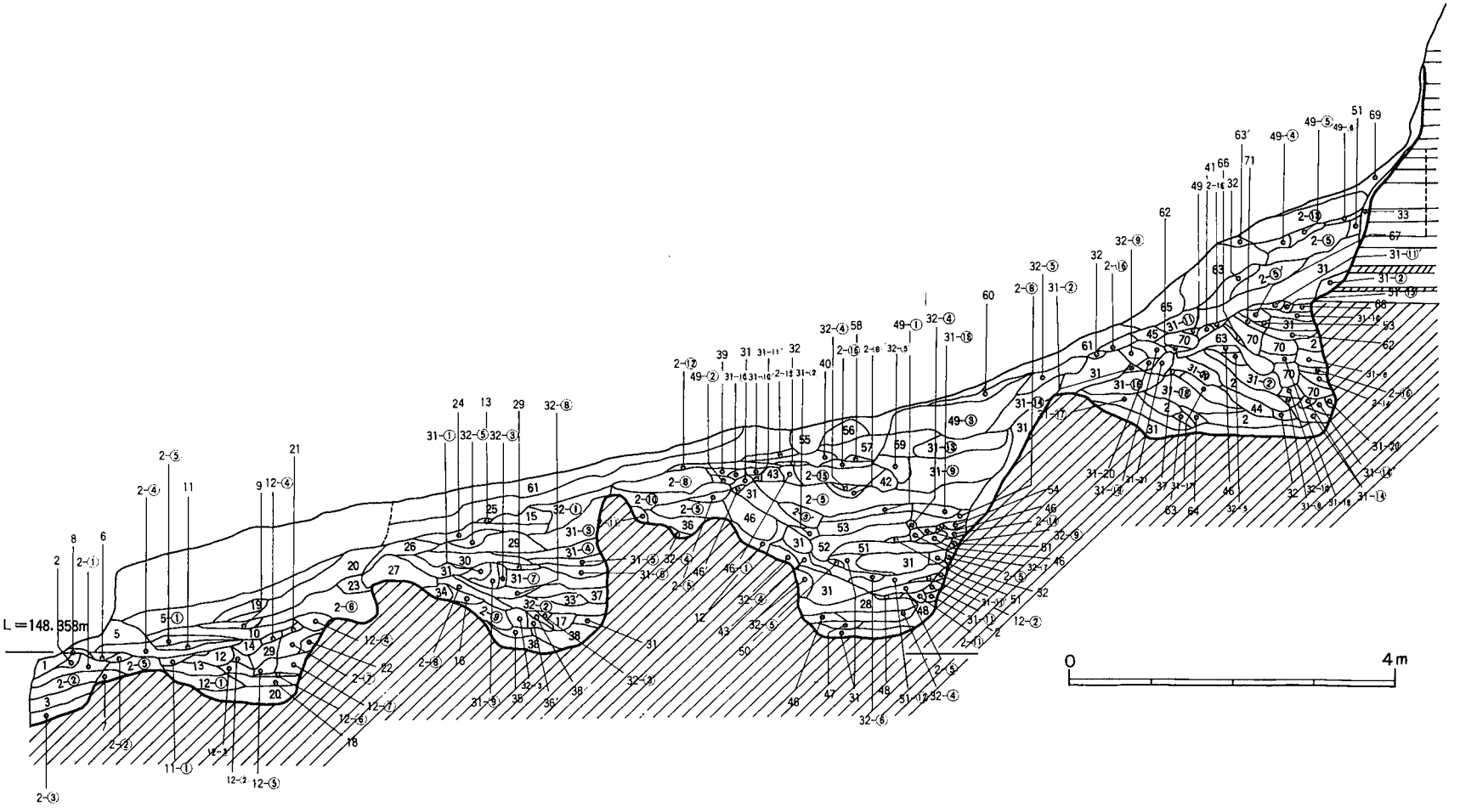
第42表　Ⅳ郭北側斜面の土坑一覧表

全な形のものはなかった。土坑の埋土には、すべて似かよったシラスの二次堆積土が混入しており、同時期に埋没している可能性が強い。

Ⅳ郭北側の形状からして、ある時期に蛸壺の土坑が一斉に掘られたものであろう。少なくとも、その時期はⅣ郭が放棄された状態であったものと考えられる。Ⅳ郭を切り込む形で掘られている。出土遺物は、土師器皿の細片だけである。



第50図　Ⅳ郭北側斜面遺構実測図



第51図　Ⅳ郭北側斜面土層断面図①

1	褐色粘土～灰褐色土＋(少)灰黒土	12-⑥	(水成層)＋薄茶色土	31-⑭	～白褐色粘土	46′	(ガチガチの硬層)
2	灰褐色土	12-⑦	(よごれた感じ)	31-⑭′	(少)	46-①	(フカフカ)
2-①	～灰黒土＋(少)褐色粘土	13	褐灰色土～肌色シラス土＋薄茶色土	31-⑮	～アカホヤ＋肌色粘土	47	アカホヤ～薄茶色土＋(少)肌色粘土
2-②	(少)薄茶色土	14	薄茶色土～灰褐色土＋褐色粘土	31-⑯	～肌色粘土＋明褐色土	48	褐色粘土
2-③	～(少)薄茶色土＋灰褐色土	15	褐灰色土～褐色粘土	31-⑰	～(少)灰色粘土(フカフカ)	49	灰黒土
2-④	～薄茶色土	16	灰黒砂土～灰褐色土	31-⑱	(やや硬)	49-①	～薄茶色土
2-⑤	～肌色粘土(やや硬)	17	灰黒砂土～褐灰色土	31-⑲	～灰黒土＋(少)肌色粘土	49-②	～灰褐色土＋アカホヤ
2-⑤′	肌色粘土(少量)	18	薄茶色土～桃色シラス土＋肌色粘土	31-⑳	アカホヤ＋肌色粘土	49-③	～灰色シラス土
2-⑥	～灰色シラス土＋(少)薄茶色土	19	褐灰色土～薄茶色土＋肌色シラス土	31-㉑	～白褐色粘土＋(少)アカホヤ	49-④	～灰色シラス土＋(少)アカホヤ
2-⑦	～褐色粘土＋薄茶色土	20	薄茶色土～灰黒土＋肌色シラス土	32	肌色粘土(多)	49-⑤	～灰褐色土＋(少)アカホヤ
2-⑧	～明褐色土＋肌色粘土(まだら)	21	薄茶色土～桃色シラス土	32-①	～(少)灰褐色土	49-⑥	～褐灰色土
2-⑨	～肌色粘土(土塊)＋明褐色土	22	褐灰色土～桃色シラス土	32-②	～灰色シラス土＋薄茶色土	50	薄茶色土～(少)肌色粘土
2-⑩	～(少)明褐色土＋薄茶色土	23	褐色粘土～灰褐色土＋(少)薄茶色土	32-③	(ガチガチの硬層)	51	アカホヤ～薄茶色土
2-⑪	～褐色土	24	褐色土～灰黒土(硬)	32-④	～灰褐色土	51′	アカホヤ～(少)薄茶色土
2-⑫	(ガチガチ)	25	褐灰色土～肌色粘土(まだら)硬	32-⑤	～灰色シラス土(やや硬)	52	薄茶色土～(少)アカホヤ(軟)
2-⑬	～薄茶色土＋(少)アカホヤ(フカフカ)	26	肌色粘土～褐色土	32-⑥	～薄茶色土(フカフカ)	53	薄茶色土～灰黒土
2-⑭	～白褐色粘土	27	灰色シラス土～肌色粘土＋薄茶色土(まだら)	32-⑦	～灰黒砂土＋アカホヤ(土塊)	54	明褐色土～肌色粘土＋灰褐色土
2-⑮	～灰黒砂土(水成層)	28	肌色粘土～灰色シラス土(硬)	32-⑧	～アカホヤ(土塊)	55	褐灰色土～アカホヤ
2-⑯	～薄茶色土＋アカホヤ	29	灰色シラス土～肌色粘土(硬)	32-⑨	～明褐色土＋灰色シラス土	56	褐灰色土～薄茶色土＋アカホヤ
3	薄茶色土～灰褐色土	30	灰黒砂土～肌色粘土(互層)	32-⑩	～アカホヤ	57	薄茶色土～肌色粘土＋白色シラス
4	薄茶色土～褐灰色土＋褐色粘土	31	灰色シラス土	33	黒褐色土～アカホヤ(やや硬)	58	薄茶色土～褐灰色土(フカフカ)
5	薄茶色土～白褐色土	31-①	～肌色粘土＋オレンジ色土(まだら)	33′	～薄茶色土	59	明褐色土～薄茶色土＋灰色シラス土
5-①	薄茶色土～白褐色土＋灰褐色土	31-②	～肌色粘土	34	明褐色土～灰褐色土	60	薄茶色土～灰黒土
6	褐色砂土～褐色粘土	31-③	～(少)肌色粘土	35	灰桃色シラス土＋(少)灰黒土	61	赤褐色土～アカホヤ＋灰黒土
7	薄茶色土～褐灰色土	31-④	～肌色粘土(土塊)＋薄茶色土	36	灰桃色シラス土＋肌色粘土(土塊)	62	アカホヤ～肌色粘土
8	灰色シラス土～薄茶色土	31-⑤	～肌色粘土(帯状)	36′	(ガチガチの硬層)	63	アカホヤ(二次堆積土)
9	薄茶色土～(少)灰色シラス土	31-⑥	～肌色粘土(互層)	37	薄茶色土～灰色シラス(フカフカ)	63′	(軟)
10	灰色シラス土～褐色粘土	31-⑦	～肌色粘土(まだら)	38	灰桃色シラス土＋(少)薄茶色土(フカフカ)	64	肌色シラス土
11	褐色粘土～褐灰色粘土(水成層)	31-⑧	(硬)	39	褐灰色土～灰黒砂土	65	薄茶色土～アカホヤ＋灰黒色土(フカフカ)
11-①	褐色粘土～褐灰色粘土＋薄茶色土	31-⑨	(フカフカ)	40	薄茶色土～灰褐色土＋(少)肌色粘土	66	アカホヤ～褐色土
12	肌色シラス土(硬)	31-⑩	～灰黒砂土	41	灰黒土～灰色シラス土＋肌色粘土(フカフカ)	67	アカホヤ～灰色シラス＋肌色粘土
12-①	～薄茶色土＋灰黒土(玉子大)	31-⑩′	(帯状に堆積)	42	灰黒土～(多)明褐色土	68	アカホヤ～灰色シラス土＋灰黒土
12-②	～灰黒砂土	31-⑪	～(少)薄茶色土	43	明褐色土～(少)灰色シラス土	69	アカホヤ～灰色シラス土＋薄茶色土
12-③	～灰黒砂土＋肌色粘土	31-⑪′	～薄茶色土	44	薄茶色土～褐灰色土	70	アカホヤ～(少)薄茶色土
12-④	～褐色粘土＋褐灰色土	31-⑫	～肌色粘土＋(少)明褐色土	45	灰黒砂土	71	アカホヤ～(少)灰色シラス土
12-⑤	～(少)褐色粘土＋灰黒砂土	31-⑬	～褐色粘土	46	白褐色粘土		

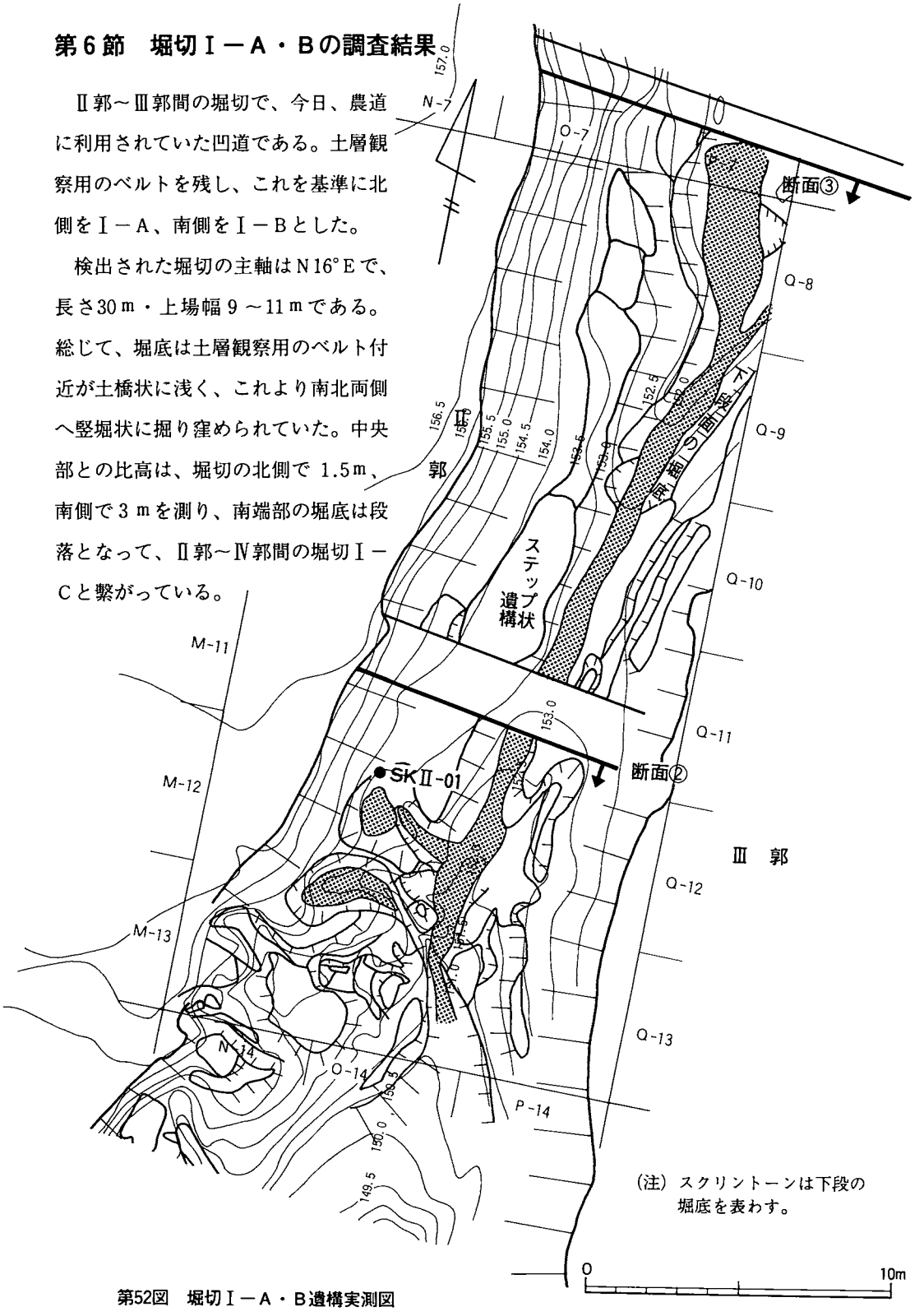
(注) 薄茶色土～白褐色土＋灰褐色土を例にとれば、薄茶色土をベースに白褐色土と灰褐色土が混じり合う事を意味する。

第43表 Ⅳ郭北側斜面土層観察表①

第６節　堀切Ⅰ－Ａ・Ｂの調査結果

Ⅱ郭～Ⅲ郭間の堀切で、今日、農道に利用されていた凹道である。土層観察用のベルトを残し、これを基準に北側をⅠ－Ａ、南側をⅠ－Ｂとした。

検出された堀切の主軸はＮ16°Ｅで、長さ30ｍ・上場幅９～11ｍである。総じて、堀底は土層観察用のベルト付近が土橋状に浅く、これより南北両側へ竪堀状に掘り窪められていた。中央部との比高は、堀切の北側で 1.5ｍ、南側で３ｍを測り、南端部の堀底は段落となって、Ⅱ郭～Ⅳ郭間の堀切Ⅰ－Ｃと繋がっている。



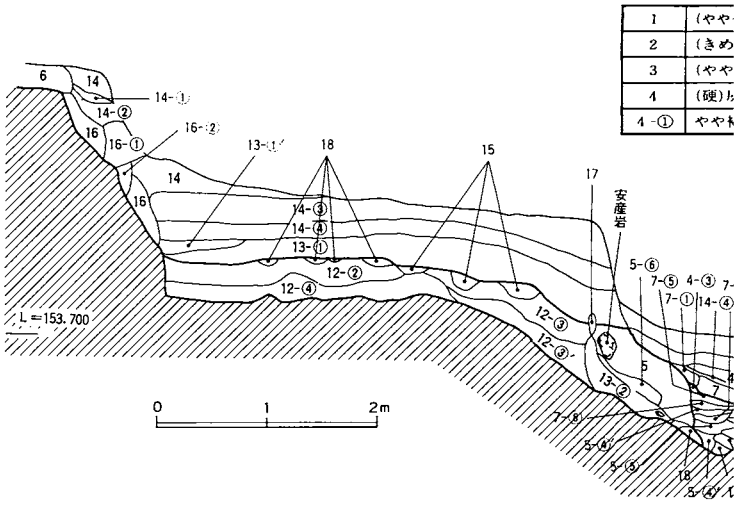
第52図　堀切Ⅰ－Ａ・Ｂ遺構実測図

①堀切の中央部について

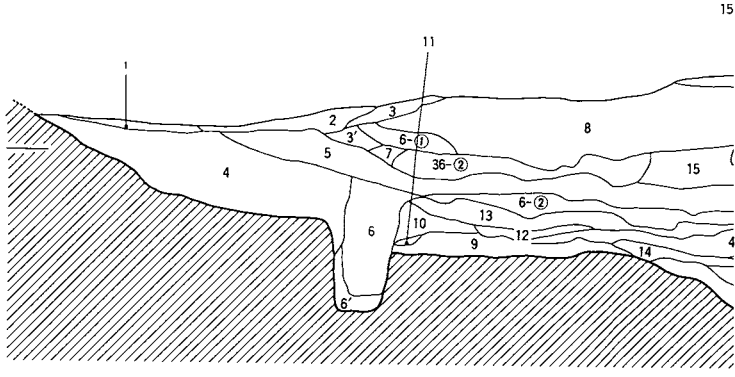
堀切の肩部は、西側のⅡ郭斜面側に階段状のステップを残し、段堀の形態をとる。ステップ状の遺構は、長さ約20m・幅3.3m、Ⅱ郭東縁よりの比高は、最深1.3mを測るが、土層断面図②を見るに、ほとんど後世の造成作業による高まりで、真のステップ状遺構は12－②層土からである。下段面の堀底は、このステップ状遺構の西側にあり、弧状を呈する。上場幅４m・下場幅１mで、堀壁の傾斜角度は、Ⅱ郭寄りの西側で約30°、Ⅲ郭寄りの東側で約60°を測る。底部のシラスは硬化しており、当時、道路として利用されていた事が明らかである。さらに土層断面図②から、その後、ステップ状遺構より流れた水が、堀の西壁を浸食し、壁面に新たな凹地を造った事がわかる。降雨時に水路の役目を果たした事は、凹地に赤褐色の鉄分土が堆積している事からも明らかである。凹地は逆三角形を呈し、上場幅1.2m、深さ0.55mである。

②堀切の北端部について

土層断面図③は、堀切Ⅰ－Bの北端部を東西方向に断ち切ったものである。下段面の堀底幅も２mに拡大し、地表からの深さは2.2mを測る。特徴は、西側堀壁に通路跡が残っていることで、堀底の西側部分の堆積土を踏み固めて、次第に通路が押し上げられていった事を示している。



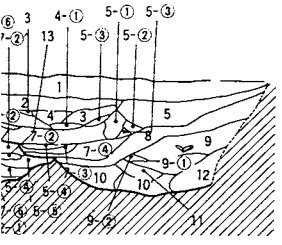
第53図　堀切Ⅰ－A・B土層断面図



第54図　堀切Ⅰ

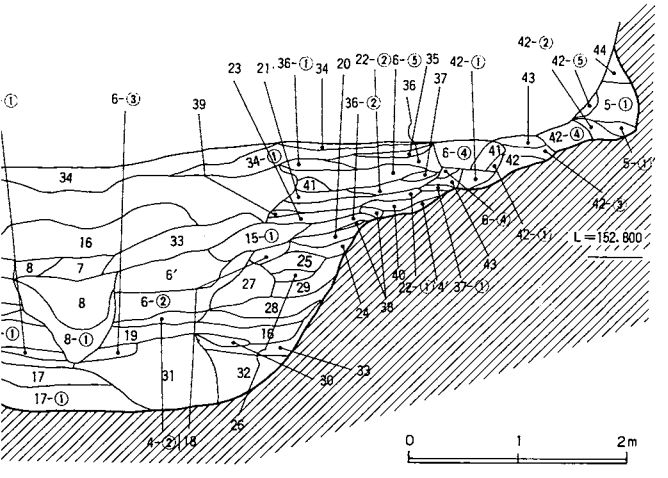
1	アカホヤ～乳白色シラス土	6-⑤	
2	アカホヤ～黒褐色土	7	
3	アカホヤ～灰褐色土	8	
3′	(多)アカホヤ～灰褐色土	8-①	
4	乳白色シラス土(やや軟)	9	
4′	(やや硬)	10	
4-①	～褐灰色土＋灰黒色土	11	
4-②	～灰褐色土(軟)	12	
5	茶褐色土(軟)	13	
5-①	～(少)アカホヤ＋乳白色土	14	
5-①′	～(多)白桃色シラス土	15	
6	褐灰色土(軟)	15-①	
6′	(やや硬)	16	
6-①	～(少)アカホヤ	17	
6-②	～乳白色シラス土	17-①	
6-③	～褐灰シラス土	18	
6-④	～(少)乳白色シラス土	19	
6-④′	～白褐色粘土	20	

硬)褐色土～アカホヤ＋灰色シラス土	4-②	～乳白色シラス土(炭化物)	5-⑥	～灰黒色土	12-②	(極・軟)灰色っぽい
細かく(硬)灰褐色土	4-③	(ガリガリ土)	6	黒褐色土～褐色土	12-③	～褐灰色土
硬)乳白色シラス土～灰褐色土	5	(きめ細かく硬)茶褐色土	7	灰茶褐色土(極・硬)～赤褐色土	12-③′	桃色味が濃い
茶色土	5-①	(パサパサ土)	7-①	(やや軟)黒色味を帯びる	12-④	(軟)
色味が濃い	5-②	(軟・粘)	7-②	灰色味が濃い	13	(硬)褐色土
	5-③	(ガリガリ土)	7-②′	やや茶褐色の色彩強し	13-①	(軟)
	5-④	～乳白色シラス土(まだら)	7-③	～(多量)赤褐色土	13-①′	(極・軟)
	5-④′	～(多量)桃灰色シラス土	7-④	灰色味が濃く、赤褐色土の混入目立つ	13-②	白色味を帯びる
	5-⑤	～桃灰色シラス土(やや硬)	7-⑤	褐色味が濃い	14	(やや硬)黒褐色土
			7-⑥	全体的に白色味を帯びる	14-①	やや硬
			8	褐灰色土～(少)桃灰色シラス土	14-②	(パサパサ土)
			9	(やや硬)灰褐色土～桃灰色シラス土	14-③	(フカフカ土)
			9-①	～(多量)桃灰色シラス土(まだら)	14-④	褐色の色彩強し
			9-②	～(部分的)灰黒色土	15	灰黒土
			10	桃灰色シラス土～灰褐色土	16	白褐色粘土(やや硬)
			10′	(多量)桃灰色シラス土～灰褐色土	16-①	～褐色土＋灰黒土
			11	灰褐色土	16-②	～褐色土(パサパサ土)
			12	桃灰色シラス土(地山剥離土)	17	樹根
			12-①	(よごれた感じ)	18	肌色粘土



第44表　堀切Ⅰ－A・B土層観察表②

②



－A・B土層断面図③

アカホヤ(やや硬)	21	(硬)灰色土～赤褐色土	36-①	灰色味を帯びる
褐色土～(少)アカホヤ	22-①	(やや軟)～灰色土	36-②	～アカホヤ
褐色土～(少)灰黒色土	22-②	～黒灰色土	37	ネズミ色土～赤褐色土＋(少)アカホヤ
褐色土	23	(硬)アカホヤ～桃色シラス土＋灰褐色土	37-①	黒色味を帯びる
白色シラス土～(少)肌色粘土	24	(パサパサ)灰白色シラス土～肌色粘土	38	アカホヤ～灰褐色土
色シラス土～褐色土	25	桃色シラス土～灰白色シラス(やや硬)	39	(多)アカホヤ～灰黒色土＋乳白色シラス土
黒砂土～褐灰色土＋アカホヤ	26	桃色シラス土～(少)薄茶色土＋灰黒色土(やや硬)	40	乳白色シラス土～アカホヤ～灰黒色土～灰褐色土(帯状に堆積)
色粘土～褐灰色土	27	(軟)桃灰色シラス土～薄茶色土		
茶色土～アカホヤ＋灰褐色土	28	(多)桃色シラス土～灰白色シラス土	41	乳白色粘土～褐灰色土
多)灰白色シラス土～灰褐色土	29	桃灰色シラス土～薄茶色土	42	白桃色シラス土(やや硬)
褐色土	30	ネズミ色土～赤褐色土(やや硬)	42-①	～アカホヤ＋灰黒色土
(少)灰白色シラス土	31	(極・硬)褐灰色シラス土～赤褐色土(互層)	42-②	(地山剥離土)
黒色土～灰褐色土	32	褐色粘土	42-③	～アカホヤ＋褐灰色土
茶色土	33	灰黒色土～褐色土	42-④	～アカホヤ(水成層)
アカホヤ＋灰黒色土	34	暗褐色土	42-⑤	～アカホヤ＋暗褐色土
黒色土～褐灰色土	34-①	～褐灰色土	43	乳白色粘土～アカホヤ＋褐灰色土
多)アカホヤ～チョコレート色土	35	暗褐色土～炭化物＋アカホヤ(やや硬)	44	暗褐色土～(少)アカホヤ
軟・硬)桃色シラス土～赤褐色土＋アカホヤ	36	灰褐色土～褐灰色土＋赤褐色土		

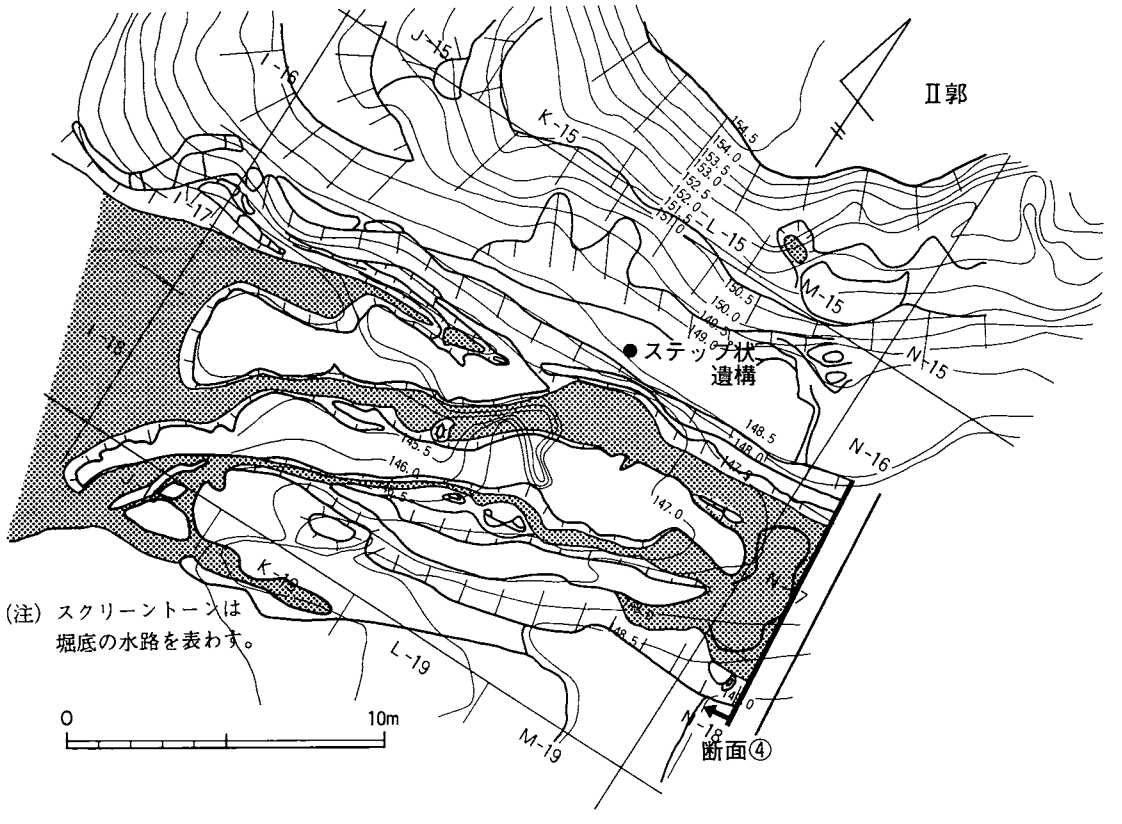
第45表　堀切Ⅰ－A・B土層観察表③

第７節　堀切Ｉ－Ｃの調査結果

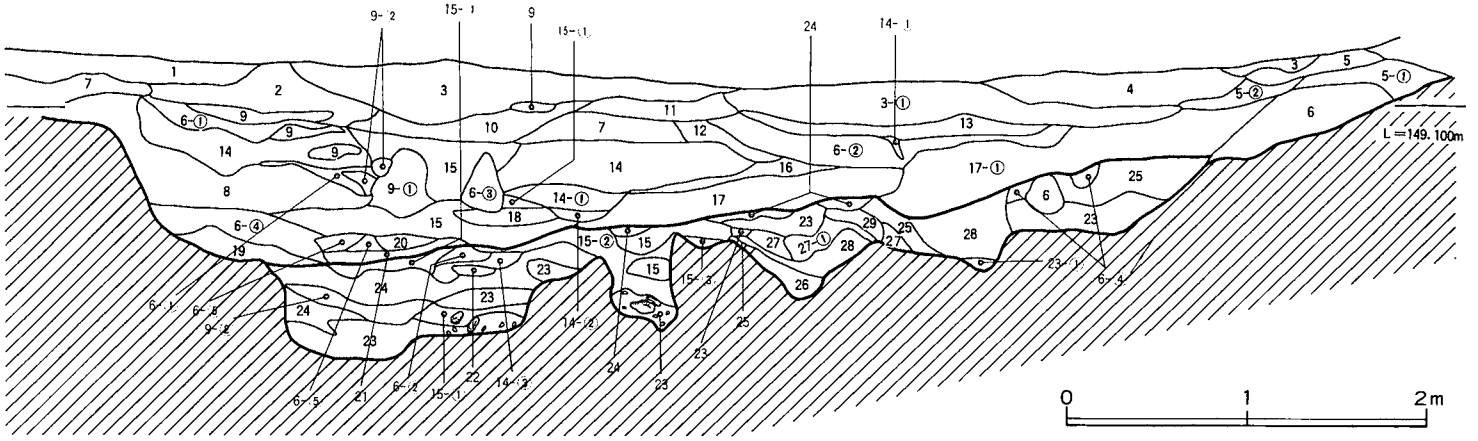
Ⅱ郭～Ⅳ郭間の堀切である。Ⅱ郭とⅣ郭の間に農道（馬場道）が通っており、この道とⅡ郭の間から検出された。堀切は、下場幅約10ｍ、長さ約35ｍ、農道からの深さは約1.5ｍである。方位はＮ75°Ｅである。堀切は東側から西側へ傾斜しており、両端の比高は約4.5ｍである。堀切の西側寄りに土層観察用のベルトを残した。

堀底は、土層観察用のベルト付近で３条の水路が刻まれ、中途から４条となる。いずれも自然の浸食作用によるもので、堀切に流れ込んだ水が形成したものと思われる。

Ⅱ郭側の堀壁には、ステップ状遺構が、長さ約20ｍ程に延びている。東端の最大幅は３ｍであるが、西側に向かうにつれて自然崩壊が激しく、次第に幅を減じ消滅する。犬走り的なものと考えられる。



第55図　堀切Ｉ－Ｃ遺構実測図



第56図　堀切Ⅰ－C土層断面図④

1	灰色シラス土～褐灰色シラス土	9	肌色粘土	17-①	(やや軟)白色味を帯びる
2	乳白色シラス土～灰色土＋灰黒色土	9-①	～灰褐色シラス土＋灰黒色土	18	こげ茶色土～灰褐色土
3	(軟)こげ茶色土～肌色シラス土(小土塊)	9-②	灰褐色味が濃い	19	こげ茶色土～灰茶色土＋オレンジ色土
3-①	やや黒色味を帯び植物根が混入	10	黒灰色土～褐灰色土	20	こげ茶色土～褐灰色土
4	褐灰色土～白色シラス土(小土塊＋小礫)	11	こげ茶色シラス土(水成層)	21	(硬)黒色土～オレンジ色土＋灰褐色土
5	灰褐色シラス土～灰黒砂土(やや硬)	12	白褐色土～褐色土	22	灰黒砂土～(少)黄褐色土
5-①	やや褐色味を帯びる	13	こげ茶色土～黒色土	23	灰黒砂土
5-②	灰色味を帯びる	14	灰色シラス土(水成層)(硬)	23-①	～肌色シラス土
6	灰褐色シラス土	14-①	～肌色シラス土(やや軟)	24	黒色砂土～白色砂土
6-①	～薄茶色土	14-②	(硬)～赤褐色土(互層)	25	肌色シラス土～白色シラス土
6-②	～褐色土	14-③	～黄褐色土(まだら)	26	白色シラス土～灰色シラス土
6-③	～灰黒色土(軟)	15	褐灰色シラス土	27	白色シラス土
6-④	～白色砂土(アワ粒大)	15-①	～褐色土＋灰黒砂土	27-①	～褐灰色土
6-⑤	～こげ茶色土(やや硬)	15-②	～灰茶色土＋オレンジ色土	28	灰色シラス土～肌色シラス土
6-⑤′	(やや軟)	15-③	～灰黒砂土	29	灰色シラス土
7	褐色土	16	白色シラス土～(少)褐色土		
8	(軟)灰白色シラス土～肌色粘土	17	茶褐色土～白褐色シラス土＋炭化物		

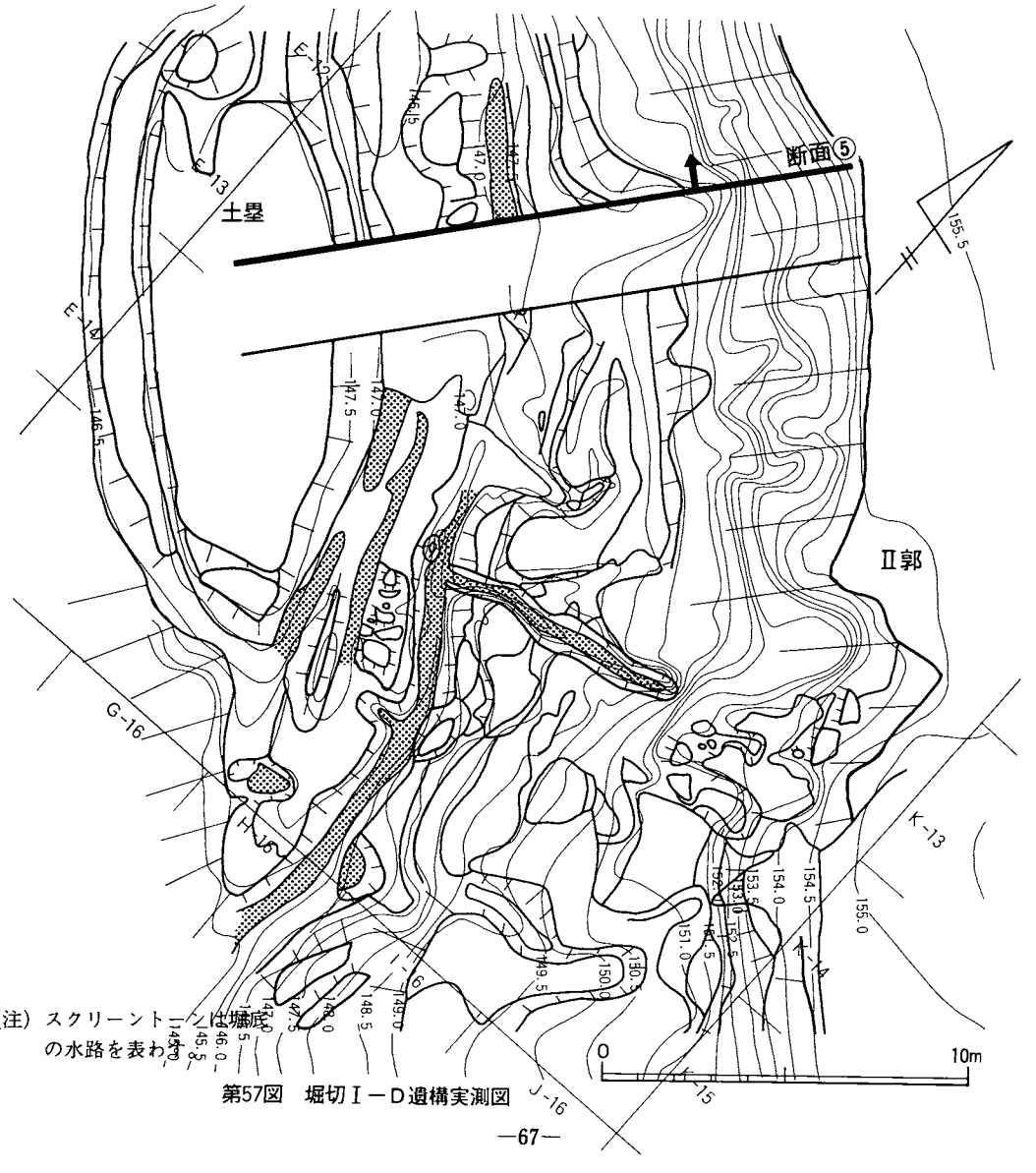
第46表　堀切Ⅰ－C土層観察表④

第8節　堀切Ⅰ－Dの調査結果

Ⅱ郭の南西側の裾部を巡る堀切である。発掘調査前は、Ⅱ郭の斜面部に突き出した腰曲輪状のテラスであったが、調査の結果、これは後世の造成作業によるものと判り、地表下1.5mの所から堀切が検出された。合わせて、南側の肩部からは土塁も検出されたが、いずれも上位部分を削り取られていて基底部のみの残存である。

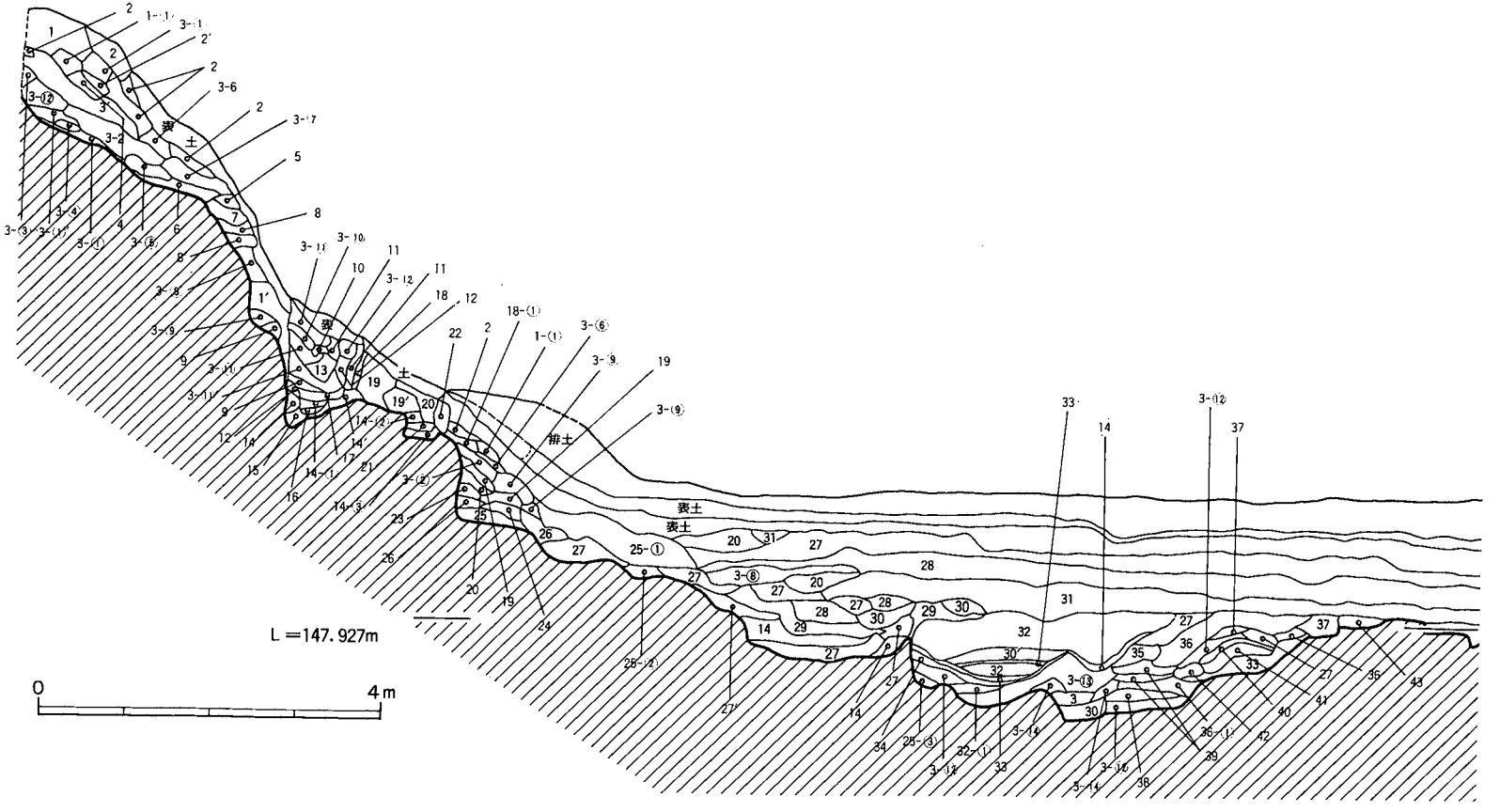
堀切は、下場幅8m、長さ25mを測り、堀底は北側から南側へ竪堀状に傾斜していた。両端の比高は2mである。堀底には自然の浸食作用で形成された3条の水路が見られる。

肩部の土塁は、堀底からの高さが0.5mで、シラスを楕円形に加工した基底部のみの残存である。長径16.5m、短径5mを測る。堀切の埋土からは多くの遺物が出土している。



(注) スクリーントーンは堀底の水路を表わす。

第57図　堀切Ⅰ－D遺構実測図



第58図　堀切Ⅰ－Ｄ土層断面図⑤

1	茶褐色土(硬)	3-⑫	～灰黒色土＋肌色粘土	15	灰黒砂土～灰色シラス土	29	灰褐色シラス～灰黒砂土
1′	(軟)	3-⑫′	～灰褐色土	16	灰黒砂土～桃色シラス土	30	灰白シラス土～(少)褐色土
1-①	～(少)灰黒色土	3-⑬	～灰色シラス土	17	灰黒砂土～肌色粘土	30′	(互層になって水平に堆積)
2	灰黒色土～茶褐色土	3-⑭	～(少)明褐色土	18	明褐色粘土	31	灰褐色シラス土～(少)白色シラス土
2′	灰黒色の色彩が濃い	4	灰黒色土～(少)明褐色土	18-①	～茶褐色土	32	灰色シラス土
3	茶褐色土	5	桃色シラス土～(少)茶褐色土	19	灰色シラス土～肌色粘土	32-①	～茶褐色土
3′	(軟)	6	桃色シラス土～薄茶色土	19′	～肌色粘土(小ブロック)	33	褐色土～(少)灰色シラス土
3-①	～褐色土	7	桃色シラス土(極・硬)	20	灰色シラス土～灰黒色土	34	白灰色粘土～赤褐色土
3-①′	(やや軟)	8	灰色シラス土～桃色シラス土	21	薄茶色土	35	灰色シラス土～茶褐色土＋明褐色土
3-②	～灰黒色土＋肌色粘土(まだら)	8′	～桃色シラス土(土塊)	22	灰色シラス土～茶褐色土＋灰黒色土	36	灰褐色土
3-③	～(少)肌色粘土(やや硬)	9	肌色粘土～茶褐色土＋灰黒砂土	23	褐色土～肌色粘土＋灰黒砂土	36-①	～(少)褐色土
3-④	～灰色粘土(ブロック状)	10	肌色粘土～灰黒色土	24	褐色土～(少)薄茶色土	37	褐色土～灰黒色土
3-⑤	～灰黒色土＋白褐色シラス土(まだら)	11	肌色粘土～(少)明褐色土	25	灰黒砂土	38	白色シラス土(互層)
3-⑥	～灰黒色土	12	明褐色粘土～(少)肌色粘土	25-①	～褐灰色土(軟)	39	黒褐色土～灰褐色土
3-⑦	～灰黒色土＋桃色粘土	13	肌色粘土～褐灰色土	25-②	～肌色粘土	40	灰色シラス土～褐灰色土
3-⑧	～灰色シラス土＋灰黒色土	14	肌色粘土	25-③	～白色シラス土＋肌色粘土	41	灰褐色シラス土～(多)褐色粘土
3-⑨	～(少)褐色土	14′	(ブロック)	26	褐灰色土～灰黒色土(軟)	42	黒褐色土
3-⑩	～肌色粘土(ブロック状)	14-①	～灰黒砂土(土師器細片出土)	27	褐灰色土	43	白褐色シラス土
3-⑪	～灰色シラス土＋肌色粘土	14-②	～灰色シラス土＋(少)茶褐色土	27′	褐色味を帯びる		
3-⑪′	～肌色粘土(ブロック)	14-③	～灰色シラス土	28	灰色シラス土～灰褐色土		

第47表　堀切Ⅰ－Ｄ土層観察表⑤

第９節　堀切Ⅰ－Ｅ・Ｆの調査結果

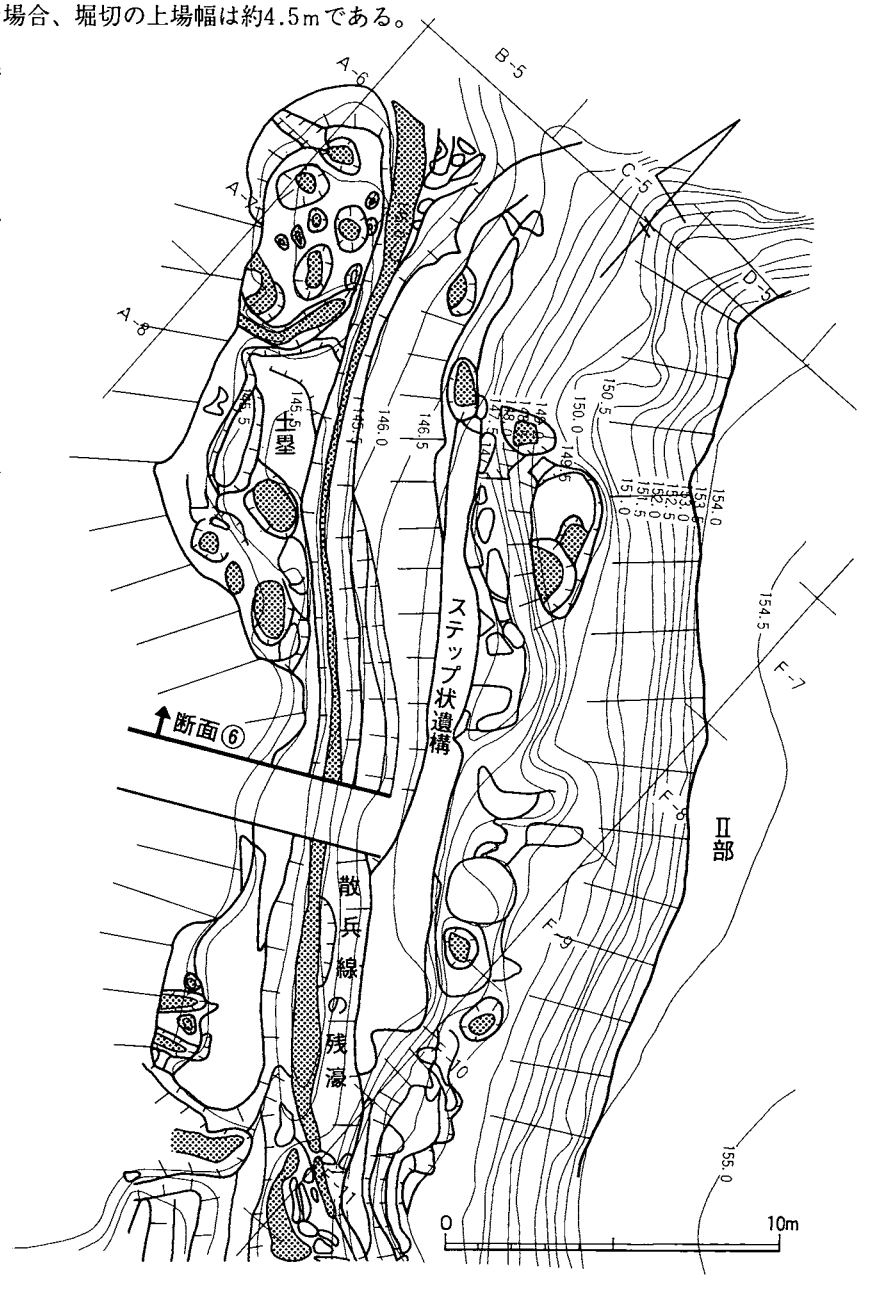
Ⅱ郭の西側裾部を巡る堀切で、Ⅱ郭南縁との比高は7.5ｍである。堀切Ⅰ－Ｄに繋がるものであるが、堀底に一条の人工的な溝が明確に残っており、形態的に異なる。

堀切のⅡ郭側壁にはステップ状遺構が厚さ25ｍ程延びている。ステップは最大幅２ｍで、これを堀切の東壁とした場合、堀切の上場幅は約4.5ｍである。

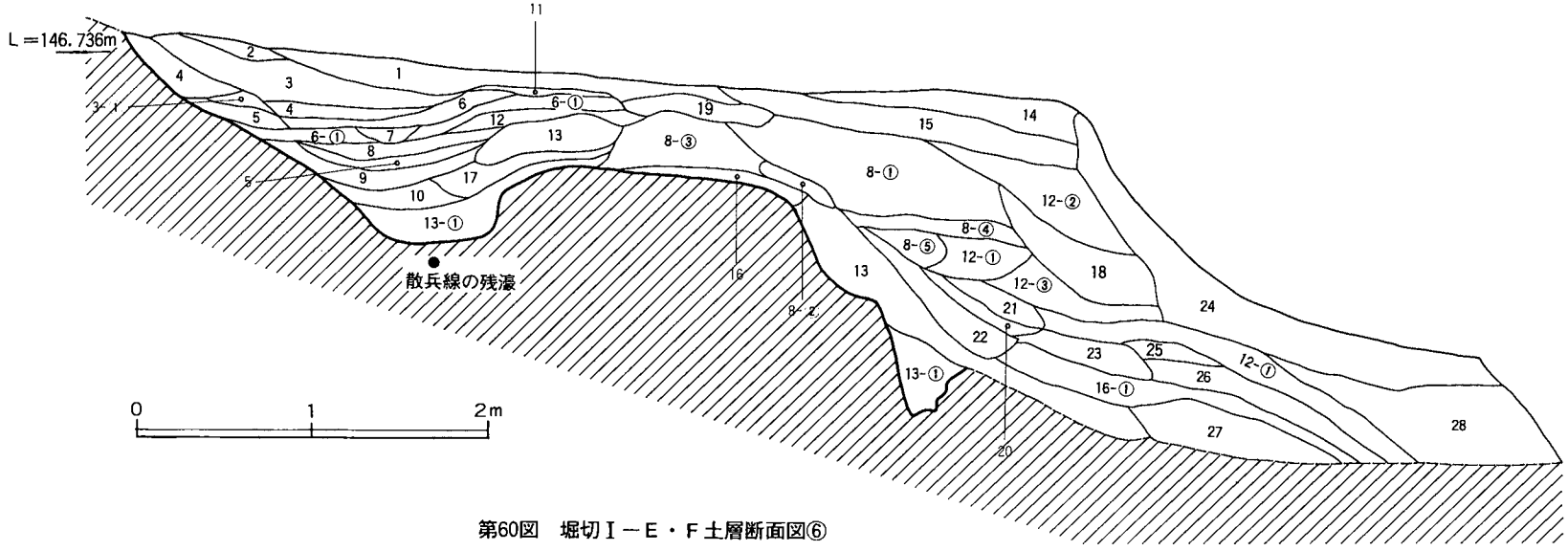
南側の肩部には土塁の基底部も残っているが、自然崩壊が激しい。全長30ｍと推測される。土塁線は、中途10ｍ程が大きく浸食されている。

土層断面図⑥では、堀底中の溝は弧状を呈し、傾斜角度はⅡ郭側の東壁で約40°、西壁で約30°である。上場幅は約３ｍ、下場幅は約0.7ｍ、深さ１ｍを測る。方位はＮ39°Ｅで全長33ｍを測る。

堀切Ⅰ－Ｅ・Ｆは高城跡の正面に該当する所で、堀切の形態からして散兵線の残濠の可能性が強い。遺物は出土していない。



第59図　堀切Ⅰ－Ｅ・Ｆ遺構実測図



第60図　堀切Ⅰ－Ｅ・Ｆ土層断面図⑥

1	茶褐色土～黄土色土＋灰褐色シラス土	8-③	～灰黒色土＋褐灰色シラス土	14	こげ茶色土～オレンジ色土＋肌色粘土	25	灰茶色土
2	褐灰色土～薄茶色土	8-④	～茶褐色土	15	灰黒色砂土～褐灰色土	26	薄茶色土～茶褐色シラス＋黄色シラス土
3	灰褐色シラス土～(粘着性)肌色粘土	8-⑤	～灰黒色土(やや軟)	16	灰黒色砂土	27	褐色シラス土
3-①	～(少)肌色粘土	9	灰白色シラス土～白褐色土	16-①	～灰褐色土	28	肌色粘土～灰褐色土
4	(粘着性)肌色粘土＋(少)薄茶色土	10	(極・軟)白褐色土	17	灰白色シラス土～灰褐色シラス土		
5	薄茶色土～灰褐色土	11	褐灰色土～白褐色土	18	明褐色土～灰白色シラス土		
6	黒褐色土～灰褐色シラス土＋アカホヤ	12	褐灰色土	19	明褐色土～(少)灰褐色土		
6-①	～灰褐色シラス土	12-①	～肌色粘土	20	(粘着性)灰黒色土～(少)灰褐色土		
7	灰白色シラス土～薄茶色土	12-②	～(少)灰黒砂土	21	(粘着性)茶色土～オレンジ色土		
8	(きめ細か)灰褐色土	12-③	～(少)褐色土	22	灰茶色土		
8-①	～灰白色シラス土	13	灰白色シラス土	23	灰黒色土～褐色土＋オレンジ色土		
8-②	～灰黒色土	13-①	～褐灰色土	24	褐色土		

第48表　堀切Ⅰ－Ｅ・Ｆ土層観察表⑥

第10節　堀切Ⅰ－Gの調査結果

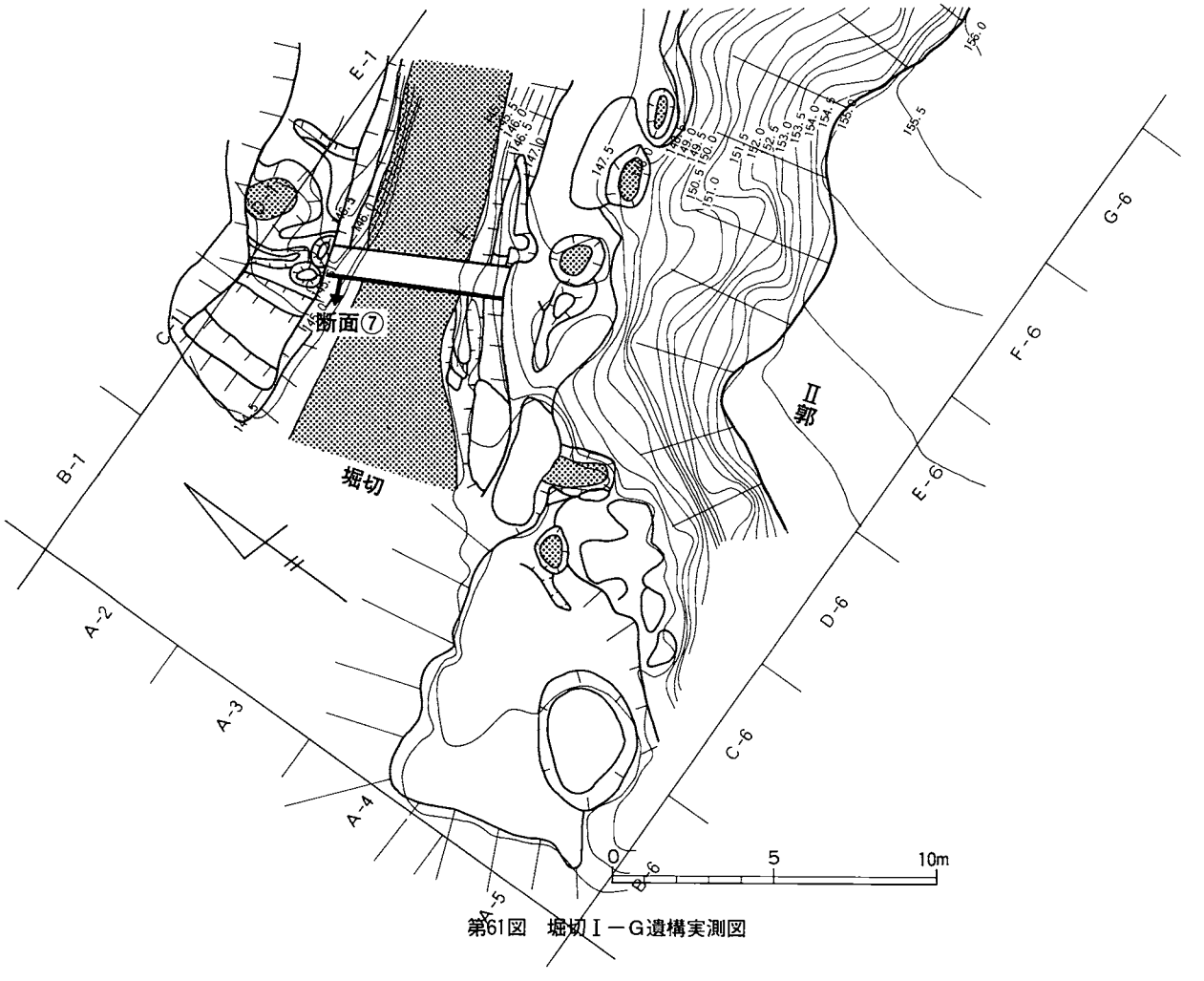
Ⅱ郭の北西側裾部でC～E－1～3区から検出された。Ⅱ郭平場の北縁との比高は約7mである。Ⅱ郭の裾部が、北北西方向へやや緩傾斜地となって延びるため、これを断ち切る為の堀切と思われる。

調査区は、発掘調査時の農道迂回路に利用されていたので、完掘はできなかった。

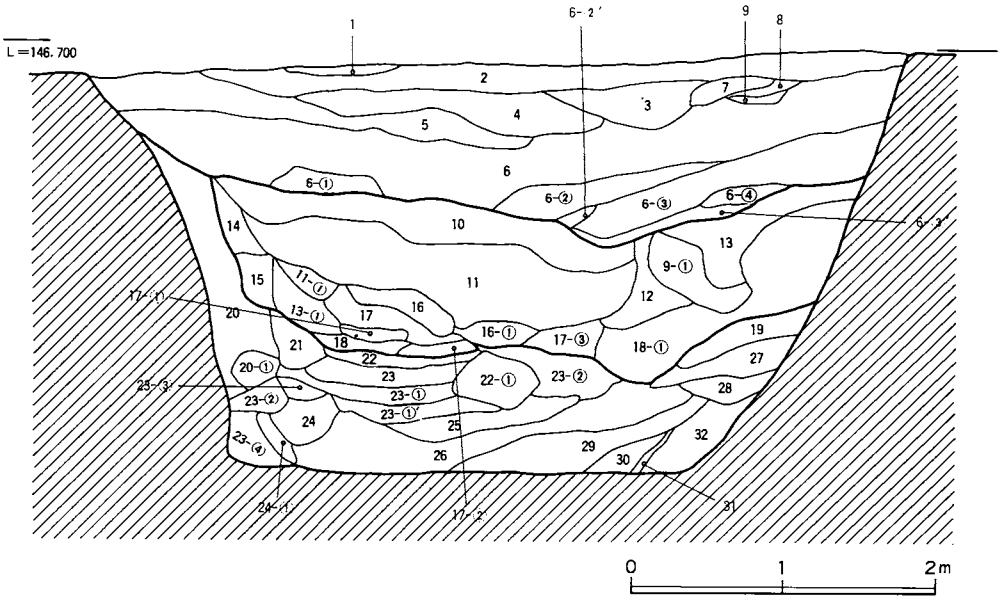
堀切の主軸はN70°Eで、検出部分は長さ10m、堀幅（上場）は東端で2.5m・西端で4.3mである。堀切の断面形状は逆台形であるが、西壁は切り込み面に対してやや凸面となり、東壁は逆に凹面となっている。堀切の規模は、堀切の土層断面図⑦で、上場幅2.6m・底部幅1.5m・深さ1.4mを測る。

調査時は冬季（2月）にもかかわらず、湧水が激しく、あたかも水濠の様相を呈した。

堀切の埋土は、上部から厚さ0.5mまでが近世堆積土であった。底部近くの埋土から、滑石製の壺（383）が出土している。



第61図　堀切Ⅰ－G遺構実測図



第62図　堀切Ⅰ－G土層断面図⑦

近世堆積土（推定）	1	褐色表土	廃城直後の堆積土（推定）	17-②	灰色味を帯びる
	2	(軟)白色シラス土～灰茶褐色土		17-③	～(軟)ネズミ色土
	3	淡灰茶褐色土～オレンジ色土(粒子)		18	灰茶褐色土
	4	褐灰色土～オレンジ色土(ブロック)(少)炭化物		18-①	(軟)
	5	褐灰色土～灰黒色土		19	(硬)褐灰色土～薄茶色土
	6	(極・軟)白色シラス土		20	(硬)灰白色シラス土
	6-①	～茶褐色土(ブロック)		20-①	灰色味を帯びる
	6-②	やや固く、灰色味を帯びる		21	(軟)白色シラス土(よごれた感じ)
	6-②′	不純物が混入		22	ネズミ色のシラス土(水成層)
	6-③	(軟)		22-①	やや黒っぽく、きめが細かい
	6-③′	～褐色土		23	鹿のまだら色土
	6-④	(硬)		23-①	茶色味が濃い
	7	黒褐色土～オレンジ色土		23-①′	～灰色粘土
	8	灰褐色土(不純物が混入)		23-②	こげ茶色味を帯びる
	9	白灰色砂土（不純物が混入）		23-③	灰茶色土(ブロック)
廃城から近世までの堆積土（推定）	9-①	白灰色砂土		23-④	ネズミ色土
	10	(極・粘・硬)黒褐色土		24	薄茶色土
	11	(やや粘・硬)黄褐色土		24-①	～白色粘土
	11-①	～オレンジ色土		25	灰白色シラス土～茶褐色土
	12	褐灰粘土～白色シラス土		26	灰褐色土
	13	褐灰色土		27	(極・軟)茶褐色土～乳白色土(まだら)
	13-①	よごれた感じ		28	(よごれた感じ)灰褐色土～白色シラス土(まだら)
	14	(軟)褐灰色土～灰茶褐色土		29	灰茶褐色土
	15	(やや硬)灰褐色土		30	灰オリーブ色粘土
	16	(極・粘・硬)淡褐色土		31	赤褐色鉄分土
	16-①	～ネズミ色土		32	ネズミ色シラス土(地山剝離土)
	17	(極・粘・硬)乳白色粘土			
	17-①	～ブロック状、桃色味を帯びる			

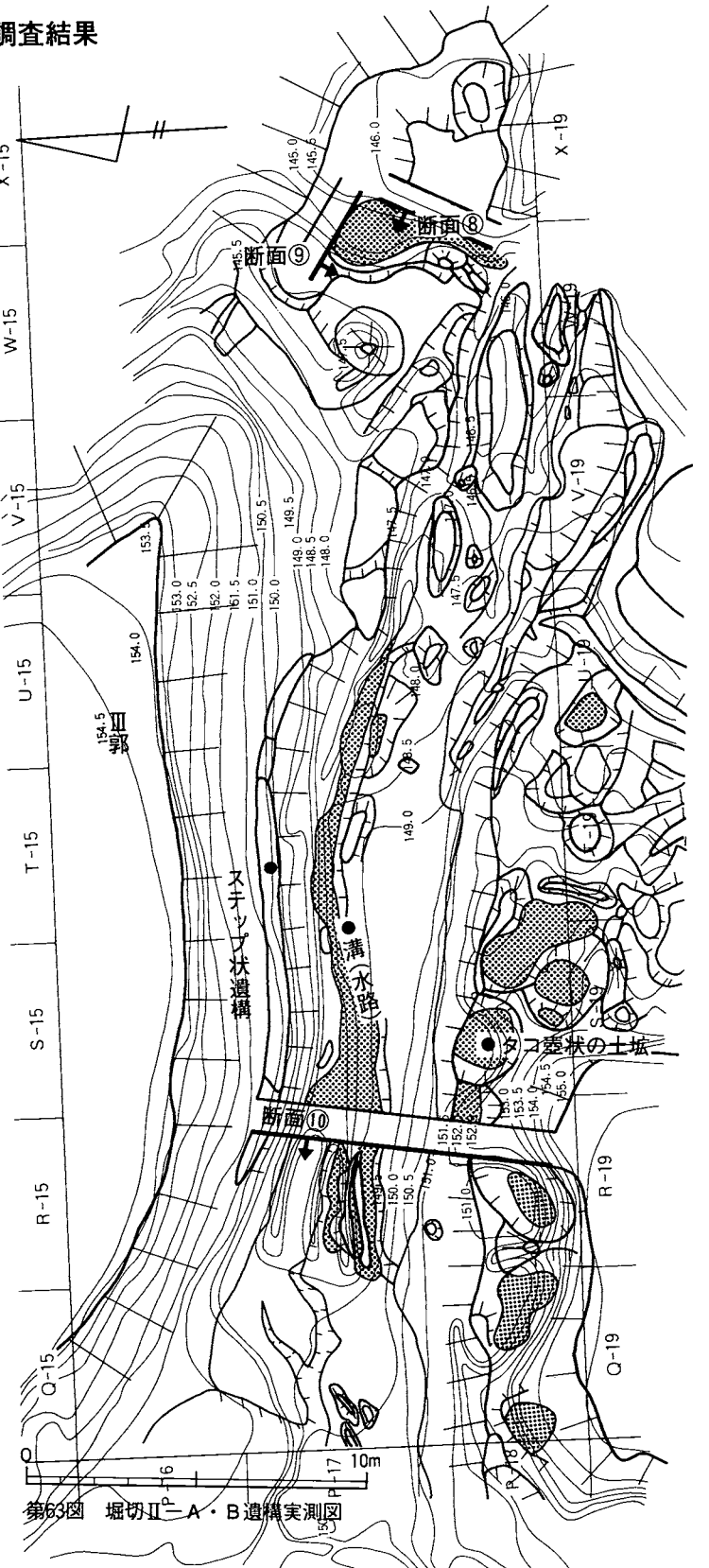
第49表　堀切Ⅰ－G土層観察表⑦

第11節　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂの調査結果

Ⅲ郭～Ⅳ郭間の堀切で、土層観察用のベルトを境に、東側をⅡ－Ａ、西側をⅡ－Ｂとした。堀切の主軸はＮ84°Ｗで、長さは約30ｍ、上場幅は11.5ｍ、下場幅は４ｍを測る。Ⅲ郭の南縁からの比高は、堀切の西寄りで約６ｍである。堀底は西側より東側へ傾斜しており、両端の比高差は約３ｍである。

堀底の中央部には、先端部が丸味を帯びる柱状の溝が通っており、堀切の水抜きの役目を果たしたものと思われる。この溝は西側の先端部で３条の小溝に分かれており、土層観察用のベルト付近で１本にまとまっている。溝の深さは堀底から約2.2ｍで、幅は0.7～0.9ｍである。溝は、形状から自然の浸食作用によるものと思われる。

Ⅲ郭寄りの堀壁には長さ15.5ｍ・幅0.6ｍの階段状ステップがある。ステップの上面は硬層で、踏み固められていることが明らかである。犬走り的な通路として利用されたものと思われる。現状からして、ステップがさらに西側へ延びていた事は明らかである。

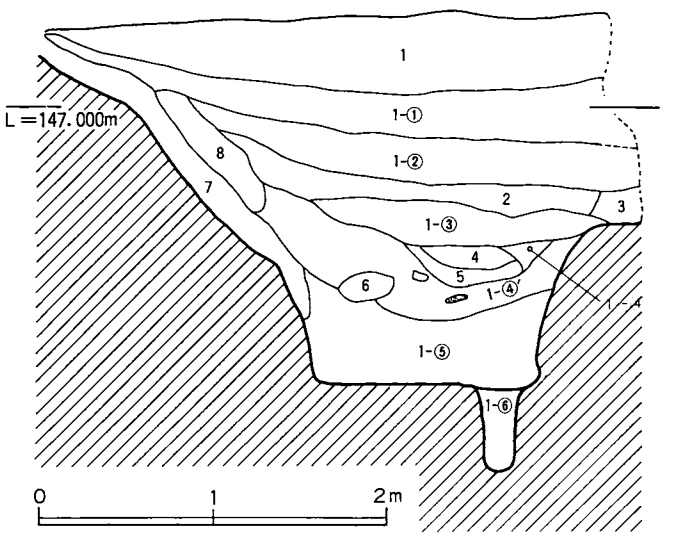


第63図　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ遺構実測図

堀切のⅣ郭寄りには、堀壁に蛸壺状の土　が12基掘り込まれていた。その内、土層断面図にかかる部分は上位をやや削平されているが、上場幅が1.1m、下場幅の最大径が1.4m、深さ2mを測る。掘り方は、中途から下位にかけてオーバーハングする。

土層断面図⑧によれば、堀切Ⅱ－Bの東端は、残存上場幅3.3m、下場幅1.3m、深さ2mの堀切となっている。断面形状は逆台形で、堀壁の傾斜角度は北壁で50°・南壁で75°である。堀底の南側寄りに水路跡が残っている。

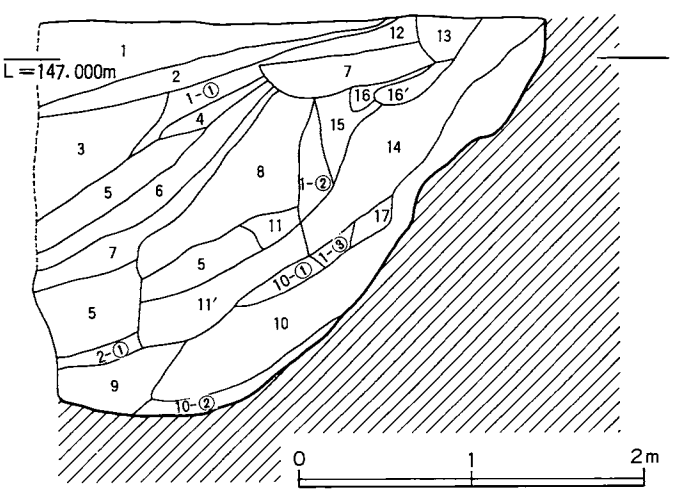
なお、堀切Ⅱ－Bは東端部の近くで、北側へ一条の堀切を派生させている。土層断面図⑨から、堀切の形状は、弧状を呈するもので残存上場幅2.9m・深さ2.2mの規模であることが判る。



第64図　堀切Ⅱ－A・B土層断面図⑧

1	褐灰色土
1-①	～(少)灰黒色土＋乳白色シラス土
1-②	～灰黒色土＋(少)乳白色シラス土(硬)
1-③	(極・軟)
1-④	～(少)乳白色シラス土
1-④′	(軟)
1-⑤	～灰黒砂土(軟)
1-⑥	～灰色シラス土
2	灰黒色土～褐灰色土
3	灰茶色土～(少)アカホヤ
4	(極・硬)灰褐色土～茶褐色土
5	乳白色土～灰褐色土＋灰黒砂土
6	ブロック土(アカホヤ＋小礫、灰黒砂土＋褐灰色土)
7	灰色シラス(地山剝離土)
8	灰褐色土～灰色シラス土

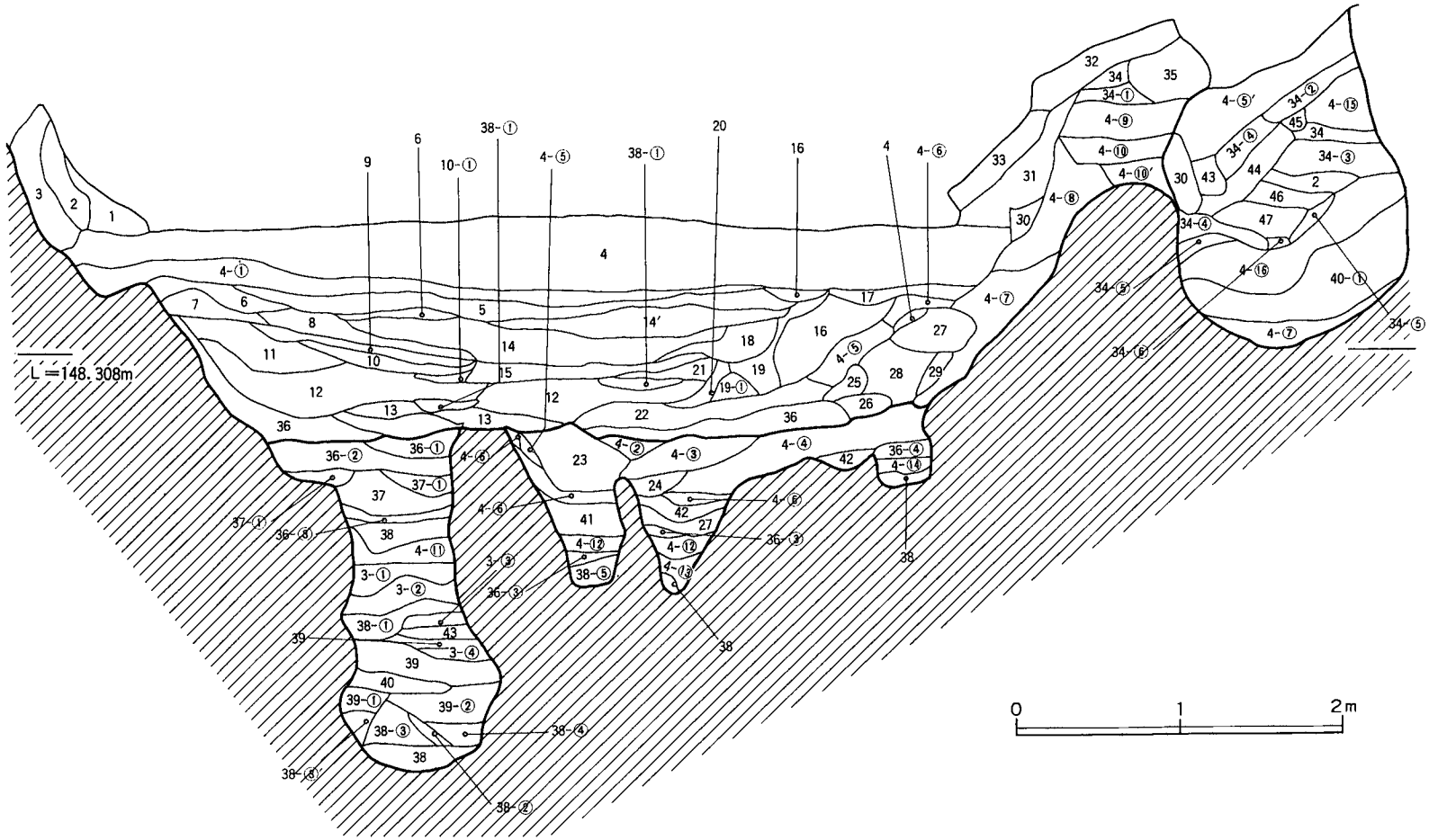
第50表　堀切Ⅱ－A・B土層観察表⑧



第65図　堀切Ⅱ－A・B土層断面図⑨

1	灰褐色土
1-①	～(少)灰黒色土(パサパサ土)
1-②	～灰黒色土＋アカホヤ
1-③	～乳白色シラス土＋灰黒色土
2	褐灰色土(パサパサ土)
2-①	～灰黒色土
3	褐色土(軟)
4	乳白色シラス土～灰褐土＋灰黒土
5	灰黒色土～灰褐色土＋アカホヤ
6	乳白色シラス土～アカホヤ＋灰褐色土
7	黒灰色土～アカホヤ
8	黒灰色土～灰褐色土
9	白褐色土～褐色土
10	白褐色土
10-①	～灰褐色土＋黒灰色土
10-②	～褐色土
11	アカホヤ～黒茶色土＋灰褐色土
11′	やや黒色味を帯びる
12	灰黒土～褐灰色土
13	アカホヤ～灰褐色土
14	乳白色シラス土～褐色土
15	黒灰色土～アカホヤ(まだら)
16	アカホヤ～(少)灰黒色土
16′	～灰黒色土(やや軟)
17	乳白色シラス土～灰黒色土

第51表　堀切Ⅱ－A・B土層観察表⑨



第66図　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ土層断面図⑩

1	表土(黒色土)フワフワ	10	黒色土	34-④	～(少)肌色粘土
2	褐色土～黒色土	10-①	～褐灰色土	34-⑤	～灰褐色土＋灰黒砂土
3	白褐色シラス(硬)	11	アカホヤ～(少)褐色土	34-⑥	～白色シラス土
3-①	～灰褐色土＋(少)灰黒砂土	12	褐灰色土～乳白色シラス土＋(少)灰褐色土	35	黒褐色土～黄色シラス土＋灰褐色土(フカフカ)
3-②	(軟)	13	灰茶色土～灰黒砂土	36	褐灰色土
3-③	～(少)灰黒砂土	14	茶褐色土～灰黒色土＋アカホヤ	36-①	～白色砂土
3-④	～褐色粘土	14′	茶褐色土～アカホヤ(まだら)＋灰黒色土	36-②	～乳白色シラス土
4	灰褐色土(硬)	15	灰黒色土(硬化土)	36-③	～褐色粘土
4-①	～褐色粘土	16	乳白色シラス土～茶褐色土	36-④	薄茶色土
4-②	～褐色粘土＋白色シラス土	17	茶褐色土＋(少)黄色シラス土＋灰褐色土	37	乳白色シラス土
4-③	～灰色シラス土＋アカホヤ＋灰黒色土	18	黒褐色土～アカホヤ	37-①	～灰茶色土
4-④	～灰白色シラス土	19	アカホヤ～薄茶色土	38	灰黒砂土
4-⑤	～薄茶色土＋(少)黄色シラス土	19-①	アカホヤ～(少)薄茶色土＋灰黒色土	38-①	～褐灰色土(ポロポロ)
4-⑤′	～薄茶色土＋黄色シラス土	20	灰茶色土～(少)アカホヤ	38-②	～褐色粘土
4-⑥	～灰色シラス土＋黄色シラス土(まだら)	21	茶色土	38-③	～アカホヤ(コブシ大)
4-⑦	(地山剝離土)	22	褐灰色土～(軟)灰白色シラス土	38-③′	～アカホヤ(ウズラ卵大)
4-⑧	～肌色粘土	23	褐灰色土～(少)灰黒色土	38-④	～アカホヤ
4-⑨	～肌色粘土＋茶色土	24	褐灰色土～アカホヤ＋白色シラス土	38-⑤	～灰褐色土
4-⑩	～黄色シラス土	25	灰茶褐色土	39	褐色粘土
4-⑩′	～(少)黄色シラス土	26	アカホヤ～薄こげ茶色土	39-①	(帯状になる)
4-⑪	～灰黒砂土＋白褐色土	27	褐色粘土～(少)灰褐色土	39-②	～灰黒砂土
4-⑫	～灰黒砂土	28	褐灰色土～アカホヤ	40	灰色シラス土
4-⑬	～明褐色土＋灰黒砂土	29	褐色粘土～灰褐色土＋(少)黄色シラス土	40-①	～肌色粘土(土塊)
4-⑭	～灰黒砂土＋茶色シラス土	30	樹根	41	薄茶色土～褐灰色土＋アカホヤ
4-⑮	～(少)茶色シラス土＋肌色粘土	31	茶褐色土～灰色シラス土＋黄色シラス土(フカフカ)	42	薄茶色土～(少)灰白色シラス土
4-⑯	～灰黒砂土＋肌色粘土	32	表土(黒褐色土)フワフワ	43	白褐色土～灰褐色土
5	灰茶色土～チョコレート色土	33	黒褐色土～茶褐色土	44	茶褐色土～黄色シラス土＋白褐色土
6	乳白色シラス土～灰茶色土	34	黄色シラス土(フカフカ)	45	肌色粘土～黄色シラス土＋灰褐色土
7	褐灰色土～乳白色シラス土＋アカホヤ	34-①	～薄茶色土(フカフカ)	46	肌色粘土～灰黒粘土
8	アカホヤ～褐灰色土＋黒灰色土	34-②	～灰褐色土＋薄茶色土	47	白色シラス土～肌色粘土
9	灰黒砂土～灰色土	34-③	～黒色の鉄分土		

第52表　堀切Ⅱ－A・B土層観察表⑩

第12節　堀切Ⅲ－A・B・Cの調査結果

発掘調査前は、Ⅳ郭の東側裾部に階段状のステップが南北方向に延びていた。高城跡では、裏側部分に該当する所である。

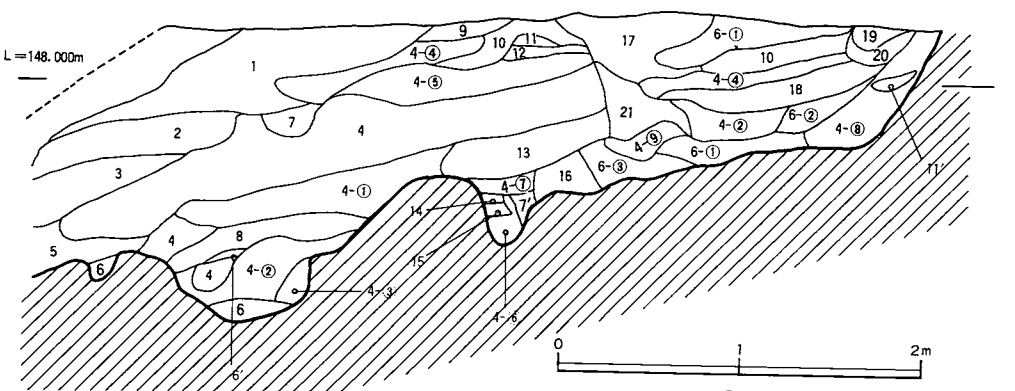
調査の結果、調査区の南側寄りからは、土層断面図⑪に見るように、断面形状が逆台形で、上場幅２ｍ、下場幅1.5ｍ、深さ0.8ｍを測る溝が検出された。但し、シラスの浸食作用で、堀壁などは凸凹の状態であった。Ｑ－24区からＲ－22区までの長さ13ｍ分が確認出来た。Ⅳ郭東縁との比高は約９ｍである。

Ｔ－21区からＲ－25区にかけては、長さ27.5ｍの小溝が検出された。土層断面図⑫によれば、断面形状は逆台形で、下場幅１ｍ、切り込み面からの深さは1.1ｍである。堀切底部に刻まれた下段面の遺構と思われる。埋土から判断するに、通路として利用されていた様である。

Ｔ－21区からＴ－23区の土層観察用ベルトまでは、人工的な溝に加えて浸食作用による水路が形成されている。柱穴状の溝で、底部幅0.4ｍ・深さ１ｍほどである。

総じて、Ⅳ郭東側裾部の堀切は、土層断面図⑫から、Ⅲ郭寄りの北側において、堀幅５ｍ程の大きさで、堀底の内側には底幅１ｍの小溝が重複しており、東側肩部に土塁を有する形態であったことが判る。

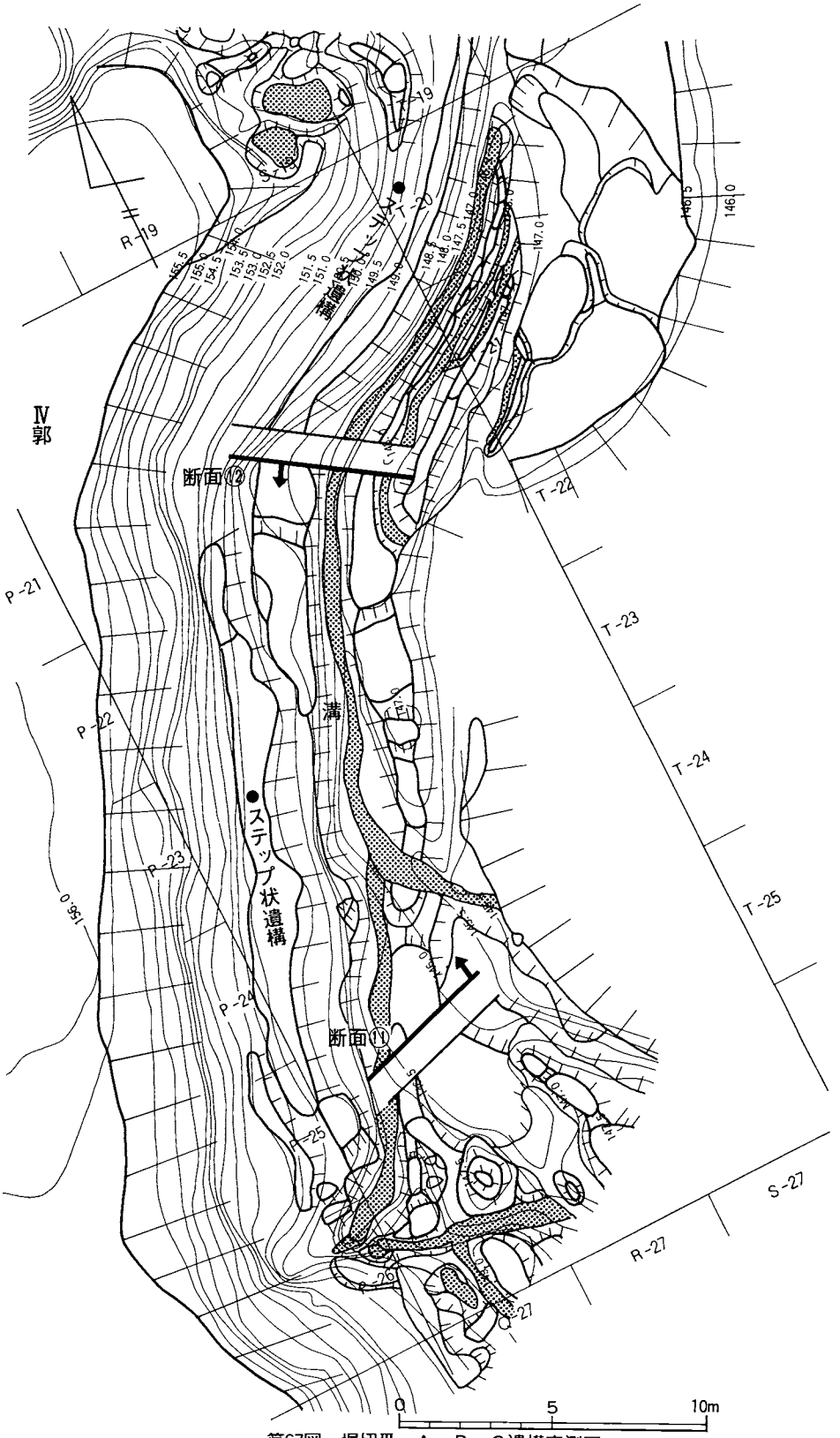
なお、この堀切の上位には、ステップ状遺構が堀切と並列しており、犬走り的な役割を果たしていたと思われる。堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃからは多量の遺物が出土している。



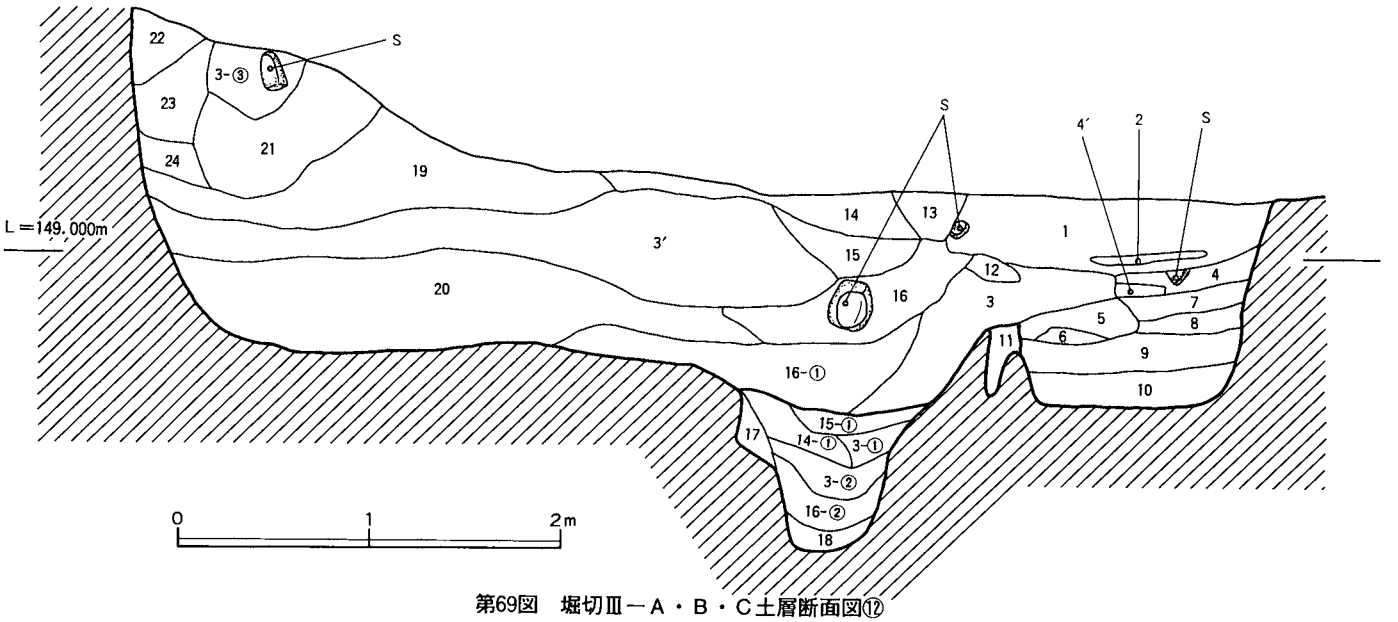
第68図　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ土層断面図⑪

1	灰色シラス土～(少)アカホヤ	4-⑨	～灰黒砂土＋アカホヤ	11	茶褐色土
2	茶褐色土～灰色シラス土＋乳白色シラス土	5	灰褐色土～乳白色シラス土＋灰色シラス土	11′	(ブロック)
3	褐灰色土～灰色シラス土	6	灰黒砂土	12	アカホヤ～(少)灰色シラス土
4	灰色シラス土	6′	(粟粒大)	13	薄茶色土～灰色シラス土＋乳白色シラス土
4-①	～灰褐色土＋灰黒砂土(やや硬)	6-①	～灰褐色土＋アカホヤ(パサパサ土)	14	桃色シラス土
4-②	～茶色土＋乳白色シラス土	6-②	～灰褐色土＋乳白色シラス土	15	(軟)アカホヤ～灰褐色土＋(少)灰色シラス土
4-③	～(少)灰褐色土	6-③	～灰褐色土＋黄褐色土	16	灰褐色土～灰黒砂土＋(少)乳白色土
4-④	～アカホヤ＋灰褐色土	7	薄茶色土～灰色シラス土	17	チョコレート色土～灰色シラス土(小ブロック)
4-⑤	～白褐色シラス土	7′	(少)灰色シラス土(軟)	18	アカホヤ～乳白色シラス土＋灰色シラス土
4-⑥	～アカホヤ	8	灰褐色土～(少)薄茶色土	19	白褐色土～アカホヤ＋灰色シラス土
4-⑦	～褐色土(軟)	9	アカホヤ～チョコレート色土	20	アカホヤ～茶色土＋灰黒色土
4-⑧	～茶色土(小ブロック)	10	薄茶色土～アカホヤ＋灰褐色土	21	アカホヤ～褐灰色土＋薄茶色土

第53表　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ土層観察表⑪



第67図　堀切Ⅲ－A・B・C遺構実測図



第69図　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ土層断面図⑫

1	茶褐色土(硬)	7	白褐粘土～白灰色土	16	褐灰色土
2	灰褐色土～褐色土＋アカホヤ	8	灰黒砂土～(少)灰褐色土	16-①	～灰褐色土
3	灰褐色土	9	灰色砂土～灰褐色土(互層)	16-②	～褐色粘土
3′	(よごれた感じ)	10	薄茶色土～灰黒砂土＋灰褐色土	17	白色シラス土～(少)灰褐色土(水成層)
3-①	～(多)白色シラス土	11	灰黒色土～灰褐色土	18	(粗粒大)灰黒砂土～(少)褐灰色土
3-②	～灰黒砂土＋褐色粘土	12	灰色粘土～褐灰色土	19	アカホヤ(二次堆積土)
3-③	～アカホヤ	13	黒褐色土	20	白色シラス土(二次堆積土)
4	白灰黒砂土	14	黄褐色土	21	チョコレート色土～アカホヤ(硬)
4′	(軟)	14-①	～灰褐色土	22	灰色シラス土
5	乳灰色土～薄茶色土＋灰褐色土	15	白褐色土	23	灰色シラス土～アカホヤ
6	薄茶色土～(少)灰褐色土	15-①	～灰褐色土	24	薄茶色土～アカホヤ

第54表　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ土層観察表⑫

第13節　土　　坑

ＳＫⅡ－０１

Ⅱ郭東側斜面のＭ－12区から検出された土坑で、形状は楕円形を呈する。方位はＮ18°Ｗで、長径1.8ｍ・短径1.65ｍ・深さ0.5ｍを測る。

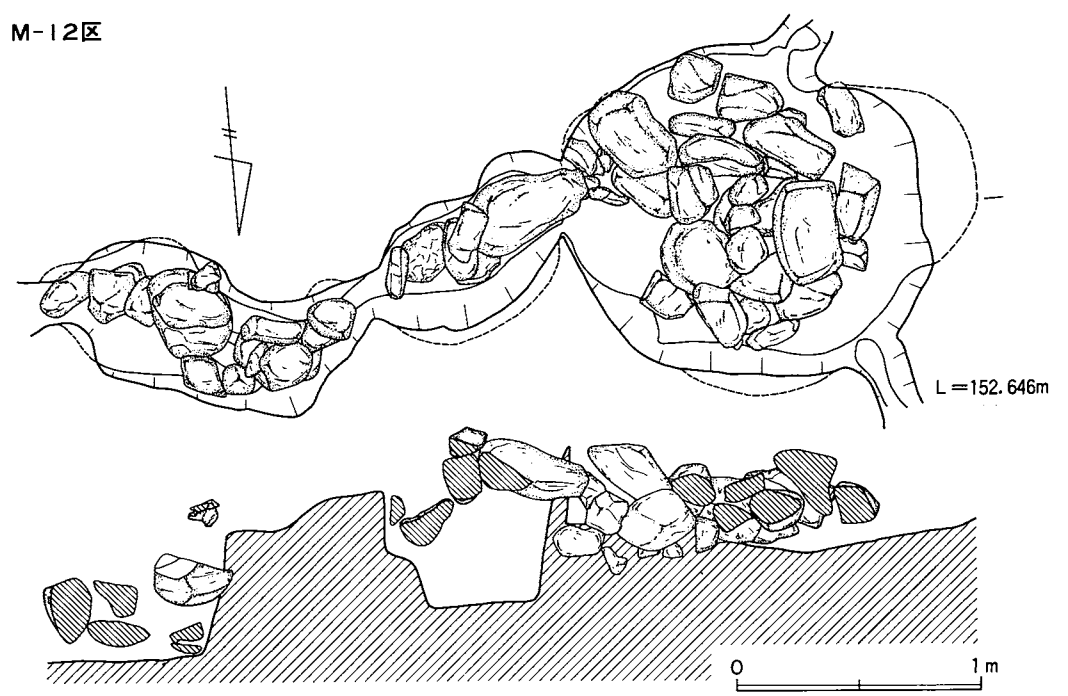
西側の壁はオーバーハングしており、全体的に雑な掘り方の観がある。この土拡は斜面の東側において、長さ2.2ｍ・幅0.2～0.5ｍの溝状遺構と繋がっている。

土拡からは、多量の自然石が出土した。砂岩・チャート・阿蘇溶結凝灰岩などで、長さ0.5ｍ・幅0.3ｍ・厚さ0.3ｍ程の一抱えもある様な礫が多かった。埋土は建築址の柱穴に多く見られる褐灰色土で、建築址と同時代の遺構と思われる。なお、堀切Ⅰ－Ａや堀切Ⅰ－Ｃの埋土からも多くの自然石が出土している。

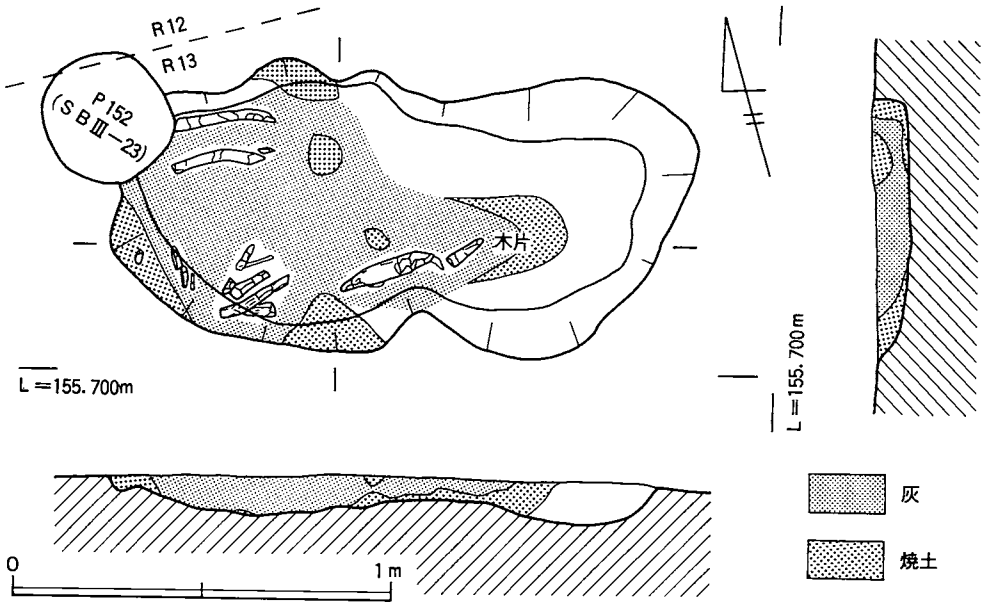
ＳＫⅢ－０１

Ⅲ郭のＲ－13区から検出された土坑で、ＳＢⅢ－23の建築址が土坑を切っている。上位部分は、ほとんど削平されて底部のみの残存である。土坑の形状は、中途がややくびれるものの、楕円形を呈する。方位はＮ73°Ｗで、長径1.6ｍ・短径0.7ｍ・深さ0.1ｍを測る。

土坑内には炭化物が堆積し、小枝の燃え滓も10数片残っていた。焼土も点々とあり、それらの分布範囲は、土坑の中央部から西側にかけて集中していた。掘り窪めた穴の西側寄りで、木切れを燃焼させている事が明らかである。土坑内から遺物は出土していない。



第70図　ＳＫⅡ－０１



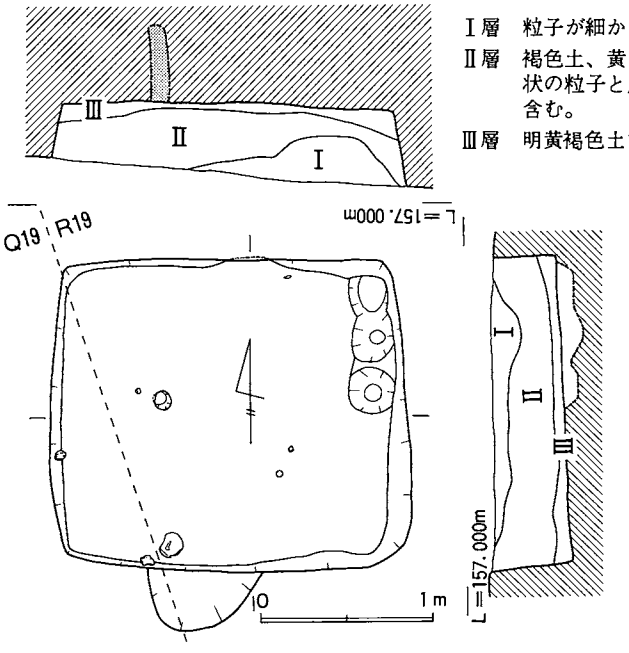
第71図　ＳＫⅢ－０１

ＳＫⅣ－０１

Ⅳ郭のＲ－19区から検出された土坑で、形状は方形を呈する。方位はＮ68°Ｅで、長径2.55ｍ・短径1.75ｍ・深さ0.45ｍを測る。埋土はシラスの二次堆積土で、土師器皿の細片が４片出土した。

床面は平坦で、北東隅で３個の柱穴を切っている。Ⅳ郭における建築物が破棄された後に掘り込まれたものと思われる。

Ⅳ郭西側斜面における蛸壺の掘削と同時期頃の遺構と推察される。



第72図　ＳＫⅣ－０１

第Ⅳ章　出　土　遺　物

（注）
口径、底径の数字を（　）でとじているものは復元の値を意味する。そうでないものは実測値である。瓦器の中で焼きの非常に固いものは硬質瓦器とした。

（1）建築址及び柱穴より出土した遺物について

1（ＳＢⅢ－23）・3（ＳＢⅢ－11）・6（ＳＢⅢ－12）・7（ＳＢⅢ－25）は、土師器皿で、体部はいずれも船型を呈する。7の内底面にはロクロ痕が鮮明に残り、ススが付着する。

2（ＳＢⅢ－23）・4（ＳＢⅣ－30）・5（ＳＢⅢ－25）は土師器坏である。2は体部がラッパ状に鋭く立ち上がり、4・5は船型を呈する。4は体部外面に、5は体部内外両面ともに稜線が目立つ。

8（ＳＢⅢ—18）は取瓶である。手ずくね土器で、体部内面に大量の銅が付着する。ＳＢⅢ－18より東側へわずかに離れた柱穴から出土した。

9（ＳＢⅡ－9）は瓦器の擂鉢である。器面の磨滅が激しい。

10は硬質瓦器の茶釜である。非常に丁寧な造りで、垂下様の耳が付く。Ⅰ－10区の柱穴より出土した。

11（ＳＢⅢ－2）は備前の擂鉢である。条線の一単位は7本で、体部外面に指頭圧痕が残る。

12（ＳＢⅢ－25）は青磁碗で、非常に退化した細蓮弁文様がある。

13（ＳＢⅢ－13）は白磁碗で、体部外面に5条の稜線が巡る。

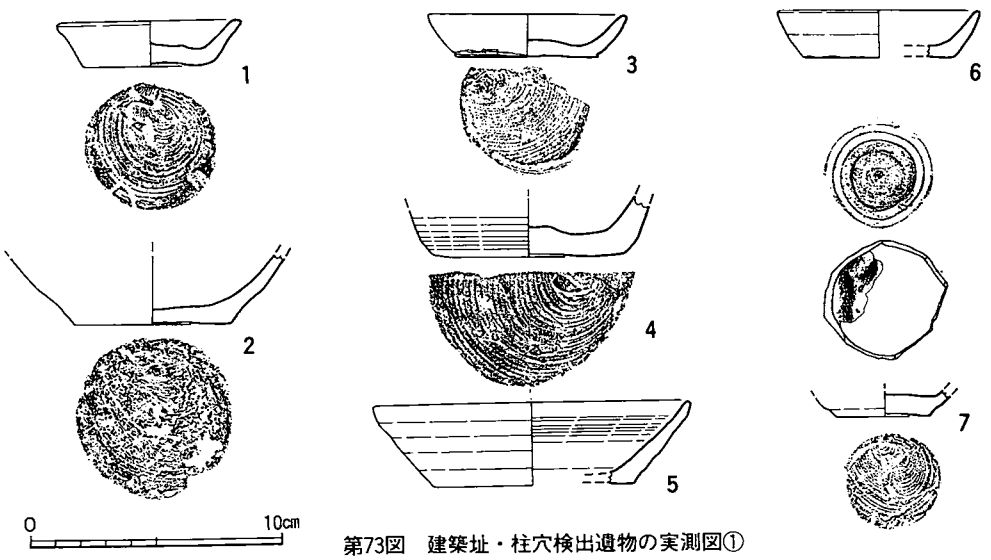
14（ＳＢⅢ－14）は青白磁碗で、体部は直線的に伸びて、口縁でやや外反する。

15（ＳＢⅢ－15）は青磁碗の底部で、見込みの薄い界圏内に曲線状の文様がある。

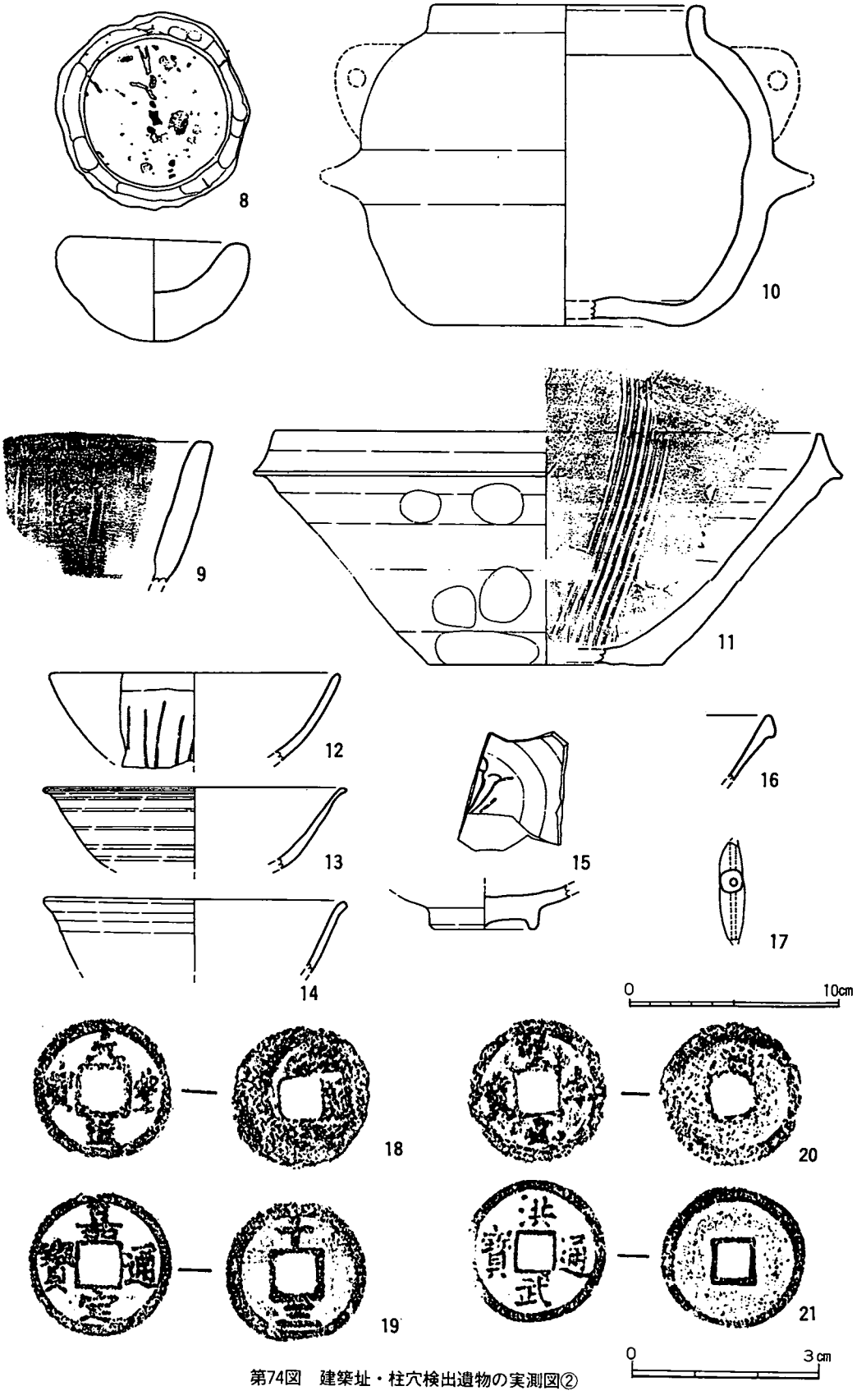
16（ＳＢⅢ－16）は白磁で口縁は玉縁状にやや丸くなる。

17（ＳＢⅢ－25）は土錘である。直径1.1cm、残存の長さ4.6cmを測る。

18（ＳＢⅡ－10）・19（ＳＢⅢ－17）・20（ＳＢⅢ－22）・21（ＳＢⅢ－21）は古銭である。18は元豊通寶、19は嘉定通寶、20は聖元宗寶、21は洪武通寶である。



第73図　建築址・柱穴検出遺物の実測図①



第74図　建築址・柱穴検出遺物の実測図②

土師器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
1 土師器皿	7.4	4.7	1.8	体部は底部から鈍く立ち上がり、わずかに外反気味に伸びる。内底面は全体的に凸になる。 底部はやや上げ底。	体部内面は横ナデ、体部外面はナデ。体部外面の調整はやや荒い。内底面のロクロ回転痕は、後のナデで薄い。	胎土は良（小豆大の石粒を含む）。 色調は鈍い橙色。
2 土師器坏		6.2		体部は平底から鈍く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。	体部の内外両面はナデ、体部内面はザラつくが、丁寧な調整。体部外面は調整荒し。内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。	胎土は良（胎土に含まれていた2個の小石が剝落して2つの穴があいている）。 色調は鈍い桃色。軽量の土器。
3 土師器皿	(8.0)	(5.8)	1.7	体部は平底から鈍く立ち上がり、内弯気味に伸びる。内底面は全体的に凸になる。	体部の内外両面は丁寧なナデで平滑。内底面のロクロ回転痕は、ナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は良。色調は非常に汚れた淡橙色。 外底面に最初の糸切りで失敗してできた沈線あり。
4 〃		(7.7)		体部は底部から鋭く立ち上がり、内弯気味となる。底部は極端に肥厚、内底面の中央は大きく凸になる。	内底面のロクロ回転痕はナデで、ほとんど消滅。外底面の糸切り痕はナデで、やや薄い。体部外面の下位に薄い稜線。	胎土は精良。色調は鈍い黄橙色（内底面はうっすらと灰黒色が砂状に覆う）。
5 〃	(12.7)	(8.0)	3.3	体部は底部からやや鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁でわずかに内反する。	体部内外両面は横ナデ。体部内面に比較的鮮明な稜線。	胎土は良。色調は内面が鈍い黄橙色、外面は褐灰色。二次焼成の土器。
6 〃	(8.0)	(6.0)	1.9	体部は底部から鈍く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。	体部内面は横ナデ。体部外面はナデ。両面は丁寧な調整で平滑。	胎土は精良。色調は鈍い橙色、但し、体部外面の下位は灰黒色。緻密な焼成。
7 〃		3.8		外底はやや上げ底。	内底面のロクロ回転痕は極めて鮮明。外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は良。色調は内面が褐灰色、外面が鈍い黄桃色で、内底面にススが付着。 緻密な焼成。

瓦器・硬質瓦器

8 取瓶	9.3			体部は鈍く立ち上がり、内弯気味に伸びる。 体部は肥厚（厚さ2～2.4cm）し、口縁はやや丸味を帯びる。	手ずくね土器。体部内面に亀裂が走る。体部外面に指押え。	体部内面は灰黒色と小豆色に変色。 体部外面の上位は灰色、下位は白褐色。 銅が大量に付着。
9 瓦器 (擂鉢)				体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁は扁平。	体部内面は丁寧なナデ。体部外面は指押え後、ナデ。口縁はヘラ削り後、強いナデ。 体部内面の立ち上がりはヘラ削りでくびれる。	色調は白褐色。体部外面に小さな凸凹が広がる。条線の磨滅が激しく、単位は不明。
10 硬質瓦器 (茶釜)	13.1	11.0	15.2	体部は大きく内弯し、鍔の部分から内傾する。 頸部は直線的に立ち上がり、やや内傾する。 外底は上げ底となる。器形はややいびつ。	胴部内部は指押え後、横ナデで、下位に指頭圧痕が横に並ぶ。鍔の上下両面は丁寧な横ナデ。胴部の外面は指押え後、荒い横ナデ。	体部外面にススが付着。
11 備前の (擂鉢)	(26.4)	(11.3)	11.2	体部は平底から鈍く立ち上がり、わずかに内弯気味に伸びる。口縁直口。外面の中央部はやや凹む、端部内側は斜めに切れる。体部は中途で薄壁。	体部内面は丁寧な横ナデ。条線の一単位は7本で、若干、左回りに掻き上げている。体部外面は指押えの後、横ナデ。体部外面の立ち上がりはヘラ削りの後、荒い横ナデ。	色調は小豆色（外底面のみ灰白褐色）。

第55表　建築址・柱穴出土遺物の観察表①

青磁・白磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
12 青磁碗	(14.1)			体部は鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。	体部外面に非常に退化した細蓮弁文様が描かれている。口縁直下の弧線と谷部からの縦線は弁を構成しない。体部は丁寧なナデ。	胎土は灰褐色。釉色は灰オリーブ色、釉のかかりは不十分。文様は多少凸凹の感があるものの、見た目に不鮮明。
13 白磁碗	(14.7)			体部は鋭く立ち上がり、直線的であるが、多少、内弯気味に伸びる。口縁はやや外反する。	体部内面は丁寧なナデ。体部外面に5条の稜線。指で触れると凸凹の感あり。	胎土は白灰色。釉色は灰白色で口縁端はやや薄茶色。
14 青白磁碗	(14.7)			体部は直線的に伸びて、口縁でやや外反する。	体部内面は滑らか。体部外面に稜線あり、内2本は鮮明である。	胎土は灰白黒色。釉色は緑灰色。
15 青磁碗		(4.9)		底部は肥厚する（厚さ0.9cm）。高台の上位幅7mm、畳付きの幅3mm、高台内の高さは中央部で2mm、端部で5mm、高台内のロクロ切り離しの突起物が目立つ。	体部内面の見込みに3条の極めて薄い界圏、圏内に曲線状の文様、高台の畳付き部分と内縁にシャープなヘラ削りがある。	胎土は白灰黄色。釉色はくすんだ感じの青白緑色、高台の畳付き及び高台内は無釉。
16 白磁				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。体部は薄壁（厚さ3mm）であるが漸次、肥厚しながら口縁に至る。口縁は玉縁状にやや丸くなる。体部外面と口縁との間に凹線。	――――	胎土は灰白色。ソフトな器面で焼成温度が低い。体部外面の口縁下に小豆大の粘土粒が付着し、そのまま焼成されている。
17 土錘				――――	――――	直径1.1cm。残存の長さ4.6cm。

第56表　建築址・柱穴出土遺物の観察表②

土製取瓶（8）の付着物については、熊本県工業技術センター（所長　毛利邦郎）に分析を依頼した。分析の結果は下記の通りである。

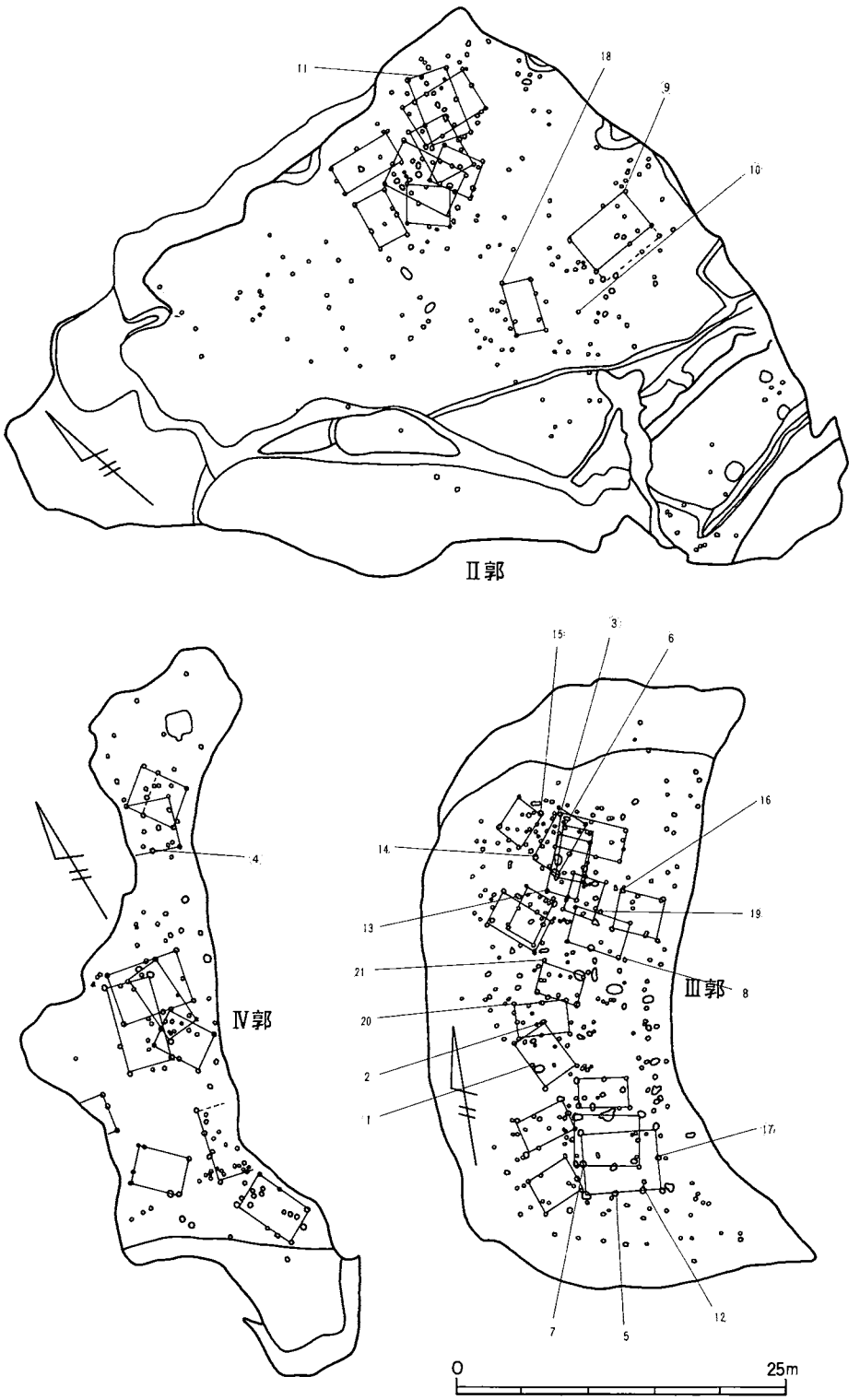
①試料名　：　土製取瓶

②分析方法：　蛍光X線分析法・X線マイクロアナライザー分析法

③結果　　：

土製取瓶
――A（緑色系）：主成分は（Cu）で、鉄（Fe）、鉛（Pb）、シリカ（Si）が少量、カルシュウム（Ca）、亜鉛（Az）、ニッケル（Ni）、チタン（Ti）、塩素（Cl）、イオウ（S）、アルミニウム（Al）が微量検出された。

――B（褐色系）：銅（Cu）、シリカ（Si）、カルシウム（Ca）、が多量で鉛（Pb）、鉄（Fe）、アルミニウム（Al）、が少量、塩素（Cl）、イオウ（S）、亜鉛（Zn）、チタン（Ti）が微量検出された。



第75図　建築址・柱穴検出遺物の出土状況（注）図中の番号は遺物実測番号である。

（2）Ⅱ郭出土の遺物

22は釉色がコバルト・ブルーの青磁碗で、口径は（13.2）cmを測る。体部外面に蓮弁文がある。23・24・31・33・37は同安窯の青磁碗である。23は口径（13.7）cmで、口縁は大きく外反する。31は口径（14.8）cmで、体部はやや内弯気味に立ち上がる。33は口径（14.2）cmで、体部は薄壁で極めて直線的に伸び、口縁で外反する。37は体部内面に櫛描文がある。24は体部外面に蓮弁文を持つ青磁碗である。口径（12.9）cmで、体部は内弯する。

32は釉色が白黄色の磁器碗で、口径（12.5）cmを測る。体部の内外両面に白っぽい稜線が目立つ。

25・27・30は青白磁碗である。25は口径（12.6）cmで、体部は大きく内弯し、外面に薄い稜線が目立つ。27は口径（14.1）cmで、体部はわずかに内弯気味に伸びる。30は口径（15.2）cmで、体部は鋭く立ち上がり内弯する。口縁直口である。

26・35は白磁碗である。26は口径（12.7）cmを測り、体部は薄壁で、口縁直口である。35は口径（12.6）cmで、口縁は体部外面でややくびれて直口となる。

34は陶器皿で釉色は暗茶褐色である。波状の口縁を有し、口径（13.9）cmである。体部外面に細かい稜線が入る。

36と39は白磁皿である。36は口径（8.4）cm・底径（3.5）cm・器高1.9cmを測る。39は口径（12.3）cm・底径（6.8）cm・器高3.1cmを測る。高台の内側まで全面に施釉されている。

28・29・40は青磁碗で、28の底径は（6.4）cmを測る。底部は肥厚し、高台の畳付きは丸味を帯びる。29は底径（6.0）cmで、底部は碁笥底を呈する。40は口径（12.1）cmで、体部は口縁でやや外反する。38は同安窯の青磁碗である。口径（16.5）cmで、口縁は大きく外反する。41は青白磁碗で、口径（19.1）cmを測る。体部は直線的に伸びて、口縁で大きく外反する。42は稜花皿である。口縁は波状を呈し、丸味を有する。口径は（8.6）cmを測る。44は青磁の盤で体部内面に鎬文がある。

43は陶器碗である。器面にくすんだ感じの飴釉がかかる。口径は（11.3）cmを測る。

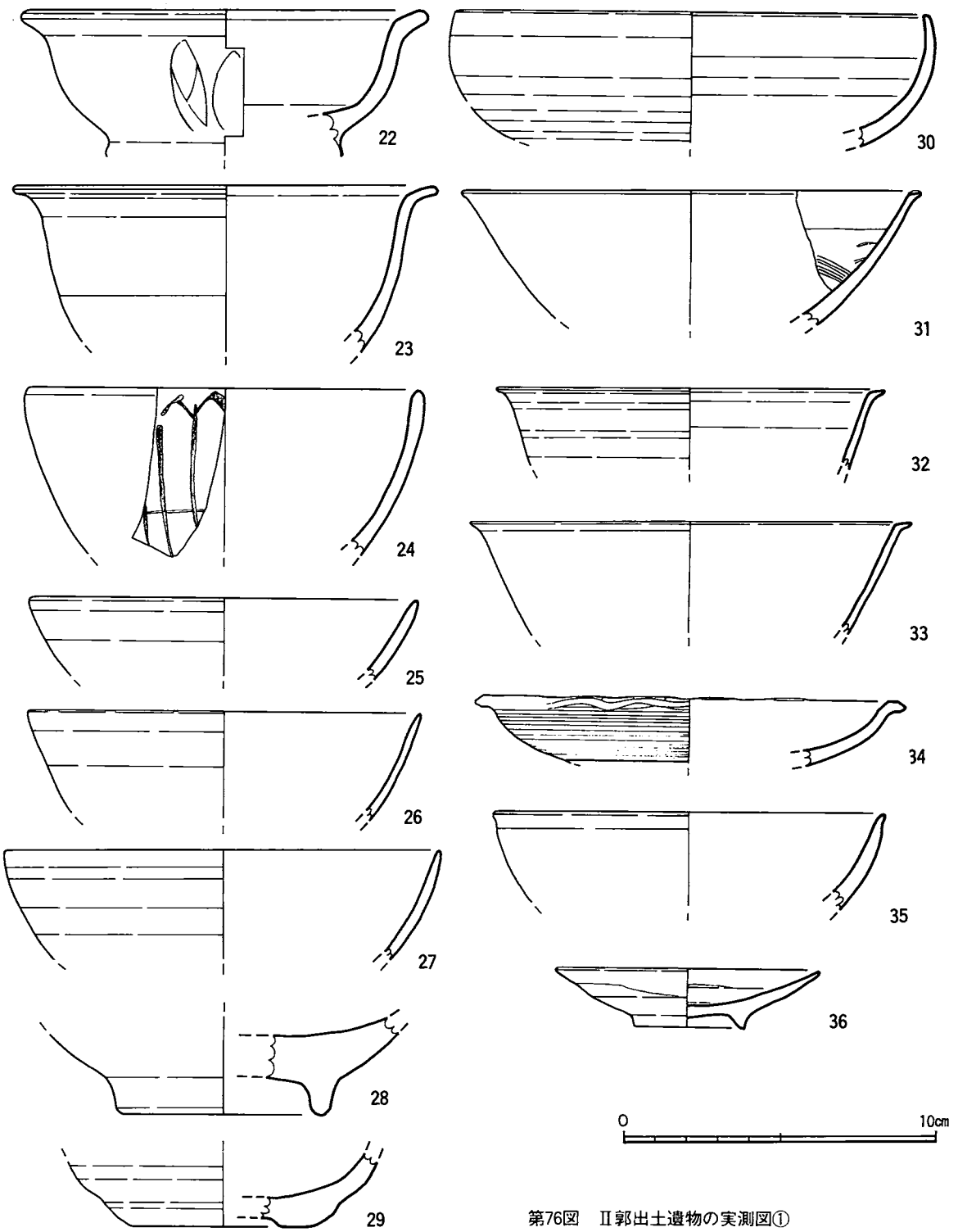
45は瓦器の火舎である。口径（28.6）cmを測り、体部は薄壁で直立する。体部外面に花文のスタンプがある。

46は備前の壺で、口径（37.9）cmを測る。口縁は玉縁状で胎土に小礫を多く含んでいる。

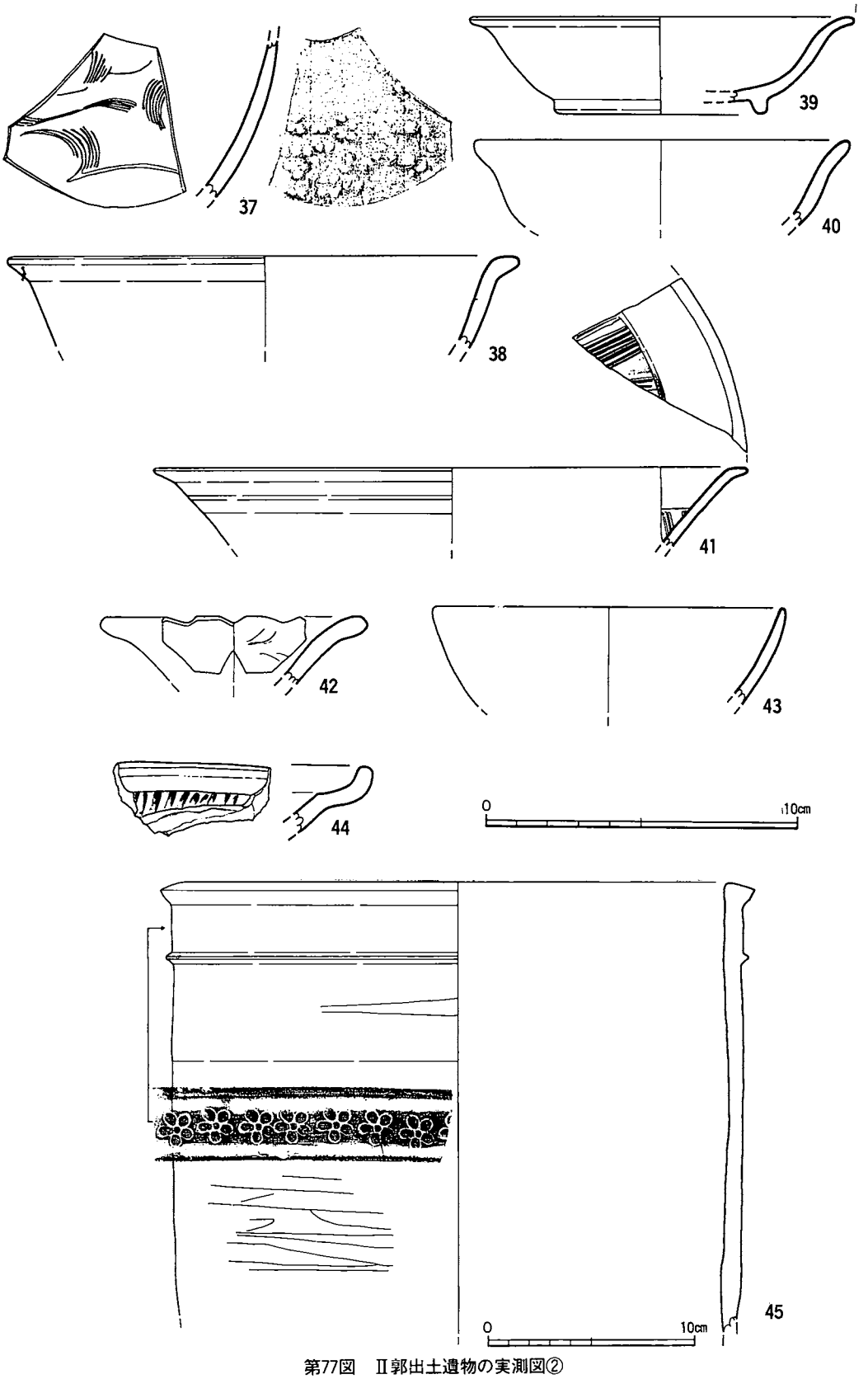
47・51・54は硬質瓦器の壺である。47は口径（26.7）cmで、体部外面はヘラ磨きされている。焼成不良である。49は備前の大甕である。頸部は「く」の字に外反し、口径（31.6）cmを測る。51・54は扁平な口縁を有し、頸部外面に六角形の文様スタンプがある。50は硬質瓦器の坏で、口径（18.6）cmを測る。色調は赤褐色で非常に緻密な焼成である。

52は土師系の小壺である。48は滑石製の石鍋である。外底面に鮮明なノミ痕が残る。53は須恵系の土器で、内底面に銅が付着している。55は硬質瓦器の擂鉢である。体部内面の上位に、

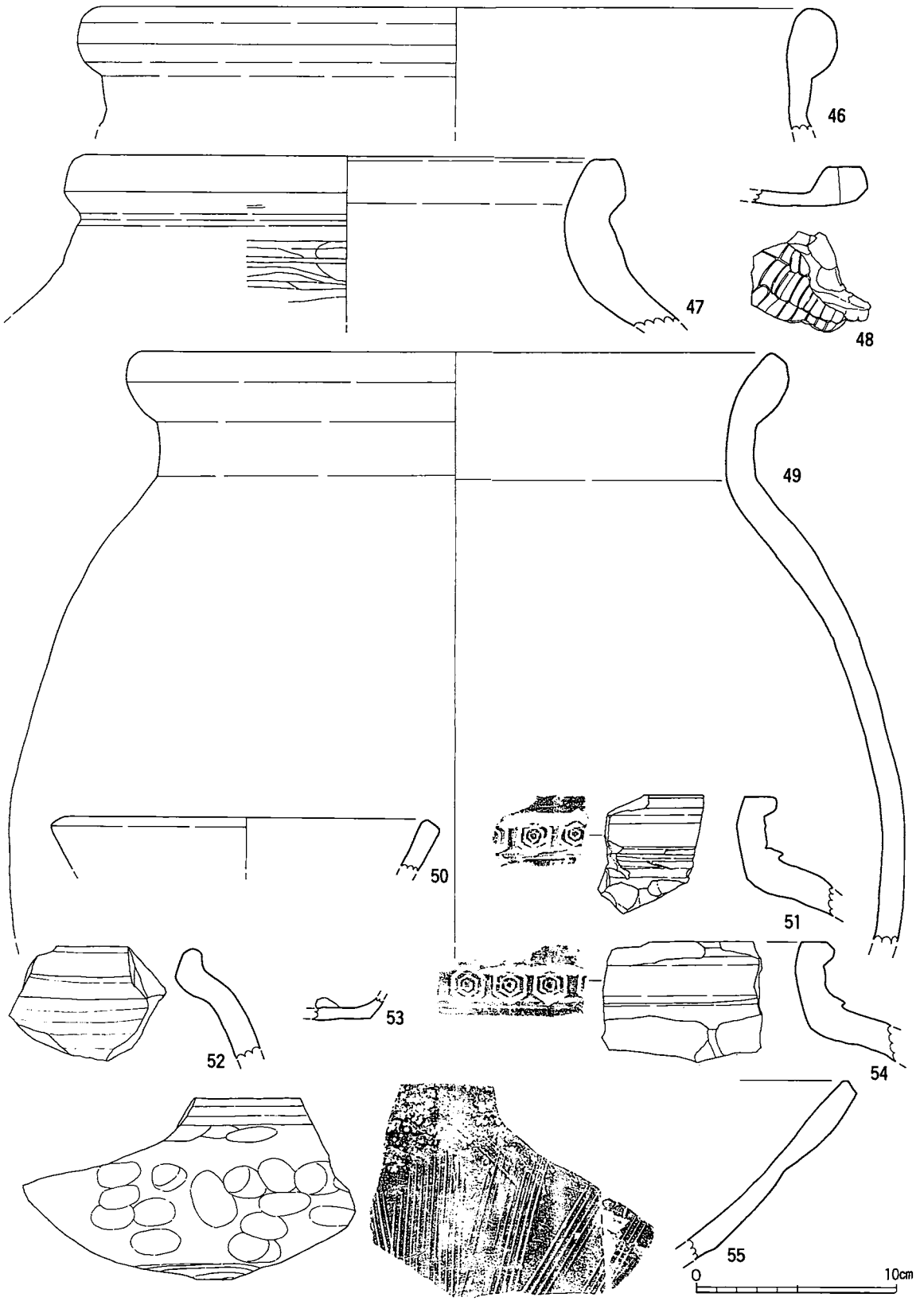
右斜め下方向への細線掻き目がある。56～61は古銭で、56・57・59は寛永通寶、58は祥符通寶、60は皇宋通寶、61は元豊通寶である。62～66は砥石である。62・64は手に持って使用したものと思われる。65は転び石を利用している。66は天草砥石である。67～69は鉄釘である。



第76図　Ⅱ郭出土遺物の実測図①



第77図　Ⅱ郭出土遺物の実測図②



第78図　Ⅱ郭出土遺物の実測図③

青磁・白磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
22 青磁碗	(13.2)			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。 外反する口縁上位の内面は扁平。	体部外面に蓮弁文。	胎土は白灰褐色。釉色はコバルト・ブルー。 体部内弯面と口縁内面部分と外反との境は、折り目の様になり白っぽい線がつく。
23 青磁 (同安窯)	(13.7)			体部は鋭く立ち上がり、やや内弯する。口縁は大きく外反。	体部の内外両面の上位に鮮明な稜線。体部外面に鮮明な沈線。無文。	胎土は精良な灰白色。釉色は灰オリーブ色。
24 〃	(12.9)			体部は中途で一旦、内外両面からわずかにくびれるが、口縁にかけて再び漸次、肥厚する。 体部は鋭く立ち上がり内弯する。	体部外面に蓮弁文。	胎土は灰白褐色。釉色は青白緑色。 体部内面に貫入が目立つ。 体部外面に薄い貫入。
25 青白磁碗	(12.6)			体部は鋭く立ち上がっており、わずかに内弯気味に伸びる。	体部外面の上位に薄い稜線。	胎土は灰色。釉色は淡灰色。
26 白磁碗	12.7			体部は鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。 体部は薄壁（厚さ3㎜）で口縁直口。	体部外面の上位に薄い稜線。	胎土は白色。釉色は白灰色。
27 青白磁碗	(14.1)			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。 口縁直口。	体部外面に薄い稜線。	胎土は灰色。釉色は光沢をもった灰色。
28 青磁碗		(6.4)		底部は肥厚する（厚さ1.5cm）。高台の畳付きは丸味を有する。高台の上位幅1cm。	体部内面は比較的丁寧なナデ。	胎土は褐灰色、全体的に生焼けの感じがする。色調はくすんで鈍い感じの青緑色。 体部外面に気泡が発生し、壁面に直径1㎜程の小穴を幾つも生じている。高台内は無釉。
29 〃		(6.0)		体部は底部から丸味を持って鈍く立ち上がる。 体部は立ち上がり部分で、ややくびれる。底部は碁笥底を呈する。	体部内面は雑な調整。体部外面に薄い稜線。 外底面にロクロ回転痕が残る。	胎土は白灰色。内面の色調は灰白黄色の薄い釉、外面は緑白色。外底面に重ね焼きの痕が残る（トチ付着）。碁笥底の外底面にも施釉。上げ底部分は無釉。
30 青白磁碗	(15.2)			体部は鋭く立ち上がり、大きく内弯する。	体部内面の口縁下に鮮明な稜線、中途にごく薄い稜線。体部外面に薄い稜線。	胎土は灰褐色。釉色は灰色であるが極小の黒点が混じる。
31 青磁 (同安窯)	(14.8)			体部は鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。 口縁でわずかに外反。	体部内面の上に界圏、体部内面は丁寧なナデで、2条単位と6条単位の櫛描線が描かれている。	胎土は精良な灰白色。 釉色は灰オリーブ色（やや灰色濃し）。 体部外面には胎土中の極小礫が燃成中に剝落しており、極小穴がいくつかある。
32 磁器窯	(12.5)			体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁はやや外反。	体部内面に3条の薄く白っぽい稜線。3条の稜線の内、下位2条間は小沈線となる。体部外面に7条の薄く白っぽい稜線。無文。	胎土は白色。釉色は白黄色。
33 青磁 (同安窯)	(14.2)			体部は極めて直線的に伸び、口縁で外反する。 体部は薄壁で、厚さ3㎜。	体部と口縁内面の外反部分との境に鮮明な稜線。 体部外面の上位に薄く白っぽい稜線。無文。	胎土は灰白黄色。 釉色はやや白っぽい灰オリーブ色。
34 陶器皿	(13.9)			体部は鈍く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。 口縁は波状を呈し、弧状に外反する。	体部外面の全面に細かい稜線。	胎土は灰色。釉色は暗茶褐色。

第57表　Ⅱ郭出土遺物の観察表①

青磁・白磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
35 白磁碗	(12.6)			体部は鋭く立ち上がっており、内弯気味に伸びている。口縁は外面でややくびれて直口となる。	無文。	胎土は灰白褐色。釉色は灰白青色。
36 白磁皿	(8.4)	(3.5)	1.9	体部はやや外反する。	無文。	胎土は灰白褐色。釉色は灰オリーブ色。
37 青磁 (同安窯)				体部はやや内弯する。	体部内面に櫛描文。	胎土は灰白色。釉色は灰オリーブ色。 体部外面に小さな気泡状の小穴が点々とある。
38 〃	(16.5)			体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びる。 口縁は大きく外反。体部から口縁へ漸次肥厚する。	無文。	胎土は灰白色。釉色はくすんだ感じのオリーブ灰色。 体部の内外両面に薄い貫入あり。
39 白磁皿	(12.3)	(6.8)	3.1	体部は鋭く立ち上がり、外反気味に伸びる。 底部の厚さ3㎜。	高台内側にまで全面に施釉。	胎土、釉色は白色。全体にくすんだ感じで、ソフトな感じのする釉色。
40 青磁碗	(12.1)			体部はやや外反する。	無文。	胎土は灰白褐色。釉色は灰オリーブ色。
41 青白磁碗	(19.1)			体部は鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁は大きく外反する。	体部内面の上位に薄い稜線。体部内面の中途から下位は無釉。幅1㎜の溝状の縦線が入る。内1つは6本を単位とする。	釉色は灰色で、体部外面は光沢あり。 体部内面の無釉部分は褐色。
42 青磁 (稜花皿)	(8.6)			体部は鈍く立ち上がっており、外反気味に伸びる。 口縁は丸味を帯びる。	口縁は波状。体部内面にヘラ描きによる横線文様。	胎土は灰褐色。釉色はやや茶色味を有する灰オリーブ色。稜花皿の可能性あり。
43 陶器碗	(11.3)			体部は鋭く立ち上がっており、やや内弯気味に伸びる。	――――――	胎土は白褐色（焼成温度は低い）。釉色は黒色（全体にくすんだ感じのアメ釉がかかる）。体部の内外両面に細かな貫入あり。和製天目。
44 青磁(盤)				体部は鈍く立ち上がっている。 口縁は鍔状で、端部は丸味を帯びる。	体部内面に鎬文。	胎土は灰白色。釉色は灰オリーブ色。

瓦器・硬質瓦器

45 瓦器 (火舎)	(28.6)			体部は鋭く立ち上がり、ほぼ直立するがわずかに内弯気味となる。口縁でごくわずかに外反。体部は薄壁（厚さ6～10㎜）、体部は中途でくびれて、漸次、肥厚しながら口縁に至る。 口縁は極めて扁平で、外側へわずかに傾斜し、端部は突帯状に張り出す。体部外面の上位に小規模な突帯。	体部内面は横ナデ。体部外面はヘラ削り後、荒い横ナデ。中途を除いて、横方向のヘラ削り痕が残る。体部外面の上位に花文（5枚の花びら）スタンプ、体部外面の上位に極めて細い沈線（削痕）。	色調は灰白色。
46 備前の (壺)	(37.9)			口縁は玉縁状。	頸部の内外両面は、丁寧な横ナデ。	胎土に小礫を多く含む。色調は小豆色。
47 硬質瓦器 (壺)	(26.7)			頸部はくの字に外反、体部は口縁にかけて漸次、肥厚（厚さ2.5cm）する。口縁は扁平で、中央部でわずかに凹む。	口縁の上面から内側にかけて、非常に丁寧なナデ、体部内面に無数の凸凹が全面に広がる。 体部外面は荒いヘラ磨き。	胎土は白褐色（焼成不良で一部灰黒化）。色調は鈍い黄橙色、質量感のある土器。

第58表　Ⅱ郭出土遺物の観察表②

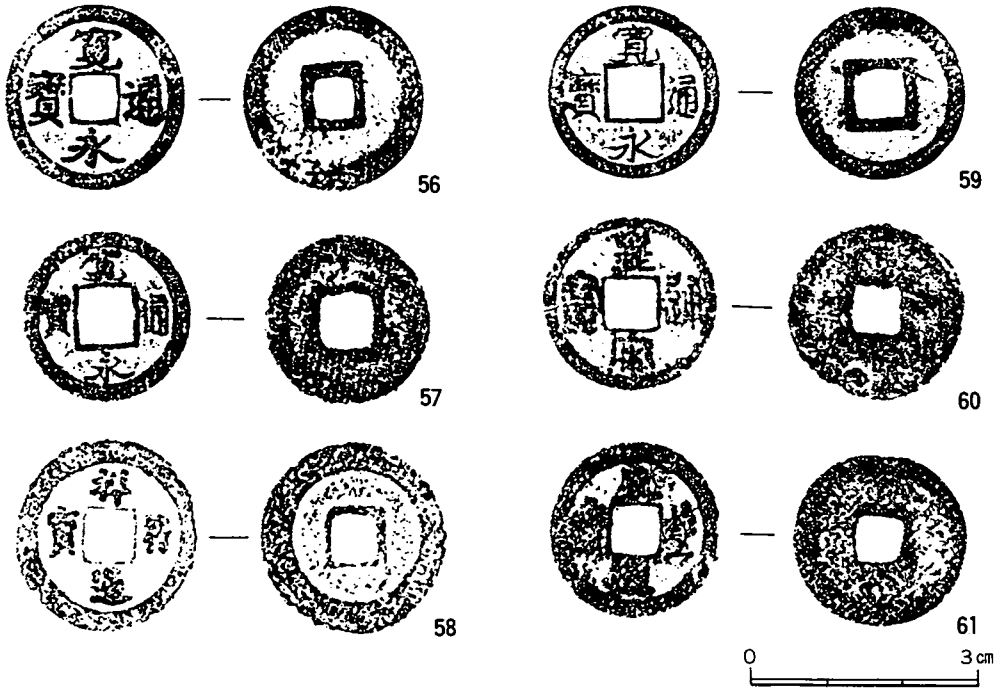
瓦器・硬質瓦器

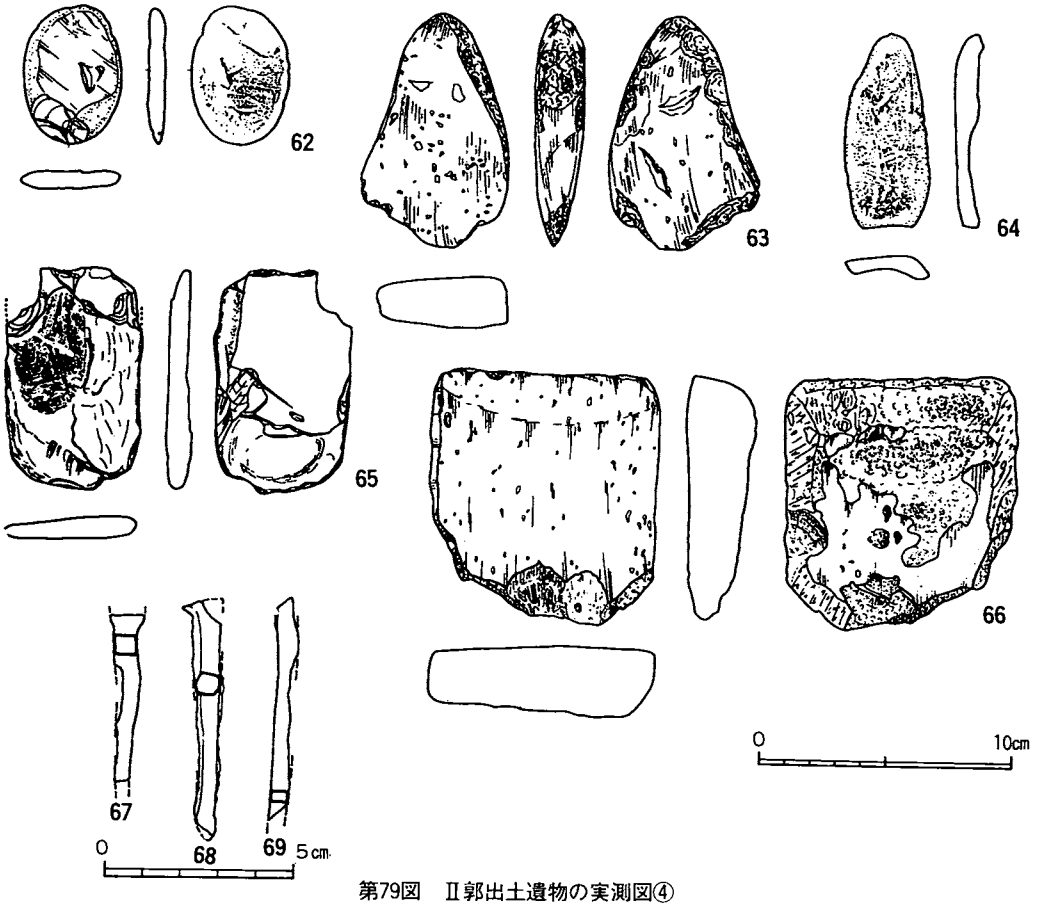
No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
48 滑石製 (石鍋)				口縁の上面はやや扁平（幅5㎜）で、外面に耳がつく。	外底面に鮮明なノミ跡（幅5㎜）が並列する。 口縁の耳は削り出しによる。上面は扁平(幅1.2cm)で、体部より外側へ1.4cm程突き出す。	体部内面は灰白色。 体部外面は灰黒色。
49 備前 (大甕)	(31.6)			頸部は、くの字に外反。	口縁の上面から内側にかけて非常に丁寧なナデ。 沈線上の窪みあり。 体部内面はヘラ削り後、丁寧なナデ。体部外面はヘラ削り後、荒い横ナデ。	色調は、若干小豆色。
50 硬質瓦器 (坏)	(18.6)			体部上位は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。体部から口縁にかけてやや肥厚。口縁は扁平（厚さ1.0m）、端部内側はやや斜めに切れる。	体部内面は横ナデ、口縁はヘラ削り後、ナデ。 体部外面はナデ。	色調は赤褐色。 非常に緻密な焼成。
51 硬質瓦器 (壺)				頸部はくの字に外反、口縁は扁平。	口縁上面とその直下内面はヘラ削り後、丁寧な横ナデ。体部内面はヘラ削り後、荒い横ナデ。 体部外面はヘラ磨き。頸部外面に六角形の文様スタンプ。	胎土は精良で鈍い橙色。 色調は瓦色。
52 土師系 (小壺)				頸部はくの字に外反。	口縁の内側はナデ、体部の内面は指押え後、丁寧な横ナデ。体部外面の上位は丁寧な横ナデ、下位は指押え後、ナデ。	色調は鈍い黄橙色。
53 須恵系 (土器)				底部は薄壁、中央部寄りでやや肥厚する（厚さ7㎜）。	底部は糸切り。	内底面に銅の付着。
54 硬質瓦器 (壺)				頸部はくの字に外反。口縁の上面は扁平で端部は突帯状に張り出す。体部外面の上位に小規模の突帯。	口縁はヘラ削り後、ナデ。体部内面はヘラ削り後、荒いナデ。下位は指押え後、荒いナデ。体部外面は丁寧なナデ、体部外面の上位に六角形文様のスタンプ。	胎土は鈍い褐色。 色調は鈍い橙色。
55 硬質瓦器 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がり、わずかに内弯気味に伸びる。体部は中途でくびれ、上位で口縁にかけて肥厚。口縁上面は扁平で中央部がやや窪む。	口縁の内側は顕著な横ナデ。体部内面の上位に右斜め下方向への細線掻き目、中途はナデ。条線の一単位は10本。体部外面は指押え。上位と下位は顕著な横ナデ。	胎土は精良で、非常に緻密な焼成。 条線は磨滅が激しい。 色調は乳白色。

砥石

No.	計測値				形態の特徴
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
62 砥石	5.41	3.90	0.64	22.46	正面は良く研磨されているが、斜め方向に幾つもの刃止まりが見られる。手に持って、刃先の部分だけを研いだものと思われる。粘板岩。
63 〃	9.11	5.92	1.98	102.58	側面は右側にのみ研磨痕が見られる。研ぎの異なる二面が見られる事から、手に持って使用したものと思われる。凝灰岩。
64 〃	7.58	3.37	1.14	27.04	正面の長軸方向に刃潰し的な削痕が見られ、固定して使用されたものと思われる。砂岩剝片。
65 〃	(8.78)	5.44	1.02	63.34	扁平な転び石を利用しており、使用面は正面の左側に見られる。粘板岩。
66 〃	10.03	9.25	2.80	332.84	正面上部には、中央に丸みを持って張り出す刃止まりが見られる。横断面は蒲鉾形を為す。天草産。

第59表　Ⅱ郭出土遺物の観察表③





第79図　Ⅱ郭出土遺物の実測図④

（3）Ⅲ郭出土の遺物

70～77は土師器皿である。形態的には、体部がラッパ状に鋭く立ち上がる70～74と、体部が船型を呈する75～77とに分類できる。前者は口径7.4cm・底径3.6～4.7cm・器高2.7cmを測る。70は焼成不良で、72は緻密な焼成である。後者は口径6.8～8.6cm・底径5.4～6.0cm・器高1.9～2.0cmである。76は緻密な焼成で、77の外底面には板目圧痕が残る。

78～95は土師器坏である。形態的には、口径に対する底径の比率が低く、体部がラッパ状に鋭く立ち上がる78～87と、船型の88～95とに分類される。前者は、口径9.6～12.0cm・底径5.5～7.0cm・器高3.7～3.9cmを測る。80・83～85は緻密な焼成で、81にはススが付着する。87は焼成不良で、質量感があり、外底は平底である。後者は、口径11.4～12.8cm・底径6.5～8.6cm・器高2.8～3.9cmを測る。89・91は緻密な焼成で、91にはススが付着する。95は外底面に板目圧痕を残す。

96・97・103は青磁の盤で、口縁はやや外反し鍔状となる。体部内面に鎬文がある。口径は96が（26.4）cm、97が（26.1）cmを測る。98・99は青磁碗である。98は口径（12.1）cmで、体部内面にヘラ描きによる曲線の施文がある。さらに、外面には蓮弁文様が見える。99は体部が大きく内弯しており、口縁は外反する。無文で、口径（16.0）cmである。100・101は青白磁の碗である。101は見込みに円形の無釉の部分があり、円内に不整形の文様が描かれている。外面には蓮弁の下位部分と思われる縦線が残る。100にも見込みにデザイン化された花弁状の文様がある。102は口縁直口で、口径（9.7）cmの白磁碗である。

104・106は青磁碗で体部内面に草花文様の一部がある。口径は、104が（15.4）cm、106が（15.6）cmを測る。105・108・117は蓮弁文様の青磁碗であるが、108・117は文様が退化して細蓮弁文様となっている。口径は105が（15.4）cm、108が（11.1）cmを測る。109は青磁碗の底部で、底径（6.1）cmを測る。見込みの圏内に印花文がある。110は青磁香炉で小脚が3ケ所に付き、底径（7.2）cmを測る。

111・114・115・118は同安窯の青磁である。いずれも体部の内外両面に櫛描文がある。111・114は碗で、体部は大きく内弯する。口径は111が（12.2）cm、114が（15.0）cmを測る。115の体部は鈍く立ち上がる。118は小型の皿である。

113・116は白磁皿である。113は低い高台が付き、口径（9.7）cm・底径（3.8）cm・器高2.1cmを測る。116は体部外面の中途に鮮明な稜線が残る。107・112は白磁碗である。107は口径（14.9）cmで、体部は外反気味に伸びる。112は口径（10.8）cmで、外面の上位に幅3mmの沈線が巡る。

119は青磁碗で、体部は大きく内弯する。口縁は肥厚し、やや外反する。口径（13.5）cm・底径（5.3）cm・器高6.3cmを測る。釉下に極めて薄い蓮弁文様がある。

121・122は青白磁碗で、121は口径(12.9)cmである。122の体部は大きく内弯し、口径(13.2)cm

を測る。120・123は白磁碗である。120の体部は内弯気味に伸びて口縁はやや外反する。口径（13.7）cmで、非常に使い込んだ磁器である。123は玉縁状の口縁を有しており、口径（13.8）cmを測る。

124は硬質瓦器の火舎である。体部に円孔があき、貼り付けの突帯がある。

126は質量感のある土製の取瓶で体部内面に銅の粒が多量に付着する。

127と132は滑石製の石鍋である。いずれも非常に丁寧な研磨がなされている。127は体部の上位に孔がある。133は砂岩製の茶臼である。

125・128～131・134・139・141は瓦器の擂鉢である。131の条線の単位は10本である。134は口径（28.4）cmを測り、かなり使い込まれていて、ほとんど条線は磨滅している。140は硬質瓦器の擂鉢で体部内面に掻き目が目立つ。条線の一単位は9本である。

135～138は瓦器の茶釜である。135は鍔の内側に指頭痕が並ぶ。137は非常に均整のとれた器形である。135の胴部は丸味を持ち、137・138は胴部がやや直立する。

142・143は硬質瓦器の火舎である。口径は142が（29.8）cm、143が（25.0）cmを測る。突帯間に花文のスタンプがある。

144～148は瓦器の茶釜であるが、この中で146は口径（10.0）cm程の小型である。150は胎土の粗い瓦器で、体部外面に円文がある。

149は須恵器の胴部である。151は土師器皿である。色調は灰褐色で薄壁であるが、極めて固い焼成である。二次焼成の可能性がある。152は瓦器の坏で外底面は荒いナデである。153は瓦器の擂鉢である。器面の磨滅が激しく、3本の条線を残すにすぎない。154は備前系の甕片である。体部の外面に亀裂が目立つ。

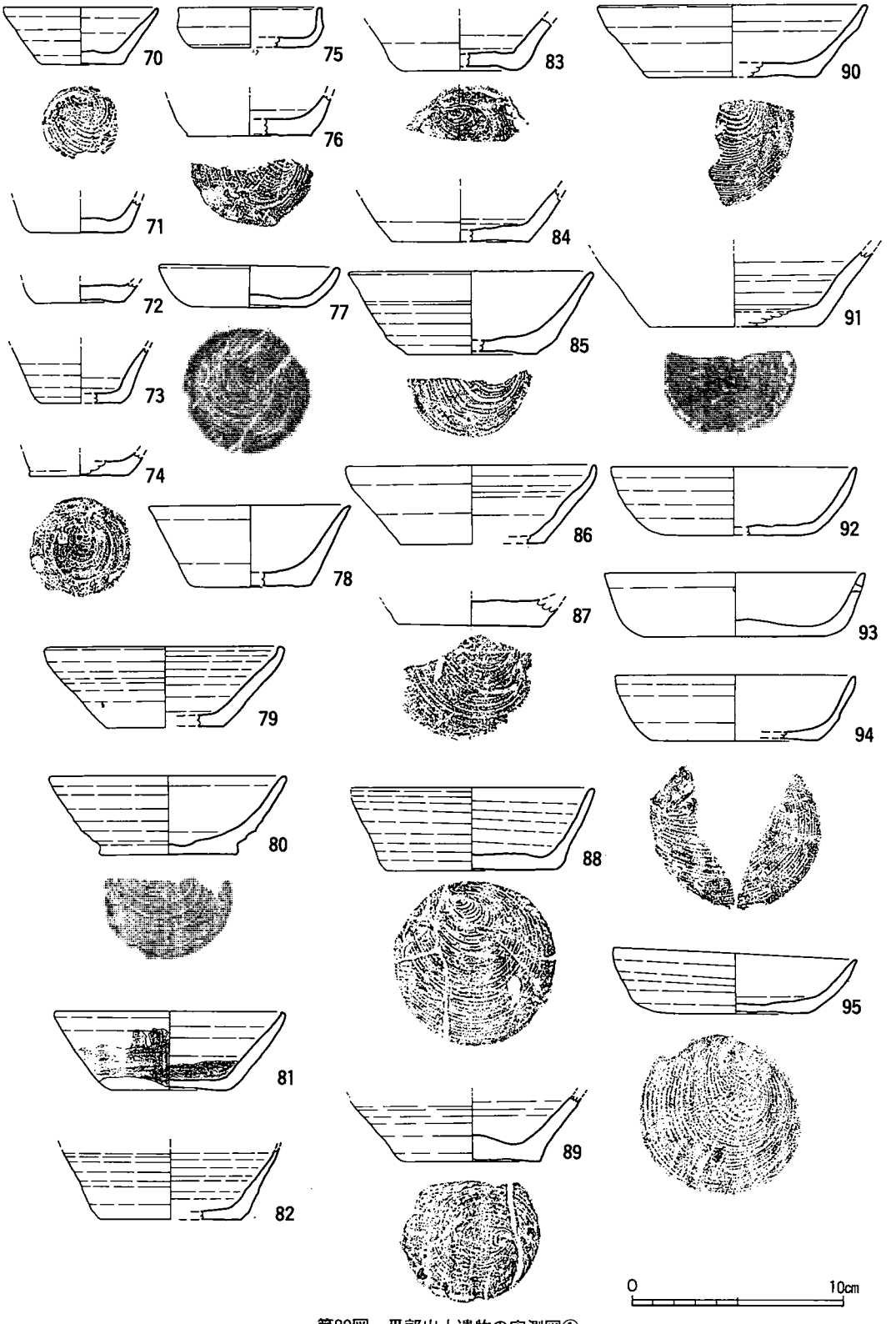
155～158は石臼である。155・156・158は上臼で、凝灰岩製である。159は二次的な火を受けている。157は茶臼の下臼で、擂目に8本の鮮明な溝が残る。砂岩製である。

159～161は古銭である。159は元祐通寶、160は淳化元寶、161は永楽通寶である。

162は鉄砲玉である。鉛玉で、直径1.2cm・重さ10.2ｇを測る。上下合わせの鋳型で製造されたものと思われ、玉の中央部に接合線が巡る。

163～166・171・172は小柄の類である。163は全長20.3cm・刀幅1.5cmを測り、柄の部分には、径0.1～0.15cm程の針金状のものが巻かれている。164・165は、刀先に極めて細いヒモ状のものが巻き付けられている。167～170は鉄釘で、167は長さ7.5cmである。

174～181は砥石である。砂岩製は176・頁岩製は180、粘板岩製は178・181、天草砥石は174・175・177・179である。176・177は手に持って研いだものと思われる。



第80図　Ⅲ郭出土遺物の実測図①

土師器

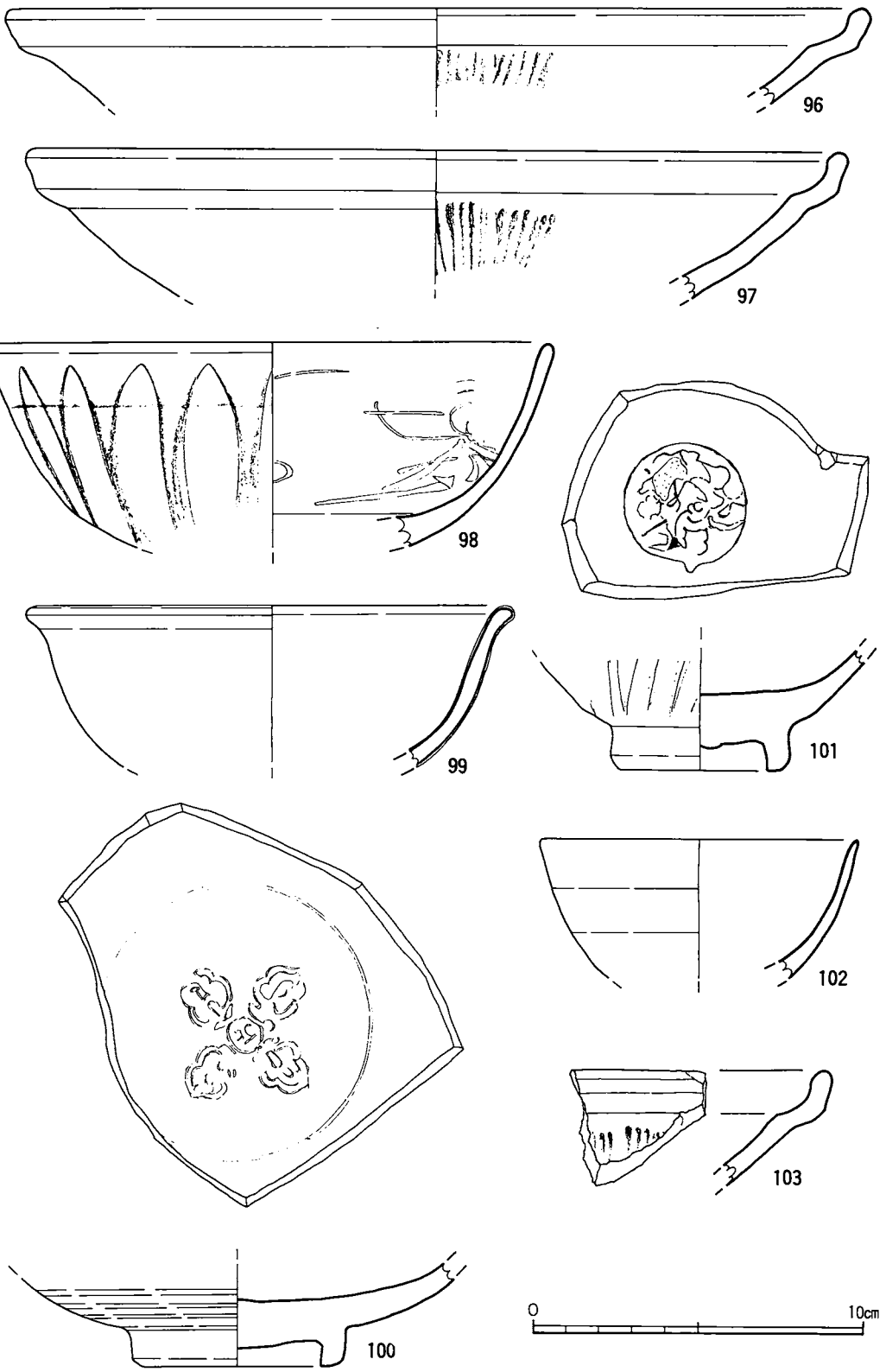
No.	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
70 土師器皿	(7.4)	3.6	2.7	体部は平底から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。内底面の中央部はやや凸。口縁直口。	体部内面は横ナデ。体部外面はナデ。内面は丁寧な調整、体部外面は平滑であるがザラザラ。内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。体部の内外両面に薄い稜線。外底面の糸切り痕はナデ後も残る。	胎土は良。色調は鈍い橙色。焼成不良で一部灰黒色。
71 〃		4.4		体部は底部から丸味を帯びて鋭く立ち上がる。	内底面のロクロ回転痕は後のナデで、ほとんど消滅。外底面の糸切り痕は後のナデで薄い。	胎土は良。色調は鈍い橙色
72 〃		4.3		底部は長円形（4.2m×4cm）。器形はいびつ。外底は多少上げ底。	内底面のロクロ回転痕はナデで、ほとんど消滅。外底面の糸切り痕は後のナデで薄い。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。緻密な焼成。
73 〃		(3.8)		体部は平底から丸味を帯びて極めて鋭く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。	体部の内外両面は丁寧な横ナデ。外底面の糸切り痕は薄く残る。体部の内外両面に薄い稜線。	胎土は良。色調は鈍い橙色。
74 〃		4.7		器形はいびつ。	外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は良。色調は浅黄橙色。
75 〃	(6.8)	(5.5)	1.9	体部は平底から丸味を帯びてほとんど直に立ち上がり、中途で口縁にかけて内反する。	体部の内外両面はナデ。口縁は内側に向ってナデ。内底面のロクロ回転痕はナデで薄い。外底面の糸切り痕はナデで薄い。体部内面は平滑。	胎土は良。色調は鈍い黄橙色。
76 〃		(6.0)		体部は平底から鋭く立ち上り、やや内弯気味に伸びる。内底面と体部の境に沈線。	内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。外底面の糸切り痕は後のナデで薄い。	胎土は良。色調は橙色。緻密な焼成。
77 〃	8.6	5.4	2.0	体部は平底から丸味を帯びて鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。内底面は凸凹している。器形は多少いびつ。	体部内外両面とも非常に丁寧な横ナデ。内底面のロクロ回転痕はナデで薄い。外底面の糸切り痕は後のナデでやや薄い。	胎土は精良。色調は浅黄橙色。外底面に板目圧痕。
78 土師器坏	(9.6)	(5.7)	3.8	体部は平底から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁直口。	体部内面は横ナデ。体部外面はナデ。体部両面は平滑で、体部の上位に鮮明な稜線。体部の下位は未調整。	胎土は良。色調は鈍い橙色。
79 〃	(11.4)	(5.6)	3.8	体部は底部から鈍く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。口縁でやや内弯する。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面に薄い稜線。体部外面に鮮明な稜線。	胎土は良。色調は鈍い橙色。
80 〃	(11.3)	(6.4)	3.8	体部は平底から鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。体部の立ち上がりは大きく窪む。内底面の中央部は凸。	体部内外両面は横ナデ。体部の外面に鮮明な稜線。底部の器壁は中央部分で薄く、端部で肥厚。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。緻密な焼成。
81 〃	(10.9)	(5.6)	3.7	体部は底部から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁はわずかに内反。口縁は厚みをやや有するものの直口に近い。	体部の内外両面は横ナデ。体部の内外両面に薄い稜線。	胎土は良。色調は鈍い橙色。体部内面の下位と外面の中位にベッタリとしたススの付着。
82 〃		(6.7)		体部は平底から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁直口。底部端は肥厚。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面に稜線。体部外面に薄い稜線。外底面の糸切り痕は後のナデで薄い。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。
83 〃		(5.5)		外底は上げ底。内底面の中央部はやや凹む。体部は底部から丸味を帯びて、鋭く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。	体部内面に薄い2本の稜線。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。外底面の糸切り痕は後のナデで薄い。	胎土は良。色調は鈍い橙色。外底面に板目圧痕、緻密な焼成。

第60表　Ⅲ郭出土遺物の観察表①

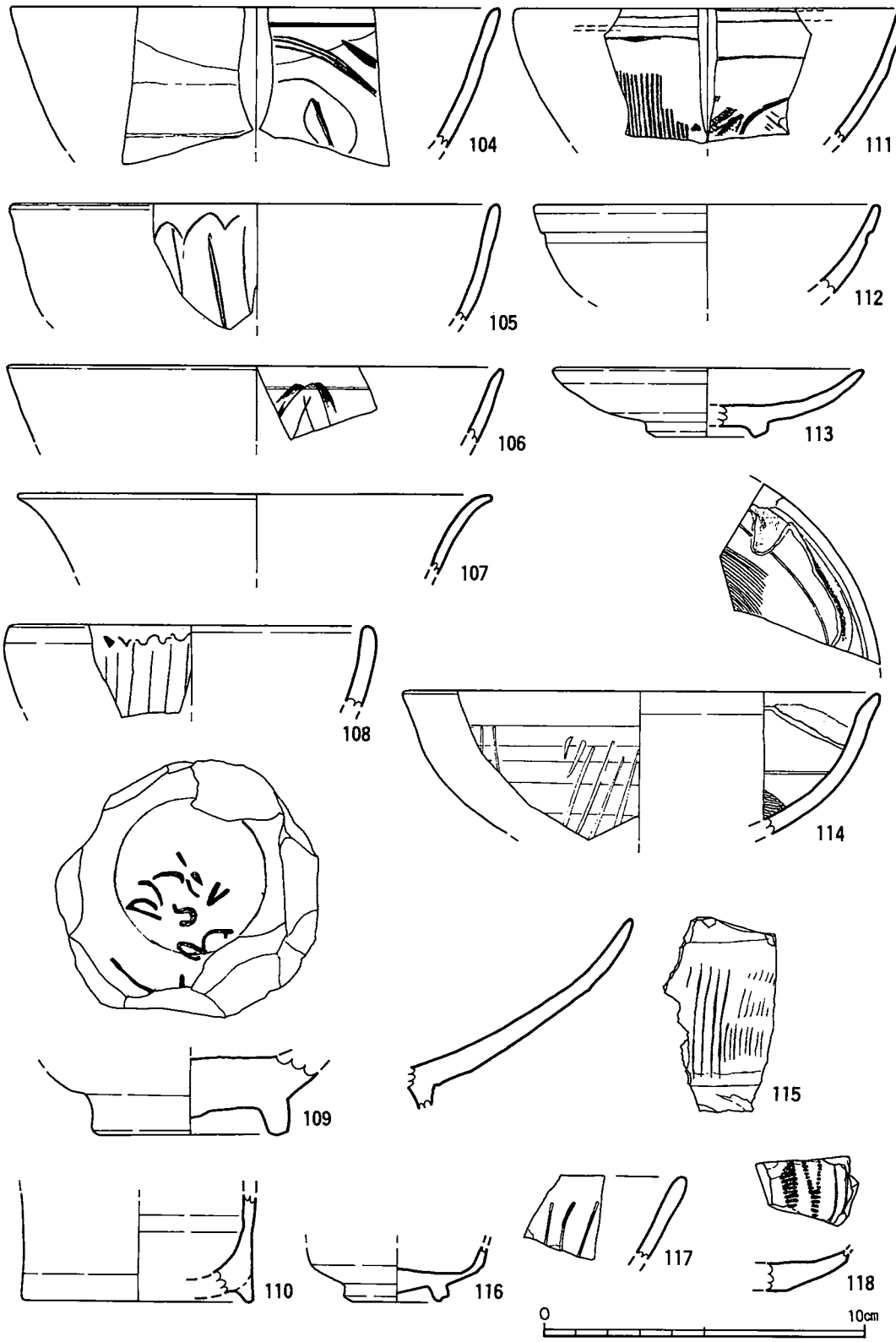
土師器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
84 土師器坏		(6.6)		体部は底部から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。	体部は内外両面ともナデ。両面は丁寧な調整。 内面は平滑であるが、外面は多少ザラつく。 内底面のロクロ回転痕はナデでほとんど消滅。 外底面の糸切り痕はナデでほとんど消滅	胎土は良。色調は内面が鈍い橙色で外面は浅黄橙色。緻密な焼成。
85 〃	(11.8)	(6.2)	3.9	体部は底部から丸味を持って鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。底部はやや上げ底で端部は肥厚。	体部内面はナデ。体部外面は横ナデ。体部内面は丁寧な調整で平滑。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄く残る。 体部外面に鮮明な稜線。	胎土は精良。色調は浅黄橙色。 やや焼成不良。
86 〃	(12.0)	(6.8)	3.7	体部は底部から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁部はやや内弯する。口縁直口。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面に薄い稜線。 体部外面はザラザラ。	胎土は良。色調は浅黄橙色。 やや焼成不良。
87 〃		(7.0)		外底は平底で、底部は極めて肥厚する。 体部の立ち上がりはやや窪む。	内底面のロクロ回転痕は中央部がナデで消滅しているものの他は鮮明。外底面のロクロ回転痕は、後のナデ消しで薄い。	胎土は粗。色調は外面が鈍い橙色で、内面は灰黄褐色。焼成不良。質量感のある土器。
88 〃	11.8	8.0	3.9	体部は平底から鋭く外反気味に立ち上がるが、中途で直線的に伸びる。口縁部はやや丸味を有する。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面に薄い稜線。 体部外面に鮮明な稜線。内底面のロクロ回転痕は中心部のみ指押え、他はナデ後も薄く残る。 外底面の糸切り痕はナデ後も薄く残る。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。 胎土中に含まれる小礫が焼成中に剝落し外底面に小穴をつくる。
89 〃		(6.5)		体部は平底から鋭く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。内底面の中央は大きく凸。	体部の内外両面は横ナデ。体部の外面に比較的鮮明な稜線。内底面のロクロ回転痕はナデでほとんど消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。 緻密な焼成。質量感のある土器。 底部端にヘラによる掻きの溝。
90 〃	(12.8)	(8.0)	3.4	体部は平底から鋭く立ち上がり、中途で一旦くびれ、再び肥厚しながら外反気味に伸びる。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は丁寧な調整で平滑。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕は鮮明に残る。	胎土は精良。色調は淡赤桃色。
91 〃		(8.0)		体部は平底から鋭く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面に薄い稜線。 外底面の糸切り痕はナデで薄い。	色調は鈍い橙色。体部内面にスス付着。 緻密な焼成。
92 〃	(11.6)	(6.8)	3.2	体部は底部より丸味を帯びてやや鋭く立ち上がり内弯気味に伸びる。口縁直口。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は平滑、体部外面に薄い稜線。内底面のロクロ回転痕は鮮明。 外底面の糸切り痕はナデで消滅。	胎土は良。色調は鈍い桃色。
93 〃		(8.6)		体部は平底から丸味を帯びて鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。口縁は厚みを有するが直口。口縁下に直径2㎜の円孔。内底面の中央部はやや凸。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は平滑。体部外面に薄い稜線。内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。 外底面の糸切り痕は後のナデでほとんど消滅。	胎土は良。色調は鈍い橙色。
94 〃	(11.4)	(7.9)	3.1	体部は底部から丸味を持って鋭く立ち上がり内弯気味に伸びる。口縁は直口でやや肥厚する。 体部は中途でやや薄くなる。外底面はややいびつ。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は平滑。 外底面は一部ナデで糸切り痕残る。 丁寧な造りの土器。体部外面に薄い稜線。外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は良。色調は鈍い橙色。(一部に灰黒色の極小斑点)
95 〃	11.6	6.5	2.8	体部は非常にいびつで、いずれも丸味を帯びた底部から立ち上がり内弯気味に伸びるが、体部の傾きは一方が鈍く他方は鋭い。口縁直口。	体部の内面はナデで平滑。体部外面は横ナデ。 体部外面に鮮明な稜線。内底面のロクロ回転痕はナデでほとんど消滅。外底面の糸切り痕はナデ後も薄く残る。	胎土は精良。色調は淡橙色。 外底面に板目圧痕。

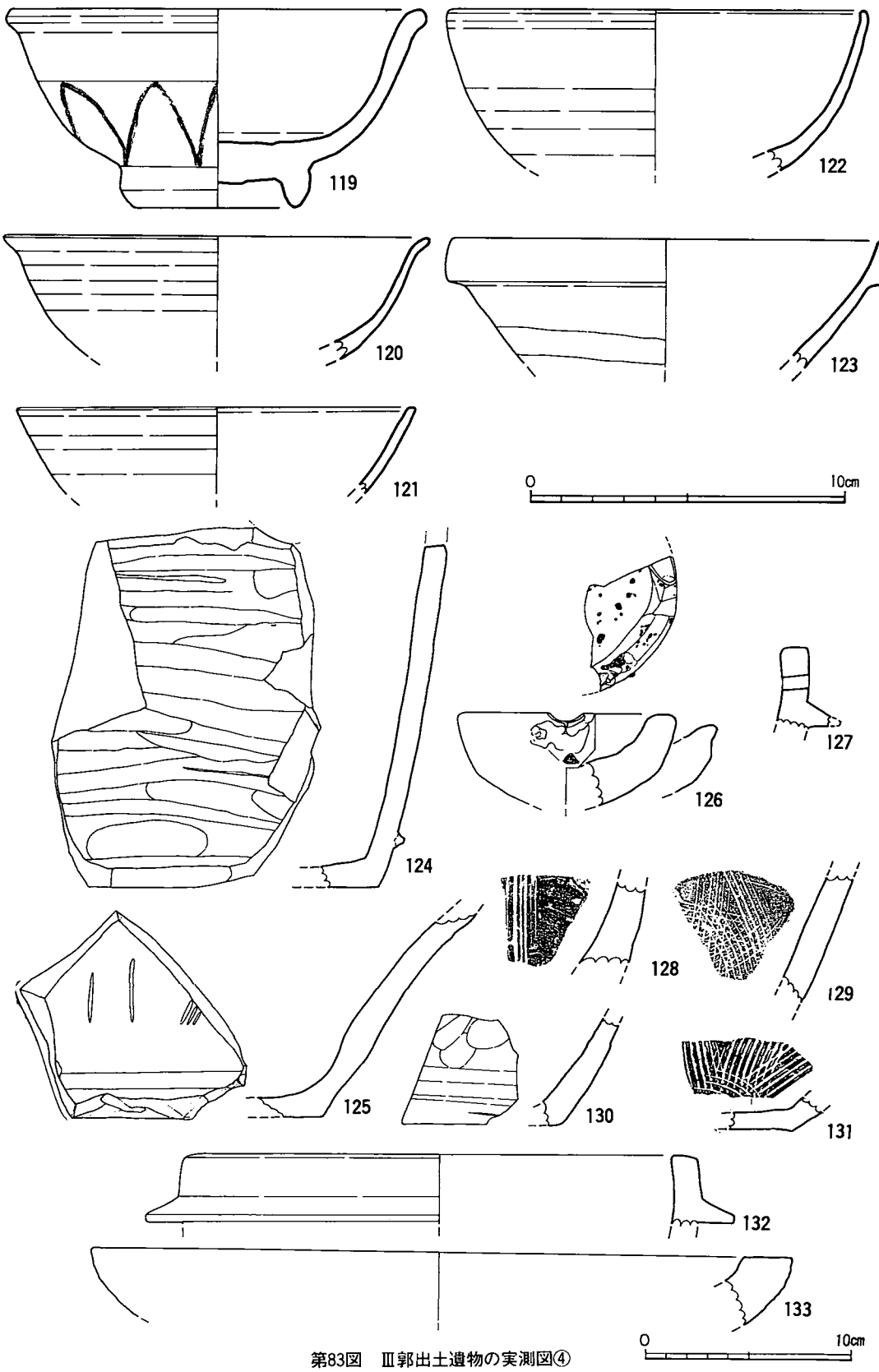
第61表　Ⅲ郭出土遺物の観察表②



第81図　Ⅲ郭出土遺物の実測図②



第82図　Ⅲ郭出土遺物の実測図③



第83図　Ⅲ郭出土遺物の実測図④

青磁・白磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
96 青磁(盤)	(26.4)			体部は鋭く立ち上がっている。口縁はやや外反し、鍔状となる。	体部内面に鎬文。	胎土は灰白褐色。釉色はくすんだ感じのオリーブ灰色(かなり使用した痕がうかがわれる)。
97 〃	(26.1)			体部は鋭く立ち上がっており、わずかに内弯する。口縁は多少外反し鍔状となる。端部は丸味を帯びる。	体部内面に鎬文。	胎土は灰黄色。釉色はオリーブ灰色。
98 青磁碗	(12.1)	(4.5)	5.5	体部は底部から鋭く立ち上がり、内弯する。口縁はやや外反。底部は肥厚(厚さ1.4cm)する。 高台畳付きの外面はヘラ削り。高台内に顕著なロクロ切り離しの突起物。高台内にトチが詰まっている。	体部内面の見込み部分は円形状に無釉で花文が描かれている。 体部外面に蓮弁文。	胎土は精良な白灰色。釉色は薄緑白色。 高台畳付きは無釉。
99 〃	(16.0)			体部は鋭く立ち上がり内弯する。口縁はやや外反する。体部中途の膨みは顕著。	無文。体部内面の口縁下に1条、体部外面の口縁と上位に3条の薄い稜線。	胎土は白(灰)色。色調は灰オリーブ色。
100 青白磁碗		(6.5)		体部は底部より鋭く立ち上がる。 高台は内縁がほぼ直立であるのに対し畳付きと外縁は弧を描くように内側へ入り込む。高台内の高さは中央部で5mm、端部で8mm、畳付きの幅5mm。	体部内面の見込みに界圏、圏内にデザイン化された花弁状の文様がある。 体部外面の下位に2条単位の稜線。高台周辺の調整は比較的荒い。	胎土は灰白色。釉色は灰緑白色。 高台の畳付き及び高台内は無釉。
101 〃		(5.0)		底部は肥厚し、(厚さ1.6cm)高台は内縁がほぼ直立であるのに対し、外縁は下位の部分が丸味を帯びる。高台内の高さは中央部で7mm、端部で9mm。	体部内面の見込みに直径3.8cmの円形を呈する無釉の部分があり、円内に不整形の文様が描かれている。体部外面に蓮弁の下位部分と思われる縦線が下る。	胎土は灰褐色。釉色は緑青白色。 体面内面の見込みに重ね焼きのトチが付着。高台内は無釉。貫入が目立つ。
102 白磁碗	(9.7)			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。口縁直口。	体部の内外両面は丁寧なナデ。	胎土は褐白色。
103 青磁(盤)				体部は鋭く立ち上がっている。 口縁は鍔状で端部は丸味を帯びる。	体部内面に鎬文。	胎土は灰白褐色。釉色はオリーブ灰色。
104 青磁碗	(15.4)			体部は鋭く立ち上がり、わずかに内弯する。	体部内面に草花の一部と見られる文様や、右斜めに下る弧線状の文様がある。体部内面の上位に稜線。	胎土は灰白褐色。釉色はオリーブ灰色(上位はやや黄色味を帯びる)。 体部外面の上位に貫入。
105 〃	(15.4)			体部は鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。 体部外面は上位でわずかにくびれる。	体部外面にヘラ描きによる蓮弁文様。多少なりとも縦線部分は蓮弁の削り出しがうかがわれる。	胎土は灰白褐色。釉色は黄緑色。 体部内面に薄い貫入が入る。
106 〃	(15.6)			体部は鋭く立ち上がり、わずかに内弯気味に伸びている。	体部内面に草花の一部と見られる文様。体部内面の上位に薄い稜線。	胎土は白褐色、釉色は白青緑色(体部上面の釉に極小の気泡が発生している)。 文様の色彩は濃緑灰色。
107 白磁碗	(14.9)			体部は鋭く立ち上がっており、外反気味に伸びている。口縁はやや直口気味。	体部外面に薄い稜線。	胎土は白褐色。釉は白黄色で光沢あり。
108 青磁碗	(11.1)			体部は鋭く立ち上がっており、やや内弯気味に伸びている。	体部外面にやや退化した細蓮弁文様。 個々の剣頭は切れて不明確だったりする。	胎土は灰白褐。釉色は緑青白色。

第62表　Ⅲ郭出土遺物の観察表③

青磁・白磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
109 青磁碗		(6.1)		底部は肥厚(厚さ1.8cm)し、高台は直立する。畳付きは3mmで、外線は右斜め上にヘラ削り。高台内のロクロ切り離し部分は指おさえの後も凸となる。	内底面に界圏、圏内に印花文。	胎土は白色。釉色は青白緑色。 高台内の外底面に限って無釉。
110 青磁 (香炉)		(7.2)		体部は直立気味に立ち上がり、わずかに内側へ弯曲する。底部は外側へ張り出す。	体部内面に蓮い稜線。小脚は3ヶ所につくものと思われる(付け高台で接合面に指おさえ痕)。	胎土は白色。 釉色はオリーブ灰色、高台は白緑色。
111 青磁 (同安窯)	(12.2)			体部は鋭く立ち上がり、やや内弯する。口縁直口。	体部の内外両面に櫛描文	胎土は灰色、釉色は薄い灰オリーブ色。 体部外面の口縁にトチ付着、体部外面の下位に金箔状のものが付着。
112 白磁碗	(10.8)			体部は鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。口縁の上面はやや扁平。体部外面の中途から下位は無釉。	体部外面の上位に幅3mmの沈線。 体部外面の中途から下位は無釉。	胎土は白褐色。釉色は白色。 無釉の部分は汚れた感じの褐灰色。
113 白磁皿	(9.7)	(3.8)	2.1	体部はわずかに内弯気味に伸びる。口縁はやや直口気味。底部の厚さ6mm。	体部外面に薄い稜線。体部外面の中途から高台内まで無釉(但し、ごく薄い釉がかかる感じではある)。	胎土、釉色は白褐色。 体部内面の見込みに貫入あり。
114 青磁 (同安窯)	(15.0)			体部は鋭く立ち上がり内弯する。器壁は体部中途から口縁にかけて漸次、肥厚する。	体部内面の中途に界圏、体部内面の下位に間隔の密な櫛描文。体部外面に薄い稜線があり、これを切る様に荒い櫛描文が4～5mm間隔で左斜めに描かれている。	胎土は非常にきめ細かく精良な灰色。 色調はくすんだ感じの灰オリーブ色。 体部内面から中途にかけて薄いナマコ色の自然釉がかかる。
115 〃				体部は鋭く立ち上がり、わずかに内弯する。	体部内外両面に櫛描文。体部の下位は無釉。	胎土は精良で灰白色。 釉色は薄い灰オリーブ色。
116 白磁皿		(3.3)		内底面は中心部から右下りで端部に至り、体部はこれより鋭く立ち上がって内弯する。 高台は外側に張り出す。高台内の中心部の高さは3mm、端部は5mm、高台の畳付きは2段になっている。	体部外面の中途に鮮明な稜線。 体部外面の下位から高台内にかけて無釉。	胎土は白色。釉色は内面が光沢のある白色。 外面は上位が白色で、下位は褐白色。 明の白磁。
117 青磁碗				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。体部は口縁にかけてやや肥厚する。口縁はやや丸味を帯びる。	体部外面に非常に退化した細蓮弁文。縦線のみ。	胎土は汚れた感じの灰褐色。 釉色は汚れて黄色味を帯びる。 色調はオリーブ灰色。
118 青磁 (同安窯)				底部は肥厚する(厚さ9mm)。	内底面に櫛描文。	胎土は灰白色。釉色は薄い灰オリーブ色。
119 青磁碗	(13.5)	(5.3)	6.3	体部は鋭く立ち上がり、内弯する。口縁はやや外反。口縁は肥厚し丸味を帯びる。底部は肥厚(厚さ1.3cm)、高台内最大高さ8mm、上位幅1.1cm、畳付き幅3mm。	体部外面の中途から下位にかけて、釉下に極めて薄い蓮弁文様。体部外面の上位に3条の薄い稜線。 体部外面の中位に鮮明な稜線。	胎土は灰白色。釉色は緑色。 高台の畳付きから内面にかけて無釉。見込みは重ね焼きのため無釉。茶色めく肌色の素地が露頭。
120 白磁碗	(13.7)			体部は鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。口縁はやや外反する。	体部外面の中位に4条の鮮明な稜線。 体部上位に薄い1条の稜線。	胎土は褐灰色。釉色はくすんだ感じの白灰色。体部内面に褐白色がまだらになって付着。非常に使い込んだ磁器と思われる。

第63表　Ⅲ郭出土遺物の観察表④

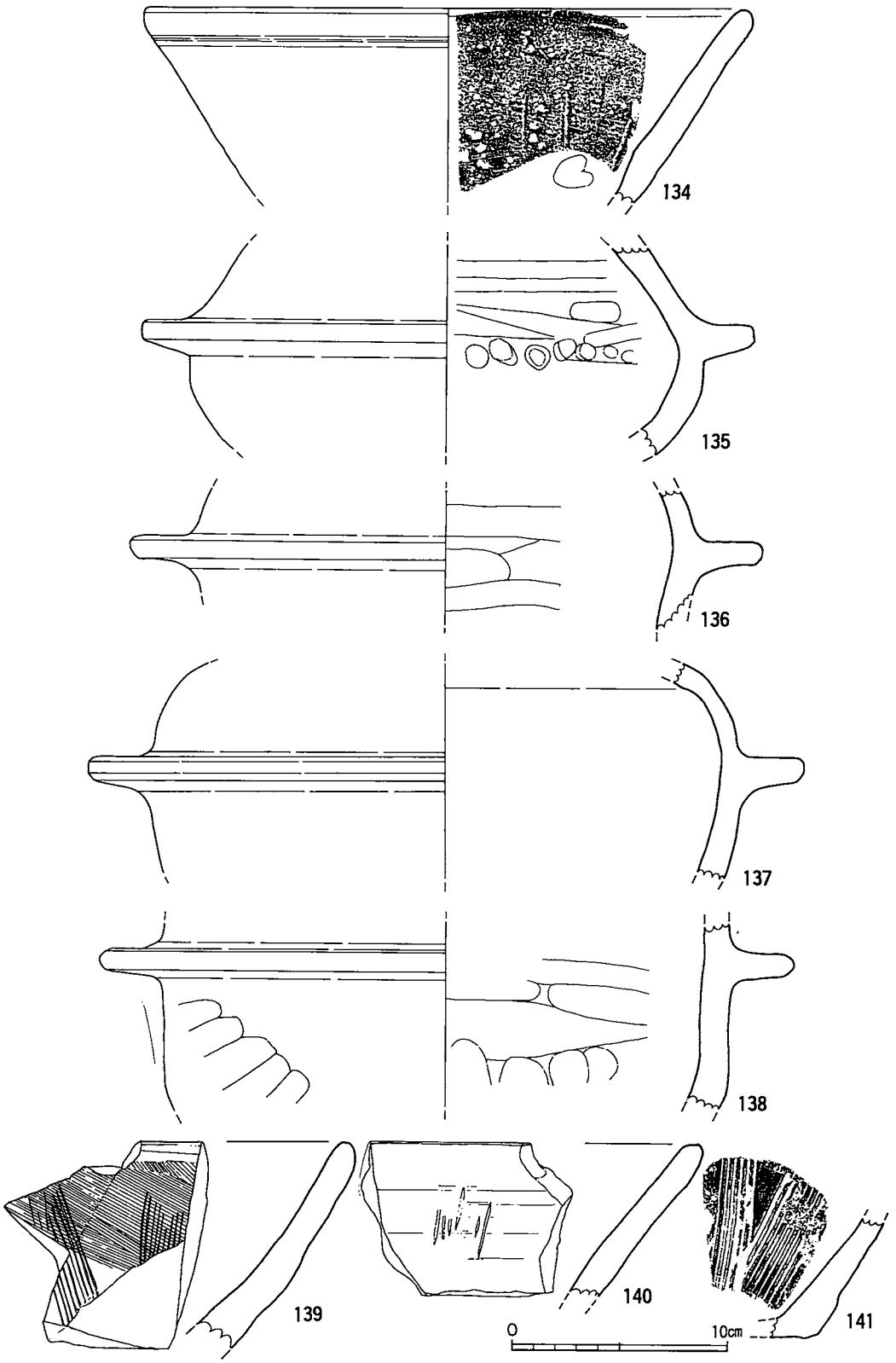
青磁・白磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
121 青白磁碗	(12.9)			体部はやや内弯気味に伸びる。	体部外面に薄い稜線。	胎土は灰色。釉色は灰黒色(光沢あり)。
122 〃	(13.2)			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。体部は薄壁。	体部内面は、極めて丁寧なナデ。体部外面の上位にかなり鮮明な4条の白灰色の稜線。 体部外面の下位に薄い4条の稜線。	胎土は汚れた感じの灰白色。 釉色は灰色。
123 白磁碗	(13.8)			体部はわずかに内弯気味に伸びる。 口縁は玉縁状に丸く肥厚。	体部外面の中央から下方は無釉で、この器面に右斜め方向への薄い稜線。	胎土は灰褐色。釉色は白灰色。 体部外面の上位に針穴程の小穴が数多く見える。

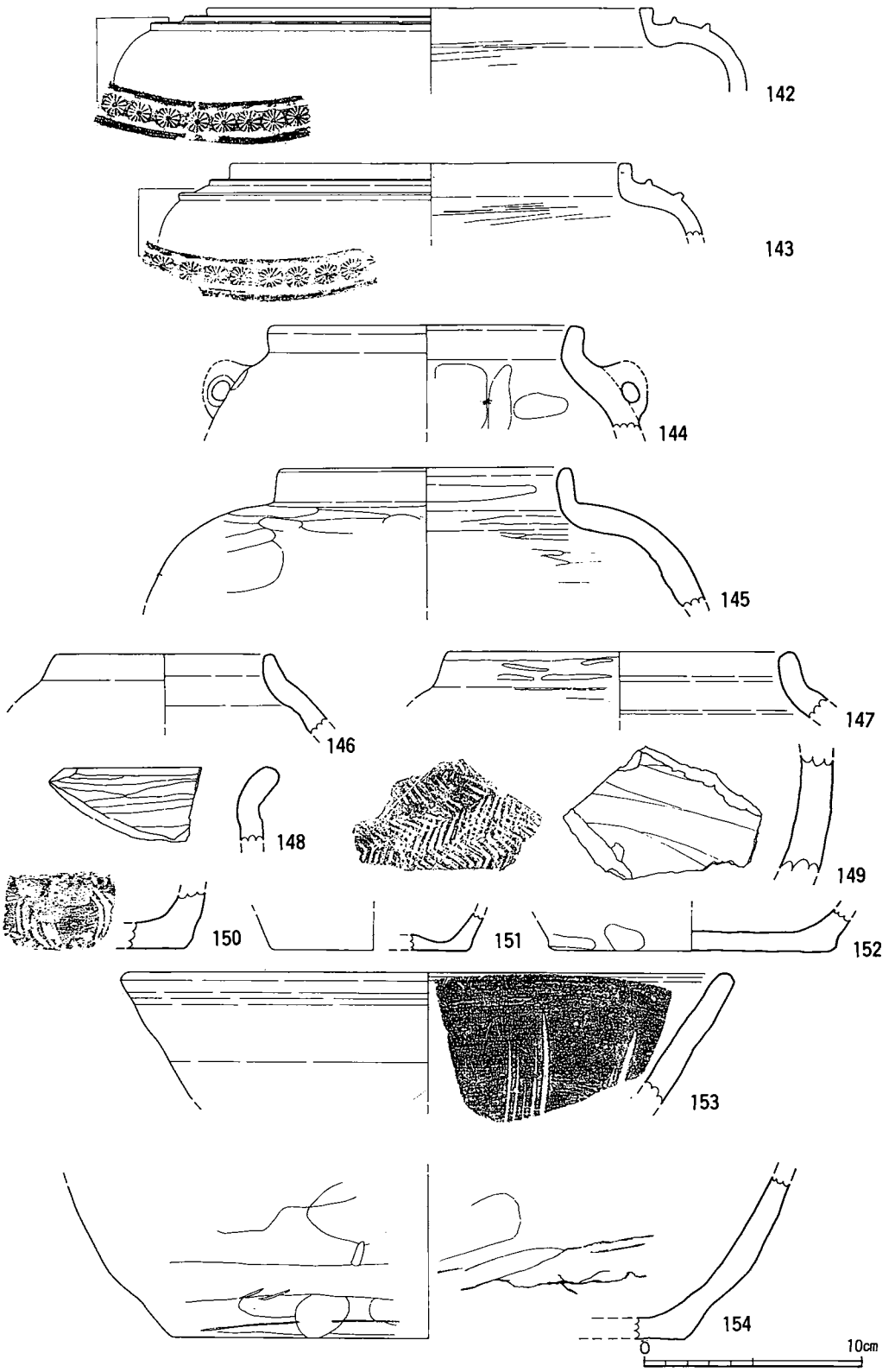
瓦質・硬質瓦器・常滑・滑石

124 硬質瓦器 (火舎)				体部は底部から鋭く立ち上がり、わずかに内弯気味に伸びる。体部に円孔あり。 体部外面の下位に貼り付けの突帯。体部は下位から中途にかけてわずかに肥厚。	体部内面は指おさえ後に荒い横ナデ。 体部外面はヘラ磨き。円孔はヘラ削り。	胎土に小礫が混じる。 色調は鈍い橙色。
125 瓦器 (擂鉢)				体部は底部から鈍く立ち上がり、外反気味に伸びる。体部の内外両面の立ち上がりはやや窪む。	体部内面の立ち上がりはヘラ削り後、横ナデ。体部外面は指おさえ後ナデ。外底面の調整荒し。体部内側の条線は磨滅。	二次焼成で灰黒色。
126 土製 (取瓶)	(10.6)			体部は鈍く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。 体部は肥厚(厚さ1.8～2.0cm)し、口縁はやや扁平(幅7mm)。片口を有する。	体部の内外両面に指頭痕が残る。 手ずくね土器。	色調は灰色。 大粒の銅が大量に付着。
127 滑石製 (石鍋)				体部上位は直立し、わずかに内弯する。鍔がつく。	体部の内外両面は丁寧な研磨。体部上位に孔。	鍔の下面にスス付着。
128 瓦器 (擂鉢)				体部は肥厚(厚さ1.2～2cm)。	体部内面はナデ。体部外面は横ナデ。 条線は7条が観察できる。	色調は灰色。緻密な焼成。
129 〃				――――――	条線は縦横斜めと重なり合う。	色調は灰黄色。体部外面はやや黒色味を帯びる。
130 常滑系 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。	体部外面は丁寧なナデで残存体部の上位に指おさえ。	緻密な焼成。
131 瓦器 (擂鉢)				体部と底部の境に鮮明な稜線。	体部外面はヘラ削り後ナデ。外底面は指おさえ後、荒いナデ。条線の一単位は10本。内底面に条線が切り合っている。	色調灰色。緻密な焼成。
132 滑石製 (石鍋)	(25.0)			体部外面に鍔があり、鍔の上面は扁平。	体部の内外両面は非常に丁寧な研磨。	滑石製
133 砂岩製 (茶臼)	(34.0)			口縁の上面は極めて扁平(幅2.4cm)。	口縁の上面と体部内面は、非常に丁寧な研磨。 体部外面は縦方向の彫痕が残る。	砂岩製
134 瓦器 (擂鉢)	(28.4)			体部は鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁はやや丸味を帯びる。	体部内面はナデで、下位はヘラ削りの後横ナデ。1個の指頭痕が残る。体部外面は指おさえ後ナデ。 体部外面の上位に3条の細い沈線。	色調は灰色。かなり使い込んだ擂鉢で、条線はほとんど磨滅。緻密な焼成。
135 瓦器 (茶釜)	(28.6)			胴部は下位から大きく内弯し、鍔の部分から大きく内傾する。	胴部内面は指おさえ後、やや丁寧な横ナデ。鍔の内側に指頭痕が並ぶ。胴部外面の上位は指おさえ後、やや荒い横ナデ。鍔の上下両面は非常に丁寧な横ナデ。胴部外面の下位はヘラ磨き。	色調は灰黒色。 胴部外面の下位にスス付着。

第64表　Ⅲ郭出土遺物の観察表⑤



第84図　Ⅲ郭出土遺物の実測図⑤



第85図　Ⅲ郭出土遺物の実測図⑥

瓦器・硬質瓦器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
136 瓦器 (茶釜)	胴部最大径 (29.6)			胴部は下位からやや内弯し、鍔の部分から内傾する。	胴部内面は指おさえ後、丁寧な横ナデ。 胴部外面の上位と、鍔の上下両面は丁寧な横ナデ。	胎土、色調とも浅黄橙色、一部灰黒色。 鍔の下面にスス付着。
137 〃	胴部最大径 (33.4)			胴部は下位から内弯し、鍔の部分から内傾する。器形は非常に均整がとれている。	胴部内面は指おさえ後、横ナデ。 胴部外面の上位と鍔の上下両面は、非常に丁寧な横ナデ。胴部外面の下位は指おさえ後、荒いナデ。	胎土は浅黄色。色調は灰黒色。内面はやや白っぽい。
138 〃	胴部最大径 (32.9)			胴部は下位でやや膨むが、上位ではほぼ直立する。鍔を有する。	胴部内面は指おさえ後荒い横ナデで、下位に指頭痕が横に並ぶ。鍔の上下両面は丁寧な横ナデで、端部は丸味を帯びる。胴部の外面は指おさえ後、荒い横ナデ。部分的に指おさえが重なり合う所がある。	胎土は鈍い黄橙色。色調は灰黒色。 やや焼成不良。
139 瓦器 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がり、わずかに内弯気味に伸びる。口縁は外面が半月状に丸味を帯びる。	体部内面は右斜め下方向に細線の掻き目。条線の1単位は9本。体部内面は丁寧な横ナデ、体部外面の上位は横ナデ、中途から下位にかけては指おさえ、口縁上面はヘラ削り後、横ナデ。	胎土は精良で鈍い橙色(体部外面に灰黒色付着)。 非常に緻密な焼成。
140 硬質瓦器 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がっており、直線的に伸びる。	体部内面はやや荒い調整の横ナデ、体部内面の条線は磨滅。口縁の内側はヘラ削り後、強いナデ。体部外面は指おさえ後、丁寧な横ナデ。体部内面の立ち上がりは、ヘラ削りで多少くびれる。体部外面の上位に細い沈線。	胎土は灰黒褐色、体部内面に細かな凸凹が広がる。
141 瓦器 (擂鉢)				体部は底部から鈍く立ち上がる。 底部端は肥厚。(厚さ1.8cm)。	体部外面は指おさえ後、ナデ。条線は鮮明な残りで一単位は8本(推定)で、切り合っている。	色調は灰黒白色。やや焼成不良。
142 硬質瓦器 (火舎)	(29.8)			体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 体部の上位に突帯。	体部内面は上位に斜め方向のハケ目と下位に丁寧な横ナデ。 体部外面の上位に花文のスタンプ。	胎土は白灰色、色調は灰白色。
143 〃	(25.0)			体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁は扁平で端部は突帯状に張り出す。体部外面の上位に突帯。	口縁の上面はヘラ削り後、ナデ。口縁の内面と体部内面の上位はヘラ削り後、横ナデ、中途より下位は指おさえ後、荒い横ナデ。体部外面はヘラ磨き。体部外面の上位に花文のスタンプ。	胎土は浅黄橙色、色調は赤褐色。
144 瓦器 (茶釜)	(14.6)			頸部はくの字に外反。口縁は扁平(幅6mm)。肩部に耳がつく。	頸部上位の内面は丁寧な横ナデ、下位は指おさえ後、荒い横ナデ。口縁の上面はヘラ削りの後、ナデ。頸部外面は丁寧な横ナデ。	胎土は淡黄色、色調は灰黒色。
145 〃	(13.3)			頸部はくの字に大きく外反。	口縁の内外両面は丁寧な横ナデ。体部内面は荒い指おさえ。体部外面は指おさえの後、丁寧な横ナデ。	色調は鈍い褐色、緻密な焼成。
146 〃	(10.0)			頸部はやや内傾しながら、くの字に外反。	頸部内面横ナデ。頸部外面はナデの後、荒い磨き。	胎土は灰褐色、色調は灰黒色。
147 〃	(16.0)			頸部はくの字に外反する。	頸部内面は非常に丁寧な横ナデ。頸部外面はヘラ削り。	色調は鈍い黄橙色。
148 〃				口縁は大きく外反する。	体部内面は丁寧な横ナデ。口縁の上面は横ナデ。体部外面はヘラ磨き。	色調は灰褐色。

第65表　Ⅲ郭出土遺物の観察表⑥

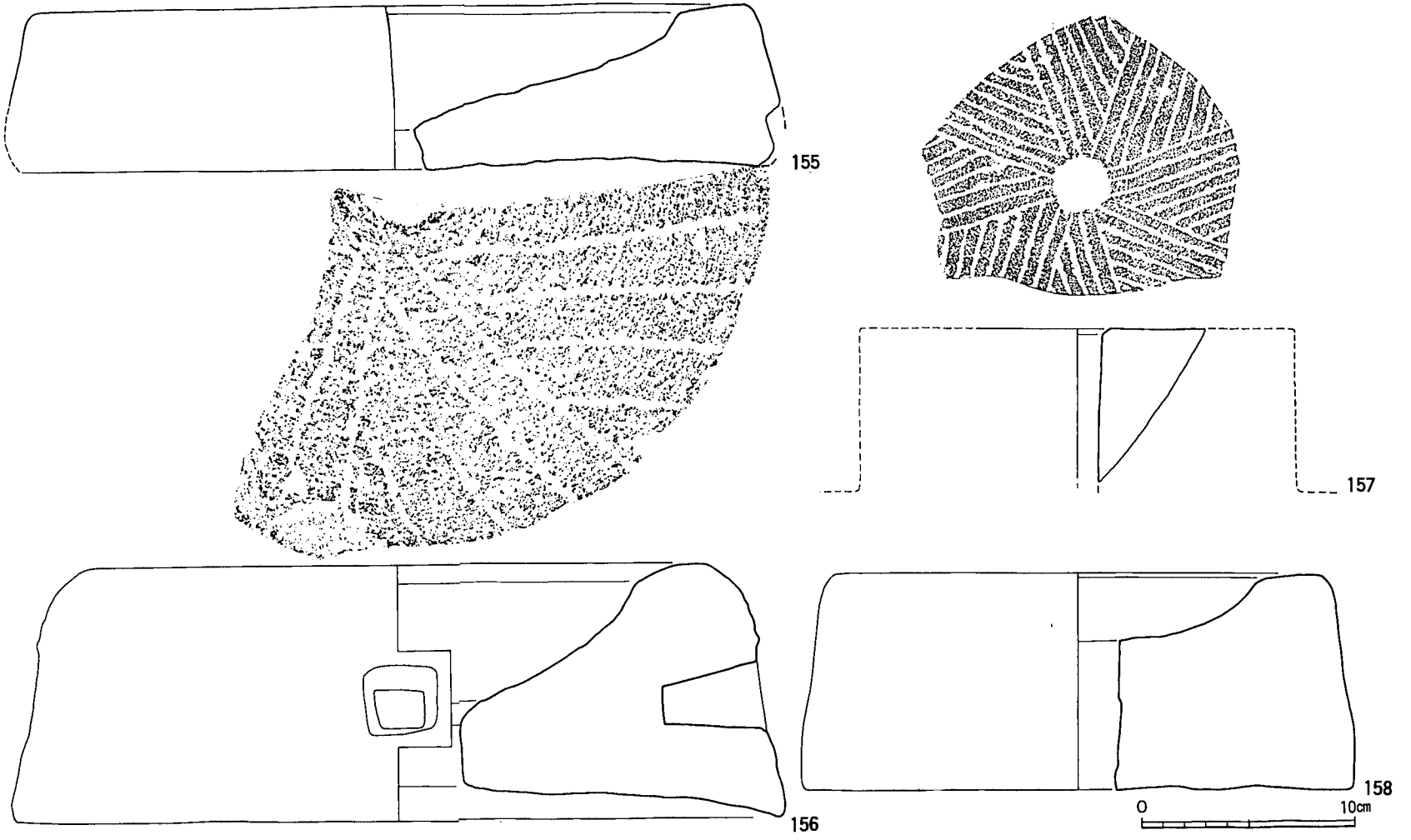
瓦器・硬質瓦器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
149 須恵器 (胴部)				――――――	体部内面に横ナデ、体部外面はタタキ。	色調は灰白色。
150 瓦器 (土器)				底部は肥厚する。(厚さ1.2cm)	体部外面に文様、体部内面は指おさえ後、横ナデ、体部外面はナデ。	胎土は粗、色調は灰黄色。
151 土師器皿		(9.1)		外底は平底。内底面の中央部は凸。	内底面は丁寧な横ナデ、外底面は糸切り。体部外面は横ナデ。	色調は灰褐色。
152 瓦器 (擂鉢)	(12.6)			外底は平底。端部でやや肥厚する(厚さ1.4cm)。外底面全体に大小の凸凹広がる。	内底面と体部の外面は丁寧な横ナデ。外底面は荒いナデ。	色調は灰黒色。内底面の中央部は灰白色。
153 瓦器 (擂鉢)	(28.3)			体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びる。体部はそのままの大きさで口縁に至る。口縁はやや丸味を帯びる。	体部内面は丁寧な横ナデ。条線の一単位は5本。体部外面の上位は丁寧な横ナデ、中途は指おさえ後、ナデ。	色調は灰白色。条線は磨滅が激しい。体部外面に細かい凸凹あり
154 ・備前系 (甕)	(24.0)			体部は底部からやや内弯気味に立ち上がる。体部外面の立ち上がりは、やや凹む、体部内面に亀裂。	体部内面は荒い指おさえ、内底面との境は横ナデ。体部外面は指おさえ後、左斜め下方向のナデ。下位は横ナデ。外底面は指おさえ後、横ナデ。	色調は小豆色。

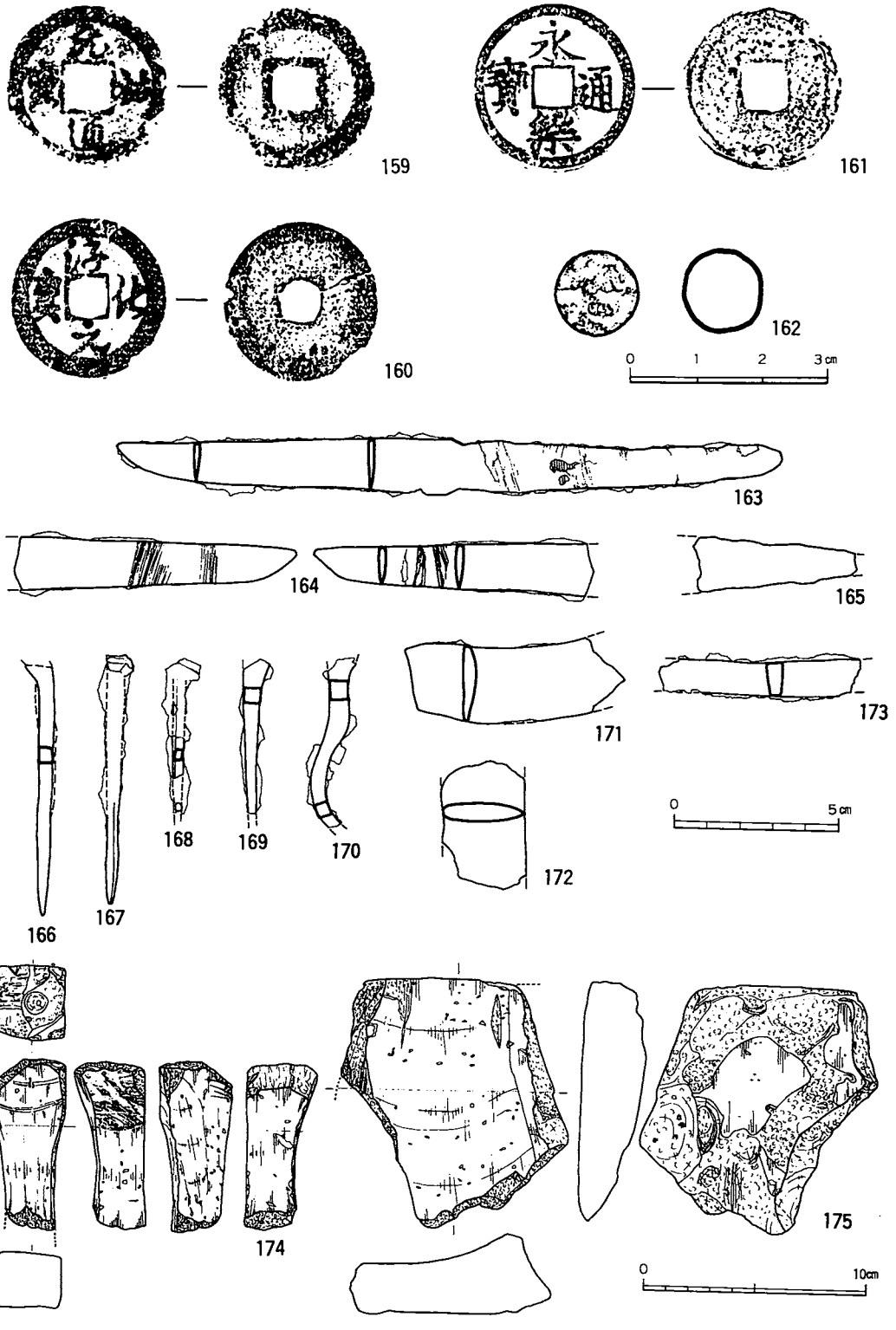
石臼

No.	形態の特徴	No.	形態の特徴
155 石臼	上臼で、上面の直径は33cm、下面は端部が欠損している。高さは7.7cmを測る。上面に大きな「くぼみ」があり、最深は5.8cmを測る。端部は扁平で幅3cmを測り、内側にやや傾斜する。下面における「ふくみ」は弧状をなし、最大で高さ0.4cmである。荒い擂目がある。石材は凝灰岩である。	156 〃	上臼で、上面の直径は28.6cm、下面の直径は36cm、高さは12cmを測り、上面にやや雑な研磨の「くぼみ」があり、供給口へやや弧状気味に大きく傾斜する。「くぼみ」の最深は5.6cmを測る。側面には挽手穴がついている。下面における「ふくみ」は高さ1.7cmで、最高は1.6cmを測る。擂目は完全に消滅している。石材は凝灰岩である。
157 〃	茶臼の下臼である。大方を欠損するが、擂目には8本の鮮明な溝が残る。心棒穴は、上面で直径2.2cm、下面で直径1.9cmを測る。石材は砂岩である。	158 〃	上臼で、上面の直径は23cm、下面の直径は25.8cm、高さは10.2cmを測る。上面の「くぼみ」は大きく、深さは3.3cmである。供給口は抉りがないものの、やや雑な削りである。下面の「ふくみ」は殆どなく、部分的にわずか0.1cm程度の高まりがあるにすぎない。火を受けている。石材は凝灰岩である。

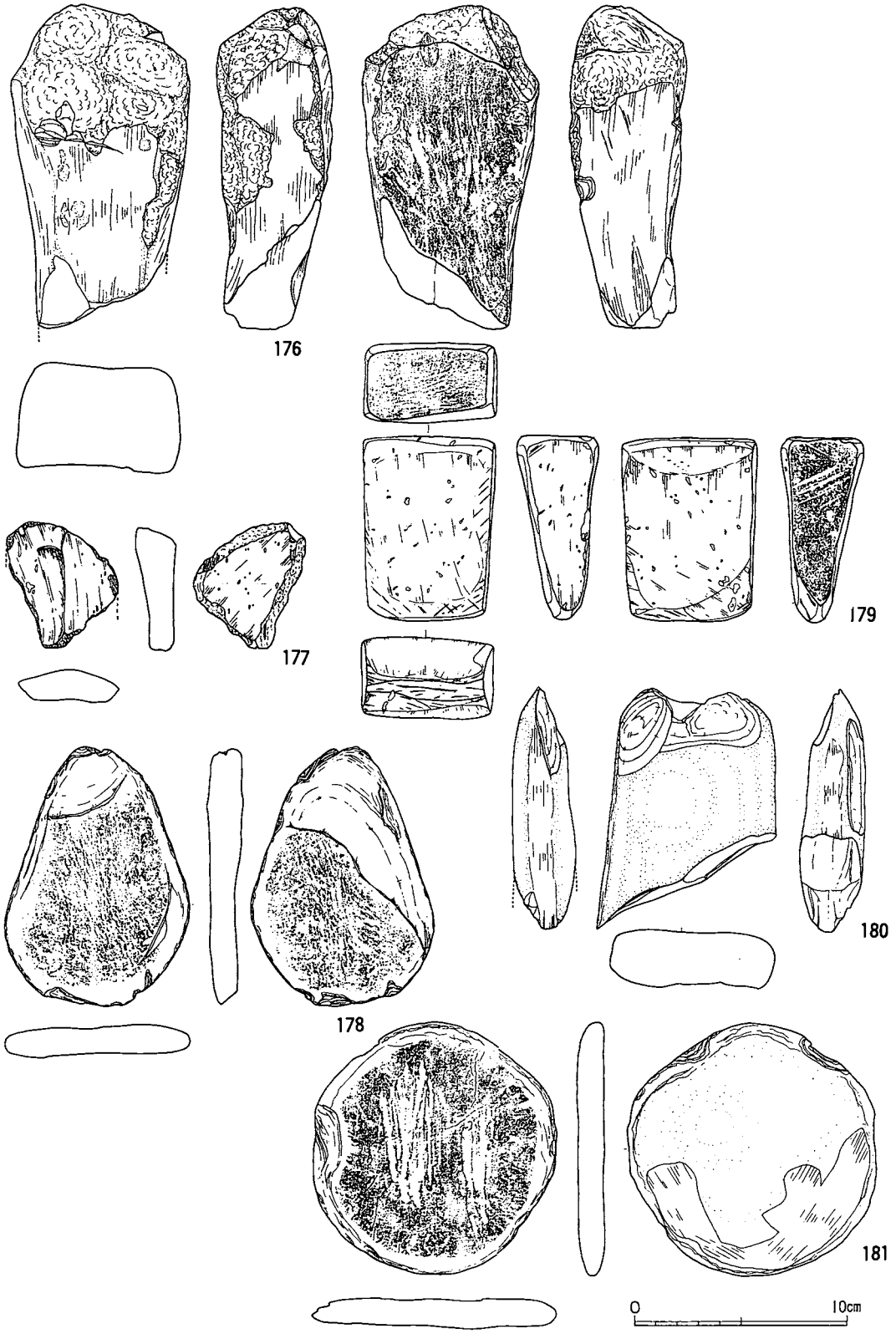
第66表　Ⅲ郭出土遺物の観察表⑦



第86図　Ⅲ郭出土遺物の実測図⑦



第87図　Ⅲ郭出土遺物の実測図⑧



第88図　Ⅲ郭出土遺物の実測図⑨

砥石

No.	計測値				形態の特徴
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
174 砥石	7.76	3.36	3.19	100.86	欠損した後にも使用が見られる。正面は刃止まりの段落ちが2本あり、長軸方向に対し弓状に中央が凹み、横断面は蒲鉾形をなす。上部側面に直径1cm、深さ0.5cm程の凹が見られ、側壁に研磨痕が残る事から、穴より小さい物の面取りに使用されたものと思われる。右側面に刃止まりと刃潰しによると思われる大小の削痕が見られる。裏面は水平的に使用された後、左側に、長軸方向に刃物の先端部を研いだような細長い痕跡が残る。左側面も水平的な使用である。水平面を下にし、固定して使用したものと思われる。天草産。
175 〃	11.25	10.75	3.00	398.75	正面は中央が広範囲に均一的な丸みを持って凹むような研ぎ方が行われており、丸みのある刃物などを研いだものと思われる。左肩部には長軸方向に波状の研ぎ面が見られる。裏面は高まりの部分に研ぎ面がある。天草産。
176 〃	15.00	8.48	5.48	916.69	四面使用の砥石で、正面は欠損後も使用され、長軸方向に波状の削痕があり、先端部などを研いだものと思われる。両側面はねじれており、手に持って使用されたと思われる。裏面は中央に長軸方向へ多くの削痕が見られ、刃潰しと研ぎが為されたものと思われる。砂岩
177 〃	5.76	5.21	1.90	42.12	正面部の中央に稜線が見られ、左右で異なった研ぎ方が行われ、左には刃止まりがある。裏面にはねじれが見られ、手に持って研いだものと思われる。天草産。
178 〃	11.13	8.75	1.78	215.36	両面とも、節理面より下方に削痕と研磨を交互に行った形跡が見られ、中央部はやや凹んでいる。固定して使用されたものと思われる。粘板岩。
179 〃	8.63	6.32	3.91	303.40	クサビ形をなしており、欠損後の使用によってこのような形になったと思われる。正面は欠損前に使用されていた広い面と、刃止まり的な稜線が見られ、先端部と肩部に斜めの荒い削痕が見られる。右側面は水平的な使用である。裏面は刃止まりが見られ、先端部にはやや斜め方向の荒い削痕が見られる。左側面は水平的に使用されているが刃潰しを行ったと思われ、やや深い削痕が見られる。上部側面は四面に角取りがなされ、長軸方向への削痕が見られる。下部側面は長軸方向に荒い削痕が見られる。天草産。
180 〃	11.36	8.39	2.68	350.27	両面とも自然面である。両側面に強い研ぎ面が見られ、蒲鉾形を呈する。閃緑凝灰岩。
181 〃	11.74	11.68	14.20	295.67	扁平な転び石を二面使用している。正面は、周辺の肩部を残して全体的に研ぎが見られ、中央に2ヶ所の刃潰しが見られる。裏面は下部に研ぎがある。固定して使用されたものである。粘板岩。

第67表　Ⅲ郭出土遺物の観察表⑧

土師器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
182 土師器坏	10.9	6.3	2.7	体部は底部から鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。体部と比較して底部は肥厚する。	体部内面はナデ、体部外面は横ナデ、両面とも非常に丁寧な調整で平滑。体部外面に薄い稜線。 内底面のロクロ回転痕は後のナデで、ほとんど消滅。外底面の糸切り痕は、ナデ後も残る。	胎土は精良。色調は浅黄橙色。 外底面の$\frac{1}{3}$に最初の糸切りに失敗してできた波線あり。
183 〃	(10.8)	(8.0)	2.5	体部は底部から鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。内底面は中途から中央部にかけて肥厚し、端部では凹となる。外底面は上げ底。	体部の内外両面は横ナデで平滑。 内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕は、ナデで薄し。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。 緻密な焼成。
184 〃	(11.3)	(6.0)	3.8	体部は底部から鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。口縁直口。	体部内面はナデ、体部外面は横ナデ。体部内面は丁寧な調整で平滑。体部外面に10条の稜線。 内底面のロクロ回転痕はナデで薄い。 外底面の糸切り痕はナデ後も薄く残る。	胎土は良。色調は鈍い橙色。 外底面に板目圧痕。
185 〃	(12.3)	(6.9)	3.4	体部は底部から丸味を持って鋭く立ち上がり、やや直線的に伸びる。口縁直口。	体部内外両面は横ナデ、体部外面は平滑。	胎土は良(極小の黒点が混じる)。 色調は鈍い橙色。

第68表　Ⅳ郭出土遺物の観察表①

（4）Ⅳ郭出土の遺物

182～185は土師器坏である。形態的には、体部がラッパ状に鋭く立ち上がる184と、船型の182・183・185に分類される。ラッパ状のものは、口径（11.3）cm・底径（6.0）cm・器高3.8cmで、外底面に板目圧痕を残す。船型は、口径10.8～12.3cm・底径6.3～8.0cm・器高2.5～3.4cmを測り、183は緻密な焼成である。

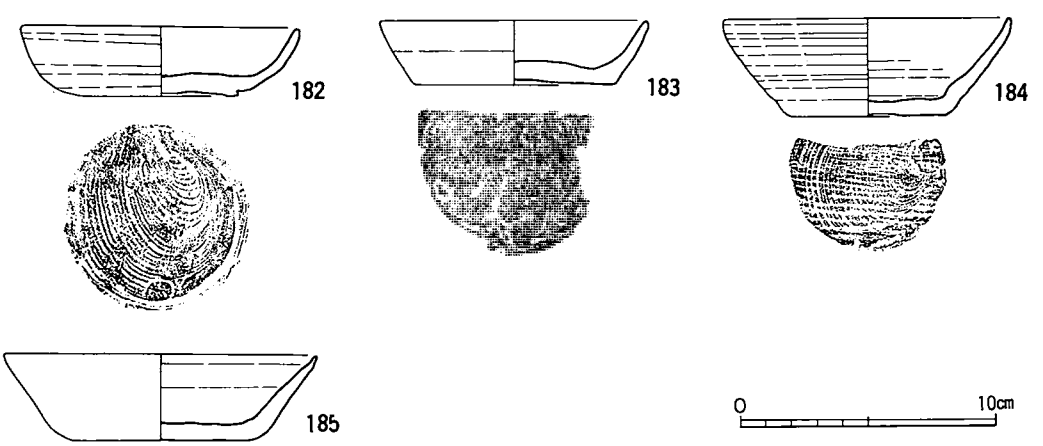
186～188は青磁碗である。186は同安窯で、口径（13.4）cmを測る。口縁はやや外反し、直口となる。体部内面に草花文様が描かれている。187は体部が外反気味に伸びており、口径（10.8）cmを測る。口縁は丸味を帯びる。188は無文で体部外面に無数のヒビ割れがある。189は青白磁の碗で、小さく低い高台が付く。底径（3.2）cmを測る。

190・192は常滑の壺である。190は口径（27.2）cmで、頸部に粘土の貼り付けがある。192は小壺で底径（14.9）cmを測り、胎土に小礫を多く含む。191は備前の壺で底径（21.3）cmを測る。外底は平底で器面は凸凹している。194は備前の擂鉢で条線の一単位は9本である。二次焼成で変色している。196は瓦器の甕で、体部外面はナデの後、タタキが施されている。193は硬質瓦器で火舎と思われる。体部外面はヘラ磨きされ、体部内面は磨滅が激しい。195は土製香炉の小脚である。

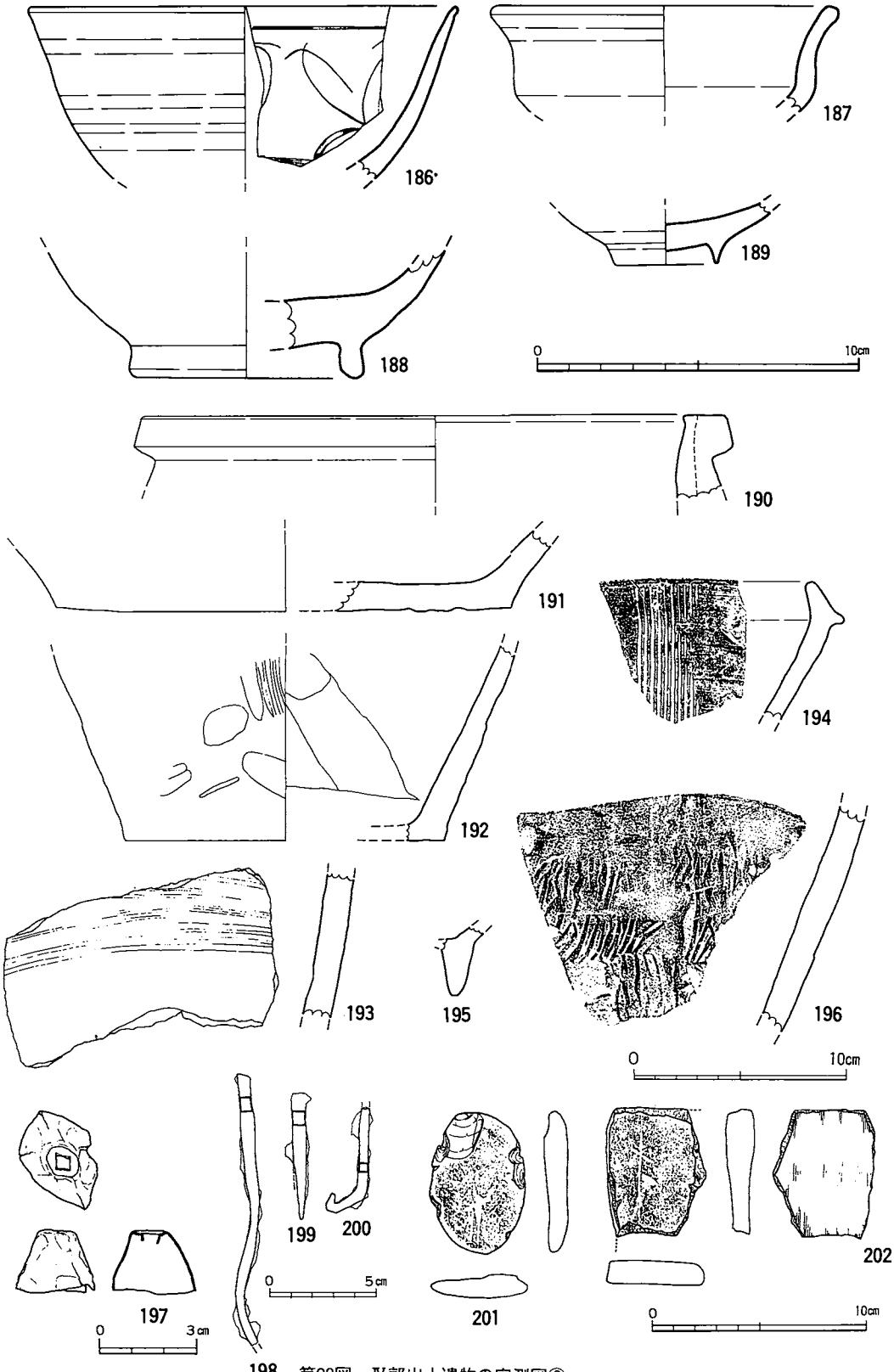
197は青銅製の飾りと思われる。上面に菱形の孔があり、断面は台形を呈する。上面は幅1.1cm・下面幅2.6cm・高さ1.9cmである。

198～200は鉄釘である。198は多少折れ曲がっているが0.6×0.7cmの角釘で、残存の長さは12.5cmである。199は0.6cm四方の角釘で、全長6cmを測る。200は先端部が大きく弯曲している。

201・202は砥石である。201は粘板岩製で、202は天草砥石である。



第89図　Ⅳ郭出土遺物の実測図①



第90図　Ⅳ郭出土遺物の実測図②

青磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
186 青磁 (同安窯)	(13.4)			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。口縁はやや外反し直口となる。	体部内面の界圏に草花文様。 体部外面に薄い稜線。	胎土は精良な灰色。
187 青磁碗	(10.8)			体部は非常に鋭く立ち上がり、外反気味に伸びる。口縁は丸味を帯びる。	体部外面にごく薄い稜線。無文。	胎土は灰白褐色。釉色はくすんだ緑灰色。体部内外両面とも貫入が目立つ。
188 〃		(7.2)		底部は極端に肥厚する。(厚さ1.4cm)最大高台内高さ1.1cm、高台の上位幅7mm、畳付きは幅3mmでやや丸味を帯びる。	無文。体部外面に無数のヒビ割れ。	胎土は白灰色。釉色はオリーブ色。 高台内の外底面は無釉、色調は淡橙色。 高台部分は肌色に変色(重ね焼きの際の変色と思われる)。
189 青白磁碗		(3.2)		体部内面の見込みから体部にかけては、鈍く立ち上がっており、ほとんど直線的に伸びている。	体部外面の下位にごく薄い稜線。	胎土は汚れた灰白褐色。釉色は灰色。

瓦質土器　炉器

190 常滑 (壺)	(27.2)			口縁は極めて扁平、頸部に粘土の貼り付けあり。	頸部内面は指押え後、荒いナデ。 口縁の上面はヘラ削り後、非常に丁寧なナデ。 頸部外面は丁寧な横ナデ、貼り付け部分の下面はヘラ削り。	色調は薄茶色。非常に緻密な焼成。
191 備前 (壺)		(21.3)		外底は平底で器面は凸凹している。	内底面は指押え後、荒いナデ、体部内面は比較的丁寧な横ナデ。体部外面は指押え後横ナデ、外底面は調整なし。	色調は内面がくすんだ感じの小豆色。外面は鈍い橙色。
192 常滑 (壺)		(14.9)		体部は底部から鋭く立ち上がる。体部は中途でわずかにくびれる。体部内面は凸凹している。	体部内面は横方向と斜め方向のナデが重複。 体部内面の立ち上がりは指押え。体部外面は指押え後、荒い横ナデと、一部斜め方向のナデ。	胎土に小礫を多く含む。 色調は小豆色。
193 硬質瓦器 (火舎)				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。	体部内面は指押え後丁寧なナデ、体部外面はヘラ磨き。	色調は内面が灰色、外面が淡明褐色。体部外面の磨滅激し。
194 備前 (擂鉢)				体部は鋭く立ち上がっており、やや内弯気味に伸びる。口縁直口で、外面の端部は突帯状に張り出す。	体部の内外両面とも強い横ナデ、条線の一単位は9本。	色調は二次焼成のため灰白黒色。
195 土製香炉				高さ2cm。底面の幅は3mmを測る。	――――――	土製香炉の脚部。
196 瓦器 (甕)				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。	体部内面はヘラ削り後、横ナデ、体部外面はナデ後タタキ。	色調は浅黄灰色。

砥石

No.	計測値				形態の特徴
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
201 砥石	6.62	4.60	1.18	37.93	扁平な転び石で、長軸方向への刃潰しが見られる。粘板岩。
202 〃	6.03	4.69	1.32	54.50	二面使用で、正面・裏面とも長軸方向に対してやや弓状に中央部分が凹み、横断面は水平的に使用している。刃潰しによると思われる、深い彫り傷が見られる。天草産。

第69表　Ⅳ郭出土遺物の観察表②

（5）堀切Ⅰ—A・B出土の遺物

203～205は青磁皿である。203の口径は（12.7）cmで、体部は大きく外反する。204・205は稜花皿で、204は口径（12.1）cmを測る。205は口径（11.3）cmを測り、二次焼成で変色している。206～208・212～214は青白磁の碗である。底径は206が（5.7）cm、207が（4.0）cm、208が（7.0）cmを測る。口径は212が（9.8）cm、213が（11.3）cm、214が（10.6）cmである。214は体部が内弯する。211は金窯青磁の可能性があり、口径（9.4）cmを測る。体部の内外両面にナマコ色と黒茶色の釉がかかる。

215は焼成温度の低い青磁で、胎土は完全に磁器化していない。釉は褐灰色である。209は青磁で体部内の上位に花華文がある。210は仏花瓶の底部で、底径（5.0）cmを測り、黒茶色の釉がかかる。

216は備前の瓶で、頸部は「く」の字に外反し、口縁は玉縁状になる。口径（25.2）cmである。

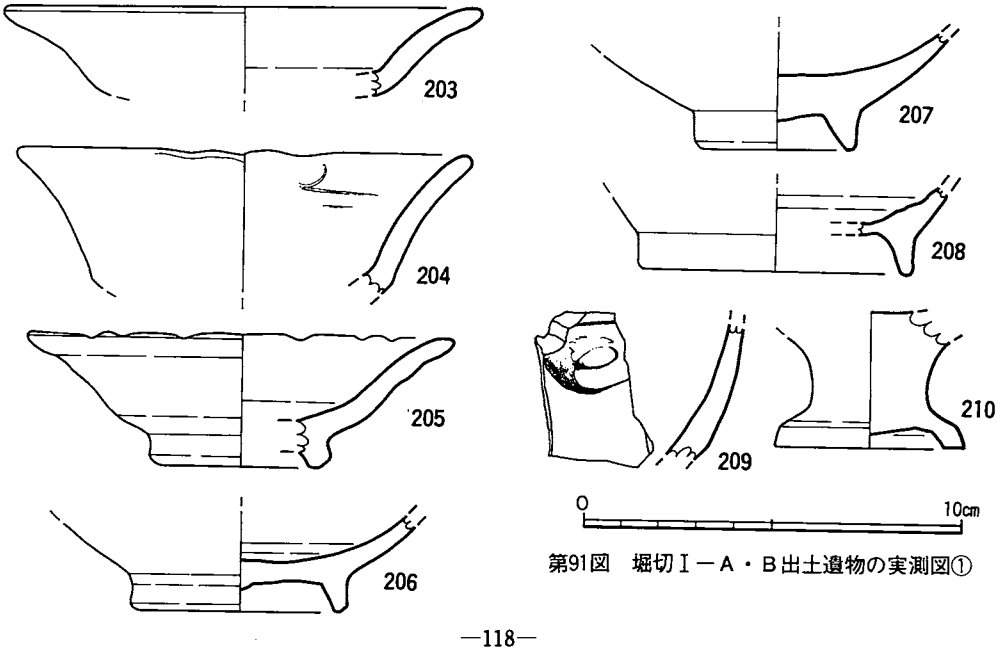
217は硬質瓦器の火舎で体部外面の中途に突帯がある。218・219は瓦器の土器である。218は内面に指頭痕が残る。219は頸部がやや内傾しながら「く」の字に外反する。

220・224は硬質瓦器で、火舎と思われる。220は体部外面に縦長の長方形（内に3条の直線が交差する。）の文様がある。224は質量感のある瓦器で、頸部は「く」の字に外反し、口縁の上面は扁平である。223は瓦器の擂鉢で条線は密に重なる。222は備前系の擂鉢で、条線の一単位は8本である。外底面の調整が粗い。221は滑石製の石鍋片である。

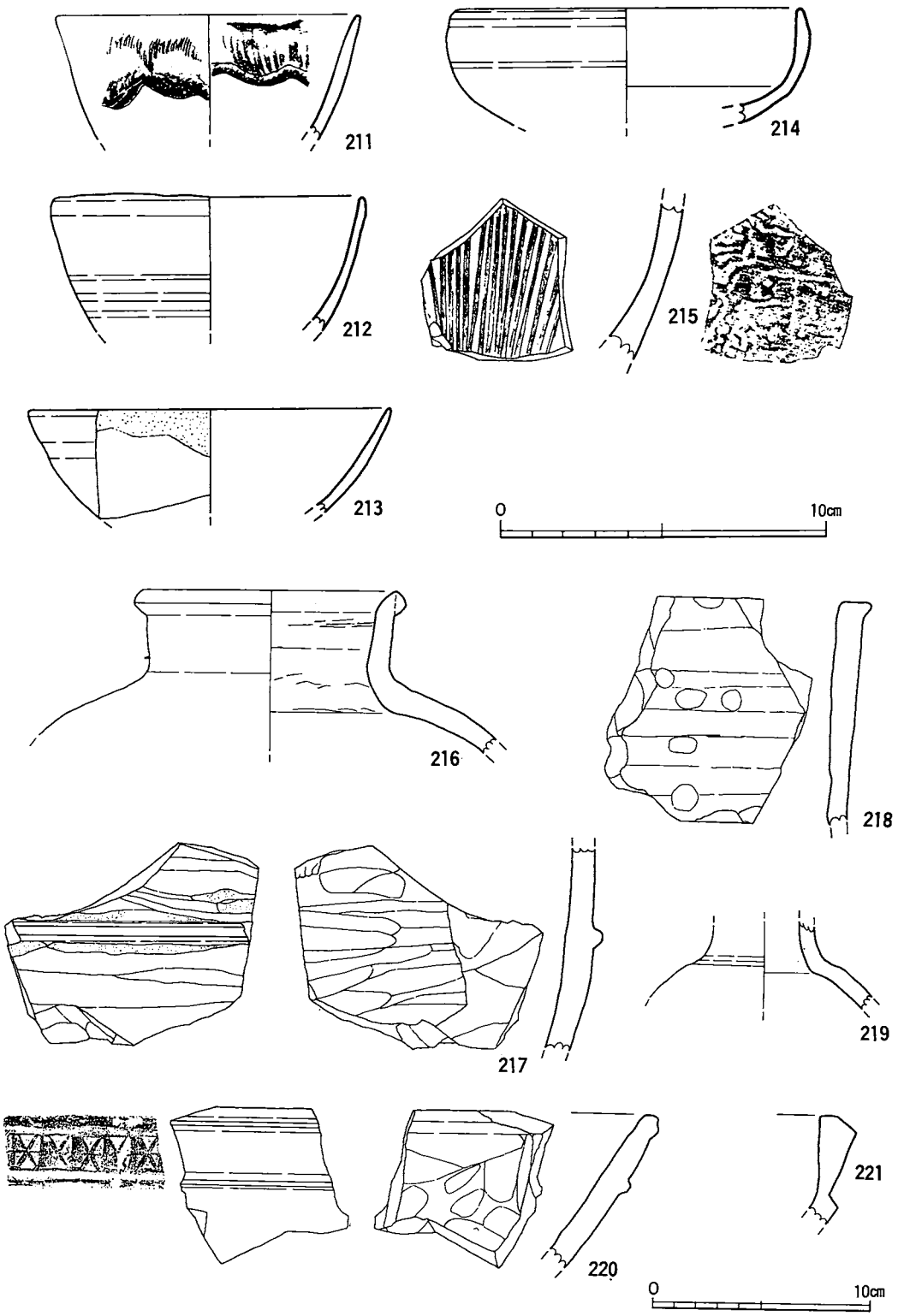
225はビタ銭である。計13枚で、その内、3枚が重なり合って出土した。

226は鉄釘である。

227～229は転び石を転用した砥石である。227は紫赤色閃緑凝灰岩製で、228は頁岩製、229は粘板岩製である。



第91図　堀切Ⅰ—A・B出土遺物の実測図①



第92図　堀切Ⅰ－A・B出土遺物の実測図②

青磁・白磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
203 青磁皿	(12.7)			体部は極めて鈍く立ち上がり、大きく外反する。	無文。	胎土は灰白褐色、釉色はオリーブ灰色。 体部外面に貫入あり。体部内面に貫入なし。
204 〃	(12.1)			体部は鋭く立ち上がり、外反する。 体部の器壁はそのままの大きさで口縁に至る。口縁は波状。	体部内面に曲線と横線の文様。	胎土は灰褐色、釉色は灰オリーブ色。 稜花皿。
205 〃	(11.3)			体部は鈍く立ち上がり、外反気味に伸びる。 高台内の高さは推定4㎜、畳付きはやや丸味を帯びる。	口縁は波状、体部下位に薄い稜線。	二次焼成の為、胎土は灰褐色。釉色は灰白黄色。高台内は無釉、胎土中の小礫が剝離した小穴あり。 稜花皿、非常に汚れた感じの皿。
206 青白磁碗		(5.7)		体部は鈍く立ち上がる。高台はやや外側に張り出す。畳付きの幅2㎜、高台内の中心部の高さ6㎜、端部で8㎜。	体部内面の見込みに稜線。畳付きを除いて全面施釉。	胎土は灰白褐色。釉色は光沢のある灰色。 体部内面の見込みに重ね焼きの痕が茶褐色として残る。
207 〃		(4.0)		体部は底部から鈍く立ち上がる。高台の造りは多少いびつ。	体部内面の見込みにロクロ回転痕が、無釉の状態で鮮明に残る。	胎土は精良な灰白色。高台の畳付き部分のみ無釉、他は全面に施釉。
208 〃		(7.0)		底部は薄壁(厚さ3㎜)。高台はやや張り出す。高台の上位幅1㎝、畳付きの幅3㎜、高台内の高さ1.0㎝。	体部内面は無釉で、ロクロ回転痕が鮮明に残る。 体部外面と高台との境に、釉溜り状になった沈線あり。	胎土は灰黄色。釉色は白灰青色。畳付きにトチが付着。高台内にも施釉。
209 青磁				胴部のみ残存で体部の下位から上位にかけて漸次、薄壁。	体部内面の上位に花華文。	胎土は灰色。釉色は灰緑色。
210 陶器 (仏花瓶)		(5.0)		高台は大きく外側に張り出す。高台の畳付きの幅は6㎜、高台の中心部の高さは4㎜、端部は6㎜。	高台の畳付きはヘラ削りで扁平。	胎土は精良な灰白色。釉色は黒茶色。 仏花瓶の底部。
211 青磁 (金窯)	(9.4)			体部は鋭く立ち上がり、わずかに内弯気味に伸びる。	――――――	胎土は精良な褐灰色。体部の内外両面の上位にナマコ色と黒茶色の釉がかる。無釉の部分は暗オリーブ色。
212 青白磁碗	(9.8)			体部は鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。体部は薄壁(厚さ3㎜)。口縁は多少、凸凹の感あり。	体部外面の下位に薄い白色の稜線。	胎土は白灰色、釉色は光沢のある灰色。
213 〃	(11.3)			体部は鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。	体部内面は丁寧なナデ。	胎土は精良な灰白褐色。釉色は灰白色。 体部外面の上位に、やや白っぽい釉がかかっている。
214 〃	(10.6)			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。 体部の器壁は中途から上位部分にかけて、やや肥厚する。	体部外面の中位と口縁下に稜線。稜線間は沈線状となる。	胎土は精良な灰白褐色。釉色は内面が鈍い濃灰色。外面は光沢のある濃灰色(極小の黒点が混じる)。
215 青磁				体部の中途で薄壁。	体部内面に幅1㎜程の縦線。	胎土は褐灰色。(やや焼成温度が低い感じ)。 釉色は灰色に褐灰色がまだらに混じる。

第70表　堀切Ⅰ－A・B出土遺物の観察表①

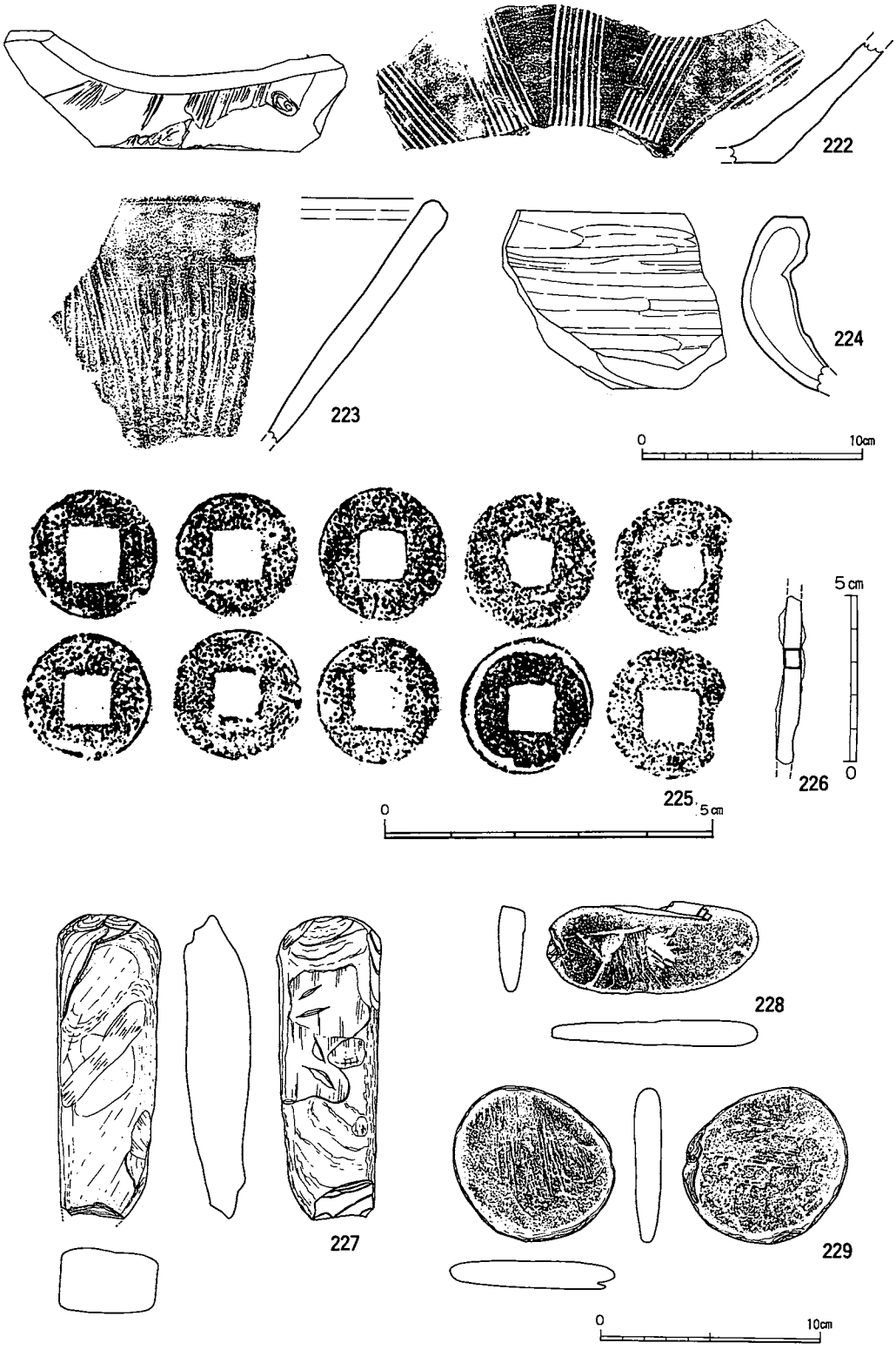
瓦器・硬質瓦器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
216 備前 (瓶)	(25.2)			頸部はくの字に外反、口縁は玉縁状。	頸部内面の上位は横ナデ、中途はナデ。 頸部外面の調整は自然釉が器面全体にかかる為、不明。	外面の釉色は黄白色。 体部の色調は小豆色。
217 硬質瓦器 (火舎)				体部は鋭く立ち上がっており、わずかに内弯気味に伸びる。体部外面の中途に突帯。	体部内面は指押え後、ナデ。下位はヘラ削り後、横ナデ、体部外面は横ナデ後、ヘラ磨き。	胎土は黄褐色、色調は灰黒色。
218 瓦質土器				体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁の上面は扁平。	体部内面は指おさえ後、荒い横ナデ。指頭痕が残る。口縁の上面はヘラ削り後、丁寧なナデ。 体部外面は指おさえ後、丁寧なナデ。	胎土は浅黄橙色、焼成はやや不良。色調は内面が灰黒色で外面は浅黄橙色。
219 〃				頸部はやや内傾しながら、くの字に外反。	頸部の内面は丁寧な横ナデ。	色調は灰黄色。
220 硬質瓦器 (火舎)				体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁外面の直下と、体部外面の中途に突帯。	体部の内外両面はナデ。体部外面に縦長の長方形(内に3条の直線が交差する)文様あり。	色調は桃色。緻密な焼成。
221 滑石製 (石鏃片)				体部上面は直立し、わずかに内弯。口縁の上面は扁平(幅8mm)で外側は斜めに切れる。体部外面は内側へ切れ込んで薄壁となり、再び同箇所より外側へ斜めに切れる。	体部はノミでシャープに削り出されている。	良質の滑石。
222 備前系 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がる。底部端で肥厚する。	体部内面は指押え後、横ナデ、指押え痕は同じ円状に重なり合っている。体部外面はナデ後、ハケ目。条線の一単位は8本。外底面の調整荒し。	二次的焼成で灰色味を帯びる小豆色。
223 瓦器 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がり、極めて直線的に伸びる。体部は下位から上位へ漸次、肥厚する。 口縁上面は右寄りにかけて、わずかに窪む。	体部内面は丁寧なナデ。(但し、口縁直下はやや雑な調整)条線は密に重なる。体部外面はナデ、体部外面の立ち上がりは、ヘラ削りでくびれる。	色調は白褐色。体部外面に釉かな凸凹あり。
224 硬質瓦器 (火舎)				頸部はくの字状に外反。口縁上面は扁平。	頸部の内外両面はヘラ削り後、横ナデ。 口縁上面はヘラ削り後、横ナデ。	色調は淡黄色、焼成はやや不良で体部内面は灰色。頸部内面の下位に小さな凸凹が広がる。質量感のある土器。

砥石

No.	計測値				形態の特徴
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
227 砥石	13.68	4.74	3.12	323.65	転び石を砥石としたものであり、正面の中央に研磨面が見られ、それを断ち切るような凹みを持つ大きな削痕が、右上より左下方向に付けられている。裏面にも、わずかな研磨面が見られる。閃緑凝灰岩
228 〃	9.62	4.30	1.15	69.19	扁平な転び石を使用している。正面のみの使用で、下部に研ぎ面と横方向からの細かな刃潰しが見られる。右側面に2cm程の研磨面が見られる。 頁岩。
229 〃	7.17	7.42	1.23	91.70	扁平な転び石を使用している。正面には上下の削痕があり、中央に研ぎ面が見られる。裏面は横方向に削痕が見られるものの研磨痕は見られない。粘板岩

第71表　堀切Ⅰ－A・B出土遺物の観察表②



第93図　堀切Ⅰ－A・B出土遺物の実測図③

（6）堀切Ⅰ—C出土の遺物

230～242は土師器皿である。口径6.8～7.9cm・底径3.7～5.1cm・器高1.9～2.9cmを測る。232・234・236・238には外底面に板目圧痕が残る。233・234・238は緻密な焼成である。235は口縁の内面に少量のススが付着する。237は二次焼成で、色調は灰色を呈する。242には直径1mmの円孔が残る。形態的には、皿としてやや高めの器高を有し、体部はラッパ状に鋭く立ち上がり直線的に伸びる230・231・233・235・240・241・242と、体部が船型を呈する236・237・239とに分類される。

243～271は土師器坏である。形態的には、口径に対する底径の比率が低く、体部がラッパ状に鋭く立ち上がり直線的に伸びる243～259と、船型を呈する260～271に分類される。243～259は口径10.5～11.9cm・底径5.0～7.0cm・器高3.4～3.9cmである。243・257・264・270にはススが付着しており、244・246・252・259は緻密な焼成である。249・253・258・259は外底面に板目圧痕を残す。254は軽量の土師器皿である。260～270は口径11.9～13.0cm・底径6.7～8.3cm・器高3.0～4.0cmである。271はやや大型で、口径（14.8）cm・底径（10.3）cm・器高3.9を測る。261・268・269・270は緻密な焼成である。266・268・269・270は外底面に板目圧痕を残す。264にはススが付着する。267・268は質量感がある。

272・273は青磁碗である。無文で、口縁は外反する。272は口径（15.4）cmを測る。273は口径（14.1）cmを測り、体部が大きく内弯する。

274は陶器で口径（9.8）cmを測る。胎土は乳黄色である。

275・277は雷文帯を有する青磁碗である。275は口径（12.3）cmで、体部は直線的に伸びている。277は口径（14.2）cmで、非常に使い込んであり文様は消えかかっている。

276は細蓮弁文様を有する青磁碗であるが、簡略化されている。口径（13.5）cmを測る。

278は青磁碗の底部で底径（4.6）cmを測る。高台は外側に張り出す。内底面に印花文様がある。

279は同安窯の青磁皿で、底径（4.2）cmを測る。体部の立ち上がりは腰折れ状態となり、内底面に櫛描文がある。280は蓮弁文様の青磁片である。

281・282は小柄の類である。281は残存の長さ13.0cm・刀幅1.3cm、282は残存の長さ7.6cm・刀幅1.1cmを測る。283～286は鉄釘である。

287～289は古銭で、287・288は寛永通寶、289は鉄銭である。

290は瓦器の擂鉢である。口径（23.2）cmで、体部は直線的に伸び、内外両面にススが付着する。291は瓦器の坏である。口径（21.6）cm・底径（8.8）cm・器高6.8cmを測る。

292は土製香炉の類と思われる。口径（8.1）cmで、体部の上位は内傾した突帯が付く。胴部を欠くが、底部は肥厚し大きく外側へ張り出す。外底面は扁平。底径は（12.9）cmである。

293は土製香炉で、口径（11.6）cm・底径（9.8）cm・器高6.6cmで、小脚が付く。294～296

は香炉の小脚片である。同一個体の可能性もあるが、個々の脚は異なった形態をしている。

297～302は瓦質の擂鉢であるが、いずれもかなり使い込まれている。297・300は片口を有する。条線の一単位は、298が6本、299が5本、301が4本である。298・299は薄壁の平底で、条線の掻き目は内底面まで及ぶ。

303・305は硬質瓦器の火舎である。303は極めて扁平な口縁を有する。体部外面は荒いヘラ磨きの後、左斜め方向にナデが施されている。305の残部底径は（35.0）cmを測る。本体の底部は平底で端部に脚が付く。脚部は高さ4.2cmで、ほぼ直立する。

304は瓦器の火舎で、体部外面に突帯が付く。三ッ巴の刻印がある。

306・308～314は硬質瓦器の火舎である。306は口径（44.4）cmを測り、体部に三日月形の孔と三ッ巴文のスタンプがある。308は口径（18.1）cmで、体部の上位に孔と花文のスタンプがある。309の底部は平底である。内底面は端部より中央部にかけてやや肥厚し、厚さ2.7cmを測る。310・312は口縁の上面が扁平で、端部が突帯状に張り出す。いずれも花文のスタンプがある。313は焼成がやや不良で、色調は淡黄色である。311・314は体部外面の下位に突帯が付く。311は花文のスタンプがある。314の体部外面はヘラ磨きされている。

307は瓦器の火舎である。体部は鋭く立ち上がり、ほぼ直立する。口径（34.8）cmで、体部外面の上位に花文のスタンプがある。

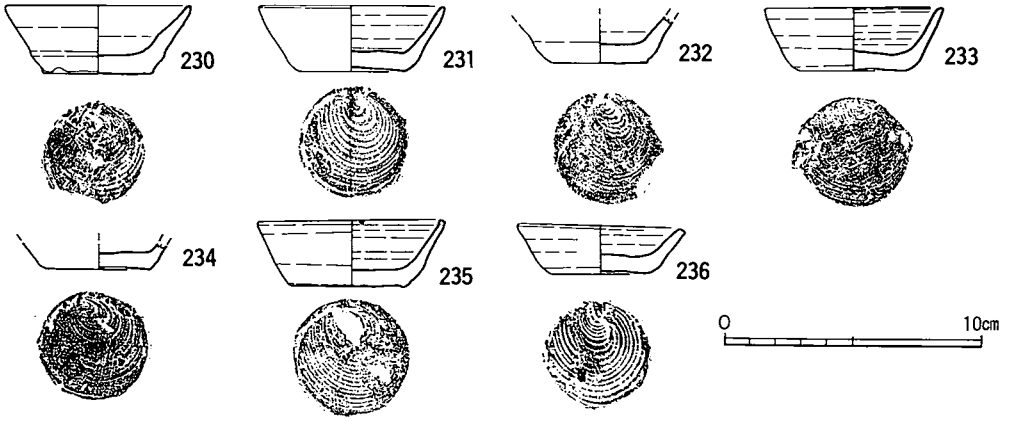
315は瓦器の擂鉢である。体部外面に指頭痕が残る。かなり使い込んであり、条線の磨滅が激しい。318・319は備前の擂鉢である。319は二次焼成で変色している。

316は土師系の小壺である。肩部の上位に鍔が付く。体部は極めて薄壁であり、内外両面に櫛目が入る。

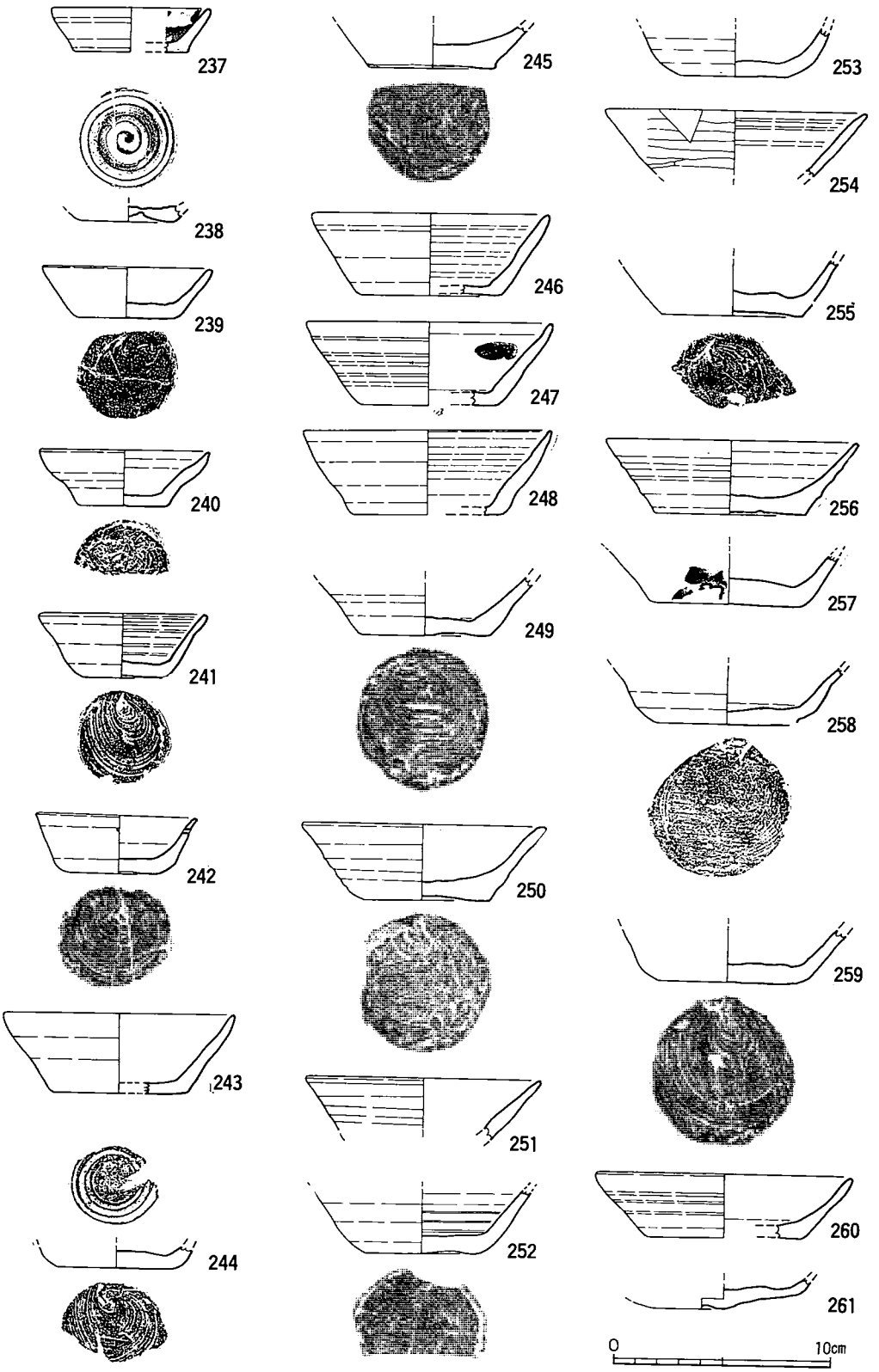
317は須恵系甕である。焼成不良で色調は黄灰色を呈する。320は土製の錘である。

321は石臼の上臼で、凝灰岩製である。上面の直径は26.6cm、下面の直径は28.4cm、器高は9.9cmを測る。

322～324は砥石である。322は粘板岩製で、323は頁岩製、324は天草砥石である。



第94図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図①



第95図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図②

土師器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
230 土師器皿	(7.4)	4.0	2.7	体部は底部から鋭く立ち上がり、中途からやや外反気味に伸びる。	体部の内外両面は横ナデ。体部の内面は平滑。 体部の外面は若干、ザラつく。 体部の外面にごく薄い稜線。 内底面のロクロ回転痕と外底面の糸切り痕は、後のナデで薄い。	胎土は精良(極小砂を含む) 色調は鈍い橙色。
231 〃	(7.5)	4.2	2.6	体部は底部から丸味を持って鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。底部はやや上げ底。 内底面は全体的に凸面となる。	体部内面は横ナデ、体部外面は丁寧なナデで平滑。 体部内面に薄い稜線。内底面のロクロ回転痕はナデでほとんど消滅。 外底面の糸切り痕は鮮明。器形の平面形は正円。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色、内外両面とも一部灰白黒色。胎土に黒点粒子が混入、体部内面よりも外面に多い。
232 〃		3.8		体部は底部から鈍く立ち上がる。	内底面のロクロ回転痕と外底面の糸切り痕は、後のナデで薄い。	胎土は精良。 色調は浅黄橙色、内底面は灰黒色。 外底に板目圧痕。 緻密な焼成。
233 〃	7.1	4.3	2.5	内底面は全体的に凸。外底面はわずかに上げ底。 体部は平底から丸味を持って鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。	体部の内外両面は横ナデ、内底面のロクロ回転痕は、後のナデで消滅。 外底面の糸切り痕はナデで薄し。口縁はナデ調整で扁平。体部内面は強い横ナデで薄い稜線あり。 体部外面はナデ、体部外面に薄い稜線。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色。 外底面にわずかな板目圧痕。 緻密な焼成。
234 〃		4.2		底部端に鮮明な稜。	内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は良。 色調は鈍い橙色。外底面に極小の黒点が混じる。緻密な焼成。
235 〃	(7.6)	4.6	2.6	体部は平底からやや丸味を持って鋭く立ち上がり、直線的に伸びるが、中途でやや外反する。	体部内外両面は横ナデ。体部内面に鮮明な稜線。 内底面のロクロ回転痕は、ナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄い。体部外面に薄い稜線。外底面に2ヵ所の爪先痕。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色。 口縁にわずかなススが付着。非常に丁寧な造りの土師器皿。
236 〃	6.8	4.0	1.9	体部は底部から比較的鈍く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。 底部はやや上げ底。	体部内面はナデ。体部外面は横ナデ、両面調整は丁寧。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕は鮮明。 体部の内外両面に、極めて薄い稜線。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色。 外底面に板目圧痕。
237 〃	(7.4)	(5.1)	2.1	体部は平底からやや鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁は丸味を帯びる。	体部の内外両面はナデ。 体部の外面はややザラザラした感じ。 体部の外面に薄い稜線。	胎土は良。 色調は灰色体部の内面にタール状のものが黒斑点となって付着。 二次焼成の土師器皿。
238 〃		4.4		外底面は上げ底で、内底面の一部は胎土内の小石が剝落して凹となっている。	内底面のロクロ回転痕は、後の調整なしで極めて鮮明。 外底面の糸切り痕は後のナデで薄い。	胎土は精良。 色調は淡赤橙色。外底面に米粒大の粘土の塊りが付着。緻密な焼成。外底面に板目圧痕。
239 〃	(7.9)	(4.5)	2.3	体部は平底からやや丸味を持って鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 内底面はやや凸の状態、内底面の端部に沈線が巡る。	体部の内外両面は横ナデ、体部内面は平滑。体部外面に薄い稜線。 内底面のロクロ回転痕はナデで、ほとんど消滅。 外底面の糸切り痕はナデで、非常に薄い。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色。 緻密な焼成。

第72表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表①

土師器

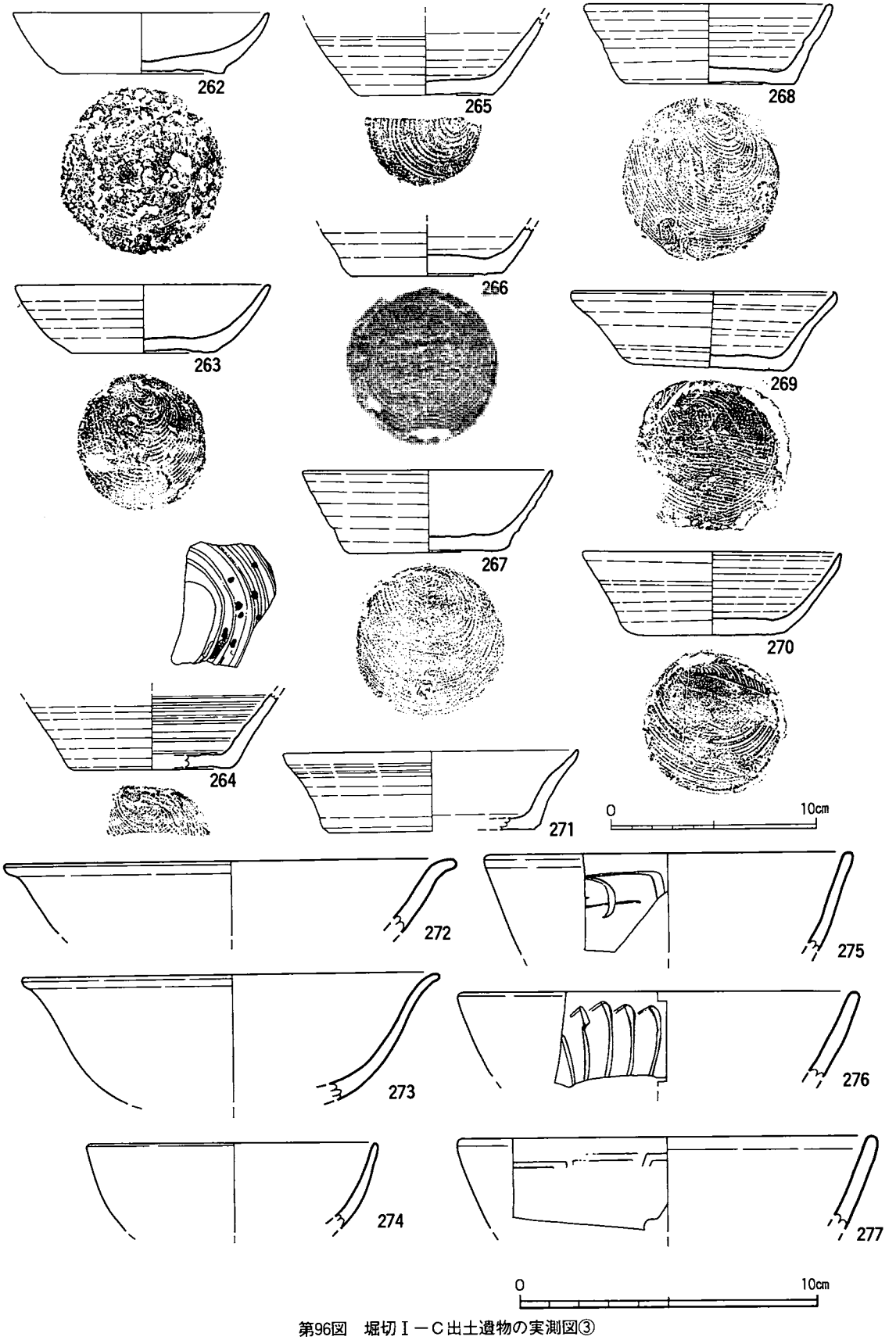
No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
240 土師器皿	(7.9)	4.0	2.6	体部は平底から鋭く立ち上がり、中途で大きく外反する。但し、口縁で若干、内反。 口縁直口。	体部の内外両面は横ナデ、体部内面にごく薄い稜線。体部外面に薄い稜線。内底面のロクロ回転と、外底面の糸切り痕はナデで消滅。 体部内面は多少ザラザラ。	胎土は良(小粒子混入)。 色調は鈍い橙色。
241 〃	(7.8)	3.7	2.9	体部は平底から丸味を持って鈍く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。 口縁はやや肥厚する。	体部の内外両面はナデ、体部内面に鮮明な稜線。 体部外面に薄い稜線。内底面のロクロ痕は、後のナデで消滅。外底面の糸切り痕は鮮明に残る。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色。
242 〃	(7.4)	4.3	2.7	体部は底部から丸味を持って鋭く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。底部はやや中央部寄りでやや上げ底。体部上位に直径1mm程の円孔。 口縁直口。	体部内外両面はナデ、内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄い。 体部外面のナデは丁寧。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色。
243 土師器坏	(10.5)	(6.0)	3.7	体部は平底から鋭く立ち上がり、中途からやや外反気味に伸びる。 口縁直口。	体部の内外両面はナデ。体部内面は平滑。 体部外面は丁寧な調整であるがザラつく。 内底面のロクロ痕と外底面の糸切り痕は、後のナデでほとんど消滅。	胎土は良。 色調は鈍い橙色。 体部外面の立ち上がりに、カーボンが小班点として付着。
244 〃		5.3		外底は平底。内底面は全体的に凸。	内底面のロクロ回転痕は中央部がナデで、消滅している以外は鮮明。 外底面の糸切り痕は後のナデでやや薄い。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色。 緻密な焼成。
245 〃		6.0		体部は平底から鈍く立ち上がり直線的に伸びる。 外面の底部端は、わずかに突き出す。	体部の内外両面は横ナデ、外面は丁寧な調整。 内底面のロクロ痕は後のナデで消滅。 外底面の糸切り痕は後のナデでやや薄い。	胎土は良。 色調は浅黄橙色。
246 〃	(11.2)	(6.5)	3.7	体部は平底から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面はザラザラで鮮明な細い稜線。体部外面に薄い稜線。 外底面の糸切り痕は後のナデで薄い。 底部の器壁。	胎土は良。 色調は淡赤桃色。 緻密な焼成。
247 〃	(11.6)	(6.5)	3.9	体部は平底(推定)から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁は若干、内弯気味。	体部内面はナデで平滑。体部外面は横ナデ。 体部外面に薄い稜線。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。 体部内面の中位にススの付着。
248 〃	(11.7)	(7.0)	3.8	体部は底部からやや外反気味に鋭く立ち上がり、中途から直線的に伸びる。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面に非常に鮮明な稜線。体部外面に薄い稜線。	胎土は良。 色調は外面が鈍い橙色、内面は浅黄橙色。
249 〃		6.0		体部は底部から鋭く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。底部端は肥厚。内底面の中央部は凸。	体部内面はナデ。体部外面は横ナデ、体部内面はザラつく。内底面のロクロ痕はナデ後も残存。 外底面の糸切り痕はナデで薄い。 体部外面に稜線。	胎土は良。 色調は黄橙色。外底面に板目圧痕。
250 〃	11.5	5.9	3.5	体部は底部から鋭く立ち上がり、外反気味に伸び、口縁部で肥厚する。形状は体部外面で直線的。体部内面で丸味を有する。底端部で肥厚。 底部はやや上げ底。	体部内面は横ナデ。体部外面はナデ。体部内面は丁寧な調整で平滑。体部外面の上位に薄い稜線。 体部外面の下位に鮮明な稜線。外底端部に限ってヘラ削り。内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は精良。 色調は浅黄橙色。(内底面に極小の黒斑点) 外底面の糸切りは一度失敗し、体部の立ち上がり部分を削り取っている。

第73表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表②

土師器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
251 土師器坏	11.0			体部は丸底(推定)から鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁直口。	体部の内外両面は横ナデ。体部外面に鮮明な稜線。 丁寧な造りの土器。	――――――
252 〃		(5.3)		体部は底部から丸味を帯びて立ち上がる。 外底面に指頭痕。	体部内面に鮮明な稜線。体部外面に薄い稜線。 内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は良。 色調は内面が浅黄橙色。外面が橙色と浅黄橙色。
253 〃		(5.0)		体部は底部から丸味を帯びて鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。	内底面のロクロ回転痕はナデでほとんど消滅。 外底面の糸切り痕はナデで薄い。体部外面の下位に3条の鮮明な稜線。	胎土は精良。 色調は内面が浅黄橙色。外底面に板目圧痕。
254 〃	(11.9)			体部は鈍く立ち上がり、極めて直線的に伸びる。	体部内外両面は横ナデ。体部内面の調整は丁寧で薄い稜線。 体部外面に波状の稜線。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色。軽舶の土器。
255 〃		6.4		体部は底部から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 底部端に鮮明な稜。内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄し。底部は上げ底。	内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕はナデで薄し。 底部は多少上げ底。	胎土は良。 色調は鈍い黄橙色。
256 〃	(11.4)	(6.8)	3.4	体部は平底から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は丁寧な調整で平滑。体部外面に鮮明な稜線。 内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。内底面全体に指頭痕。多少凸凹。外底面の糸切り痕は後のナデで薄い。	胎土は良。 色調は鈍い橙色。
257 〃		(6.6)		体部は平底から鈍く立ち上がる。 底部端から底部中央にかけて肥厚。	体部の内外両面に横ナデ。独特の調整で器面は全体的にボワーとした感じ。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。	胎土は良。 色調は浅黄橙色。体部外面の下位にススが付着。
258 〃		6.4		底部は平底から鈍く立ち上がり、内弯気味に伸びて中途でやや外反する。 底部端と体部の境目に沈線が巡る。	内底面のロクロ回転痕はナデでやや薄い。 外底面の糸切り痕は後のナデでほとんど消滅。 内底面の中央に指頭痕。	胎土は良。 色調は橙色。外底に板目圧痕。
259 〃		6.3		体部は底部から鈍く立ち上がる。底部は肥厚。	内底面のロクロ回転痕と外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は良。色調は浅黄橙色。質量感のある土器。外底面に胎土から石粒が剝落した穴あり。外底面に板目圧痕。緻密な焼成。
260 〃	(11.9)	(7.9)	3.0	体部は底部から鈍く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。体部は中途で一旦くびれる。 口縁はやや肥厚し、丸味を帯びる。	体部内面はナデで平滑。体部外面は横ナデ。 体部外面に薄い稜線。	胎土は良。 色調は鈍い橙色。
261 〃				外底面に大きな凸あり。手ずくね土器。	内底面は丁寧なナデ。	色調は鈍い桃色(体部外面に極小黒点が混じる)。緻密な焼成。
262 〃	12.6	8.1	3.0	体部は平底から鈍く立ち上がり、内弯気味に伸びる。底部端に端的な稜。体部の立ち上がりは一旦窪む。	器壁は内外両面とも凸凹の状態、器面の剝落で調整不明。	胎土は良。 色調は白褐色。

第74表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表③



第96図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図③

土師器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
263 土師器坏	(12.5)	(7.5)	3.3	体部は底部から鈍く立ち上がり、内弯気味に伸びる。外底面の中央部と端部の間が上げ底。	体部の内外両面は横ナデ。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄い。外底面に指頭痕。体部外面に稜線。	胎土は良。 色調は鈍い橙色。
264 〃		(7.7)		体部は平底から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。	体部の内外両面に横ナデ。体部内面に極めて鮮明な稜線。体部外面に薄い稜線。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は良。 色調は鈍い橙色。 体部外面にススが点々と付着
265 〃		(6.7)		体部は底部から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。底部は中央部と端部の間が多少上げ底。	体部の内外両面は横ナデ。体部の両面上位に薄い稜線。体部の両面下位に比較的鮮明な稜線。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。外底面の糸切り痕は鮮明に残る。	胎土は良。 色調は外面が鈍い橙色。内面が浅黄橙色。
266 〃		7.5		体部は平底から丸味を持って鈍く立ち上がり、内弯気味に伸びる。内底面は全体的に凸。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は丁寧な調整。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は精良。色調は橙色。 外底面に板目圧痕。
267 〃	12.5	7.5	4.0	体部は平底から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁直口。内底面は多少凸凹。底部は肥厚し、体部は薄壁。	体部の内外両面は横ナデ。体部両面は平滑。体部外面に鮮明な稜線。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄し。	胎土は精良。色調はにぶい橙色。 内底面に灰黒茶色のまだら付着。 質量感のある土器。
268 〃	12.1	8.3	3.9	体部は平底から鋭く直線的に立ち上がり、中途でやや外反気味に伸びる。口縁部は丸味を有する。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面に薄い稜線。体部外面に鮮明な稜線。内底面のロクロ回転痕はナデ後も鮮明に残る。外底面の糸切り痕はナデで薄し。	胎土は精良。色調は鈍い黄橙色。 外底面に板目圧痕。 質量感のある土器。緻密な焼成。
269 〃	(13.0)	(7.5)	3.7	体部は平底から鋭く立ち上がり、外反気味に伸びる。口縁は直下で肥厚し内弯する。 口縁直口の状態。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面に鮮明な稜線。体部外面に薄い稜線。内底面のロクロ回転痕はナデで薄い。外底面の糸切り痕はナデでほとんど消滅。	胎土は良。色調は鈍い黄橙色。 外底面に板目圧痕。 緻密な焼成。
270 〃	12.7	6.8	4.0	体部は平底から丸味を持って鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。 口縁直口。	体部の内外両面は横ナデ。体部の内面に非常に鮮明な稜線。体部の外面に薄い稜線。 内底面のロクロ回転痕はナデ後も薄く残る。 外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。 外底面に板目圧痕。内底面に灰黒色の小黒点。緻密な焼成。
271 〃	(14.8)	(10.3)	3.9	体部は底部から鋭く立ち上がり、外反気味に伸びる。 口縁直口。底部は平底と推察される。	体部の内外両面は横ナデ。体部外面に鮮明な稜線。体部内面は平滑。外底面の糸切り痕は後のナデで消滅。	胎土は精良。 色調は鈍い黄橙色。 非常に緻密な焼成。

青磁・白磁

272 青磁碗	(15.4)			体部は鈍く立ち上がっており、わずかに内弯気味に伸びている。口縁はやや丸味を帯びて外反。	無文。	胎土は白灰。釉色はオリーブ灰色。 体部内面はやや光沢あり。体部外面はくすんだ感じ。
273 〃	(14.1)			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。 口縁で大きく外反。	無文。	胎土は灰白褐色。釉色はオリーブ灰色。 体部内面に薄い貫入。

第75表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表④

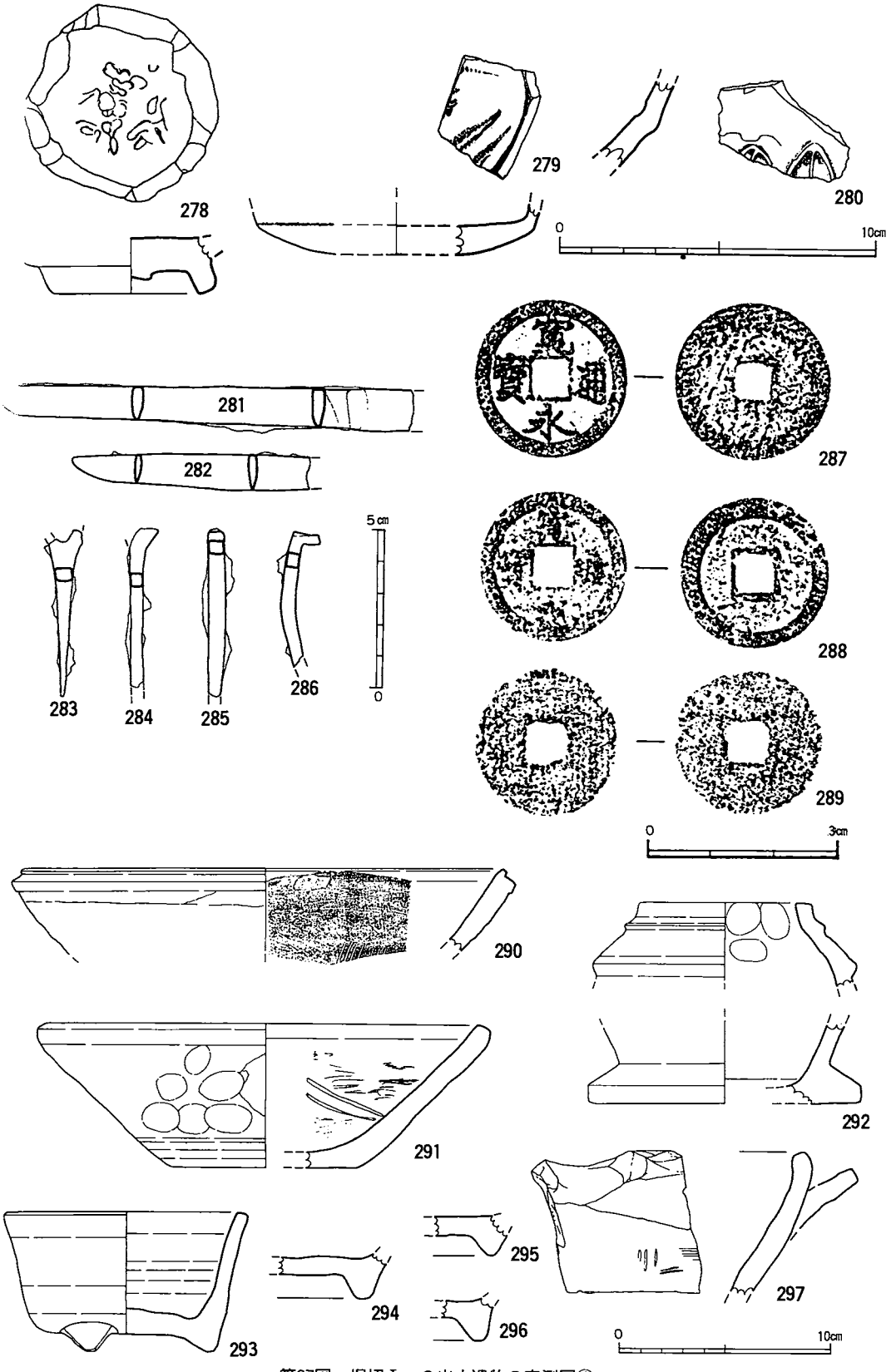
青磁・白磁

No.	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
274 陶器	(9.8)			体部は鋭く立ち上がっており、やや内弯気味に伸びる。	――――――	胎土は乳黄色。
275 青磁碗	(12.3)			体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。体部外面は上位でわずかにくびれる。	体部外面の上位に雷文帯。	胎土は白褐色。 釉色は薄緑黄色。
276 〃	(13.5)			体部は鋭く立ち上がり、極めて直線的に伸びる。体部から器壁はそのままの大きさで口縁に至る。	体部外面に細蓮弁文。文様は簡略化されており、剣頭は連続しない。	胎土は灰白褐色。釉色はくすんだ青白緑色。
277 〃	(14.2)			残存の体部は直線的に伸びる。 体部から口縁に至るまで器壁の厚さに変化なし。	体部外面の口縁下に櫛描きによる雷文帯。 体部内面は丁寧なナデ。	胎土は灰白色。釉色はくすんだ感じの緑白青色。非常に使い込んだ磁器で文様は消えかかっている。
278 〃		(4.6)		高台は外側に張り出す。高台の畳付きは右斜め上に削り取られている。高台内のロクロ回転痕はベターッとした凸となる。高台内の高さは中心部が4㎜、端部が7㎜。	内底面に印花文様。	胎土は灰白色。釉色は緑白青色。 高台内の外底面のみ無釉。
279 青磁 (同安窯)		(4.2)		底部は肥厚(厚さ9㎜)する。 体部の立ち上がりは腰折れ状態となる。	内底面に櫛描文。	胎土は灰白色。釉色は薄いオリーブ色。外底面は無釉。
280 青磁片				――――――	体部外面にヘラ削りによる鮮明な蓮弁文様。 体部内面に幅5㎜の沈線。	胎土は精良で灰白色。 釉色はオリーブ黄色。

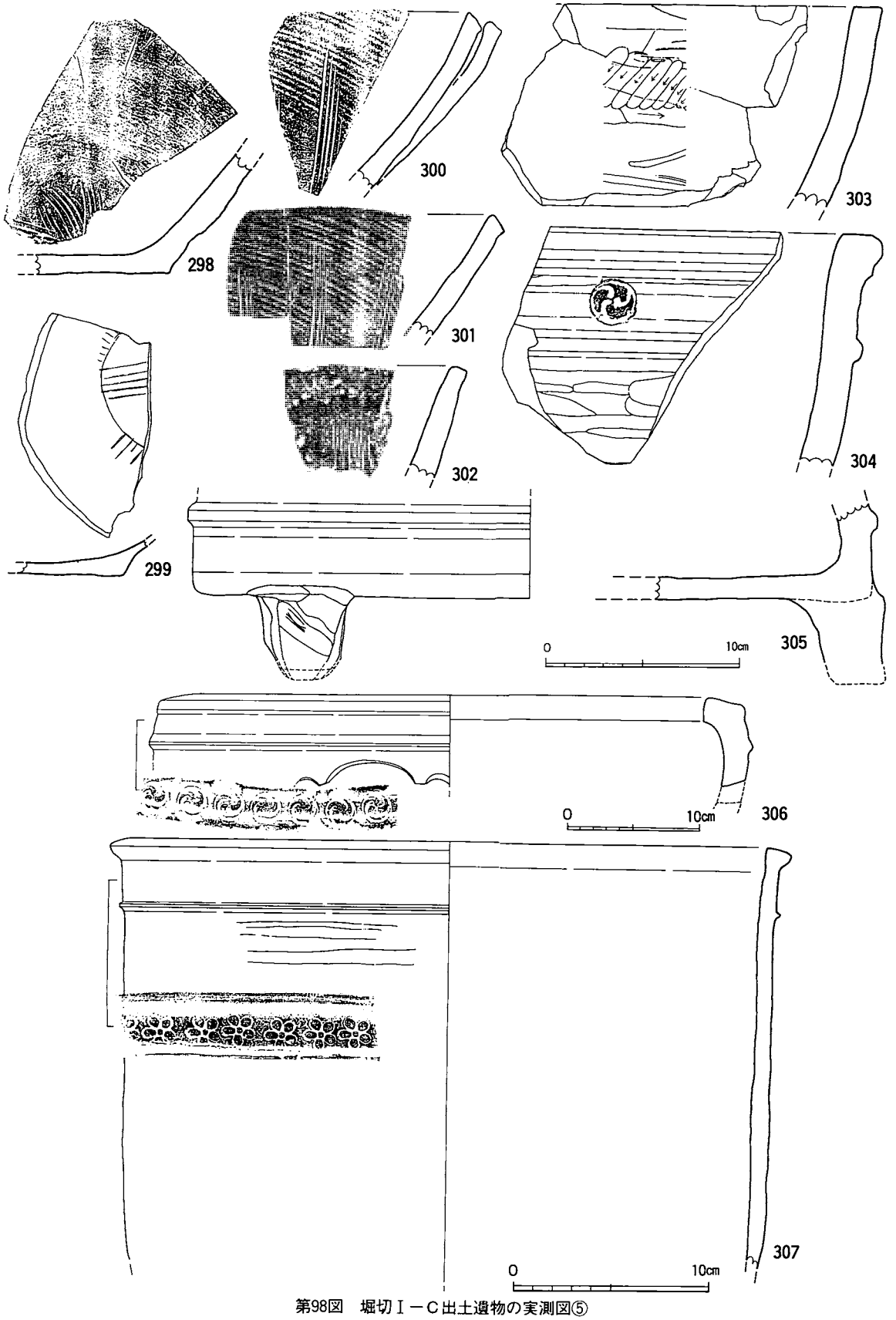
瓦器・硬質瓦器

290 瓦器 (擂鉢)	(23.2)			体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。体部は口縁にかけて漸次、肥厚する。 口縁は扁平で中央部がやや窪む。	体部内面の上位に、丁寧な横ナデ。中位に丁寧な右斜め下方向のナデ。体部外面の口縁下は横ナデ、上位から中途にかけて指おさえ後ナデ。 条線は9条が観察できる。	胎土は精良。 色調は灰白色。
291 瓦器 (坏)	(21.6)	8.8	6.8	体部は底部より鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁は扁平で中央部はわずかに窪む。 体部の中途はやや薄壁。	体部内面は非常に丁寧な横ナデ。体部外面の上位は横ナデ、中途は指おさえ後ナデ。体部外面と底部の境はヘラ削りの後、横ナデ。 体部内面に右斜め下方向のヘラによる沈線。 口縁はヘラ削り後ナデ。	胎土は鈍い桃色。底部は一部、桃色化。 体部の内外両面にスス付着。 緻密な焼成。
292 土製香炉	(8.1)	(12.9)		体部は内傾。口縁は扁平。体部外面の上位に突帯。残存体部の下位に突帯。底部は肥厚し、大きく外側へ張り出す。外底面は扁平。	体部内面は指おさえ後、荒いナデ。体部外面は横ナデ後、ヘラ磨き。体部内面は非常に丁寧なナデ。外底面はナデ。口縁はヘラ削り後ナデ。	胎土は浅黄橙色。色調は内面が灰色。体部外面が褐色。
293 〃	(11.6)	(9.8)	6.6	体部は鋭く立ち上がり、わずかに外反気味に伸びる。口縁は扁平(幅5㎜)、小脚(高さ9㎜)が付く。底面は幅4㎜で3脚と思われる。	体部外底面に糸切り痕。体部内面に鮮明な稜線。体部外面に薄い稜線。内底面は中央部が高く端部へ向い傾斜する。	緻密な焼成。
294 香炉 (小脚片)				本体の底部は平底であるが、内底面の中央部はわずかに窪む。小脚の高さは1.1㎝で底面の幅は5㎜	本体の内底面は指おさえ後、ナデ。 外底面は丁寧なナデ。	胎土は鈍い橙色。
295 〃				小脚の高さは1㎝で、底面の幅は3㎜。	――――――	胎土は灰褐色。

第76表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表⑤



第97図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図④



第98図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図⑤

瓦器・硬質瓦器

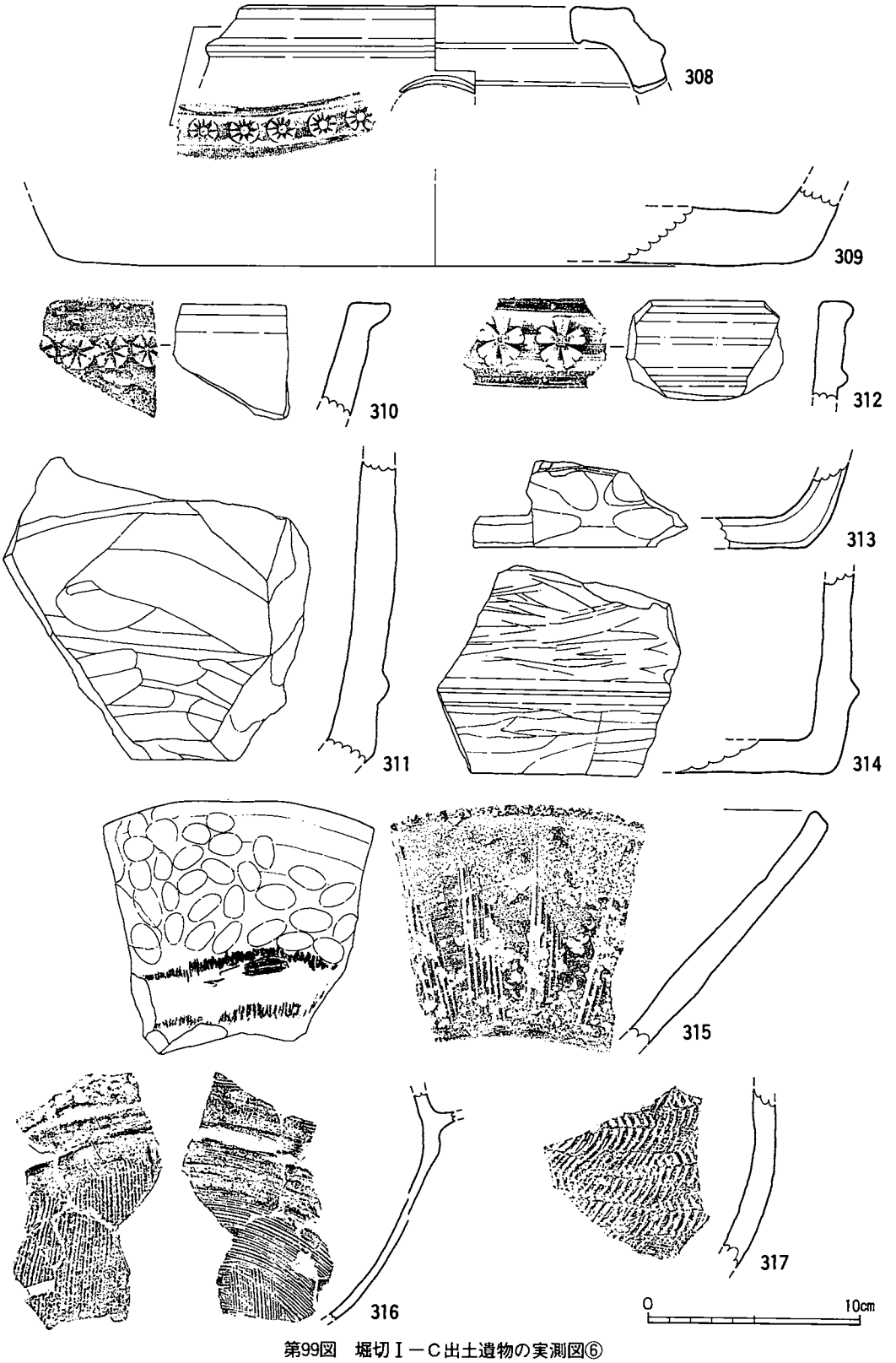
No.	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	形態の特徴	手法・調整・文様	備考
296 香炉 (小脚)				小脚の高さは1.1cmで底面の幅は5mm。	――――――	胎土は鈍い橙色。
297 瓦器 (擂鉢)				体部は鋭く立ち上がり、上位でやや内弯する。 片口を有する。	器面は内外両面とも、ほとんど剝落。 体部内面の下位にわずかに掻き目と条線の一部を残すのみ。	条線は磨滅。 色調は褐灰色。
298 〃				体部は平底から鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 体部外面の立ち上がりは窪む。 平底は薄手で厚さ1cm。	体部内面は丁寧なナデ。条線の一単位は6本で、底面まで掻き目の痕跡あり。 体部外面は指おさえ後、ナデ。 外底面は指おさえ後、丁寧なナデ。	色調は灰黒白色。非常に使い込んだ擂鉢で条線の大部分は磨滅。 体部内面に薄い横線の削痕。
299 〃				体部は底部から鈍く立ち上がる。底部の厚さは中央部寄りで5mm、底部で1.1cm。 体部と底部の境はくびれる。厚さ4mm。	条線の一単位は5本で、掻き目は内底面にまで及ぶ。内底面はナデで外底面の調整は荒い。	胎土に小礫が混じる。色調は灰黒褐色。 器面の磨滅激し。焼成不良。
300 〃				体部はやや鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。片口を有する。口縁直口。 端部内側はやや斜めに切れる。	口縁上面はヘラ削り後、非常に丁寧な横ナデ。 体部内面の中位より上位に右斜め下方向の櫛目。下位は横方向に棱線の掻き目。 体部内面に5条の条線。体部外面は指おさえ後、ナデ。	色調は灰白黒色。 緻密な焼成。
301 〃				体部は鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁直口。端部内側がやや斜めに切れる。	体部内面は右斜め下方向のハケ目。口縁はヘラ削り後、極めて丁寧な横ナデ。体部外面は指おさえ後、丁寧なナデ。条線の一単位は4本。	色調は灰白黒色。
302 瓦器 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がっており、直線的に伸びる。 体部の中途は肥厚(厚さ1.4cm)する。 口縁は扁平。体部外面の上位はややくびれる。	口縁はヘラ削り後、ナデ。体部内面の上位は横ナデ。中途は指おさえ後、ナデ。 条線は7条が観察できる。	色調は内面が褐白色。外面は灰黒色。
303 硬質瓦器 (火舎)				体部は鋭く立ち上がり、わずかに内弯気味に伸びる。口縁は極めて扁平。	口縁の上面はヘラ削りで扁平、幅1.5cm。 体部内面は非常に丁寧な横ナデ。下位に右斜め方向のナデが重複。体部外面は荒いヘラ磨きの後、左斜め方向にナデ。	胎土は鈍い黄橙色。 色調は体部内面が鈍い黄橙色へ灰白黒色。 体部外面は灰黒色に変色。
304 瓦器 (火舎)				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。口縁は扁平。口縁の外側は突帯状を呈する。 体部は肉厚(厚さ1.7mm)体部外面の上に突帯。	体部内面の上位はヘラ磨き。中途は丁寧なナデ。 体部外面の突帯より上位は横ナデ。下位はヘラ磨き、体部外面に三ツ巴文の印刻。 口縁の上面はヘラ削り。	色調は鈍い橙色。体部内面の上位は黒色に変色。体部外面に器壁の剝離あり。使い込んだ土器である。質量のある瓦器。
305 瓦器 (火舎)		残存底部径 (35.0)		本体の底部は平底で端部に脚がつく。 脚部の高さは約4.2cm、ほとんど直立。 体部外面に突帯あり。	内底面は指おさえ後、丁寧なナデ。外底面は非常に丁寧なナデ。体部外面は丁寧な横ナデ。 脚部は指おさえ後、ナデ。	胎土は非常に精良。内面は鈍い橙色。 外面は浅黄橙色。
306 〃	(44.4)			体部上位は内弯しながら内傾する。口縁の内面は直立し、やや外側へ傾斜する。端部はわずかに突帯状となる。体部外面に小規模な突帯。	体部内面は指おさえ後、荒い横ナデ。口縁の上面はナデ後に荒いヘラ磨き。体部外面はヘラ磨き。 体部に三日月形の孔。体部外面の上位に己文のスタンプ。	胎土は褐色。色調は灰黒色。 焼成はやや不良。

第77表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表⑥

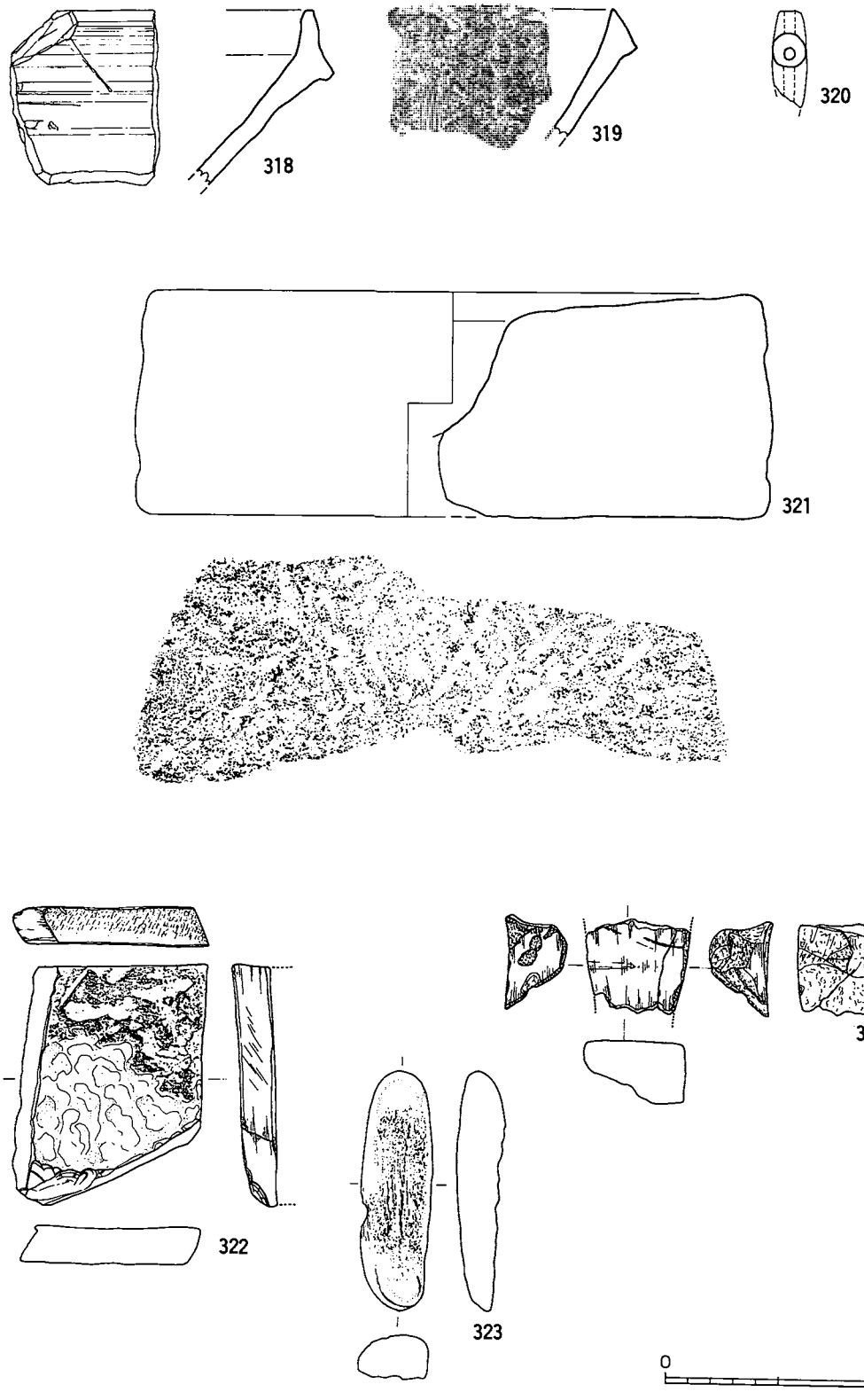
瓦器・硬質瓦器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
307 瓦器 (火舎)	(34.8)		残存高さ (20.5)	体部は鋭く立ち上がり、ほぼ直立する。上位でわずかに外反する。体部は薄手(厚さ8～10mm)。口縁は扁平で外側へわずかに傾斜し、端部は突帯状に張り出す。体部外面の上位に小規模な突帯。	体部内面は中途まで横ナデ。下位はヘラ削り後、横ナデ。指おさえの痕も残る。 体部外面はヘラ削り後、横ナデ。突帯下に横方向のヘラ削り。体部外面の上位に花文(5枚の花びら)スタンプ。	色調は灰色。
308 硬質瓦器 (火舎)	(18.1)			体部上位は内弯気味に内傾する。 口縁上面は扁平で幅広い(幅2.6cm)が、中央部でわずかに窪む。口縁の端部はやや突帯状に張り出し、外面は外傾する。 体部外面の上位に突帯。体部の上位に孔。	口縁の内面から体部外面にかけてヘラ磨き。 体部内面は指おさえ後、比較的丁寧な横ナデ。 体部外面の上位に花文のスタンプ。 孔はヘラ削り。	色調は鈍い黄橙色。 緻密な焼成。
309 〃				底部は平底で内底面は端部より中央部へかけてやや肥厚する。中央部の厚さ2.7cm。	内底面は丁寧な横ナデ。体部外面は丁寧な横ナデ。外底面は荒い横ナデ。	胎土は浅黄橙色。色調は灰黒色。
310 〃				体部上位は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。口縁の上面は扁平で端部が突帯状に張り出す。	体部内面と口縁上面はヘラ削り後、丁寧な横ナデ。 体部外面の上位に花文のスタンプ。	胎土は淡黄色。色調は灰黒色。 体部外面の磨滅が激しい。
311 〃				体部は鋭く立ち上がっており、わずかに内弯気味に伸びている。体部下位に突帯が付く。 突帯の上下両面はわずかに窪む。	体部内面は丁寧なナデ。下位は指おさえ後、横ナデ。体部外面は指おさえ後、ヘラ磨き。一部突帯の上位で横ナデが加わる。	胎土は淡黄色。色調は内外両面とも灰黒色 質量感のある土器。 焼成はやや不良。
312 〃				体部上位は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びる。口縁の上面は扁平で、端部が突帯状に張り出す。体部外面の上位に突帯が付く。	口縁上面はヘラ削り後、ナデ。 体部外面の上位に花文のスタンプ。	胎土は鈍い黄橙色。 色調は灰褐色。
313 硬質瓦器 (火舎)				体部は平底からやや鋭く立ち上がる。	体部内面と内底面は非常に丁寧なナデ。 体部外面と外底面は指おさえ後、ナデ。	色調は淡黄色。 焼成はやや不良(器壁の内部は灰白黒色)
314 〃				体部は底部から鋭く立ち上がり、直立する。 体部外面の下位に突帯が付く。	体部内面は比較的丁寧な横ナデ。器面の剝離が進む。体部外面はヘラ磨き。突帯から上位に細線の削痕が目立つ。外底面は非常に丁寧なナデ。	胎土は鈍い黄橙色。色調は内面が灰黒色、外面が赤褐白色。体部内面にスス付着。 緻密な焼成。
315 瓦器 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁直口。外面は右斜め下方向に傾斜し、体部の中途でやや肥厚する。	体部外面の上位は横ナデ。中途は指おさえ後、荒いナデ。 体部内面の立ち上がりはヘラ削りでくびれる。 口縁の外面はヘラ削り後ナデ。	かなり使い込んだ擂鉢で、条線もかなり磨滅、条線の一単位は6本(推定) 体部外面にスス付着(部分的にかなり濃く付着)。色調は汚れた灰黄褐色。 焼成やや不良。
316 土師系 (小壺)				肩部は比較的大きく張る。上位に鍔がつく。 体部は極めて薄手(厚さ4mm)で、上位でやや肥厚する(厚さ6mm)。	体部内面の上位は横ナデ、下位は横と縦方向の櫛目が入る。体部外面は縦の櫛目が入る。	胎土は鈍い黄橙色。色調は鈍い褐色。 体部外面にスス付着。体部外面の磨滅激し。 緻密な焼成。
317 須恵 (甕)				――――	体部外面はタタキ。 体部内面は器面剝離。	色調は黄灰色。焼成は不良。
318 備前 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁はやや内弯し、外面の中央部はやや凹む。 端部内側がやや斜めに切れる。 体部は上位にかけて漸次、肥厚する。体部外面は波状に凹む。	体部内面は丁寧な横ナデ。 体部外面は指おさえ後、横ナデ。 口縁の外面は丁寧な横ナデ。	色調は赤茶色。内面は小豆色。 体部の上位に右斜めと横方向に直線の切裂。

第78表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表⑦



第99図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図⑥



第100図　堀切Ⅰ－C出土遺物の実測図⑦

備前

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
319 備前 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がっており、わずかに内弯気味に伸びている。口縁は直口で、中央部は扁平であるが、わずかに丸味を帯る。端部内側はごくわずか斜めに切れる。体部から口縁にかけてやや肥厚。	体部の内外両面は指おさえ後、横ナデ。 口縁はヘラ削りの後、非常に丁寧なナデ。	胎土に小礫が混じる。 二次焼成のため、色調は灰黒白色に変色。

石臼

No.	形態の特徴
321 石臼	上臼で、上面の直径は26.6cm、下面の直径は28.4cm、高さは9.9cmを測る。上面に「くぼみ」があり、最大の深さは11.3cmを測る。供給口は中途より上位で大きく開く。下面に「ふくみ」は殆どなく、わずかに高さ0.1cmを測るのみである。擂目は荒い。石材は凝灰岩である。

砥石

No.	計測値				形態の特徴
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
322 砥石	10.70	8.67	1.97	263.73	正面は、礫面をそのままにして、上部の高まりの部分に研ぎ面が見える。上左角に深い削りが見られる。上部側面は下方の肩部にのみ研ぎ面が見られる。右側面は肩部が落ちて丸みを持っており、長軸方向にねじれが見られる。粘板岩。
323 砥石	10.69	3.32	2.16	97.19	正面の下部にわずかな研磨痕が見られ、その後刃潰しと思われる削痕が長軸方向に付けられている。裏面は横方向からの一撃による剝離が行われている。頁岩
324 〃	4.15	4.62	2.75	52.93	正面は長軸方向に対して中央が凹み、横断面は蒲鉾形を呈する。上部に刃止まりが見られる。 天草産。

第79表　堀切Ⅰ－C出土遺物の観察表⑧

（7）堀切Ⅰ—D出土の遺物

325～330は土師器皿である。口径7.0～7.6cm・底径3.6～4.5cm・器高2.2～2.8cmを測る。325・328は口縁の内外両面にススが付着する。326・329・330は緻密な焼成である。形態的にはほぼ同一で、皿としてはやや高めの器高を有し、体部はラッパ状に鋭く立ち上がり直線的に伸びている。

331～336は土師器坏である。口径11.3～13.6cm・底径6.5～8.7cm・器高2.8～3.9cmを測る。332はススが付着し、外底面に板目圧痕が残る。336は体部内面にススが付着する。形態的にはほぼ同一の船型であるが、332は体部が直線的に伸びており、334は体部がやや外反する。

337は青磁の盤で、口径（27.7）cmを測る。体部内面に鎬文がある。338～342は青磁碗である。338は口径（17.0）cmで、体部は内弯する。339は口径（15.0）cmで体部外面に薄い稜線が巡る。340は口径（15.0）cmで体部は直線的に伸び、口縁でやや外反する。341は口径（14.1）cmで、体部内面に草花の一部と見られる文様がある。342は口径（13.7）cmで、体部外面に細蓮弁文様が描かれている。345は青白磁碗で口径（11.7）cmを測る。体部はわずかに内弯気味に伸びて口縁でやや外反する。341・346は同安窯の青磁碗である。346は口径（13.9）cmで体部内面に櫛描文があり、外面には弱い稜線が巡る。

343・344は白磁皿である。343は口径（8.0）cm・底径（4.1）cm・器高2.5cmを測る。太く低い高台が付く。344は口径（10.2）cmで外底は平底である。体部は直線的に伸びており口縁直口である。347は瀬戸系の陶器で釉色は薄緑色を呈する。348は陶器の小壺で釉色は黒茶褐色である。口縁と体部外面の一部にススが付着する。

349～356は硬質瓦器である。349・350・351・354・356は火舎で、352は小壺、353は甕、355は坏である。349・350は体部外面の上位に2条の突帯と花文のスタンプが付く。口径は349が（33.4）cm、350が（26.8）cmである。351は体部外面に2条の突帯と菱形文様のスタンプが付く。352は緻密な焼成である。353は胴部が大きく膨らみ、胴部径は（41.4）cmを測る。体部は厚手（厚さ2.6cm）で外面はヘラ磨きされている。354は底径（39.4）cmを測る。体部の下位は空洞になって全体的に脚の様装を呈するが、さらに最下部に小脚が付く。356は六角形のスタンプが付く。355は口径（19.1）cm・底径（7.8）cm・器高5.6cmを測る。体部は鈍く立ち上がり、わずかに内弯する。

357は硬質瓦器の茶釜である。口径（17.0）cmを測り、肩部に垂下用の耳が付く。358は硬質瓦器の擂鉢である。条線の一単位は10本で、体部外面に指頭痕が残る。

359・360・362は瓦器の擂鉢である。条線の一単位は、359が5本、362は9本（推定）である。360は条線がほとんど磨滅している。

361は備前の甕である。体部外面の上位に格子のタタキが入り、中途で縦方向のナデが施される。363・365は須恵系の甕である。363は楓の葉の文様が印刻され、体部外面は横ナデの後、

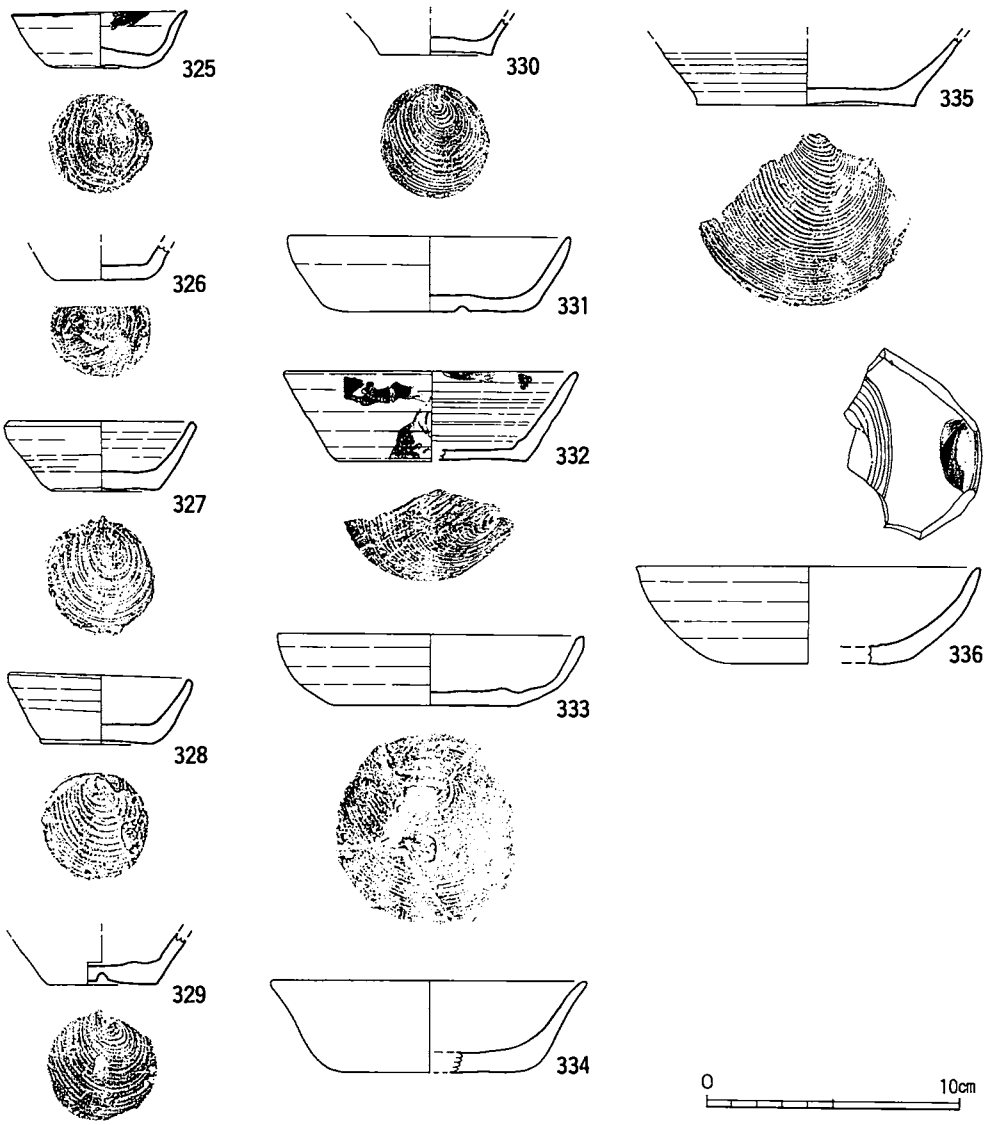
軽い研磨が行われている。365は体部外面にハケ目がある。

364は硬質瓦器の火舎で体部は直立する。体部外面は荒いヘラ磨きの後、横方向の細かい掻き目がある。366は土錘である。367は須恵系の小坏である。368は土製香炉の小脚である。

369は茶臼の下臼で凝灰岩製である。臼の上面は直径20.2cmで、心棒穴は直径2.0cm、高さ11.4cmを測る。

370～376は鉄器である。370は小刀で、他は鉄釘である。371は残存の長さ7.8cm・刀幅1.0cmを測る。372～375は細長の釘で376は0.9cm四方のやや太い角釘である。

377～379は砥石である。377は粘板岩製、378は頁岩製で、固定して使用されたものである。

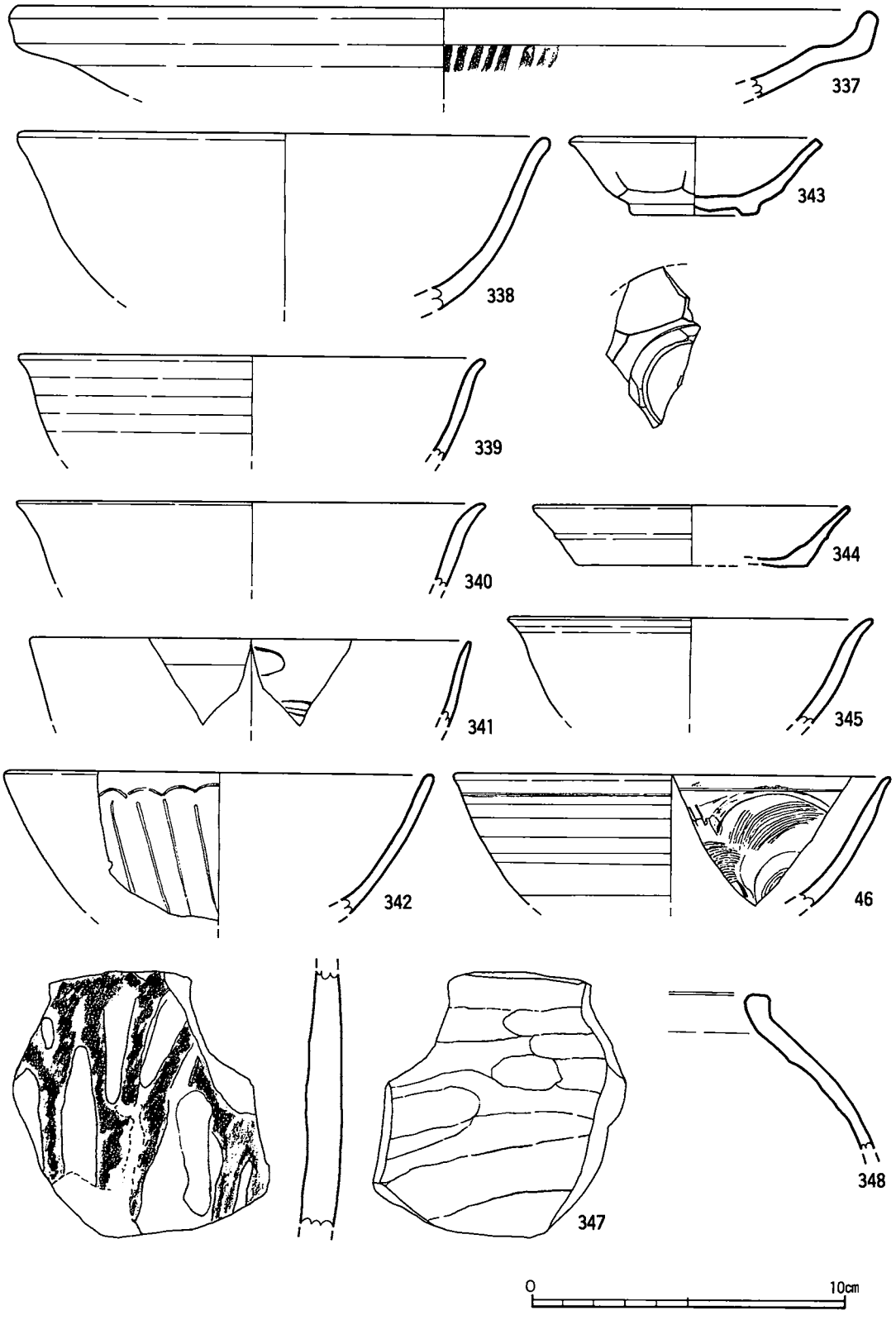


第101図　堀切Ⅰ－D出土遺物の実測図①

土師器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
325 土師器皿	(7.0)	4.0	2.2	体部は底部から丸味を持って鋭く立ち上がり、やや外反気味に伸びる。 口縁は直口気味。内底面はやや凸。 器形は多少いびつ。	体部内外両面はナデで、特に内面の調整は強い。 内底のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は良。色調は鈍い橙色。口縁の内外両面にススが付着する(内面は付着大)。
326 〃		(3.6)		外底は平底。	内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は良。色調は淡赤橙色。 緻密な焼成。
327 〃	7.6	4.3	2.8	体部は平底から鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 内底面の中央部に限ってやや凸。	体部の内外両面は横ナデ。体部内外両面に薄い稜線。 内底面のロクロ回転痕はナデでほとんど消滅。 外底面の糸切り痕は鮮明。	胎土は精良。色調は鈍い橙色で、体部外面はやや灰黒色。
328 〃	7.3	4.5	2.7	体部は平底から丸味を持って鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 外底面はやや上げ底気味の平底。 外底端に稜がつき、やや肥厚する。	体部の内外両面は横ナデ。 体部内面は丁寧な調整で平滑。体部外面に薄い稜線。 内底面のロクロ回転痕と外底面の糸切り痕はナデが薄い。	胎土は精良。色調は橙色であるが、外面の一部は灰白黒色。 口縁にわずかのスス付着。 質量感のある土器。
329 〃		4.3		体部は底部から鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 底部端は肥厚し、多少上げ底。 外底に直径4㎜大の円孔（未貫通）。	内底面のロクロ回転痕はナデでほとんど消滅。 外底面の糸切り痕はナデにより多少薄い。	胎土は精良。 色調は鈍い桃色。 緻密な焼成。
330 〃		4.5		体部は底部から鋭く立ち上がり、外反気味に伸びる。底部端に端的な稜。 内底面はやや凸。底部は上げ底。	内底面のロクロ回転痕はナデで薄い。 外底面の糸切り痕は後の調整なしで鮮明。	胎土は精良。 色調は鈍い桃色。 緻密な焼成。
331 土師器坏	(11.3)	(7.4)	3.0	体部は平底から丸味をもって鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。 外底面に直径5㎜、深さ2㎜の円孔。	体部の内外両面はナデ。両面は多少ザラつく。 内底面のロクロ回転痕と外底面の糸切り痕はナデで消滅。	胎土は良(灰褐色の極小点が混入)。 色調は鈍い橙色。
332 〃	(11.8)	(7.5)	3.5	体部は平底から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 底部端に稜。	体部の内外両面は横ナデ。 両面に鮮明な稜線。内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。 外底面の糸切り痕はナデ後も薄く残る。	胎土は良。色調は鈍い橙色。 口縁の内面と体部の外面にススの付着。 外底面に板目圧痕。
333 〃	(12.2)	7.4	2.8	体部は底部から丸味をもって鈍く立ち上がり、内弯気味に伸びる。 口縁部は直口の状態でやや肥厚する。いびつな器形。	体部の内外両面は横ナデ。 体部の中途は薄壁。内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデで薄し。 体部外面に薄い稜線。体部内面は平滑。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色。
334 〃		(6.9)		体部は底部から丸味を帯びて内弯気味に立ち上がり、口縁でやや外反する。	体部の内外両面はナデ。 内面は丁寧な調整で平滑。外面は多少、調整荒し。 内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕は薄く残る。	胎土は良。 色調は鈍い橙色。
335 〃		(8.7)		体部は平底から鈍く立ち上がり、外反気味に伸びる。底部中央と端部の間が上げ底。 底部端に端的な稜。体部は薄壁。	体部の内外両面は横ナデ。 内底面ののロクロ回転痕と外底面の糸切り痕は鮮明に残る。 体部外面に鮮明な稜線。	胎土は精良。 色調は内面が浅黄橙色で、外面が褐灰色。

第80表　堀切Ⅰ－D出土遺物の観察表①



第102図　堀切Ⅰ－D出土遺物の実測図②

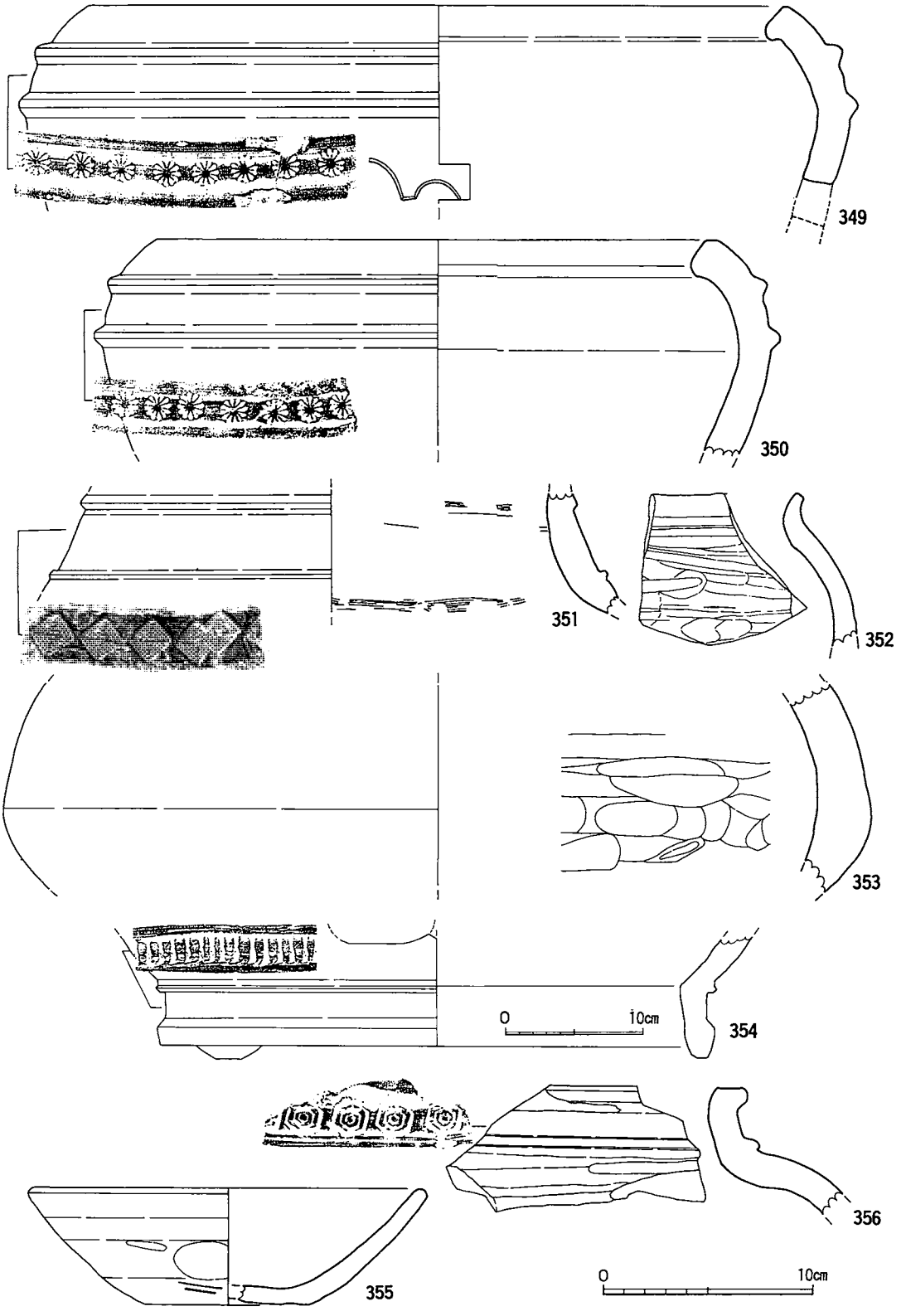
土師器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
336 土師器坏	(13.6)	(6.5)	3.9	体部は底部から鈍く丸味を持って立ち上がり、内弯気味に伸びる。 底部は丸底に近い。	体部内面はナデ。体部外面は横ナデ。 両面とも、丁寧な調整。 内底面のロクロ回転痕は、極めて鮮明。	胎土は良。色調は浅黄橙色。 やや焼成不良。 体部内面にススの付着。

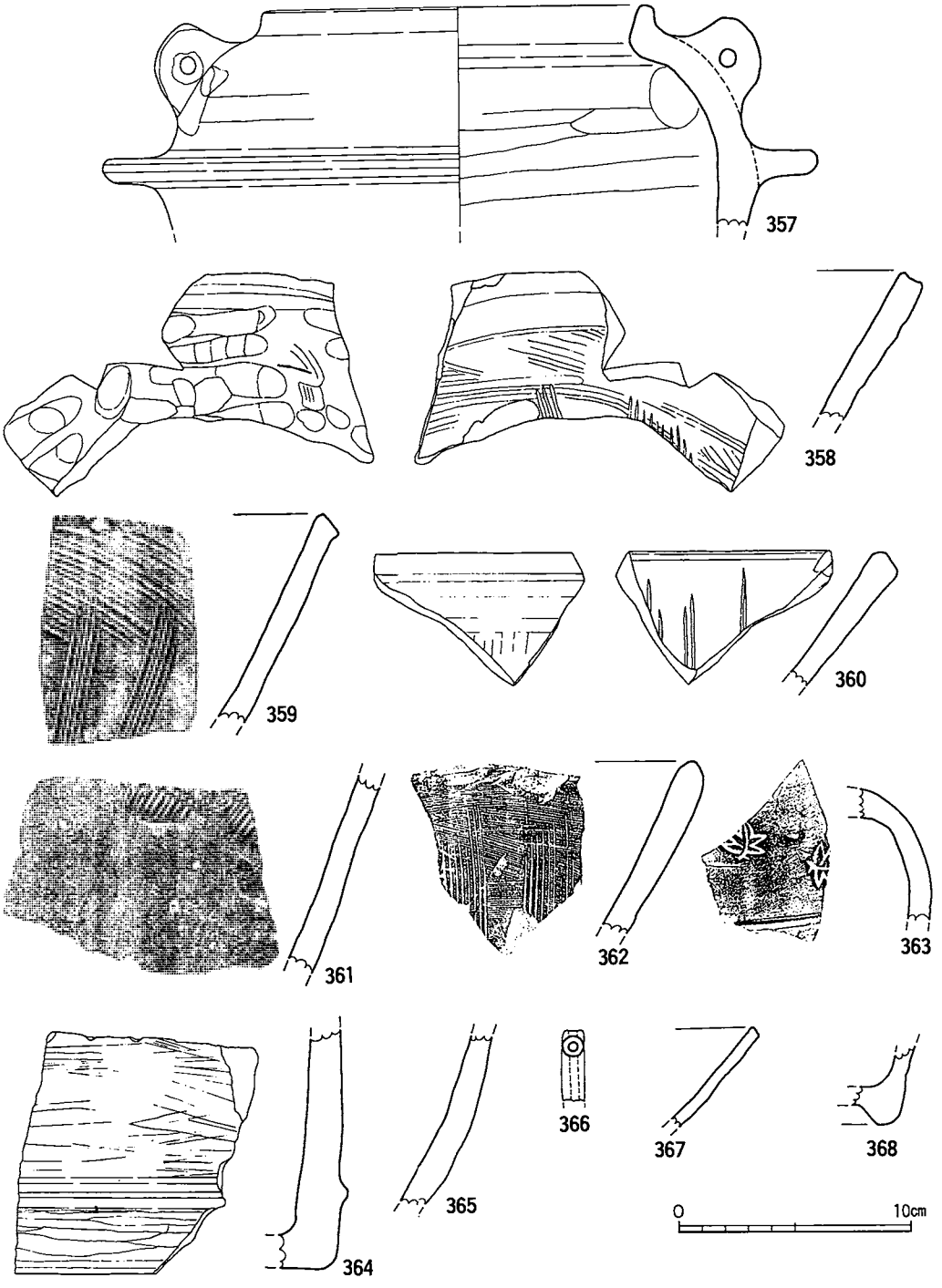
青磁・青磁・白磁・陶器

337 青磁(盤)	(27.7)	——	——	体部は鈍く立ち上がっており、口縁は鍔状で端部は丸味を帯びる。	体部内面に鎬文。	胎土は白灰色。 釉色はくすんだ感じのオリーブ色。
338 青磁碗	(17.0)	——	——	体部は鈍く立ち上がり、内弯する。 口縁でわずかに外反する。	無文。	胎土は灰白褐色。 釉色は緑灰白色。(体部外面はくすんだ感じ。)貫入目立つ。 体部内面は、外面よりやや白っぽい。
339 〃	(15.0)	——	——	体部は鈍く立ち上がり、やや内弯気味に伸びるものと推察される。口縁はやや外反する。	体部外面に薄い稜線。 体部内面は丁寧なナデ。	胎土は白灰色。 釉色は、やや白っぽいオリーブ灰色。
340 〃	(15.0)			体部は鈍く立ち上がり、直線的に伸びるものと推察される。 口縁はやや外反する。	無文。	胎土は灰黒色。 釉色は薄緑灰色。
341 青磁 (同安窯)	(14.1)	——	——	体部は鈍く立ち上がり、わずかに内弯している。 口縁はやや直口。	体部内面の上位に草花の一部と見られる文様。 体部両面の中途に弧線状の文様。	胎土は灰白色。 釉色はオリーブ色。 体部外面の上位に、極小の気泡が発生している。
342 青磁碗	(13.7)	——	——	体部は鈍く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。	体部外面に細蓮弁文様が描かれている。 文様はやや退化したもので口縁直下の弧線に谷部からの縦線が繋がっていない。体部内面は、丁寧なナデ。	胎土は灰褐色。色調は灰オリーブ色で、体部外面は光沢あり。 口縁部の釉薬は剝離が進み、やや白っぽい。
343 白磁皿	(8.0)	(4.1)	2.5	体部は底部から鈍く立ち上がり、わずかに内弯気味に伸びている。 高台の畳付きの幅は4㎜、高台内の高さは最大で2㎜。	体部外面に縦横の稜線が入り、器面を幾つかのブロックに分けている。口縁は右斜め下にヘラ削り、高台の畳付きに横方向のヘラ削りがあり、残部が小脚のようになる。 体部外面の下位から高台内にかけて無釉。	胎土と釉色は白黄色。
344 〃	(10.2)	——	——	体部底部からは鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁直口。外底は平底。底部端は肥厚する。	体部内面の中途に薄い稜線。体部外面の中途に突帯状の鮮明な稜線。	胎土と釉色は白色。
345 青白磁碗	(11.7)	——	——	体部はわずかに内弯気味に伸びる。口縁でやや外反。	体部内面は、丁寧なナデ。	胎土は灰白色。体部内面の釉色は緑灰白色で、貫入無し。体部外面は光沢のある灰色で貫入有り。
346 青磁 (同安窯)	(13.9)	——	——	体部は鈍く立ち上がり、わずかに内弯気味に伸びる。	体部内面に櫛描文、体部外面に薄い稜線。	胎土はきめ細かで灰白色。 釉色はオリーブ色(光沢あり)。
347 陶器	——	——	——	体部は上位でやや薄壁。	体部内面は指頭による横ナデ。 体部内面は無釉。	胎土は灰白色。 釉色は薄緑色、一部は薄茶色。
348 陶器 (小壺)	——	——	——	体部は内面にやや丸味を有しながら傾斜する。	口縁は肥厚し、上面はヘラ削りで扁平。	胎土は赤茶褐色。釉色は黒茶褐色。 小壺の体部内面の上位から下は無釉。 口縁と体部外面の一部にススが付着。

第81表　堀切Ⅰ－D出土遺物の観察表②



第103図　堀切Ⅰ－D出土遺物の実測図③



第104図　堀切Ⅰ－Ｄ出土遺物の実測図④

瓦器・硬質瓦器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
349 硬質瓦器 (火舎)	(33.4)			体部は内弯しながら体部上位で内傾する。 口縁の上面は幅2㎜で、左斜め下方向へ傾斜。 体部外面の上位に2条の突帯。 体部に孔。	口縁の内面はヘラ削り後、横ナデ。 口縁の上面から体部外面は横ナデ後、ヘラ磨き。 体部内面は指押え後、荒いナデ。突帯間に花文のスタンプ。	胎土は鈍い黄橙色。色調は灰黒色。 外面はやや白っぽい。
350 〃	(26.8)			体部は、内弯しながら体部上位で内傾する。 口縁の上面は左斜め下方向へ傾斜。 体部外面の上位に2条の突帯。	体部内面は指押えの後、ナデ。 口縁の上面は横ナデ。体部外面は上部突帯までヘラ磨き。それより下位は丁寧なナデ。	色調は灰褐色（内面は灰黒色味を帯びる）。 焼成はやや不良。
351 〃	やや口縁下 (23.8)			体部の上位は内傾しながら外反する。 体部外面に2条の突帯。	体部内面は指押えの後、ナデ。 体部内面の上位に横方向の櫛目、体部外面はナデ。 菱形文様のスタンプ。	色調は鈍い褐色。 焼成はやや不良。
352 硬質瓦器 (小壺)				頸部はくの字状に外反する。	口縁の内外両面は丁寧な横ナデ。 頸部内面は指押え後、荒い横ナデ。 頸部外面は横ナデ。	色調は鈍い橙色。内部の一部は灰黒色化。 緻密な焼成。
353 硬質瓦器 (甕)	(胴部径は、41.4)			胴部は膨む。 残存胴部の中途より下位は肥厚（厚さ2.6㎝）。	体部内面は指押え後、荒い横ナデ。 体部外面はヘラ磨き。	色調は内面が浅黄橙色、外面は乳褐色。非常に質量感のある土器。
354 硬質瓦器 (火舎)		(39.4)		体部の下位は空洞になっていて全体的に脚の様装を呈するが、さらに最下部に高さ9㎜の小脚が付く。 上位の脚部はやや内傾し、中途で膝折れ状態となり鈍く立ち上がる。同箇所の外面には小規模の突帯がつく。	脚の上位内面はヘラ削り後、丁寧な横ナデ。 脚の下位内面と外面はヘラ磨き。 脚の上位に長円形の孔。下位に格子文様。	色調は鈍い黄橙色。
355 硬質瓦器 (坏)	(19.1)	(7.8)	5.6	体部は底部から鈍く立ち上がり、わずかに内弯する。底部はややいびつであるが、平底に近い。体部の下位はやや肥厚する。	体部内面は極めて丁寧なナデ。 体部外面は上位が横ナデ。中途は指押え後ナデ下位は荒い横ナデ。外底面は指押え後ナデ。	色調は灰黄色。 体部の内面の一部は桃色化し、中途から下位は灰黒色化。
356 硬質瓦器 (火舎)				頸部はくの字に外反。口縁の上面は扁平で、中央部はやや窪む。端部で突帯状に張り出す。 体部外面に突帯。	体部内面の上位はヘラ削の後、荒い横ナデ。中途は指押えの後、荒いナデ。 口縁の上面はヘラ削り後、横ナデ。 体部外面はヘラ削り後、横ナデ。 体部外面はヘラ磨き、上位に六角形文様のスタンプ。	胎土は浅黄橙色。 色調は汚れた感じの鈍い橙色。 外面は灰色。
357 硬質瓦器 (茶釜)	(17.0)			体部の上位は大きく内傾する。 肩部に垂下用の耳が付く。胴部に鍔が付く。 口縁の上面は、わずかに右下りとなり、幅6㎜を測る。	体部内面は指押え後、極めて丁寧なナデ。 口縁の内側は丁寧なナデ。外側は丁寧な横ナデ。 口縁と鍔の間は上位がナデ。下位は指押え後、横ナデ。鍔の上下両面は非常に丁寧な横ナデ。	色調は鈍い黄橙色。 鍔の下面から体部外面の外位にかけてススが付着。
358 硬質瓦器 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。 体部は下位から口縁にかけて漸次、肥厚する。 口縁上面は扁平で中央部はやや窪む。	体部内面はハケ目後、横ナデ。体部外面は指押え後、荒いナデ。口縁外面は横ナデ。 条線の一単位は10本。	胎土は精良で灰白色。 色調は浅黄橙色。体部外面は凸凹している。 緻密な焼成。
359 瓦器 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がり、極めて直線的に伸びる。 体部はそのままの大きさで、口縁に至る。口縁は扁平。端部内側はごくわずか斜めに切れる。	体部内面は右斜め下方向にハケ目。条線の一単位は5本。 体部外面は指押え後ナデ。	色調は内面が褐白色で、外面が灰白褐色。

第82表　堀切Ⅰ－D出土遺物の観察表③

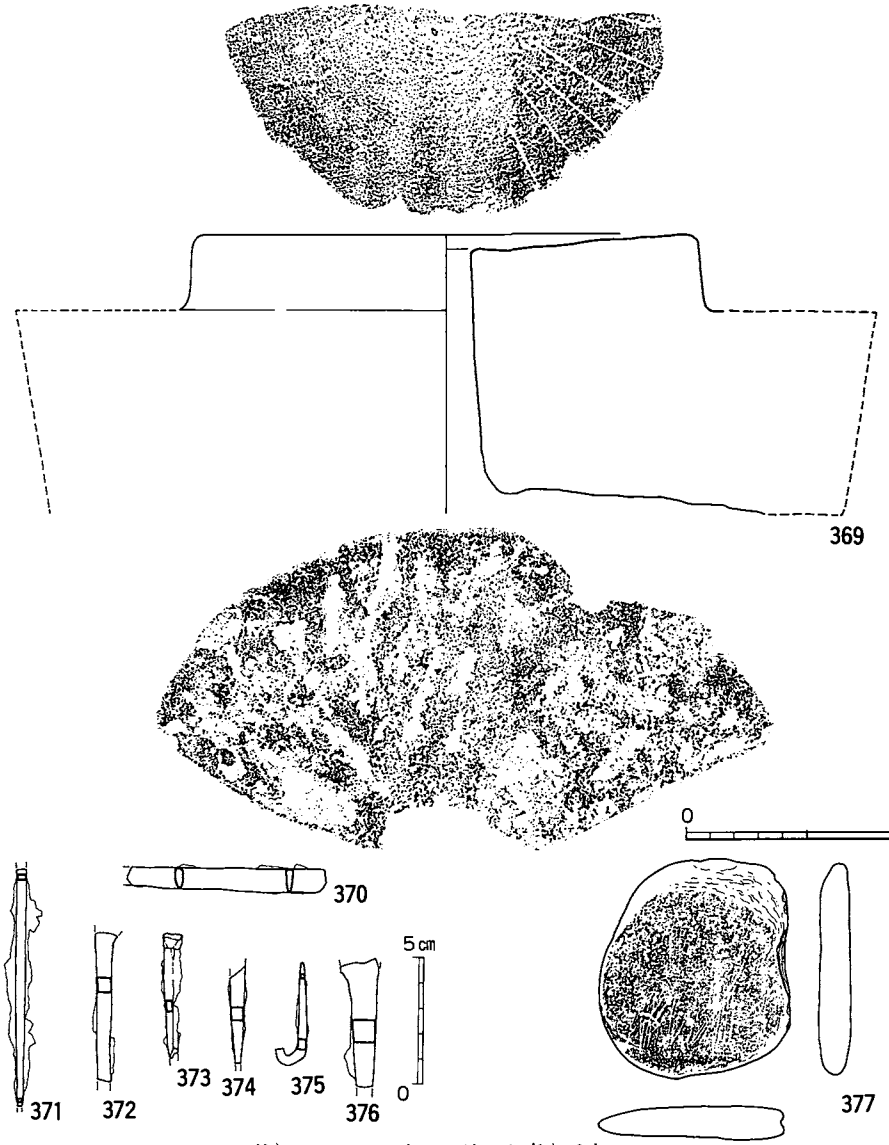
瓦器・硬質瓦器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
360 瓦器 (擂鉢)				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びる。体部から口縁にかけて漸次、肥厚。口縁は直口。外面は傾斜し、一旦、窪んで体部に至る。	条線はわずかに3条が観察される。	胎土は褐灰白色。 条線は磨滅が激しく、ほとんど消滅。
361 備前 (甕)				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。	体部内面は浅いハケ目後、横ナデ。 体部外面は上位で格子文のタタキ。中途で縦方向のナデ。	胎土は3㎜程度の砂粒を多く含む。 色調は内面が淡赤褐色。 外面は薄茶褐色。
362 瓦器 (擂鉢)				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びる。口縁は内側が直線的で、外側は半月形に丸味を帯びる。体部から口縁にかけてわずかに肥厚する。	体部内面は横方向と右斜め下方向の細線の掻き目が重複する。 条線の一単位は9本（推定）、体部外面の上位は横ナデ、下位は指押えの後、荒いナデ。指頭痕が鮮明に残る。	胎土は精良。 色調は内面が灰黒色。外面はやや灰色味濃し。
363 須恵 (甕)				――――――	体部内面は水引きナデ。 体部外面は横ナデ後、軽い研磨。体部外面に楓の葉の文様。	色調は光沢ある灰色。
364 硬質瓦器 (火舎)				外底は平底と思われる。体部は直立する。体部外面の下位に突帯。	体部面は荒いヘラ磨きの後、横方向の細い掻き目。外底面はナデ。	体部外面の色調は赤褐色。部分的に灰黒色、体部内面の器面の剝離が進行。
365 須恵 (甕)				体部は鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。	体部内面は横ナデ。体部外面はハケ目。	色調は灰白色（体部外面はやや黒色味を帯びる）。緻密な焼成。
366 土錘	(直径) 1.0			――――――	――――――	色調は褐灰色。
367 須恵(小坏)				体部は極めて薄手(厚さ0.5cm)でラッパ状に大きく開く。	体部内面の上位は横ナデ。下位はナデ。 体部外面の上位は横ナデ。中途は指押え後、横ナデ。	色調は灰色。
368 土製香炉 (小脚)				体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。体部から口縁にかけてやや肥厚。口縁は直口で、外面は右斜め下方向に削り出され、端部内側は斜めに切れている。突帯状の削り出しの側面は扁平。	体部外面に縦方向のノミ痕。 突帯状の削り出しの上下両面に細い沈線。	体部外面にススの付着。

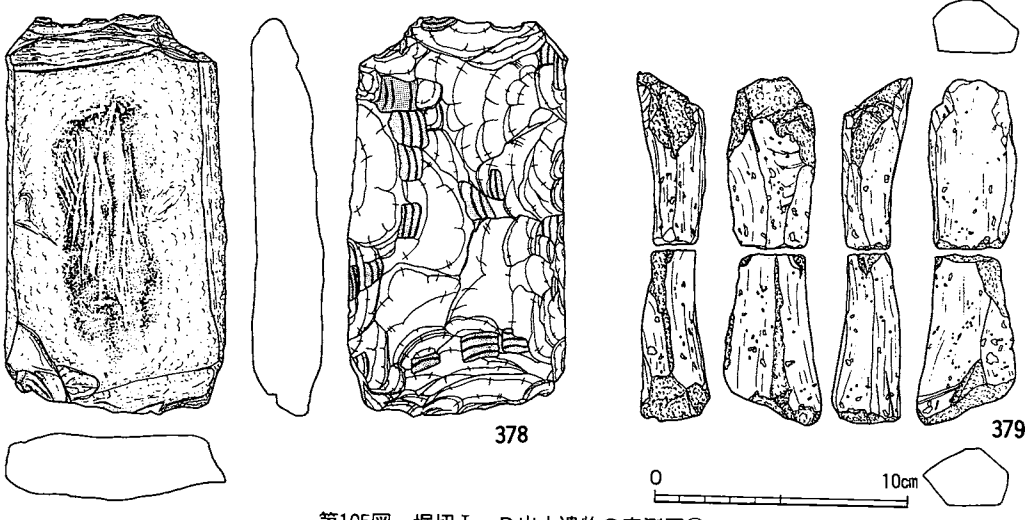
石臼

No.	形態の特徴
369 茶臼	茶臼の下臼で、受け皿部分を欠損する。臼の上面は直径20.2cmで、心棒は直径2.0cm、高さは11.4cmである。擂目は切線主溝型であるが、磨滅が激しく、6本の溝を確認するに留まる。端部から心棒穴側へわずかに傾斜する。臼の下面は逆の傾斜で、この面に限り荒いノミ痕が残る。石材は凝灰岩である。

第83表　堀切Ⅰ－D出土遺物の観察表④



注）スクリーントーンはノミ痕を示す。



第105図　堀切Ⅰ－D出土遺物の実測図⑤

砥石

No.	計測値				形態の特徴
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
377 砥石	8.53	7.60	1.27	143.34	扁平な転び石を使用。正面の下部から中央にかけて細かな削痕が見られる。刃潰しと研ぎが交互に行われ、研ぎによって終わっている。固定して使用されたもの。粘板岩。
378 〃	15.75	8.75	2.96	623.27	正面中央部に大きな削痕と研磨痕が見られる。刃潰しと先端の研磨が交互に行われたものと思われ、長軸方向に長い凹みが造られている。裏面は四方から1.3cm程の平石ノミで17ケ所の器面調整が行われている。固定して使用されたもの。頁岩。
379 〃	13.42	3.90	2.00	148.00	手に持って使用された物である。研ぎ面は五面あり、いずれの面にもねじれが見られ、長軸方向に対して中央が凹む。天草産。

第84表　堀切Ⅰ－D出土遺物の観察表⑤

瓦器・硬質瓦器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
380 須恵 (甕)				――――――	体部内面は同心円文タタキ。体部外面は格子文タタキ後、掻き目。	胎土は小砂粒を若干含む。
383 滑石製 (壺)	6.4	6.8	2.4	体部は底部から鋭く立ち上がり、直立する。口縁は直口気味である。4ケ所に小規模の耳がつく。	口縁の耳は削り出し、。外底面は中央部を残し、外側方向への削り、鮮明なノミ痕（幅1cm）が並列する。	蠟の付着あり。
384 瓦器 (擂鉢)				体部は底部から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。底部は薄手（厚さ6㎜）で、端部で肥厚（厚さ1.7cm）。体部外面の立ち上がりはやや窪む。	条線の一単位は6本、体部外面は指押え後、荒いナデ。	色調は灰白色。外面はやや黒色味を帯びる。条線の磨滅激し。

第85表　堀切Ⅰ－F・G出土遺物の観察表

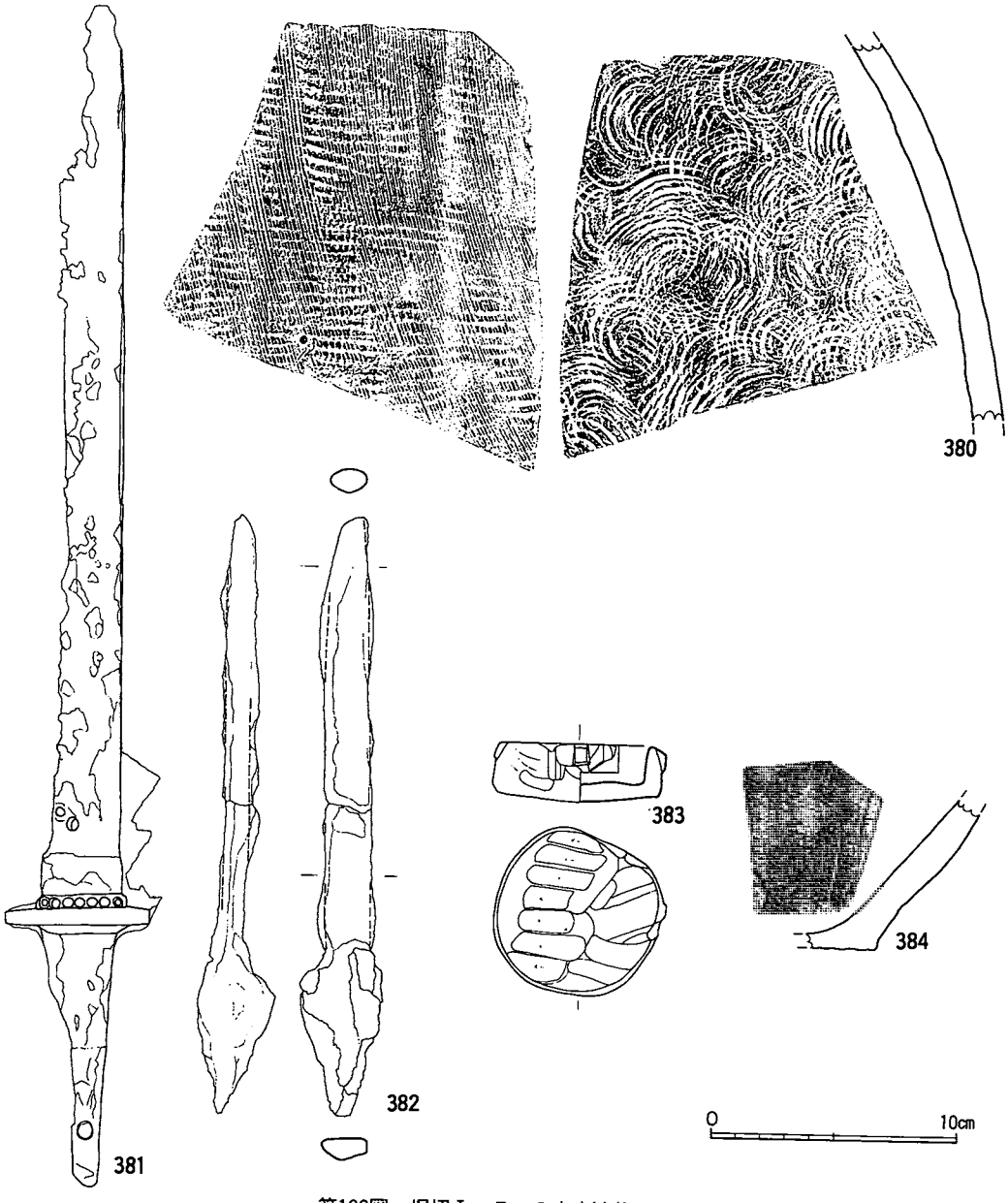
（8）堀切Ⅰ－F・G出土の遺物

380・381・384は堀切Ⅰ－F、383は堀切Ⅰ－Gから出土した。

380は須恵系の甕である。胴部と思われ、体部が内面に同心円文のタタキが入り、外面は格子文タタキの後、掻き目が施されている。

382は削り小刀である。全長24.3cmを測り、381の直刀と重なり合って出土した。381は残存の長さ48cmで古墳時代前期のものと推測される。

383は滑石製のツボである。石鍋を転用したもので、口径6.4cmを測る。内底面に蠟が付着している。384は瓦器の擂鉢である。底部は薄壁で条線の一単位は6本である。



第106図　堀切Ⅰ－F・G出土遺物の実測図

（9）堀切Ⅱ—A・B出土の遺物

385～388は土師器皿である。いずれも形態的には船型を呈し、口径7.3～8.2cm・底径4.2～5.4cm・器高2.3～2.5cmを測る。385にはススが付着し、386・387は緻密な焼成である。388は外底面に板目圧痕を残す。

389～391は土師器坏である。形態的には、体部がラッパ状に鋭く立ち上がる391と、船型の389・390に分類される。391は口径（12.0）cm・底径（6.4）cm・器高4.2cmを測る。緻密な焼成である。389・390は口径13.0～13.1cm・底径7.7～9.1cm・器高3.8～4.3cmを測る。

392は陶器で口径（14.4）cmを測る。体部は内弯し、釉色は白褐色である。393は瀬戸系陶器の頸部で釉色は薄緑色である。394は白磁碗で底径（6.0）cmを測る。

395は銅製の金具である。

396は石臼の上臼で、凝灰岩製である。上面の直径は23.8cm、下面の直径は25.8cm、器高は9.8cmを測る。

397は砂岩製の茶臼で、口径（28.2）cmである。398は砂岩製の石製品である。口径（22.6）cmで、体部はほぼ直立する。口縁の上面と体部内面は、非常に丁寧な研磨がなされている。

399は滑石製の石鍋である。口径（22.0）cmで突帯状を呈する削り出しの上下両面に、細い沈線が巡る。400は須恵器の甕で、口径（15.8）cmを測り、頸部は大きく、「く」の字に外反する。

401～403は備前の擂鉢である。条線の一単位は401・402が8本で、403は9本である。404・405は硬質瓦器の火舎で、404は体部外面の上位に格子目の文様がある。406～408は瓦器の火舎で、406は体部外面の上位に突帯と花文のスタンプがある。407は体部内面にハケ目の後、ナデの調整があり、外面に印文が見られる。408は、体部外面に印文がある。

409・413は硬質瓦器の火舎である。409の残存胴部の最大径は31.3cmを測る。体部は外反気味に伸びる。上位に2条の突帯があり、突帯間に2段のスタンプ（上段が格子、下段が花文）がある。体部外面はヘラ磨きされている。413は口縁下に2条の突帯があり、突帯間に2段のスタンプ（上段が花文、下段が菱形）がある。使用痕の少ない硬質瓦器で、体部外面はヘラ磨きされている。

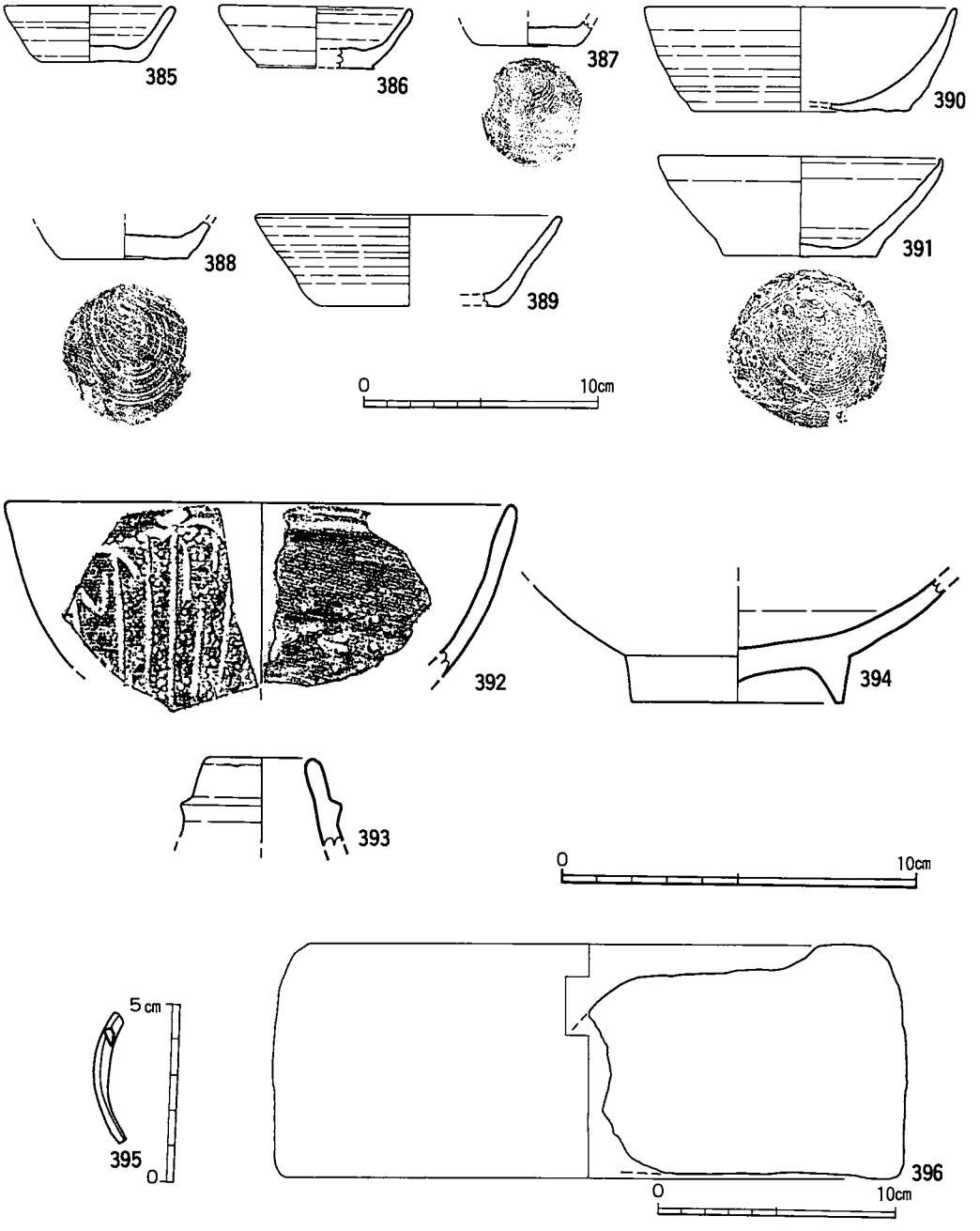
410・411は瓦器の茶釜である。410は胴部にススが付着する。残存胴部の最大径は、410が30.0cm、411が(28.9)cmを測る。412・417は瓦器の擂鉢である。口径(26.1)cmで体部は直線的に伸びる。条線の一単位は4本である。417は条線の単位が不明で、6本を観察するに留まる。

414は備前の甕で、底径（15.4）cmを測る。体部外面はいくつかのブロックに仕切られ、それぞれ扁平な器面を有する。二次焼成で変色している。416は土製香炉の小脚部分である。415は土師系の坏で、口径（12.4）cmを測る。体部外面の上位に花文のスタンプがある。

418・420～422は硬質瓦器で、いずれも火舎である。418は壺の頸部で、口径（31.6）cmを測

り、外面の上位に格子文様がある。420は底部外面に上下２列の文様スタンプがある。脚部の高さは５cmを測り、ヘラ削りで大きく面取りされている。421は脚部が直立する。高さ2.7cmを測り、シャープな削りで鮮明な稜が入る。422の脚部は高さ4.4cmを測り、外側へやや張り出す。

419は備前系の甕で、底径は（28.4）cmである。底部は中央部寄りで薄壁であり、胎土に小礫を多く含む。423は備前系の小壺で、底径17.6cmである。底部は極めて薄壁である。



第107図　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ出土遺物の実測図①

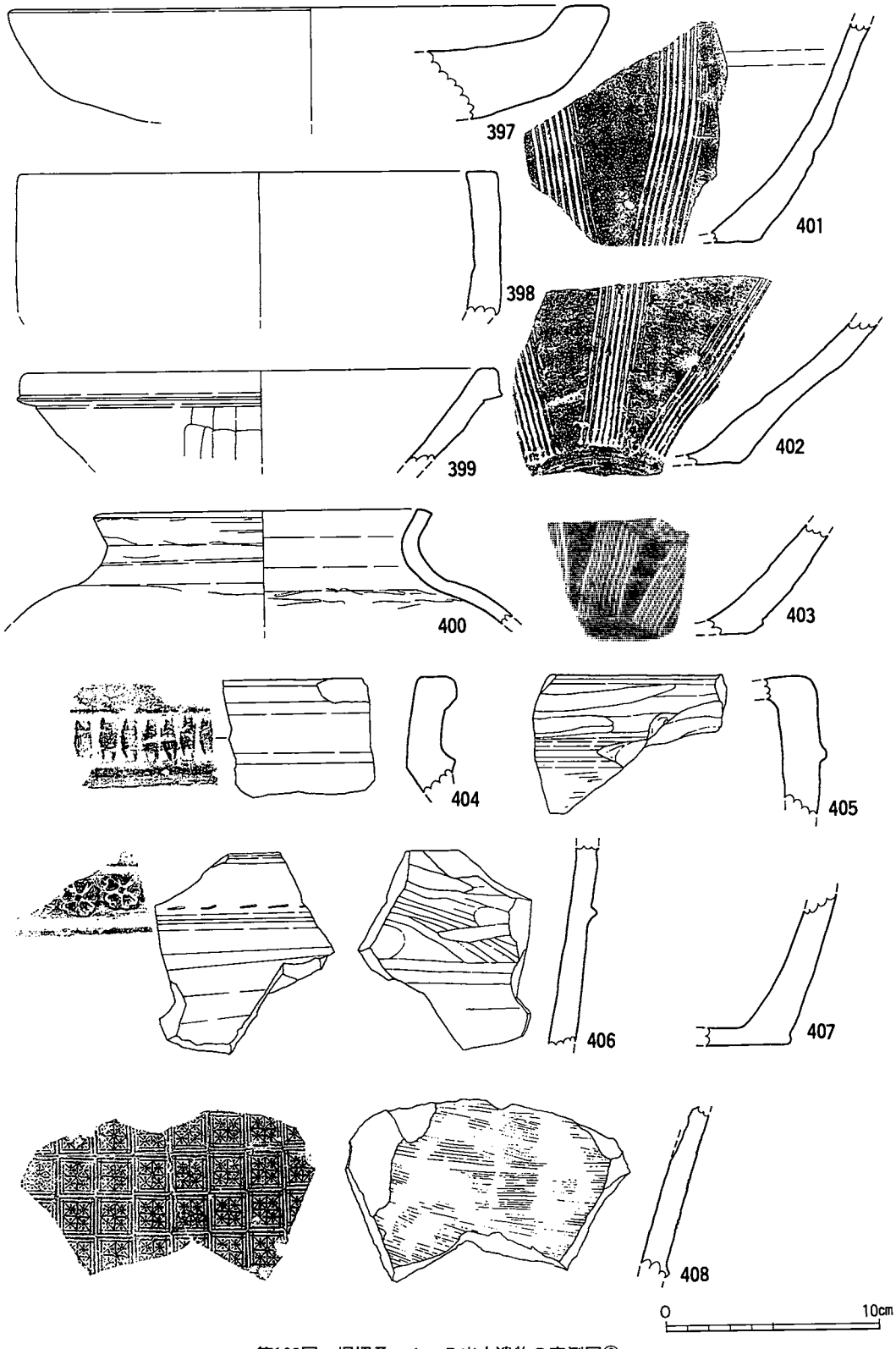
土師器・陶器・白磁碗

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
385 土師器皿	7.3	(4.2)	2.3	体部は底部から丸味を帯びて鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁部は丸味を帯びる。底部は多少、上げ底。内底面は全体的に凸。	体部内面はナデ。体部外面は横ナデ。 両面は、丁寧な調整で平滑。 内底面のロクロ回転痕は、後のナデで消滅。外底面の糸切り痕はナデ後も薄目に残る。丁寧な造りの土器。体部内外両面にごく薄い稜線。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。 口縁内面にススが付着。
386 〃	(8.2)	5.0	2.5	体部は平底から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁は肥厚し、やや丸味を帯びる。底部端に沈線が巡る。底部は肥厚。	体部内外両面は横ナデ。体部の内外両面に薄い稜線。内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。 外底面の糸切り痕は後の強いナデで、ほとんど消滅。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。 緻密な焼成。
387 〃		4.2		外底は平底。	内底面とロクロ回転痕は後のナデで、ほとんど消滅。外底面の糸切り痕はナデ後も薄く残る。 丁寧な造りの土器。	胎土は精良。極小の黒点が外底面に広がる。 色調は鈍い橙色。緻密な焼成。
388 〃		(5.4)		体部は底部から鈍く立ち上がる。 底部は肥厚する。	内底面のロクロ回転痕は後のナデで薄し。外底面の糸切り痕は、後の調整がなく鮮明。	胎土は良。色調は鈍い橙色。 外底面に板目圧痕。
389 土師器坏	(13.0)	(7.7)	3.8	体部は底部からやや丸味を持って鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。	体部内面はナデで平滑、体部外面は横ナデ。体部外面に鮮明な稜線。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。
390 〃	(13.1)	(9.1)	4.3	体部は底部から鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。底部は薄壁であり端部で、極端に肥厚する。底部端に鮮明な稜。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は平滑で、体部外面に薄い稜線。外底面に指頭痕。外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は精良。 色調は鈍い橙色。
391 〃	(12.0)	(6.4)	4.2	体部は平底から外反気味に鋭く立ち上がり、中途からわずかに内弯気味に伸びる。口縁は直口気味。	体部内外両面は横ナデ。体部内面は平滑に近く上位から中位にかけて薄い稜線、下位にやや鮮明な稜線。体部外面に鮮明な1条の稜線。 内底面のロクロ回転痕と、外底面の糸切り痕は、ナデの後も薄く残る。	胎土は良。色調は鈍い橙色。 緻密な焼成。
392 陶器	(14.4)			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。 体部は上位でやや肥厚する。	体部外面に斜線。	胎土は赤褐色。釉色は白褐色。 体部内面に小気泡あり。
393 瀬戸系陶器	(2.9)			体部の上位は直線的に伸びており、内側に傾斜する。口縁下1.3cmの所に突帯。	体部の上位は内外両面とも、丁寧な横ナデ。	胎土は灰色土。釉色は外面が薄緑色で、内面は白乳色。釉の剝落進行。
394 白磁碗		(6.0)		体部は鋭く立ち上がる。底部は直立気味、高台の畳付き幅2㎜。高台内中央部の高さ6㎜。端部は1cm。	体部内面の下位に薄い稜線。体部外面の中途から高台内まで無釉。体部内面の見込みに界圏、高台の外縁は丁寧なナデ。	胎土はきめ細かい灰色土。釉色は灰白黄色で光沢有り。体部内面の見込みにトチが付着。無釉の箇所は灰色。

石臼

No.	形態の特徴
396 石臼	上臼で、上面の直径は23.8cm、下面の直径は25.8cm、高さは9.8cmを測る。端部と側面はやや丸みを帯びる。上面に「くぼみ」があり、供給口へ漸次傾斜する。「くぼみ」の最大の深さは2.8cmを測る。下面における「ふくみ」は高さ0.3cmで、擂目は完全に消滅している。石材は凝灰岩である。

第86表　堀切Ⅱ－A・B出土遺物の観察表①

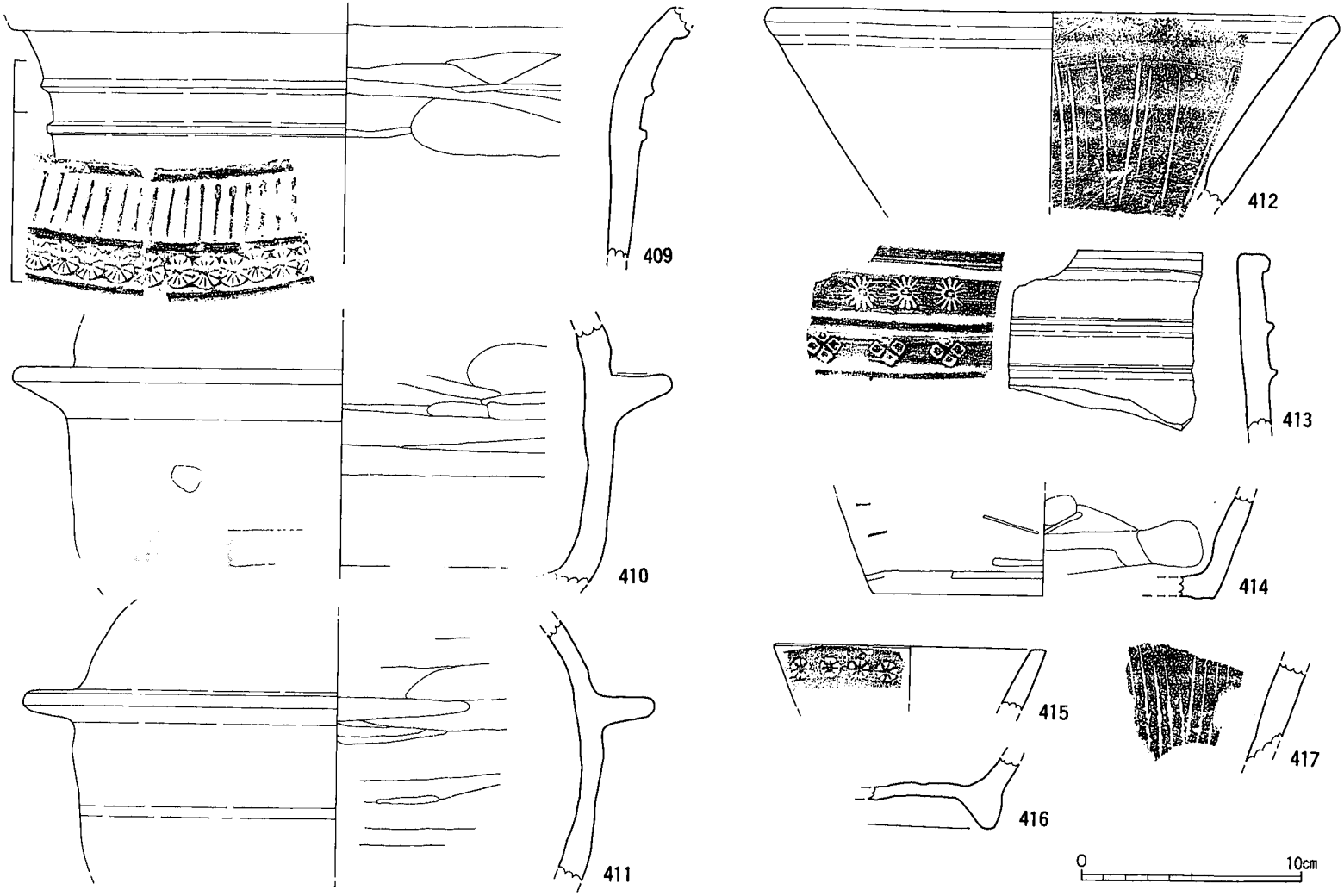


第108図　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ出土遺物の実測図②

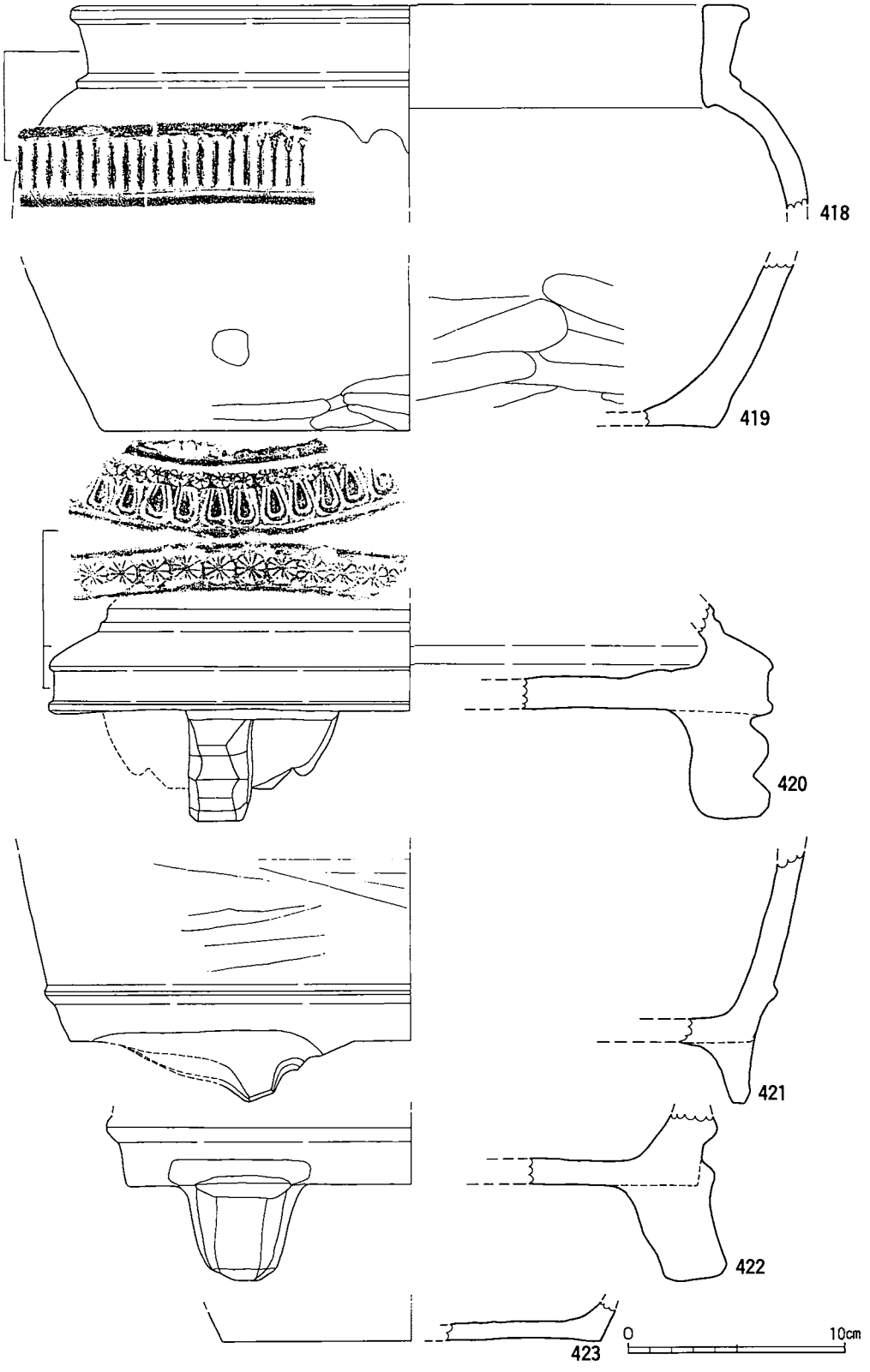
瓦器・石製品・須恵・備前・硬質瓦器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
397 茶臼	(28.2)			口縁は扁平(2.2cm)。	体部内外両面は研磨。	砂岩製。
398 石製品 (砂岩)	(22.6)			体部は鋭く立ち上がっており、直立気味に伸びる。体部内面は、わずかに内弯する。口縁の上面は扁平（厚さ1.5cm）	口縁の上面と体部外面は研磨。体部内面は調整が荒い。	色調は黄灰色。砂岩製。
399 滑石製 (石鍋)	(22.0)			体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁は扁平（幅7㎜）で、外面は右斜め下方向に削り出され、端部近くでさらに外側へ小さく突き出す。端部内側は大きく斜めに切れている。	体部の内外両面は、丁寧な研磨。突帯状の削り出しの上下両面に細い沈線。	体部内面は灰白色。体部外面は灰黄色。
400 須恵 (甕)	(15.8)			頸部は大きく、くの字に外反。口縁は扁平。	頸部内面の上位は横ナデ。下位は指押え後、荒いナデ。頸部外面の上位は横ナデ、下位は指押え後、横ナデ。口縁の上面はヘラ削り。	――――――
401 備前 (擂鉢)				体部は鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。体部は下位で肥厚。	条線の一単位は8本、体部内面はナデ。体部外面は丁寧は横ナデ。	色調は茶小豆色。
402 〃				体部は鈍く立ち上がっており、外反気味に伸びる。器形は非常にいびつで、体部の内外両面に凸凹が目立つ。外底面に強い指押え。	条線の一単位は8本、体部の内外面は非常に荒い指押え。	胎土に小礫が混じる。色調は小豆色。内面はやや灰色味濃し。
403 〃				体部は底部から鈍く立ち上がる。体部の立ち上がりはややいびつ。体部外面はやや凸凹の感あり。	条線の一単位は9本、外底端に指押え痕あり、体部外面は横ナデ、上位は右斜め上方向のナデ。	体部内面に灰黄色が、まだらになって付着。体部外面は小豆色。
404 硬質瓦器 (火舎)				口縁は扁平で、端部は突帯状に張り出す。体部上位はほぼ直立、体部外面に突帯が付く。	口縁はヘラ削り後、横ナデ。体部内面は丁寧なナデ。体部外面の上位に格子目の文様。	色調は浅黄橙色。体部外面の磨滅が激しい。
405 〃				体部はやや内傾しながら、直立気味に伸びる。口縁の内側は体部内面側へ入り込む。口縁の上面は扁平、端部は丸味を帯びる。体部の上位に突帯が付く。	体部外面は非常に丁寧なナデ。体部外面の上位に小突帯が付く。	色調は赤褐色。体部内面にススが付着する。
406 瓦器 (火舎)				体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。体部の上位に突帯が付く。	体部内面は上位に斜め方向のハケ目と、下位に丁寧な横ナデ。体部外面は指押え後、横ナデ。体部外面の上位に花文のスタンプ。	胎土は白灰色。色調は灰白色。
407 〃				体部は平底から鋭く立ち上がる。底部と体部の境はわずかに窪む。外底は典型的な平底。底部は薄壁（厚さ8㎜）で、体部は肥厚（厚さ1.8cm）する。	体部内面は丁寧な横ナデ。体部外面は指押え後、丁寧なナデ。外底面は指押え後、非常に丁寧なナデ。体部との境はやや窪む。	胎土は精良。色調は浅黄橙色（部分的に橙色）。緻密な焼成
408 〃				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びる。	体部内面はハケ目後、ナデ。体部外面に印文。	胎土は浅黄橙色。色調は暗灰色。
409 硬質瓦器 (火舎)	やや口縁下 (31.3)			体部は鋭く立ち上がり、外反気味に伸びている。体部の上位に2条の突帯。体部は上位でやや肥厚。口縁端部は突帯状に張り出す。	体部内面はヘラ削り後、横ナデ、体部外面は横ナデ後、ヘラ磨き。体部外面の突帯間に上下二段のスタンプあり、文様は上段が格子目、下段は花文。	色調は内面が鈍い橙色（一部桃色と灰白黒色）、外面は鈍い黄橙色。
410 瓦器 (茶釜)	胴部最大径 (30.0)			胴部は下位からやや内弯し、鍔の部分から内傾する。	胴部内面は指押え後、丁寧な横ナデ。胴部外面の上位と、鍔の上下両面は非常に丁寧な横ナデ。胴部外面の下位は指押え後、ナデ。	胎土、色調とも鈍い黄橙色。胴部内面にやや茶褐色を帯びる箇所あり。胴部外面の下位にスス付着。

第87表　堀切Ⅱ－A・B出土遺物の観察表②



第109図　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ出土遺物の実測図③



第110図　堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ出土遺物の実測図④

瓦器・備前・土師・硬質瓦器

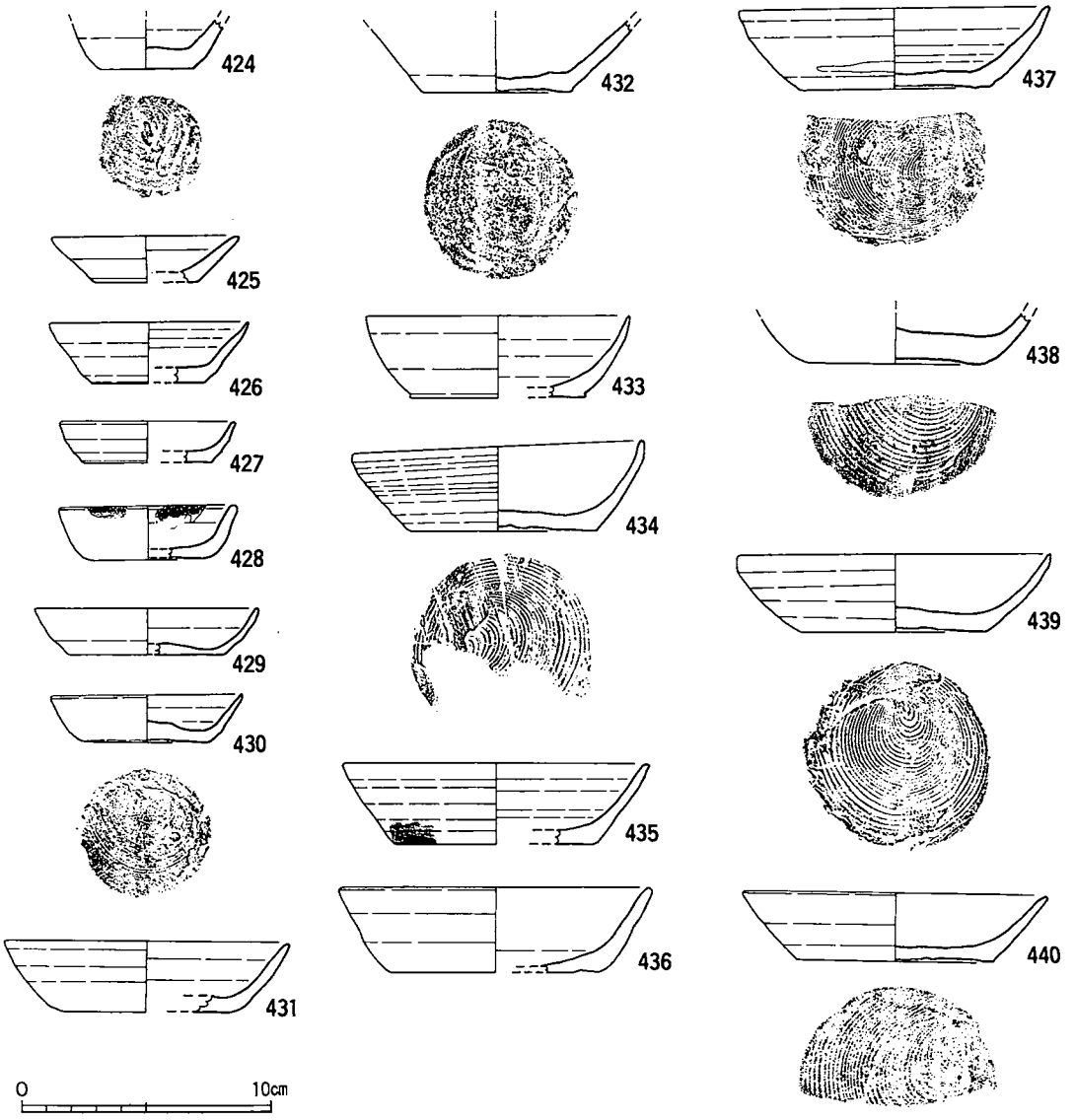
No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
411 瓦器 (茶釜)	胴部最大径 (28.9)			胴部は下位からやや内弯気味に伸びて、鍔の部分から内傾する。体部は鍔よりやや下位で、ややくびれる。	胴部の内面は指押え後、荒い横ナデ。体部外面は上位から、鍔の下位まで非常に丁寧な横ナデ。胴部の下位は指押え後、やや荒い横ナデ。	胎土は鈍い黄橙色。 色調は灰白黒色、鍔の下面から胴部外面の下位にかけてスス付着。
412 瓦器 (擂鉢)	(26.1)			体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁は丸味を帯びる。	体部内面は丁寧なナデ（口縁内面は丁寧な横ナデ）。体部外面は弱い指押えの後、横ナデ。口縁の外面に鮮明な一条の沈線、体部内面の立ち上がりはヘラ削りでくびれる。条線の一単位は4本。	胎土は精良。体部内面は白灰褐色、体部外面は褐灰色。緻密な焼成。
413 硬質瓦器 (火舎)				体部は直線的に伸びて、やや内傾する。口縁は扁平で中央部はわずかに窪む。口縁外面は帯状に張り出す。口縁下に2条の突帯。	体部内面の上位は丁寧な横ナデ、下位は丁寧なナデ。体部外面はヘラ磨き、体部外面の突帯間に上下2列のスタンプ。上位は花印、下位は菱形。	胎土は白灰色。色調は灰白色。 使用痕の少ない土器。
414 備前 (甕)		(15.4)		体部は底部から鋭く立ち上がる。体部内面の立ち上がりは凹む。体部内面は凸凹の感あり。 体部外面は幾つかのブロックに仕切られ、それぞれが扁平な器面を有する。	体部内面は荒い指押え、体部外面はシャープなヘラ削り後、荒い横ナデ。	色調は灰白色（内面はやや小豆色を帯びる）。二次的焼成。
415 土師系 (坏)	(12.4)			体部は鋭く立ち上がっており、極めて直線的に伸びる。口縁の上面は扁平。	体部内面は荒い横ナデ、外面は非常に丁寧な横ナデ。口縁の上面はヘラ削り後、丁寧なナデ。	胎土は精良。色調は白褐桃色。 緻密な焼成。
416 土製香炉 (小脚)				本体の底部は薄壁（厚さ6㎜）で、内底面は中央寄りで凹む、小脚は高さ1.4cmで、底面は幅は5㎜。	本体の内外両底面は指押え後、ナデ。	胎土は桃色。緻密な焼成。
417 瓦器 (擂鉢)				――――	体部の内外両面はナデ、条線の一単位は不明、6条まで観察できる。	色調は白褐色。
418 硬質瓦器 (壺)	(31.6)			頸部は口縁にかけて、やや肥厚。口縁の上面は扁平（幅1.5cm）で、端部でやや傾斜し、突帯状に突き出す。頸部の内面はほぼ直立し、外面は外反する。胴部はやや外反。	頸部内側はヘラ削り後、横ナデ。下位に顕著なヘラ削り痕。胴部内側は指押え後、丁寧なナデ。口縁上面はヘラ削り後、ナデ。胴部外面は非常に丁寧な横ナデ。頸部外面に格子文様、胴部に孔。	色調は桃色。非常に緻密な焼成。
419 備前 (甕)		(28.4)		体部は平底から鋭く立ち上がる。底部は中央部寄りで薄壁（厚さ7㎜）、端部で肥厚（厚さ2.3cm）。	体部内面は横方向と斜め方向のヘラ削り、横ナデが加わる。体部外面は縦方向の非常に荒いナデ、下位は横方向のヘラ削り。外底面は丁寧なナデ。	胎土に小礫を多く含む。 二次的な焼成で、色調は灰白黒色。
420 硬質瓦器 (火舎)		(33.4)		本体の底部は平底で、外端部に2条の突帯状のものが突き出す。上位は緩傾斜で体部へ伸びる。脚がつく。脚部の高さは5cmで直立する。	内底面は指押え後、荒いナデ。外底面は丁寧なナデ。脚部はヘラ削りで大きく面取りされている。底面の外側に上下2列の文様スタンプ。	色調は桃色。 緻密な焼成。
421 〃		(31.2)		本体の体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。体部は薄壁（厚さ1.2cm）、下位に小規模な突帯が付く。端部に小脚が付き、脚部の高さは2.7cmで直立する。底面は右斜め上に立ち上がる。	体部内面は指押え後、荒い横ナデ。脚部はシャープなヘラ削りで鮮明な稜が付く。 体部外面は荒いナデ後、ヘラ磨き。	色調は外面が桃色、内面は浅黄色。 緻密な焼成。
422 〃		(29.2)		本体の底部は平底で端部に脚が付く、脚部の高さは4.4cm、外側へやや張り出す。外面の本体と接する部分は突帯状に突き出す。	内底面は非常に丁寧なナデ、立ち上がりはナデ。外底面は丁寧なナデ。脚部は指押え後、丁寧なナデ。	色調は淡黄色。緻密な焼成。
423 備前系 (小壺)		(17.6)		外底はやや上げ底、中央部寄りで薄壁（厚さ8㎜）で、端部で肥厚（厚さ1.4cm）する。	内底面は指押え後、ナデ。体部外面は横ナデ。外底面は指押え後、荒いナデ。	二次焼成で灰色を帯びる小豆色、内底面は白黄色。

第88表　堀切Ⅱ－A・B出土遺物の観察表③

(10) 堀切Ⅲ一A・B・C出土の遺物

424～430は土師器皿である。口径7.0～9.0cm・底径4.1～6.2cm・器高1.7～2.4cmを測る。424・426は外底面に板目圧痕が残る。形態的には、底部から体部へラッパ状に鋭く立ち上がり、極めて直線的に伸びる424～426と、体部が船型を呈し、内弯気味に伸びる427～430とに分類される。

431～440は土師器坏である。口径10.8～12.7cm・底径6.0～8.4cm・器高2.8～3.4cmを測る。431・435・436は緻密な焼成である。435は体部外面の下位にススが付着する。434は板目圧痕が残る。440は非常に軽量な土師器皿である。形態的にはやや小型で口縁直口の433を除き、ほぼ同一の船型を呈する。



第111図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図①

土師器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
424 土師器皿		3.8		体部は平底からやや鈍く立ち上がる。 底部はやや肥厚する。	内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕はナデで、ほとんど消滅。	胎土は良。外底面に板目圧痕。 色調は鈍い桃色（外底面のみ褐灰色）。 緻密な焼成。
425 〃	(7.5)	4.1	1.9	体部は底部から鈍く立ち上がり、極めて直線的に伸びる。口縁直口。	体部の内外両面は横ナデ。体部の外面は平滑であるが、多少ザラつく。	胎土は良。色調は鈍い橙色。
426 〃	(8.0)	4.5	2.4	体部は平底から鋭く立ち上がり、中途からやや外反気味に伸びる。口縁直口。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面に薄い稜線。 体部外面にやや鮮明な稜線。内底面のロクロ痕はナデで消滅。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。 外底に板目圧痕。緻密な焼成。
427 〃	(7.0)	5.1	1.7	体部は平底から内弯気味に伸びる。	体部の内外両面はナデ。両面は丁寧な調整。 体部内面は平滑。体部外面に薄い稜線。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。
428 〃	(7.2)	4.5	2.2	体部は底部から丸味を持って鋭く立ち上がり内弯気味に伸びる。口縁部は丸味を帯る。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は丁寧な調整。 体部の外面は多少ザラつく。内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。外底面の糸切り痕は後のナデでほとんど消滅。但し、外底面の全体的な調整は雑。	胎土は良。色調は鈍い桃色。
429 〃	(9.0)	(6.2)	1.9	体部は平底から鈍く立ち上がり、内弯気味に伸びる。器壁は薄壁。内底面は凸、多少いびつな器形。	体部の内外両面は横ナデ。内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。外底面の糸切り痕は鮮明。	胎土は精良。色調は浅黄橙色。
430 〃	7.7	5.0	1.9	体部は平底から丸味を持って鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。底部は中央部がわずかに上げ底。内底面は凸。口縁直口。	体部内面はナデ、体部外面は横ナデ。体部内面に薄い稜線。体部外面は平滑。外底面の調整はやや荒く、内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。 外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は精良。色調は鈍い橙色の外底の他は桃色。
431 土師器坏	(11.4)	(6.6)	2.8	体部は底部より丸味を持って鈍く立ち上がり、内弯気味に伸びる。	体部の内外両面は非常に丁寧なナデ。体部の両面にごく薄い稜線。非常に丁寧な造りの土器。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。 緻密な焼成。
432 〃		(6.0)		体部は平底から鋭く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。内底面と体部の境に沈線。	内底面のロクロ回転痕は、ナデで消滅。 外底面の糸切り痕は後のナデで薄い。	胎土は桃色。緻密な焼成。
433 〃	(10.8)	(7.2)	3.3	体部は平底から鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。口縁直口。底部端に沈線が巡る。 底部端は肥厚する。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は丁寧な調整。 体部内面の調整は比較してやや雑。 内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。外底面の糸切痕は鮮明。体部の内外両面に薄い稜線。	胎土は精良。色調は外面が淡赤橙色。内面は浅黄橙色。
434 〃	11.9	7.6	3.4	体部は底部から鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。器形はいびつ。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は平滑。 体部外面は鮮明な稜線。内底面のロクロ回転痕は後のナデでほぼ消滅。外底面の糸切痕はナデ後も残る。	胎土は精良。色調は浅黄橙色。 外底面に板目圧痕。
435 〃	(12.4)	(8.0)	3.3	体部は底部から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。器形は多少いびつ。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面に比較的鮮明な稜線。体部外面に薄い稜線。	胎土は良。色調は鈍い橙色。体部外面の下位にススが付着。緻密な焼成。

第89表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表①

土師器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
436 土師器坏	(12.7)	(8.4)	3.4	体部は底部から丸味を帯びて鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。 底部の中央は薄壁。底部端は肥厚する。	体部内面は横ナデ。体部外面はナデ。体部両面は平滑。外底面の糸切り痕は鮮明。 内底面のロクロ回転痕はナデで消滅。	胎土は良。色調は鈍い橙色 緻密な焼成。
437 〃	(12.4)	(7.5)	3.2	体部は底部から丸味を持って立ち上がり、内弯気味に伸びる。口縁直口。底部は上げ底で、器形は多少いびつ。底部端は肥厚する。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は丁寧な調整。体部外面はやや雑な調整。体部内面に薄い稜線。内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅し、器面に指頭痕。外底面の糸切り痕は鮮明。体部外面にヘラ削りによる溝。	胎土は良。 色調は灰褐色。
438 〃		(7.6)		体部は底部から丸味を帯びて鈍く立ち上がる。 底部は上げ底。底部は肥厚する。	内底面のロクロ回転痕は、かなり鮮明に残るが後のナデで調整あり。外底面の糸切り痕はナデで薄い。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。
439 〃	12.5	7.4	3.1	体部は底部から鈍く立ち上がり、内弯気味に伸びる。内底面はやや凸。口縁直口。楕円形状の土師器皿（長径12.6cm、短径11.8cm）。いびつな器形。	体部内面はナデ。体部外面は横ナデ。 体部内面は丁寧な調整で平滑。体部外面に薄い稜線。ロクロ回転痕は後のナデで消滅。外底面の糸切り痕は鮮明。	胎土は精良。色調は浅黄橙色。
440 〃	(12.2)	(7.9)	2.8	体部は底部から鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁はやや直口。体部は薄壁。底部の端部は肥厚。外面の底部端に端的な稜線。	体部の内面は横ナデ、外面はナデ。体部内面は平滑。体部外面に薄い稜線。内底面のロクロ回転痕は、後のナデが施されているものの薄く残る。 外底面の糸切り痕はナデ後も残る。	胎土は精良。色調は内面が浅黄橙色。外面は浅黄橙色。非常に軽量な土器。

青磁・白磁

441 青磁	(9.5)			体部は鈍く立ち上がっており、外反気味に伸びている。	口縁は波状。体部内面にヘラ描きによる横線文様。	胎土は灰褐色。釉色は青緑色（鈍い黄橙色が付着）。稜花皿の可能性あり。
442 青磁 (同安窯)	(11.7)			体部は鋭く立ち上がり、わずかに内弯する。 体部の器壁は上位でやや肥厚する。	体部外面の上位に鮮明な稜線。 体部の内外両面に櫛描文。	胎土は精緻な灰白色。 釉色はオリーブ黄色。
443 青磁碗	(13.2)			残存の体部は、ほとんど直接的に伸びる。 口縁はやや直口気味。	体部外面に櫛描きによる雷文帯。 体部内面は丁寧なナデ。	胎土は灰白色。釉色は緑白色。 文様は濃緑色。
444 白磁碗	(14.5)			体部は鋭く立ち上がり内弯する。口縁はやや外反。器壁は上位から下位にかけて肥厚する。	体部外面に薄い稜線（稜線が2本単位で巡り、間に一条の凹線をはさむ）。体部内面は丁寧なナデで平滑、上位に一条の稜線。	胎土は精良で灰白色。釉色は灰オリーブ色。 体部の内外両面に大きな貫入が入る。 上質の白磁碗。
445 青磁 (同安窯)	(14.5)			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。	体部内面の上位に界圏。幅2㎜の沈線。 体部外面の口縁下に幅6㎜の沈線。 体部の内外両面に櫛描文。	胎土は精良な白灰黄色。 釉色はオリーブ黄色。

第90表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表②

441は青磁の稜花皿である。口径は（9.5）cmで体部内面にヘラ描きによる横線文様がある。

442と445は同安窯の青磁碗である。体部の内外面に櫛描文がある。442は口径（11.7）cm、445は（14.5）cmを測る。

443・448・450・451は青磁碗である。443は体部外面に櫛描きによる雷文帯がある。口径は(13.2)cmを測る。448は見込みに沈線状の界圏があり、底径は(4.7)cmである。450は底径(4.9)cmで高台は外側へ張り出す。451は体部外面の下位に2本組み合わせの鎬文がある。底径は(8.5)cmで底部は極端に肥厚する。

444・447は白磁の碗と皿である。444は碗で口径（14.5）cmを測り、口縁はやや外反する。447は皿で、太く極めて低い高台をもつ。見込みに草木を具象化した文様がある。底径（7.4）cmである。446・449は青白磁の碗である。446は体部が鋭く立ち上がり、直立気味に内弯する。体部内面にロクロ痕が鮮明に残る。

452は青白磁碗で、見込みに草花文様があり、底径は（5.6）cmを測る。高台は太く低い。

453～455は青磁碗である。453は見込みに花文が描かれており、底径（6.1）cmである。454は口径（12.1）cm・底径（4.5）cm・器高5.5cmを測り、体部は内弯する。体部内面の見込みは円形状に無釉で、花文が印刻されている。体部外面には蓮弁文がある。455は口径（13.0）cm・底径（7.0）cm、器高4.1cmで体部は外反気味に伸びる。見込みに花文がある。

457・459・460は白磁碗である。456・460の体部は、直線的に伸びており、460の口縁は玉縁状に丸く肥厚する。口径は456が（15.2）cm、460が（13.0）cmである。457・459は体部が内弯する。口径は457が(11.7)cm、459が(9.2)cmを測る。463は白磁皿で口径(9.5)cm・底径(3.5)cm・器高2.7cmを測る。高台は肉太で、外側に張り出す。

458は青白磁の碗である。体部は内弯し、口径（11.5）cmを測る。456・461・467は同安窯の青磁である。461は皿で薄壁の内底面に櫛描文がある。467は碗の底部で、高台は太く低い。462～466は青磁碗で、462・466の見込みに印花文の文様がある。

468～470・474・477・478は青磁碗である。口径は468が（15.3）cm、469が（12.9）cmを測る。474は口径（11.9）cm・底径（5.1）cm、器高5.8cmを測る。無文で体部は大きく内弯する。470は見込みの釉下に極めて薄い文様がある。477は体部外面に波状の文様がある。478は見込み部分が無釉で、草花文様が印刻されている。471は青磁の盤で体部内面に鎬文がある。

472・473・475は白磁皿である。472は口径（10.7）cm・底径（3.6）cm・器高2.9cmで、473は口径（10.1）cm・底径（3.9）cm・器高2.9cmを測る。475の底径は（3.7）cmである。

476は天目碗の底部で底径（4.0）cmを測る。胎土は極めて精良であり、釉色は黒色で光沢がある。中国製と思われる。

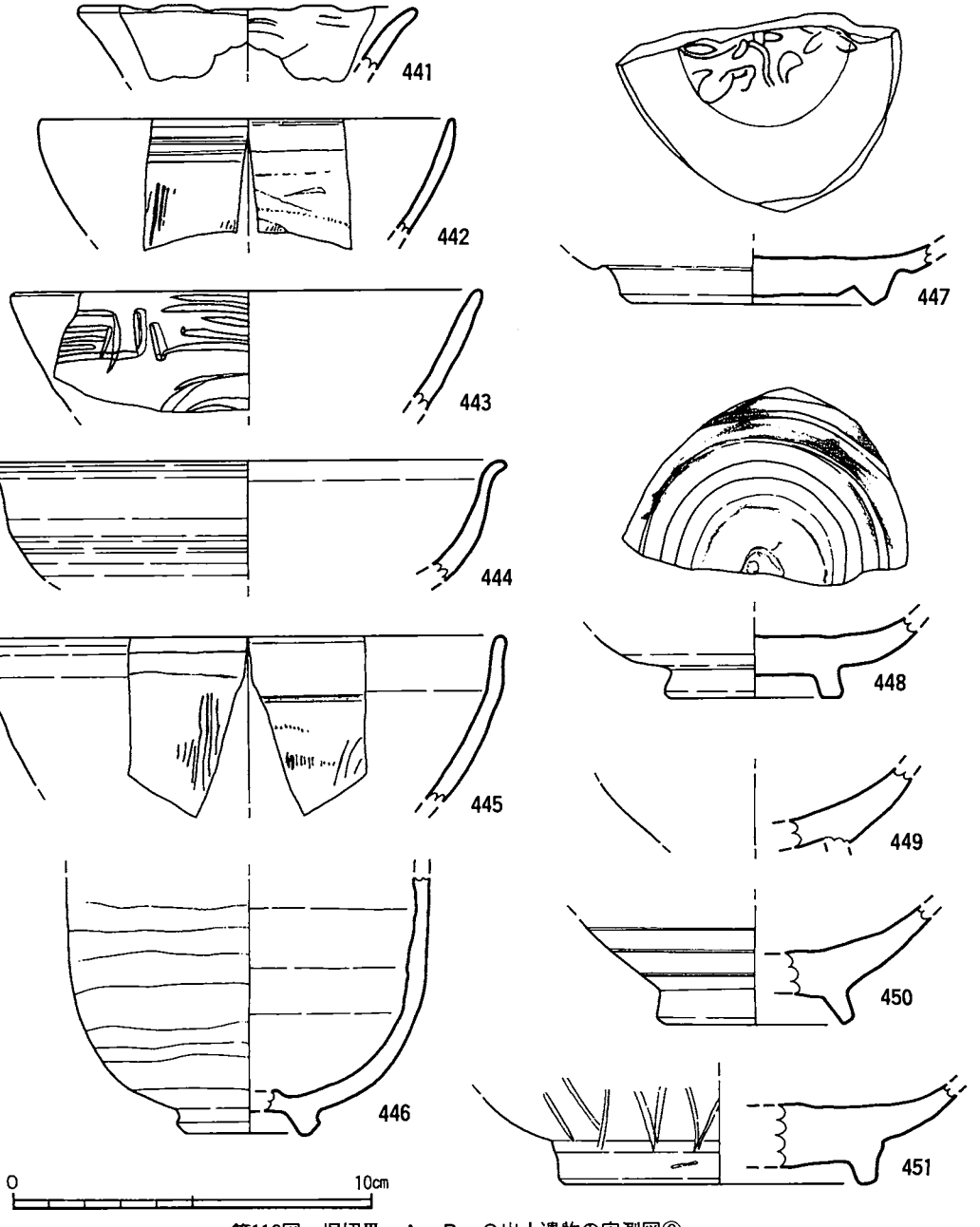
479は青磁の盤で、口径（26.5）cmを測る。体部に鎬文あり。480は青白磁で、体部は大きく内弯する。口径（15.2）cmである。481・483は青磁碗である。483は見込みに図化不可能な極

めて薄い文様があり、底径7.5cmを測る。

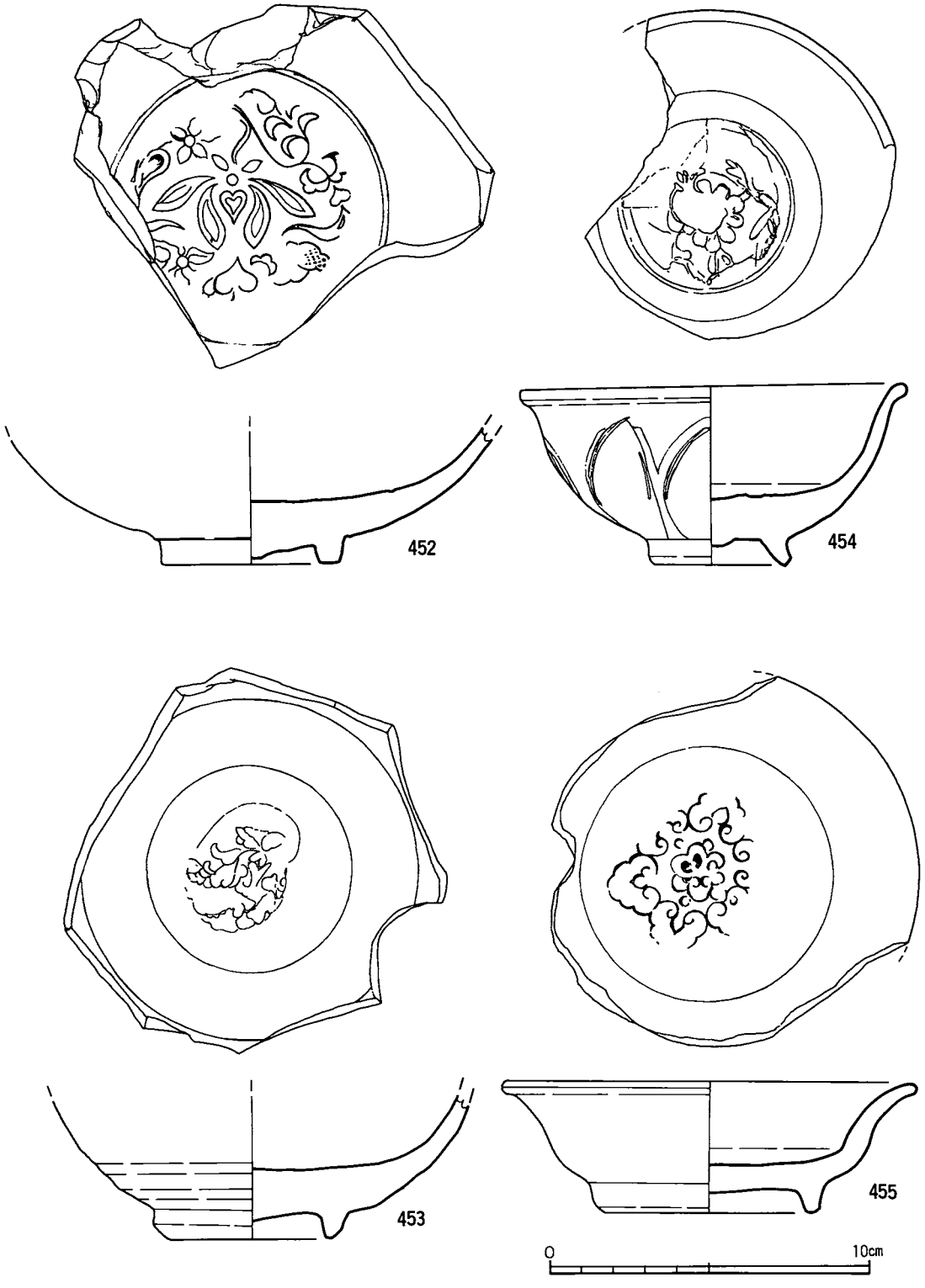
482・484は天目碗である。482は口径(13.3)cmで、体部の内弯の度合は中途から上位にかけて大となる。484は底径(4.7)cmで、かなり使い込んだ碗で、見込み部分の釉は色あせている。

485～487は滑石製の石鍋である。口径は485が（15.6）cm、486が（21.2）cmを測る。487は体部外面の下位にススが付着する。489は滑石製のスタンプで、体部上面にツマミが付く。内面に草花文様が彫刻されている。

488は須恵器の甕で口径（11.0）cmを測る。490は瓦器の甕で、体部外面はナデの後タタキが入る。



第112図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図②

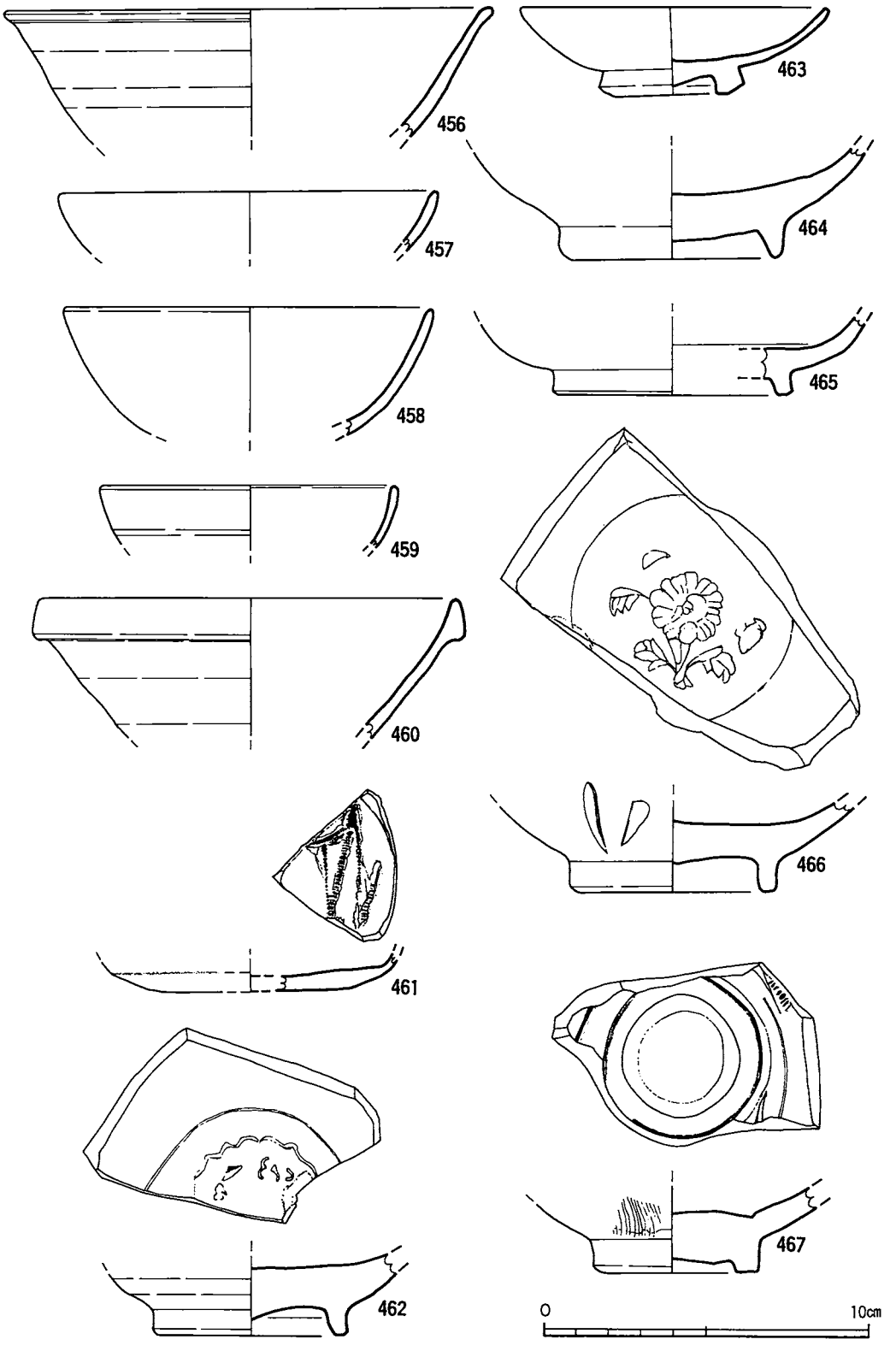


第113図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図③

青磁・白磁・青白磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
446 青白磁碗		(3.5)		体部は鈍く立ち上がり、直口気味に内湾する。 高台は外に張り出す。高台の上位幅9㎜、畳付きの幅3㎜、高台内の高さ6㎜。	体部内面は無釉で、ロクロ回転痕が鮮明に残る。 体部外面に薄い稜線。	胎土は灰白黄色。釉色は灰白色。 高台の外縁に粘土の小粒が付着。高台の畳付きに重ね焼きの痕が残る。高台内部にも施釉。
447 白磁皿		(7.4)		底部は肥厚（厚さ1.1cm）。高台内における外底面の端部は右斜めの上にヘラ削りされている。 高台内の中心部の高さ2㎜、端部の高さ5㎜。高台と体部の境に沈線上のくびれあり。	体部内面の見込みに界圏、圏内に草木を具象化したような文様。体部外面の下位から高台にかけて無釉。	胎土は非常に緻密な灰白色。釉色はオリーブ灰色で光沢あり。 高台内をスズリに使用した痕あり。 スミが付着。
448 青磁碗		(4.7)		体部は底部から鈍く立ち上がる。高台内の外底面は水平で高さ6㎜、高台の上位幅7㎜、畳付きは幅5㎜で扁平。底部の厚さ1.1cm。	見込みに沈線状の界圏あり（直径5cm、沈線状幅7㎜）。	胎土は白灰色。釉色は青緑白色。 見込みに貫入。高台の内外両縁は釉が垂れている感じ。
449 青白磁碗				体部は底部から鈍く立ち上がる。器壁はやや厚い。	――――――	光沢のある明オリーブ灰色。 外面には褐灰色が付着。焼成の際に不純物が付着。
450 青磁碗		(4.9)		体部は底部から鈍く立ち上がる。 高台は外側に張り出し、角ばった高台の内縁が畳付きとなる。	体部は下位のみ残存であるが、内外両面とも丁寧なナデ。高台内の外底面には、ロクロ回転痕が鮮明に残る。体部下位に稜線。	胎土は褐灰色。高台の畳付きから内側は無釉。体部内面にトチが付着。貫入が目立つ。
451 〃		(8.5)		底部は極端に肥厚（厚さ1.7cm）する。 高台内の高さは端部で6㎜、上位幅9㎜、畳付きの幅4㎜。	体部内面の見込みは丁寧なナデで、円形上に無釉（復元直径9cm）の部分あり。体部外面の下位に2本を任意に組み合わせた鎬文。	胎土は灰色。釉色は暗オリーブ色。体部内面の見込みにある無釉の箇所は、重ね焼きの為とも考えられる。
452 青白磁		(5.6)		体部は底部から鈍く立ち上がる。底部は肥厚（中央部の厚さは1.8cm）し、ロクロ切り離し痕が目立つ。高台の畳付きはヘラ削りにより扁平で幅7㎜。高台内の高さは中央部で2㎜。端部で5㎜。	体部内面の見込みに沈線状の界圏、圏内に草花模様。体部の中途まで施釉、以下は無釉。	胎土は精良な灰色。釉色は明オリーブ灰色。
453 青磁碗 〃		(6.1)		体部は底部から鈍く立ち上がり、内湾気味に伸びる。高台の外端は荒いヘラ削り。高台内の中心部にロクロ切り離しの突起物。最大高台内の高さ8㎜。高台の上位幅9㎜。畳付きの幅2㎜。	体部内面の見込みにかすかな界圏。圏内に花文が描かれている。体部内面の立ち上がりに1条の界圏、体部外面に稜線（器面は多少凸凹）。	胎土は精良な灰白色。釉色は灰オリーブ色（やや黄色味を有する）。体部内面の見込部に灰色に変色した部分があり、トチも付着する。高台の外端から内部にかけても無釉、色調は灰色。高台内に金粉状のものが付着。
454 〃	(12.1)	(4.5)	5.5	体部は底部から鋭く立ち上がり、内湾する。口縁はやや外反。底部は肥厚（厚さ1.4cm）。 高台畳付きの外面はヘラ削り。高台内に顕著なロクロ切り離しの突起物。高台内にトチが詰まっている。	体部内面の見込部分は円形状に無釉で、花文が描かれている。 体部外面に蓮弁文。	胎土は精良な白灰色。釉色は薄緑白色。 高台畳付きは無釉。

第91表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表③

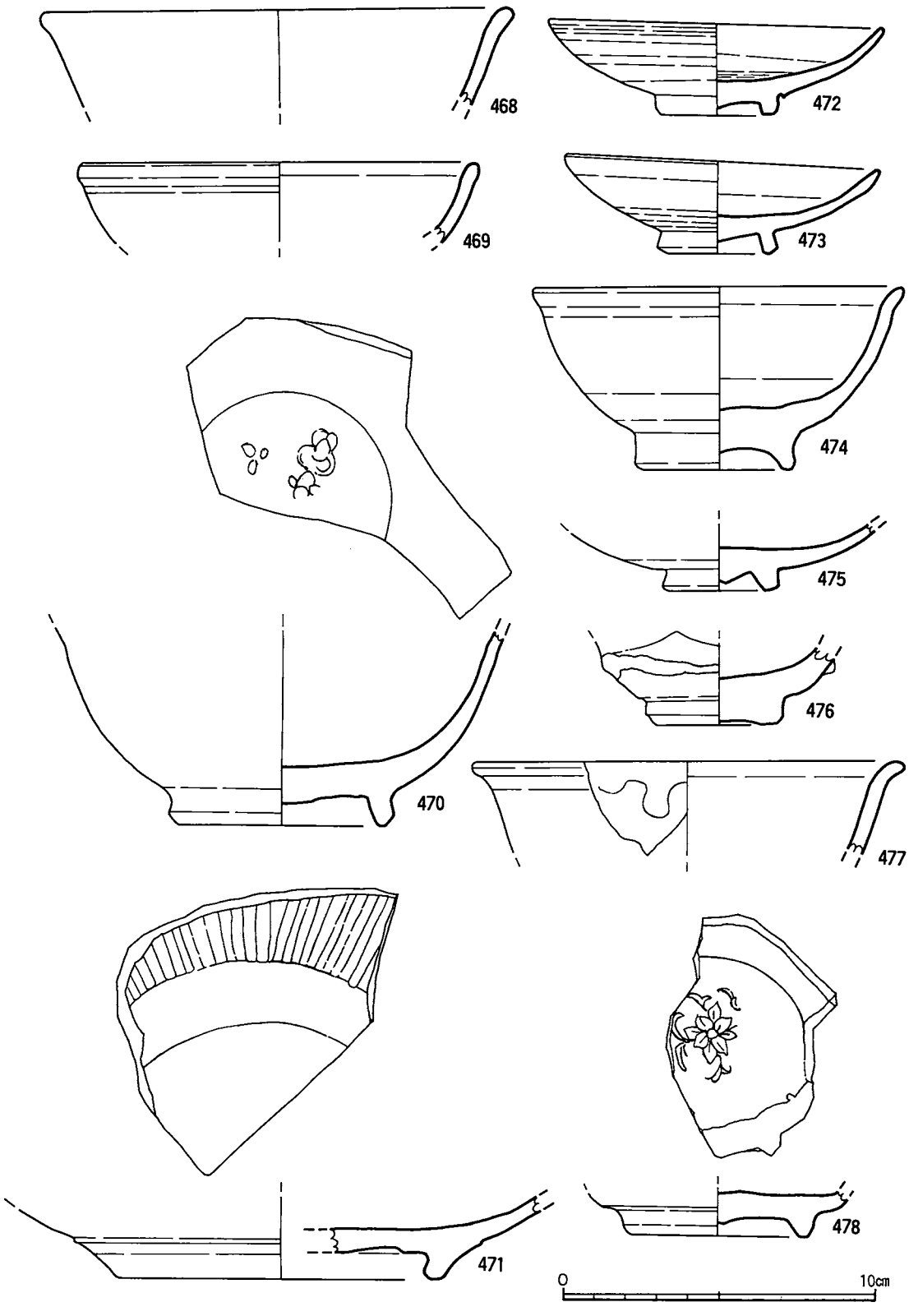


第114図　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ出土遺物の実測図④

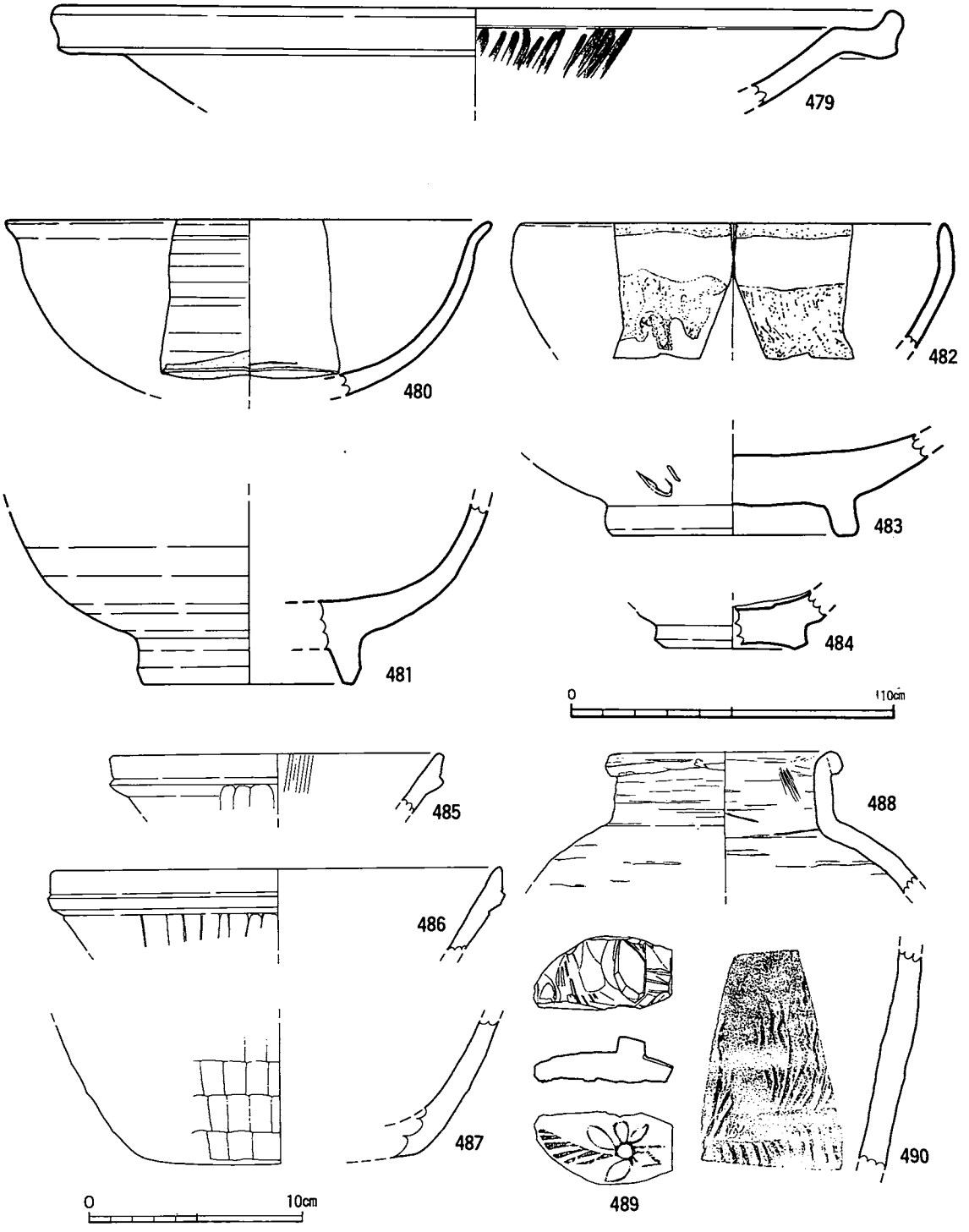
青磁・白磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
455 青磁碗	(13.0)	(7.0)	4.1	体部は底部から鈍く立ち上がり、外反気味に伸びる。高台はほとんど直立。高台の上位幅7㎜、畳付きは丸味を帯びて幅4㎜、高台内の高さ6㎜。	体部内面に界圏、圏内に花文が描かれている 体部の内外両面は、非常に丁寧なナデ。	胎土は灰白色。釉色は濃緑色。 高台内は無釉。但し、ロクロ切り離しの突起物をナデた後、この点に限って施釉。
456 青磁 (同安窯)	(15.2)			体部は底部から鈍く立ち上がり、直接的に伸びる。口縁はわずかに外反。口縁の上面は扁平で端部に鮮明な稜がつく。	体部の外面に稜線。口縁直下のみ鮮明な稜線。他は薄い稜線。上位の稜線間は多少凹となる。	胎土は灰褐色。釉色は灰白オリーブ色。
457 白磁碗	(11.7)			体部はやや鈍く立ち上がっており、やや内弯気味に伸びている。体部の上位でやや肥厚する。	――――――	胎土は白黄色。釉色は白色。
458 青白磁碗	11.5			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。 体部は薄壁（厚さ3㎜）。	体部内面の下位は無釉。	胎土は灰色。体部内面の釉色は灰色。 体部外面の釉色は白黄色。
459 白磁碗	(9.2)			体部は鈍く立ち上がっており、やや内弯気味に伸びている。体部は中途で厚さ2㎜程の薄壁であるが、口縁部にかけて漸次肥厚。口縁は丸味を帯びる。	体部外面の口縁下に鮮明な稜線。	胎土、釉色とも白黄色。
460 〃	(13.0)			体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁は玉縁状に丸く肥厚する。	体部内面は丁寧なナデ。体部外面に稜線。 体部外面の下位は無釉。	胎土は灰白色。 釉色はやや黄味のある灰オリーブ色。
461 青磁 (同安窯)		(5.6)		外底は平底。底部は中央部寄りで厚さ5㎜。端部で7㎜。底部と体部の境にくびれあり。	内底面に櫛描文。 体部外面の下位に稜線。(線上部分は釉剝落)	胎土は灰褐色。釉色は薄い灰オリーブ色。 外底面は無釉。
462 青磁碗		(5.8)		底部は極端に肥厚（中央部で1.6cm）。高台内のロクロ切り離しの突起物に、非常に丁寧なナデが施されている。高台の上位幅8㎜、畳付きの幅は3㎜。高台内の高さは中央部で5㎜、端部で9㎜。	体部内面の見込みに界圏、圏内に印花状の文様あり、体部の下位に稜線。高台の外縁はヘラ削り。	胎土は灰褐色（一部、灰黒色）。釉色は灰オリーブ色。高台の内側中途から下位部分まで施釉、高台内は無釉。
463 白磁皿	(9.5)	(3.5)	2.7	体部は底部から鈍く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。高台は肉太で外側に張り出す。 高台の上位幅9㎜、畳付きの幅4㎜、外縁はヘラ削りで右斜め上に削り取られて扁平、幅7㎜。 高台内の高さは中央部で3㎜、端部で6㎜。	体部内面は非常に丁寧なナデ。体部外面の上位と下位に薄い稜線。体部の下位から高台内にかけて無釉。	胎土は褐白色。色調は白(黄)色。高台の畳付きに磨滅が感じられる。
464 青磁碗		(6.9)		体部は鈍く立ち上がる。高台内は端部が中央部に向って、ゆるく下る。端部は高さ8㎜、中央部は高さ5㎜。底部は肥厚（厚さ1.5cm）する。高台の上位幅9㎜、畳付き幅2㎜。	無文。	胎土は白灰色、一部は、赤褐色（完全に磁器化していない）。釉色はくすんだ感じの灰オリーブ色（釉薬の発色悪し）。 高台内は無釉、但し、ロクロ切り離し部分はナデ後、施釉。
465 〃		(7.4)		体部は底部から鈍く立ち上がり、内弯する。 高台の外縁はヘラ削りで扁平。畳付きもヘラ削りで幅3㎜。	体部内面の見込み部分と立ち上がりの境に界圏。	胎土は灰白色。釉色はくすんだ灰白青色。 非常に上質な青磁。

第92表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表④



第115図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図⑤



第116図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図⑥

青磁・白磁

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
466 青磁碗		(6.3)		体部は底部から鈍く立ち上がる。底部中央は肥厚（厚さ1.3cm)。高台は直に立つ（高さ1.0cm)。高台の畳付き及び内外両端はヘラ削り。高台の上位幅6㎜、畳付き幅3㎜、ロクロ切り離しの突起物は指頭で調整されている。	体部内面に界圏、圏内に花文をあしらった花印が捺されている。 体部外面の立ち上がりに鎬文がある。	胎土は灰白色。釉色は若草色。 高台内は中心部に施釉。他は無釉。色調は褐灰色。トチの付着あり。
467 青碗 (同安窯)		(5.1)		底部は肥厚（最大の厚さ1.6cm)。高台は直立。畳付きの部分は扁平な部分（幅7㎜）と外側に向って大きく右上りに削り落されている部分(幅1㎜)がある。高台は多少いびつ。	体部内面の見込み端に沈線状の界圏。体部の内外両面に界圏状の曲線（1条）と間隔の密な櫛描文。	胎土は精良で白灰色。釉色は薄目の灰オリーブ色。 界圏は釉溜りとなって、濃いオリーブ色。
468 青磁碗	(15.3)			口縁はやや外反。口縁はやや肥厚し、わずかに丸味を帯する。	無文。	胎土は灰白褐色。釉色はオリーブ灰色。
469 〃	(12.9)			体部は鋭く立ち上がっており、内弯気味に伸びている。体部は口縁にかけて、やや肥厚する。 口縁は丸味を帯る。	体部の内外両面の下位に、ごく薄い稜線。	胎土は白灰色。釉色はオリーブ灰色。
470 〃		(6.7)		体部は底部から鋭く立ち上がり、内弯する。 高台の上位幅8㎜、畳付きの幅4㎜で扁平。高台内の中央部の高さ7㎜、端部1.0cm、ロクロ切り離し部分は、きれいにナデ調整。	体部内面の見込みに界圏あり。圏内に非常に薄い花文様あり（光線の具合でやっと見える程度)。 体部の内側両面は、丁寧なナデ。	胎土は淡橙色で内底面の上位を除いて、磁器化していない。釉色はオリーブ灰色。 高台の畳付きまで施釉。高台内は無釉で明るい肌色。体部外面に大き目の貫入あり。
471 青磁(盤)		(6.6)		体部は底部から鈍く立ち上がり、内弯する。 底部は肥厚（厚さ1.5cm)。最大高台内の高さ（1.1cm)。高台の上位幅1.0cm、畳付きの幅3㎜。	無文。体部内面は丁寧なナデ。 体部外面に稜線（器面に凸凹面はない)。	胎土は精良で白(灰)色。色調は緑青色、(竜泉窯)。高台の内縁に重ね焼きの痕を残す。 貫入なし。
472 白磁皿	(10.7)	(3.6)	2.9	体部は鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。 高台内に顕著なロクロ切り離しの突起物。	体部内面の下位に稜線。体部外面に稜線。 高台畳付きはヘラ切り。体部外面の下位から高台にかけて無釉。	胎土は白乳色。釉色は白乳黄色。 明の白磁。
473 〃	(10.1)	(3.9)	2.9	体部は底部から鈍く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。口縁はやや肥厚。高台は外に張り出し、高台の上位幅5㎜、畳付き幅2㎜。ロクロ回転の切り離しが突起物として残る。 高台内の高さは中央部で4㎜、端部で6㎜。	体部内面は非常に丁寧なナデ。体部外面の下位に稜線。	胎土は白褐色。全体的に陶器に近い感あり、良質な白磁とは言い難し。

第93表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑤

青磁・白磁・青白磁・天目

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
474 青磁碗	(11.9)	(5.1)	5.8	体部は鋭く立ち上がり、内弯する。口縁はわずかに外反。外底面の中央部にロクロ切り離しの突起物あり。外底は肥厚（厚さ1.4cm）、最大高台内、高さ6㎜。高台畳付きの幅4㎜。高台の上位幅7㎜。	無文。 体部内面の上位に2条、体部外面の上位に3条、下位に1条の薄い稜線。外面上位の条線間は多少凹となる。	胎土は良質の灰白色。釉色の緑白色。 高台内は無釉で灰色の素地。一部にトチが残存。
475 白磁皿		(3.7)		体部は底部から極めて鈍く立ち上がる。 高台内のロクロ切り離しの突起物が目立つ。高台内の高さは中央部で2㎜、端部で6㎜、高台は外に張り出し、上位幅9㎜、畳付き幅3㎜。	体部内面の見込みにロクロ回転痕が残る。 高台は雑な造りでベターッとした感じがする。	胎土は精良で白黄色。釉色は白黄色で非常に光沢を有する。質量感のある皿。
476 天目碗		(4.0)		外底面の中央はやや上げ底（高さ1㎜）。 底部は肥厚（厚さ1.4cm）する。 高台の畳付きの幅は6㎜で外縁はやや丸味を帯びる。	高台と体部の境はヘラ削りが顕著であるが、やや雑な調整。体部内面の見込みに磨滅あり。体部の下位から高台内にかけて無釉。	胎土は精良な灰色。釉色は黒色で光沢あり。 施釉部分に釉厚によるふくらみあり。中国製天目。
477 青磁碗	13.9			体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。口縁はやや外反。	体部外面の口縁下に先端部が丸味を有する波状文。	胎土は精良な灰白色。釉色はオリーブ灰色。
478 〃		(5.7)		高台の上位幅は9㎜、畳付きはシャープなヘラ削りで幅3㎜。 高台内の高さは中央部で4㎜。端部寄りで6㎜。	体部内面の見込みは無釉で花印が捺されている。 非常に丁寧な調整	胎土は乳褐色。釉色はオリーブ灰色。 貫入あり、高台内は無釉。 胎土は高台部分のみ肌色。
479 青磁(盤)	(26.5)			体部は鈍く立ち上がっており、直線的に伸びている。口縁は鍔状となり、水平状態にまで外反する。端部は丸味を帯びる。	体部内面に鎬文。	胎土はわずかに荒い感じで灰白色。 釉色はくすんだ感じのオリーブ灰色。
480 青白磁	(15.2)			体部は鋭く立ち上がり、内弯する。 口縁はやや外反。	体部内面は丁寧なナデ。体部外面に薄い稜線。体部内面の見込みに2条の曲線文様。	胎土は精良で灰白色。釉色は灰オリーブ色。 体部外面の下位は無釉。
481 青磁碗		(6.6)		体部は底部から鈍く立ち上がり、内弯する。 底部は肥厚（厚さ1.5cm）。最大高台内、高さ1.1cm、高台の上位幅1.0cm、畳付きの幅3㎜。	無文。 体部内面は丁寧なナデ。 体部外面に稜線（器面に凸凹面はない）。	胎土は精良で白（灰）色。色調は緑青色（竜泉窯）。高台の内縁に重ね焼きの痕を残す。 貫入なし。
482 天目碗	(13.3)			体部は鈍く立ち上がり、内弯する。 内弯の度合は体部中途から上位にかけて大。	――――――	体部の内外両面の上位のみ茶色。 口縁直下と体部中途から下位には黒色釉がかかる。胎土は白灰色。
483 青磁碗		(7.5)		底部は肥厚（厚さ1.5cm）。高台内の外底面は、ほぼ水平で高さ1.0cm。高台の上位幅9㎜。畳付きは幅6㎜で扁平。	体部内面の見込みに、ごく薄い文様あり。（存在が確認できるだけで図化不可能）。高台の外縁はヘラ削り。	胎土は精良で白灰色。釉色はオリーブ灰色。 高台は畳付きが無釉で、内側は部分的に釉が流れ込んでいる。
484 天目碗		(4.7)		外底面の中央はやや上げ底（高さ1㎜）。	高台の畳付きの部分は、全面右斜め上にヘラ削りされている。高台の外側は非常に丁寧なナデ。	胎土は灰色。釉色は黒色。体部内面の見込み部分は磨滅し、釉も色あせている。

第94表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑥

石製品・瓦器・硬質瓦器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
485 滑石製 (石鍋)	(15.6)			体部の上位は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁の上面は扁平(幅3mm)で、外面は右斜め下方向に削り出され、端部内側は斜めに切れている。	体部内外面にノミ痕 突帯状の削り出しの上下両面に細い沈線。	体部外面にスス付着。
486 〃	(21.2)			体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。体部から口縁にかけてやや肥厚。口縁は直口で、外面は右斜め方向に削り出しの側面は扁平。	体部外面に縦方向のノミ痕。 突帯状の削り出しの上下両面に細い沈線。	体部外面にスス付着。
487 〃	残存体部 最大径 (20.8)			体部は底部から鈍く立ち上がる。	体部外面にノミ痕が残る。	滑石製。体部外面の下位にスス付着。
488 須恵 (甕)	(11.0)			頸部はくの字に外反。上位は直立気味で、わずかに内傾する。口縁は玉縁状。	頸部内面の上位は、横ナデに右斜め下方向のナデが重複。下位は指押え後、横ナデ。 頸部外面の上位は横ナデ、下位は指押え後、ナデ。	胎土は白砂粒を多く含む。
489 滑石製 (スタンプ)				体部の上面にツマミが付く。ツマミの片裾部に幅5mm、深さ1mm、残存の長さ1.1cmの溝がある。体部の上面は外側へ丸味をもって傾斜する。	体部の上面はツマミが削り出し。器面はやや荒い研磨。内面に草花文様が陽刻されている。	石鍋の転用？
490 瓦器 (甕)				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。	体部内面の上位は横ナデ。中途はヘラ削り後、横ナデ。体部外面はナデ後、タタキ。	色調は内面が灰白色。外面は灰黄色。
491 瓦器 (坏)				体部は鈍く立ち上がり、わずかに外反気味に伸びる。	体部内面は、丁寧なナデ。体部外面は丁寧な横ナデ。	胎土は黄灰色。体部外面全体にスス付着。特に上位に多く付着。焼成はやや不良。
492 瓦器 (鉢)				体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。体部の上位は、わずかに肥厚する。	体部の内面は非常に丁寧な横ナデ。体部外面は、指押えの後、丁寧な横ナデ。上位は丁寧な横ナデ。	胎土は淡黄色。色調は内面が白褐色、外面は褐灰色。体部外面の全体にスス付着。
493 硬質瓦器 (火舎)				体部は平底から鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。体部外面の下位に突帯。底部端は肥厚する。	体部内面は指押え後、荒い横ナデ（器面はザラザラ）。体部外面はヘラ磨き、下位は横ナデ後、ヘラ磨き。	胎土は精良。外底面に板目圧痕。 色調は浅黄橙色（体部内面はやや灰色味を帯びる）。体部外面に光沢あり。緻密な焼成。
494 瓦器 (火舎)				体部は平底から鋭く立ち上がる。底部は中央部寄りで薄壁（厚さ8mm）。体部で肥厚（厚さ1.5cm）。	体部内面は非常に丁寧な横ナデ。内底面との境に指頭痕。体部外面は指押え後、丁寧なナデ。 外底面との境はくびれる。外底面は非常に丁寧なナデ。端部の内外両面はヘラ削り後ナデ。	体部の下位に多量のスス付着。
495 硬質瓦器 (火舎)				体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。体部に円孔あり。	体部内面は横及び斜め方向のナデ。体部外面は横及び斜め方向のヘラ磨き、薄い削痕あり。円孔はヘラ削り。	胎土は細砂を若干含む。 色調は乳灰色。
496 瓦器 (鉢)				体部は鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。体部の下位はやや肥厚する。	体部内面は指押え後、横と斜め方向からのナデ。体部外面の上位は丁寧な横ナデ。 体部の中途は指押え後、丁寧なナデ。	色調は白褐色。体部内面の中途は焼成時に灰黒色に変色。体部外面の上位はスス付着。

第95表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑦

491・492・496は瓦器の坏と鉢で、いずれも体部外面にススが付着する。494は瓦器の火舎で、体部外面の下位に多量のススが付着する。495・493・497は硬質瓦器の火舎である。体部外面はヘラ磨きされており、498には円孔がある。

498・499は備前の甕で、498は二次焼成で変色している。

500・501は瓦器の小坏である。500は体部が鋭く立ち上がり、口縁でやや内弯する。口径(10.0)cm・底径(9.4)cm・器高4.6cmを測る。501は体部が平底から鋭く立ち上がる。口縁は扁平で、口径(10.7)cm・底径(7.7)cm・器高4.3cmである。502は土師系の坏であるが、他の土師器皿と異なり、口縁は極端に肥厚する。口径(13.2)cm・底径(9.4)cm・器高3.5cmを測る。

503・506・507・509・512は瓦器の擂鉢である。条線の一単位は、506が4本、509が5本、507が6本である。504・505は備前の擂鉢で、条線の一単位は5本である。508は硬質瓦器の擂鉢で、体部内面に細線の掻き目があり、条線の一単位は5本である。

510は瓦器の坏と思われるが、二次焼成で灰色に変色している。平底で底径(10.8)cmを測る。

511・515は硬質瓦器の茶釜である。511は緻密な焼成で、頭部外面の下位にススが付着する。515は鍔の内側に指頭痕が残る。残存胴部の最大径は、511が（31.6）cm、515は（16.4）cmである。

513は瓦器の茶釜で、肩部に垂下用の耳が付いている。鍔の内側に指頭痕が並ぶ。

514・516・517は硬質瓦器の火舎である。514は手ずくね土器で、体部外面の下位に突帯がある。516・517は体部外面にススが付着する。

518は中世雑器の甕である。口縁は玉縁状で頸部はわずかに外反する。口径(37.2)cmである。

519～522は硬質瓦器の火舎である。519は口径（22.6）cmで、体部は内弯気味に内傾し、孔があく。外面の突帯間に六角形の文様スタンプがある。520～522は花文のスタンプがある。

523・524は瓦器の内耳土器である。口径は523が（34.6）cm、524は（28.8）cmを測り、いずれも体部外面にススが付着する。

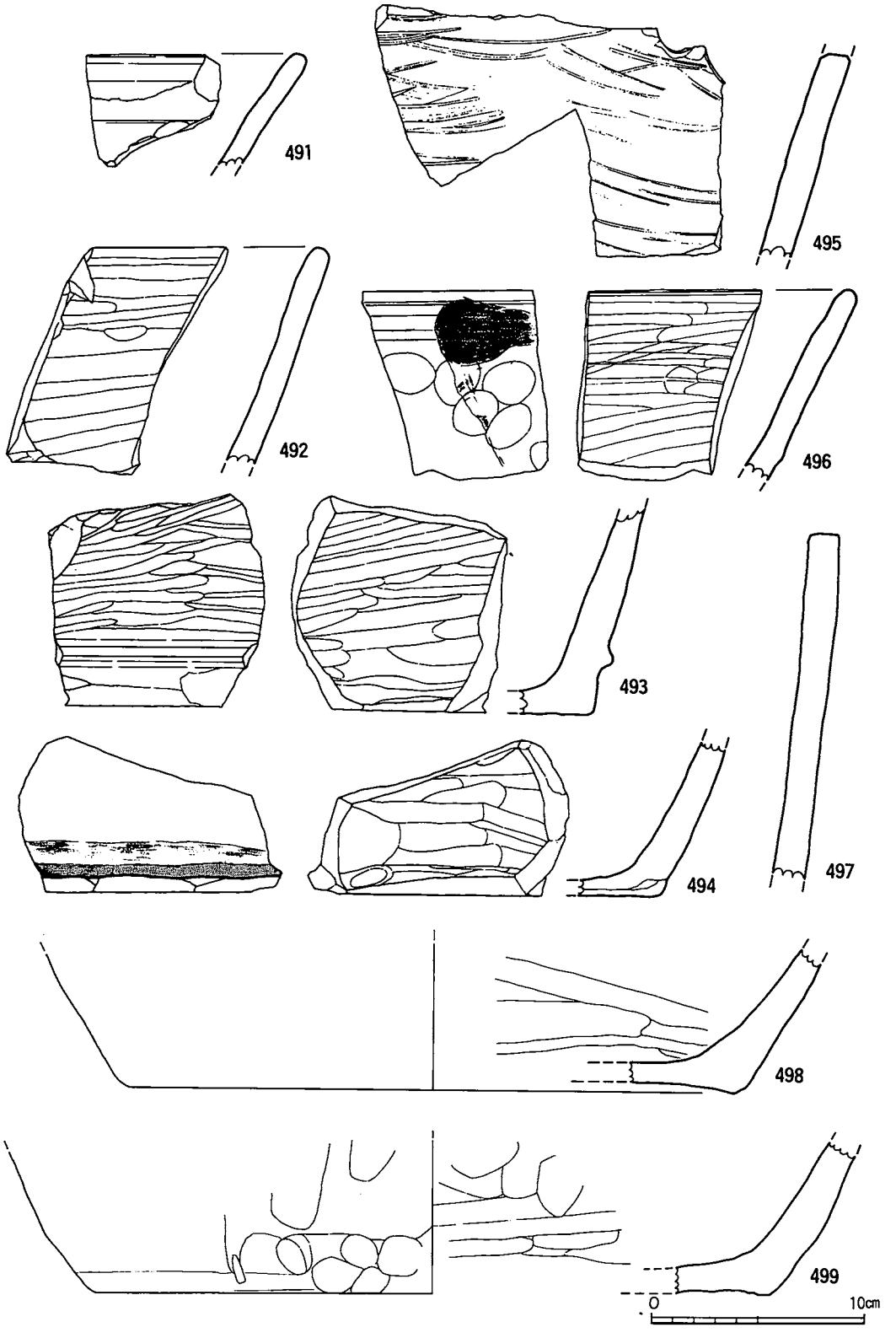
525は硬質瓦器の擂鉢で、口径（27.4）cmを測る。条線の一単位は10本で、片口を有する。体部外面には指押えの調整が目立つ。526は瓦器の擂鉢であるが、条線は磨滅している。

527は硬質瓦器の火舎で、底径は（32.8）cmを測る。脚付きで、脚部の正面に花文があり、さらに脚部が本体底部と接する部分に孔があく。537は備前の大甕で口径（31.4）cmを測る。

528～530は鉄釘である。528は全長5.0cmで、529・530は先端部が曲がっている。

532は茶臼の下臼で、砂岩製である。受け皿の一部が残っている。上面の直径は（35.4）cm、高さ6.3cmを測る。531は石臼の上臼で、砂岩製である。上面の直径は19.4cm、下面の直径は20.2cm、高さ5.0cmを測る。

533～536は砥石である。533～535は粘板岩製で、535は転び石を輪切りにしており、手に持って使用したものと思われる。536は天草砥石である。

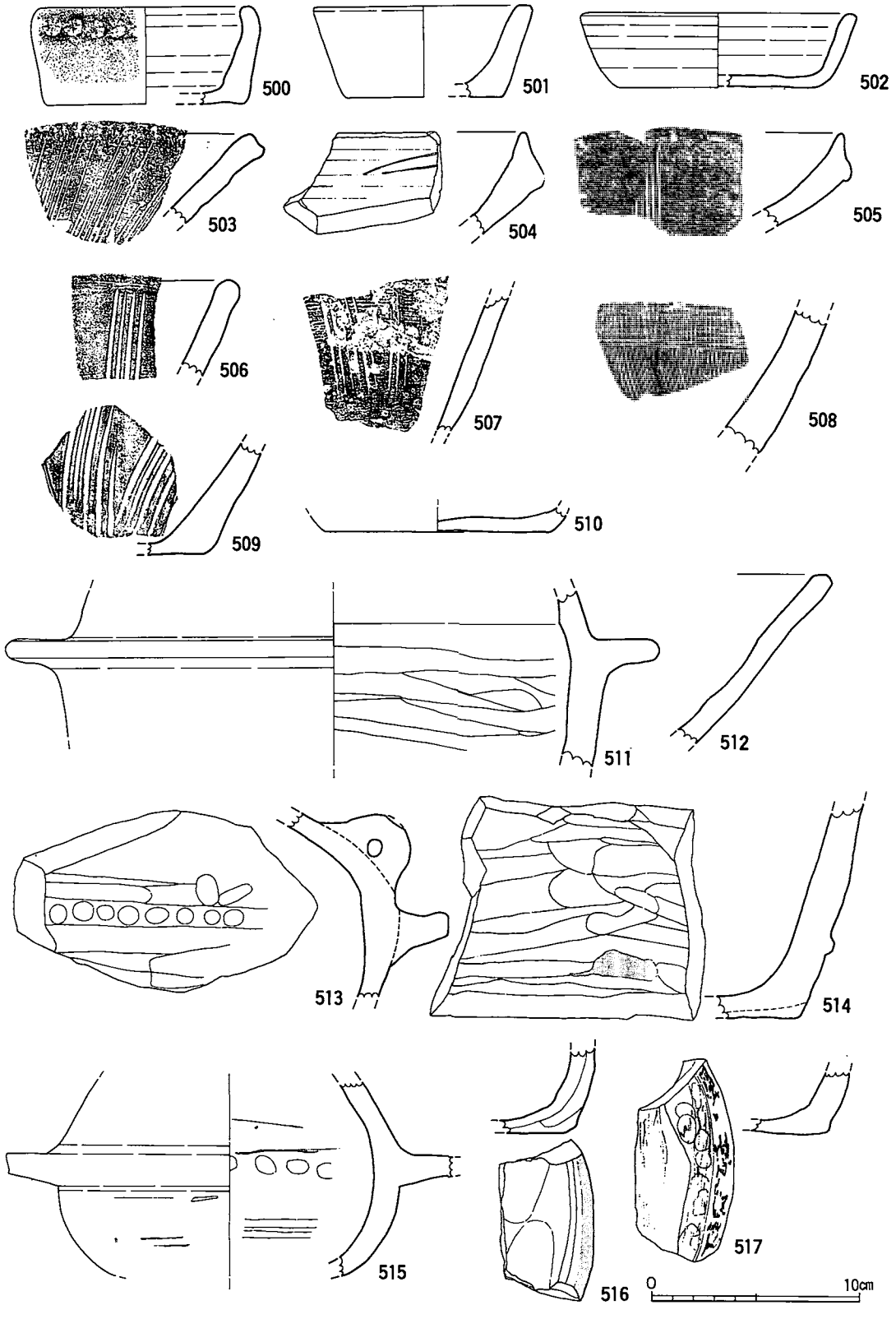


第117図　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の実測図⑦

瓦器・硬質瓦器・備前・土師

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
497 硬質瓦器 (火舎)				体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁の上面は扁平、体部は口縁にかけてわずかに肥厚。	口縁の上面と内面はヘラ削り。丁寧な横ナデ。体部外面は横ナデ後、ヘラ磨き。薄い削痕が目立つ。	胎土は灰褐色。色調は赤褐色で、大部分は二次焼成のため灰黒色。 質量感のある土器。
498 備前 (甕)		(28.5)		体部は底部から鋭く立ち上がる。底部は上げ底で中央部寄りで薄壁(厚さ9mm)、端部で肥厚(厚さ2.5cm)。	体部内面はヘラ削り後に比較的、丁寧な横ナデ。 体部外面は縦方向（上～下へ）のナデ。下位は横方向の荒いヘラ削り。外底面は丁寧なナデ。	胎土に小礫を多く含む。 二次的な焼成で色調は灰白黒色。
499 〃		(31.6)		体部は底部から鈍く立ち上がる。 底部は中央部寄りで薄壁(厚さ1.2cm)、端部で肥厚(厚さ2.2cm)。	内底面は非常に丁寧なナデ。体部内面はヘラ削り後、荒い横ナデ。内底面と体部内面の境に指押え。 体部外面は指押え後、縦方向のナデ。 外底面は指押え後、荒いナデ。外底面と体部外面の境に指押え。	内底面の色調は小豆色を灰白色が覆う。非常に質量感あり。
500 瓦器 (小坏)	(10.0)	(9.4)	4.6	体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びるが口縁でやや内弯する。底部は薄壁(厚さ5mm)で端部は肥厚(厚さ1.4cm)。外底はやや上げ底。	体部内面は丁寧な横ナデ。体部内面にごく薄い稜線。体部外面は非常に丁寧なナデ。 口縁の外面に小円文のスタンプ。	胎土は粗。色調は灰褐色。 体部内面にススの付着した根跡あり。
501 〃	(10.7)	(7.7)	4.3	体部は平底から鋭く立ち上がる。底部は中央部寄りで薄壁(厚さ5mm)、端部で肥厚(厚さ1.5cm)。口縁は扁平。	体部の内外両面は丁寧なナデ。口縁はヘラ削り後、ナデ。	胎土は精良。色調は内面が灰白色、外面は淡黄色。
502 土師系 (坏)	(13.2)	(9.4)	3.5	体部は底部から丸味を持って鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。口縁は極端に肥厚。	体部の内外両面は横ナデ。体部内面は丁寧な調整で平滑。体部外面に鮮明な稜線。 内底面のロクロ回転痕は後のナデで消滅。外底面の糸切り痕は鮮明に残る。	胎土は精良。色調は鈍い橙色。 外底面に板目圧痕。
503 瓦器 (擂鉢)				体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。 口縁は扁平。	体部内面は丁寧なナデ。体部外面は指押え後、ナデ。口縁はヘラ削り後、強いナデ。 体部内面の立ち上がりはヘラ削りでくびれる。	色調は白褐色。体部外面に小さな凸凹が広がる。条線の磨滅激し、単位は不明。
504 備前 (擂鉢)				体部の上位は口縁にかけて漸次、肥厚する。 口縁直口で外面の中央部は、わずかに凹む。 端部内側は、ごくわずかに斜めに切れる。	体部内面は丁寧な横ナデ。 体部外面はナデ。	胎土は精良。色調は赤褐色(内面はやや灰色味を帯びる。)。
505 〃				体部は鈍く立ち上がっており、わずかに内弯気味に伸びている。口縁直口で外面の中央部はやや凹む。端部内側は、ごくわずか斜めに切れる。体部は上位にかけ漸次、肥厚。	体部内外両面は丁寧な横ナデ。 条線の一単位は5本。	色調は小豆色。
506 瓦器 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がっており、直線的に伸びている。口縁は丸味を帯びて外面直下で、わずかに窪む。	体部内面は丁寧なナデ。体部外面はナデ(上位に限ってやや雑な調整)。 条線の一単位は4本。	色調は灰黄白色。
507 〃				体部は直線的に伸びる。	体部内面に横方向の細線の掻き目、体部内面はナデ。条線の一単位は6本。	体部外面は器面が、すべて剝落。 色調は褐灰色。焼成不良で体部内面は灰色
508 硬質瓦器 (擂鉢)				体部は肥厚(厚さ1.6～2.0cm)。	体部内面に細線の掻き目。 体部外面は指押え後、ナデ。 条線の一単位は5本。	色調は褐灰色。 やや焼成不良(体部内面は灰白色)。

第96表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑧

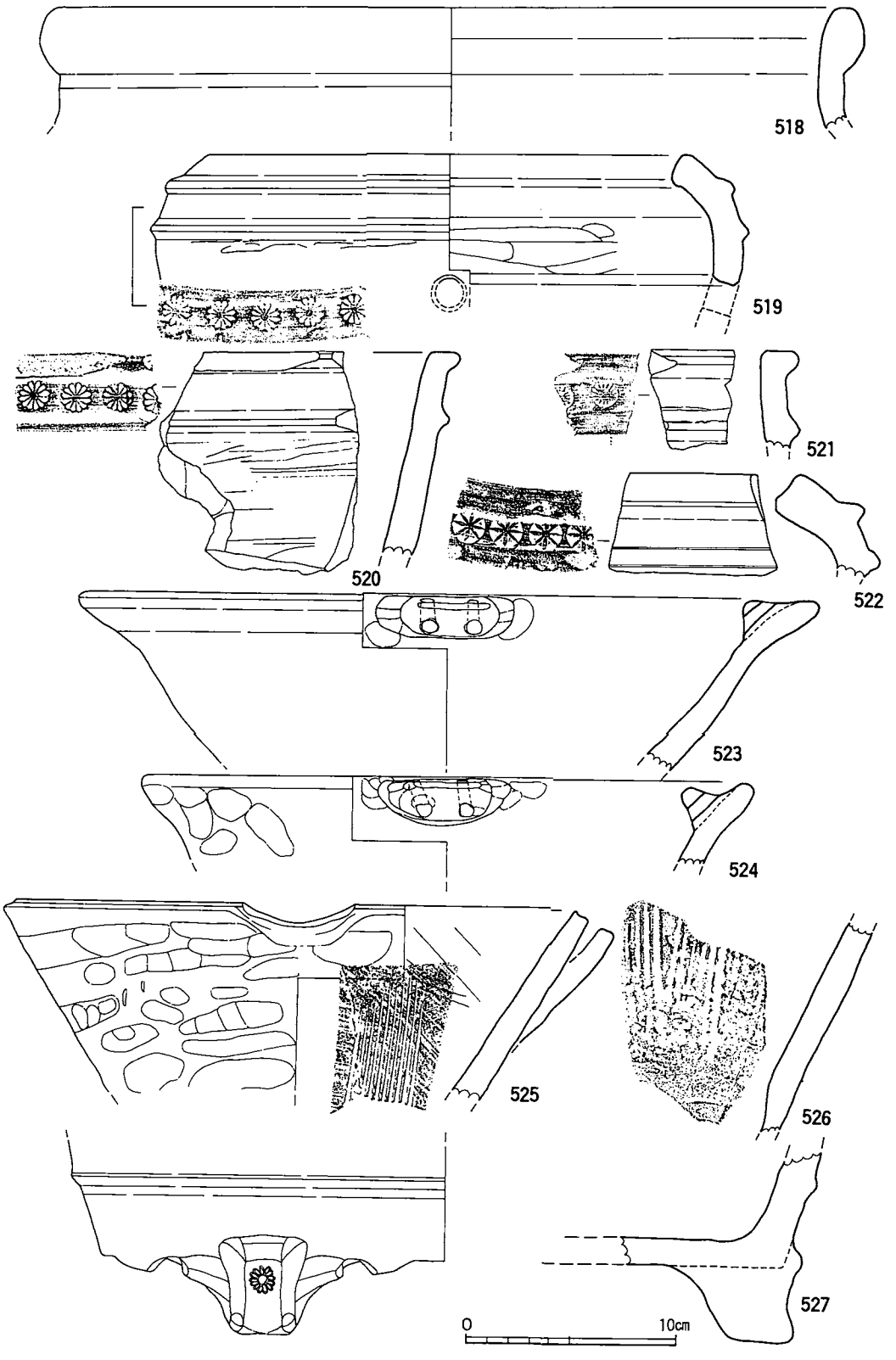


第118図　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ出土遺物の実測図⑧

瓦器・硬質瓦器・中世雑器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
509 瓦器 (擂鉢)				体部は底部から鈍く立ち上がっており、直線的に伸びている。底部は薄壁(厚さ6mm)、底部端は肥厚(厚さ2cm)。	体部内面は非常に丁寧なナデ。体部外面は指押え後、丁寧なナデ。条線の一単位は5本、溝幅3mm。外底面は指押え後、荒いナデ。	胎土は精良。 色調は灰褐白色。
510 瓦器 (坏)		(10.8)		外底は平底。中央部で薄壁(厚さ5mm)、端部でやや肥厚(厚さ9mm)。外底面全体に大小の凸凹が広がる。	内底面はナデ。外底面は荒いナデ。	胎土に小礫の混入が目立つ。 二次焼成で灰色に変色。
511 硬質瓦器 (茶釜)	胴部 最大径 (31.6)			胴部は下位からやや内弯し、鍔の部分から内傾する。	胴部内面は指押え後、荒い横ナデ。 胴部外面の上位と鍔の上下両面は非常に丁寧な横ナデ。胴部外面の下位は丁寧な横ナデ。	胎土、色調とも鈍い黄橙色、外面は鈍い褐色の箇所あり。緻密な焼成。 胴部外面の下位にスス付着。
512 瓦器 (擂鉢)				体部は鈍く立ち上がっている。	――――――	胎土は黄灰色。体部の内外両面の磨耗激し。色調は灰黒色。条線は剝落。焼成はやや不良。
513 瓦器 (茶釜)				体部の上位は大きく内傾する。肩部に垂下用の耳がつく。 鍔の上面は中央部でやや凹み、側面で扁平。	体部内面は指押え後、荒いナデ。鍔の内側に指頭痕が並ぶ。体部外面は鍔の上面まで横ナデ後、ヘラ磨き。鍔の側面はヘラ削り後、下面から体部下位は横ナデ。	胎土は鈍い黄橙色。色調は内面が灰黒色。外面が鈍い黄橙色。緻密な焼成。
514 硬質瓦器 (火舎)				体部は底部から鋭く立ち上がる。底部は薄壁(厚さ1.1cm)で、体部は肥厚(厚さ1.8cm)。体部下位に突帯。	体部内面の上位は指押え後、ナデ。下位は横ナデ、体部外面は左斜め下方向のナデ。 手ずくね土器。	内面は灰白黒色。外面は灰黄色。 質量感のある土器。
515 硬質瓦器 (茶釜)	胴部 最大径 (16.4)			胴部は下位から大きく内弯し、鍔の部分から内傾する。(鍔の部端を欠く)	胴部内面は指押え後、横ナデ。鍔の内側に指頭痕。胴部外面は上位で指押え後、荒いナデ。 鍔の上下両面は非常に丁寧な横ナデ。胴部外面の上位はヘラ磨き。	胎土は桃色。色調は淡橙色。鍔より下位の胴部外面は赤褐色。 非常に緻密な焼成。
516 硬質瓦器 (火舎)				体部は平底から鋭く立ち上がる。底部は薄壁(厚さ6mm)で、端部は肥厚(厚さ1.6cm)。	体部の内面は指押え後、丁寧な横ナデ。体部外面は指押え後、ナデ。外底面は指押え後、丁寧なナデ。	胎土は鈍い黄橙色。 体部外面にスス付着。
517 〃				底部はやや上げ底。底部は薄壁で(厚さ5mm)端部は肥厚(厚さ1.6cm)。底部と体部外面との境はやや凹む。	体部内面は指押え後、丁寧な横ナデ。体部外面は指押えの後にナデ。外底面は丁寧なナデ。 外底面の縁に指頭圧痕が残る。	色調は灰黄色。体部外面と外底面にスス付着。
518 中世雑器 (甕)	(37.2)			口縁は玉縁状。頸部はわずかに外反。	頸部の内外両面は横ナデ。頸部の内側に削痕による沈線。	胎土は小礫を多く含む。 二次焼成により灰黄色に変色。
519 硬質瓦器 (火舎)	(22.6)			体部は内弯気味に内傾する。体部外面の上位に2条の突帯。体部に孔。口縁は左斜め下方向へ傾斜。	口縁の内側から、体部外面の上部突帯間は横ナデ後、ヘラ磨き。体部内面はヘラ削り後、横ナデ。 体部外面の下部突帯から下位は丁寧なナデ。 体部外面の上位に花文のスタンプ。	色調は浅黄橙色。 体部外面の一部は灰白黒色。
520 〃				体部は鋭く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁は扁平で端部は突帯状に張り出す。体部外面の上位に突帯。	口縁の上面はヘラ削り後、ナデ。口縁の内面と体部内面の上位はヘラ削り後、横ナデ。中途より下位は指押え後、荒い横ナデ。体部外面はヘラ磨き。 体部外面の上位に花文スタンプ。	胎土は浅黄橙色。色調は赤褐色。

第97表　堀切Ⅲ－A・B・C出土遺物の観察表⑨



第119図　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ出土遺物の実測図⑨

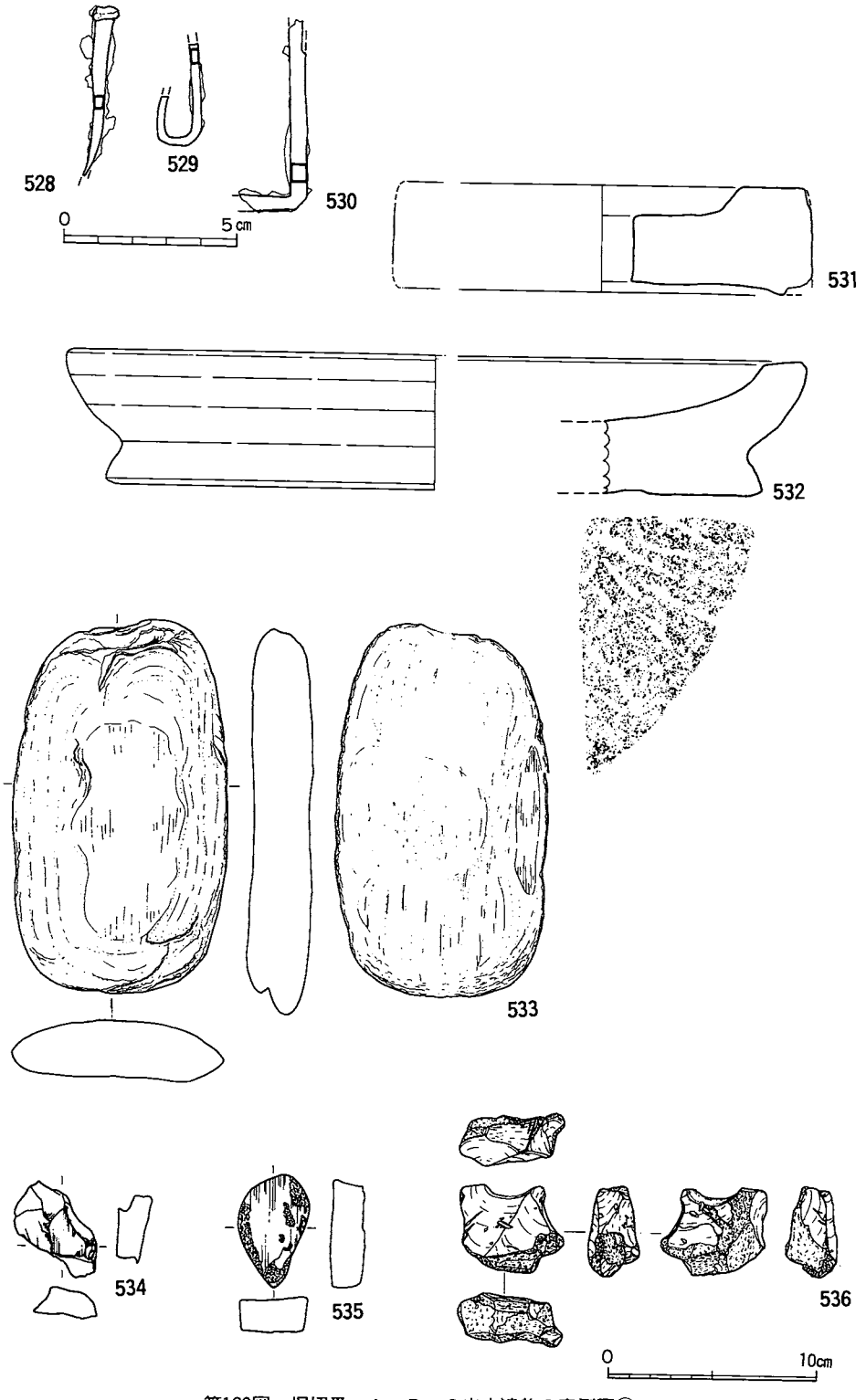
瓦器・硬質瓦器・備前

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
521 硬質瓦器 (火舎)				体部は上位は鋭く立ち上がっており、やや内傾しながら直線的に伸びている。口縁は扁平で端部は突帯状に張り出す。体部外面に突帯。	体部内面は丁寧な横ナデ。口縁の上面はヘラ削り後、ヘラ磨き。体部外面は横ナデ後、ヘラ磨き。体部外面に花文のスタンプ。	色調は鈍い橙色。
522 〃				口縁直口。内面は扁平（幅1.9cm)。 体部上位に２条の突帯。	体部の内外両面は非常に丁寧なナデ。 体部外面の上位に花文スタンプ。	胎土は精良。色調は桃色。 使用痕の少ない土器。
523 瓦器 (内耳土器)	(34.6)			体部は鈍く立ち上がり、上位で外反、体部内面に耳がつく。	体部内面は丁寧なナデ。体部外面の上位は横ナデ下位は指押え後、丁寧なナデ。	胎土、色調は浅黄色。体部外面の全体にス付着。
524 〃	(28.8)			体部上位でやや外反。体部内面に耳がつく。	体部内面は丁寧な横ナデ。体部外面は指押え後、荒い横ナデ。	胎土は灰黄色。色調は灰色。 体部外面にス付着。
525 硬質瓦器 (擂鉢)	(27.4)			体部は鋭く立ち上がり、極めて直接的に伸びる。口縁は扁平で、中央部はやや窪む。片口を有する。	体部内面の口縁下はヘラ削り後、丁寧な横ナデ。中途は斜め方向のナデと横ナデ。体部外面の口縁下は横ナデ。以下は器面全体に指押え。 条線の一単位は10本。	色調は黄褐色。
526 瓦器 (擂鉢)				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びる。	体部内面の立ち上がりは、ヘラ削りでくびれている。体部外面の指押え後、ナデ。	体部内面の条線は磨滅。 色調は浅黄橙色。
527 硬質瓦器 (火舎)		(32.8)		底部は平底で端部に脚がつく。脚部の高さは3.5cmで、底面はわずかに外側へ傾斜する。(幅3.0cm)外側の内面へ窪み本体と接する部分は、突帯状に突き出す。	本体内底面は丁寧なナデ。脚部は指押え後、ナデ。底面はヘラ削り後、ナデ。脚部の正面に花文、脚部の上位端が、本体底部と接する部分に孔。本体外底面は指押え後、ナデ。	胎土は精良。色調は淡黄色。 緻密な焼成
537 備前 (大甕)	(31.4)			頸部はくの字に外反する。 口縁部はやや肥厚する（2.1cm)	体部内面はヘラ削りの後、丁寧なナデ。体部外面はヘラ削りの後。荒い横ナデ。 口縁部の内外両面は非常に丁寧なナデ。	色調は小豆色。

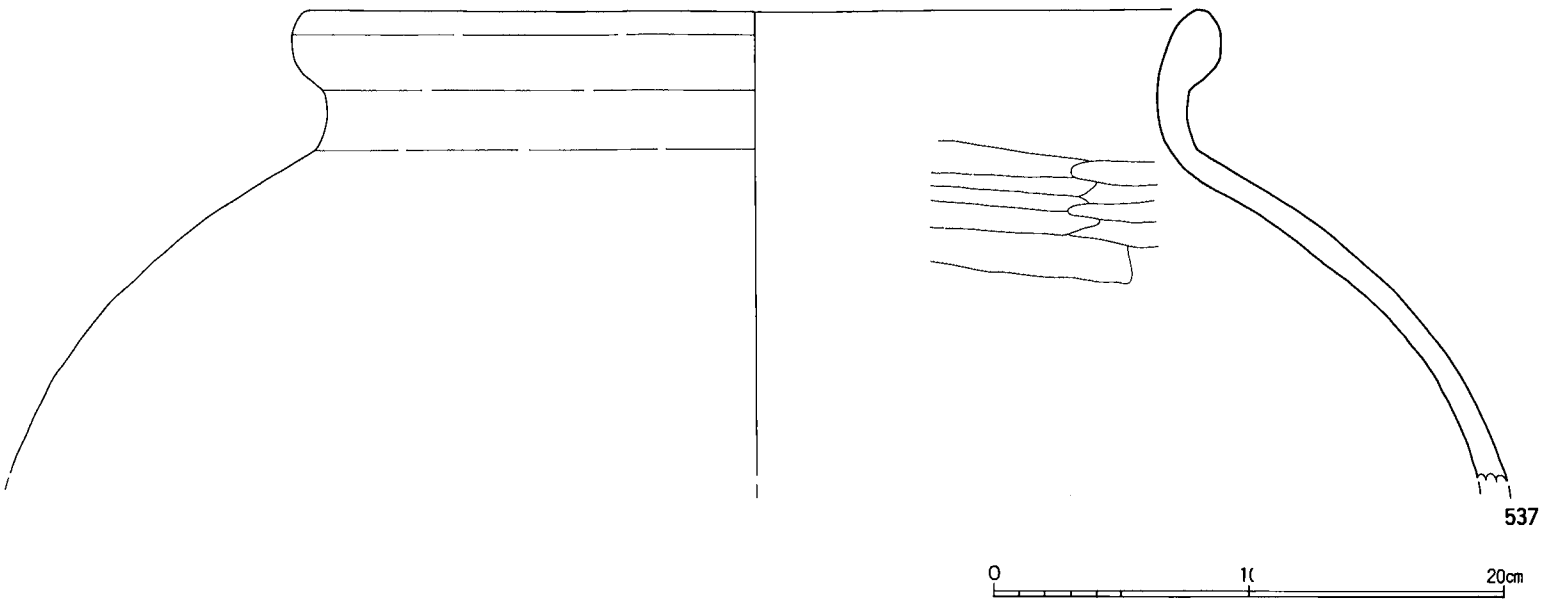
石臼

No.	形態の特徴	No.	形態の特徴
531 石臼	上臼で、上下端部をわずかに欠く。上面の直径は19.4cm(推定)、下面の直径は20.2cm(推定)、高さは5.0cmを測る。 上面の端部はほぼ水平で幅3.1cm（推定）である。供給口の抉りは皆無。下面の「ふくみ」は、やや雑な削りで、高さは0.5cmである。石材は砂岩である。	532 石臼	茶臼の下臼で、受け皿の一部が残っている。復元直径35.4cm、高さ6.3cmを測る。受け皿の上面及び内面には、非常に丁寧な研磨がなされている。特に上面は扁平で、内側にわずかの傾斜を持つ。一方、外線は凸凹の状態である。側面は比較して、やや雑な調整である。下面に荒いノミ痕が残る。石材は砂岩である。

第98表　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ出土遺物の観察表⑩



第120図　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ出土遺物の実測図⑩



第121図　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ出土遺物の実測図⑪

砥石

No.	計測値				形態の特徴
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
533 茶臼	17.83	10.36	3.11	953.68	正面の中央に長軸方向の研磨が見られる。裏面は右肩部の高まりに長軸方向への研ぎが見られる。 固定して使用されたものと思われる。粘板岩。
534 砥石	4.59	4.03	1.70	17.39	正面と右肩部に、良く使い込まれた研ぎ面が見られる。粘板岩。
535 〃	5.42	3.44	1.64	39.47	楕円形状の転び石を輪切りしている。面積の広い部分に中窪みの研ぎ面が見られ、手に持って使用したものと思われる。粘板岩。
536 〃	4.20	5.05	2.47	49.04	正面の中央に斜めの稜線が見られる。直径3cm程の丸い長い物の上に砥石の凹み部分を合わせ、それに沿って磨く事に使用されたものと思われる。 天草産。

第99表　堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ出土遺物の観察表⑪

(11) 表面採集遺物

538～540・544は青磁碗である。538は口径（13.2）cmで、体部外面に弱い稜線があり、器面に使用痕が目立つ。539は口径（15.6）cmで、口縁は肥厚しやや外反する。体部内面に鎬文、外面に花弁文様がある。540はコバルト・ブルーの釉色で、底径（5.6）cmである。見込みに草花文様が描かれている。544は口縁でやや外反する。口径（10.2）cmで、体部外面に稜線が廻る。

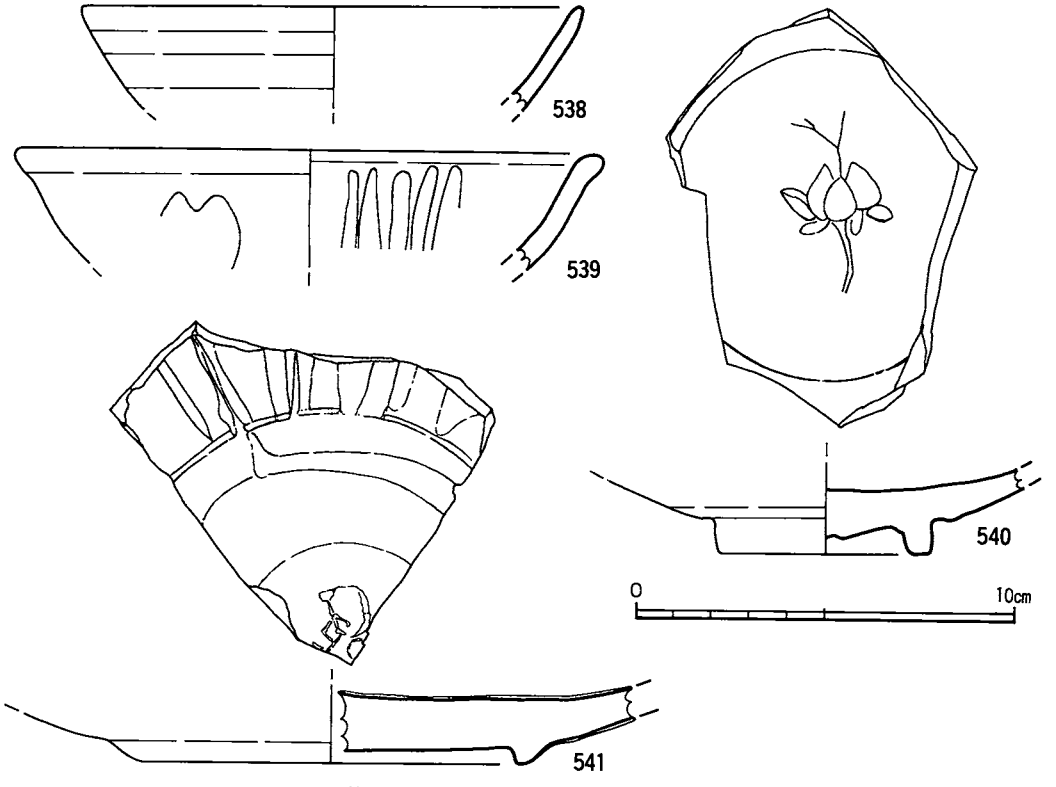
541は青磁の盤である。底径（10.6）cmを測り、高台は斜め内側に付く。体部内面の立ち上がりに鎬文がある。547は元の青磁である。底径（7.5）cmで高台は直立する。

542は和製の天目碗と思われる。口径（11.3）cmで、体部外面の上位に幅7mmの沈線が廻る。器面は荒く、体部内面に縦の亀裂が入り、内外両面に粟粒上の小粒子が付着する。

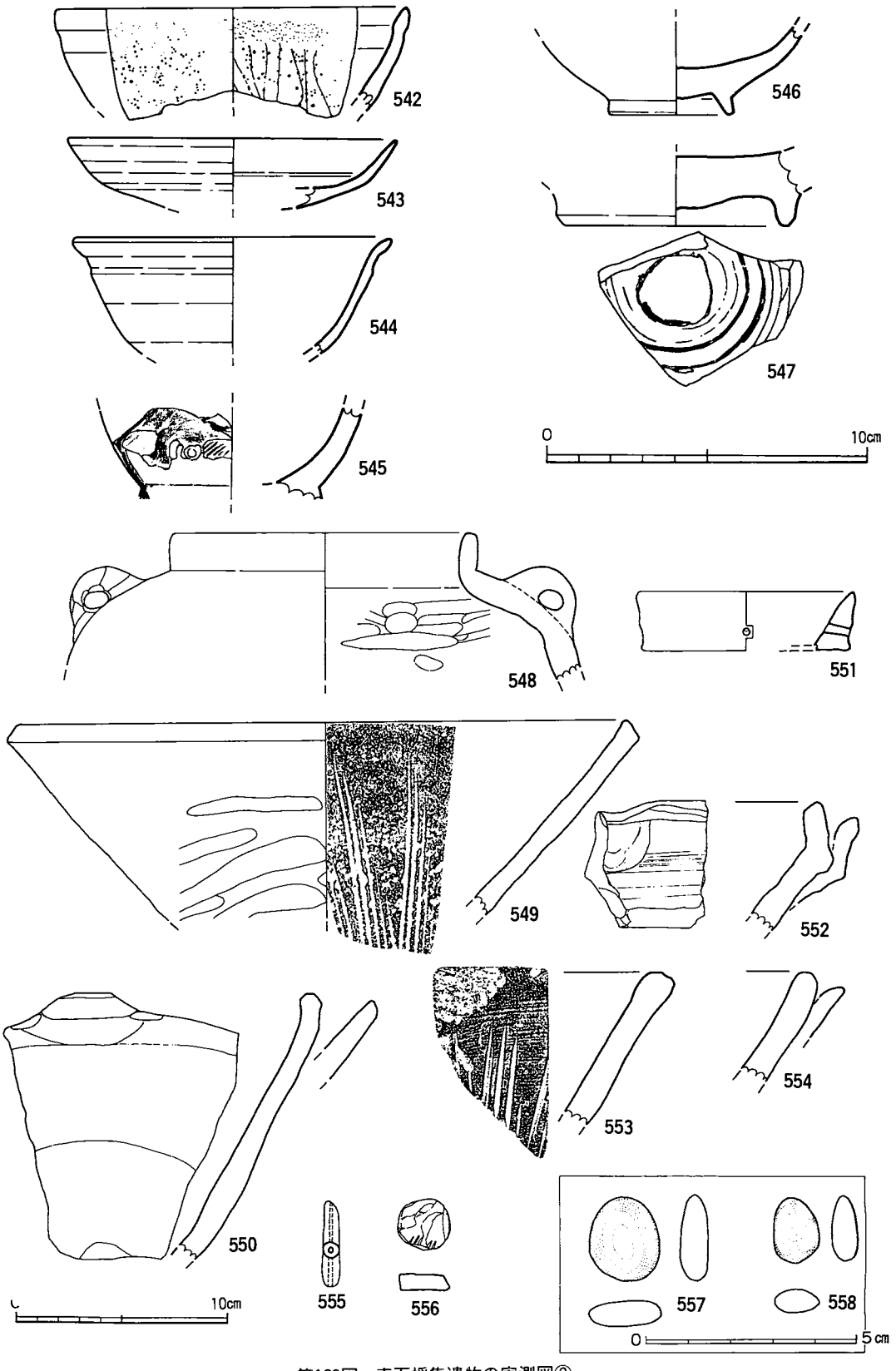
543・546は青白磁碗で口径10.5cmを測る。口縁直口で、体部外面に白っぽい弱い稜線が巡る。546は底径（4.0）cmで高台は外側に張り出す。545は緑釉陶器で、器壁は厚さ7mmで肥厚する。

548は硬質瓦器の茶釜である。口径（14.6）cmを測り、肩部に耳が付く。549・550・553・554は瓦器の擂鉢である。549は口径（30.1）cmを測る。条線の一単位は4本で、緻密な焼成である。体部外面に指頭痕が残る。550・552・554は片口を有する。552は備前の擂鉢である。551は土師系土器で、底径（9.8）cmを測る。体部に孔があり、外底面に櫛目状の圧痕がある。555は土錘である。556は縄文式土器を円盤状に加工したものである。

557・558は頁岩製のおはじきである。いずれも全面研磨されている。



第122図　表面採集遺物の実測図①



第123図　表面採集遺物の実測図②

青磁・白磁・陶器

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
538 青磁碗	(13.2)			体部はやや鈍く立ち上がっており、若干、内弯気味に伸びている。	体部外面に薄い稜線。	胎土は精良な灰白色。釉色は薄緑。非常に磨滅の激しい青磁。
539 〃	(15.6)			体部は鈍く立ち上がり、わずかに内弯する。口縁は肥厚し、やや外反。	体部内面に鎬文。体部外面に花弁文様(花弁は丸味を有する)。	胎土は灰白色。釉色はオリーブ灰色。体部外面はザラザラ。
540 〃		(5.6)		体部は底部から鋭く立ち上がる。底部は肥厚(厚さ1.3㎜)。高台はほとんど直立。高台の上位幅1㎝、畳付きはヘラ削りで幅5㎜(磨滅が目立つ)。高台内の高さは中央部で4㎜、端部で7㎜。	体部内面に界圏。圏内に花文が描かれている。花文は蓮をあしらったものと考えられる。高台と体部外面との境に沈線。	胎土は精良な白灰色。釉色は白青色。
541 青磁(盤)		(10.6)		底部は極めて肥厚(厚さ1.4～1.6㎝)。最大高台内の高さ(4㎜)。端部から中央部にかけて若干、下り気味。高台は斜め内側に付く。体部は底部から極めて鈍く立ち上がる。	体部内面の立ち上がり部分に鎬文の下部が残る。高台畳付きは丸味を帯びて滑らか。体部内面の見込み部分に不整形の文様。	胎土は白灰色。釉色は内面が緑青色、高台内は無釉。外面はオリーブ色。高台内は乳褐色で重ね焼きの痕が残る。
542 天目碗 (和製)	(11.3)			体部は鋭く立ち上がっており、やや内弯気味に伸びている。	体部外面の上位に幅7㎜の沈線	胎土は灰白褐色。釉色は黒色、体部内面に亀裂が入る。体部内外両面に小粒子が付着。
543 青白磁碗	(10.5)			体部は鈍く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。体部は中途でやや腰折れの状態となる。口縁直口。	体部内面の中途に鮮明な、灰オリーブの稜線。体部外面に白っぽい薄い稜線。	胎土は灰白色。釉色は灰白オリーブ色。
544 青磁碗	(10.2)			体部は鋭く立ち上がり、直線的であるが、多少、内弯気味に伸びる。口縁はやや外反。	体部内面は極めて丁寧なナデ。体部外面に稜線。上位の稜線間は多少凹となる。	胎土は灰褐色。釉色は、くすんだ感じの灰色(やや薄褐色を帯びる)。
545 緑釉陶器				体部は底部から鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。器壁は肥厚(厚さ7㎜)。	体部内面は丁寧なナデ。体部外面と底部の境目に鮮明な沈線。	胎土は汚れた感じの褐灰色。浅黄橙色の器面に薄い緑釉がかかる。
546 青白磁碗		(4.0)		体部は鈍く立ち上がり、やや内弯気味に伸びる。高台は外側に張り出す。高台畳付きの幅は2㎜、高台内の高さは中心部で5㎜、端部で7㎜。	体部内面の見込みに突起物。高台の畳付きは無釉。	胎土は精良で灰白色。釉色は明緑灰色(光沢あり)
547 青磁 (元)		(7.5)		底部は肥厚(厚さ1.7㎝)。高台は直立、高台畳付きの幅3㎜。高台内の高さは5㎜、端部は1.0㎝。	外底面のロクロ切り離し部分に楕円形の施釉。高台の内外両面は施釉。畳付き及び中心部を除く外底面は無釉。	胎土は非常に精良で白色。釉色はオリーブ灰色(内底面の釉色はくすんでおり、かなり使い込んだ感じ)。

第100図　表面採集遺物の観察表①

瓦器・硬質瓦器・土師

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)			
548 硬質瓦器 (茶釜)	(14.6)			頸部はくの字に大きく外反。肩部が耳がつく。	頸部の内外両面は丁寧な横ナデ。胴部内面は荒い指押え。胴部外面は指押え後、荒い横ナデ。	色調は鈍い橙色。
549 瓦器 (擂鉢)	(30.1)			体部は鈍く立ち上がり、極めて直線的に伸びる。体部は下位から口縁にかけてわずかに肥厚。口縁上面は扁平な感じとなる。中央部は若干窪む。	体部内面の上位は丁寧な横ナデ。下位は細かな凸凹が器面に広がる。条線の一単位は4本。体部外面は指押え。口縁上面はヘラ削り後、強いナデ。	胎土は精良。色調は灰白色。体部内面の上位は灰黒色。緻密な焼成。
550 瓦器 (擂鉢)				体部は鋭く立ち上がり、わずかに内弯気味に伸びる。口縁の外面はヘラ削り。片口を有する。体部外面の下位はやや膨む。	体部内面は丁寧な横ナデ。体部内面の立ち上がりはヘラ削りでくびれる。体部外面の上位は丁寧なナデ、中途より下位は指押え後で、荒いナデ。体部外面の片口の下に沈線。	色調は明褐灰色(体部外面の下位には黒色の極小斑点が混じる)
551 土師系 (土器)		(9.8)		底部端は極めて肥厚(厚さ1.7cm)。体部は口縁にかけて薄壁となる。口縁直口。体部に孔。体部は底部から鈍く立ち上がる。	体部の内外両面は丁寧なナデ。外底面に櫛目状の圧痕。	色調は淡桃色。緻密な焼成。
552 備前 (擂鉢)				体部は鋭く立ち上がっており、直線的に伸びている。口縁は直口で、端部内側はやや斜めに切れる。片口を有する。	体部の内外両面は横ナデ。	二次焼成で灰色。
553 瓦器 (擂鉢)				口縁部はやや肥厚(厚さ1.6cm)。	体部内面はナデ、条線の一単位は不明。体部外面は指押え。	色調は灰黒色。体部内面は灰褐色。
554 〃				体部は鈍く立ち上がっている。片口を有する。	体部の内外両面は丁寧な横ナデ、条線は4本が観察できる。	色調は淡黄色。条線は磨滅。
555 土錘						
556	直径2.5cm			縄文土器を円盤状に加工。		

第101図　表面採集遺物の観察表②

第Ⅴ章　路線外の城域および周辺の調査

第１節　路線外の城域について

（1）Ⅰ　郭

「本城（ほんじょう）」と称され、城跡の中心地と考えられる。面積はⅡ郭に次ぐ大きさで、三角形の形状を呈する。主軸は南北方向にあり、長さ36ｍを測る。南辺の東西幅は38ｍであるが、南辺は東端で約１～２ｍの段落ちとなって、約15ｍ程東へ延びている。同じく南辺の南側も約１ｍの段落ちで、幅５ｍ程の帯曲輪状の地形となる。一方、北辺から東辺にかけては、幅2.5ｍ～３ｍ、高さ１～２ｍの土塁が残っている。土塁は北辺で顕著に残る。Ⅰ郭には「金の鶏が埋めてある」と伝えられる。

Ⅰ郭の西側と北側の裾部

Ⅰ郭より約６ｍの段差で、幅４～８ｍ、長さ50ｍのやや不整形な帯曲輪状の地形が南北方向に走行する。なお、この帯曲輪状の北端は北西方向へ細長く延びる裾部となるため、これを断ち切る意味での二条の堀切が刻まれている。特に内側の堀切の土塁については、高さ１ｍ程の小山として残存する。他方、Ⅰ郭の北側裾部にも約４ｍの段差で、幅８ｍ、長さ28ｍの帯曲輪状の地形が残る。

北北東側裾部の小山

Ⅰ郭と裾部続きの鞍部を堀切で仕切られた高さ６ｍ程の小山があり、上面は削平されて3.5ｍ×７ｍの小平場となっている。また、Ⅰ郭からは鬼門の方角になり、戦神あたりが祀られていたとも考えられる。特異な遺構である。

Ⅰ郭裾部の空堀と堀切

Ⅰ郭の南側裾部の約６ｍ下に、長さ約70ｍ程の空堀が残っている。空堀の下場幅は約５ｍであるが、南辺はすべて後世に削除されて、立ち上がりの堀壁は残っていない。この堀切は東端で⌟型に折れ曲がり、Ⅰ郭とⅦ郭を仕切る堀切となる。堀切は長さ15ｍ幅である。

Ⅰ郭東側の大土塁

Ⅰ郭とⅦ郭を仕切る堀切に関連して、Ⅶ郭側に「型の大土塁が残っている。堀切の下場からの比高は２ｍで、南北の長さ55ｍ、上面幅６～７ｍを測る。一方、北辺は、やや上面幅を増し、最大幅15ｍを測る。東西の長さは33ｍである。なお、北辺部の北東側に「薬師堂跡」と称される高台がある。土塁よりの比高は３ｍで、南北27ｍ、東西17ｍの大きさであるが、上面はやや不整形で、礎石や墓石の類は残っていない。

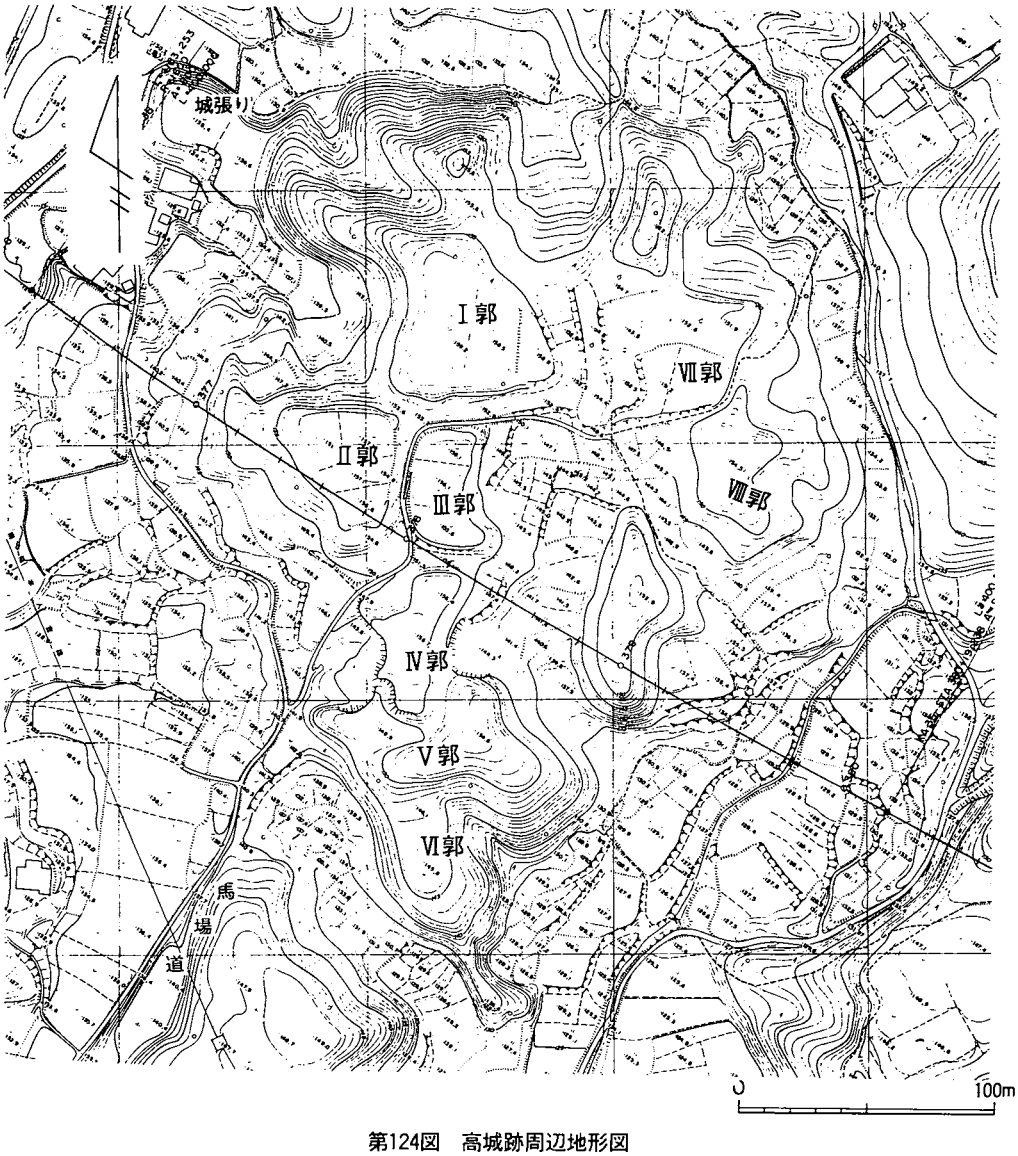
（2）Ⅶ　郭

「しんぱじょう」と呼ばれる区域である。計３つの小区画から構成されており、土塁側の西側区画が標高153ｍで最も高く、これより東側区画、南側区画へと順に低くなる。Ⅶ郭の全体規模は東西50ｍ、南北45ｍである。

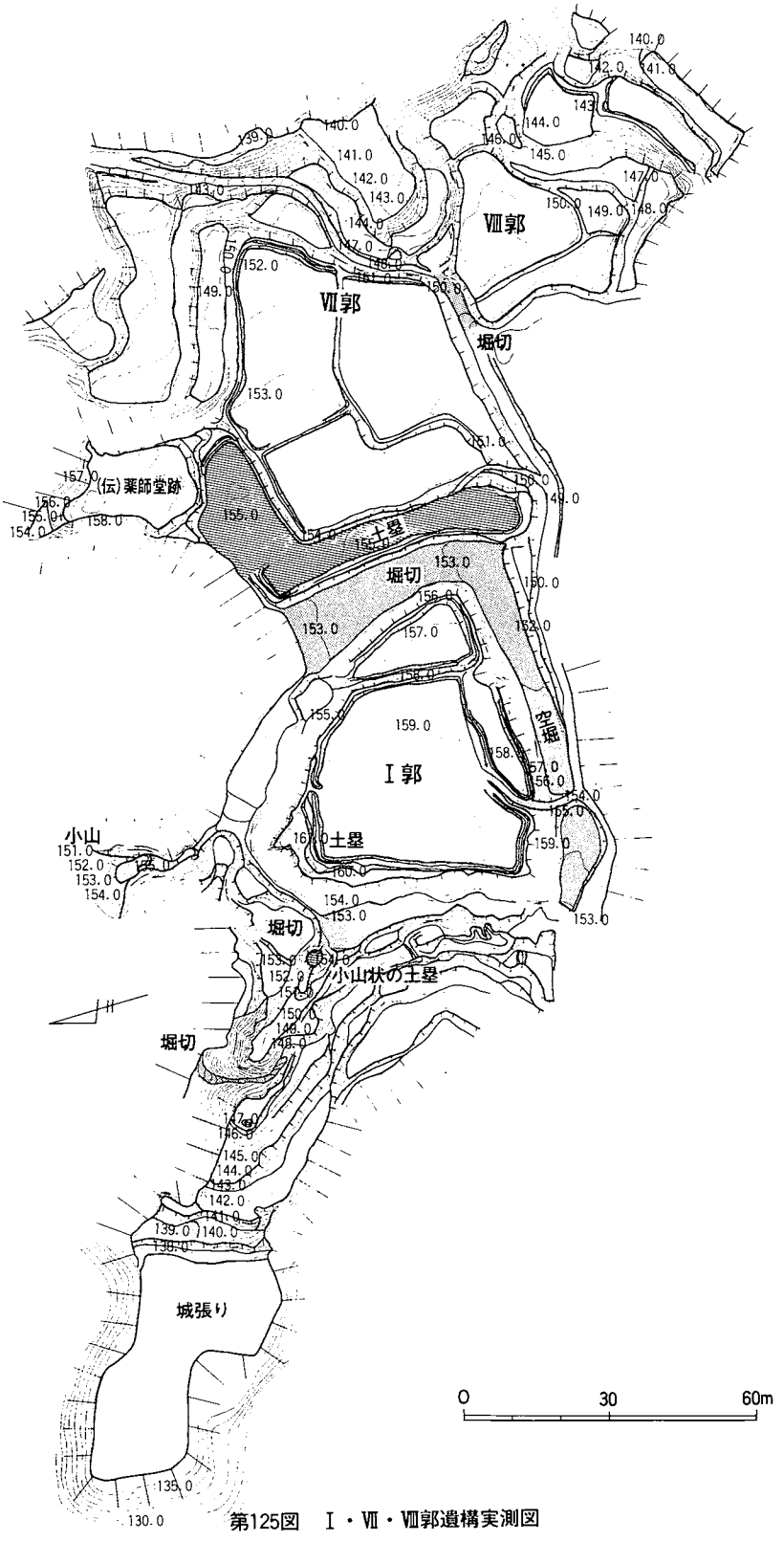
（3）Ⅷ　郭

Ⅶ郭の南東側に、上場幅３ｍの堀切を挟んであり、標高151ｍである。東端に頂点を有する三角形の形状で、南北の長さ27ｍ、東西の長さ25ｍを測る。南東側から南西側の裾部にかけて帯曲輪状の地形が残っている。

なお、Ⅰ郭の北西側には、比較的距離を有するが、「城張（じょうば）り」と称せられる区画がある。



第124図　高城跡周辺地形図



第125図　Ⅰ・Ⅶ・Ⅷ郭遺構実測図

（4）Ⅴ　郭

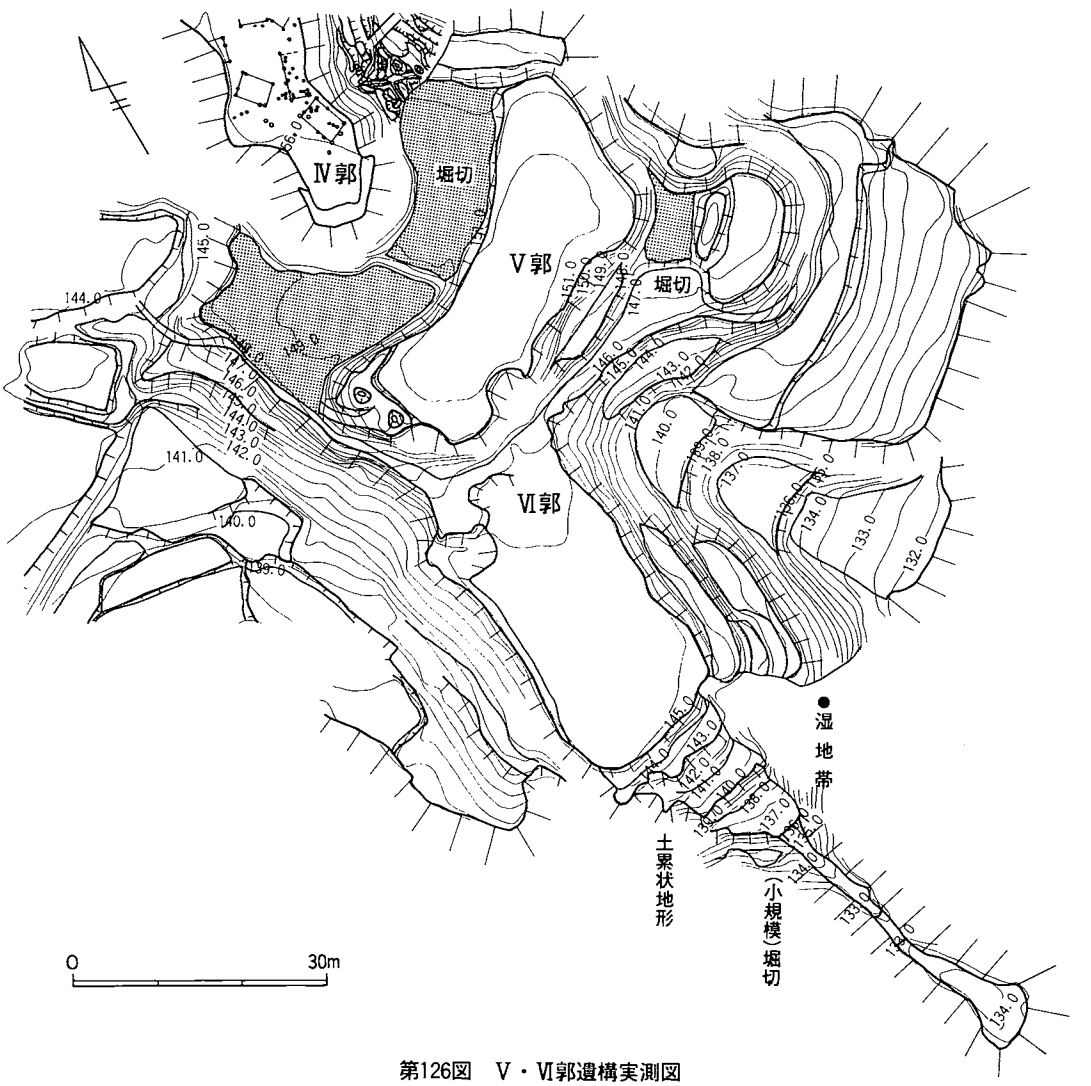
Ⅳ郭の南側に堀切を挟んでⅤ郭があり、南北幅９～17ｍ、東西の長さ42ｍを測る。標高152ｍでⅣ郭との比高は４ｍである。

（Ⅳ～Ⅴ郭間の堀切）

東西の長さは40ｍであるが、東側から西側中央部までの長さ22ｍ分が顕著に残る。下場幅８～11ｍで、中央部より西側は２ｍの段落ちとなる。堀底の形態は不整形である。

（5）Ⅵ　郭

南北方向に主軸を有する長方形の区画で、長さ37ｍ、東西幅17ｍを測る。標高146ｍでⅤ郭との比高は６ｍである。一方、郭の南端裾部は三段の階段状地形となり、さらにその下部は、削り落としで馬の背の様になった土塁状の地形が見られる。なお、階段状地形の東側裾部は城域における唯一の湿地帯である。



第126図　Ⅴ・Ⅵ郭遺構実測図

第2節　高城跡周辺の集落と寺社堂宇

中世城跡を考える上で、所領支配の点から周辺の寺社堂宇の調査は極めて重要といえる。そこで高城跡の場合、城跡隣接地の合戦峯・長ケ峯・秋丸・堂園・手石方地区の悉皆調査を実施した。調査に際しては、現在廃絶している寺社堂宇も含め、地名（小名など）の採集、民間伝承・信仰についても聞き取りを行った。

（1）合戦峯（かしのみね）

人吉市と球磨郡山江村の行政境に位置する集落である。村名の初見は『南藤蔓綿録』の中にあり、文禄元年（1592）三月十六日に人吉城主相良長毎が朝鮮出兵のため出陣し、伴した人足に「カシノ峯」とある。さらに同書の慶長十四年（1609）八月廿四日に「加志峯ノ蓮乗寺」という記述がある。

江戸時代に入ってからは、人吉の大信寺末庵であった大村の妙蓮庵本尊を「山田・勝峰庵」に移したと『大信寺宝鑑』にあり、宝暦十～十三年（1760～63）の『門中堂社代々先師書』には「勝之峯観音堂」と見える。

現在の合戦峯という村名は、明治八年（1875）五月の『山田村地誌』に「合戦之峯観音堂」と記載がある。

集落は、「天子」と称される所を中心に、道が四方に通じ、上村・下村に分かれている。さらに、天子から高城跡へ向けて「馬場道」と言われる登城道が長ケ峯・堂園へ通じている。民家は字合戦峯・字城・字城下に集中し、畑は丘陵地内の高城跡周辺と字藤ノ迫にある。水田は字藤ノ迫の裾部に於ける迫田や、山田川の氾濫原とその後背湿地帯の字樋掛・字上永田井手・字下永田井手辺りにある。

また、天子・星ケ峯・火葬場・耳取・馬場道・小陣ケ迫・急ケ首・犬馬場ケ迫・衆議山・薬師堂の小名が残る。

（2）蓮乗寺跡（字合戦峯）（れんじょうじ）

寺跡には観音堂が現存する。『南藤蔓綿録』の中に、「慶長十四年八月廿四日、加志峯ノ蓮乗寺住持朴盛生害、一家ノ西因坊・同久助両人ニテ殺也、亭主方ノ地蔵是也」とある。

『大信寺宝鑑』によれば、廃寺後、人吉・大信寺の末庵として「勝峯庵」が開基されたが、数年で禿庵となっている。その後、山田・高寺院支配の観音堂となり、『門中堂社代々先師書』に「勝ノ峯観音堂　所修理、本尊聖観音　脇士毘沙門　地蔵」との記載がある。本尊の聖観音菩薩立像は南北朝末期から室町にかけての造像で、同じく脇士の地蔵菩薩立像と共に現存する。もう一躰の毘沙門天は、所在不明である。

現在、観音堂の正面に掛かる鰐口には「阿彌陀如来御宝前奉施入之　干時三庚亥八月廿四日願主沙門礼忠」との銘文があるが、おそらく他から持ち込まれたものであろう。境内には蓮乗

寺に関係あると思われる数十基の五輪塔と無縫塔の残欠があり、その中で「天文三甲午天八月六日　重尭逆修」「永禄四辛酉天四月日　妙金大和尚」「永禄五壬戌天三月□日　桃山道仙」「天正四丙子天十月　日　善功上座」の四基のみ銘文が判読できる。

（3）薬師堂跡（字本城）

高城跡のⅠ郭北東側にあり、「薬師堂跡」と伝えている。丘陵地内の微高地であるが、堂跡には礎石や墓碑の類はない。

（4）長ケ峯

高城跡に最も隣接する村である。『山田村地誌』に「長ケ峯　阿彌陀堂」と見えるのが村名の初見である。しかし、集落内にある「長ノ下」の字名は、文化七年～十年（1810～13）『山田村明細帳』の中で頻繁に出てくる。

集落は、背後に高城跡の丘陵を控えており、限定された場所に民家が集中している。山水が湧水となって出ており、谷を利用した迫田が目立つ。畑は集落周辺と城・本城にあり、水田は長ノ下や字桑原田辺りにある。また、城戸口・留坂・城張・首取り山などの小名が残る。

（5）秋　丸

『山田村地誌』の中に「秋丸地蔵堂」と見えるのが村名の初見である。字堂園に民家が集中し、水田は字秋ノ下・桑原田辺りで、畑は民家周辺にある。古老は、現在の堂園集落を上村、秋丸集落を下村と言っている。

（6）増大寺跡

秋丸集落の前田　任氏宅辺りに、堂園・伽藍・寺山と言う小名が残り、地元では「増大寺跡」と伝えている。寺跡には伽藍堂が現存する。県道から集落へ登る山道の右側には、六地蔵と五輪塔群がある。

増大寺については、『南藤蔓綿録』に「(応永廿七年）七月十二日山田八代祖永留治部少輔実重卒去、山田堂園増大寺御碑所也、此所今白山権現ハ右寺ノ鎮守也」と記されている。増大寺の仏像は、堂園集落の稲留　覚氏宅前の地蔵堂に現存している。この事は、堂内に残る棟札からわかる。仏像は地蔵菩薩立像で、室町末期の作である。伽藍堂と増大寺との関係は不明であるが、村人は「御獄さん」と言い、一抱えあるような石が十一個祀られている。

道端にある六地蔵と五輪塔群の銘文は、磨滅がひどく判読できない。

（7）堂　園

『南藤蔓綿録』や元禄十二年（1699）の『麻郡神社私考』に「白山権現　山田堂園白山王」と見える。『山田村地誌』は「堂園　観音堂」と記している。現在の堂園集落は、字堂園・字西章鹿倉・字東章鹿倉に民家が集中し、畑は集落周辺の字南永シ切で、水田は県道端の字秋ノ下・字中鶴にある。

（8）白山権現（字堂園）

堂園集落の裏山に神社がある。前述の増大寺の鎮守で、『麻郡神社私考』によると「白山権現　山田堂園白山王、祭十一月十三日、祠官尾方舎人、鎮座神三座春日・白山・清龍、社家ノ傳ニ曰ク大家連枝山田地頭草創、勧請年紀未考、古老ノ傳ニ日ク昔日山田地頭之祈願所増大寺ノ鎮守也」と記されている。稲留　覚氏宅前の地蔵堂に安置されている男女神立像は、元来、白山権現の御神体で、室町末期の作である。

（9）手石方（ていしかた）

村の初見は、明治十年（1877）頃に作成された『山田村字界図』で、字名として登場する。民家は章鹿倉に集中し、畑は集落周辺にある。水田は東浦川が流路を変える氾濫原で、後背湿地帯の字杢町・字中鶴辺りにある。

第3節　集落の伝承と民間信仰について

（1）合戦峯の天子祭り

合戦峯集落の中心に高台があり、タブの大木が一本ある。これを村人は「天子さん」と伝え、御神木として祀っている。現在、12月21日に集落の20戸が“座”方に集まり、大しめ縄・御弊・竹製の供物台などを作る。御神木に大しめ縄を七周り半巻き、清めた後、赤飯を供えて御参りする。御参りの後は、“座”方に寄り合い「天子講」が行われる。

球磨郡内には「天子」「天下」と言う地名が数ケ所に残っており、いずれも景行天皇の熊襲征伐時の休憩所と言い伝えている。

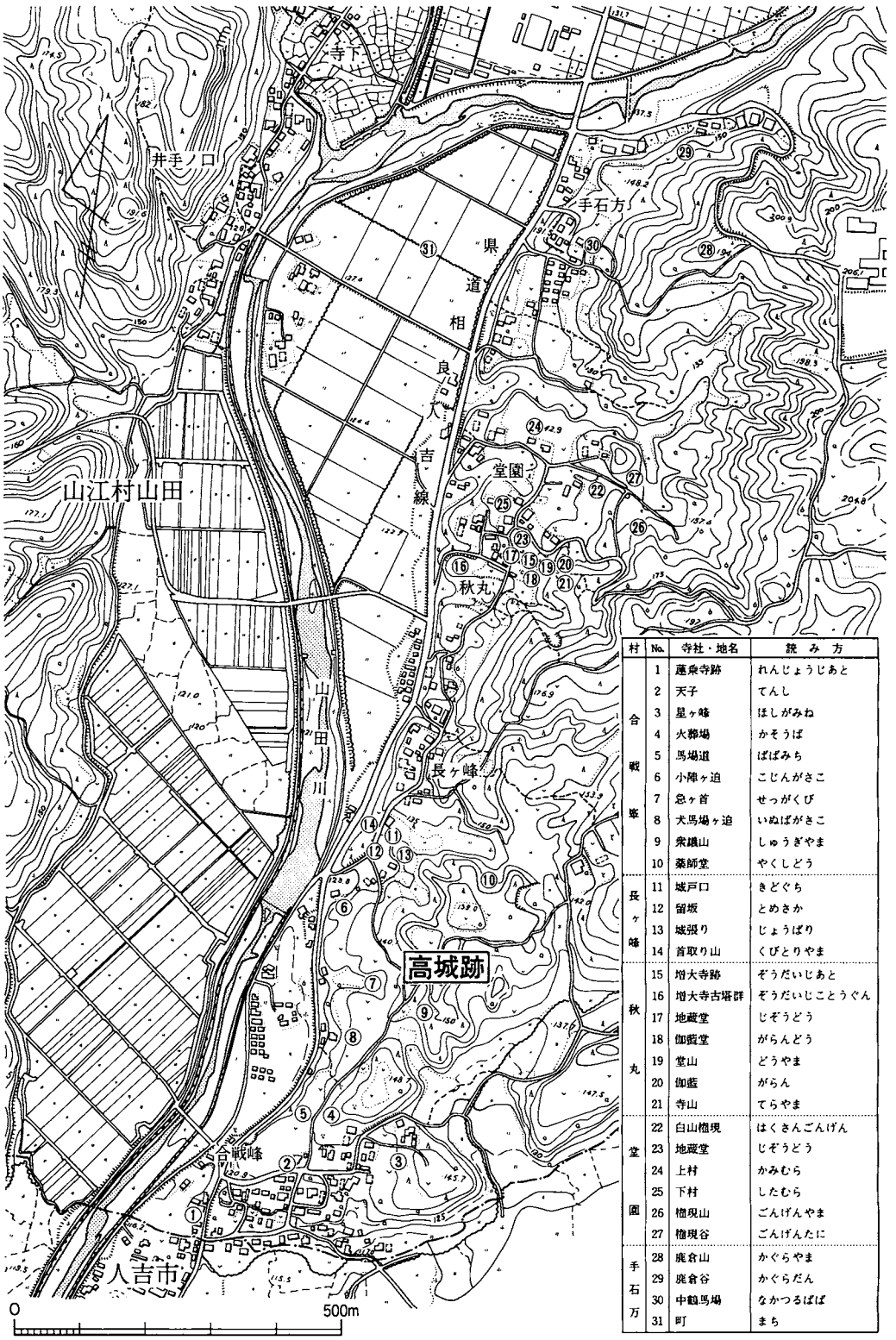
（2）城の火葬場跡

合戦峯集落から高城跡へ向かう馬場道の東側に墓地があり、その周辺を「火葬場」と伝えている。昭和62年度に熊本県教育委員会が隣接地を発掘調査した際、中世の墓坑が検出され、人骨・古銭（永楽銭）・土師器皿（有孔）が出土した。墓地では溝の中に墓碑が建てられている。

（3）高城跡の衆議山（しゅうぎやま）

高城跡内にある19人共有の山（Ⅳ郭）を「衆議山」と伝えている。共有者を「衆」と呼び、寄り合うことを「衆議」と言っている。「祝儀山」と言う人もいる。

参考文献：梅山無一軒著『南藤蔓綿録』　1978年　熊本　青潮社覆刻
大信寺所蔵『大信寺宝鑑』
宥運編「門中代々先師書」1970年　『水上村史』所収
笹淵　格氏所蔵『山田村明細帳』
青井釆女佐惟薫著『麻郡神社私考』　1690年に『球磨郡神社記』に改題　覆刻
求麻郡地誌調掛編『山田村地誌』　1977年に『肥後国求麻郡村地誌』に改題　覆刻
平田　寛編『九州の中世美術—熊本・球磨地方美術調査概報—』1982年九州大学刊



村	No.	寺社・地名	読み方
合戦峰	1	蓮乗寺跡	れんじょうじあと
	2	天子	てんし
	3	星ヶ峰	ほしがみね
	4	火葬場	かそうば
	5	馬場道	ばばみち
	6	小陣ヶ迫	こじんがさこ
	7	急ヶ首	せっがくび
	8	犬馬場ヶ迫	いぬばがさこ
	9	衆議山	しゅうぎやま
	10	薬師堂	やくしどう
長ヶ峰	11	城戸口	きどぐち
	12	留坂	とめさか
	13	城張り	じょうばり
	14	首取り山	くびとりやま
秋丸	15	増大寺跡	ぞうだいじあと
	16	増大寺古塔群	ぞうだいじことうぐん
	17	地蔵堂	じぞうどう
	18	伽藍堂	がらんどう
	19	堂山	どうやま
	20	伽藍	がらん
	21	寺山	てらやま
堂園	22	白山権現	はくさんごんげん
	23	地蔵堂	じぞうどう
	24	上村	かみむら
	25	下村	したむら
	26	権現山	ごんげんやま
	27	権現谷	ごんげんたに
手石方	28	鹿倉山	かぐらやま
	29	鹿倉谷	かぐらだん
	30	中鶴馬場	なかつるばば
	31	町	まち

第127図　高城跡周辺の集落と寺社堂宇・地名分布図

年　号	西暦	事　　項	出典
建久２年	1191	高寺院の弘法大師版木	銘文
建久２年	1191	５月日、平川三郎師高相伝所領を嫡子師貞等に「永吉庄之内山田之村田地四十町一反、百十石五十貫」譲ると見ゆ。	平川
鎌倉末期		永吉庄半分百七十五町五百石三百貫、大宰少弐頼尚領で請所代官は平川左近充。	相良
建武５年	1338	相良兵庫充定頼、小勢なりとも兵を二手に分け、親類若党をもって山田城に楯籠り防戦。	相良
興国元年	1340	大宰少弐頼尚領永吉庄内山田城（頼尚代楯籠）を南朝方相良縫殿充祐長追落し、８月10日まで楯籠る。	相良
暦応３年	1340	６月24日、一色範氏は南朝方相良縫殿充祐長・多良木三郎経頼以下凶徒が永吉庄山田城に楯籠っているので、相良六郎二郎長氏・相良孫次郎定長をして討たしむ。	相良
暦応３年	1340	８月10日、大宰少弐頼尚の甥筑後彦次郎経尚以下、相良孫次郎定長・相良八郎景宗・税所宗円等の軍勢と共に山田城に押し寄せ合戦。	相良
暦応３年	1340	８月19日、夜南朝方凶徒を追落す。	相良
暦応３年	1340	８月20日、（山田城周辺で）散々合戦、山田城落城。相良縫殿充祐長方、親類若党など討死、疵を負い、また兵糧難儀のため山田城を引退し、多良木三郎経頼一所の城に楯籠る。	相良
正平23年	1368	８月５日、相良近江守前頼・弟氏頼と共に庶子永富殿へ二ケ条の契状を出す。	相良
正平23年	1368	山田里・大王神社神殿裏に「一結所衆」碑造立。	銘文
応永11年	1404	２月22日、山田里・大王神社新殿遷座。	私考
応永15年	1408	山田里・高寺院毘沙門堂再興。８月９日入仏。	南藤
応永18年	1411	永富藤五郎長重山田城に御誕生。（後の相良左近将監長続）。	南藤
応永27年	1420	７月12日、山田城主永富治部少輔実重卒去。山田堂園・増大寺御牌所也。	南藤
応永元年	1394	地頭・秋山常陸ら山田小山田・大王神社改造。	私考
～34年	1427		
永享５年	1433	山田里・高寺院の中興開山快親入寂。	銘文
永享元年	1429	山田三園天神山・天満天神再興。	私考
～12年	1440		
嘉吉３年	1443	８月24日、沙門礼忠願主として阿弥陀堂に鰐口を寄進。（合戦峰観音堂に現存）	銘文
文安２年	1445	山田里・高寺院２世快秀入寂。	銘文
文安４年	1447	永富四郎三郎頼元山田城に御誕生。（後の相良左衛門尉為続）。	南藤
文安５年	1448	球磨郡内乱、上・下相良氏滅亡。永富（後に相良）藤五郎長重が統一、人吉城入城。	南藤
長禄２年	1458	山田左右村・山王権現再興。別当は長円寺。	私考
長禄４年	1460	11月10日、下相良氏の尭頼御牌所として相良少福殿（永富壱岐守頼澄）を大檀那として人吉佐牟田・了法禅院を建立。	銘文
文正２年	1467	４月21日、山田里・高寺院正秀禅尼卒去。	銘文
応仁３年	1469	９月６日、山田太山酒掃を大檀那とし、高寺院住持成辨ら十一面観音立像を造立。	銘文
文明２年	1470	８月10日、山田里・高寺院加尊大和尚入寂。	銘文
文明６年	1474	山田石原・諏訪大明神草創あるいは再興。	私考
文明８年	1476	12月18日、山田里・高寺院三世乃弘入寂。	銘文
永正元年	1504	山田里・高寺院四世成辨入寂。	銘文
大永７年	1527	山田里・高寺院五世弘辨入寂。	銘文
天文３年	1534	８月６日、山田加志峯・蓮乗寺重尭、逆修五輪塔造立。	銘文
天文６年	1537	山田下城子・瑞光寺茂山永昌入寂。	銘文
天文９年	1540	永富出羽（守長名）ら山田萩山・萩大明神を改造。	私考
天文12年	1543	８月15日、藤島・高橋、鬼塚氏ら山田下城子・瑞光寺に鰐口を寄進。	銘文
天文15年	1546	球磨三奉行の一人、東弾正忠長兄ら山田里・大王神社を修造。	私考
天文16年	1547	正月20日、真誉献灯願文に「高寺院三千灯」と見ゆ。	文書
天文元年	1534	山田里・大王神社の東脇に、今宮神社を修造。	私考
～23年	1554		
弘治２年	1556	山田石原・諏訪大明神修造。	私考
弘治３年	1557	３月、山田里・高寺院六世成堅入寂。	銘文
永禄４年	1561	４月、山田加志峯・蓮乗寺妙金大和尚入寂。	銘文
永禄５年	1562	３月、山田加志峯・蓮乗寺桃山道仙入寂。	銘文
元亀元年	1570	山田里・高寺院７世教堅入寂。	銘文
天正３年	1575	山田加志峯・蓮乗寺妙祐大姉卒去。	銘文
天正４年	1576	10月、山田加志峯・蓮乗寺善功上座卒去。	銘文
天正８年	1580	球磨三奉行の一人、深水三河守長智・長豊ら山田里・大王神社を再興。	私考
天正11年	1583	山田下城子・瑞光寺中興石窓元金和尚入寂。	銘文
天正14年	1586	10月、願成寺伝法灌頂衆請定に「高寺院」と見ゆ。	文書
天正16年	1588	山田別府・祇園神像二軀造立。	銘文
天正18年	1590	８月21日、深水三河守長智入道宗芳59歳にて卒去。	銘文
文禄元年	1592	人吉城主相良長毎は朝鮮出兵のため出陣、伴した人足に「カシノ峰」と見ゆ。	南藤
文禄２年	1593	球磨三奉行の一人、地頭深水左馬助頼蔵ら山田石原・諏訪大明神拝殿を造営。	私考
慶長元年	1596	地頭深水左馬助頼蔵、人吉城主相良長毎に反し佐敷に逐電。	南藤
慶長14年	1608	８月24日、山田加志峯・蓮乗寺住持朴盛生害。	南藤

（註）平川：平川文書、相良：相良家文書、私考：麻郡神社私考
南藤：南藤蔓綿録、文書：願成寺文書、銘文：現地調査

第102表　中世の山田村と高城関係小年表（鎌倉～安土桃山時代まで）

第Ⅵ章　総　　括

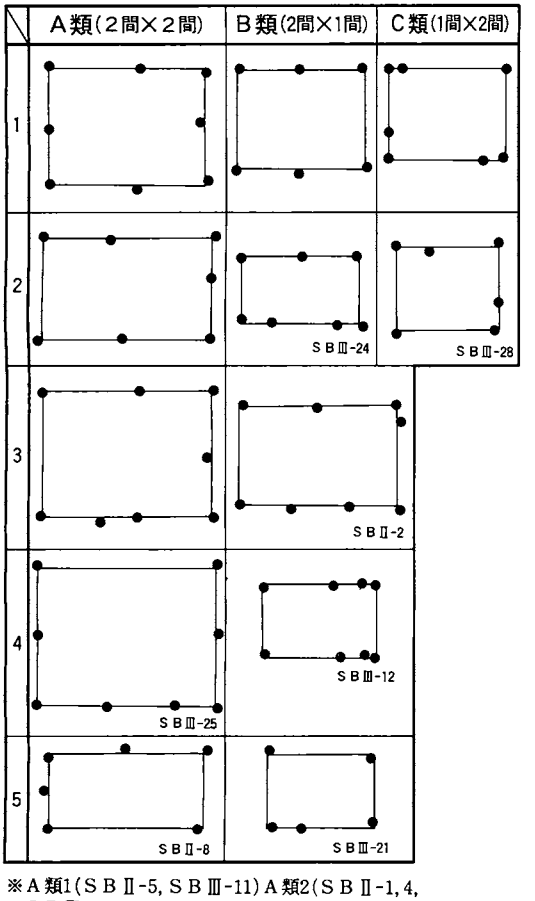
（1）まとめ

遺構の検出面は、Ⅲ郭の平場において一部がアカホヤであった他は、ほとんど地山のシラスであり、中世の遺物包含層を含めた上位の土層は、すべて攪乱の状態にあった。調査前の攪乱層は、郭の平場で厚さ0.5ｍを測り、調査区は、今日、全面が畑地となっていた。

〔1〕建築址

柱穴の埋土は大半が褐灰色土で、地山のシラスが白色と肌色であった所から、柱穴と埋土の区別は明確であり、柱穴の検出は極めて容易であった。

Ⅱ～Ⅳ郭から検出された建築址は総計38棟で、内訳はⅡ郭から10棟、Ⅲ郭から18棟、Ⅳ郭から10棟であった。この内、数棟は重なり合った状態で検出されたが、柱穴の出土遺物や桁行の方向からは、建築址の前後関係を明らかにする事はできなかった。

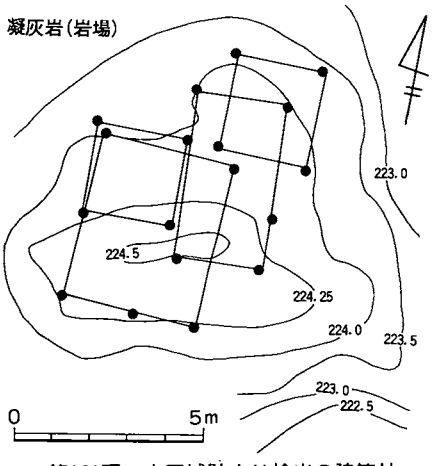


※A類1(SBⅡ-5, SBⅢ-11)A類2(SBⅡ-1, 4, SBⅢ-13, 15, 18, 20, 22, SBⅣ-33, 34) A類3(SBⅢ-26, SBⅣ-31, 32, 36), B類1(SBⅡ-3, 6, 7, 9, 10, SBⅢ-14, 16, 17, 19, 23, SBⅣ-29) C類1(SBⅢ-27, SBⅣ-35)

第103表　建築址の平面プラン分類表

概して、建築址は小規模で、最大6.0ｍ×4.5ｍ、最小3.0ｍ×2.4ｍであった。さらに、柱穴の並びも千鳥のものが多く、向かい合う桁行や梁行妻で柱穴が対比しない定形外のものが数多くあった。このような建築址のプランは、他の報告書にほとんど類例を見ない所から、調査時の現場における定形外建築址のプラン復元は、そのままを参考資料として、記録に留めた。その後、昭和60～61年度の山田城跡（大王谷箇所）調査で、凝灰岩の岩盤を切り込む端的な定形外の建築址プランが多数検出され、高城跡における定形外建築址復元の裏付け資料となった。（第128図）山田城跡の場合は岩盤を掘り窪めた確たる建築址で、プランの復元が極めて限定されるからである。

高城跡から検出された建築址を山田城跡の調査結果に基づいて熟考すれば、２間×２間のものが20棟で、１間×２間（２間×



第128図　山田城跡より検出の建築址

1間）のものが15棟であったが、前述のように、小型のものが多く、桁行や梁行妻の中央柱が不明であったり、中央柱が2つに分かれたり、補助柱が付く場合があった。第103表は建築址の平面プランの分類であるが、大きくA・B・Cに大別され、これがさらに、中央柱・補助柱の有無で2種類から5種類まで細分可能である。

建築址のプラン復元を見るに、非常に臨時的な性格が強く、建築址の重なり合いの割に、柱穴同士の切り合いが少ない所から、比較的短期間の内に次々と簡易的な建物が建て替えられていったものと思われる。建築址の性格は不明であるが、出土遺物は多種多様で、城内である程度の生活が営まれていた事は確実である。恐らく簡易的な兵舎や小規模の武器庫あたりであったものと思われる。

〔2〕堀切・空堀・蛸壺状土坑などの遺構について

遺構は、すべてシラスを深く切り込んでおり、堀底や堀壁は、雨水の浸食作用で、大小の凹凸が目立った。さらに堀底には、雨水の流れる深さ0.5～1.0m程の水路が、自然作用で柱穴状に浸食されていたが、考えるに、シラス堀切の維持のためには、この水抜きの水路が是非とも必要で、その為に、あえて侵食に任せて放置されていたとも考えられる。発掘調査時における降雨時のシラス崩壊は著しいものがあり、特に梅雨時には一夜の大雨に大打撃を受けた。従って、城の存続時における防御施設の維持・管理には、かなりの困難が伴ったものと思われる。しかし降雨時の被害は、Ⅱ～Ⅳ郭の上面土層をカットされたシラスの平場に大きく、堀切や空堀のようにシラスが深く掘り下げられた部分は、さ程ではなかった。このことは、例え堀壁がシラスであっても、壁を急峻に切り立て、シラス面を筵等で覆い、なおかつ、水抜きの水路があるならば、ある程度の期間は、水による浸食作用から逃れられたのではないかと思われる。

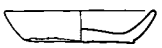
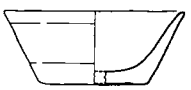
空堀に関連して、Ⅱ郭西側とⅣ郭東側裾部の遺構は特異で、深さ1.0m、上場幅2.0～3.0m・下場幅0.7～1.0mで、検出部分の長さは27.5～30.0mであった。肩部には土塁の存在が考えられる。いずれも、丘陵裾部の中途を稜線に沿う格好で、細長く掘り込んでおり、あたかも散兵線の残壕の様相を呈する。単なる空堀の類では無い事は確かである。

一方で、Ⅳ郭の北側斜面から検出された蛸壺状の土坑は、縁に土塁状の高まりを有するものが全体の半数を占めており、これまた、戦闘的な施設と考える以外に、用途を見い出せない遺構である。結果的にⅣ郭の建築址と北側斜面部分を壊して掘り込まれており、高城跡の終末期における遺構と考えられる。

〔3〕出土遺物について

1．土師器

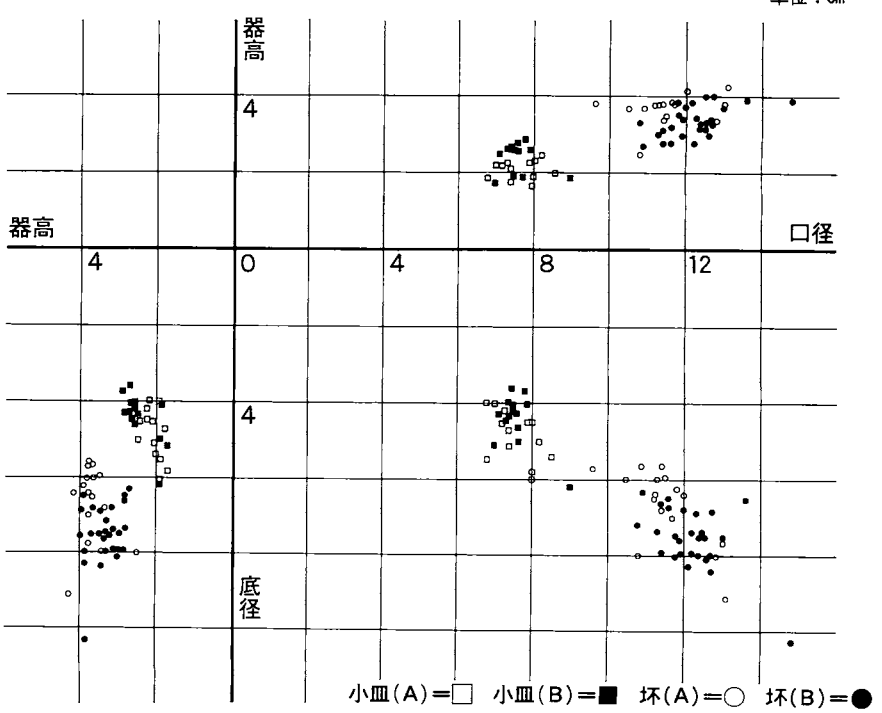
堀切Ⅰ－Ｃを中心に、Ⅲ郭や堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃから多量に出土したが、Ⅱ郭からの出土は皆無であった。ここでは、小皿と坏を形態的な特徴から、船型のもの（Ａ）とラッパ状型のもの（Ｂ）とに大別した。土師器の分類は下表の通りである。

形態分類	実　測　図	実測図番号
小皿（Ａ）		1・3・6・75・77・236・237・239・325 385・386・426・428
小皿（Ｂ）		70・230・231・233・235・240・241・242 327・328・425・427・429・430
坏　（Ａ）		78・79・80・81・85・90・183・184・243・246 247・248・250・256・389：390・391
坏　（Ｂ）		5・86・88・92・94・95・182・185・260・262・263 267・268・269・270・271・331・332・333・336 431・433・434・435・436・437・439・440

第104表　土師器分類表

この中で、Ⅲ郭から出土した土師器はほとんど坏で、小皿類は少量であった。一方、堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃからの坏と小皿は形態的にラッパ状型の（Ｂ）タイプがほとんどで、（Ａ）タイプは極端に少なかった。

単位：cm



第105表　土師器皿・坏　法量表

2．青磁器[注(1)]

（細蓮弁文碗）

建築址ＳＢⅢ－25（12）、Ⅱ郭（24）、Ⅲ郭（108・117）、堀切Ⅰ－Ｃ（276）、堀切Ⅰ－Ｄ（342）から出土している。文様が線刻され、蓮弁の表現は全く形骸化しているのが特徴である。

このタイプについては、山梨・新巻本村[注(2)]、京都・同志社新町別館[注(3)]、沖縄・首里城京の西北側下[注(4)]、および石川・波佐谷出土[注(5)]のものが、15世紀後半まで遡る可能性を持っているが、多くは16世紀前半から中葉の間にあると考えられる。太宰府史跡第57次調査[注(6)]・金光寺跡、熊本・濱の館跡、竹崎城腰曲輪[注(7)]郭南平場[注(8)]、奥野城跡[注(9)]などからの出土品がそうである。

（稜花皿）

Ⅱ郭（42）、堀切Ⅰ－Ａ・Ｂ（204・205）、堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ（441）、から出土している。一乗谷・朝倉氏遺跡第十五次調査[注(10)]、新潟・華報寺経沢出土品[注(11)]などから判る様に、青磁細蓮弁文碗との共伴資料が多い。時期の限定できる青磁ではないが、15世紀初めから16世紀中葉までの長期に渡り、制作・使用されたものと思われる。[注(1)]

（雷文帯蓮弁文碗）

堀切Ⅰ－Ｃ（275・277）、堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ（443）から出土している。文献により、16世紀後半まで存続した事が確実な濱の館跡[注(7)]からは、最終期建物の下層土から同碗が出土しており、年代は16世紀より若干、遡ると推察される。

（基筒底皿）

Ⅲ郭（29）から出土した。大分県玖珠町・伐株山城跡[注(14)]から同類のものが出土し、同城跡出土の染付皿より、15世紀後半から16世紀中葉の間に位置づけられている。

（同安窯系の櫛描文碗）

Ⅱ郭（23・31・33・37）、Ⅲ郭（111・114・115・118）、Ⅳ郭（186）、堀切Ⅰ－Ｃ（279）、堀切Ⅰ－Ｄ（346）、堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ（442・445・461・467）から出土している。生産のピークは、13世紀中葉以前と見られ、14世紀中葉を過ぎると伝世された状態で残っていくと解釈される。[注(15)]

（盤）

Ⅱ郭（44）、Ⅲ郭（96・97・103）、堀切Ⅰ－Ｄ（337）、堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ（479）から出土している。同類の盤の出土例では、太宰府史跡・観音寺ＳＸ１２００から、元徳二年（1330）銘の卒塔婆共伴の陶磁器[注(16)]の中に見られる。同遺跡は14世紀前半期のものとして、現時点で質量とも標識となる遺跡である。

3．明代白磁皿

① Ⅲ郭（113）、堀切Ⅰ－Ｄ（343）、堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ（464・472・473・475）から出土している。小皿で、高台をアーチ状に抉った物もあり、白濁色の釉が体部中位まで掛けられた

タイプである。青森市後潟・尻八館跡から同類の皿が出土した。この館からは、14世紀後半から15世紀中葉までの出土例が多い[注(17)]。高城跡の場合、同じ釉調で八角形の坏もⅢ郭（116）から出土しており、尾道市土堂一丁目ＳＫ０３０の出土例から[注(18)]、上記タイプと並行の時代関係にあると考えられる。

② Ⅱ郭（39）から出土している。口縁を端反りにした小皿で、波佐谷、新巻村、首里城などから出土した。これらの遺跡は15世紀前半から16世紀前半に年代の中心があると考えられる。

③ 建築址ＳＢⅢ－16（16）、Ⅲ郭（123）から出土している。口縁が玉縁状にやや丸くなった碗の破片で、太宰府史跡の出土品などから、12世紀頃の物と考えられる。

4．備前・擂鉢・甕

Ⅲ郭の建築址ＳＢⅢ－２から出土した擂鉢（11）と堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃから出土した甕（538）は、間壁忠彦・葭子両氏の「備前焼研究ノート」[注(19)]に従えば、16世紀中葉前から後半に位置づけられる。

5．古銭

中国産のものが10枚出土したが、Ⅲ郭からが最も多く６枚を数え、Ⅱ郭からは３枚であった。年代別には、北宋６枚、元１枚、南宋１枚、明２枚で、北宋の古銭の出土が目立った。

古銭の上限は11世紀初頭の淳化元寶であったが、遺跡の年代を考える上では、Ⅲ郭から出土した下限の永楽通寶（15世紀初頭）が基準となり、さらに、Ⅲ郭の建築址ＳＢⅢ－21から出土した14世紀後半の洪武通寶あたりが参考となろう。

この他、国内産のものとして、江戸時代の寛永通寶が６枚、堀切Ⅰ－Ｃから寛永鉄銭が１枚、堀切Ⅰ－Ａ・Ｂから重なりあった13枚のビタ銭が出土しいる。

銭貨名	年代	初鋳年(西暦)	出土地点	枚数
淳化元寶	北宋	990	Ⅲ郭	１枚
祥符通寶	北宋	1008	Ⅱ郭	１枚
皇宋通寶	北宋	1039	Ⅱ郭	１枚
元豊通寶	北宋	1078	ＳＢⅡ－10 Ⅱ郭	１枚 １枚
元祐通寶	北宋	1086	Ⅲ郭	１枚
聖元宗寶	元	1101	ＳＢⅢ－22	１枚
嘉定通寶	南宋	1208	ＳＢⅢ－19	１枚
洪武通寶	明	1368	ＳＢⅢ－21	１枚
永楽通寶	明	1408	Ⅲ郭	１枚
寛永通寶	江戸	1608	Ⅱ郭 堀切Ⅰ－Ｃ	４枚 ２枚
ビタ銭	江戸		堀切Ⅰ－Ａ・Ｂ	13枚
寛永鉄銭	江戸		堀切Ⅰ－Ｃ	１枚

第106表　古銭一覧表

〔4〕高城跡の縄張りと自然地形及び地理的環境について

北東方向から南西方向に延びるシラス丘陵の一隅に築かれており、少なくとも８つの郭から構成される丘城である。

郭の配列は連郭式で、主軸の向きはほぼ南北方向にある。長軸の向きや平場面積などから、Ⅰ～Ⅳ郭までが主郭で、Ⅴ～Ⅷ郭が外郭と推定される。城域は南北に最大約360ｍ、東西に最大約270ｍの範囲と考えられる。

城跡は自然地形に恵まれている。丘陵続きの北側背後は、一旦、大きくくびれて、迫地が丘陵北縁下をぐるりと巡り、天然の堀切となっているのを初めとし、東西両側の丘陵斜面は急峻である。南西側は、Ⅰ郭の高台より約20ｍ程の大きな段落ちとなって、自然地形の仕切りがある。丘陵は高城跡より南西方向に舌状形に延びて、約250ｍ先の丘陵端部に開けた合戦峰集落と馬場道（通称）で繋がっている。250ｍという距離はあるものの、丘陵地の自然区画の中で北東端の高台に城跡があり、南西端に集落が開ける格好となっている。両者は明らかにセット関係にあると思われ、合戦峰集落は高城跡の麓集落と見なして差し支え無いものと思われる。

地理的に見た場合は、北方、山付きから南下する山江村山田の開析谷と人吉盆地の平野部とが接する所の丘陵端部に合戦峰集落が開け、その北東側背後に城跡が存在することになる。

高城跡より、北西方向に約2.7km先には、開析谷の片方を形成する西側の山稜地帯に南北朝時代の山田城跡（山城）が眺望される。

高城跡の存在意義は、このような自然地形や地理的な地の利にも一因しているものと思われる。

〔5〕高城跡の年代

出土遺物から推察するに、同安窯系の櫛描文碗・青磁の盤・白磁は、ともに伝世品と考えられ、他の青磁碗、白磁の碗・皿、備前の擂鉢、甕などから城跡は15世紀末から16世紀前半にかけて存続したものと思われる。[注(20)] 全般的に堀切等の遺構が良く残る城跡であったが、調査対象となったⅡ～Ⅳ郭の平場における土層は総て攪乱層で、シラスやアカホヤ面でしか遺構を確認できなかった。それも上位部をカットされた状態であり、土層や遺構出土による遺物の共存関係や前後関係がやや不明のまま終わった事が惜しまれる。但し、それでも、城の存続期間が最大幅10～20年ぐらいと考えられる事から、第104表に見る、糸切りの土師器皿・坏のような類のものの編年の資料には成り得えるものと思われる。

さらにまた、数多検出された簡易的な建築址と火舎・擂鉢・土製の茶釜・砥石・引き臼等の大量出土は、高城跡専門調査員である大三輪龍彦　鶴見女子大学教授の「中世城跡は、非常時のキャンプ地であり、建物は簡易で、風水害で崩壊したとしても、すぐさま建て直しがきいたものと思われる。」との御示唆[注(21)]に沿った調査結果であったと思われる。

但し、今回の発掘調査では、いくつかの疑問点が残る。

〔6〕高城跡の疑問点

① シラスの丘陵をカットして築かれた城が、例え防災処置を行ったとしても、10～20年間も維持出来るであろうか。

② 城の推定存続期間中に、城跡を含めた下球磨一帯で、高城のような大規模な城を必要とする様な戦が文献上からとらえられない。

近世の文献『南藤蔓綿録』からではあるが、地元では、下球磨を巻き込んだ大規模な内乱は、上・下相良氏が滅亡した文安五年（1448）の戦を最後とすると伝えられている。

③ 下相良氏の根拠地である人吉城に隣接する矢黒城・赤池城・村山城などが、文献資料に頻繁に所見するに対し、最も隣接地で、16世紀の前半頃まで存続したと推測される高城跡について、何らの所見が無いのは、どの様な意味があるのか。

④ 中世の山田城主とされる永留氏が高城と関係があるかどうか。

⑤ 遺物の中では、染付けの碗や皿の類が一片も出土していない。

⑥ 瓦質の火舎が破片を含めれば、かなり出土しており、これをどう見るのか。

⑦ Ⅱ郭から江戸時代初期の寛永通寶が6枚出土しており、さらに、周囲の堀からも寛永鉄銭とビタ銭が出土した。報告書には未記載であるが、江戸時代初期の遺物も少量ながら出土しており、16世紀前半の廃城後も何らかの形で高城の一部が利用されていた事は確実である。

これに関連して、Ⅱ郭から検出された建築址ＳＢⅡ－9は、他のものとやや異なって、唯一、庇を有し、柱穴の埋土も基本的には褐灰色土でありながら、他と比較して、やや軟らかく褐色味の濃いものであった事を特筆したい。さらに、一個とはいえ、鉛の鉄砲玉が出土していることも廃城後の高城跡の変遷を考える上で興味深い。

今後、これら疑問点の解明が大きな課題となろう。

〔7〕文献史学からのアプローチ

「高城跡」は、中世の文書・史料をはじめ後世の編纂物にその姿を現さない。いわゆる「まぼろしの中世城跡」である。にもかかわらず発掘調査の結果、数々の遺構や遺物の実在が明らかにされ、大規模な城跡であることが判った。

文献上のまぼろしの城跡が、考古学からその実在が明らかにされた今、そのギャップをどのように埋めるか、そして、高城がまぼろしの城となったのには、それだけの理由があったのかを考えなければならない。

高城が中世（鎌倉・南北朝・室町時代）においてどの所領に属し、誰によっていつ頃に築城されたかはまったく不明である。ただ、周辺の歴史的背景から考察するに城跡を含めた一帯が鎌倉・南北朝時代に永吉庄山田村に属し、平河氏から大宰小弐氏、その後、下相良氏が地頭で支配していた事は明らかである。南北朝内乱では、隣接の山田城が合戦の舞台となっている。

このような状況の中で、山田城主は永留氏であったとする説がある。これは後世の編纂物『南

藤蔓綿録』『求麻外史』などに拠るもので、中世の文書・史料上からは確認できない。永留氏については、正平二十三年八月五日に下相良氏の惣領・相良前頼とその弟氏頼が「なかとみとの」に宛てて契状を出したのが唯一の史料である。この永留氏と関係あるかどうか不明であるが、嘉暦二年に人吉庄永留名が争論対象となり、その時の手継文書として「頼季状、藤原氏状」が所見し、頼季は下相良氏の相良頼俊の子であるとされ、永留名地頭戦は〈相良頼俊―頼季―藤原氏〉と相伝されている。しかし『南藤蔓綿録』所収「永留系図」と全く一致しない。

「永留系図」〈相良頼親―頼明―実重―長続〉系統の中で、文書・史料上から実在が確認できるのは実重～長続だけで、頼親が下相良氏・相良長頼の嫡子で頼俊の兄という形跡は認められない。まして実重～長続については、文安五年の球磨郡内乱の中で初めて上・下相良氏と対抗できる勢力として登場する。この内乱については、不思議なことに文書・史料は何一つ残されていない。しかし、その反面『南藤蔓綿録』『求麻外史』は多くを語り、山田城主の永留長続が上・下相良氏を滅ぼし、人吉城に入城したとする。内乱自体は事実としても、後世の編纂物を安易に信じることはできない。なぜならば勝者であるべき永留氏自身が伝来の文書を伝えず、系図の中で〈相良長頼―頼親〉を設定し、相良氏一族のような叙述を行っているのである。『沙弥洞然長状』の意図的と思える錯誤・史料操作、編纂物での永留氏正統化に至るまでの事実に注目したい。これらの意図物作為は、下相良氏の上相良氏に対する低い評価と上相良氏本城鍋城の歴史的抹消と付合し、一部に消された歴史があることを知る。

永留氏の人吉城への入城後も、郡内では旧上相良氏系国人の勢力は侮り難いものがあり、永里城・水面城・矢黒城などは協力せず、攻められ落城している。同様に木上岩城主の平河氏をはじめ須恵・岡本氏も惣領が滅び、名のみが継承され、相良家臣団の中に組入られていく。

このように色濃く残存する旧国人一揆体制を打破し、対外的に薩摩の島津・菱刈氏や真幸院の北原氏を警戒しながら、名和氏の本拠地八代まで攻略するのに約38年間を要した。これは、旧国人勢力郡内に残しながらの芦北・八代郡への進出で、領土拡大する中で相良氏は国人奥野・宮原氏を在地所領から切り離し、移住政策を行っている。この段階で初めて、郡内再統一が実現したといえよう。

そのような政治的背景の中で、人吉城の支城として高城が築城された可能性は大いにあろう、それは永留氏にとって支配体制の弱体を暴露することであり、決して名誉の事ではなかったと思われる。このことが永留氏の支配体制の確立と共に、相良氏の一級史料と家史編纂物から高城が消えた最大の原因ではなかろうか。

発掘の結果から、高城は15C末～16C前半にかけて存在した大規模造りの比較的近世の丘城であることが判明した。にも関わらず文献未記載の城跡であることは、どう見ても偽政者の歴史的改暫を考えざるを得ない。

（2）総　括

〔1〕はじめに

熊本県教育委員会による中世城跡及び居館跡の本格的調査は昭和47年度の久玉城跡に始まる。国道266号改良事業に伴なうもので、当時文化課が発足したばかりの時であった。路線はすでに決定され、工事着手直前に発掘調査を行うというきわめて条件の悪い状況であった。しかし、遺構の保存状態がきわめて良好であったため、地元牛深市、県土木部と協議を重ね、昭和48年３月２日に県指定史跡にすることができた。その後、国道266号は久玉城を避ける大幅な設計変更を行い昭和52年に完成した。

その後、九州自動車道建設に伴なう竹崎城跡[注(22)]（下益城郡松橋町昭和48～49）、小野館[注(8)]（同郡小川町昭和49年）、県立高校改築に伴なう濱の館跡[注(23)]（上益城郡矢部町昭和48・50）、球磨川改修に伴なう蓮花寺跡・相良頼景館跡[注(7)]（49～50）などの調査を実施した。しかしながら、本県における中世城跡の分布状況がほとんど不明であって、各種の開発事業に対応できないのでは、文化財保護行政の責任が果せないため、昭和50～52年度に国庫補助を受けて「熊本県の中世城跡」の分布調査を実施した。[注(24)]調査着手前には約270箇所と予想していたが、最終年度には大幅に上まわる約450箇所に達した。[注(22)]その後も数箇所が確認されているので、県下では500箇所近くになると予想される。この分布調査以降の発掘調査は若宮城跡[注(25)]（鹿本郡菊鹿町昭和53）、里の城[注(25)]（球磨郡多良木町昭和54）などの例があるが、いずれも部分的な発掘調査にとどまっていた。

本報告書で述べている高城跡調査は、城跡の大半が九州自動車道の道路敷に含まれたため、従来の調査では把握できなかった事象が解明できたという点で、本県における中世城跡調査の先駆的なものといえる。

〔2〕遺構

８郭からなる城跡のうちⅠ郭とⅤ～Ⅷ郭は幸いにして路線外になったが、Ⅱ郭から10棟、Ⅲ郭から18棟、Ⅳから10棟、計38棟の建築址を検出した。規模は小さく２間×２間が20棟、１間×２間が15棟で、しかも柱穴等の状態から比較的短期間に次々と建て替えられたと推測され、おそらく簡易な兵舎や小規模な倉庫であったと考えられる。

空堀ではⅡ郭西側とⅣ郭東側裾部のものは深さ1.0m、上場面2.0～3.0m、下場面が0.7～1.0m、長さ27.5～30m、丘陵裾部の中途を稜線に沿うように細長く掘り込む遺構が検出されたが単なる空堀ではなく、散兵線の様相を呈すると思われる。その他、Ⅳ郭の北側斜面から検出した蛸壺状の土坑も同様の戦闘的な施設と見ることができる。

〔3〕遺　物

検出した遺物には土師器、青磁、白磁、備前焼、古銭等がある。

土師器は堀切Ⅰ－Ｃを中心に、Ⅲ郭や堀切Ⅲから主として小皿と坏が出土し、青磁では16世紀前半～中葉の細蓮弁文碗、15世紀初～16世紀中葉の稜花皿などのほか、13世紀中葉の同安窯

系櫛描文碗、さらに明代の白磁などである。古銭は10世紀末の淳化元寶を最古とし、北宋６、元１、南宋１、明２の計10枚の中国銭があり、その他、江戸時代の寛永通寶などが出土した。

〔4〕年　代

出土遺物からみて、伝世品と考えられる同安窯系の櫛描文碗などを除けば、青磁碗、白磁の碗・皿、備前焼等から、この城は15世紀末～16世紀前半の、きわめて短期間の存続であったものと考えられる。なお、この高城跡は中世の文献には記載されていない「まぼろしの中世城跡」であり、今後周辺の歴史的背景等を考慮に入れ、慎重に判断する必要があろう。

注（１）（３）出土遺物の　2.青磁器～3.明代白磁器の考察については、亀井明徳「日本貿易陶・磁器史の研究」同朋舎 1986 を基本的な参考資料にした。

（２）小野正敏「山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の陶磁器」　『貿易陶磁研究』日本貿易陶磁研究会　1981年

（３）『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社大学校地学術調査委員会　1978年

（４）伊東忠太・鎌倉芳太郎『南海古陶瓷』　寶雲社　1937年

（５）長谷部楽彌「石川県小松市波佐谷出土の古陶磁」『ＭＵＳＥＵＭ』225　1972年

（６）『太宰府史跡　昭和53年度発掘調査概報』　九州歴史資料館　1979年

（７）熊本県教育委員会『濱の館』　熊本県文化財調査報告　第21集　1977年

（８）熊本県教育委員会『竹崎城』　熊本県文化財調査報告　第17集　1975年

（９）熊本県教育委員会『奥野城跡』　熊本県文化財調査報告　第92集　1988年

(10)『一乗谷朝倉氏遺跡Ⅶ及びⅧ』　朝倉氏遺跡資料館　1976・1977年

(11) 川上貞雄「"茶盌記" 再考」『水原郷土誌料』第10集　1978年

(12) 大分県玖珠町教育委員会『伐株山城跡』　1984年

(13) １に同じ

(14)『太宰府史跡　昭和52年度発掘調査概報』　九州歴史資料館　1978年

(15) 岩本義雄・大橋凡士他『尻八館調査概要、第一次・第二次』青森県立郷土館調査年報２・３　1977・1978年

(16)『尾道中世遺跡発掘調査概報――尾道市土堂一丁目所在――』　草戸千軒遺跡調査所　1977年

(17) 間壁忠彦・葭子「備前焼研究ノート」(1)～(3)『倉敷考古館研究集報』(1)(2)(5)　1966年

(18) 備前の擂鉢と甕の編年とは若干のずれがある。

(19) 調査現場での御示唆

(20) 熊本県教育委員会『熊本県の中世城跡』　熊本県文化財調査報告　第30集　1978年

(21) 熊本県教育委員会『蓮花寺跡・相良頼景館跡』　熊本県文化財調査報告　第22集　1977年

(22) 熊本県教育委員会「城館址」『熊本県文化財ハンドブック』　熊本県文化財調査報告　1974年

(23) 熊本県教育委員会『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群』　熊本県文化財調査報告　第51集　1980年

高　城　跡

（先土器・縄文時代）

本文目次

第1節　遺跡と旧地形……206
第2節　層位……207
第3節　先土器時代……208
（1）遺物の出土状況……208
（2）出土遺物……211
（3）まとめ……218
第4節　縄文時代……219
（1）Ⅱ郭の縄文時代遺物出土状況…219
（2）Ⅱ郭土坑……220
（3）Ⅲ郭の縄文時代遺物出土状況…221
（4）縄文式土器……222
（5）縄文時代石器……229
（6）まとめ……251

挿図目次

第1図　先土器・縄文時代の発掘調査区……206
第2図　標準土層図……207
第3図　先土器時代調査区……208
第4図　先土器時代土層断面図・遺物分布図……209
第5図　先土器時代遺物実測図①……212
第6図　先土器時代遺物実測図②……213
第7図　先土器時代遺物実測図③……214
第8図　Ⅱ郭縄文時代遺物分布図……219
第9図　Ⅱ郭土坑実測図……220
第10図　Ⅲ郭縄文時代遺物分布図……221
第11図　縄文式土器実測図①……222
第12図　縄文式土器実測図②……223
第13図　縄文式土器実測図③……224
第14図　縄文時代石器実測図①……230
第15図　縄文時代石器実測図②……231
第16図　縄文時代石器実測図③……232
第17図　縄文時代石器実測図④……233
第18図　縄文時代石器実測図⑤……234
第19図　縄文時代石器実測図⑥……235
第20図　縄文時代石器実測図⑦……236
第21図　縄文時代石器実測図⑧……241
第22図　縄文時代石器実測図⑨……242
第23図　縄文時代石器実測図⑩……243
第24図　縄文時代石器実測図⑪……244
第25図　縄文時代石器実測図⑫……245
第26図　縄文時代石器実測図⑬……246
第27図　縄文時代石器実測図⑭……247
第28図　縄文時代石器実測図⑮……248
第29図　縄文時代石器実測図⑯……249

表目次

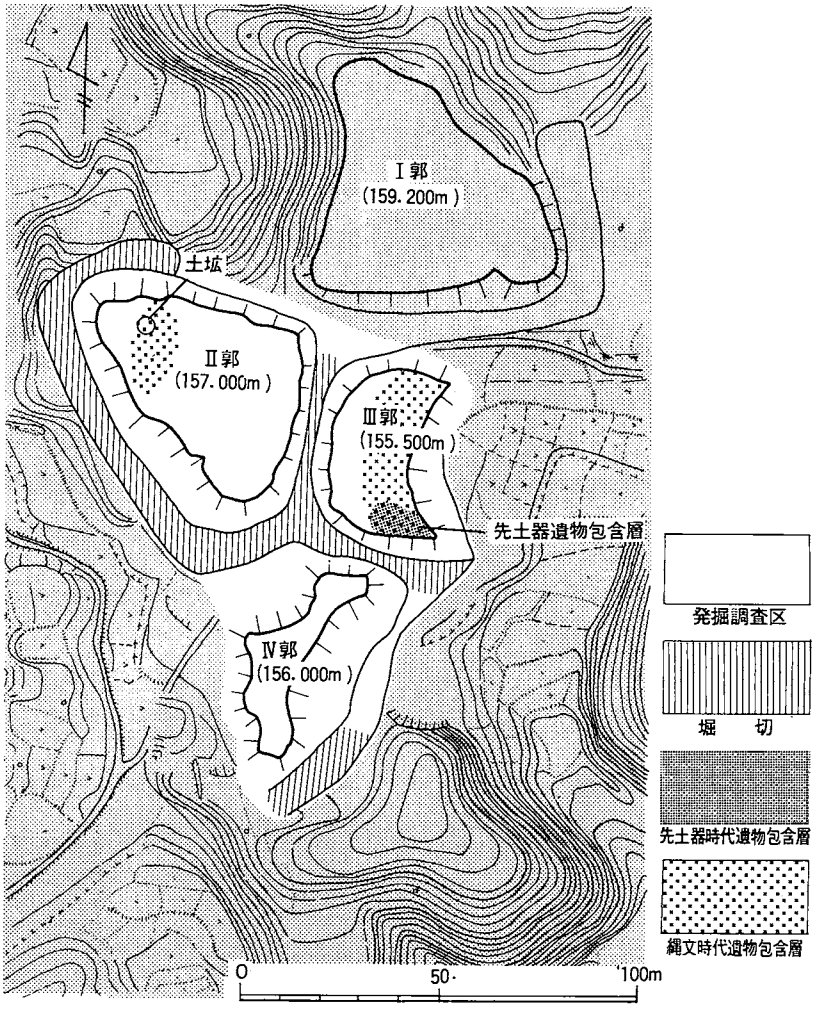
第1表　先土器時代遺物計測表……214
第2表　剥片・細片計測表①……215
第3表　剥片・細片計測表②……216
第4表　剥片・細片計測表③……217
第5表　剥片・細片計測表④……218
第6表　縄文式土器観察表①……225
第7表　縄文式土器観察表②……226
第8表　縄文式土器観察表③……227
第9表　縄文式土器観察表④……228
第10表　縄文時代石器計測表①……236
第11表　縄文時代石器計測表②……237
第12表　縄文時代石器計測表③……238
第13表　縄文時代石器計測表④……250
第14表　縄文時代石器計測表⑤……251

先土器・縄文時代

第1節　遺跡と旧地形

中世城跡の調査はⅡ郭・Ⅲ郭・Ⅳ郭に於いて行われた。表土を剥いた後の郭ごとの中世遺構確認面の最高所は、Ⅱ郭が標高157.000m・Ⅲ郭が標高155.000m・Ⅳ郭が標高156.000mであった。高城跡のⅠ郭（主郭）は幸いにして調査区外となっているため、そのままの姿を残している。このⅠ郭の標高は159.200mとなっており、Ⅱ郭との比高差は2.20mである。

これらの郭は総て独立した形式をとっており、いずれも上面を平場状にカットして、各郭の外周を勾配の強い削り落としによって独立させており、各郭の間には削り落としを壁面とした堀切が設けられている。各郭に残った土層に合わせてみると、各郭間を独立させている堀切は総て壁面がシラスであるために当初は一連の丘陵であった事が明らかである。城域を構成する馬の背状尾根線はⅠ郭からⅡ郭の堀切近くを通り、Ⅳ郭を中心としたやや東南に延びる台形を形成し、その先端は馬場道を半行に走り、麓集落である合戦峯までなだらかに延びていたものと思われる。



第1図　先土器・縄文時代の発掘調査区

第2節　層　　位

遺跡では、Ⅲ郭の東側に於いてのみ、Ⅰ層からⅨ層の姶良カルデラを起源とする「入戸火砕流」（シラス）を含む9枚の土層が確認できた。そこで、標準土層柱状図によって各層の状態を示していきたい。

第Ⅰ層　表土層（耕作土）

第Ⅱ層　黒色土層

粒子の細かな黒ボク土で、しまりが無く軟弱な状態であり、中世の柱穴はこの層にも掘り込まれている。

第Ⅲ層　黄褐色土層

球磨地方に於いて「イモゴ」と呼ばれている層で、鬼界カルデラを起源とする火山灰（アカホヤ）のことである。この層は下層のⅣ層と同一性質のものであるが、ここでは風化によって出来たフカフカの状態で、縄文時代晩期の遺物包含層をⅢ層とした。

第Ⅳ層　黄褐色土層

アカホヤ火山灰の固くしまった無遺物層の純粋層である。時として下層の遺物混入がみられるが、これは自然作用によるものであろう。

第Ⅴ層　褐色土層

縄文時代早期の遺物包含層で、粒子は細かく、やや粘質を帯び、しまりのある層。

第Ⅵ層　黒褐色土層

上位は縄文時代早期の遺物包含層で、強い粘質を帯び、しまりのある層。

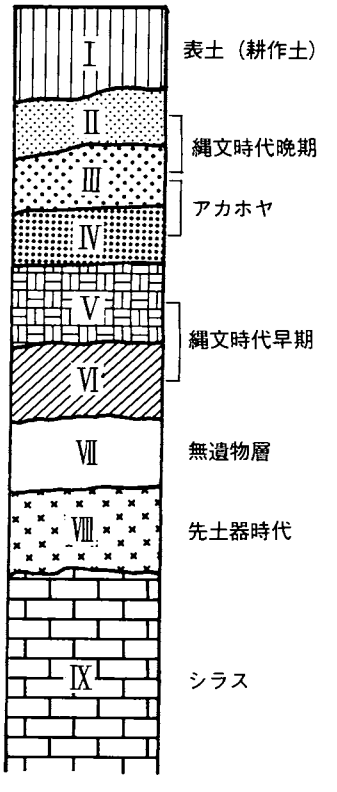
第Ⅶ層　暗赤褐色粘質土層

無遺物層で、粒子は細かく、強い粘質を帯び、非常にしまりのある層。

第Ⅷ層　灰黄褐色土層

Ⅸ層の黄みを帯びたシラス（ＡＴ）の漸移層で、極細粒シラスを主とし、灰色がかった層で非常に固くしまっている。先土器時代の遺物包含層。

第Ⅸ層　黄色シラス（ＡＴ）



第2図　標準土層図

第3節　先土器時代

（1）遺物の出土状況

遺物包含層の殆どが後の城郭造成等によって失われており、先土器時代の調査はわずかに遺物包合層を残すⅢ郭の狭い範囲だけに止まった。ただし、Ⅱ郭の中世遺構検出時に6点の先土器時代の遺物が出土しており、先土器時代の範囲は確実にⅡ郭まで広がっていたことが明らかである。

T－15・16区、U—15・16区からは先土器時代の遺物を層位的に検出することができた。遺物はⅧ層から検出されたが、このことから、調査区は小さな谷部を形成していたと思われ、本来Ⅷ層の下に定位置のⅨ層が存在すべきであるが、高城跡では間層がⅨ'層とⅨ" 層に分層された。

Ⅸ'層は黄色シラス・地山のブロックを含んだゴチゴチに固い黄褐色土層で、かなりの厚みで堆積し、この層からも遺物が検出できた。その下層のⅨ" 層はさらに8層に細分される撹乱的な土層であり、ここからも遺物が検出された。

Ⅸ" 層

①黄シラス混じりの粘質を持った褐色層。

②フカフカの状態で締まりの無い肌色シラス。

③黄軽石を含む黄シラス。

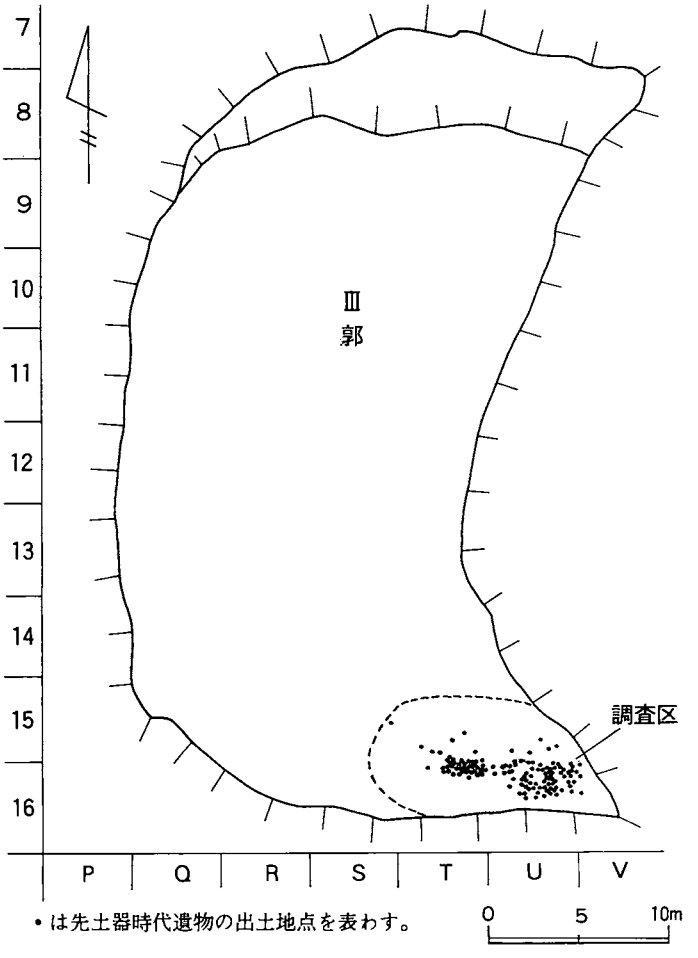
④軽石の他、小豆大の礫を含む黄灰シラス。

⑤黄シラスを主として中に褐色土や水性層を含む黄褐色層。

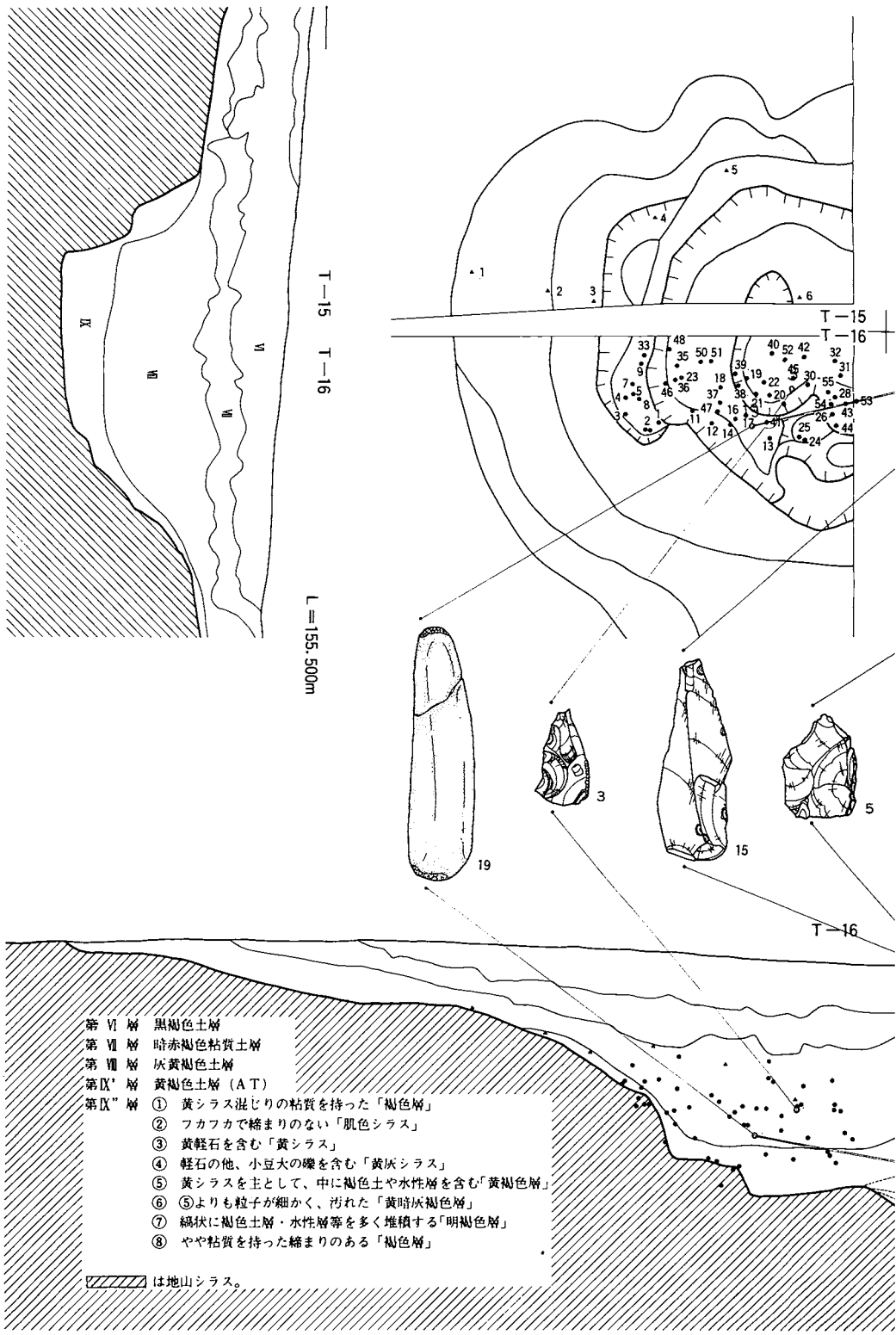
⑥5よりも粒子が細かく、汚れた黄暗灰褐色層。

⑦縞状に褐色土層や水性層が堆積する明褐色層。

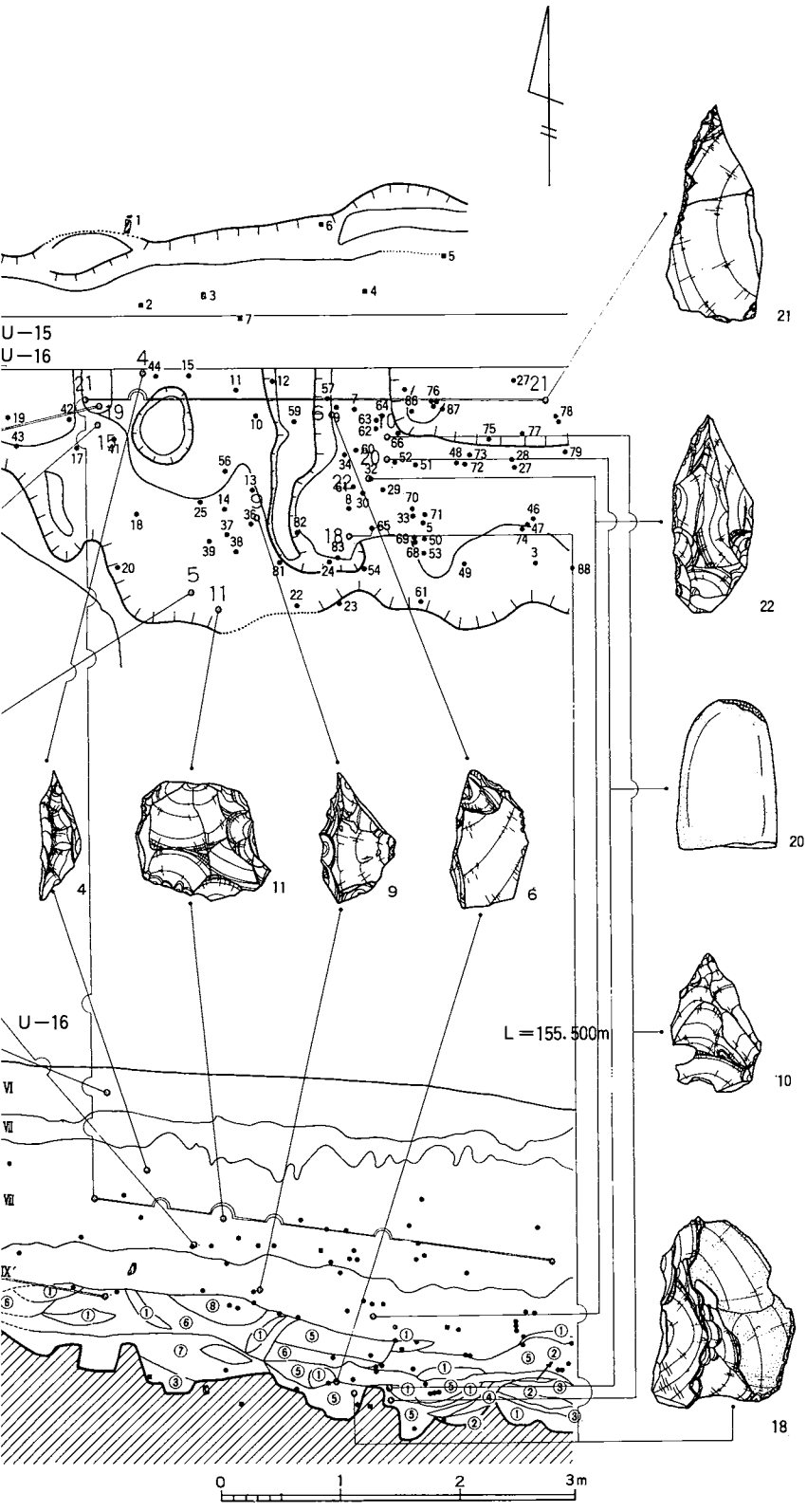
⑧やや粘質を持った、締まりのある褐色層。



第3図　先土器時代調査区


T－15
T－16
L＝155.500m
第 Ⅵ 層　黒褐色土層
第 Ⅶ 層　暗赤褐色粘質土層
第 Ⅷ 層　灰黄褐色土層
第Ⅸ' 層　黄褐色土層（ＡＴ）
第Ⅸ" 層　① 黄シラス混じりの粘質を持った「褐色層」
② フカフカで締まりのない「肌色シラス」
③ 黄軽石を含む「黄シラス」
④ 軽石の他、小豆大の礫を含む「黄灰シラス」
⑤ 黄シラスを主として、中に褐色土や水性層を含む「黄褐色層」
⑥ ⑤よりも粒子が細かく、汚れた「黄暗灰褐色層」
⑦ 縞状に褐色土層・水性層等を多く堆積する「明褐色層」
⑧ やや粘質を持った締まりのある「褐色層」
は地山シラス。

第４図　先土器時代土



層断面図・遺物分布図　　（注）図中の番号は実測図番号である。

（2）出土遺物

1．ナイフ形石器

a．切出形

層的な出土は、9・12・14・16・17の5点で、基部に抉入がある。9・14・16・17は不定形な剥片で、12は横長の剥片から作り出されている。

b．一側縁加工

刃部背面にのみ刃潰し加工を施した物で、5・6・7・8の4点である。すべて不定形な剥片により作り出されている。

c．部分加工

先端部の一部分にだけ刃潰し加工を施した物で、2・21の2点である。2の石材は黒耀石で、透明度があり外皮を残す。

d．基部加工

基部に加工を施した10・15と、縦長剥片の基部に僅かな加工と先端部背面に部分的な加工を施した23の3点がある。

e．尖頭器状

22は、やや鋭角的に平坦剥離ぎみの加工が石器の両面に見られ、背部に稜線部を作り出しているところから、尖頭器状ナイフ形石器とする。

2．三稜尖頭器

13は黒耀石製で、外皮の残る部分を底部とし、断面三角形の上部稜線から交互剥離が施されている。

3．クサビ形石器

1は黒耀石製で半分に欠損しているが、正面の側縁部と先端部に同角度の剥離が施され、裏面の側縁部からも浅い角度の調整剥離が施されている。

4．二次加工

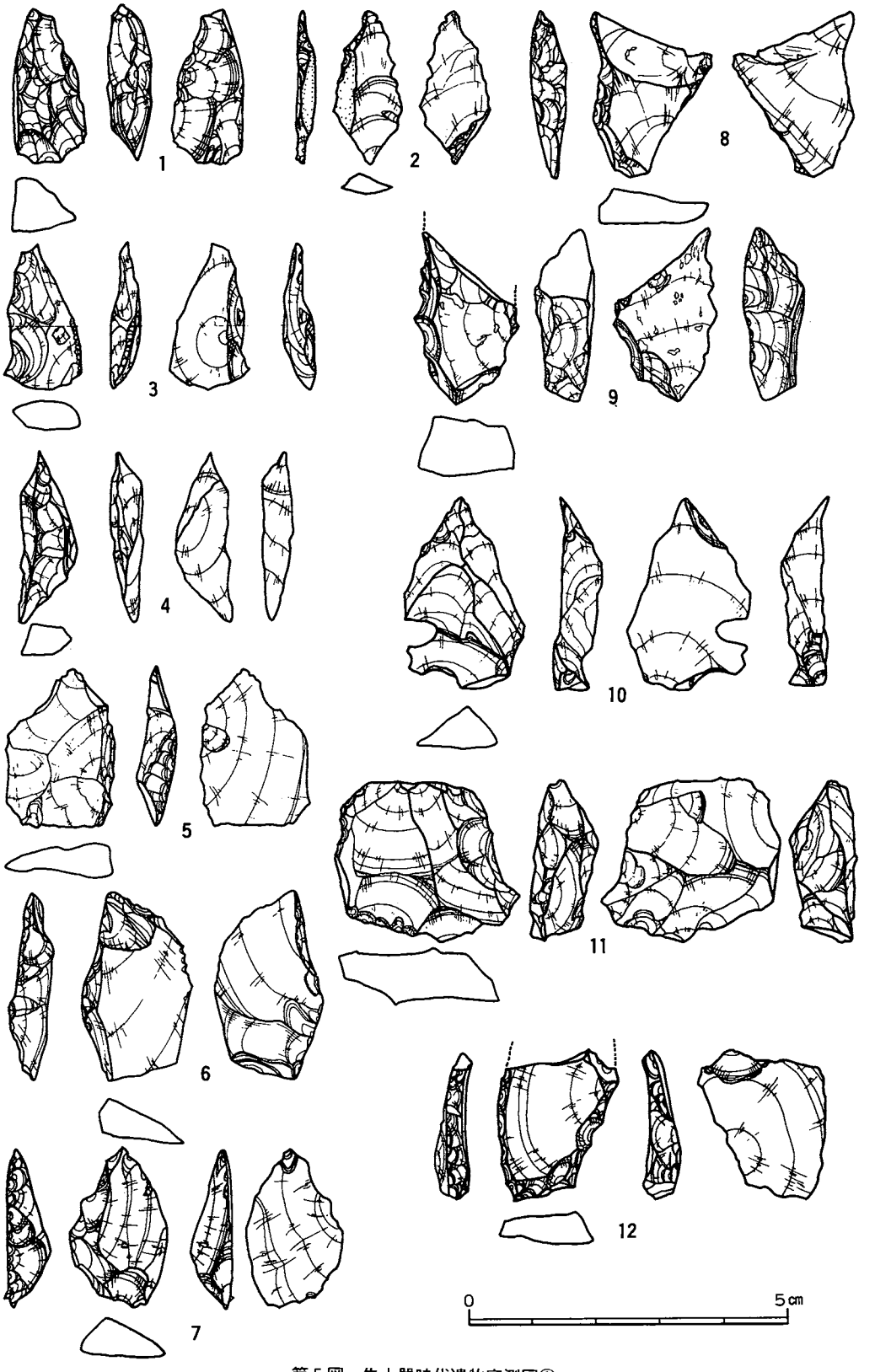
3・4・11・18の4点でいずれも横広の剥片を使用している。

5．たたき石

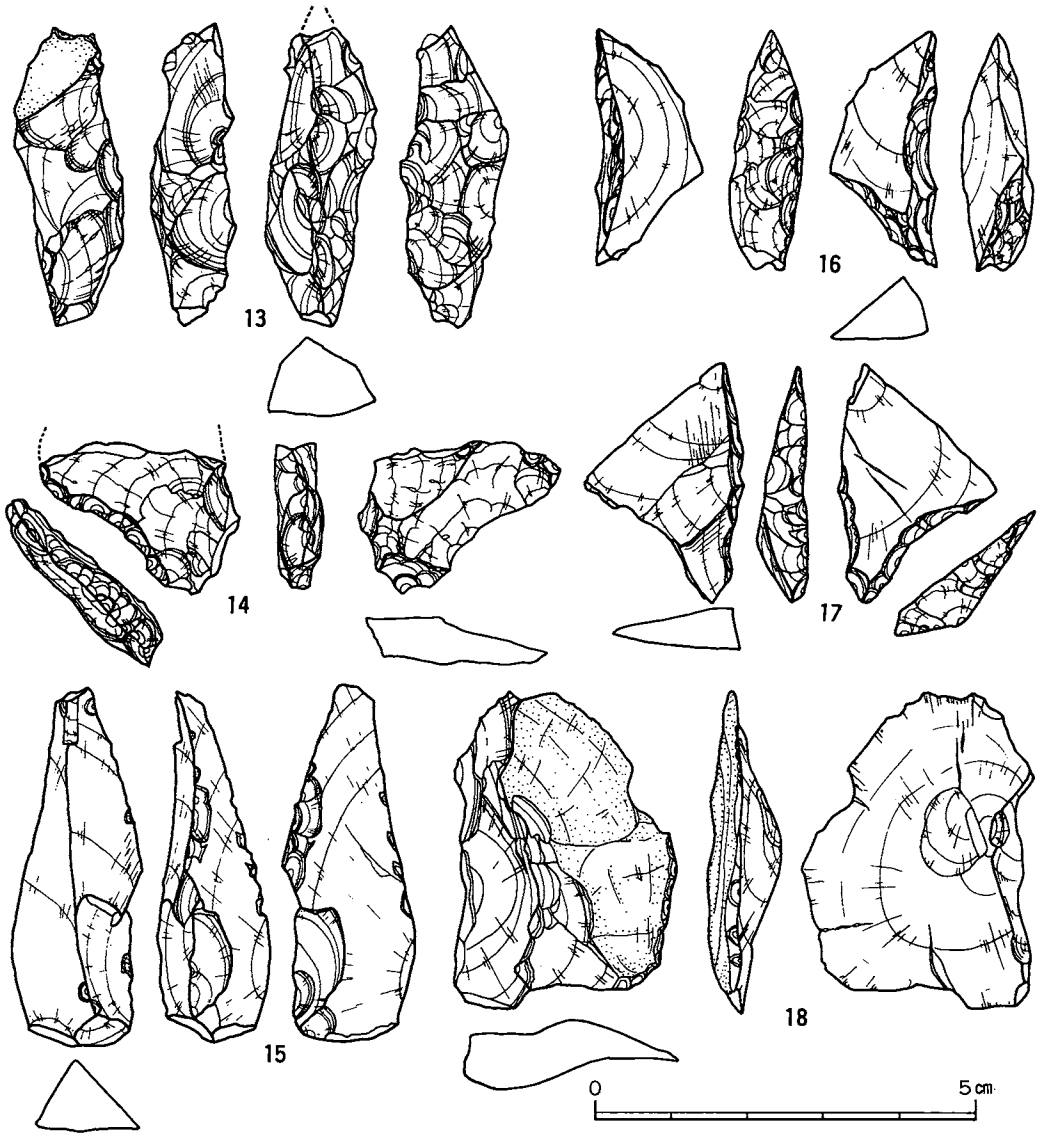
19・20の点で、19は接合資料で砂岩製。先端部の両面にのみ敲打痕を残す。20は半分に欠損した砂岩の自然石で、先端部に敲打痕がある。

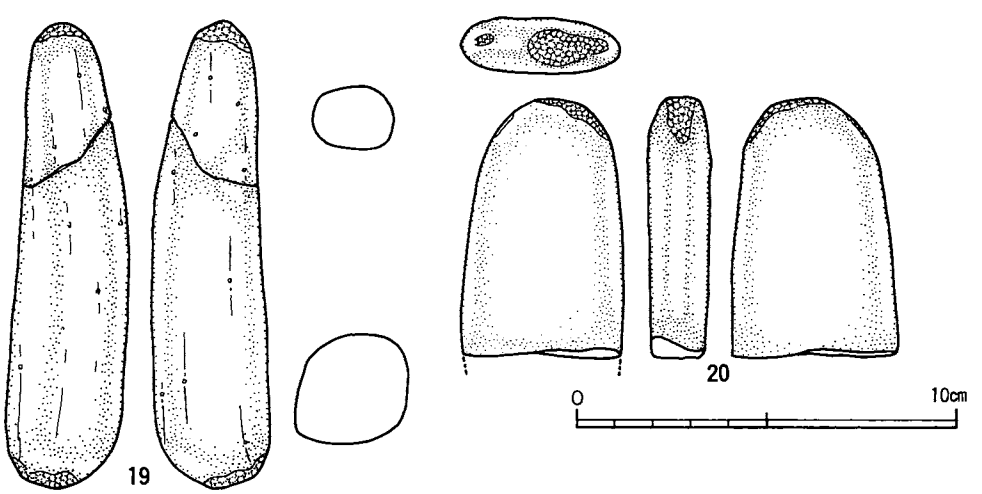
6．剥片・細片

剥片・細片は、約139点出土し、先土器時代遺物の約86％を占める。

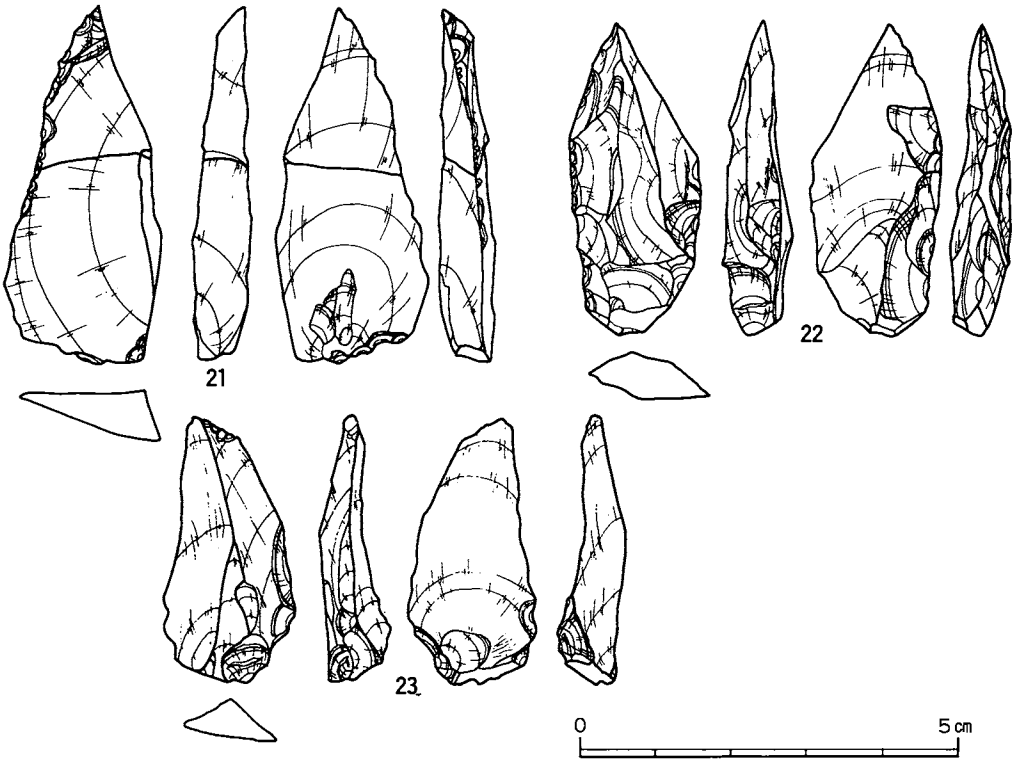


第5図　先土器時代遺物実測図①





第6図　先土器時代遺物実測図②



第7図　先土器時代遺物実測図③

No.	石材	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土地点	レベル(m)
1	黒燿石	(2.43)	(1.16)	0.70	2.16	Ⅱ郭表土	
2	黒燿石	2.36	1.15	0.25	0.52	Ⅱ郭表土	
3	チャート	2.28	1.20	0.48	1.18	T－16	153.280
4	チャート	2.57	0.90	0.57	1.04	U－16	153.685
5	チャート	2.51	1.72	0.58	2.08	U－16	153.048
6	黒燿石	2.93	1.73	0.60	2.40	U－16	151.900
7	黒燿石	2.45	1.58	0.68	1.72	Ⅱ郭表土	
8	チャート	2.67	1.80	0.55	1.91	Ⅱ郭表土	
9	黒燿石	(2.73)	1.71	0.92	4.24	U－16	152.662
10	チャート	3.05	1.90	0.60	2.83	U－16	151.750
11	チャート	2.51	2.92	1.03	7.80	U－16	153.265
12	安山岩	(2.33)	1.95	0.55	2.39	Ⅱ郭表土	
13	黒燿石	(3.93)	1.47	1.05	5.20	Ⅲ郭東斜面	
14	黒燿石	(1.94)	2.75	0.62	2.77	Ⅱ郭表土	
15	黒色珪岩	(4.78)	1.77	1.47	7.76	U－16	154.320
16	チャート	3.05	1.42	0.90	3.38	T－13	
17	チャート	3.17	2.10	0.68	3.32	S－15	154.680
18	チャート	4.14	2.98	0.96	8.01	U－16	151.810
19	砂岩	12.18	3.05	3.03	156.10	T－16	153.043
						U－16	152.637
20	砂岩	(6.70)	4.32	1.71	78.46	U－16	151.860
21	チャート	4.80	2.02	0.78	6.50	U－16	152.897
						U－16	153.428
22	チャート	4.18	1.70	0.91	——	U－16	152.453
23	黒色珪岩	3.54	1.72	0.84	3.84	Ⅲ郭表採	

第1表　先土器時代遺物計測表

No.	石材	計測値				出土地点	レベル(m)
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	(グリッドNo)	
1	礫岩	4.17	3.20	1.84	25.43	U—16	153.197
2	チャート	2.97	1.80	0.72	4.36	〃	153.218
3	チャート	1.71	0.90	0.21	0.32	〃	152.955
4	砂岩	9.35	3.70	2.66	119.12	〃	153.435
5	砂岩	3.97	3.55	1.33	14.44	〃	152.935
6	チャート	4.00	3.17	1.88	14.56	〃	152.945
7	チャート	3.51	1.75	2.15	12.29	〃	152.902
8	チャート	2.40	1.65	0.55	2.27	〃	153.058
9	砂岩	3.30	2.71	1.32	9.07	〃	153.104
10	砂岩	4.32	4.66	3.46	51.15	〃	153.044
11	チャート	2.65	2.00	0.75	3.57	〃	152.648
12	チャート	2.13	1.00	0.46	0.79	〃	152.913
13	礫岩	3.86	3.02	1.97	9.91	〃	153.054
14	粘板岩	3.17	2.18	0.50	4.54	〃	153.135
15	チャート	3.20	3.25	2.20	26.34	〃	153.287
16	チャート	2.08	1.40	0.42	1.10	〃	153.748
17	礫岩	3.97	4.35	1.62	36.38	〃	153.468
18	チャート	1.45	1.20	0.42	0.72	〃	153.260
19	チャート	1.51	1.25	0.50	0.94	〃	153.178
20	チャート	1.48	1.10	0.23	0.45	〃	153.197
21	砂岩	13.30	6.10	3.32	317.17	〃	152.665
22	チャート	2.75	1.96	0.87	4.24	〃	152.208
23	チャート	1.60	1.49	0.46	0.98	〃	152.364
24	チャート	2.03	1.30	0.28	0.78	〃	152.370
25	チャート	1.50	1.43	0.35	0.74	〃	152.552
26	チャート	1.95	1.30	0.43	1.00	〃	152.568
27	チャート	3.51	2.50	2.18	20.02	〃	152.554
28	チャート	1.96	1.35	0.65	1.62	〃	152.938
29	砂岩	3.55	5.00	1.94	61.88	〃	152.488
30	チャート	1.70	1.55	0.40	1.06	〃	152.568
31	チャート	3.10	2.03	1.00	6.33	〃	152.522
32	チャート	2.83	1.06	0.91	3.19	〃	152.512
33	チャート	4.77	1.23	1.10	6.36	〃	153.048
34	砂岩	4.15	2.97	1.73	32.13	〃	152.685
35	砂岩	5.56	4.83	0.87	36.84	〃	152.684
36	砂岩	7.35	2.30	1.53	19.07	〃	152.993
37	礫岩	4.57	2.68	2.00	33.50	〃	153.685
38	砂岩	8.75	4.53	1.96	97.15	〃	152.470
39	チャート	4.17	1.92	1.57	12.77	〃	152.495
40	砂岩	3.50	2.18	1.26	9.02	〃	152.337
41	チャート	1.26	1.18	1.15	0.34	〃	152.815
42	チャート	5.82	3.11	1.47	25.45	〃	152.662
43	チャート	2.46	1.28	1.07	2.48	〃	153.044
44	チャート	1.78	0.90	0.14	0.23	〃	152.340

第2表　剝片・細片計測表①

No.	石　材	計測値				出土地点	レベル(m)
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	(グリッドNo)	
45	チャート	1.47	1.85	1.67	1.16	U—16	152.700
46	チャート	2.00	1.39	0.40	1.37	〃	153.010
47	チャート	3.79	3.20	0.70	8.66	〃	152.000
48	チャート	2.70	2.31	0.92	3.90	〃	152.100
49	黒燿石	1.69	1.43	0.67	1.15	〃	151.830
50	チャート	3.17	1.92	0.43	2.91	〃	151.710
51	チャート	4.83	5.38	3.85	101.67	〃	151.920
52	チャート	1.55	1.50	0.47	0.92	〃	152.000
53	チャート	4.25	2.20	1.78	11.80	〃	152.015
54	チャート	2.93	2.32	0.58	3.67	〃	152.020
55	チャート	3.69	3.24	1.40	20.89	〃	152.120
56	チャート	1.67	1.87	0.61	1.97	〃	152.170
57	チャート	1.72	0.93	0.37	0.49	〃	152.250
58	チャート	3.44	1.55	0.71	3.51	〃	152.220
59	チャート	1.65	1.15	0.32	0.46	〃	152.000
60	チャート	1.50	1.61	0.32	0.69	〃	151.870
61	チャート	2.45	2.30	0.78	3.54	〃	152.110
62	チャート	2.50	1.23	0.47	1.15	〃	152.100
63	チャート	2.48	1.50	0.45	1.77	〃	152.250
64	チャート	2.14	2.14	0.83	3.38	〃	151.750
65	チャート	3.86	3.23	1.92	21.68	〃	151.800
66	チャート	4.04	2.83	0.90	9.33	〃	152.200
67	チャート	2.27	1.21	0.41	1.06	〃	151.990
68	礫　岩	12.30	7.80	5.60	762.39	〃	152.040
69	チャート	2.05	1.24	0.46	1.03	〃	152.810
70	礫　岩	15.70	7.60	6.10	836.60	〃	152.480
71	礫　岩	9.67	4.75	4.23	198.86	〃	152.430
72	チャート	5.60	4.95	2.05	62.28	〃	151.880
73	チャート	4.16	3.90	1.30	19.91	〃	151.500
74	チャート	4.10	2.12	1.50	13.33	〃	151.580
75	砂　岩	14.50	5.20	2.83	348.97	〃	152.070
76	チャート	2.42	2.28	0.89	5.35	T—16	153.535
77	チャート	2.04	1.27	0.51	1.32	〃	153.326
78	チャート	1.20	0.98	0.20	0.29	〃	153.515
79	チャート	1.30	0.87	0.24	0.25	〃	153.508
80	チャート	1.97	1.75	0.53	1.96	〃	153.668
81	チャート	2.32	0.85	0.84	1.30	〃	153.682
82	砂　岩	3.29	1.80	0.58	3.21	〃	153.685
83	チャート	1.15	1.48	0.12	0.23	〃	153.307
84	チャート	2.88	0.93	0.72	1.46	〃	153.475
85	チャート	2.15	0.91	0.30	0.69	〃	153.815
86	砂　岩	8.70	5.44	4.28	281.08	〃	153.287
87	チャート	1.47	1.46	0.43	0.92	〃	153.398
88	チャート	1.59	1.63	0.47	1.34	〃	153.528

第3表　剝片・細片計測表②

No.	石　材	計測値				出土地点 (グリッドNo)	レベル(m)
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
89	チャート	2.84	1.20	0.58	1.88	T—16	153.204
90	チャート	5.03	2.87	2.50	53.13	〃	153.242
91	チャート	2.58	1.49	1.54	2.41	〃	153.282
92	チャート	2.53	2.22	1.30	9.51	〃	153.325
93	チャート	0.52	0.85	0.55	0.17	〃	153.126
94	チャート	1.72	1.44	1.56	1.45	〃	153.545
95	チャート	1.67	0.90	0.23	0.33	〃	153.268
96	チャート	1.43	1.35	0.46	0.72	〃	153.277
97	チャート	1.92	1.29	0.28	0.75	〃	153.757
98	チャート	4.30	2.25	1.02	13.66	〃	153.479
99	黒燿石	2.69	1.70	0.75	2.94	〃	153.540
100	チャート	3.73	3.35	1.52	15.56	〃	153.205
101	チャート	2.53	1.89	1.22	5.17	〃	153.320
102	チャート	3.19	1.33	0.80	1.93	〃	153.005
103	チャート	1.08	0.90	0.29	0.27	〃	153.257
104	チャート	1.57	1.45	0.47	0.76	〃	153.268
105	チャート	3.73	3.39	0.83	7.14	〃	153.502
106	チャート	3.33	1.48	0.95	4.52	〃	153.302
107	チャート	4.42	4.07	4.65	89.04	〃	153.452
108	チャート	1.19	0.95	0.23	0.27	〃	153.142
109	チャート	4.52	3.23	1.22	17.33	〃	152.550
110	チャート	1.97	1.04	0.42	0.94	〃	152.733
111	砂　岩	9.34	3.50	2.52	219.79	〃	152.700
112	チャート	1.20	0.87	0.35	0.32	〃	153.708
113	チャート	0.91	0.78	0.13	0.13	〃	152.858
114	チャート	3.53	2.00	0.85	5.79	〃	153.290
115	チャート	2.42	1.97	1.89	3.98	〃	153.055
116	チャート	1.32	0.43	0.37	0.19	〃	152.772
117	チャート	7.80	4.16	3.80	159.90	〃	152.820
118	砂　岩	8.81	6.52	3.63	186.23	〃	152.970
119	チャート	1.07	1.28	0.19	0.21	〃	153.252
120	チャート	8.66	5.91	2.15	124.01	〃	153.248
121	チャート	1.45	2.60	0.48	1.39	〃	152.780
122	砂　岩	6.45	4.14	3.05	97.31	〃	153.000
123	礫　岩	4.77	3.58	1.43	25.45	〃	152.815
124	チャート	3.92	3.25	1.57	23.74	〃	153.065
125	チャート	0.96	0.92	0.10	0.13	〃	153.000
126	チャート	6.85	4.28	2.30	63.71	〃	152.866
127	砂　岩	5.57	3.86	2.83	96.69	〃	152.866
128	チャート	7.76	5.43	3.03	185.11	T－15	154.150
129	チャート	1.12	1.25	0.55	0.54	〃	153.990
130	チャート	1.45	0.68	0.20	0.15	〃	153.792
131	チャート	2.82	1.97	0.60	3.41	〃	153.843
132	チャート	1.80	0.94	0.47	0.43	〃	153.675

第4表　剝片・細片計測表③

No.	石　材	計測値				出土地点	レベル(m)
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	(グリッドNo)	
133	チャート	2.06	1.56	0.61	1.83	T—15	153.250
134	チャート	3.26	2.37	0.88	5.36	U－15	152.397
135	礫　岩	17.7	6.14	3.63	541.50	〃	153.102
136	チャート	1.72	1.18	0.60	0.99	〃	151.707

第5表　剝片・細片計測表④

（3）ま と め

遺跡の先土器時代の調査は、発掘区全体が中世城跡であった為に、先土器時代の包含層は城郭造成時にカットされており、Ⅲ郭に残されたわずかな範囲での調査となった。

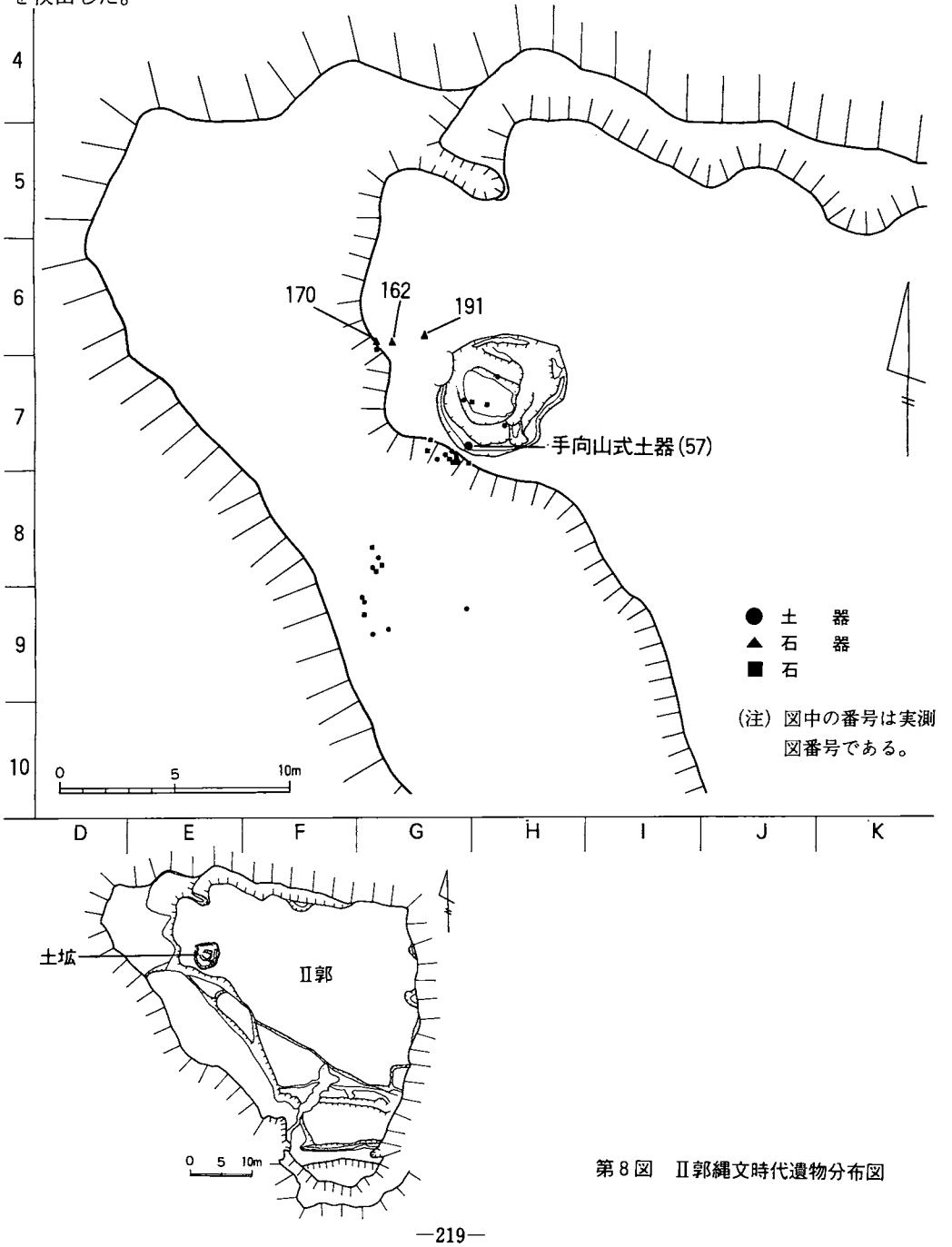
調査の結果、凹みを持つ谷部である事が判明し、大丸・藤ノ迫遺跡、狸谷遺跡とは異なる撹乱的な層があり、そこからも遺物が出土している。明らかに定位包含層と下層の撹乱層から出土した石器とは、土層の成立上からも、ある程度の時間差をつけなくではならないだろうが、遺物によって時間差を出す事ができなかった為に、一時期のものとして取りあげ、遺物の分布状態を平面分布と縦断分布によって層的な差を表しておく（第4図）。

3遺跡（高城跡、大丸・藤ノ迫遺跡、狸谷遺跡）に於ける出土石器をあげてみると、高城跡はナイフ形石器・三稜尖頭器・くさび形石器・敲石で、大丸・藤ノ迫遺跡はナイフ形石器・剝片尖頭器・三稜尖頭器・台形石器・彫器・掻器・敲石があり、狸谷遺跡第Ⅱ期はナイフ形石器・台形石器・剝片尖頭器・三稜尖頭器・彫器・掻器・削器・くさび形石器・磨石・敲石が見られる。3遺跡で類似する点は、三稜尖頭器をそれぞれ保持していることと、ナイフ形石器において基部に抉入が施された物が有る点で、3遺跡は同時期と思われるが、高城跡は調査範囲が狭く、谷部である事は考慮すべきであろう。

第4節　縄文時代

（1）Ⅱ郭の縄文時代遺物出土状況

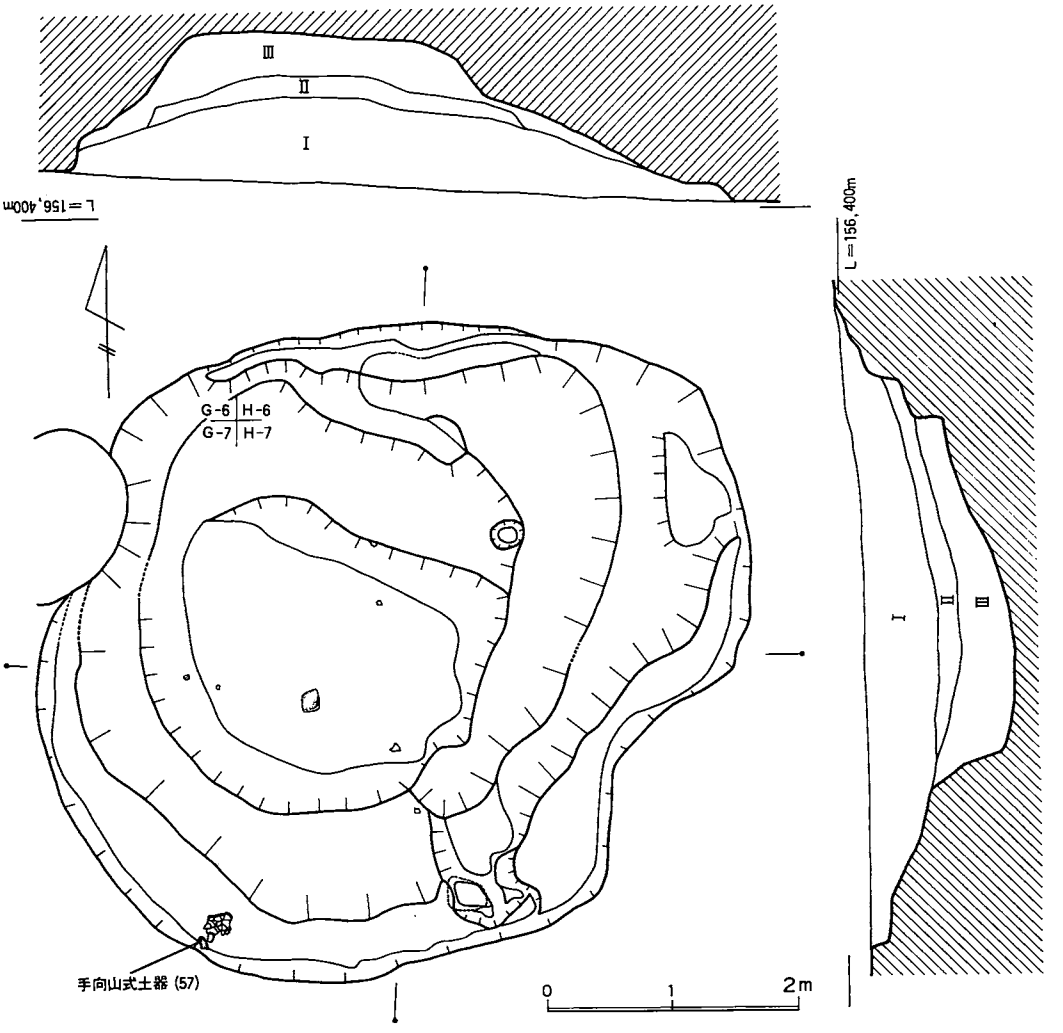
Ⅱ郭は大規模な城郭造成が行われており、Ⅱ郭の80％近くが地山のシラス面まで削られていた。西北側の先端部でⅤ層を確認したが層序の残りが悪く、Ⅴ層の下はすぐに地山層のシラスであった。遺物は僅かであったが、G－6・7区、H－6・7区から手向山式土器を伴う土坑を検出した。



第8図　Ⅱ郭縄文時代遺物分布図

（2）Ⅱ郭土坑

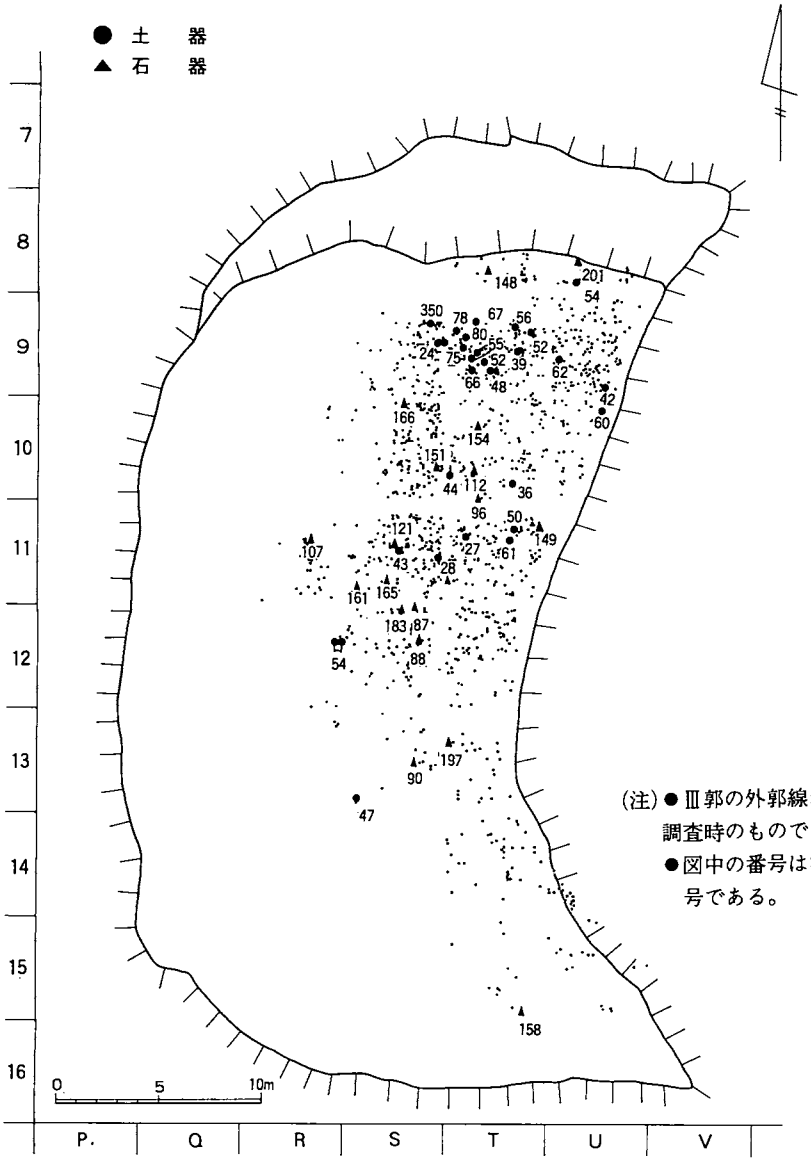
Ⅱ郭における縄文時代の包含層は、早期のⅤ層が見られるだけで、その下はすぐにⅨ層の黄シラス（ＡＴ）になっている。Ｇ―６・７区、Ｈ―６・７区から長径5,70ｍ、短径5,10ｍ、深さ1,18ｍを測る楕円形の土坑が検出された。Ⅸ層の黄シラス面まで掘り込まれており、埋土にも黄シラスのブロック土が含まれている。埋土は３層からなっており、（第９図）Ⅰ層は灰褐色土で固くしまりがあり、手向山式土器（57）が器面外側を下にした状態で出土した。Ⅱ層は暗褐色土層でカーボンを含み黄シラスの細かいブロック土をわずかに混入する。Ⅰ層よりやや軟層である。Ⅲ層は黄シラスを多く含み、しまりが無くフカフカした感じの黄褐色土層である。



第９図　Ⅱ郭土坑実測図

（３）Ⅲ郭の縄文時代遺物出土状況

Ⅲ郭全体が東谷部に傾斜しておりＴ－10・11区間に谷部の中心があった。ここでは層序の状態も良好でⅡ層の黒ボク土から地山層のシラスまで確認することができた。Ⅱ・Ⅲ郭間の堀切りに面した西側部においては、既に城郭造成の際に地山層のシラスまで削られていた。そのような状態で在ったために、遺物の分布は東側に片寄り、谷部を取り囲む出土であった。



第10図　Ⅲ郭縄文時代遺物分布図

（４）縄文式土器

高城跡から検出された土器は、南東に位置する隣接丘陵の大丸・藤ノ迫遺跡に同一のものを見ることができたが、塞ノ神式土器についての相違点は、貝殻条痕や貝殻頂部による押し引きの施文が一片も出土しなかったことである。

塞ノ神式土器

沈線区画内に撚り糸文を施すものは27・28・29・36・37・38・39・47・48・49・52・53・75・78である。条痕文だけが見られるものは45、押し引きによる刺突文が施されたものは30・31・34・35・40・41・43・44、条痕文と刺突文が施されたものは25・26・32・40・41・43・44である。

手向山式土器

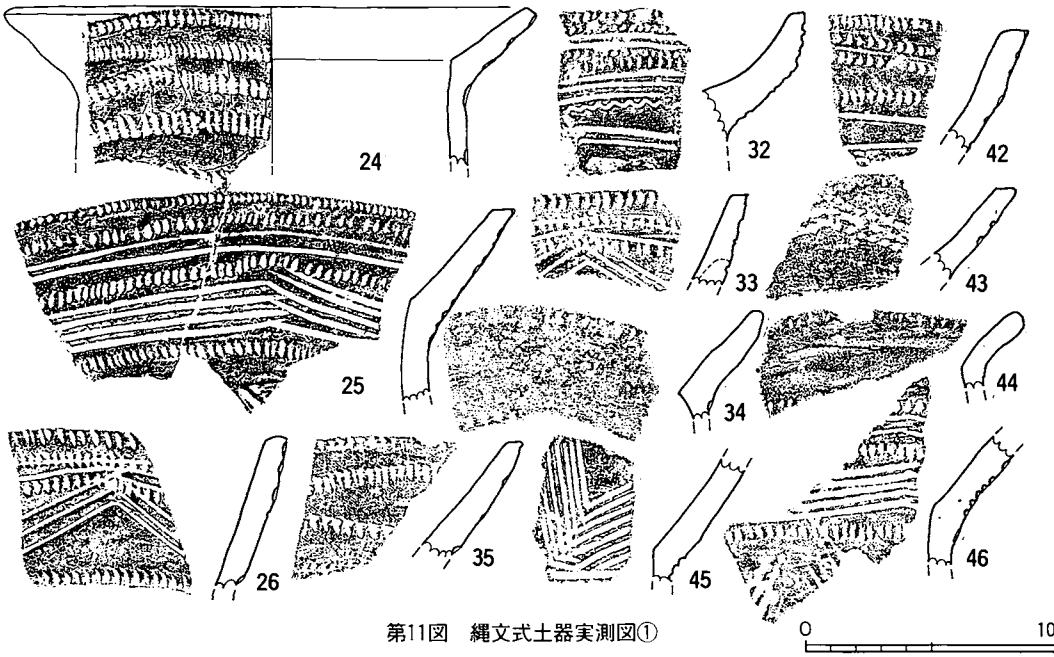
微隆起文79、菱形文80、羽状文74、波状文58・70・72・73・77、条痕文69・71・76・81・82、山形文56、などが見られる。57はⅡ郭土坑の壁際より出土したもので、「く」の字に曲がる胴部を境に上部を波状文、下部を山形文に施している。他に、59は山形文を施した後、条痕文が付けられている。また、上部に菱形文、下部に山形文が施されたものなど、２種類の文様が組み合わされた土器も見られた。

押形文土器

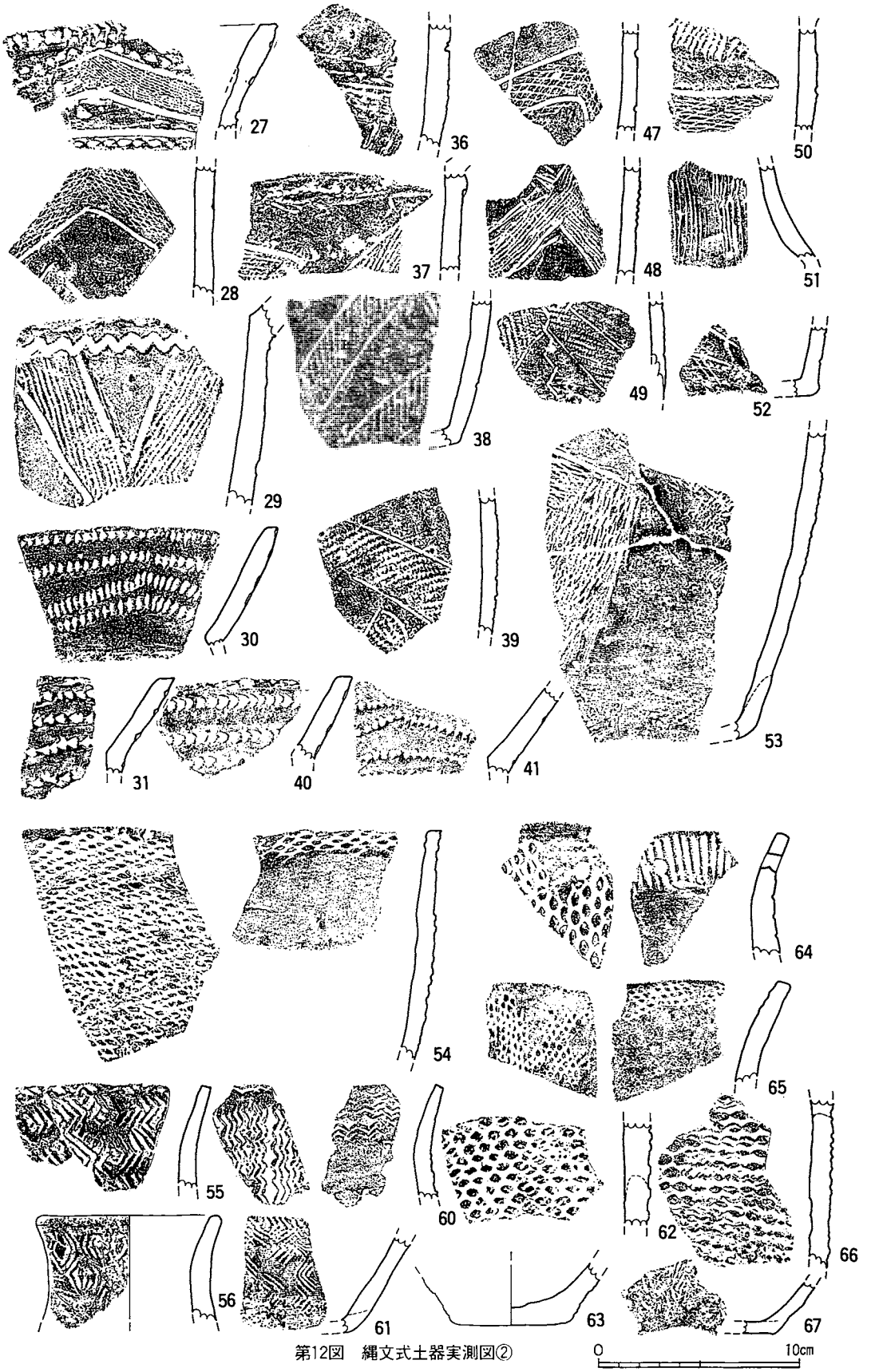
楕円文54・62・64・65・66・、山形文55・60・61・63・67を挙げることができるが、山形文の破片においては、手向山式土器との判断が困難である。

その他

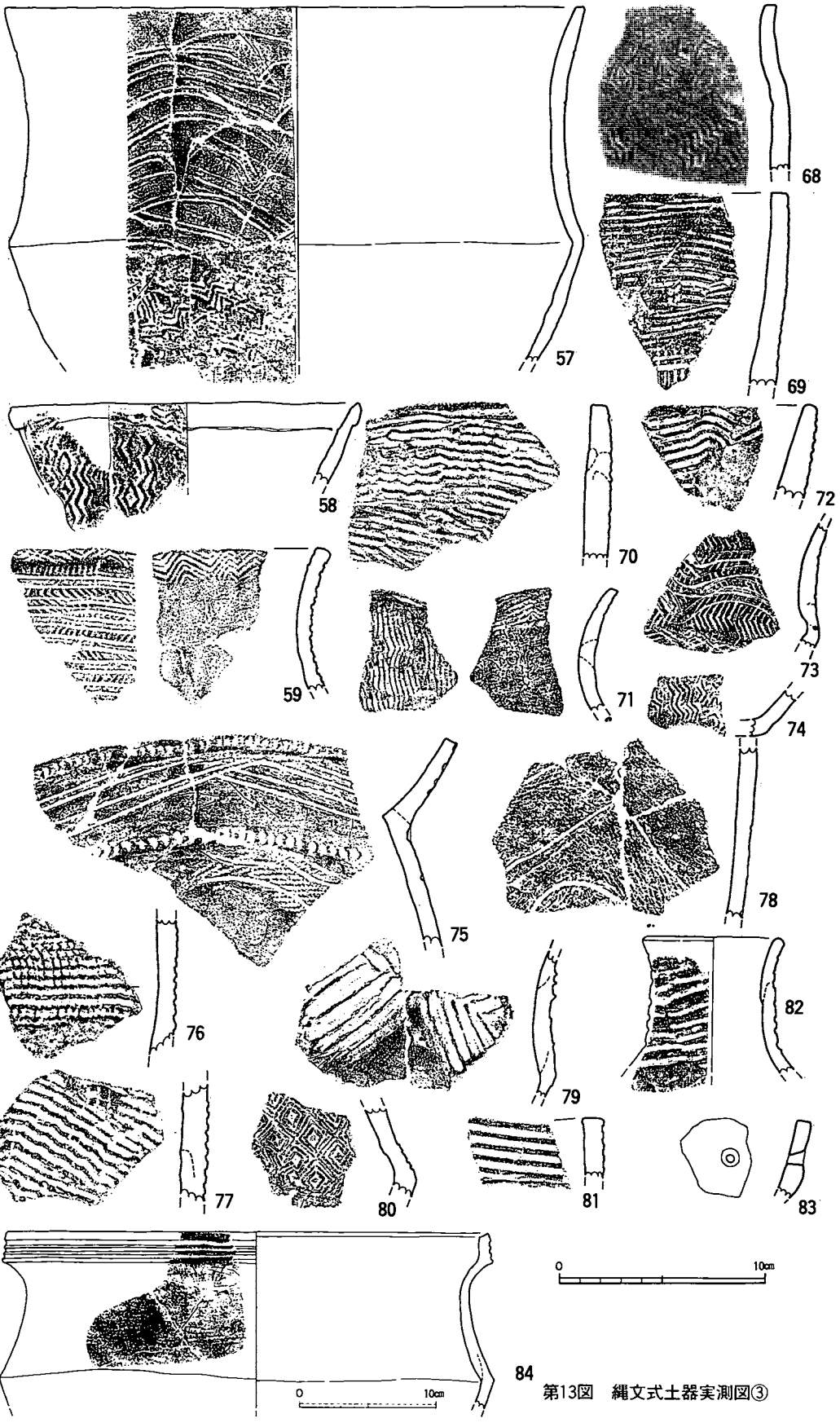
縄文時代後期の三万田式土器の深鉢形84が出土している。



第11図　縄文式土器実測図①



第12図　縄文式土器実測図②



第13図　縄文式土器実測図③

No.	形　態　の　特　徴	手　法・調　整・文　様	備　　考	出　土　地　点
24	――――――	口縁内面の上位はナデ、中位はヘラ状工具による荒い横方向調整の後ナデ。	胎土は緻密。色調は内面が鈍い橙色、外面は橙色。 塞の神式土器	D－10Ⅴ層 T－10Ⅴ層
25	口縁の上位で腰折れし、直線的に大きく外反する。	口縁の外面と内面はヘラナデ。4条の刺突文を施文後、6本の沈線を施文。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 塞の神式土器	堀切Ⅰ－C
26	――――――	口縁外面に沈線を施文した後、刺突文を施文。	胎土は緻密。色調は橙色。 塞の神式土器	Ⅱ郭表土
27	口縁の上面は扁平。	口縁の外縁に深く鋭い刻み目、その下に1条の刺突文とⅤ字状の沈線区画内に撚糸文を施文。	胎土は緻密。色調は褐色。 塞の神式土器	T－11Ⅴ層
28	――――――	体部内面は条痕をナデ消す。外面はⅤ字状の沈線区画内に撚糸文を施文。	胎土は緻密。色調は明橙色。 塞の神式土器	S－11Ⅴ層
29	器厚は1－1.3cm。	内面は横方向のナデ、頸部外面の直下に1条の太い波状の凹線、Ⅴ字状の区画沈線内に撚糸文を施文。	胎土は緻密。色調は赤褐色。 塞の神式土器	堀切Ⅱ－A
30	――――――	口縁の内外面はナデ、4条の刺突文をヘラ状工具で左から右へ施文。	胎土は緻密。色調は橙色。 塞の神式土器	堀切Ⅰ－D
31	――――――	口縁の上面と内外面は横方向のヘラナデ、4条の刺突文。	胎土は緻密。色調は鈍い橙色。 塞の神式土器	堀切Ⅰ－C
32	――――――	外面に刻み目と沈線の組み合わせ。	胎土は緻密。焼成やや不良。 塞の神式土器	G－10
33	――――――	口縁の内外面は横方向の丁寧なナデ、刺突文と沈線の組み合わせ。	胎土は緻密。色調は鈍い橙色。 塞の神式土器	Ⅲ郭
34	――――――	口縁内面は横方向のナデ、口縁外面の下位に横方向の刺突文を1条施文。研磨が激しく調整・文様とも不明確。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 塞の神式土器	Ⅱ郭表土
35	――――――	口縁内面は横ナデ、外面はナデの後に4条の刺突文が左方向から右方向へ施文。	胎土は緻密。色調は内面が鈍い褐色、外面は赤褐色。 塞の神式土器	Ⅲ郭
36	――――――	外面は沈線を境に上位が刺突文、下位が撚糸文。	胎土は緻密。色調は内面が明橙色、外面は褐色。 塞の神式土器	G－10
37	頸部直下に突帯を張り付ける。	内面はヘラ状工具による横ナデ、突帯の下端に刺突文、沈線区画に撚糸文。	胎土は緻密。色調は外面が橙色、内面は赤褐色。 塞の神式土器	S－13
38	――――――	外面に沈線による区画に撚糸文。	胎土は緻密。色調は外面が黄橙色、内面は褐色。 塞の神式土器	Ⅱ郭
39	――――――	外面に沈線による区画内に撚糸文、撚糸の単位は太い。	胎土は緻密であるが、やや軽質。色調は外面が黄橙色で内面は黒褐色。 塞の神式土器	T－9

第6表　縄文式土器観察表①

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土地点
40	――――	口縁の内外はナデ、口縁部に1条、下面に3条の刺突文。	胎土は緻密。色調は赤褐色。 塞の神式土器	堀切Ⅰ－C
41	――――	内外面は横方向のヘラナデの後に刺突文を左から右に施文。	胎土は緻密。色調は橙色。 塞の神式土器	堀切Ⅰ－D
42	口唇部は扁平。	口唇部はヘラ状工具によるナデ、内面は横ナデ、外面に4条の横方向の刺突文と2条の沈線文。	胎土は緻密。色調は外面が鈍い橙色で内面は黄橙色。 塞の神式土器	U－9
43	――――	外面に3条の刺突文。	胎土は緻密。色調は橙色。 塞の神式土器	S－10
44	口縁は大きく外反する。	口縁と頸部の外面に2条の刻み目。	胎土は緻密であるがやや軽質。色調は橙色。 焼成はやや不良。塞の神式土器	T－10
45	――――	頸部の外面に1条の沈線を施文後、口縁部にV字状の沈線を施文。	胎土は緻密。色調は外面が黄橙色、内面は明橙色。 塞の神式土器	G－10
46	口縁は途中で腰折れし、直線的に大きく外反する。	口縁の内外面はナデ、外面に刺突文と沈線との組み合わせ。	胎土は緻密。色調は橙色。 塞の神式土器	Ⅲ郭
47	――――	内面はヘラ状、もしくはハケ状の工具による荒いナデ。外面は太い沈線区画内に撚糸文。	胎土は緻密。色調は外面が褐色で内面は橙色。 塞の神式土器	S－13Ⅲ層
48	――――	内面は横ナデ、外面はV字状の区画内に撚糸文。	胎土は緻密。色調は外面が鈍い褐色で内面は黄橙色。 塞の神式土器	G－10
49	――――	外面は区画内撚糸文の最頂部をジグザグ状の沈線で区画。文様は器面が少し乾いて施文されたようで浅い。	胎土は緻密。色調は外面が橙色で内面は褐色。 塞の神式土器	堀切Ⅰ－C
50	――――	頸部直下と推定される部分に縦方向の鋭い刻み目、その下の沈線区画内に撚糸文。	胎土は緻密。色調は外面が褐色で内面は橙色。 塞の神式土器	T－11V層
51	体部は鋭く立ち上がり、内弯気味に伸びる。	内面は横ナデ、外面は撚糸文。	胎土は緻密。色調は外面が橙色で内面は黄橙色。	U－8V層
52	体部は底部から鋭く立ち上がる。	外面は沈線区画内に撚糸文。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 塞の神式土器	T－9V層
53	体部は鋭く立ち上がり、僅かに内弯気味に伸びる。	外面に沈線区画内に撚糸文。	胎土は緻密。色調は外面が橙色で内面は黄橙色。 塞の神式土器	T－13
54	口縁はやや内弯気味に立ち上がる。	内面の上部に楕円の施文、口唇部も同じ楕円文を施し、外面は全面楕円文。	胎土は緻密。色調は外面が橙色で内面は鈍い褐色。	Ⅱ郭表土
55	口縁は鋭く立ち上がりやや外反気味に伸びる。	口縁内面はナデ、下位に縦方向のナデ、口唇部と外面に山形文を施文。	胎土は緻密。色調は黄橙色。	T－9V層 Ⅳ層 } 接合

第7表　縄文式土器観察表②

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土地点
56	口縁はやや外反しながら直立気味に伸びる。口唇部は丸みを帯びる。	口唇部の施文については不明。内面の上部と外面に山形文の施文。	胎土は緻密でやや軽質。色調は黄橙色。	T－9 V層
57	胴部は「く」の字に屈曲し、口縁部は直立気味に外反する。	内面はナデ、上部に貝殻条痕、屈曲部の上面に貝殻による波状の施文、下部に山形文を施文。	胎土は締まっている。色調は橙色。 手向山式土器	G－7 土坑内
58	口縁は肥厚。	内面はナデ、外面に山形文を施文。器面の文様はかなり摩耗。	胎土は緻密。色調は橙色。 手向山式土器	Ⅱ郭
59	口縁はやや外反しながら直立気味に伸びる。	内面の上位と口唇部に山形を施文。外面は山形文を施文後に横方向の沈線を施す。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 手向山式土器	G－7
60	口縁はやや外反しながら直立気味に伸びる。	内面の上位から口唇部、外面にかけて山形文の施文。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 手向山式土器	T－9 V層
61	底部でやや鈍く立ち上がる。	外面に山形文を施文。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 押し形文？	T－11 V層
62	――――――	外面に楕円形押し形文を施文。	胎土は緻密。色調は橙色。	U－9 V層
63	体部は底部から鈍く立ち上がる。	内面は横ナデ外面は楕円形押し形文を施文。	胎土は緻密。色調は橙色。	U－9
64	口縁部はやや外反しながら直立気味に伸びる。	口唇部は横ナデ、内面上位は縦方向の刻み目文、外面は押し方楕円文を施文。口縁上位に直径8㎜の有孔。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 押形文土器（楕円文）	G－7
65	体部はやや外反。	内面上位に楕円文、外面も楕円の押形文。	胎土は緻密。色調は鈍い橙色。 押形文土器(楕円文)	Ⅱ郭表土
66	――――――	内面は横ナデ、外面は楕円文を施文。	胎土は緻密。色調は橙色。 押形文土器(楕円文)	T－9 Ⅳ層
67	体部は底部から鈍く立ち上がる。	内面は横ナデ、体部外面に山形文、指頭圧痕が残る。	胎土は緻密。色調は黄橙色。	T－9 V層
68	口縁部は内弯状に立ち上がる。	山形文の向かい合わせ施収で菱形状の文様をなし、その下部に山形文の施文。器面は磨滅。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 手向山式土器	堀切Ⅰ－D
69	体部はやや内弯しながら直立する。	内面は条痕文をナデ消す。外面は横方向に緩やかな波状を呈する条痕文。	体土は緻密。色調は橙色。 条痕文	堀切Ⅰ－C
70	体部はやや直立気味。	内面は横ナデ、外面は波状の押し形文。	体上は緻密。色調は黄橙色。 手向山式土器	堀切Ⅲ－B
71	口縁部は大きく外反する。	内面は縦ナデ、上位は横方向の波状の押形文、外面は縦方向の波状文。器面は磨滅。	胎土は緻密。色調は鈍い橙色。 手向山式土器	堀切Ⅰ－C

第8表　縄文式土器観察表③

No.	形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土地点
72	口縁部はやや外反する。	内面は斜め方向のナデ、外面は6条の条痕文を施文。	胎土は緻密。色調は外面が褐色で、内面は橙色。 手向山式土器	堀切Ⅰ－B
73	胴部の「く」の字に屈曲する部分。	内面はナデ、外面は羽状文の施文後波状文を施文。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 手向山式土器	堀切Ⅰ－D
74	体部は底部から鈍く立ち上がる。	外面に山形文が施文。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 押形文（山形文？）	T－9
75	体部は上位で腰折れし、僅かに内弯しながら直線的に大きく外反する。	外面は沈線と刺突文の組み合わせ、下位に沈線による区画内に撚糸文。	胎土は緻密。色調は外面が橙色で、内面は黄橙色。 塞の神式土器	T－9 Ⅴ層
76	――――	内面は横ナデ、外面は横方向の条痕文。	胎土は緻密。色調は外面が黄橙色で、内面は鈍い褐色。 条痕文	堀切Ⅰ－C
77	――――	内面は荒い横ナデ、外面は緩やかな波状を呈する押形文。	胎土は緻密。色調は外面が橙色で、内面は鈍い橙色。	堀切Ⅲ－B
78	――――	外面は撚糸文を先に施文し、沈線部分で区画を行った後に区画外の撚糸文をナデ消し。	胎土は緻密。色調は橙褐色。 塞の神式土器	T－9
79	胴部の「く」の字に屈曲する部分。	内面は横ナデ、外面は微隆起線文。	胎土は緻密。色調は鈍い橙色。 手向山式土器	T－13 T－10 } 接合
80	胴部の「く」の字に屈曲する部分。	外面に菱形押形文を施文。胴部最大径より下には文様は見られない。	胎土は緻密。色調は黄橙色。 手向山式土器	T－9
81	口縁は外反気味に直立する。壺形を呈するものと思われる。	内面は横ナデ、口縁外面には横方向の単沈線文を組み合わせた施文。	胎土は緻密。色調は橙色。	R－12
82	口唇部は平坦。	口唇部と内面はヘラ状工具による横ナデ。外面は横方向に押し引きによる沈線文を施文。	胎土は緻密。色調は橙色。 手向山式土器	Ⅲ・Ⅳ郭間堀切
83	器柱は不明であるが、外面からの穿孔が見られる。	内面はナデ、外面は磨滅により撚糸文は不明。	胎土は緻密。色調は橙色。 手向山式土器？	表採
84	体部は途中で腰折れの状態となり外反する。口縁部は直立し、肥厚する。	内面は横方向の荒いヘラナデ、口縁部の外面に3本の沈線文。	胎土は緻密。色調は鈍い灰褐色。 三万田式土器	Ⅲ郭

第9表　縄文式土器観察表④

（５）縄文時代石器

石鏃

22点が出土した。層的な出土は５点（87・88・90・96・103）である。22点の分類は、正三角石鏃が85・101の２点、凹基三角石鏃が86・87・88・89・93・94・95・96・99・100・102・103・104の13点、Ｕ基二等辺三角石鏃が97・105・106の３点で、90・91・92・98・は未完成品である。

尖頭状石器

107・108・109の３点が出土したが、層的な出土は107の１点である。107は双方に尖頭部を持ち、断面は凸レンズ状になる。108・109は一方に尖頭部を持ち、基部は両面から剝離が行われて稜線を作り出し、断面は107と同じように凸レンズ状である。クサビ形石器とも思われるが、ここでは尖頭状石器として取り上げた。

石　匙

10点が出土したが、層的な出土は31の１点だけである。10点の分類は、縦型が110・111・113の３点で、いずれも裏面に断面を残し、基部両側にわずかな抉りがあり、側面に細かな刃部を作り出す。三角形は112の１点、横型は114～119の６点である。

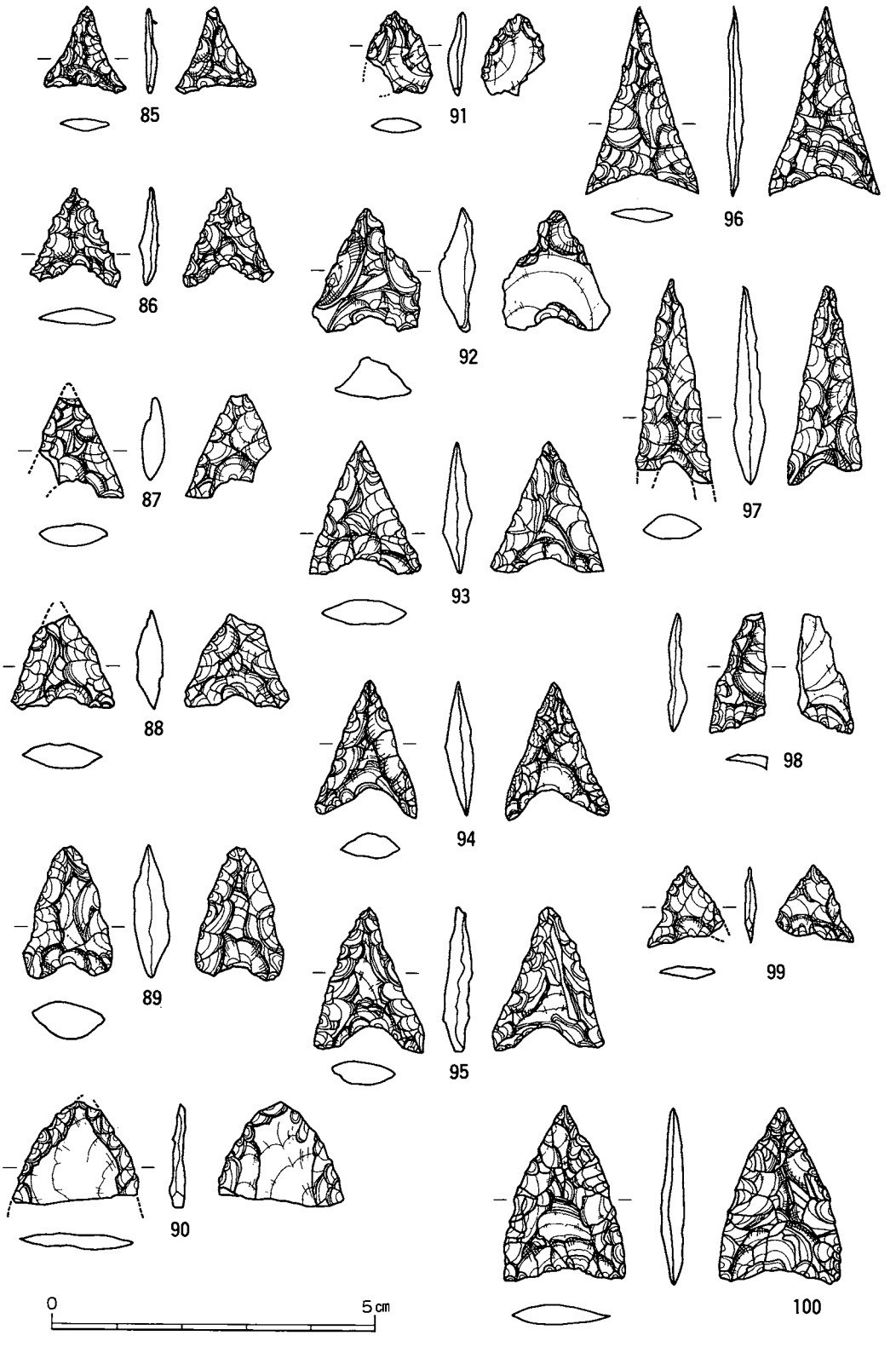
二次加工・スクレーパー

二次加工石器は、剝片の外形を変えることなく部分的に刃部加工を施したもので、24点（120～144）が出土し、層的な出土は４点（121・125・135・142）である。

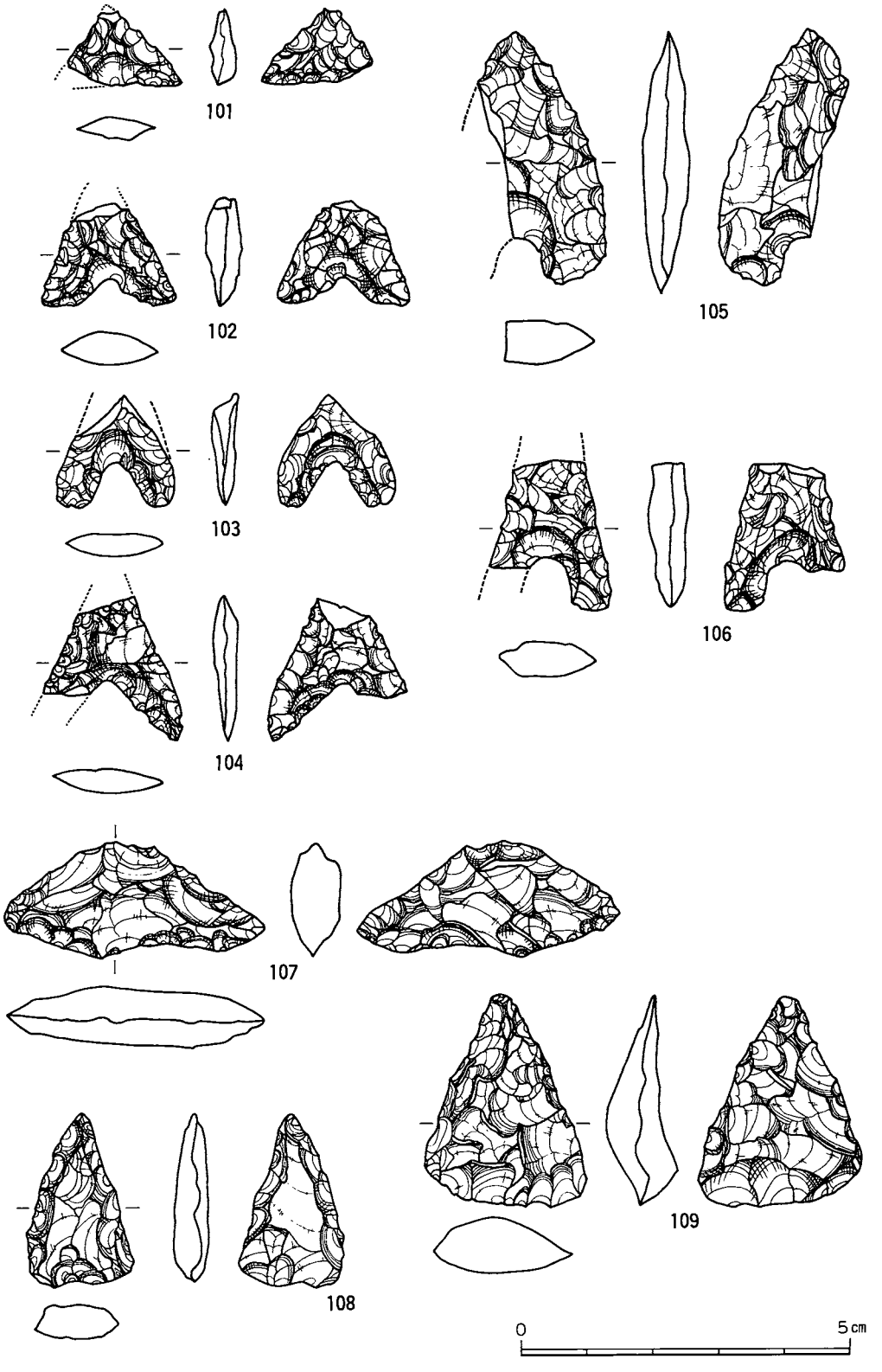
スクレーパーは、剝片に何枚かの剝離を加えて器形を作り出し、後に刃部加工を施したもので、14点（145～158）が出土し、層的な出土は５点（148・149・151・154・158）である。

石　斧

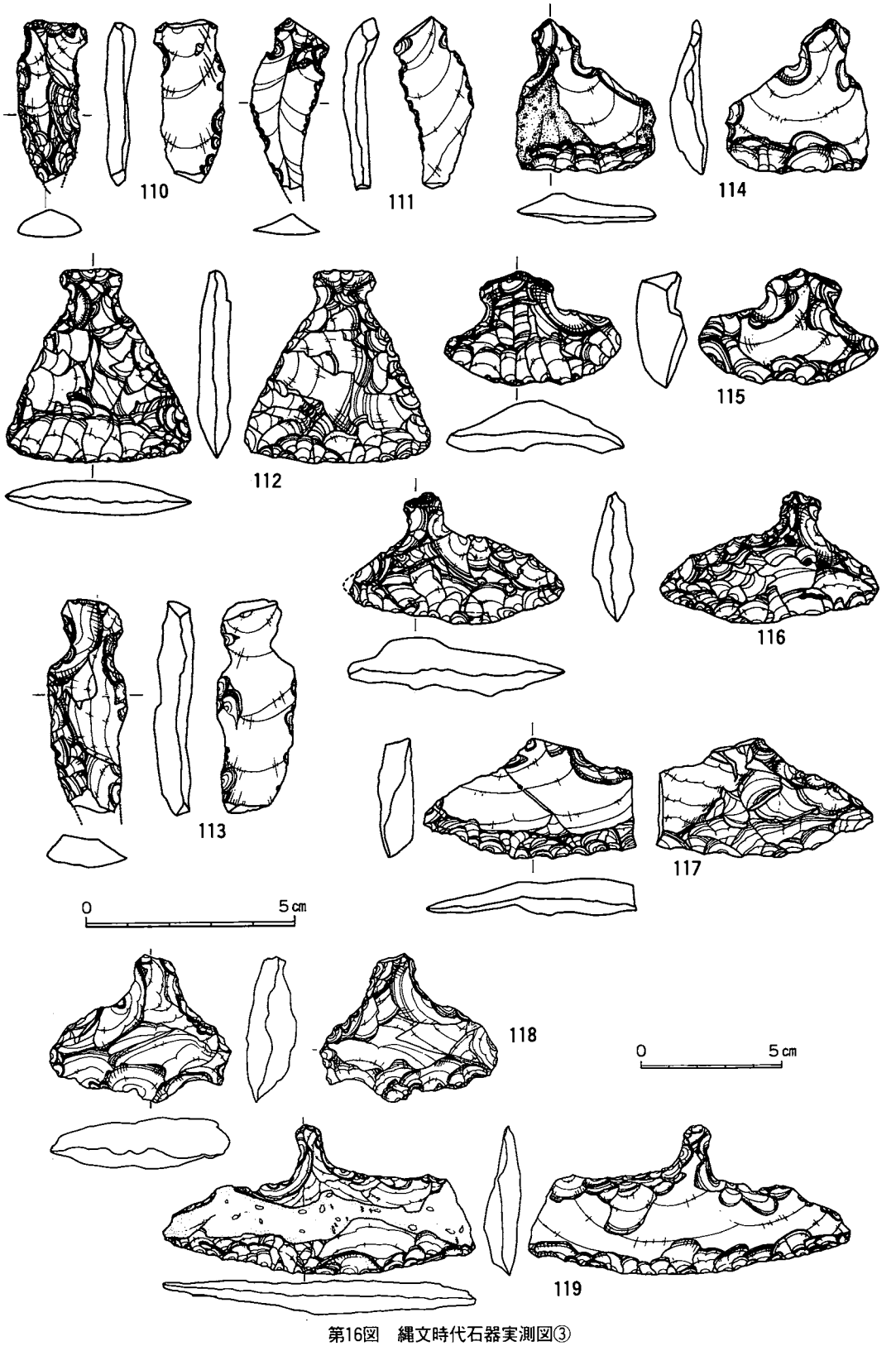
磨製石斧が１点（159）と、打製石斧が２点（160・161）出土した。層的な出土は161の１点のみである。159は安山岩製の磨製石斧で刃部のみである。正面部は凸レンズ状に丸みを持ち、残存部総ての面が研磨されており、裏面は研磨前の剝離が残っている。主に刃部と側縁を研磨したものと思われる。160は泥質砂岩製の打製石斧で完形品であろう。器形は寸づまりで、基部は側縁部の両面剝離に鈍く尖らすような剝離を行っている。正面部と裏面部の稜線部の高まりに擦れたような研磨痕が見られるが、着柄時の痕跡と考えられる。161も泥質砂岩製の打製石斧で刃部の方を欠損するが、両面に自然面を残し、両側面からの剝離が行われた後に基部先端から両面が剝離されたものと思われる。正面部と裏面部の稜線部の高まりに160とおなじような着柄による摩擦痕がある。



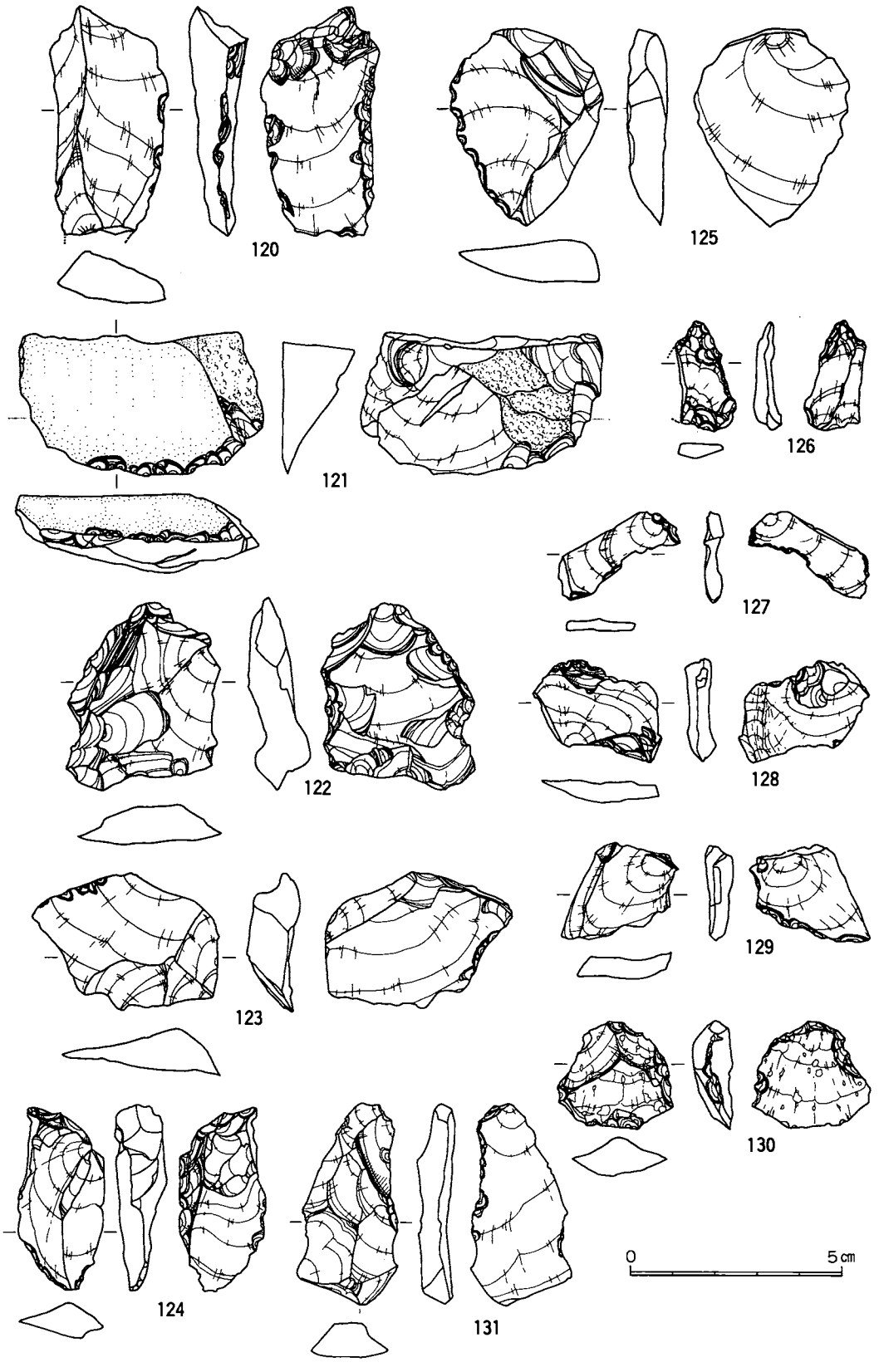
第14図　縄文時代石器実測図①



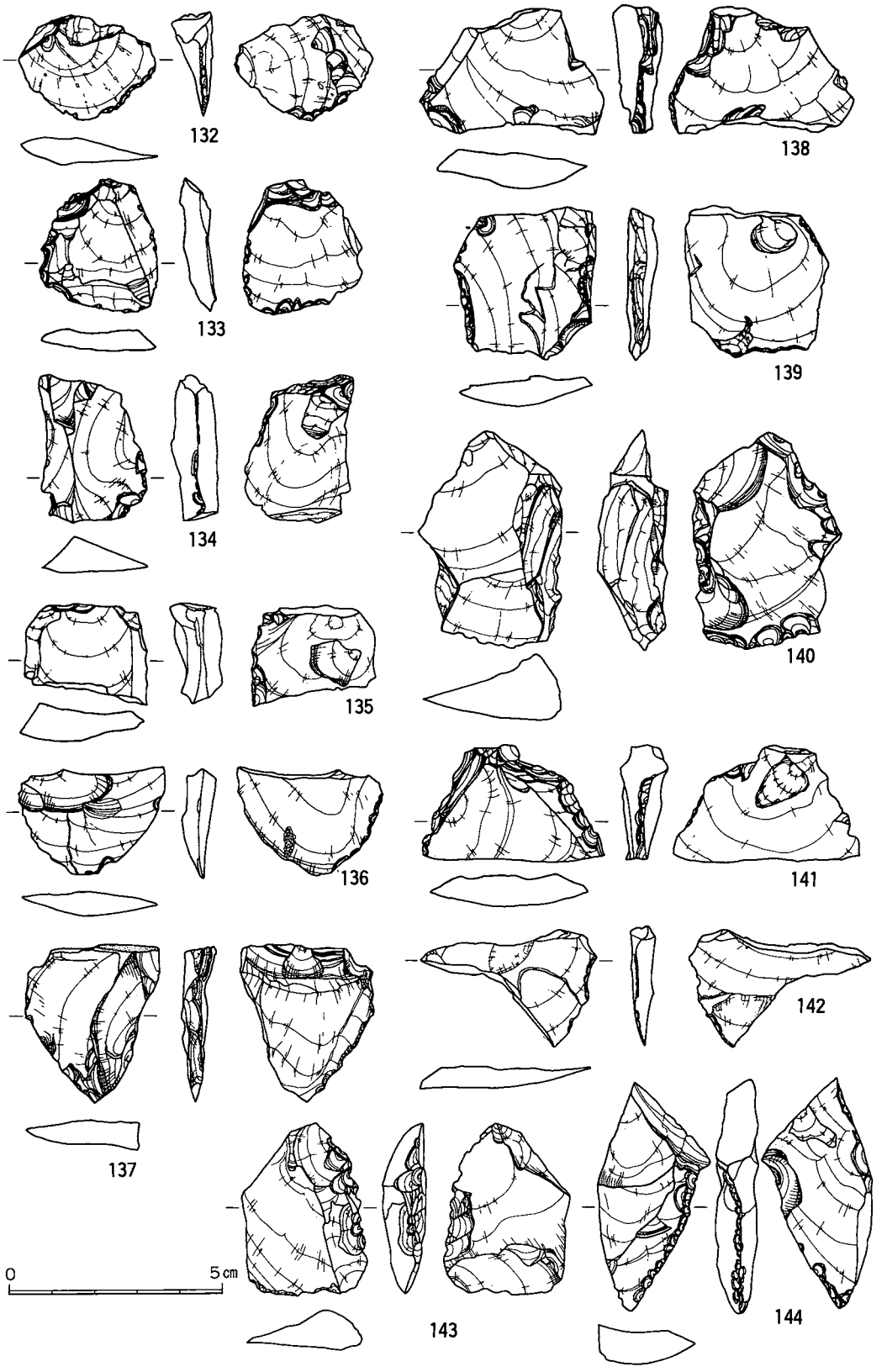
第15図　縄文時代石器実測図②



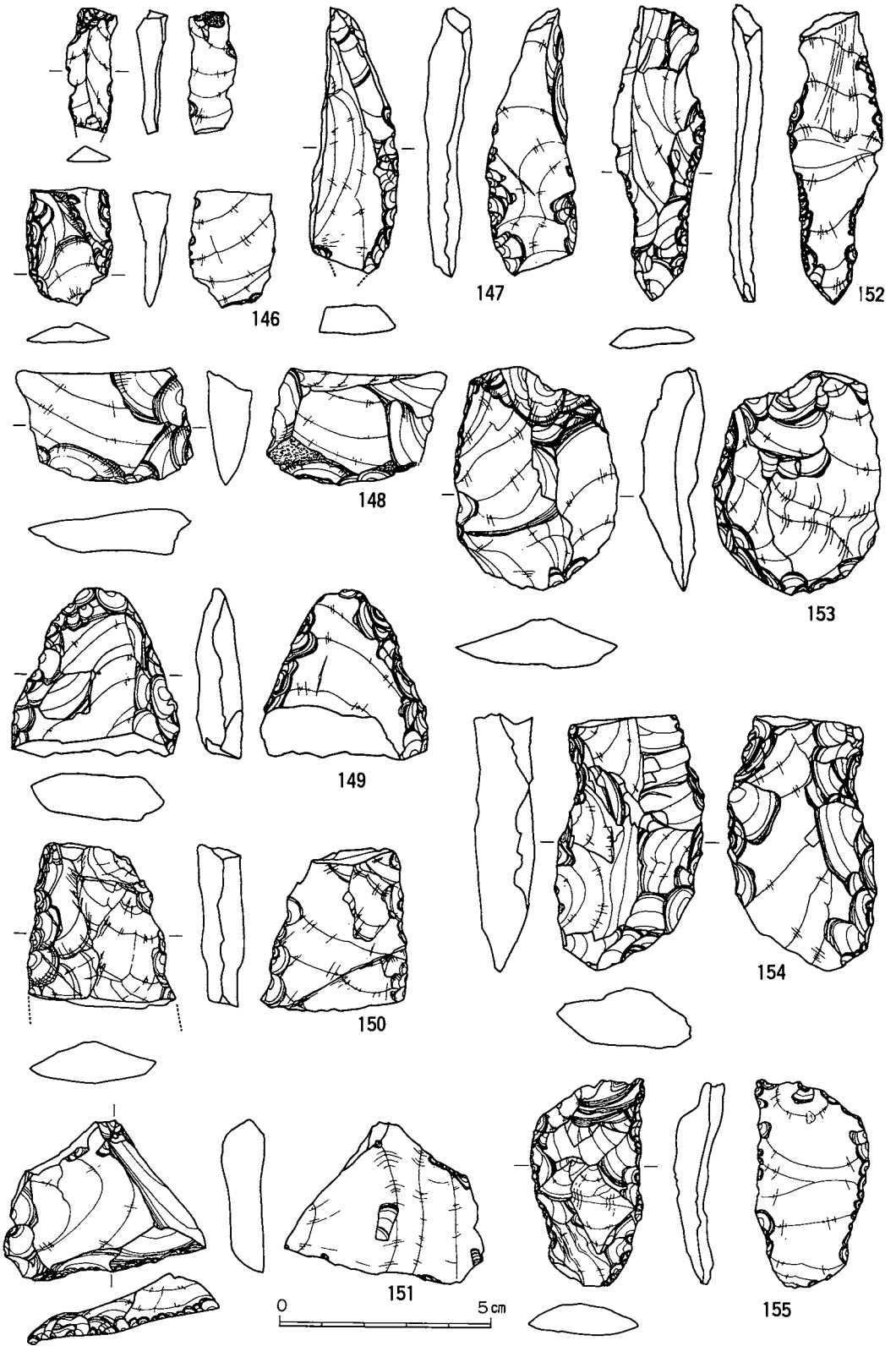
第16図　縄文時代石器実測図③



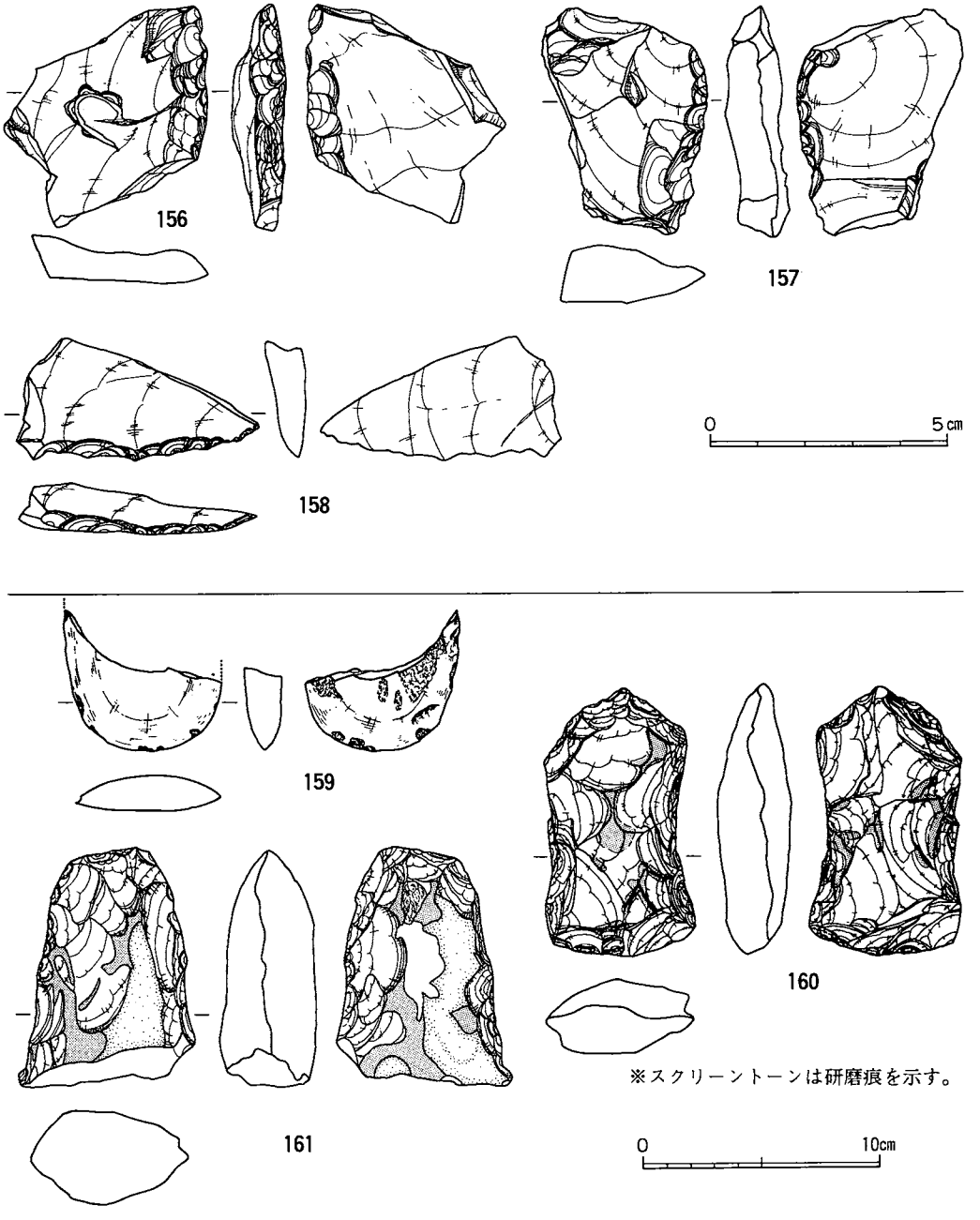
第17図　縄文時代石器実測図④



第18図　縄文時代石器実測図⑤



第19図　縄文時代石器実測図⑥



第20図　縄文時代石器実測図⑦

No.	器種	石材	計測値				出土地点
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
85	石鏃	黒燿石	1.26	1.22	0.12	0.15	表採
86	〃	チャート	1.49	1.32	0.15	0.36	表土
87	〃	チャート	(1.55)	(1.32)	0.33	0.53	S－12Ⅳ層
88	〃	黒燿石	(1.39)	1.50	0.38	0.66	S－12Ⅳ層

第10表　縄文時代石器計測表①

No.	器種	石材	計測値				出土地点
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
89	石鏃	チャート	1.98	1.31	0.47	1.30	Ⅱ郭Ⅱ層
90	〃	チャート	(1.56)	(1.87)	0.23	0.89	S－13Ⅲ層
91	〃	チャート	(1.27)	(0.97)	0.27	0.25	表採
92	〃	チャート	1.82	1.57	0.53	1.13	Ⅱ・Ⅲ郭間
93	〃	チャート	2.00	1.70	0.42	0.99	Ⅱ郭表土
94	〃	チャート	2.10	1.68	0.48	0.92	Ⅱ郭表土
95	〃	チャート	2.20	1.73	0.35	1.26	Ⅳ郭東堀
96	〃	黒燿石	2.85	1.72	0.19	0.16	T－7　Ⅳ層
97	〃	黒色珪岩	(3.13)	(1.16)	0.46	1.30	Ⅱ郭Ⅱ層
98	〃	黒燿石	(1.80)	(0.79)	0.25	0.30	Ⅱ郭
99	〃	黒燿石	1.16	(1.10)	0.14	0.20	表採
100	〃	チャート	2.63	1.82	0.31	1.50	堀切Ⅰ-C下位
101	〃	チャート	(1.10)	(1.67)	0.32	0.62	
102	〃	黒燿石	(1.51)	1.98	0.48	1.28	Ⅱ郭
103	〃	チャート	(1.66)	1.80	0.35	0.98	S－10　一括
104	〃	黒燿石	(2.15)	(2.05)	0.36	0.95	Ⅲ郭表土
105	〃	チャート	3.80	(1.48)	0.69	4.31	Ⅲ郭東斜面
106	〃	チャート	(2.22)	(1.83)	0.69	2.05	Ⅱ郭表土
107	尖頭器	チャート	1.71	3.92	0.75	5.53	R－11Ⅳ層
108	〃	チャート	2.56	1.61	0.50	2.57	Ⅱ郭Ⅱ層
109	〃	チャート	3.20	2.46	0.84	5.48	堀切Ⅰ－C
110	石匙	チャート	(3.75)	1.66	0.64	4.50	堀切Ⅰ－C
111	〃	チャート	(4.05)	1.76	0.64	3.37	堀切Ⅰ－C
112	〃	チャート	4.60	4.39	0.75	14.11	T－10Ⅳ層
113	〃	チャート	(5.03)	1.84	0.85	8.56	Ⅱ郭北斜面
114	〃	安山岩	3.67	3.34	0.78	7.90	T－9
115	〃	黒燿石	2.68	4.26	1.19	9.58	Ⅲ郭Ⅱ層
116	〃	石英	3.12	5.18	1.00	11.54	堀切Ⅲ－B
117	〃	チャート	(2.82)	(5.10)	0.88	12.09	Ⅱ郭
118	〃	チャート	5.14	6.53	1.76	43.75	堀切Ⅲ－B
119	〃	安山岩	5.25	11.42	1.33	47.03	Ⅱ郭表土
120	二次加工	チャート	5.41	2.87	1.36	15.91	Ⅱ郭表土
121	〃	チャート	3.40	5.83	1.73	35.68	S－11Ⅴ層
122	〃	チャート	4.45	3.56	1.48	15.81	表採
123	〃	チャート	3.21	4.52	1.30	11.04	堀切Ⅰ－D中位
124	〃	チャート	4.35	2.06	1.24	9.78	Ⅱ郭表土
125	〃	チャート	4.73	3.65	0.95	16.85	R－9Ⅴ層
126	〃	チャート	(2.64)	(1.28)	0.60	1.65	G－11
127	〃	チャート	2.05	2.90	0.41	1.39	Ⅱ郭表土
128	〃	チャート	2.40	3.02	0.76	3.39	Ⅱ郭表土
129	〃	チャート	2.28	2.75	0.64	3.36	Ⅲ郭東斜面
130	〃	黒燿石	2.49	2.68	0.95	4.72	Ⅱ郭表土
131	〃	チャート	4.83	2.43	0.87	8.12	Ⅳ郭Ⅱ層
132	〃	黒燿石	2.46	3.28	0.95	4.60	Ⅲ郭表土

第11表　縄文時代石器計測表②

No.	器種	石材	計測値				出土地点
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
133	〃	チャート	3.12	2.70	0.63	5.93	堀切Ⅰ－C
134	〃	チャート	3.40	2.56	1.13	9.14	Ⅱ郭表土
135	〃	チャート	2.36	2.87	1.19	7.24	T－10
136	〃	安山岩	2.46	3.45	0.80	4.70	Ⅲ郭Ⅱ層
137	〃	チャート	3.53	3.15	0.73	6.40	Ⅱ郭表土
138	〃	チャート	2.92	4.32	1.19	12.24	Ⅳ郭東斜面
139	〃	チャート	3.54	3.40	0.66	8.70	堀切Ⅰ－D中位
140	〃	チャート	5.12	3.45	1.67	22.98	Ⅲ郭Ⅱ層
141	〃	チャート	2.73	4.32	1.10	11.27	堀切Ⅱ－B
142	〃	チャート	4.18	2.73	0.55	4.44	U－10
143	〃	チャート	4.06	2.95	1.04	9.45	G－7H－7土拡
144	〃	チャート	5.42	2.60	0.85	12.49	Ⅳ郭
145	スクレーパー	黒耀石	2.83	1.08	0.65	1.64	Ⅱ郭一括
146	〃	チャート	2.78	2.00	0.84	3.87	SX－02
147	〃	チャート	5.25	2.10	0.93	12.25	Ⅱ郭Ⅱ層
148	〃	安山岩	2.65	4.14	0.98	13.07	T－8Ⅴ層
149	〃	チャート	3.98	3.92	1.04	19.26	T－11Ⅴ層
150	〃	チャート	3.68	3.52	1.02	14.91	堀切Ⅲ－A
151	〃	チャート	3.83	4.72	1.00	18.16	S－10Ⅴ層
152	〃	チャート	6.88	2.09	0.67	9.07	表採
153	〃	チャート	5.18	3.84	1.37	26.32	表採
154	〃	チャート	5.96	3.35	1.41	32.44	T－10Ⅴ層
155	〃	チャート	4.80	2.55	0.92	10.966	堀切Ⅱ－B
156	〃	チャート	4.61	4.27	1.09	18.71	Ⅲ郭東斜面
157	〃	チャート	4.82	3.45	1.18	21.81	U－9 一括
158	〃	チャート	2.66	5.07	0.791	10.11	T－15Ⅳ層
159	磨製石斧	安山岩	5.85	6.58	1.60	48.30	堀切Ⅰ－C下位
160	打製石斧	泥質砂岩	11.21	6.40	3.05	267.50	堀切Ⅰ-C下位
161	〃	泥質砂岩	10.00	7.44	4.05	334.07	S－11

第12表　縄文時代石器計測表③

磨石・敲石

39点が出土した。層的な出土は9点(165・166・173・178・183・187・191・197・198)・114)であった。磨石・敲石はその用途によって2分類され、更に形状によって細分される。

第1類　磨石や敲石として併用されている。

a．石器の形状は扁平で円形、もしくは楕円形を呈する。(162～171)

b．石器の形状は厚みを持ち、楕円形を呈する。(172～179)

c．石器の形状は厚みを持ち、楕円形。磨石の一面は丸みを持つように使用され、他面はやや平坦になるように使用されている。(180～184)

第2類　敲石や台石として併用されている。

a．石器の形状は球形・卵形を呈するもので、自然面を多く残すもの。(185～189)

b．石器の形状は扁平で不定形。平坦部分は自然面で側縁部に敲打痕がある。(190～192)

c．石器の形状は縦長で、自然面を残し、両先端部と側縁の稜線部に強い敲打痕がある。(193～198)

d．石器の形状は縦に長く不定形で扁平。自然面を残す。(199・200)

礫　器

5点（201～205）が出土した。層的な出土は202・205の2点である。

201・202は砂岩の自然石を用いており、敲石との併用石器である。201は先端と正面に剝離を行い刃部を作り出している。202は側面中央に集中した敲打痕と裏面に一枚の大きな剝離がある。203・204・205の3点は、自然面を持つ大きな剝片より作り出されたものである。203は砂岩で寸詰まりの横長剝片を使用しており、右側面部に抉入状の剝離が見られ、片刃である。先端部は両面とも細かな調整剝離によって両刃の刃部を作り出している。204は荒い粒子の砂岩を用いており、敲石との併用石器で、上部に敲打痕が見られる。下部の礫面は両面に10枚以上の剝離を行い両刃の刃部を作り出している。205も砂岩で、礫器として使用した後の欠損と思われる。正面右側に両面の交互剝離、正面下部は両面に10枚以上の剝離により、鈍い両刃を作り出している。

異形石器

どの石器にも分類できないような遺物が3点（206・207・208）あり、ここでは、異形石器として取り上げる。206は安山岩で石鏃と思われる。長さ2.20cm、幅4.95cmを測る。207も安山岩で横長の剝片を使用した尖頭器と思われるが、側縁部に左右2づつの突起を持ち、先端に近い突起から先端の尖りを作り出す。208は紫赤色の粘板岩で、層的な出土をした。全面の剝離加工が行われ、後に両側縁に細かな剝離が施されている。正面先端部には長軸方向への研磨が見られ、裏面先端部にも斜めの研磨が見られる。更に、先端の両側縁部にもわずかに研磨痕が見られる。

石製垂飾品

4点（209・210・211・212）が出土した。層的な出土は 210の一点である。209は紫赤色の粘板岩を使用した楕円形の扁平な礫である。中央に両面より穴を穿ち、上側縁のみをやや直的になるように削り落としてある。210は滑石で石器の再製品である。正面にはラッパ状に中を絞る穿孔があり、その穿孔口下部に直径1㎜ほどの穴が途中まで穿かれて止まっている。これは中央の穿孔前のものと思われる。両側縁部は金属的な物で抉り取られたような削痕がある。211は粘板岩製で、平坦部は両面とも削痕が見られる。厚みをそろえた後に周囲を削り、逆水滴形を作り出している。穿孔は両面から3ケ所に穿かれ、穿孔後、外周の削りが行われたものと思われる。212は安山岩で、両面に剝離が見られる。板状に加工した後に穿孔されたもので

あろう。正面穿孔口に花弁状の剝離が見られ、裏面の側縁四辺には削痕が見られる。

用途不明石器

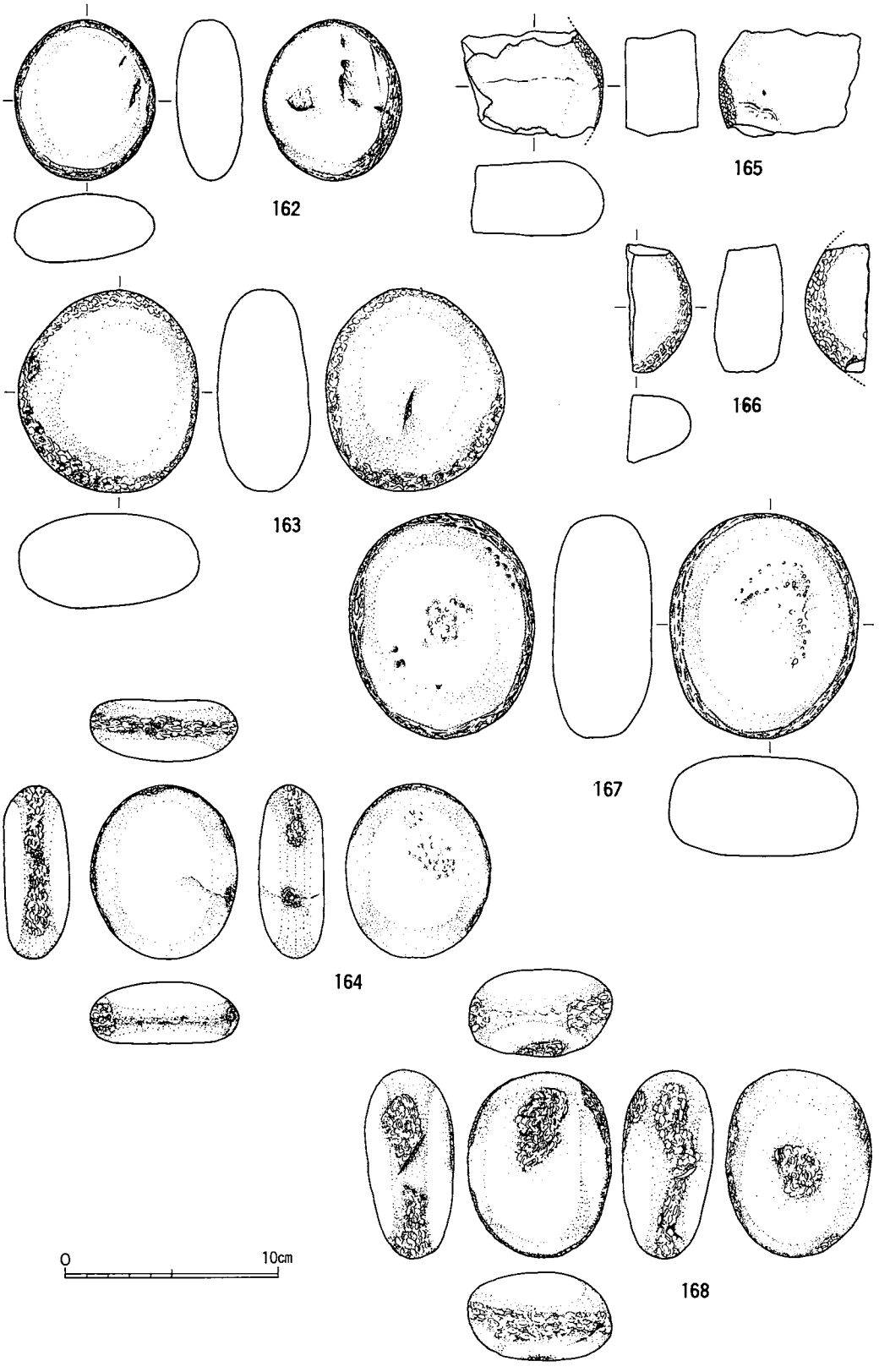
垂飾品の穿孔前の一工程と思われるものは（213・214・215・217・219・221・222・223）の８点である。いずれも粘板岩で、垂飾品の器面整形と同じと思われる痕跡が見られる。213は正面の中央部に斜め方向の削痕が見られる。214は正面に自然面を残し、裏面は剝離によって厚みを調整したと思われる。側縁は荒い削り落としで丸みを有する器形を作り出している。215は紫赤色の粘板岩で、側縁には直角的な削痕が見られる。荒い削りを行った後に直角的な削りで円を作り出したものと思われる。217は両面に様々な角度の削痕があり、丸みを持つ肩部に成形されている。外周に円形を意識したと思われる削痕が残る。219は３っの穿孔を持つ211に外形が似かよっている。正面は左側に自然面を残し、長軸方向成形の削痕がある。裏面は右下にやや固い節理が突起し、凹みを持つ削痕がみられるので、整形に砂を用いたと思われる。221は正面にのみ整形の痕跡がある。扁平礫の厚みの部分だけに剝離を施し、更に、斜め方向への削痕が認められる。222は側縁が欠損している。正面右側縁にのみ縦方向への荒い削痕があり、両面とも自然面を残している。223の側縁に見られる直角的な削痕は仕上げの工程と思われる。裏面上部に斜め方向の平坦部成形の削痕が認められ、下半分は自然面であるころから、使用された原石は形の整った扁平礫であったと思われる。

その他、216は粘板岩で正面上部を欠損する。両面とも研磨され、横断面は凸レンズ状に丸みを帯びている。両側縁は長軸方向の研磨が行われているが、石剣に見られるような刃部は作り出されていない。218は砂岩の自然石で、上半分の総てに細かな削痕が見られる。220は粘板岩で正面平坦部に丸みを持った研磨痕が見られる。裏面は殆ど自然面で下方肩部と右肩部にわずかな面取りの削痕が見られる。弥生時代の石包丁的な石器であるが、刃部が存在しない。

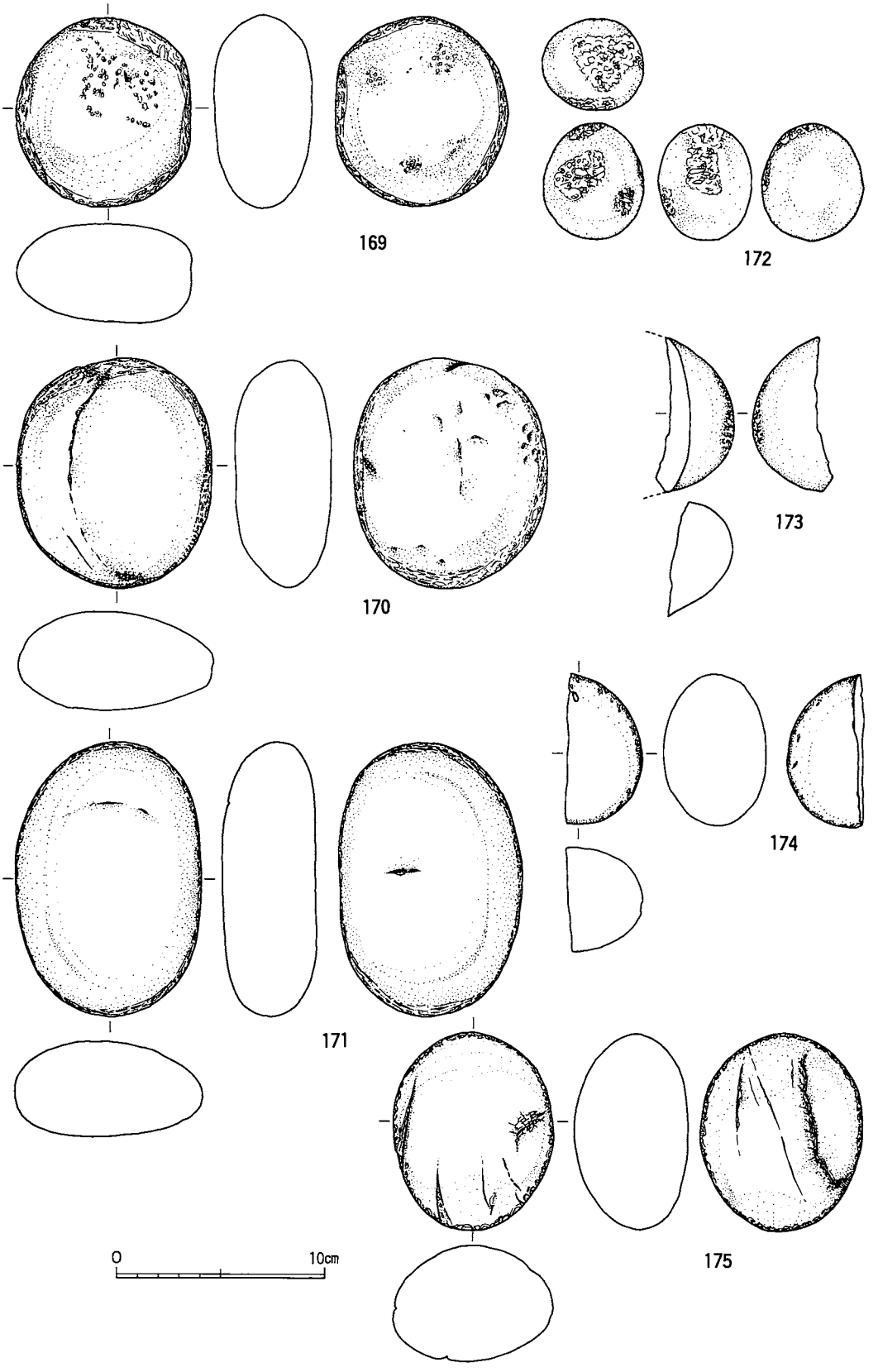
石　皿

224は砂岩製の石皿（凹石）である。使用度が高く、凹みがかなり深くなっている。中央部あたりで破損したと思われ、半欠品である。底面及び四周の面は研磨が施されており、四角形を呈していたものと思われる。

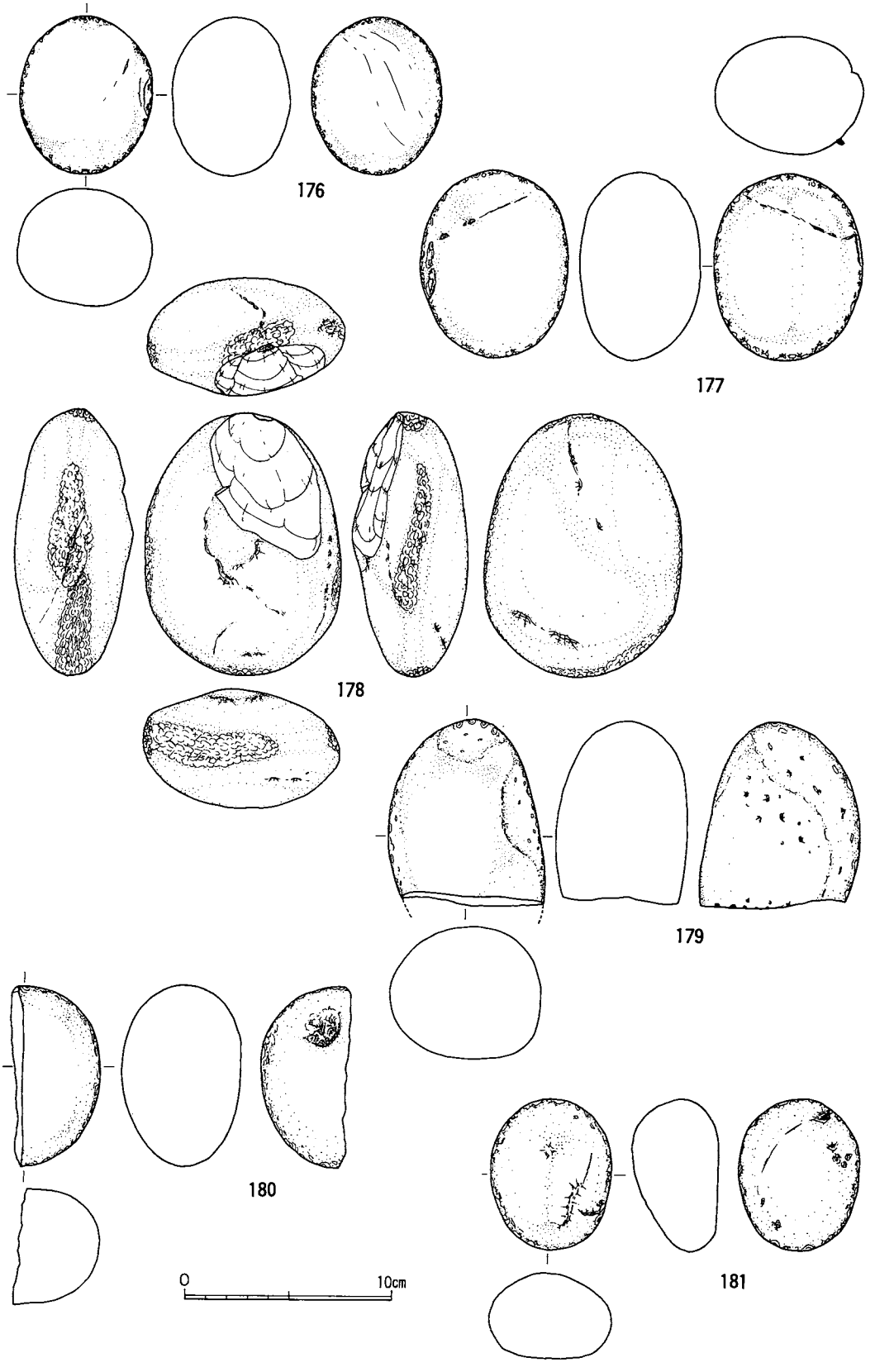
残存部分の長さ11.5cm，高さ9.2cmを測る。



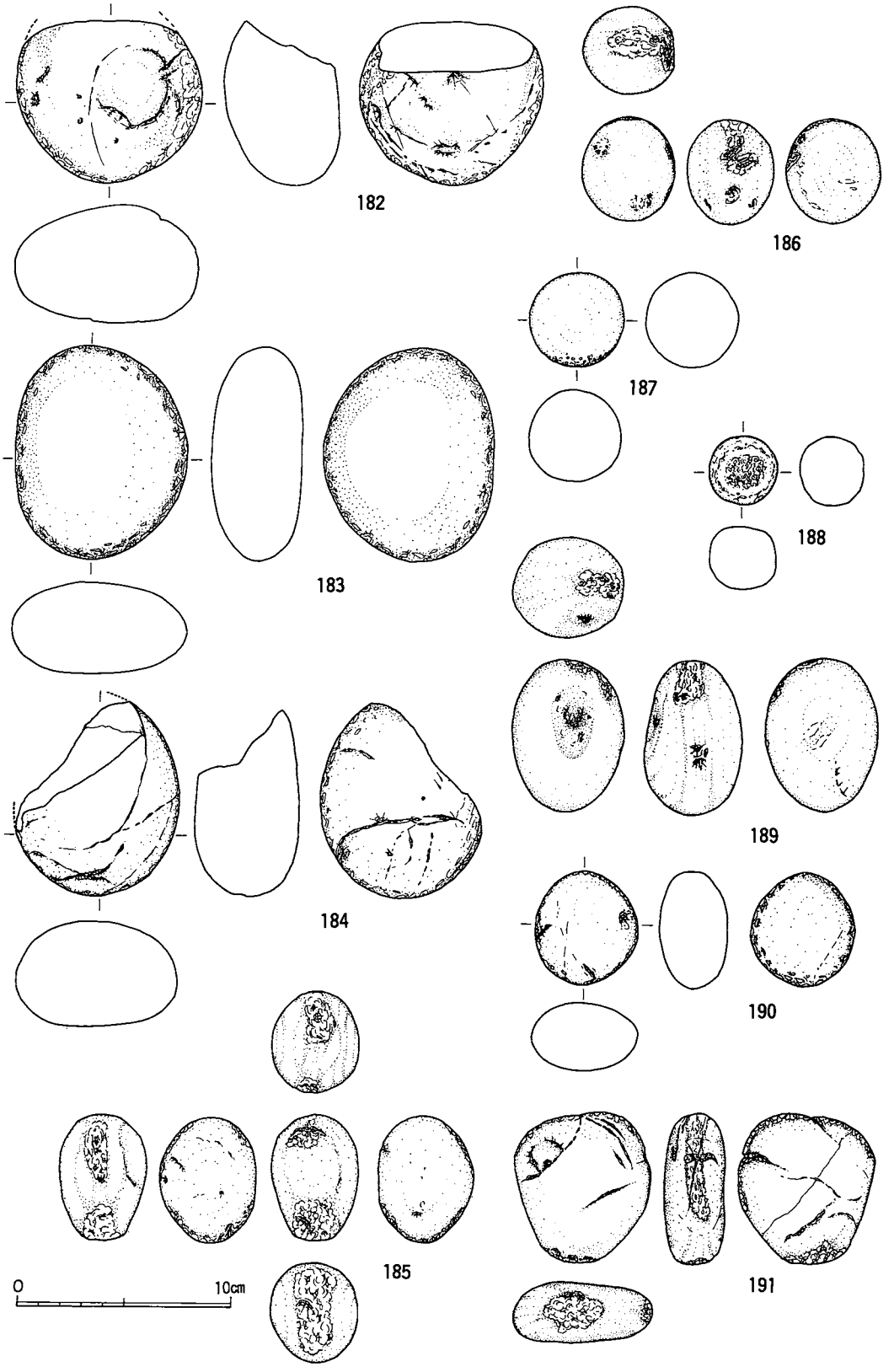
第21図　縄文時代石器実測図⑧



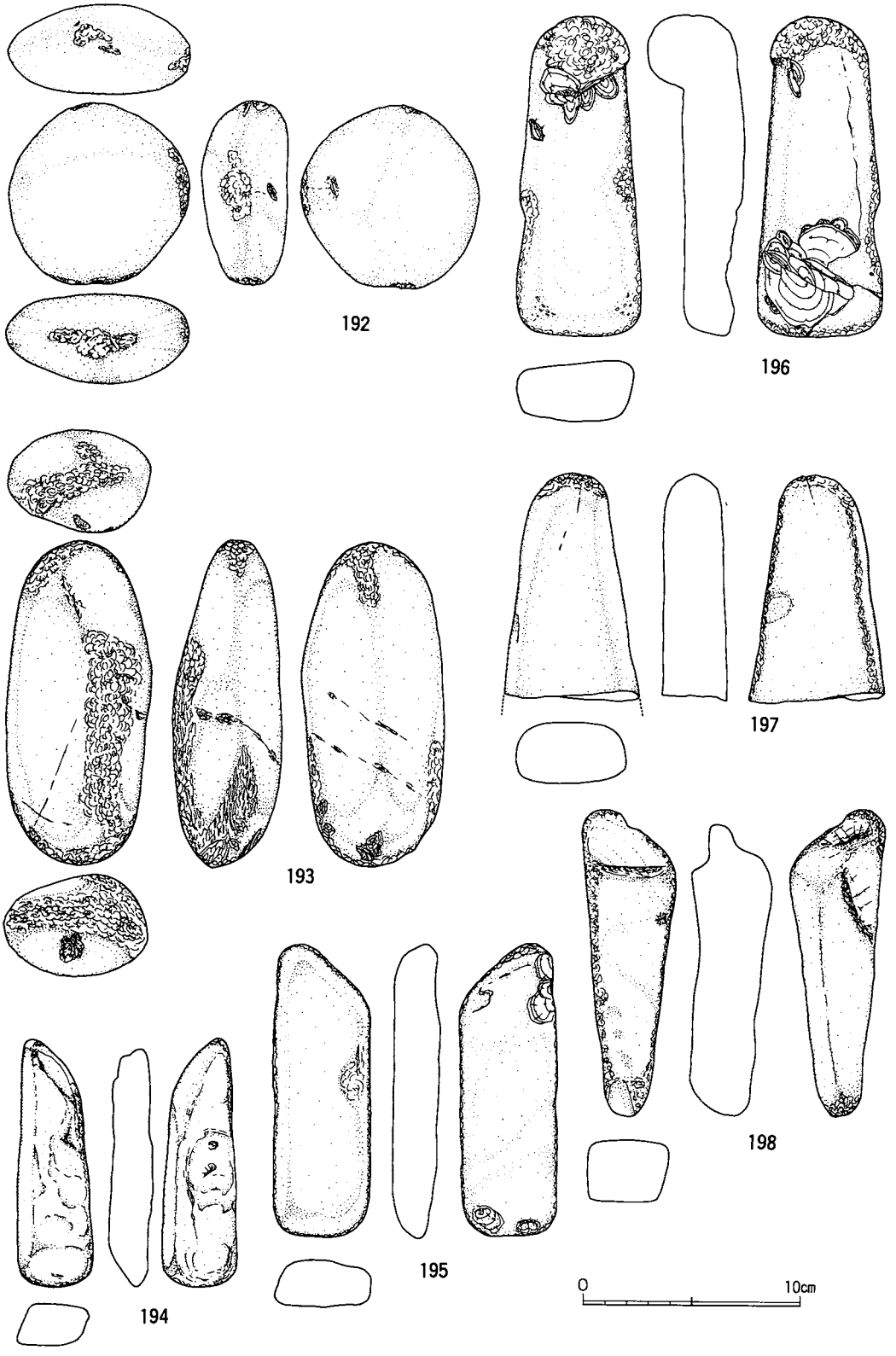
第22図　縄文時代石器実測図⑨



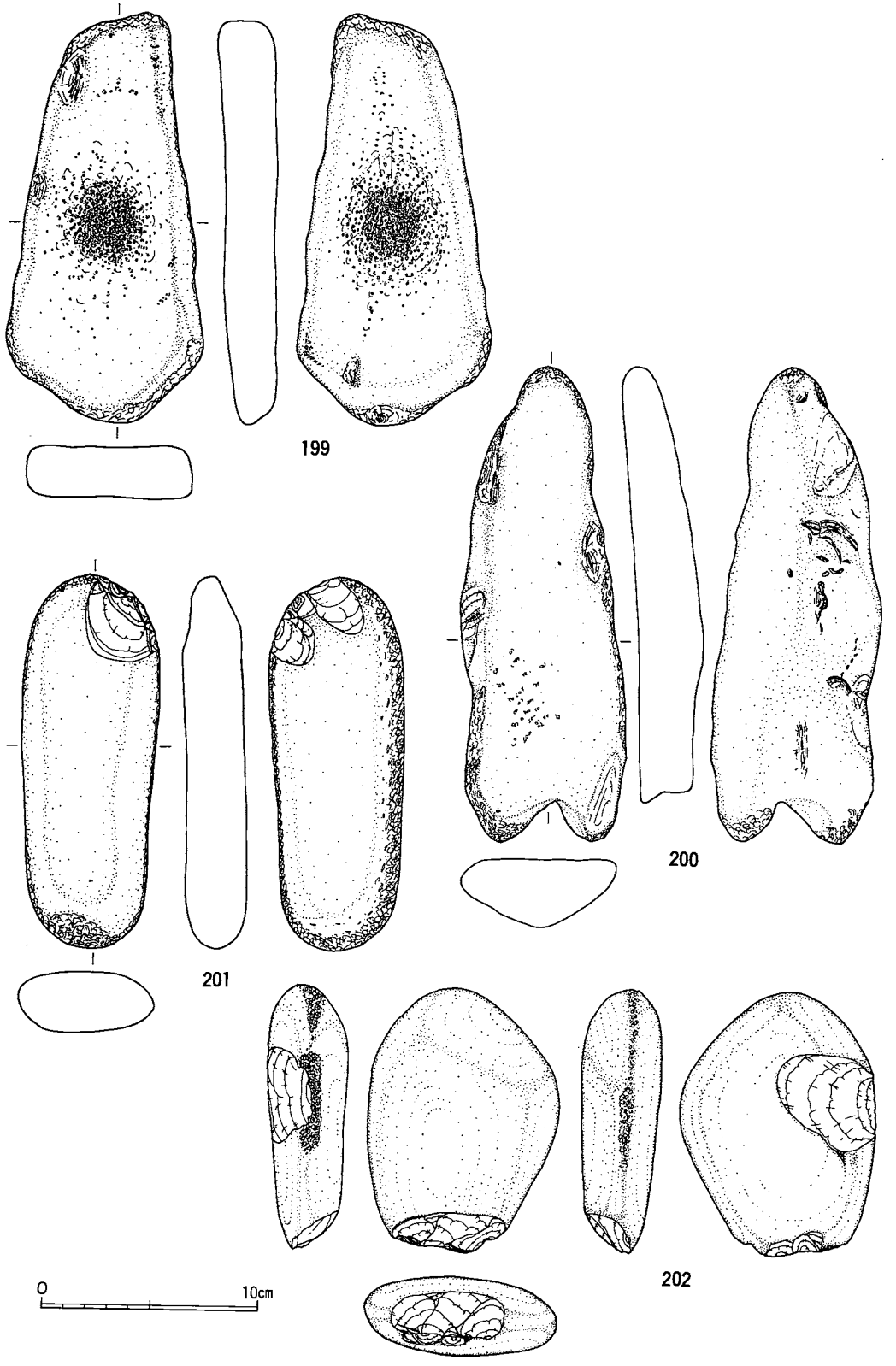
第23図　縄文時代石器実測図⑩



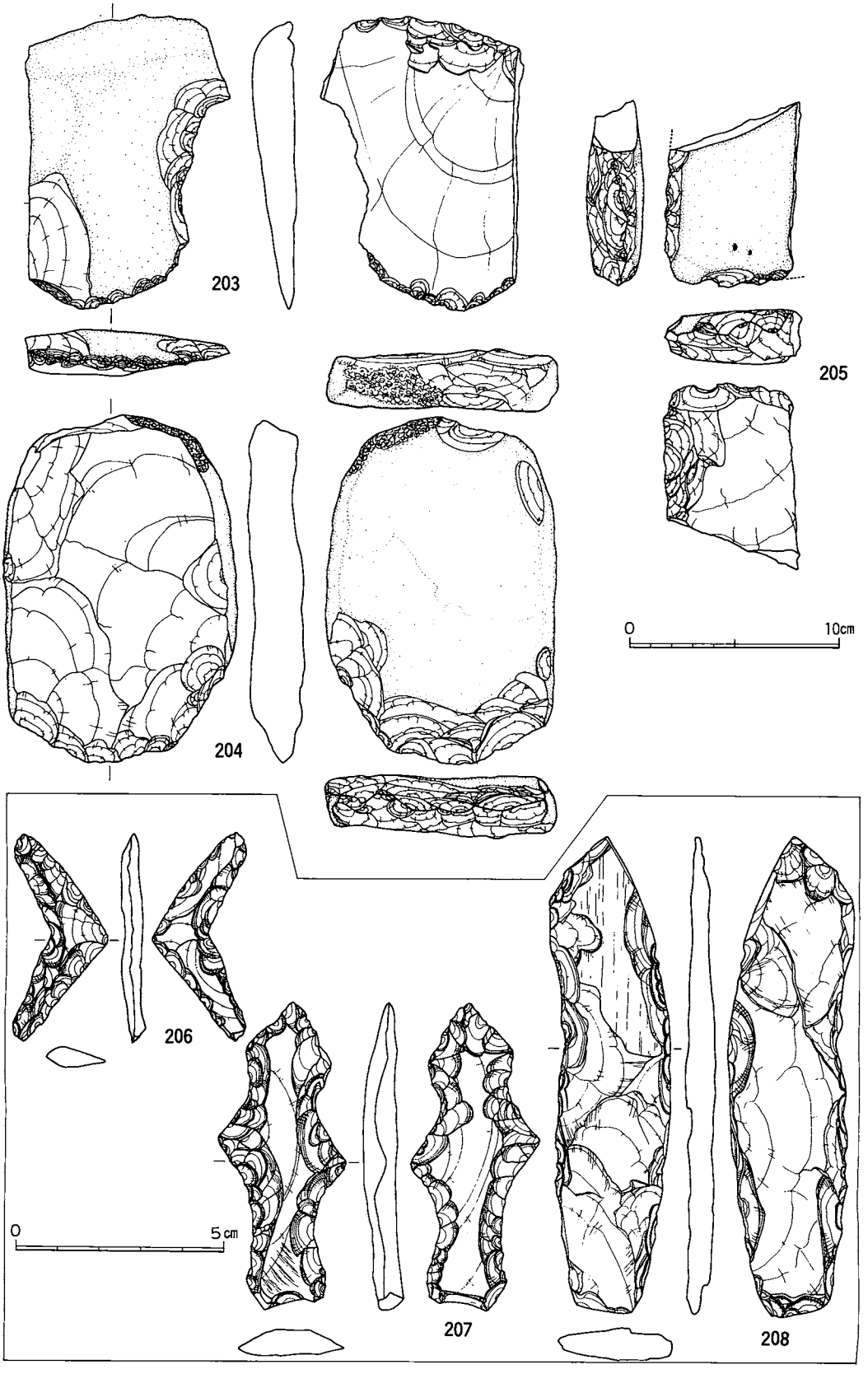
第24図　縄文時代石器実測図⑪



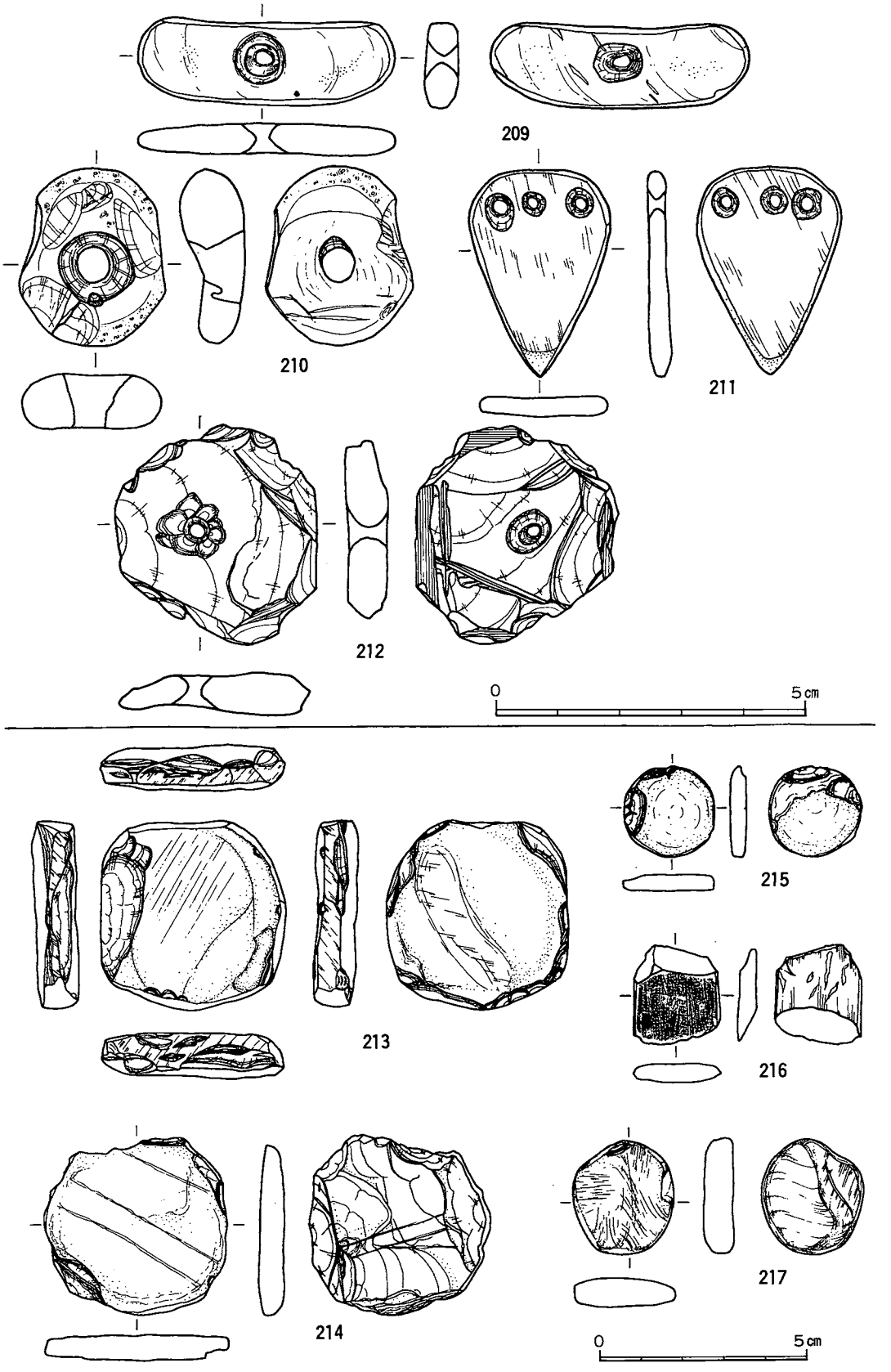
第25図　縄文時代石器実測図⑫



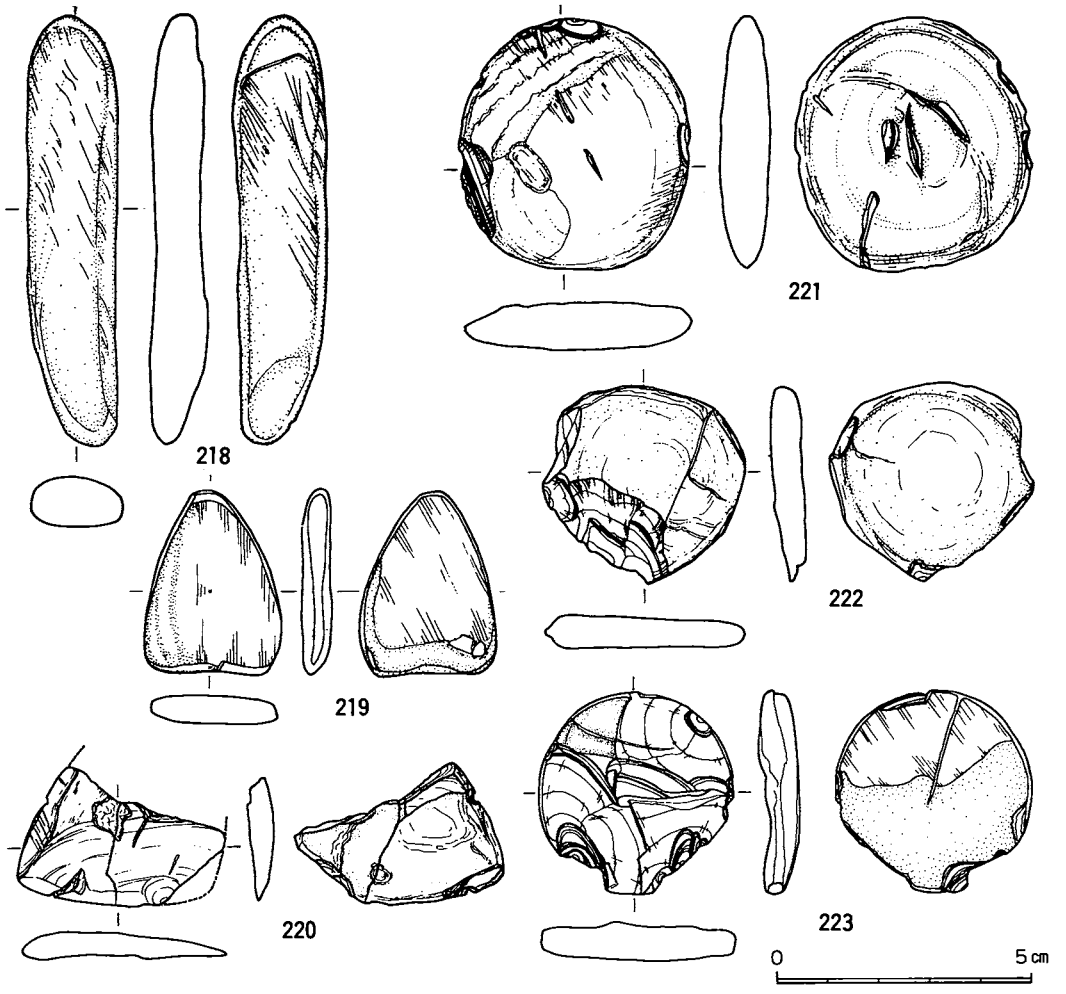
第26図　縄文時代石器実測図⑬

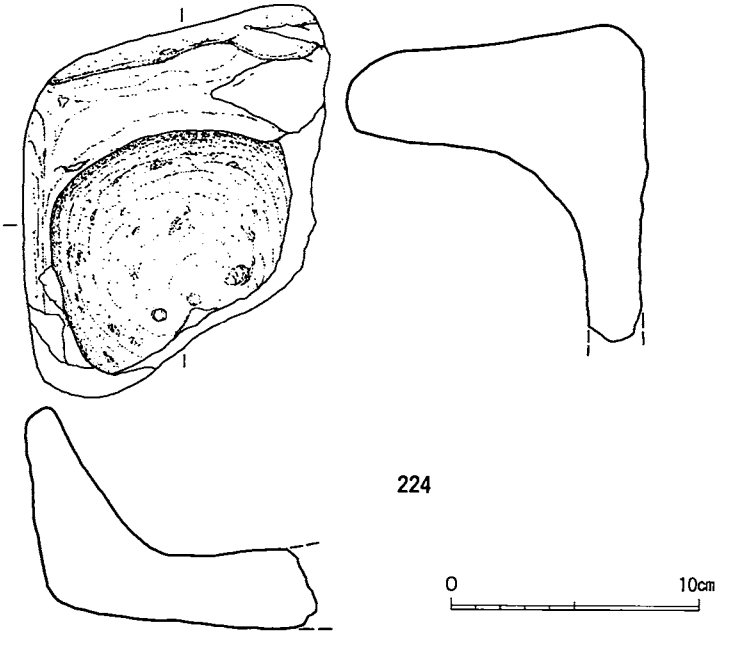


第27図　縄文時代石器実測図⑭



第28図　縄文時代石器実測図⑮





第29図　縄文時代石器実測図⑯

No.	器種	石材	計測値				出土地点
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
162	磨石敲石	砂岩	7.41	6.52	3.05	209.07	G－6 Ⅳ層
163	第1類a	砂岩	9.35	8.38	4.27	462.36	堀切Ⅰ－D中位
164	〃	砂岩	8.02	6.85	3.05	236.02	Ⅲ・Ⅳ郭間
165	〃	砂岩	(4.83)	(6.40)	3.37	181.46	S－11Ⅳ層
166	〃	砂岩	(5.93)	(2.88)	3.10	73.30	S－10Ⅴ層
167	〃	砂岩	10.32	8.73	4.55	709.84	堀切Ⅲ－B
168	〃	砂岩	8.63	6.70	4.17	347.18	堀切Ⅰ－C下位
169	〃	砂岩	8.95	8.35	4.09	544.36	Ⅱ・Ⅲ郭間
170	〃	砂岩	10.80	9.33	4.63	678.74	G－6 Ⅳ層
171	〃	砂岩	12.94	8.85	4.43	788.46	Ⅱ郭Ⅱ層
172	第1類b	砂岩	5.50	4.84	4.37	157.12	表採
173	〃	砂岩	(7.22)	(3.18)	2.78	125.20	U－8 Ⅴ層
174	〃	砂岩	(7.05)	(3.60)	4.89	170.25	堀切Ⅰ－D下位
175	〃	砂岩	9.37	7.73	5.43	590.08	Ⅱ郭Ⅳ層
176	〃	砂岩	7.42	6.32	5.59	360.78	堀切Ⅰ－C
177	〃	砂岩	8.86	7.12	5.70	499.09	堀切Ⅱ-A
178	〃	砂岩	12.32	9.38	5.57	827.99	F－9 Ⅴ層
179	〃	砂岩	(8.77)	(7.32)	6.28	630.92	堀切Ⅰ－D
180	第1類c	砂岩	(8.58)	(4.12)	5.70	261.82	堀切Ⅰ－C
181	〃	砂岩	7.22	5.78	4.12	225.29	堀切Ⅰ－D中位
182	〃	砂岩	(7.52)	(8.59)	5.43	475.33	Ⅱ郭東斜面
183	〃	砂岩	9.95	8.14	4.28	503.06	S－12Ⅳ層
184	〃	砂岩	9.00	7.64	4.87	361.34	Ⅱ郭表土
185	第2類a	砂岩	5.95	4.12	4.53	150.12	堀切Ⅰ－C下位
186	〃	砂岩	4.83	4.38	4.15	105.56	堀切Ⅰ－D
187	〃	凝灰岩	4.37	4.43	4.32	105.52	Ⅳ郭土坑
188	〃	砂岩	3.18	3.13	2.93	42.95	Ⅱ郭堀
189	〃	砂岩	7.08	5.23	4.60	228.79	堀切Ⅰ－G
190	第2類b	砂岩	5.29	4.80	3.15	107.35	堀切Ⅰ－C下位
191	〃	砂岩	7.06	6.43	2.80	184.15	G－6 Ⅴ層
192	〃	砂岩	8.36	8.32	3.93	353.18	堀切Ⅲ－B
193	第2類c	砂岩	14.75	6.75	5.06	635.03	堀切Ⅰ－C下位
194	〃	粘板岩	11.46	3.48	1.93	124.43	Ⅳ郭東斜面
195	〃	砂岩	13.48	4.55	2.17	227.13	堀切Ⅰ－C下位
196	〃	砂岩	14.62	5.80	4.14	419.47	堀切Ⅰ－C下位
197	〃	砂岩	(10.25)	(6.28)	2.78	219.51	T－13
198	〃	砂岩	13.94	4.39	3.58	269.21	T－11一括
199	第2類d	砂岩	18.87	9.13	2.48	683.95	堀切Ⅰ－C
200	〃	砂岩	21.66	7.75	3.05	659.51	堀切Ⅰ－D下位
201	礫岩	砂岩	17.13	6.18	2.71	500.06	Ⅱ郭表土
202	〃	砂岩	12.13	9.06	3.65	574.99	T－9一括
203	〃	砂岩	13.96	9.85	1.98	319.92	堀切Ⅱ－B
204	〃	砂岩	16.50	11.06	2.47	713.42	堀切Ⅰ－C
205	礫岩	砂岩	6.41	8.91	2.58	222.21	T－11Ⅳ層

第13表　縄文時代石器計測表④

No.	器　種	石　材	計測値				出土地点
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
206	異形石器	安山岩	4.95	2.20	0.48	3.36	堀切Ⅰ－C下位
207	〃	安山岩	7.45	3.07	0.84	15.91	表採
208	〃	赤色粘板岩	11.28	3.13	0.74	29.22	S－14
209	石製垂飾品	粘板岩	4.18	1.35	0.64	4.35	Ⅲ郭
210	〃	滑　石	2.87	2.43	0.97	8.46	S－13
211	〃	安山岩	3.34	2.28	0.38	3.70	堀切Ⅰ－D下位
212	〃	粘板岩	3.53	3.26	0.62	10.27	表採
213	不明石器	粘板岩	4.60	4.52	1.14	35.99	表採
214	〃	粘板岩	4.30	4.46	0.63	17.62	堀切Ⅰ－C
215	〃	粘板岩	2.20	2.16	0.41	2.87	Ⅱ郭表土
216	〃	粘板岩	4.82	4.14	0.93	20.60	Ⅱ Ⅲ郭間
217	〃	粘板岩	2.79	2.47	0.73	8.24	Ⅱ郭表土
218	〃	砂　岩	8.50	1.74	1.12	25.45	堀切Ⅰ－D中位
219	〃	粘板岩	3.61	2.70	0.54	7.84	Ⅱ郭表土
220	〃	粘板岩	2.78	4.18	0.47	5.51	U－5
221	〃	粘板岩	4.97	4.60	0.98	28.11	Ⅱ郭Ⅱ層
222	〃	粘板岩	3.87	4.00	0.58	12.75	表採
223	〃	粘板岩	3.98	3.91	0.75	12.74	表採

第14表　縄文時代石器計測表⑤

（6）ま と め

縄文時代は、中世遺構の調査終了後、Ⅱ郭とⅢ郭に残された包含層に於いて調査を行った。Ⅱ郭は西側に傾斜しており、包含層の残りも極めて悪く、Ⅴ層の下はシラス層であった。Ⅲ郭は東側に落ち込む谷部と見られ、東側中央部が凹状になって傾斜している状態であった。平面確認時には谷部を囲むような弧状の形状となった。ここでは、東側からⅡ層～Ⅸ層（黄シラス層）が確認できた。遺跡の本体はⅢ郭を中心に広がっていたと思われる。

遺構は、Ⅱ郭で手向山式土器を伴う土坑が一基だけ検出された。

遺物は、隣接台地の大丸・藤ノ迫遺跡で見られるような石器・垂飾品や、それに伴う押型文系土器（山形文・楕円文）、塞ノ神式土器、手向山式土器の出土を見たが、それらの土器の土層においての前後関係は明らかにできなかった。尚、土器において56、68、82は壺型を呈するもので手向山式土器系かと思われる。

（付記）

高城跡の地山は、姶良カルデラ起源の入戸火砕流であった。Ⅲ郭に於いて先土器時代調査後、土層確認の為に遺物包含層の下部を深掘した結果、シラス（ＡＴ）中より炭化物が出土したので、^{14}Ｃ年代測定を京都産業大学理学部に依頼した。測定結果は下記の通りである。

液体シンチレーション^{14}C年代測定結果報告書　　京都産業大学理学部教授　山田　治

測定番号	試料名採取地	^{14}C年代測定値
KSU－１６７０	高城跡Ⅲ郭・黄シラス中	２４，４００±１８０BP

（註）^{14}C年代測定値の表現法は、次のごとき国際的約束に基づいています。

①^{14}Cの半減期は5568年として計算します。

②BP は BeforePresent の略です。ただし Present は AD 1950年に固定し、それから何年前かを示します。

③測定誤差は、１標準偏差を用います。（真の値が１標準偏差の中にはいる確立は約68％です。）

④測定値には必ず測定機関記号と測定番号をつけます。索引やデータの確認に必要ですから、引用の際には必ずこの記号をつけておいて下さい。

⑤^{14}C年代測定値は世界共通です。そのためにＣ濃度の基準に世界共通の物質を使用しています。その物質名は、アメリカ国立標準局から販売されているシユウ酸（通称 NBS シユウ酸）です。

写真図版

図版1

①Ⅱ郭及び堀切Ⅰ－C（南側より）

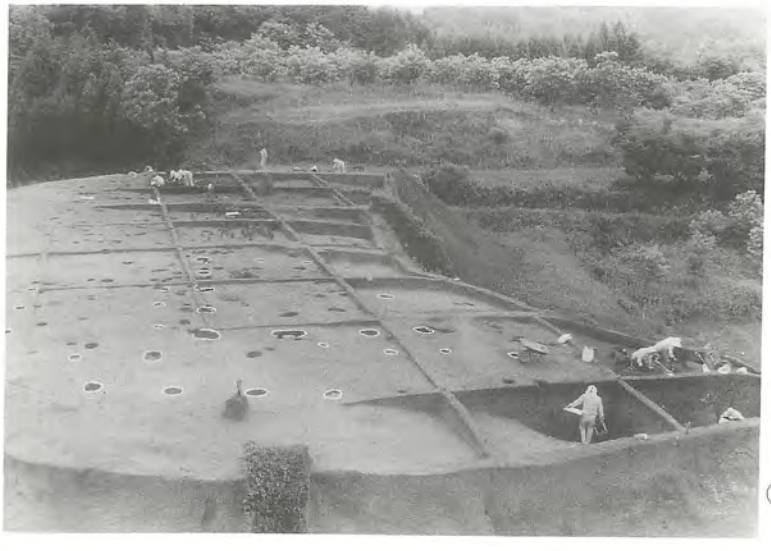
②堀切Ⅰ－C（東側より）

③堀切Ⅰ－A・B（南側より）

図版２

①堀切Ⅰ－Ａと Ⅲ郭（南西側より）

②Ⅲ郭と堀切Ⅱ－Ａ・Ｂ（南側より）



③Ⅲ郭における先土器・縄文時代の調査（南側より）

①Ⅳ郭（北側より）

②堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ遺物出土状況（北側より）

③堀切Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ（北側より）

①堀切Ⅱ－Ａと Ⅳ郭北側斜面蛸壺状土坑（西側より）

②蛸壺状土坑（西側より）

③堀切Ⅱ－Ａにおける自然水路と
堀底の浸食状況（西側より）

①堀切Ⅰ－D（南側より）

②堀切Ⅰ－F（西側より）

③堀切Ⅰ－G土層断面（西側より）

①高城跡より西側に延びる馬場道（東側より）

②高城跡遠望（西側より）

③Ⅱ～Ⅳ郭における建築址の検出状況

240

426

241

236

326

242

75

6

427

70

327

430

237

77

231

230

386

235

81

88

土師器（皿・坏）

図版８

440

182

439

94

93

260

269

270

391

267

389

土師器（坏）

454

474

119

455

470

188

100

101

451

207

475

青磁・白磁・青白磁 （碗）

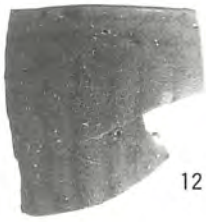
図版10

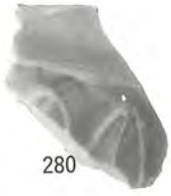
99

539

97

342


12


280

433

106

276

461

111

208

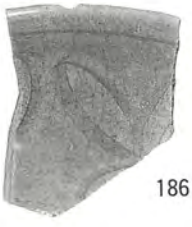
22

477

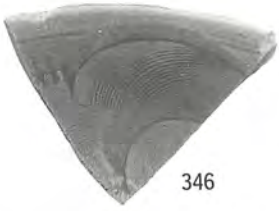
24

114

448


186

115


346

205

青磁(碗・盤・皿)

215

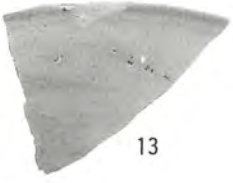
392

110

36

473

456


13

343

472

463

444

123

116

476

120

34

210

393

415

501

292

8

293

白磁(碗・皿) 天目 仏花瓶 陶器 青磁香炉 取瓶 土師系坏 土製香炉

図版12

488

400

528

46

306

45

418

409

421

須恵・備前（甕）硬質瓦器(火舎）瓦質火舎

406

422

354

305

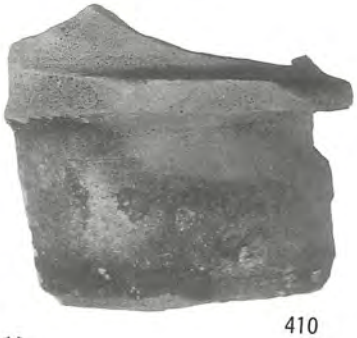
420

527

10

137

357


410

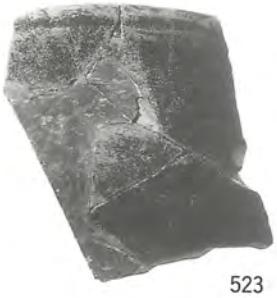
硬質瓦器(火舎) 瓦質火舎　土製茶釜

図版14

411

515

138



523

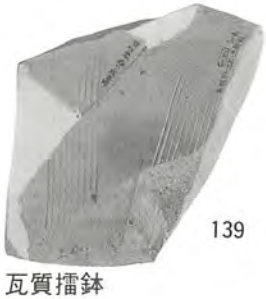
524

525

11

412

549



139

土製茶釜　内耳土器　硬質瓦器(擂鉢)　瓦質擂鉢

514

493

192

499

163

282

370

164

173

281

18

19

21

58

61

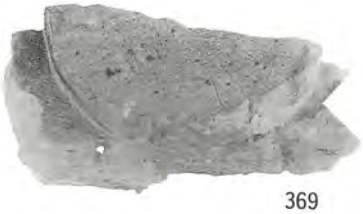
160

161

287

225

162


369

155

531

硬質瓦器(火舎)　常滑・備前(壺)　鉄製品　鉄砲玉　古銭　石臼

図版16

533

378

323

379

228

337

179

181

66

177

324

537

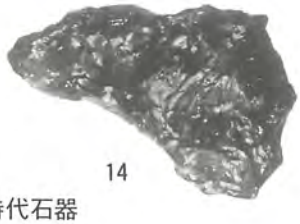
19

20

1

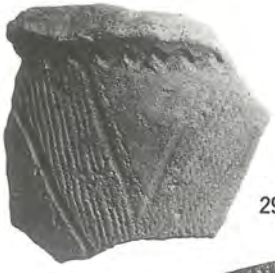
2

7


14

12

砥石（歴史時代）　先土器時代石器


29

75

53

30

25

80

73

65

84

82

57

68

58

209

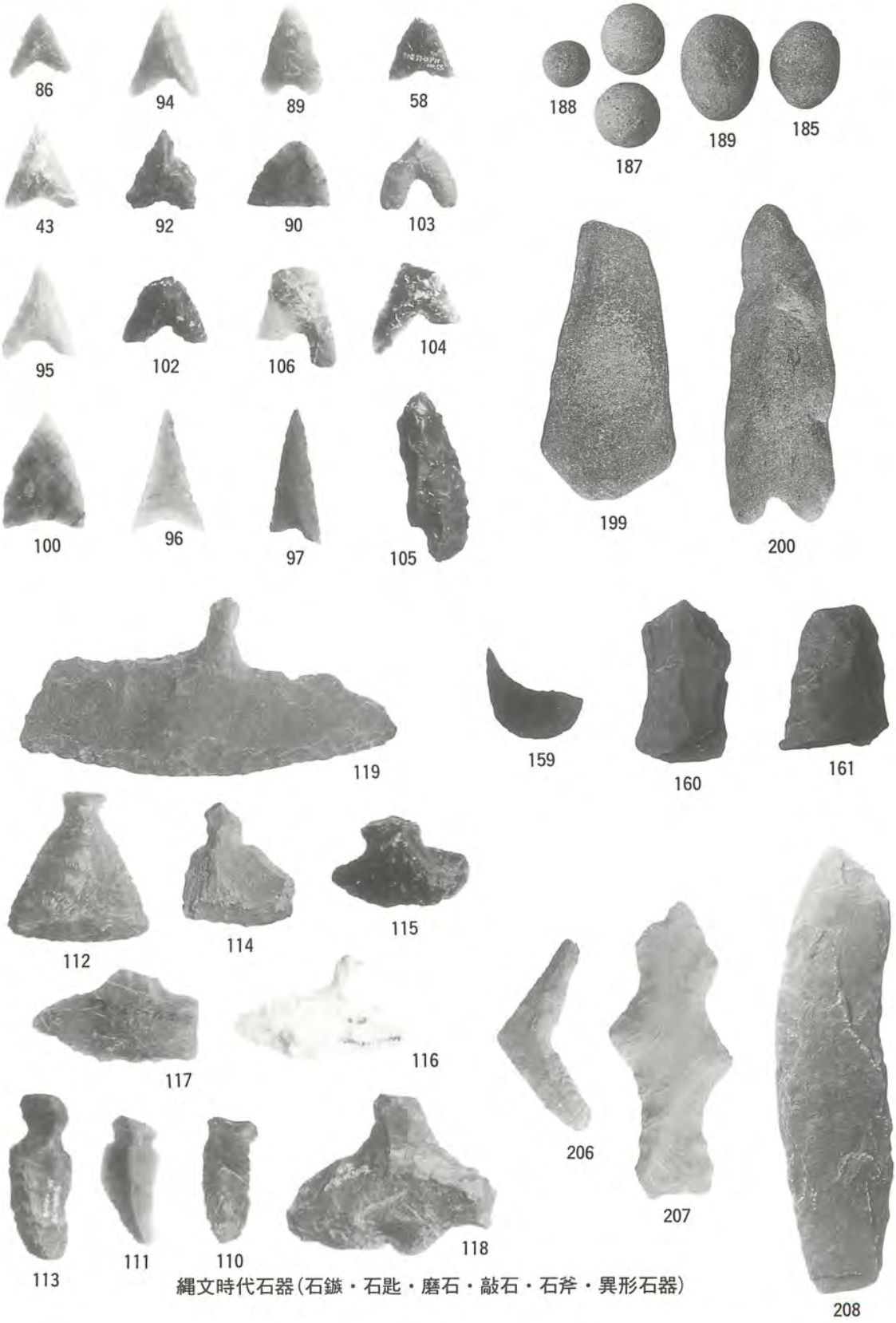
210

211

212

縄文式土器　縄文時代石器(石製垂飾品)

図版18



縄文時代石器(石鏃・石匙・磨石・敲石・石斧・異形石器)

あとがき

高城跡の発掘調査および、報告書作成時に際しては、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から多大な御配慮をいただきました。特に、小原　明・村田文敏・古賀文雄・岩永一男・豊永盛喜・石丸　裕・藤田重幸の各氏に対し、心から厚く御礼を申し上げます。

さらに山江村は、この調査を後世に伝えるべく、昭和62年度に村の単独予算で、高城跡の発掘調査区を中心とした周辺一帯の復元模型を作成されました事を特筆し、あとがきに代えます。

（大田）

熊本県文化財調査報告　第95集

高　城　跡

昭和63年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺６丁目18－１

☎熊本(096)383－1111(代)

文化課調査係㊥2906

印刷　中央印刷紙工株式会社

〒860 熊本市田崎２丁目５－38

☎熊本(096)354－4191

FAX 096－354－4165

（注意）本報告書の全部または一部を、無断で複製・転載することを禁止いたします。

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 95 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：高城跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日